

一般国道 18 号（野尻バイパス）
埋蔵文化財発掘調査報告書 3

—信濃町内その 3—

なか まち
仲 町 遺 跡

《第 1 分冊》

2004. 3

国土交通省関東地方整備局
長野県埋蔵文化財センター

序

仲町遺跡がある信濃町は、黒姫、妙高、飯綱、斑尾の山々に囲まれ、野尻湖という美しい湖を有する高原にあり、多くの人々が訪れる観光地です。野尻湖周辺の旧石器時代を紹介するナウマンゾウ博物館、江戸時代の俳人小林一茶の生家や小林一茶記念館などもあり、歴史的遺産が豊富な地域であります。

長野県埋蔵文化財センターは、国道18号野尻バイパス建設に伴い、信濃町内の貫ノ木遺跡、照月台遺跡、仲町遺跡、川久保遺跡の発掘調査を実施してまいりました。発掘調査は1999年から4年間にわたり実施しました。本書は、これら4遺跡の発掘調査の内、仲町遺跡の発掘調査報告書であります。

仲町遺跡は、野尻湖の西側にある仲町丘陵上に展開する広大な遺跡です。今回の発掘調査では、旧石器時代から江戸時代まで多時期の人間の痕跡が残されていることが判明しました。ナウマンゾウの牙とオオツノシカの角の発掘で有名な野尻湖底の立が鼻遺跡とは近接し、仲町遺跡でも旧石器時代の石器が多量に出土しました。立ヶ鼻遺跡では約3万年から5万年前の野尻湖文化の骨角器や石器が報告されていますが、今回の調査で出土した石器は野尻湖文化よりも新しい、約3万年前以降の旧石器時代に属するものです。野尻湖文化期のナウマンゾウの足跡が検出されるなど、野尻湖文化を探る新たな資料を得ることができましたが、発掘当時4万年前の石器と報道されたものは、その後の検討により確実に石器といえる資料ではないとの判断にいたりました。また、遺跡内には江戸時代の北国街道の野尻宿があり、関連する遺構・遺物を調査しました。さらに古くは、越後国府に続く東山道の支道が野尻湖畔を通っており、仲町遺跡周辺は延喜式に記されている沼辺駅の所在地と推定されています。今回の発掘調査では、奈良・平安時代の住居跡が発見され、信濃町ではほとんど見られなかった古墳時代の遺物が多数出土しました。これらは野尻湖畔を通る東山道の存在を強く印象付けるもので、今回の発掘調査の大きな成果の一つであります。

さて、野尻湖周辺に広がる野尻湖遺跡群は、旧石器時代から縄文時代草創期までの遺跡が密集しており、全国的にも貴重な遺跡群として知られております。1993年以降、当センターでは、上信越自動車道建設などに伴う発掘調査により、信濃町内の13遺跡の調査を実施してまいりました。これらの遺跡の報告は長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書としてすでに刊行されておりますが、これらの発掘調査では、圧倒的な数量を誇る石斧や砥石を中心とした旧石器時代の石器群などの大きな発見がありました。そして、国道18号野尻バイパス関連の調査をあわせると、膨大な量の資料の蓄積がなされてきております。

信濃町内で当センターの調査が始まって10年となります。これらの発掘により、旧石器時代の資料を始めとし、現代まで各時代の考古資料が蓄積されてきました。これらの資料が、信濃町の歴史、長野県の歴史、日本の歴史、そして人類の歴史を語る資料として広く活用されることを願うものです。

最後となりましたが、発掘調査から本書刊行にいたるまで、深いご理解とご協力をいただいた国土交通省・信濃町・同教育委員会など関係機関、地域の地権者・関係者の方々、発掘・整理作業にご協力いただいた多くの方々に、心より感謝申し上げます。

平成16年3月19日

財団法人 長野県文化振興事業団
長野県埋蔵文化財センター

所長 深瀬弘夫

例 言

- 1 本書は、一般国道 18 号野尻バイパス改築工事にかかわる、長野県上水内部信濃町大字野尻ほかに所在する仲町遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 本書は 2 分冊で構成され、調査地点を 2 分し、それぞれ時期ごとに報告した。
- 3 遺跡の概要は、長野県埋蔵文化財センター発行の『長野県埋蔵文化財センター年報』16～19 ほかで紹介しているが、内容において本書と相違がある場合は、本報告書をもって改正する。
- 4 調査は建設省関東地方建設局からの委託事業として、財団法人長野県文化振興事業団長野県埋蔵文化財センターが実施した。委託者である建設省関東地方建設局は国の中央省庁再編に伴い平成 13 年 1 月 6 日に国土交通省関東地方整備局と名を変えている。発掘調査および整理作業の契約は建設省関東地方建設局長野国道工事事務所と国土交通省関東地方整備局長野国道事務所の両者があるが、紙面の都合上現在の名称に統一して記述する。
- 5 本書に掲載した地図は、長野国道事務所作成の国道 18 号野尻バイパス平面図 (1:500)、信濃町建設課作成の計画図 (1:2500)・地形図 (1:10000)、国土地理院発行の数値地図 25000 を使用した。
- 6 本書で扱っている国家座標は、国土地理院の定める平面直角座標系の原点 (長野県第Ⅷ系、X=0.000,Y=0.000) を基準点としている。なおこの測地系は 2002 年以前の日本測地系 (旧測地系) である。
- 7 本書の執筆および編集は鶴田典昭・谷和隆・山崎まゆみ・中島英子がおこない、市澤英利・平林彰が全体を校閲した。第 1 分冊の執筆分担は以下のとおりである。
第 2 章 3 節 5 項 谷和隆
第 2 章 6 節 山崎まゆみ・鶴田典昭
第 2 章 7 節 中島英子
上記以外 鶴田典昭
- 8 発掘調査から本書の刊行にいたるまで多くの方々のご指導・ご協力を得た。本文中にお名前を掲げさせていただいたが、厚く感謝申し上げます。
- 9 本書で報告した各遺跡の記録および出土遺物は、報告書刊行後、信濃町教育委員会が保管する予定である。

凡 例

- 1 遺物の報告番号は本文・挿表・実測図・写真のすべてに共通する。報告番号は節ごとに遺物の種類別に1番からの通し番号とした。竪穴住居跡などの遺構単位で報告したものは、遺構ごとに1番からの通し番号とした。なお、旧石器時代の石器は、遺物番号が重複しないように、調査地点別に1000番単位の報告番号を付した。そのため、旧石器時代石器の通し番号には欠番がある。なお、詳細は第1章第4節に記した。

JS 地点 1～ BP 第3地点 3001～
BP 第1地点 1001～ BP 第4地点 4001～
BP 第2地点 2001～ BP 第5地点 5001～

- 2 本文中で用いた石器の呼称や器種名については、第1章第4節に記した。
3 参考文献は各章または各節の末尾に掲載した。
4 掲載した実測図の縮尺は原則として下記のとおりである。また、それぞれの図版右下にスケールを付した。

遺構実測図

全体図 1：800 または 1：500 ブロック 1：200 礫群・集石 1：30 土坑 1：40
竪穴住居跡 1：60

遺物実測図

石器 実測図は 1：4 拓本は 1：3 または 1：2 または 2：3
石器 小形剥片石器 3：4 または 2：3 大型剥片石器 1：2 または 1：3
礫石器 1：3 または 1：4、 木器 1：4 または 1：6 金属器 1：3

- 5 ブロック別の遺物分布図・石器実測図・挿表・挿図の器種・石材の記号・略称は下表のとおりである。また、表中にない器種・石材については、略称を用いずに、器種名・石材を表記した。
6 旧石器時代石器の分布図中の遺物に付された番号は、遺物図版の報告番号である。

記号	略称	器種	記号	略称	器種	記号	略称	器種	記号	略称	器種
◇	Kn	ナイフ形石器	☆	Sc	削器	●	UF	微細剥離のある剥片	▲	Ax	斧形石器
▽	Tr	台形石器	■	Pe	楔形石器	□	Co	石核	◎	GS	磨石
◎	CF	折断剥片	○	Bl	石刃	*	F1	剥片	⊙	PS	凹石
★	ESS	掻器・掻器状石器	○	RF	2次加工のある剥片	*	Ch	砕片	⊙	原石	原石
☆	NS	抉入削器	○	Dr	採掘器	*	SB	貝殻状刃器	▲	人破片	斧形石器破片 舟形石器剥離剥片
◆	磔	磔	◆	Po	槍先形尖頭器	⊠	DS	鋸歯縁状削器	◆	AS	厚刃器
⊙	Gr	形器	⊙	Sp	削片	⊙	An	台石	*	Ila	巖石
⊙	KC	細石核	⊙	DR	細石刃	⊙	PT	礫器	⊙	Wh	砥石

略称	石材	略称	石材	略称	石材	略称	石材
Ob	黒曜石	An	無産品質安山岩	SS	珪質頁岩	Sh	頁岩
ST	珪質凝灰岩	TS	凝灰質頁岩	Tu	凝灰岩	GT	緑色凝灰岩
Ch	チャート	Ag	玉髓	Ja	鉄石英	Se	蛇紋岩
Rh	流紋岩	Ge	下呂石	玄武岩	玄武岩	安山岩	安山岩
Sa	砂岩	Sl	粘板岩				

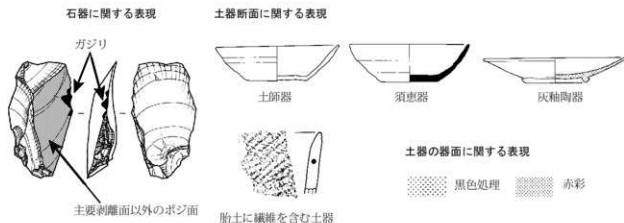
- 7 旧石器時代の石器実測図に付したキャプションの見方は以下のとおりである。なお、黒曜石産地の記号は下表に示す。

報告番号→I
 器種→5c, 0b, 0d, 0f, 0g, 0h, 0i, 0j, 0k, 0l, 0m, 0n, 0o, 0p, 0q, 0r, 0s, 0t, 0u, 0v, 0w, 0x, 0y, 0z
 川上遺跡→Ⅲ-9, Ⅱ, 86g
 出土層序→Ⅳ～Ⅵ, 32129→1
 記号番号
 石器
 黒曜石産地群
 重量
 注記番号

エリア	別別群	記号	エリア	別別群	記号	エリア	別別群	記号
和田 (WO)	ブドウ沢	W0BD	神津島	釜船島	KZDB	小池	新藤内	KDOK
	賀ヶ沢	W0MS		新藤島	KZSN		魚津	藤井上野
和田 (WD)	高松沢	W0TM	高原山	甘湯沢	THAY	高岡	二上山	TOPK
	栗野ライイト	WDHY	七尋沢	THNH	奥平	奥平寺	SDSK	
	奥山	WDYI	新津	金津	NTKT	佐渡	金井ニッ宿	SDKH
	小深沢	W0KB	新発田	飯山	SBYI		久見	OKHM
	土庫橋北	WDTK	深澤	八森山	HJHM	陸奥	碑地区	OKMT
	土庫橋西	WDTN	木造	出来島	KDOK		箕浦	OKMU
	土庫橋南	WDTM	男鹿	金ヶ崎	OGKS		8号沢	STHG
	志保	WDHT		鶴本	OGWM		黒塚の沢	STKY
	賀ヶ台	SMHO		月山	HGGS	白濁	赤石山頂	STSC
	冷山	TSTY	羽黒	合野川	HGIN	赤井川	曲川	AIMK
豊科	茨子山	TSHG	新保1群	KKO1	豊浦	豊泉	TUTI	
	鷹峰山	TSSB	北上川	新保2群	KKO2	鹿戸	安住	ODAZ
天城	相神1	AGKT		新保3群	KKO3	十股	三股	TKMM
鶴根	畑原	HNHJ	宮城	湯ノ倉	MZYK	名寄	布川	NYHA
	飯治原	HNKJ	仙台	秋保1群	SOA1	旭川	葛砂台	AKTS
	黒野橋	HNKQ		秋保2群	SOA2		香光台	AKSK
	上多賀	HNKT	色麻	穂野	SMNG	不明産地1	NK	NK
	野ノ浦	HNAY	塩屋	塩屋産地群	SGSG	下呂石		GERO

黒曜石の産地群と産地記号

- 8 遺物の実測図に示した主なスクリーントーンなどは以下のとおりである。



- 9 本書で扱っている国家座標は、国土地理院の定める平面直角座標系の原点（長野県第Ⅷ系、X=0.000, Y=0.000）を基準点としている。なおこの測地系は2002年以前の日本測地系（旧測地系）である。
- 10 本文中の加工の表現は次のとおりである。
- 正方向の剥離（加工）：石器の腹面を打面とした背面側への剥離（加工）。
- 反方向の剥離（加工）：石器の背面を打面とした腹面側への剥離（加工）。
- 強剥離（加工）・強い剥離（加工）：縁辺が鋸歯縁状になるような素材を強く断ち切る剥離（加工）。
- 中剥離（加工）：強剥離と弱剥離の中間的な剥離（加工）。プランティング。
- 弱剥離（加工）・弱い剥離（加工）：素材の形状をほとんど変えない弱い剥離（加工）。
- 平坦剥離（加工）・平坦な剥離（加工）：器面内部まで入り込む剥離（加工）。
- 折れ：偶発的な折れと意図的な折れの両者を含む。
- 11 石器の長さ・幅・厚さの計測方法は以下のとおりである。
- 長さ・幅：石器の主軸方向を上下の基準として方眼紙に置き、長方形を想定し、上下（縦方向）を長さ、左右（横方向）を幅とした。
- 厚さ：最も厚い箇所を、主要離面から垂直方向で計測した。

本文目次

《第1分冊》

序

例言・凡例

本文目次

第1章 発掘調査の概要

第1節 調査の経過	1
1 発掘調査に至る経緯	1
2 調査体制と調査期間	1
3 調査の経過	2
4 委託業務等	5
5 指導者・協力者	5
第2節 遺跡周辺の環境	6
1 遺跡の地理的環境	6
2 遺跡の歴史的環境	8
第3節 遺跡の概要	13
1 遺跡周辺の地形	13
2 仲町遺跡の範囲と調査履歴	13
3 調査の概要（野尻バイパス建設に伴う発掘調査）	18
（1）遺跡範囲と調査区（2）調査成果の概要（3）調査区内の基本土層と微地形	
第4節 発掘調査と整理の方法	24
1 発掘調査の方法	24
（1）遺跡記号と遺構記号（2）グリッドの設定と呼称法	
（3）遺物の取り上げと記録方法（4）遺物の注記方法	
2 整理の方法	28
（1）旧石器時代の整理方法（2）縄文時代以降の整理方法（遺物番号と整理番号）	
3 遺物の取納方法	30
4 石器の器種分類	30

第2章 JS地点・BP第1～3地点の調査

第1節 JS地点の旧石器時代の遺構と遺物	34
1 調査の概要	34
2 調査区周辺の地形と層序	34
（1）調査区周辺の地形（2）調査区周辺の層序	
3 遺構と遺物の概要	36
（1）ブロックの認定（2）遺構の概要（3）遺物の概要	
4 遺構	47
（1）ブロックおよびブロック間の接合関係（2）礫群および配石	
5 出土遺物	62
第2節 BP第1地点の旧石器時代の遺構と遺物	95
1 調査の概要	95
2 調査区周辺の地形と層序	95
（1）調査区周辺の地形（2）調査区周辺の層序	
3 遺構と遺物の概要	97
4 遺構	111
（1）ブロックおよびブロック間の接合関係（2）礫群	

5 出土遺物	122
(1) 石器 (2) 接合資料	
第3節 BP 第2地点の旧石器時代の遺構と遺物	143
1 調査の概要	143
2 調査区周辺の地形と層序	143
3 遺構と遺物の概要	145
(1) ブロックの認定 (2) 遺構の概要 (3) 遺物の概要	
4 遺構	167
(1) ブロックおよびブロック間の接合関係 (2) 礫群・配石	
5 出土遺物	190
(1) 石器 (2) 接合資料	
第4節 BP 第3地点の旧石器時代の遺構と遺物	238
1 調査の概要	238
2 調査区周辺の地形と層序	239
3 遺構と遺物の概要	239
(1) ブロックの認定 (2) 遺構の概要 (3) 遺物の概要	
4 遺構	257
(1) ブロックおよびブロック間の接合関係 (2) 礫群・炭化物集中	
5 出土遺物	269
(1) 石器 (2) 接合資料	
第5節 縄文時代の遺構と遺物	311
1 調査成果の概要	311
2 縄文時代の遺構	311
(1) 土坑 (2) 炭化物集中 (3) 礫群	
3 出土遺物	318
(1) 土器 (2) 石器	
第6節 奈良・平安時代の遺構と遺物	329
1 調査成果の概要	329
2 遺構と遺物	332
(1) 竪穴住居跡 (2) 掘立柱建物跡・櫓列	
第7節 中世以降の遺構と遺物	355
1 調査の概要	355
(1) 道路状遺構 (2) 土坑 (3) 炭坑 (4) 溝	

写真図版

《第2分冊》

例言

凡例

本文目次

第3章 BP 第4地点・第5地点の調査

第4章 自然科学分析

第5章 調査の成果と課題

写真図版

報告書抄録



JS 地点・BP 第 3 地点の旧石器時代遺物

第1章 発掘調査の概要

第1節 調査の経過

1 発掘調査に至る経緯

長野県では、高速道等にかかわる埋蔵文化財保護は広域にわたる統一的措置が求められることから、長野県教育委員会（以下、県教委）が対応し、発掘調査は財団法人長野県文化振興事業団長野県埋蔵文化財センター（以下、埋文センター）が実施してきた。また側道拡幅などこれらと一体的におこなわれる開発については当該市町村と協議の上、埋文センターが調査をおこなう場合が多い。一方、一般国道事業にかかわる埋蔵文化財の保護は当該市町村教委が対応してきたが、国道18号野尻バイパス改築第1期工事の貫ノ木遺跡および西岡A遺跡に関しては、県教委・信濃町教育委員会・建設省関東地方建設局・埋文センター間の協議の結果、事業規模や遺跡の重要性、隣接する高速道事業との一体性を考慮して、埋文センターが受託することとなった。（長野県埋蔵文化財センターほか1998）

続く第2期工事区では南から貫ノ木遺跡、照月台遺跡、仲町遺跡、川久保遺跡の4遺跡が調査の対象となった。第1期工事区と同様に4者による協議がおこなわれ、平成11年4月に建設省関東整備局、県教委および財団法人長野県文化振興事業団が5年間の協定を締結し、年度ごとに建設省と埋文センターとの間で委託契約が結ばれて実施された。

但し、仲町遺跡の一部については、これまでの野尻湖発掘調査団による調査の一体性、継続性の考慮から信濃町教育委員会が受託し、それ以外については埋文センターで受託することとなった。受託範囲には取り付け道等、一体施工の県道・町道および国道除雪ステーション施設部分も含まれる。

発掘調査の契約面積は次のとおりである。

平成11年度	2,720 m ²	平成12年度	10,500 m ²
平成13年度	9,600 m ²	平成14年度	1,100 m ²

2 調査体制と調査期間

発掘調査から整理作業および報告書刊行にいたるすべての業務は、埋文センター調査第2課が担当した。調査期間および調査体制は次のとおりである。

平成11年度

調査期間 平成11年9月15日～同年10月26日

調査体制

所長	佐久間鉄四郎	副所長	山崎悦雄（兼管理部長）
調査部長	小林秀夫	管理部長補佐	宮島孝明
調査第2課長	土屋 積		
調査研究員	田中正治郎 伊藤友久	調査員	山崎まゆみ

平成12年度

調査期間 平成12年4月27日～同年12月1日

第1章 調査の概要

調査体制

所長	佐久間鉄四郎	副所長	春日光雄(兼管理部長)
調査部長	小林秀夫	管理部長補佐	宮島孝明
調査第2課長	土屋 積		
調査研究員	田中正治郎 西山克己 鶴田典昭 白田広之 伊藤友久 市川隆之 中島英子		
調査員	山崎まゆみ		

平成13年度

調査期間 平成13年4月23日～同年12月4日

調査体制

所長	深瀬弘夫(7月1日より)	副所長	春日光雄(兼管理部長)
調査部長	小林秀夫	管理部長補佐	田中照幸
調査第2課長	土屋 積		
調査研究員	鶴田典昭 西山克己 白田広之 伊藤友久 市川桂子		
調査員	山崎まゆみ 中島英子		

平成14年度

調査期間 平成14年5月7日～同年7月25日

調査・整理体制

所長	深瀬弘夫	副所長	原 聖(兼管理部長)
調査部長	小林秀夫	管理部長補佐	田中照幸
調査第2課長	土屋 積		
調査研究員	鶴田典昭 谷 和隆 市川桂子		
調査員	中島英子 山崎まゆみ		

整理作業内容 遺物・遺構図のトレース、遺物の接合、遺物の計測

平成15年度

整理体制

所長	深瀬弘夫	副所長	原 聖(兼管理部長)
調査部長	市沢英利	管理部長補佐	上原 貞
調査第2課長	平林 彰		
調査研究員	鶴田典昭 谷 和隆 山崎まゆみ		
調査員	中島英子(12月1日より調査研究員)		

整理作業内容 遺物実測、写真撮影、遺物・遺構図のトレース・図版組み、原稿執筆、編集・校正

3 調査の経過

平成11年～14年度の4次に分けて発掘調査を実施した。整理作業は各年度の冬季に写真・図面などの基礎的な整理をおこない、平成14・15年度の2カ年にわたり報告書刊行に向けた本格的な整理作業をおこなった。以下に調査日誌抄により、調査経過をみていく。なお、本報告書では調査時の調査区名を改めて報告しているが、日誌抄では調査時の旧調査区名を用いる。新旧調査区名の対応は第1章第3節第3表を参照していただきたい。

(平成11年度)

9月15日 試掘開始

10月26日 試掘終了

3月9日 除雪ステーション鉄塔部分試掘

(平成12年度)

H12年度は3地区に分かれて、3班体制で調査を進めたため、地区ごとに日誌を記載する。

BP第4・第5地点(国道C地区・県道地点)

- 4月24日 調査準備
4月27日 調査開始式
4月28日 国道C1区、国道C4区重機で表土剥ぎ開始
5月11日 県道①区調査開始(第1面)
5月18日 野尻湖ナウマン象博物館学芸員中村由克氏と調査方の打ち合わせ
5月23日 国道C4区草創期の包含層調査開始
6月5日 国道C2区調査開始
6月6日 国道C1区重機による深掘り。旧石器時代相当層より木片出土(26層)
6月7日 県道①区自然流砂礫層より縄文時代早期の土器出土
6月8日 野尻小学校児童見学(18名)
6月16日 国道C5区調査開始
6月22日 県道①区重機による深掘り、C5地区旧石器時代ブロックの調査開始
6月29日 県道②・③区表土剥ぎと遺構検出開始
7月7日 国道C5区旧石器ブロック調査終了
7月10日 県道③区中近世の遺構調査終了。縄文時代の包含層の調査はH13年度に送る
7月22日 国道C4区縄文時代草創期関連資料の公開のため現地説明会実施
7月24日 国道C地区基準杭の標高が誤っていたことが判明(実際より15.4cm高い値となっていた)
8月10日 国道C2区調査終了
8月18日 国道C6区調査開始
9月6日 県道②区古墳時代遺物包含層の調査開始
9月8日 野尻湖ナウマン象博物館学芸員渡辺哲也氏、内田陽一郎氏、長野県立歴史館専門主事石田伊史氏道跡見学
9月18日 県道②区、弥生中期の糞が出土。墓の可能性を考える
9月21日 長野養護学校生徒見学(30名)
10月2日 県道②区縄文時代包含層の調査開始
10月6日 国道C3・C6区旧石器時代ブロックの調査開始
10月10日 国道C4区旧石器時代の包含層(砂礫層)掘り下げ開始
10月16日 道を付け替えて農道下部分の調査開始
10月26日 埼玉県立博物館学芸員奥島義明氏道跡見学。県道②区国道間の現地の調査開始
11月27日 国道C6区、重機で下層の試掘をして遺物がないことを確認
11月28日 国道C地区調査終了(C3・C4区はH13年度調査継続)
12月1日 県道②区調査終了

JS地点・BP第1地点(除雪ステーション・国道A地区)

- 5月1日 除雪地点、トレンチによる試掘調査開始
5月10日 除雪2区砕石(表土)を除去し、平安時代の柱穴の調査と旧石器時代の包含層(IV層、Va層)掘り下げを平行して進める
5月25日 除雪2区Vb層上面での地形測量
5月26日 除雪2区Vb層の掘り下げ開始。石器とともに大粒の炭化物が多量に出土

- 5月29日 除雪2区遺物集中部の土をサンプルし、ウォータージェネレーションを実施
6月5日 国道A3地区区調査開始
6月7日 除雪2区調査終了
6月8日 笹沢浩氏道跡見学。現場プレハブ移動
6月12日 除雪3区砕石(表土)剥ぎ、旧石器の調査開始
7月13日 除雪3区VI層を掘り下げたが遺物なし、フェンスの下の一部を残し終了
7月27日 国道A3区終了し、A5区の調査開始
8月18日 国道A5区で平安時代の住居跡確認
8月24日 国道A4区調査開始
9月13日 国道A4区・A5区調査終了。除雪4区調査開始
9月19日 除雪5区調査開始
9月25日 除雪4区・5区調査終了

BP第2地点(国道B地区)

- 4月27日 国道B9区調査開始
5月16日 国道B6区調査開始
5月24日 国道B6区道路跡調査
5月26日 国道B8区調査開始
5月30日 国道B7区調査開始(池田宅前)
5月31日 国道B6区地形測量
6月14日 国道B7区地形測量(Va層上面)
6月21日 信濃毎日新聞社取材(B8区出土の玉壺の大形石核について)
7月6日 国道B8区V層の礫群(配石)調査
7月11日 須賀東高校生徒発掘体験(5名)
7月17日 国道B地区現場プレハブ移動
7月19日 長野市坂ヶ丘中学校生徒発掘体験(21名)
7月21日 県教委廣瀬昭広指導主事現地指導。中日新聞社取材。国道B8区で道路跡検出
7月26日 埼玉県の中学生道跡見学(50名)、国道B8区平安時代の住居跡検出
7月28日 野尻湖ナウマン象博物館学芸員中村由克氏、東京大学学生道跡見学
8月7日 高山市教育委員会主催の考古学教室体験発掘(24名)
8月17日 国道B7区の一部深掘り開始(中部野尻ルーム層の調査)
8月29日 国道B7区深掘り部分遺物なく調査終了
9月4日 国道B8c区調査開始
9月7日 国道B8区を中心に空掘
9月8日 国道B7区調査終了
9月15日 国道B地区現地説明会(約60名)
9月19日 国道B8c区調査終了
9月20日 国道B8区調査面地形測量
9月26日 国道B8区表土下面(IV層上面またはV層上面)で地形測量(一部)
10月4日 国道B8区地形測量(一部)
10月11日 国道B地区空掘
11月11日 国道B8区地形測量(一部)
11月20日 国道B8区調査終了
11月22日 国道B地区発掘調査終了。
12月4日 現場プレハブ撤去

(平成13年度)

- 4月23日 県道地点表土剥ぎ開始
4月25日 発掘調査開始式

第1章 調査の概要

- 4月26日 軌道3区・5区、国道C3区・C4区並行して調査開始。国道B10区試掘開始
- 5月7日 野尻湖ナウマン象博物館の学芸員中村由克氏と国道C4区の上層と野尻湖調査団の層位名称との対応関係を検討。
- 5月9日 軌道5区グリッド杭設定
- 5月10日 国道B10区森林伐採（森林組合）
- 5月11日 除雪6区、トレンチ調査で包含層が失われていることを確認し、調査終了
- 5月14日 除雪7区調査開始
- 5月21日 除雪7区（尖頭器のブロック）の調査終了
- 5月30日 国道C7区調査開始
- 6月5日 軌道3区調査終了し、軌道4区調査開始
- 6月7日 調査区内に鉄板敷きの仮設道路設置
- 6月12日 軌道地点空撮
- 6月18・19日 愛知学院大学白石浩之教授国道C4区の草創期の遺物群について現地指導
- 6月25日 国道C8区調査開始。野尻小学校6年生遺跡見学（21名）
- 6月28日 軌道5区より木製品出土（古代から中世の包含層）。国道B10区で旧石器時代のブロック確認
- 7月13日 国土交通省世平出張所および工事業者（長野建設）との工事工程と調査工程の調整
- 7月23日 軌道5区、古墳時代の包含層の調査を終了。縄文時代の包含層の調査開始
- 7月25日 軌道4区調査終了
- 7月27日 国道B10区旧石器時代の躍群を確認
- 7月31日 軌道5区、縄文包含層下面の地形測量を行い調査終了
- 8月5日 現地説明会（見学者123名）。8月10日まで遺跡説明会実施
- 8月27日 除雪8区調査開始
- 8月28日 現場プレハブ移動
- 9月5日 国道B10区旧石器時代ブロック群の調査開始
- 9月6日 野尻湖ナウマンゾウ博物館近藤洋一氏、国道C8区の深掘りでのゾウの足跡確認
- 9月17日 国道C8区ゾウの足跡掘り下り開始。信濃毎日新聞社取材
- 9月25日 除雪8区Ⅲ層まで掘り下げ、調査を一旦中断。Ⅳ層以下はH14年度調査継続
- 10月3日 国道C8・C7区で上部野尻湖層下面の地形測量
- 10月4日 日本通信教育連盟「考古学ビデオ」の撮影（株式会社セレプロ）
- 10月5日 信濃町教委遺跡指導委員会視察（15名）
- 10月11日 国道C8区上部野尻湖層の調査終了
- 10月18日 国道C8区、ゾウ足跡下面より加工痕跡の疑いがある石片が出土
- 10月24日 三水村教育委員会遺跡見学（5名）
- 10月30日 調査区遠望の空撮。信濃毎日新聞社取材。国道B10区でⅥ層・Ⅶ層の石片出土状況確認調査開始
- 10月31日 国道C3・C4・C7区で10層下面の地形測量。国道C3・C4区調査終了
- 11月1日 明治大学安藤政雄教授、東京大学佐藤宏之助教授が遺跡調査指導。国道C8区出土のゾウの足跡から出土した石片について、マスコミの取材
- 11月2日 東京都立大学小野昭昭教授が遺跡調査指導。国道B10区の環状ブロック群の調査終了
- 11月5日 国道B10区、Ⅵ層以下の遺物確認のため、重機によるトレンチ調査開始
- 11月9日 信濃毎日新聞社取材

- 11月20日 国道B10区Ⅵ層以下の確認調査で、輝石安山岩の石片以外に出土遺物なし
- 11月22日 国道C8区ゾウの足跡型取り（長野県歴史館白沢勝彦専門主事ほか）
- 11月26日 国道C7区下部野尻湖層（12層）の確認調査開始。国道B10区調査終了
- 11月27日 信濃毎日新聞社取材
- 11月29日 国道C8区深掘りをして調査終了
- 11月30日 国道C4区・C7区重機による深掘り
- 12月3日 現場プレハブ撤去
- 12月4日 国道C4・C7区深掘り部分の断面を記録し調査終了

（平成14年度）

発掘調査

- 5月7日 現場プレハブ設置
- 5月9日 除雪9区、トレンチによる旧石器時代遺物分布範囲の確認調査開始
- 5月13日 除雪8区・9区調査開始（旧石器時代の調査）除雪8区は昨年度からの継続調査
- 5月21日 野尻小学校6年生遺跡見学（15名）
- 6月12日 野尻小学校6年生発掘体験（15名）
- 6月17日 除雪8区・9区Ⅳ層、Ⅴa層の遺物出土状況写真撮影
- 6月21日 群馬県岩宿文化資料館小菅将夫学芸員遺跡見学
- 7月8日 信濃毎日新聞社取材
- 7月12日 除雪8区・9区Ⅴb層の遺物出土状況写真撮影
- 7月18日 除雪8区・9区の旧石器時代遺物出土状況空撮
- 7月19日 除雪8区・9区旧石器時代ブロックの調査終了
- 7月22日 除雪8区・9区Ⅵ層（中部野尻湖層）以下の確認調査開始
- 7月25日 除雪8区・9区中部・下部野尻湖層の調査では輝石安山岩の石片以外に遺物はなく、調査終了
- 7月31日 現場プレハブ撤去

整理作業

- 土器・石器の接合と実測を進める。黒曜石産地特定、土器付着物および炭化物の炭素14年代測定を業務委託でおこなう。
- 5月18・19日 沼津高等専門学校望月明彦教授と黒曜石産地特定委託業務について打ち合わせ
- 7月29日 明治大学学生が資料見学（6名）
- 11月27日 同志社大学松嶋和人教授、中国科学院古脊椎動物古人類研究所李超英氏が資料見学
- 12月6日 東北大学柳田敏雄教授、東北歴史博物館山田晃弘研究員、宮城県教育庁文化財保護課須田良平主査が資料見学
- 2月4日 岩手県埋蔵文化財センター米田寛・北村忠昭氏が資料見学
- 3月17日 漢陽大学校裴基尚教授、朝鮮大学校李吉起教授ほか資料見学

（平成15年度）

整理作業

- 土器・石器の接合と実測、報告書原稿執筆をおこなう。黒曜石産地特定、縄文時代草創期関連資料の炭素14年代測定、旧石器時代炭化物の樹種特定を業務委託でおこなう。

4月21日	明治大学安藤政雄教授遺跡旧石器時代資料整理指導。長崎県教育庁川道寛氏、平戸市教育委員会萩原博文氏が資料見学	8月21日	京都大学山中一郎教授ほか資料見学
5月26～28日	かながわ考古学財団、國學院大學考古学資料館、東京都埋蔵文化財センターにて資料調査	9月26・27日	國學院大學谷口康浩講師縄文時代草創期資料整理指導
7月11日	藤沢高広氏遺跡整理指導	10月14日	広島大学藤野次史講師資料見学
		12月11日	国立科学博物館海部陽介氏資料見学

4 委託業務等

発掘調査および、整理作業のなかで以下の業務委託を行った。

単点測量・地形測量・空中写真撮影	株式会社 写真測図研究所
樹種同定	株式会社 バレオ・ラボ、株式会社バリノ・サーヴェイ
炭素 ¹⁴ 年代測定	株式会社 バレオ・ラボ、株式会社古環境研究所（名古屋大学 中村俊夫教授）
石器実測	株式会社 アルカ 株式会社 写真測図研究所
石器展開写真	有限会社 アルケーリサーチ
遺物写真撮影	株式会社 長野フジカラー
黒曜石産地同定	望月明彦（沼津工業高等専門学校教授）
獣骨鑑定	重原信生（京都大学霊長類研究所所長）
自然遺物鑑定	伊藤徳治（同志社香里中・高校）、石井久夫（大阪市立自然史博物館）

5 指導者・協力者

発掘調査から本書の刊行にいたるまで、次の諸氏・諸機関より御教示と御協力を頂いた。お名前を記して感謝の意を表したい。（敬称略・五十音順）

安藤政雄 赤羽貞幸 岩崎厚志 伊東徳治 内川隆志 内田陽一郎 小野 昭 大橋里奈 及川 穰
 大竹幸恵 小畑弘己 織笠明子 加藤勝仁 加藤隆也 川道 寛 角張淳一 笠井洋祐 加藤 学
 清田純一 木崎康弘 絹川一徳 北村忠昭 斐 基同 李 起吉 栗島義明 小島正巳 小菅将夫
 近藤洋一 佐藤宏之 佐藤雅一 茂原信生 白石浩之 砂田佳弘 須藤隆司 鈴木次郎 鈴木忠司
 須田良平 諏訪間順 黄 昭姫 館野 孝 竹尾 進 竹岡俊樹 谷口康浩 堤 隆 土橋由理子
 鳥居 亮 戸沢充則 中村由克 野口 淳 萩原博文 萩谷千明 花岡邦明 藤原妃敏 藤波啓容
 藤野次史 藤沢高広 松藤和人 三瓶裕司 三木陽平 望月明彦 山口讓治 山田晃弘 柳田俊雄
 矢島國雄 山中一郎 山本 克 米田 寛 渡辺哲也 和田好史
 かながわ考古学財団 國學院大學考古学資料館 城南町教育委員会 東京都埋蔵文化財センター
 福岡市埋蔵文化財センター 福岡市博物館

第2節 遺跡周辺の環境

1 遺跡の地理的環境（第1図）

仲町遺跡は、野尻湖と池尻川低地にはさまれた仲町丘陵上に展開する。遺跡の成因には、東側に広がる野尻湖が大きく影響しているといつてよい。本遺跡のみならず、湖周辺に広がる野尻湖遺跡群の成立要因が野尻湖であるといつても過言ではないだろう。通常、野尻湖遺跡群とは旧石器時代から縄文時代草創期の遺跡をさしているが、その後の各時代をとおして野尻湖の存在が遺跡を成立させる要因となっていることは間違いない。仲町遺跡においても、縄文時代後期以後、各時代の遺構・遺物が確認されている。

遺跡の周辺には火山が取り巻いており、その影響により、ローム層、スコリア層などの火山噴出物が厚く堆積している。野尻湖の西側には、北から妙高山、黒姫山、飯綱山の火山が並び、その東側には斑尾山が存在する。また、妙高山の西方には焼山がある。これらの火山の活動期は以下のように説明されている。

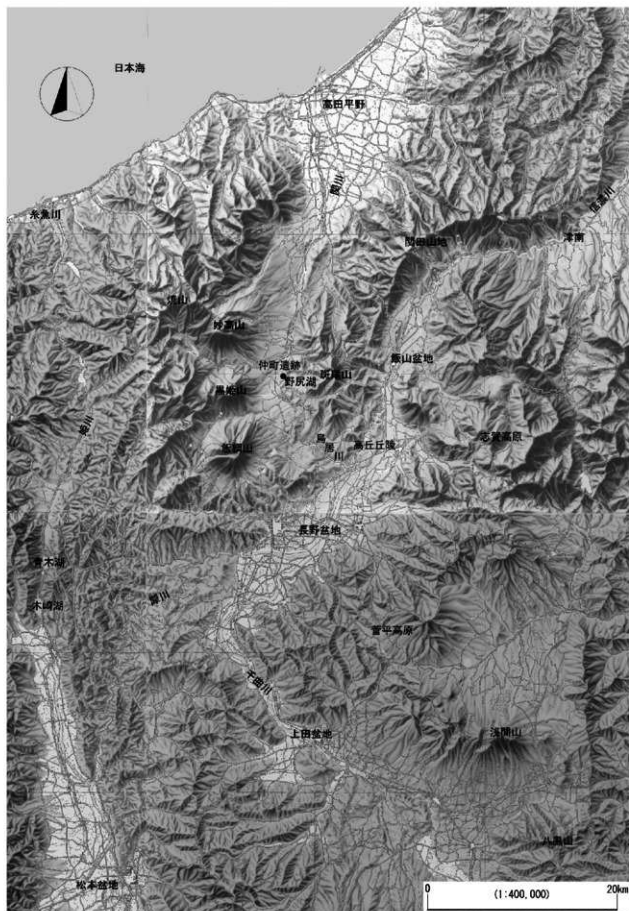
斑尾山は約70万年前と55万年前ごろに活動をしていたが、約30万年前には活動をやめていたと考えられる。飯綱山は約34万年前と約20～15万年前の2回の活動期があり、約12～13万年前には活動を終了している。黒姫山は約25万年前に活動を開始し、その後2回の活動期が認められている。古期の活動が約16～11万年前、新期の活動は6万年前ごろから活発となり、3万年前ごろには活動が衰えている。妙高山の古期の活動開始年代は約30万年前であったが、10万年前ごろ再び活動を開始している。約2万年前にはカルデラを形成する大爆発を起こし、約6000年前には中央火口丘を形成して現在にいたっている。推定される最新のマグマ噴火は約4200年前の大田切川火砕流を噴出させたものであるが、確認できる最後の活動は約2600～3000年前に起きた水蒸気爆発で、このとき黄褐色を呈した火山灰を降下させた。焼山は3000年前ごろに活動を始め、歴史時代に入ってからマグマ噴火や水蒸気爆発を繰り返している活火山である。昭和期にも3回の水蒸気爆発を起こしており、現在も活動中である。

旧石器時代には飯綱、黒姫、斑尾山はすでに活動を休止しており、妙高山が活動していた。縄文時代以降焼山が活動を開始し、降灰を繰り返していたものと思われる。

野尻湖は日本海に面する高田平野と内陸の長野盆地との間にあり、面積は3.96k㎡、水面標高654mで、その形が芙蓉の葉に似ることから、「芙蓉湖」と称されることもある。この地は古くから日本海と長野県北信地方を結ぶ交通の要衝となっていた。近世には北国街道が野尻湖の西側を通っており、仲町遺跡内には野尻宿がある。また、北国街道から分かれて飯山へ抜ける飯山道や戸隠に続く戸隠山道などの分岐点も本遺跡内にある。また、延喜式に見られる巨理駅—多古駅—沼辺駅と連なる東山道支道のルートは北国街道に似た道筋と推定されており、沼辺駅は仲町遺跡周辺にあったとされている（黒坂1992）。

野尻湖の誕生は、約6～7万年前に起こった黒姫山の崩落に伴って生じた池尻川泥流が、斑尾山西麓からの川を堰き止めたことによるといわれている。旧石器時代以前には仲町丘陵の西側に広がる池尻川低地にまで湖が広がっていたが、仲町丘陵の隆起と湖東側の沈降により、形を変化させながら現在の野尻湖の姿となった。約6万年前の湖底堆積層である貫ノ木層が、仲町遺跡の南西側約1kmの丘陵頂部と低地部とでは約50mの高低差をもって確認されている。

野尻湖から流出する唯一の河川である池尻川は、湖の西岸から南西方向に流れ出し、池尻川低地を過ぎて北に進路を変え赤川と合流し、関川を経て日本海へと注いでいる。また、南へ下る鳥居川は千曲川へと合流し、信濃川と名前を変え日本海へと流れ込む。したがって、仲町遺跡一帯は、関川と信濃川の分水嶺となる。



第1図 野尻湖周辺の地形

2 遺跡の歴史的環境

信濃町内には173箇所の遺跡が確認されており（信濃町教育委員会2001）（第3図、第1表）、その多くが旧石器時代から縄文時代前期と、平安時代以降の遺跡である。特に野尻湖周辺に密集する旧石器時代から縄文時代草創期の遺跡を、野尻湖遺跡群と呼称している（野尻湖人類考古グループ1994）。弥生時代から古墳時代の遺跡は少なく、特に古墳時代の遺跡は少ない。信濃町は、新潟県と県境を接しており、本遺跡を理解する上で新潟県側の遺跡との関連が重要である。山間部にある野尻湖を中心に南北に視点を広げると、北に向かうと高田平野、南に下ると長野盆地がある。便宜的に、平野部、山間部、盆地部と区分することができる。ここでは、長野県と新潟県との県境の山間部の遺跡について、発掘調査例を中心に時代別に概観していく。

旧石器時代 野尻湖の西部から南部を中心に約40箇所の遺跡が分布する。近年、高速道路関連の調査などで膨大な資料が蓄積されている。

野尻湖底の立が鼻遺跡では、野尻湖発掘調査団の調査により、ナイフ形石器文化以前の野尻湖文化が報告されている。仲町遺跡においても、野尻湖文化の石器が報告されていたが、今回の発掘調査によりナイフ形石器文化の時期のものであることが確認され、野尻湖文化とされる遺跡は立が鼻遺跡のみである。

いわゆる後期旧石器時代の遺跡は、野尻湖発掘調査団、信濃町教育委員会、埋文センターの発掘調査により、野尻湖遺跡群の内容が明らかにされつつある。2003年におこなわれた長野県旧石器交流会において、野尻湖遺跡群のこれまでの発掘調査成果を踏まえた編年が示されている（谷・大竹2003、渡辺2003a）。始良・丹沢火山灰（AT）降灰以前では、斧形石器の多出地域であり、貫ノ木・日向林B・大久保南・上ノ原遺跡では環状ブロック群が報告されている。今回仲町遺跡で確認された環状ブロック群を合わせると、野尻湖遺跡群では5遺跡で環状ブロック群が確認されたことになる。この他、東裏・上ノ原遺跡などでもAT降灰以前の石器群が検出されている。AT降灰以降では、野尻湖遺跡群で最初に学界に紹介された杉久保遺跡のほか、東裏・七ツ栗・西岡A・大平B・裏ノ山遺跡などで多数のナイフ形石器が出土している。杉久保・七ツ栗・東裏・上ノ原遺跡では杉久保系のナイフ形石器、仲町・東裏・上ノ原・西岡A遺跡などでは横長剥片を用いた瀬戸内系のナイフ形石器、貫ノ木・裏ノ山・伊勢見山・東裏遺跡では茂呂系のナイフ形石器が出土しており、各地域の石器群が混在する地域として認識されている。また、東裏・照月台遺跡の剥片尖頭器なども注目される。槍先形尖頭器では上ノ原・貫ノ木遺跡などでまとまった石器群が確認されている。細石器では上ノ原・向新田・仲町遺跡でブロックが確認されているが、遺跡数は少ない。

野尻湖遺跡群の周辺部では、中野市、飯山市などの千曲川流域の丘陵上に旧石器時代の遺跡が確認されている。中野市のがまん淵・沢田鍋土遺跡の石器群は後期旧石器時代初頭と位置付けられている。飯山市の日焼・太子林遺跡ではナイフ形石器を含む石器群が、関沢・千劫・上野遺跡では尖頭器を主体とする石器群が確認されている。さらに、千曲川を下り新潟県に入ると津南町を中心とする旧石器時代から縄文時代草創期の遺跡の密集地域がある（佐藤2002）。

なお、野尻湖周辺には石器となる石材を産するところが確認されていない。石材産地も遺跡を理解するうえで重要な要素である。本書では詳しく触れないが、野尻バイパス関連の貫ノ木・照月台遺跡の報告書などに触れているので、参照いただきたい（長野県埋蔵文化財センターほか2004a・中村1986）。

縄文時代 縄文時代草創期では星光山荘B・仲町・貫ノ木遺跡など隆起線文土器から多縄文系土器の良好な資料が知られている。さらに、これらに先行すると考えられる無文土器と石器が日向林B遺跡と東裏遺跡で少量出土している。表裏縄文土器～押型文土器の遺跡数は多く、貫ノ木・東裏・日向林A・七ツ栗・

大道下・市道・塞ノ神（信濃町）、関川谷内・中ノ沢遺跡（妙高高原町）などに良好な資料がある。沈線文系土器では八斗時原遺跡（中郷村）、貫ノ木遺跡などで、まとまった資料が出土しているが、早期末の資料は少ない。

前期では、日向林A・日向林B・七ツ栗・市道遺跡（信濃町）などで比較的まとまった資料が出土しているが、いずれも遺物が出土したのみで遺構は確認されていない。盆地部に近い丸山遺跡（牟礼村）で竪穴住居が、上浅野遺跡（豊野村）で配石遺構が確認されている。

縄文時代中期に入ると野尻湖周辺では遺跡数が減り、断片的に土器片が出土するのみであるが、野尻湖から北へ12kmの和泉A遺跡と前原遺跡（中郷村）では中期前半と中期中葉から後葉の集落がそれぞれ発見されている。長野県側では野尻湖から南へ約11kmの上赤塩遺跡（三水村）で中期前半の集落が確認されており、姥ヶ沢遺跡（中野市）、深沢遺跡（飯山市）、風呂屋遺跡（豊田村）などでも多量の遺物が発見されている。

後期の集落跡は山間部では確認されていないが、仲町・川久保・山手・仁之倉A遺跡（信濃町）、兼保



第2図 信濃町周辺の遺跡 (1:200,000)

遺跡（妙高高原町）、松原B遺跡（妙高村）、南田・籠峯・小丸山遺跡（中郷村）などで遺物が出土している。

晩期では、和泉A遺跡で晩期～弥生前期の土器と掘立柱建物跡などが発見された。同時期の土器は仲町遺跡でも出土した。この他、律生遺跡（妙高高原町）、籠峯・奥の城（西峯）・二本木西林・小丸山遺跡（中郷村）では晩期の石棺墓（石棺状遺構）が確認されている。野尻湖近辺の信濃町内では星光山荘B・仲町・川久保・仁之倉A遺跡などで晩期の遺物が出土している。

後期後半から晩期中葉の石棺状遺構は、長野県側では宮中遺跡（飯山市）、宮崎遺跡（長野市）、岡ノ峯遺跡（野沢温泉村）で調査例がある。仲町遺跡は地理的にこれらの中間的な位置にあり、これらの遺跡を考察する上でも重要な遺跡となろう。

なお、新潟県側の妙高山麓の東側では田口岩屑なだれ堆積物（早期）、赤倉火砕流（早期末～前期初頭）、大田切火砕流（中期末～後期初頭）などの下に埋没する遺跡が想定されている。表採などでは確認できない縄文時代草創期・早期の遺跡が妙高山麓に存在する可能性を考慮したい。

弥生時代 山間部の弥生時代の遺跡は少ない。中期では、山根遺跡（信濃町）で竪穴住居跡が発見されているほかは、仲町・川久保・七ツ栗遺跡（信濃町）などで土器が出土している。後期では、川久保・仲町・大平B遺跡（信濃町）で土器が採集されているものの、集落は確認されていない。

千曲川流域では中期の栗林遺跡（中野市）、照丘・上野・小泉遺跡（飯山市）などの集落と墓、後期では七瀬・がまん淵・間山遺跡（中野市）、東長峰・田草川尻・小泉・上野遺跡（飯山市）などの集落跡が確認されている。

古墳時代 信濃町では野尻湖畔のみで古墳時代の遺跡が確認されている。仲町遺跡、川久保遺跡は数少ない調査例である。以前は、山間部の古墳時代の遺跡はほとんど明らかにされておらず、遺跡の空白地帯となっていた。近年の発掘調査により、遺跡の存在が次第に明らかとなってきた。仲町遺跡もその一つである。集落遺跡は発見されていないが、大洞原C・小野沢西遺跡（妙高村）、川久保遺跡（信濃町）からは多量の土器が出土しており、集落跡の存在が想定されている。この他、東裏・仲町遺跡（信濃町）、籠峯・横引・和泉A遺跡（中郷村）などで少量ではあるが土器が出土している。また、仲町遺跡では古墳時代後期から奈良時代の年代値が得られる木製品が出土した。山麓部では古墳は確認されていないが、野尻湖に望む山麓に古墳の可能性がある塚が1基確認されている。野尻湖近辺は古東山道の沼辺駅の推定地とされており、その前身の道が古墳時代にあった可能性をうかがわせる資料が蓄積されつつある。仲町遺跡もそのような遺跡の一つであると考えたい。

また、盆地部の弥生時代末から古墳時代前期にかけて北陸系の土器を出土する集落跡があり、野尻湖付近を経由するルートが注目される。七瀬・がまん淵遺跡（中野市）、柳町・上野・須田ヶ峯遺跡（飯山市）などの集落跡で北陸系の土器が指摘されている。

奈良・平安時代 平安時代になると山間部に遺跡が多く見られるようになり、集落跡と思われる住居跡も多数調査されている。中ノ沢・関川谷内・兼保遺跡（妙高高原町）、仲町・貫ノ木・東裏・針ノ木・七ツ栗・丸谷地遺跡（信濃町）、前田・丸山遺跡（牟礼村）などの発見された住居跡はほとんどが9世紀末以降のものであるが、仲町遺跡などでは9世紀前半と思われる住居跡が検出されており、山間部では古い集落といえる。野尻湖周辺は、東山道支道が通っていたとされ、仲町遺跡は沼辺駅の推定地の一つとされている。奈良時代の信濃国府から越後国府につながる東山道は、江戸時代の北国街道に沿った野尻湖を抜けていくルートが妥当であると考えられている（黒坂1992）。上越市の今池遺跡群が越後国府と推定されており、8世紀末から9世紀初頭の集落が仲町遺跡に確認されたことにより、仲町遺跡周辺に沼辺駅が所在したとの印象がより強くなってきた。

中世・近世 近世では北国街道が野尻湖畔を通過しており、仲町遺跡の南端には一里塚が残されている。

信濃町内では古間・柏原・野尻の各宿場があり、小林一茶の生家などの発掘調査が実施されている。しかしながら、近世宿場は現在の集落と重なっており、宿場関連の発掘調査はあまり実施されていない。今回の発掘調査では野尻宿関連の遺構や、さらに中世にまで遡る建物跡が確認された。中世では野尻城などの城跡が知られている。今回の調査では中世までさかのぼると考えられる道跡も確認されており、中世から近世にかけて交通の要衝であったことがわかる。

番号	遺跡名	所在地	調査状況				調査回数	調査時期	調査内容
			発掘調査	調査	調査	調査			
1	藤沢 A	古間・藤沢							
2	藤沢 B	古間・藤沢							
3	藤沢 A	古間・藤沢							
4	藤沢 B	古間・藤沢							
5	藤沢 C	古間・藤沢							
6	藤沢 D	古間・藤沢							
7	藤沢	古間・藤沢							
8	花ヶ丘 A	古間・花ヶ丘							
9	花ヶ丘 B	古間・花ヶ丘							
10	藤沢	古間・藤沢							
11	菅川 A	古間・菅川							
12	菅川 B	古間・菅川							
13	菅川 C	古間・菅川							
14	菅川	古間・菅川							
15	久保	古間・市原久保							
16	山手出土地	古間・山手							
17	山手	古間・山手							
18	山手・寺川跡	古間・山手							
19	山手	古間・山手							
20	山手 B	古間・山手							
21	山手 C	古間・山手							
22	山手	古間・山手							
23	山手跡	古間・山手							
24	山手跡	古間・山手							
25	山手 A	古間・山手							
26	山手 B	古間・山手							
27	山手	古間・山手							
28	山手跡	古間・山手							
29	山手	古間・山手							
30	山手	古間・山手							
31	山手	古間・山手							
32	山手	古間・山手							
33	山手	古間・山手							
34	山手	古間・山手							
35	山手	古間・山手							
36	山手	古間・山手							
37	山手	古間・山手							
38	山手	古間・山手							
39	山手	古間・山手							
40	山手	古間・山手							
41	山手	古間・山手							
42	山手	古間・山手							
43	山手 A	古間・山手							
44	山手 B	古間・山手							
45	山手 C	古間・山手							
46	山手	古間・山手							
47	山手	古間・山手							
48	山手 A	古間・山手							
49	山手 B	古間・山手							
50	山手 C	古間・山手							
51	山手 D	古間・山手							
52	山手 E	古間・山手							
53	山手	古間・山手							
54	山手	古間・山手							
55	山手	古間・山手							
56	山手	古間・山手							
57	山手	古間・山手							
58	山手	古間・山手							
59	山手	古間・山手							
60	山手	古間・山手							
61	山手	古間・山手							
62	山手	古間・山手							
63	山手	古間・山手							
64	山手	古間・山手							
65	山手	古間・山手							
66	山手	古間・山手							
67	山手	古間・山手							
68	山手	古間・山手							
69	山手	古間・山手							
70	山手	古間・山手							
71	山手	古間・山手							
72	山手	古間・山手							
73	山手	古間・山手							
74	山手	古間・山手							
75	山手	古間・山手							
76	山手	古間・山手							
77	山手	古間・山手							
78	山手	古間・山手							
79	山手	古間・山手							
80	山手	古間・山手							
81	山手	古間・山手							
82	山手	古間・山手							
83	山手	古間・山手							
84	山手	古間・山手							
85	山手	古間・山手							
86	山手	古間・山手							
87	山手	古間・山手							

遺跡の所在は信濃町教育委員会 2003「信濃町の遺跡分布図」に、同じカラーの調査成果を加えた。

第1表 信濃町の遺跡一覧



第3図 信濃町遺跡地図

第3節 遺跡の概要

1 遺跡周辺の地形（第4図）

仲町遺跡はほぼ南北に伸びる仲町丘陵上に立地しており、丘陵の東側に野尻湖、西側には池尻川低地が広がる。遺跡は野尻湖畔と約200mの距離があるが、海端遺跡と立が鼻遺跡とに囲まれた遺跡範囲外にも遺物の分布が広がることが予想される。仲町遺跡がある丘陵は、全体的に北東に向かって傾斜しており、池尻川に接する北端のところで一番低くなる。そこから北に向かい上り傾斜となり、寺山を登り長範山を超えて関川に至り新潟県との県境となる。仲町遺跡から関川までは約2.5kmである。

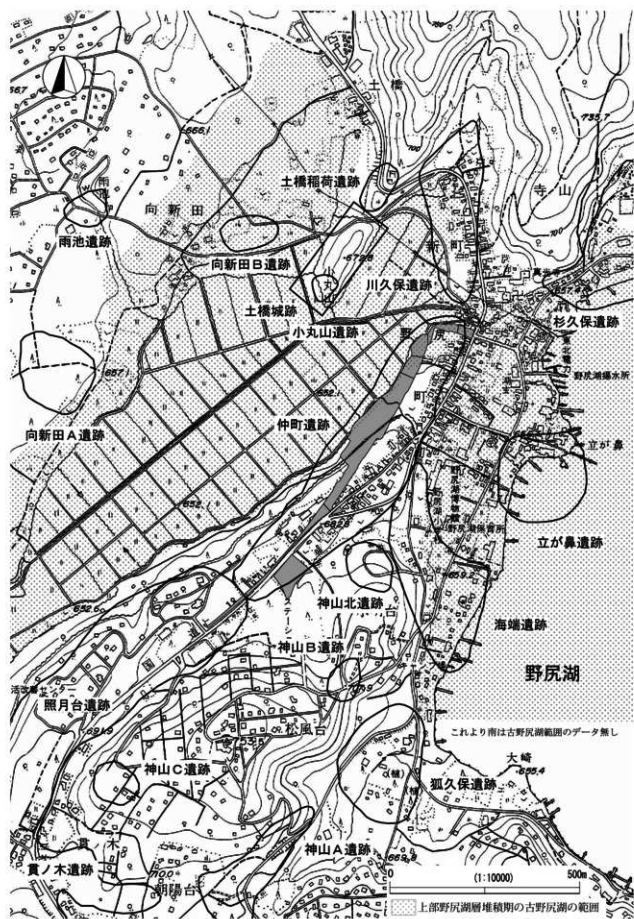
旧石器時代以前は、野尻湖が池尻川低地まで広がっていたことが明らかにされており、古野尻湖と呼んでいる（野尻湖地質グループ1980）。旧石器時代には仲町丘陵は古野尻湖に張り出した丘陵であり、現在とは異なった景観であった。第4図の古野尻湖の広がりには上部野尻湖層堆積期における湖の最拡大期のもので、後期旧石器時代の湖の広がりを示したものである。丘陵の西側の池尻川低地に接するところで、旧石器時代のブロックが水成層であるシルト層の中から発見された。ブロックはA T降下以降の石器群で、当時明らかに湖が池尻川低地に広がっていたことを確認できた。縄文時代以降については野尻湖の広がりを示した研究成果を知らないが、池尻川低地に面した丘陵斜面部に水成層である砂礫層が広がっており、そこから縄文時代草創期から早期の遺物が出土している。縄文時代早期ごろまでは池尻川低地側にも一部湖が広がっていたと想定している。また、隣接する川久保遺跡の遺物分布状況から古墳時代においても池尻川低地は湿地もしくは沼のような状況であったと推定している。池尻川低地は現在水田となっており、野尻湖から流れ出た池尻川が低地中央部を走っており、水田の下は泥炭層とシルト層が互層を成し、地表下3.5mからATを確認している。（長野県埋蔵文化財センターほか2004b）

古野尻湖が分断され湿地になったのは、仲町丘陵が隆起したためである事が明らかにされており、発掘調査区内でも赤スコと呼ばれる4万年前のスコリア層が数10cmずれた断層が確認された。また、野尻湖発掘調査団などにより、野尻湖底にも断層が多数確認されている。仲町丘陵の野尻湖側は緩やかに傾斜し湖へといたるが、池尻川低地に面した部分は急斜面の崖となる。これは丘陵が隆起したための地形である。

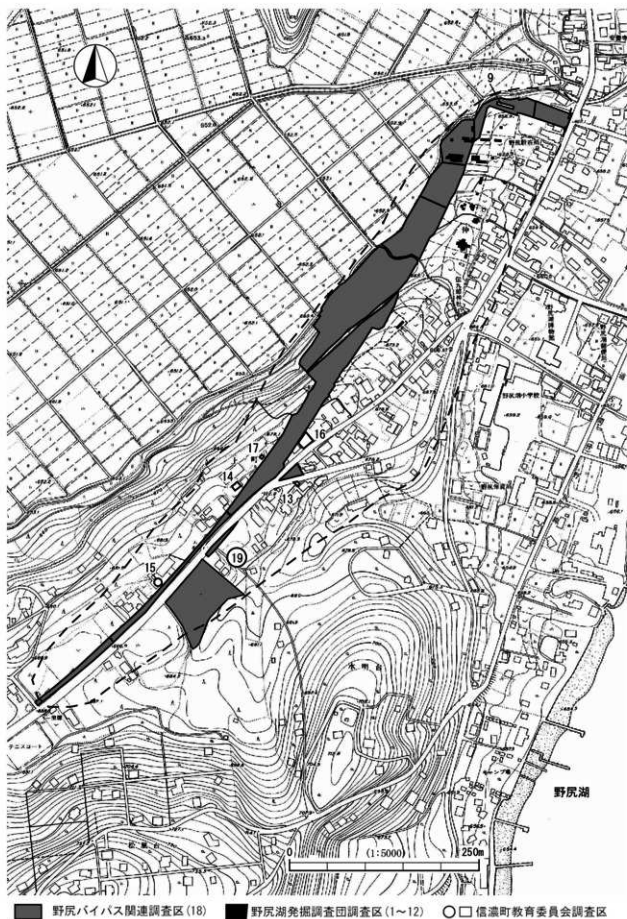
2 仲町遺跡の範囲と調査履歴（第5図）

信濃町の遺跡地図（信濃町教育委員会2003）では、川久保遺跡と照月台遺跡にはさまれた長さ約900m、幅200mの広大な範囲を仲町遺跡としている。その一部は、上町遺跡あるいは町裏遺跡（吉松・小林1975）と呼称されたことがある。今回の調査では、野尻宿跡など近世の遺構も調査され、これらの遺構群は、第4図に示した遺跡範囲外に広がることが確認された。また、近世のみならず、旧石器・縄文時代の遺物の分布範囲も杉久保遺跡と立が鼻遺跡との間の遺跡とされていない地区にも広がることが予想される。

大正15年、鳥居龍藏氏が野尻湖周辺の遺跡を紹介したのが、野尻湖遺跡群を取上げた最初の文献であろう（鳥居1926）。そこでは主に琵琶島遺跡について述べており、仲町遺跡の名前は見られない。1953年に芹沢長介と麻生優が野尻湖周辺の14遺跡の一つとして仲町遺跡を紹介しているが（芹沢・麻生1953）、遺物は縄文時代の「打製石斧のみ」とされている。1962年から始まった野尻湖発掘調査団による野尻湖底（立が鼻遺跡）の発掘調査の進展に伴い、1968年には仲町遺跡における最初の発掘調査がお



第4図 仲町遺跡周辺の地形



第5図 仲町遺跡の調査履歴

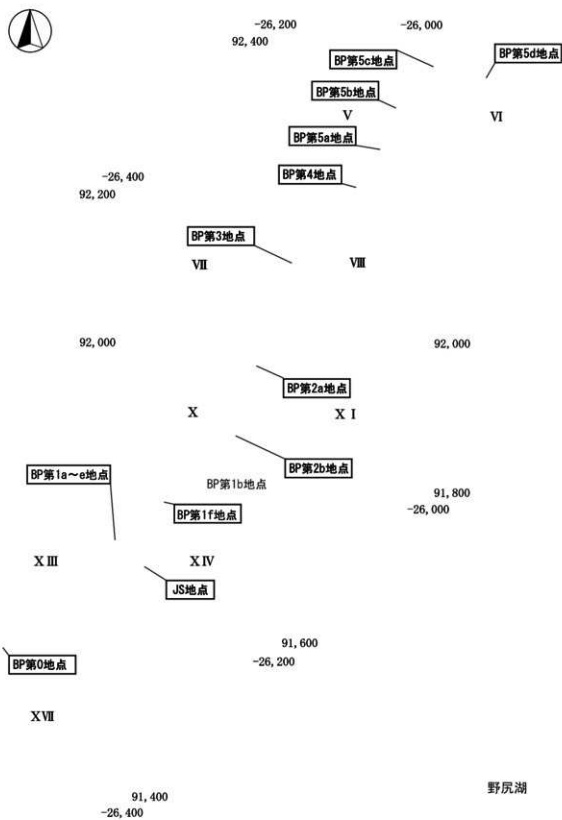
第1章 調査の概要

番号	調査地点	調査年次	発掘調査者	文献
1	第1回陸上発掘地点	1967	野尻湖発掘調査団	野尻湖人類考古グループ 1980
2	1973年の地質調査地点	1973	野尻湖発掘調査団	野尻湖人類考古グループ 1980
3	1974年の地質調査地点	1974	野尻湖発掘調査団	野尻湖人類考古グループ 1980
4	1975年の地質調査地点	1975	野尻湖発掘調査団	野尻湖人類考古グループ 1980
5	水道工事立会い調査地点	1977	信濃町教育委員会	野尻湖人類考古グループ 1980 西表・吉松・中村 1978
6	第2回陸上発掘地点	1979	野尻湖発掘調査団	野尻湖人類考古グループ 1984
7	第3回陸上発掘地点	1982	野尻湖発掘調査団	野尻湖人類考古グループ 1984
8	第6回陸上発掘地点	1991	野尻湖発掘調査団	野尻湖人類考古グループ 1993
9	下水道工事地点	1994	信濃町教育委員会	
10	第7回陸上発掘地点	1994	野尻湖発掘調査団	渡辺・野尻湖人類考古グループ 1995 野尻湖人類考古グループ 1996
11	1996夏の地質調査地点	1996	野尻湖発掘調査団	石塚・市川・野尻湖人類考古グループ 1997
12	第8回陸上発掘地点	1998	野尻湖発掘調査団	渡辺・野尻湖人類考古グループ 1999 野尻湖人類考古グループ 2000
13	大野氏車庫地点		信濃町教育委員会	なし
14	池田義一氏住宅地点		信濃町教育委員会	なし
15	佐藤石油地点		信濃町教育委員会	なし
16	塚本氏住宅地点	1999	信濃町教育委員会	中村 2000
17	野口氏車庫地点		信濃町教育委員会	
18	JS地点・BP地点	1999～2002	信濃町教育委員会 長野県埋蔵文化財センター	鍋田 2001 田中 2001 西山 2001 鍋田 2002 鍋田 2003 本書
19	セブンイレブン地点	2000	信濃町教育委員会	なし

第2表 仲町遺跡の調査履歴

本報告の地点名	地点の細別	発掘調査時の調査区名	調査年度	報告書
JS地点	a	除雪ステーション地点1～6区	H12年度	第1分冊
	b	除雪ステーション地点7～9区	H13・14年度	
BP第0地点		国道バイパスA1区	用地未買収のため未調査	
BP第1地点	1 a	国道バイパス5a・5d区(A地区)	H12年度	第1分冊
	1 b	国道バイパス4a・4b区(A地区)	H11・12年度	
	1 c	国道バイパス3c区(A地区)	H12年度	
	1 d	国道バイパス3a・3b区(A地区)	H11年度	
	1 e	国道バイパス2区(A地区)	H12年度	
	1 f	国道バイパス4c・4d・5b・5c区(国道A地区)	H12年度	
BP第2地点	2a	国道バイパス6区～9区	H12年度	第1分冊
	2b	(国道B地区)		
BP第3地点		国道バイパスB10区	H13年度	第1分冊
BP第4地点		国道バイパスC1区～C3区・C5区・6区	H12年度	第2分冊
BP第5地点	5 a	国道バイパスC4区・C7区	H12・13年度	第2分冊
	5 b	信濃町教育委員会発掘調査区	H11～13年度	信濃町教育委員会 (H16年度刊行予定)
	5 c	国道バイパスC8区	H13年度	第2分冊
		県道1区・3区・4区	H12・13年度	第2分冊
	5 d	県道2区	H12年度	第2分冊
県道5区		H13年度	第2分冊	

第3表 調査区呼称対応表



第6図 調査地点とグリッド配置図

こなわれ、旧石器時代の遺物が確認された。その後、野尻湖発掘調査団の9回にわたる調査と、信濃町教育委員会による住宅建設に伴う緊急発掘などで、旧石器時代の遺物はもとより、縄文時代草創期の土坑、平安時代の竪六住居跡などの遺構が確認された。出土遺物は旧石器時代から中世まで各時代のものが確認されており、仲町遺跡は信濃町では数少ない通時代的な複合遺跡であることが知られていた。

第2表・第5図にこれまでの調査履歴とその調査地点を示す。

3 調査の概要（野尻バイパス建設に伴う発掘調査）

(1) 遺跡範囲と調査区

仲町遺跡は仲町丘陵上の幅約250m、長さ約1kmにわたる広大な範囲である。南側は照月台遺跡と、北側は川久保遺跡とそれぞれ接している。発掘調査は仲町遺跡を縦断するトレンチを入れた形となっており、その全長は約900mとなる。工事工程との関係からこの区間を細かく分割して発掘調査を実施した。さらに、野尻湖発掘調査団と信濃町教育委員会が数次にわたる発掘調査を実施しており、調査地点が多数存在する。全長が約1kmにわたる遺跡であるため、調査地点により地形、地層、遺跡の内容が異なっている。本報告では遺跡の性格などを考慮して、以下のように調査区を7つに大別して、新たに地点名を付した。現在除雪ステーションの敷地部分を除雪ステーション地点、国道野尻バイパス関連の道路部分をバイパス地点とした。これまで、年報等で呼称した地点名と一部異なるが、本報告をもって正式な地点名とする。なお、BP地点はバイパス地点の、JS地点は除雪ステーション地点の略称とする。

(2) 調査成果の概要

今回の発掘調査では、旧石器時代から近代までの遺構と遺物を検出した。南北900mに及ぶ仲町遺跡を縦断する発掘調査であったため、発掘地点によりその状況はまったく異なっている。このような遺跡の調査成果を一言でまとめるのは困難であるので、時期別に各調査地点の概要をまとめる。

旧石器時代 ブロック145箇所、礫群72箇所などが確認された。JS地点やBP第3地点で環状ブロック群など、同時期に形成されたブロック群が確認された。おもな石器では、斧形石器47点、ナイフ形石器309点、台形石器133点、楕円形尖頭器132点（縄文時代草創期を含む）、石刃466点、彫器74点、細石刃114点、細石核15点、砥石3点などの石器が出土し、剥片・破片を含めると出土点数は約30,000点におよぶ。礫群も複数の文化層で確認され、時期によって礫群の状態が異なっていることが明らかになった。

これらの遺構群は、JS地点、BP第1・第2・第3地点の丘陵上全体に広がっている。特に、BP第3地点では先述の環状ブロック群が認められ、斧形石器、台形石器の他、台石や蔽石・凹石などが多数出土した。なかでも、JS地点やBP第2地点の黒色帯（Vb層）で検出された配石は注目される。また、BP第5地点では砂層とシルト層が堆積した水成層中から石器が多数出土しており、オオツノシカと思われる足跡も確認された。

なお、野尻湖調査団による第7回陸上発掘の報告で中部野尻湖層出土の接合資料とされていた資料については、今回の発掘調査により、出土層位が上部野尻湖層に対比されることが確認され、仲町遺跡では確実に野尻湖文化に属する遺物であるとは断定できなくなった。また、今回の発掘調査で中部野尻湖層（約4万年前）の「象の足跡より出土した石器」と報道された遺物についても、石器とは断定できないため、中部野尻湖層すなわち中期旧石器時代に比定しうる確実な人工遺物は確認されないことになる。中部野尻湖層の出土品については、第二分冊第3章にて詳細を記述する。

縄文時代 草創期から晩期までの土器が出土したが、草創期・早期・前期・後期・晩期が主体であり、

中期の遺物はほとんどない。竪穴住居は検出されなかったが、早期または前期の陥し穴などの土坑が確認された。

特に注目されるのはBP第4地点・第5地点を中心とした草創期の遺物群と第5地点より出土した後期後半から晩期の遺物群である。草創期の遺物群は、隆起線文土器・円孔文土器・爪形文土器・多縄文系土器など多種類の土器が出土しており、従来爪形文土器単出土の遺跡と評価されてきた仲町遺跡の内容を再考する資料が得られた。これらの土器群に伴うと考えられる有茎尖頭器・石鏃・神子柴型石斧などが多数出土した。

BP第4地点では新潟県壬遺跡と類似した円孔文土器と無文土器がまとまって出土した。これらの内5点について、土器内面付着物の炭素14年代測定をしたところ、測定値が一番新しい11770±120yrBPから一番古い12280±110yrBPの値を得た。また、これらの土器群とともに、石鏃と有茎尖頭器を中心とした石器群が出土し、礫群、炉跡と考えられる浅い掘り込みと焼土なども確認された。

弥生時代～平安時代 弥生時代から古墳時代の遺物は、ほとんどがBP第5d地点の砂礫層より出土したもので、他の地点ではほとんど見られない。弥生時代では中期・後期の土器がわずかに見られるのみで遺構は検出されなかった。古墳時代では前期・中期を中心とした土器が出土しており、特に前期の土器は水辺に遺棄されたような状態で出土しており、隣接する川久保遺跡と類似した出土状況を示しており、注目される。また、BP第5d地点の性格不明の窪みから、古墳時代から奈良時代のいずれかの時期の木製品が多数出土した。

奈良・平安時代では、竪穴住居跡が5軒確認された。4軒は8世紀末から9世紀代のもので、信濃町では古代においては古い時期の集落跡と考えることができる。仲町遺跡周辺は東山道支道の沼辺駅の推定地とされており、これらとの関連を想起させる。

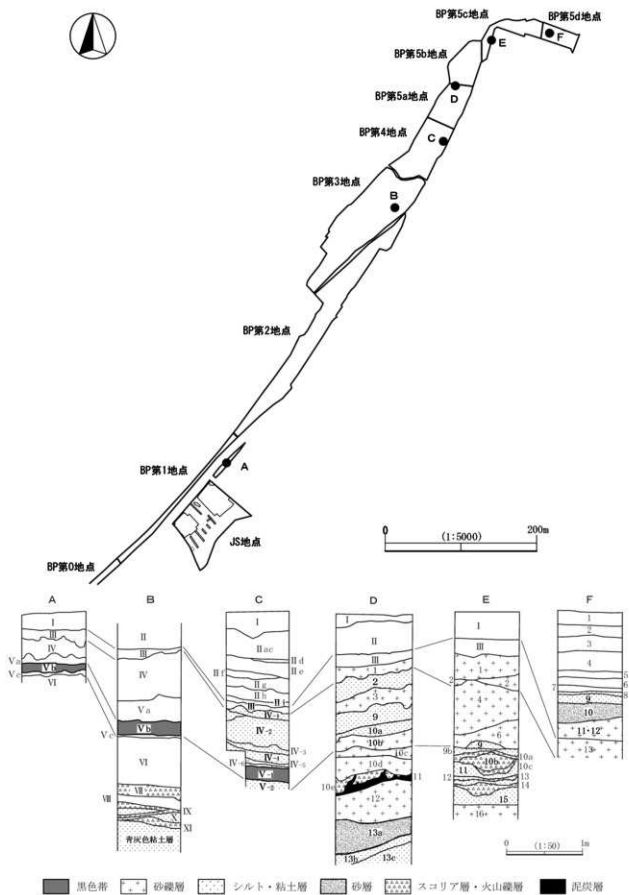
中世以降 国道18号線に沿って、帯状に続く硬緻面が検出され、道路跡と推定している。照月台遺跡でも同様のものが確認されており、関連した遺構と考えられる。国道18号線は、遺跡付近では北国街道と重なっており、検出された遺構は北国街道関連のものである可能性が高いと考えられるが、出土遺物も少なく時期が確定できない。また、BP第5d地点では北国街道野尻宿の一部を発掘しており、中世・近世の遺構群を検出し、多量の陶磁器、銭貨などの金属製品などが出土した。

(3) 調査区内の基本土層と微地形

調査区内の基本層位は風成層と水成層に大きく2分される。JS地点からBP第3地点と第4地点の丘陵部は風成層、BP第4地点の谷部とBP第5地点は水成層である。BP第4地点では、丘陵の縁辺部まで遺跡が広がり、Ⅱ層が覆う埋没谷が入り組んでいる。第7図のBP第4地点は谷部の土層図を示してある。層名は、広域に分布する風成層はローマ数字を用い、丘陵の周辺のみに見られる砂礫層・シルト層などの水成層は算用数字を用いた。したがって、ローマ数字の層名は調査区全体に共通するが、算用数字の層名は、調査地点固有の層名である。

JS地点、BP第1～第4地点は風成層を主体とし、従来知られている野尻湖遺跡群の貫ノ木遺跡・日向林B遺跡・照月台遺跡・上ノ原遺跡などと共通した層序である（長野県埋蔵文化財センターほか2000a・b・c・2004）。Ⅱ層が近世から縄文時代早期、Ⅲ層が縄文時代早期から草創期、Ⅳ層・Ⅴ層が旧石器時代の遺物包含層で、Ⅴa層にAT火山灰層が対比されている（長野県埋蔵文化財センター他2000c）。遺物包含層の層名は、基本的にはこれまでの当センターの調査遺跡の層名と一致するが、Ⅱ層の細分およびⅧ層以下は、これまでに埋文センターが調査した遺跡とは堆積状況が異なる地区もあり、従来呼称していた層名と必ずしも一致しない。

BP第5地点では、Ⅱ層（柏原黒色火山灰層）の下層には砂礫層とシルト層の水成層が堆積しており、



第7図 仲町遺跡の基本土層

水成層上層では縄文時代草創期・早期、下層では旧石器時代の遺物を包含する（BP 第5a地点・第5c地点）。第5d地点では、旧石器時代の包含層は確認されず、縄文時代前期・後期・晩期を包含する砂礫層があり、その上には弥生から平安時代の遺物包含層が、さらにその上に中世以降の整地層（BP 第5d地点の2層～7層）などの人為的な堆積層が見られる。

また、BP 第5a地点、BP 第5c地点、BP 第5d地点では直接層の対比ができなかったため、それぞれの地点で層名を付しており、同じ層名であっても同一層位ではない。ただし、BP 第5a地点とBP 第5c地点の層位については、信濃町教育委員会が調査したBP 第5b地点を介して層の対比を行っており、第2分冊第3章1節に詳細を記す。

なお、丘陵頂上部のJS地点、BP 第1・第2地点では、II層（柏原黒色火山灰）がない調査区が多い。これに対し、丘陵周辺部のBP 第3・第4・第5a地点ではII層が厚く堆積しており、キビダンゴI、キビダンゴIIが認められる地区がある。BP 第4・第5地点の小さな埋没谷部分では、キビダンゴIIより下層に焼土のような暗赤褐色土層が確認された（BP 第4地点II f層）。この層は貫ノ木遺跡でII b層とされたものに対比され、貫ノ木遺跡の出土遺物から縄文時代早期前半から前期初頭の間に降灰した火山灰と判断される。（長野県埋蔵文化財センターほか1998）

各地点の基本層序と出土遺物の関係については、2章以下の各調査区の該当部分で詳細を記述する。以下に第7図の土層の説明を記す。なお、括弧内の層名は野尻湖調査団が用いている層名である。

JS 地点・BP 第1地点～第3地点（A・B）

- I層：表土、客土層。
- II層：黒色土。（柏原黒色火山灰層）
- III層：黒褐色土層から暗褐色土で、II層とIV層の漸移層。（モヤ層）
- IV層：黄褐色土層。ソフトローム層。（野尻ローム層上II上部・下部）
- V a層：IV層とV b層が混在する。V b層の暗褐色土がブロック状に混じる。褐色ローム層。（野尻ローム層上II最下部）
- V b層：暗褐色ローム層。ハードローム層。（黒色帯）
- V c層：暗褐色（明褐色）土層。V b層より色調が明るく、スコリアをわずかに含む。V b層とVI層の漸移層。ハードローム層。
- VI層：明褐色土層。粘性があり、スコリアを含む。ハードローム層。
- VII層：赤褐色スコリア層。（赤スコ）
- VIII層：黄褐色土層。非常に硬く締まり、赤褐色スコリアが混じる。
- IX層：橙色または赤褐色スコリア層。部分的に灰黄色粘土層を挟む。（ニセノミ）
- X層：灰オリーブ粘土層。スコリアが混じる。
- XI層：極暗赤褐色スコリア層。非常に硬く締まった層。（青ヒゲ）

BP 第4地点（C）

- I層：表土層。
- II層：黒色土（柏原黒色火山灰層）。BP 第4地点ではII層が厚く、II b層（キビダンゴII）、II d層（キビダンゴI）は暗黄褐色、II f層・II h層では暗赤褐色の火山灰層が部分的に認められる。
- III層：黒褐色土層から暗褐色土で、II層とIV層の漸移層。（モヤ層）
- IV-1層：明褐色シルト層。赤褐色スコリアを含む。
- IV-2層：にぶい黄褐色シルト層。
- IV-3層：橙色シルトまたは粘土層。
- IV-4層：灰白色粘土層。
- IV-5層：浅黄色火山灰層。（AT）
- IV-6層：灰白色粘土層。
- V-1層：暗褐色粘土～灰褐色粘土層。風成層のV b層に相当。
- V-2層：黄褐色シルト。橙色、灰白色スコリアを多く含む。風成層のVI層に相当か？

第1章 調査の概要

BP第5a地点(D)

- I層：表土。黒色土。
- II層：黒色土（柏原黒色火山灰層）。
- III層：黒褐色～灰黄褐色土。シルト質の粘性のある場所や、I層の砂礫が混じる場所がある。II層とその下層との漸移層をIII層群とした。
 - 1層：暗灰褐色砂礫層（カツレキ）。砂層と礫層が互層になるところがあるが、全体を1層群とした。
 - 2層：黄灰シルト層（黄灰シルト）。
 - 3層：灰色～灰褐色砂礫層（スナガラ）。砂とシルトが主体となり、砂層とレキ層が互層となる。3層群と認識した。
 - 4層：灰色～黄灰色砂質シルト層。砂層とシルト層が互層になり分層できる場所もある。4層群と認識した。池尻川低地側に部分的に見られる層。
 - 5層：砂礫層（スナガラ）。砂層と礫層が互層になるところがあるが、全体を5層群とした。
 - 6層：灰褐色シルト層。粘土質。
 - 7層：褐灰色シルト層。スコリア火山礫が混じる。
 - 8層：灰白色スコリア質砂礫層。
 - 9層：褐灰色シルト。部分的に灰褐色～黒褐色シルトが入り込む。粘性強く粘土質。
 - 10a層：灰白色砂質シルト層。
 - 10b層：灰色砂礫層。スコリア火山礫質。（スコリア質砂礫層）
 - 10c層：黄白色シルト質砂礫層。スコリア火山礫が混じる。
 - 10d層：灰白色砂礫層。スコリア火山礫が混じる。
 - 10e層：青灰色砂礫層（アレッチャーゾーン）。
 - 11層：泥炭～泥炭質シルト層。火山礫が混じる。部分的に泥炭層上部に灰白色シルト層が見られ、11a層、11b層と細分した。
 - 12層：灰色砂礫層。
 - 13層：青灰色～灰白色砂または砂質シルト層。礫を混じる。以下のように細分される。（貝ノ木層）
 - 13a層：灰白色砂層（灰ザラ）
 - 13b層：灰白色砂質シルト層。（シミレ？）
 - 13c層：灰色シルト層。

BP第5c地点(E)

- I層：黒色土。
- II層：黒色土（柏原黒色火山灰層）。部分的に欠落する。
- III層：黒褐色から暗褐色。漸移層。
 - 1層：にぶい黄褐色砂礫。礫が混じる。（カツレキ）I層下部に明褐色シルト層（1b層）と黄褐色シルト層（1c層）が見られる場所がある。
 - 2層：黄褐色～灰白色砂礫層。（カツレキ）
 - 3層：にぶい黄褐色シルト層。粘性あり。（黄灰シルト）わずかに部分的に見られる層。
 - 4層：褐色～黄褐色砂礫層。（スナガラ）
 - 5層：黄灰色シルト層。部分的に見られる層でAT（ヌカ1）を団子状に含むところがある。
 - 6層：黄褐色～褐色砂礫層。スコリアが混じる。4層との区別は難しく、5層が認められる部分のみ明確に分層できる。（スコリア質砂礫）
 - 7層：褐色シルト層。部分的に泥炭を含む。調査区の南端側のみで確認される。
 - 8層：スコリア質砂礫層。調査区の南端側のみで確認される。
 - 9層：にぶい黄褐色シルト層。紫灰色細粒火山灰（上Iピンク）がブロック状に混入する。
 - 10層：赤褐色スコリア質火山礫層（赤スコ）。以下のとおり細分される。
 - 10a層：淡黄褐色シルトに赤褐色スコリアを含む。赤褐色スコリアの再堆積層と想定。
 - 10b層：純粋な赤褐色スコリア層。
 - 10c層：10b層より硬く締まり、鉄分の沈着が顕著。
 - 11層：灰色シルト層。紫灰色細粒火山灰（中IIピンク）をレンズ状に含む。
 - 12層：赤褐色スコリア質火山礫層。（ニセノミ）
 - 13層：黄灰色シルト層。紫灰色細粒火山灰（中Iピンク）をレンズ状に含む。
 - 14層：堅く締まった青灰色礫層。白色のバミスを混じる。（青ヒゲ）灰色シルトに青灰礫を混じる14a層と、堅く締まった礫層の14b層に区分される。
 - 15層：褐灰色砂質シルト層。
 - 16層：砂礫層。

BP第5d地点（F）

- 1層：黒褐色土層。表土。
- 2層：にぶい黄褐色土層。ローム層。ロームブロック（黄褐色）を多く含む。整地土。
- 3層：黒褐色土層。1cm大の礫を含む整地土。
- 4層：黒褐色土層。軟らかく、3層よりも黒い。1cm大の礫を多く含む整地土。
- 5層：黒色土層。軟らかく、粘性ある。ロームブロックと炭化物粒をわずかに含む。整地土。
- 6層：黒色土層。軟らかく、粘性ある。ロームを多く含む。炭化物粒を含む。整地土。
- 7層：黒色土層。軟らかく、粘性ある。非常に多量のロームブロックと小礫を含む。炭化物粒を含む。整地土。
- 8層：黒色土層。軟らかく、粘性がある。炭化物を多量に含む。
- 9層：黒褐色～暗褐色土層。軟らかく、粘性がある。炭化物を含む。
- 10層：褐色砂層。
- 11層：灰黄褐色砂礫層。
- 12層：砂礫層。11層に類似。
- 13層：灰オリーブ色砂礫層。1～10cm大の礫が多量に含まれる。

第4節 発掘調査と整理の方法

1 発掘調査の方法

(1) 遺跡記号と遺構記号

遺跡記号 発掘調査では、以下の遺跡記号を用いて、遺物・写真ほかの記録類の注記などを行った。遺構記号は、埋文センターの遺跡記号の原則に従い、「MNK」とした。なお、調査区名を第3表のとおり変更して報告したが、写真、図面、台帳等の記録類は発掘現場で用いた調査区名で記載している。

遺構記号 記録・注記等の便宜を図るために遺構名称は記号を用い、遺構番号は時代等にかかわらず種類ごと、検出順に付した。遺構記号は原則として検出時に決定するため、主として平面的な形態や遺物の分布状況などを指標としたもので、必ずしも遺構の性格を示すものではない。遺構記号はセンターで共通して用いているもので、以下のとおりである。

[S A] S Bより小さな落ち込みや石が、列として配置されるもの。(柵、築地)

[S B] 2m以上の大きさの方形、円形、楕円形の掘り込み。(竪穴住居跡、竪穴状遺構)
S B内の掘り込み(柱穴等)にはPを付した。

[S C] 連続する堅い面、もしくは溝にはさまれる帯状の面。(道路)

[S D] 帯状の掘り込み。(溝、河道他)

[S F] 単独で存在し、火を焚いたあとが面的に広がるもの。(火床、炉跡)
なお、仲町遺跡では炭化物の集中地点もS Fの遺構記号を用いた。

[S H] 石が面的に集中するもの。(集石、礫群)

[S K] 単独もしくは他の掘り込みと関係が認められないS Bより小さな掘り込み。
(土坑、陥し穴、貯蔵穴、井戸等)

なお、仲町遺跡では集中した掘立柱建物跡のそれぞれの柱穴にもS Kの記号を用いた。

[S M] 方形、円形、もしくはそれらが組み合わさった形の盛り上がり。(古墳、墳墓)

[S Q] 遺物が面的に集中するもの(石器製作跡、ゴミ捨て場、祭祀跡等)

[S T] S Bより小さな落ち込みや石が一定間隔で方形、円形に配置されるもの。(掘立柱建物跡、礎石を利用した建物跡)

[S X] 以上の遺構記号に該当しない不明遺構。

[B L] 整理作業の石器の分析の結果認められた、旧石器時代の石器・剥片の有意なまとまりを示す遺物集中。発掘現場では便宜上S Qの遺構記号を用いて記録したが、S QとB Lとは必ずしも一致しない。B Lの認定については「第1章2項 整理の方法」を参照。

遺構番号 仲町遺跡は調査区が広域であるため、下表のとおり地区ごとに100番単位の遺構番号を割り当てた。飛び番号が生じているが、混乱を避けるため発掘時の番号をそのまま報告しており、最終遺

地点名	旧石器時代ブロック番号	ブロック以外の遺構番号
JS 地点	BL001 ~	201 ~ 250
BP 第1地点	BL101 ~	251 ~ 300
BP 第2地点	BL201 ~	
BP 第3地点	BL301 ~	301 ~ 400
BP 第4地点	BL401 ~	
BP 第5地点	BL501 ~	1 ~ 200、401 ~

第4表 調査地点別遺構番号一覧

構番号＝遺構数とはならない。また、遺物集中区、礫群などは整理段階で遺構番号を付したものがあり、1000番台の番号を付した。なお、旧石器時代ブロックは、報告の単位とした地区ごとに100番単位の番号を付したことがある。

(2) グリッドの設定と呼称法

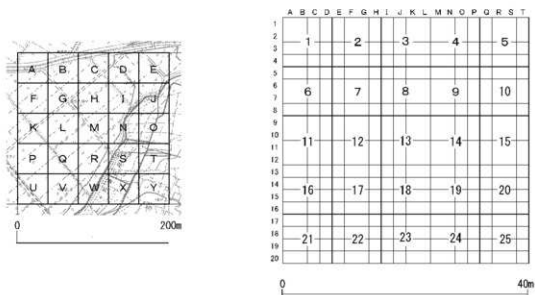
埋文センターでは従来より、国家座標を基準として大々地区・大地区・中地区・小地区の4段階のグリッドを設定して調査を行っている。しかし、今回の調査では原則として、光波トランシットによる測量および遺物の取り上げを行ったため、特にグリッドは設定しなかった。ただし、BP第5d地点は遺構が密集していた為、グリッドを設定し遺構の実測等を行った。測量は国土地理院の定める平面直角座標系の原点（長野県第Ⅷ系、X=0.000,Y=0.000）を基準点としている。なお、2002年以前の日本測地系（旧測地系）を用いている。

グリッドの設定にあたっては、国家座標を基準として大々地区、大地区、中地区、小地区の4段階の基準を設けている。調査区全体にかかる200m×200mの区画を設定してこれを大々地区とし、Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・・・とローマ数字で表記した。なお、今回の野尻バイパス関連の発掘調査では川久保遺跡・仲町遺跡・照月台遺跡・貫ノ木遺跡の4遺跡全体を通して大々地区を設定したため、仲町遺跡はⅤ地区から始まっている。大地区は大々地区を40m×40mの25区画に分割し、AからYまでの大文字アルファベットを用いてグリッドを示した。その大地区を8m×8mの25区画に分割し、北西から南東へ1から25の算用数字で表記したものが中地区である。また、大地区を2m×2mの400区画に分割し、X軸、Y軸に付したA～T、01～20の記号の組み合わせによりグリッド名を表したものを小地区とした。（第8図）

(3) 遺物の取り上げと記録方法

本遺跡の出土遺物の大半は旧石器時代から縄文時代草創期の遺物である。旧石器時代と縄文時代の一部の遺物については、すべて個別の番号を付し、出土位置、標高を記録した。出土地点の記録は光波トランシットを用いて単点測量をおこない、国家座標値と標高の記録と同時に出土層位、遺物の種類を入力した。遺物の取り上げ番号は№1からの通し番号とし、調査区ごとに1000番ごとのまとまりとした。使用した遺物番号と調査区に対応を第5表に示す。

また、遺物を取り上げる際、3次元の座標値と共に、数字とアルファベットからなる入力用の土層記号と遺物の種類を遺物カードに記載し、それを電子野帳に入力した。遺物とともに収納されている遺物カー



第8図 グリッドの呼称方法

第1章 調査の概要

下の層位欄と種類欄の記号は基本的には入力用の記号が記載されている。仲町遺跡では、調査区により基本土層が異なっており、使用した記号は調査区、調査年度によって違うため、土層名と入力用の記号の対応表を示す。丘陵上の風成層については、各調査区共通の記号を用いたが、水成層が発達するBP第4地点・第5地点では調査区間の層の対応ができなかったため、調査区ごとに独自の入力用の層位記号を用いた。本報告書の層名との入力記号の対応関係を第6表に示す。

縄文時代以降の遺構出土遺物は、出土地点を記録したものについては遺構ごとに1番から番号を付し、光波トランシットにより単点測量で出土地点を記録した。出土地点を記録しないものは、層位ごと一括して遺物を取り上げた。なお、BP第5d地点では層一括で遺物を取り上げたが、調査時に層名の混乱があり、調査区内での統一した取り上げ層序を設定できなかった。そこで、取り上げたビニール袋ごとに通し番号を付し、遺物にはその通し番号のみを注記した。通し番号は、BP第4・第5地点に割り振られた通し番号のNo.18501～No.18942、48001～48163を用いた。これらの番号が注記されている遺物は、層ごと一

仲町遺跡		MNK
遺物No	19924	
層位	7	
種類	3	
器種		
備考		

遺物カード

遺物番号	地点名	備考
1～796	全地区	H11年度試掘
797～2000	JS・BP第1地点	
2001～3000	BP第2地点	
3001～4000	BP第4・5地点	
4001～6000	JS・BP第1地点	
6001～8000	BP第2地点	
8001～10000	BP第4・5地点	
10001～11000	BP第2地点	
11001～12000	JS・BP第1地点	
12001～13000	BP第2地点	
13001～14000	BP第4・5地点	
14001～15000	JS地点	
15001～18000	BP第2地点	
18001～19000	BP第4・5地点	18501～18942は一括取り上げ遺物(単点データなし)
19001～20000	BP第2・4地点	19917～20000はBP第4地点
20001～21000	BP第3地点	
21001～22000	BP第5a地点	21410～21450は欠番
22001～23000	BP第5c地点	22001～23000は軌道3区
23001～24000	BP第4・5地点	23001～23250はBP第4地点、 23251～24000は5c地点
24001～33000	BP第5c地点	29001～30000は国道C8区、他は軌道3区
33001～34000	BP第5a地点	
34001～36000	BP第5c地点	
36001～37000	BP第5a地点	
37001～38000	BP第5c地点	
38001～39000	BP第3地点	
39001～40000	BP第5a地点	
40001～42000	BP第5c地点	
42001～43000	BP第5a地点	
43001～46000	BP第3地点	
46001～47000	BP第5a地点	
47001～48000	BP第3地点	～47158まで使用
48001～49000	BP第5d地点	48001～48163は一括取り上げ遺物(単点データなし)
49001～55447	JS地点	
60001～60473	JS地点	H12年度の手取り実測した炭化物に改めて通し番号を付した。
61001～62000	全地区	整理段階で一括取り上げ遺物に付した。61133まで使用。

第5表 遺物番号と調査区

括して取り上げた遺物であり、出土地点の座標は記録されていない。

(4) 遺物の注記方法

単点測量により、出土地点の座標値を記録したものは、個別の遺物番号を注記した。出土地点の座標値を記録せず、同一層位一括で取り上げた遺物は、発掘調査時の調査区名と層位を注記した。なお、BP第5d地点では、取り上げ層位に混乱があったため、遺物取り上げ台帳を作成し、ビニール袋に個別の番号を付し、その番号を注記した。なお、BP第4地点、BP第5c地点においても一部同様の注記方法を用いた。これらの注記番号と出土層位の対応表を添付CDに「BP第4地点・第5地点注記台帳」として収録した。また、注記では以下の略号を用いた。

県：県道地点 国：国道地点 除：除雪地点 Z：出土地点、または出土層位不明。

取り上げ層位記号	BP第5地点以外 (平成11～14年度)	BP第5d地点 (平成12年度)	BP第5a地点 (平成12年度)	BP第5a地点 (平成13年度)	BP第5c地点 (国道08区)	BP第5c地点 (県道3・4区)
0	攪乱		攪乱	10層	攪乱	攪乱
1	I層		I層	1層	1a層	I層
2	II層		II層	2層	2層	II層
3	III層		III層	3層	3層	1a層
4	IV層上部			4層	4層	2層
5	IV層中部			5層	5層	4層
6	IV層下部			6層	6層	6層
7	IV層一括			7層	7層	9層
8	V a層			8層	8層	
9	V b層			9層	1層～4層	
A	V c層			1層	1層	
B	V層一括			II層	II層	
C	VI層 ※1			III層	III層	
D	IV層 or V層 ※2		II層上部	IV層(粘土層)	4層 or 6層	
E	VI層 ※3		II層中部		1層～6層	
F	※4		II層下部		1b層	
G				2層～4層	1c層	
H				3層 or 5層		
I	※5			1層～5層		
J				3層 or 5層 or 10層		
K				6層 or 9層		
L				11層		
M				12層		
P					10層	
Q					11層	
R			1層(砂礫層)		12層	
S					13層	
T					14a層	
U		8層			14b層	
V		9層			15層	
W		10層				
X		13層				
Z				攪乱		

※1 B P第2地点では、IV or V層を表す。

※2 J S地点の平成14年度分の調査では、VI層を表す。B P第4地点の平成12年度分の調査ではII層上部を表す。

※3 J S地点の平成14年度分の調査では、IV or V層を表す。B P第4地点の平成12年度分の調査ではII層中部を表す。

※4 J S地点の平成14年度分の調査では、X I層を表す。B P第4地点の平成12年度分の調査ではII層下部を表す。

※5 B P第4地点の平成13年度分の調査では、砂礫層(B P第5a地点の3層～5層にあたる)を表す。

第6表 入力用土層記号と基本土層名との対応表

2 整理の方法

(1) 旧石器時代の整理方法

ブロックの認定

発掘時点で「SQ」の遺構記号を付した石器集中区は、複数時期の石器群の集積である場合と単一時期のものである場合が予想される。本報告では平面的な分布のまとまりをブロックとして報告するが、複数時期の石器群の集積を含んでいる可能性がある。個別別資料分類により出土層位に明確な差が生じた場合は平面的に重複する分布を示すものでも別ブロックとして認識したが、層位的に分離できないものについては同一ブロックとして報告する。したがって、ブロックと認識したものには、単一時期に限定される石器群を示しているものと、複数時期の石器群が混在するものがある。石器組成論、石材組成、剥片剥離技術論、分布論的分析などの資料的価値という観点から、以下のA～Cの3段階に分け、その別をできるだけ記述することに努めた。A：同一時期の石器群と認められ分布論的、石材組成論的分析に有効なブロック、B：時期が異なる資料の多少の混入が想定されるが、分布論的分析に有効なブロック、C：複数時期の石器群が混在する可能性があり、分析単位としてあまり有効ではないブロック。

個別別資料分類とブロックの時期の認定

信濃町の旧石器時代の遺跡の包含層は薄い。仲町遺跡では旧石器時代の包含層であるIV～Vc層は約15～60cmと非常に薄く、時期を異にするブロックが層位差をもって明確に分離できる例は少ない。間層をはさんで二つ以上の文化層が分離できる状況は皆無である。しかしながら、異なる時期のブロックでは出土層位の深度に相対的な差があることは経験的に知られている。すなわち、IV層中に生活面をもつ石器群はIII層～Vb層上部まで遺物が分布し、Vb層に生活面をもつ石器群ではIV層～Vc層まで遺物が分布する。二つ以上の時期が異なるブロックが平面的に重複している場合、出土層位によりこれらを分離することは不可能である。これが野尻湖遺跡群の出土層位の実情である。

しかしながら、同一母岩の垂直分布を比較すると、時期が異なる母岩は、相対的に出土層位に上下差が生じる。また、同一母岩資料の出土層位のピークがどこにあるのかを知ることにより、同一母岩資料間の前後関係を明らかにすることができ、平面的に重複するブロックを時期別に分離することが可能になる。仲町遺跡では、同一母岩資料の出土層位を検討することにより、時期差をもつブロックをできるだけ分離して、遺跡の形成過程を明らかにすることに努めた。

方法論的には上記の方法で時期差をもつブロックの分離は可能なのであるが、実際に、出土遺物すべてを母岩別資料に分類する作業を進めると、同一個体の識別が困難な石材がある。無斑晶質安山岩は特徴に乏しく母岩分類が困難であるし、チャートなどは母岩数も多く砕片などは分類不可能なものが多い。黒曜石なども母岩の個体数が多い場合、分類が困難である。同一母岩と分類したものの中に二つ以上の母岩が存在する場合や、別母岩としたものが同一母岩である場合が十分考えられる。事実、無斑晶質安山岩などは風化度の違いで別母岩と分類しているものが接合してしまう例などがある。上記の理由から、同一母岩の分類の信頼度を以下の三段階に分けて記した。信頼度A：石材に特徴があり他の母岩との分別が容易な資料で、同一母岩の可能性が高い資料。信頼度B：Aに比べほかの母岩と分別する特徴に乏しく、若干の別母岩の混入が予想されるもの。信頼度C：分類はしたが、複数の母岩が混在すると予想されるもの。

母岩別資料分類は発掘調査区を7つのセクションに分けて、それぞれの区域内で母岩別に分類し、個体番号を付した。個体番号が3000番以下のものが同一母岩と認識した資料で、10000番台のものは、何らかの理由で分類不能なものや同一母岩の剥片がほかに認められないものを同一石材ごとにまとめたものである。また、石器や大形の素材剥片などでほかに同一母岩と見られる遺物がないものは、単体で遺跡

に持ち込まれた遺物と理解し、個体番号No.20000番台を付した。

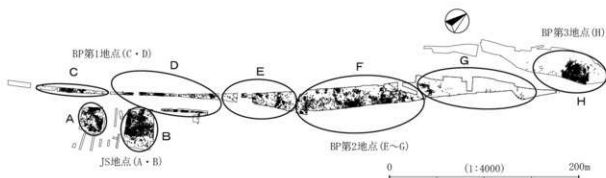
なお、添付したCD-ROMに各個体別資料のカラー写真を収録した。碎片は撮影していないものもあるが、参考にしていただきたい。

石器接合作業

接合作業はブロックが確認されるローム層中の旧石器時代の遺物について実施した。BP第1地点・第2地点は、広範囲にわたりほぼ途切れることなく遺物が出土しているため、便宜的に以下のような接合作業区に区分し、その中で母岩別資料分類と接合を行った(第9図)。図にはBP第4地点が省略されているが、他とは分離した分布域を示しており、他の接合作業区間との接合作業や個別資料の対比は実施していない。また、その他の接合作業区分についても、各区分間相互の個体識別と接合は十分に行えなかった。したがって、異なる接合作業区間の接合関係がないのは、遺跡の特性ではなく、整理作業場の制約によることがある。JS地点とBP第3地点では比較的広範囲を調査しており、接合個体が多い。それ以外の地点では調査区が細長く、ブロック全体を調査していない場合が多く、概して接合資料の数が少ない。ブロック全体を調査していない資料については、接合作業時間も短時間で切り上げているため、接合資料の少なさは、接合作業の時間的な制約も影響していることを付け加えておく。

なお、接合作業の区分はCDに収録した遺物台帳の接合作業区分欄に示した。接合作業区分と個体番号の対応を以下に示す。

個体番号 1 ~ 142・486	作業区分 B (JS 地点)
個体番号 143 ~ 270	作業区分 A (JS 地点)
個体番号 271 ~ 293	作業区分 C (BP 第1 地点)
個体番号 294 ~ 369・480・487	作業区分 D (BP 第1 地点)
個体番号 370 ~ 479・481 ~ 485	作業区分 E (BP 第2 地点)
個体番号 501 ~ 773	作業区分 F (BP 第2 地点)
個体番号 901 ~ 936	作業区分 G (BP 第2 地点)
個体番号 1001 ~ 1070	作業区分 I (BP 第4 地点)
個体番号 2001 ~ 2147	作業区分 H (BP 第3 地点)
個体番号 10000 ~ 10086	全作業区分共通
個体番号 20001 ~ 20170	作業区分 A ~ D (JS 地点・BP 第1 地点)
個体番号 20501 ~ 20735	作業区分 E ~ G (BP 第2 地点)
個体番号 21001 ~ 21098	作業区分 I (BP 第4 地点)
個体番号 22001 ~ 22041	作業区分 H (BP 第3 地点)



第9図 接合作業の地区区分

(2) 縄文時代以降の整理方法（遺物番号と整理番号）

縄文時代の遺物の取り上げ方法は、単点測量により個別の番号を付したものと、層一括などで取り上げたものがある。個別の遺物番号をもつ遺物は注記された遺物番号を整理番号として用いた。縄文時代以降の遺物には包含層一括で取り上げたものがあり、これらについては以下の原則で整理番号を付けて個別の番号とした。

石器はA1・A2・・・、土器はB1・B2・・・、木製品・骨製品はC1・C2・・・と、素材別にアルファベットを先頭に付け、それぞれ通し番号とした。金属製品はこれらとは別個に1番から整理番号を付した。なお、土器は時期により以下のように整理番号を割り振った。

縄文土器	B1～B1000
(B1～520はBP第5d地点、601～はBP第3・第4地点)	
弥生土器	B1001～B2000
古墳時代土師器・須恵器	B2001～B3000
古代土師器・須恵器ほか	B3001～B4000
中世・近世陶磁器ほか	B4001～B5000
土製品	B5001～

3 遺物の収納方法

(1) 旧石器時代の遺物の収納方法

調査区別に個体別資料ごとにまとめて収納した。遺物台帳で石器、石核としたものは別途収納した。礫群の礫はSHの遺構名を付したものは遺構単位で収納し、遺構名を付さないものは調査地区別に層位ごとにテン箱に収納した。

(2) 縄文時代以降の遺物の収納方法

土器・土師器・陶磁器、石器・石製品、木製遺物、金属製品の種類別に収納する。土器・石器・陶磁器類は調査地区別に報告書の分類にしたがって収納し、報告書掲載物は別途収納する。一部の金属製品は、すべての遺物に整理番号を付し整理番号順に収納する。木製遺物は報告書刊行後、保存処理を施し収納予定のため仮収納としている。

詳細はCD収録の遺構収納台帳を参照。

4 石器の器種分類

本書でおこなった旧石器時代の石器の器種分類の基準を示す。石器は石器（製品）、石核、剥片・砕片に区別される。石器（製品）は剥片を素材とする剥片石器と礫そのものを素材とする礫石器に、その下位の概念として素材の縁辺を機能部とする石器、加工部位を機能部とする石器に分けられ、さらに個別の器種に分類される。なお、縄文時代以降の石器の器種分類は、第2章以降の当該箇所に触れる。

(1) 素材の縁辺を機能部とする石器

剥片の鋭い縁辺をそのまま刃部として利用する石器。大きくは基部が作り出されるナイフ形石器、組み合わせが予想される細石器、加工による形状変化が少ない石刃・貝殻状刃器などに分けられる。

ナイフ形石器 剥片の鋭い縁辺を一部に残し、他の縁辺を細部加工した石器。台形石器もこの定義にあてはまるが、全体の形状で尖端を尖らせているものをナイフ形石器とした。

台形石器 剥片の鋭い縁辺を一部に残し、他の縁辺を細部加工した石器のうち、石器長軸（主軸）に直

交もしくは斜交する刃部をもつ石器。基本的にはナイフ形石器の一部と考えるが、特徴的に存在しているため器種を分けた。AT 降灰以前の時期を代表する「台形椽石器」の一部や、AT 降灰以降の「切出形石器」や「台形石器」と呼称されていた石器を含む。

貝殻状刃器 鋭い縁辺と切り立った側縁をもつ石器。「台形椽石器」と呼称されている石器の一部。明瞭な加工は少なく、数回の剥離、折れ面、切断面、打面、素材末端などの切り立った面で1箇以上の側縁が形成される。2次加工のある剥片との区別が難しいが、長幅比が1:1に近く平面形が台形もしくは円形を呈しており、かつ刃部に使用痕と思われる微細剥離が認められるものをこれにした。

石刃 規則的に連続して剥離された、左右側縁が平行する細長い石器。そのものが使用されるほか、ナイフ形石器等の素材となる。連続性、規則性が認められないものは含まない。また、組成表上では稜付き剥片も石刃としている。

(2) 加工部を刃部とする石器

彫器・彫器ブランク 極状剥離によって作り出された彫刻刀面を持つ石器を彫器、彫刻刀面が作り出される前の段階の調整加工のみが見られるものを彫器ブランクとした。

削片 極状剥離によって剥がされた剥片。

搔器 連続する加工により、厚い刃部が作り出されている石器。平面形は円形、拇指状を呈するものが多い。刃部の角度が45度以上のものを搔器、以下のものを削器とし分別することとする。

搔器状石器 加工によって比較的急角度の刃部が作り出されているもので、平面形が円形もしくは台形を呈する。従来「台形椽石器」とよばれていたものの中で、連続する加工による刃部が認められるものをさす。「ウツダイラ型台形石器」(白石 1978)、「立野ヶ原型ナイフ形石器」(麻栖 1986)とよばれていたものの多くがこれに属する。

削器 連続する加工による刃部をもつ石器。形態や加工は様々である。

切入削器 削器のうち刃部がノッチ状になるものをさす。

鋸歯縁状削器 連続する強い加工や平坦な加工により、鋸歯縁状の刃部が作り出されている石器。複数のノッチ部によるベックとよばれている石器などもここに含む。

厚刃搔器 打面や折れ面などの切り立った縁辺から加工を施し、90度に近い角度の刃部が作り出されているもの。

揉錐器 2側縁もしくは1側縁の加工により錐状の先端部が作り出されている石器。

楔形石器 両極打法により、相対する2端に反対方向からの剥離が認められる石器。剥離は加工だけではなく、使用の結果生じた可能性も考えられる。

斧形石器 石器の長軸と平行する2側縁に主として平坦な加工が施され、石器の長軸に直交するような刃部をもつ石器。刃部には研磨が施されるものが多い。従来、「局部磨製石斧」とよばれているものがこれに含まれるが、研磨の認められないものや、用途が木材の伐採以外にもあったと考えられる点から斧形石器という呼称を用いる。剥片ではなく礫を素材とする斧形石器も存在するため、礫石器の範疇に含まれるものがある。刃部研磨部の破片を「斧形石器破片」に、調整剥片を「斧形石器調整剥」とした。

(3) 礫石器

敲石 人為的な敲打痕のある石器。石器製作のためのハンマーと思われる。

凹石 人為的に凹部が作り出されている石器。

磨石 人為的な磨り面を持つ石器。

台石 大形の礫の平坦面に使用痕跡が観察され、台として用いられたと考えられる石器。

礫器 礫の一部に刃が付けられた石器。

(4) 剥片・碎片・石核

2次加工のある剥片 2次加工が認められるが器種名がつけられない石器。製品の破片で、器種名が判別できなかったものが大半を占める。

微細剥離のある剥片 微細な剥離を有する剥片。使用の痕跡の可能性が考えられる。

剥片 石核や原石から意図的に打ち剥がされた石片。

碎片 剥片剥離時や石器の2次加工を行う時に生じる非目的な細かい石屑。剥片との厳密な区別が難しく、本書では1cm以下のものを碎片とした。

石核 剥片が剥離された石塊。

引用・参考文献

- 石塚二侍子・市川桂子・野尻湖人類考古グループ 1997 「信濃町仲町遺跡・立が鼻遺跡の96夏の地質調査」『第9回長野研究石器交流会—発表資料—』
- 小笠原永隆・野尻湖人類考古グループ 1994 「野尻湖周辺の細石刃遺跡群」『野尻湖博物館研究報告』第2号
- 小野 昭 1997 「最終氷期と人類」『野尻湖ナウマンゾウ博物館研究報告』第5号
- 黒坂剛平 1992 『東山道の実証的研究』
- 佐藤雅一 2002 「新潟県津南丘陵における石器群研究の現状と展望—後期旧石器時代から縄文時代草創期に残された活動痕跡—」『先史考古学論集』第11集
- 信濃町教育委員会 2003 『信濃町の遺跡分布図』
- 白石浩之 1978 「西南日本におけるナイフ形石器群終焉期の予察」『神奈川考古』第3号
- 信濃資料刊行会 1956 『信濃史料』第一巻上
- 菅沼亘・野尻湖人類考古グループ 1994 「琵琶島遺跡採集の縄文土器」『野尻湖博物館研究報告』第2号
- 芹沢長介・麻生優 1953 「北信・野尻湖底見の無土器文化（予報）」『考古学雑誌』39-2
- 田中正治郎 2001 「信濃町仲町遺跡の調査（バイパスC地区）」『第13回長野研究石器文化研究交流会—発表資料—』
- 谷和隆・大竹憲昭 2003 「野尻湖遺跡群における石器文化の変遷」『第15回長野研究石器文化研究交流会 シンポジウム「野尻湖遺跡群の旧石器時代編年」—発表資料—』
- 鶴田典昭 2001 「信濃町仲町遺跡の調査（バイパスA地区）」『第13回長野研究石器文化研究交流会—発表資料—』
- 鶴田典昭 2002 「信濃町仲町遺跡の調査」『第14回長野研究石器文化研究交流会—発表資料—』
- 鶴田典昭 2003 「信濃町仲町遺跡の調査」『第15回長野研究石器文化研究交流会—発表資料—』
- 鳥居龍藏 1926 「第四編第一章第一節 有史以前の住民」『野尻湖の研究』田中阿歌麻編
- 長野県埋蔵文化財センターほか 1998 『一般国道18号（野尻バイパス）埋蔵文化財発掘調査報告書 貫ノ木遺跡・西岡A遺跡』
- 長野県埋蔵文化財センターほか 2000a 『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書 15日向林B遺跡・日向林A遺跡・セツ美遺跡・大平遺跡』
- 長野県埋蔵文化財センターほか 2000b 『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書 15裏ノ山遺跡・東裏遺跡・大久保南遺跡・上ノ原遺跡』
- 長野県埋蔵文化財センターほか 2000c 『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書 15貫ノ木遺跡・西岡A遺跡』
- 長野県埋蔵文化財センターほか 2004a 『一般国道18号（野尻バイパス）埋蔵文化財発掘調査報告書 3 貫ノ木遺跡・照月台遺跡』
- 長野県埋蔵文化財センターほか 2004b 『一般国道18号（野尻バイパス）埋蔵文化財発掘調査報告書 4 川久保遺跡』
- 中村由克 1997 「旧石器時代遺跡の分布と立地」『野尻湖ナウマンゾウ博物館研究報告』第5号
- 中村由克 1986 「野尻湖・信濃川中流域の旧石器時代遺跡群と石器石材」『信濃』38-4
- 中村由克 2000 「信濃町仲町遺跡（塚本氏住宅地点）の調査」『第12回長野研究石器交流会—発表資料—』

- 中村由克 2001 『市道遺跡発掘調査報告書』信濃町教育委員会
- 西沢正光・吉松雄一・中村由克 1978 『野尻町水道工事立合調査報告書14』信濃町水道課
- 西山克己 2001 「信濃町仲町遺跡の調査（バイパスB地区）」『第13回長野研究石器文化研究交流会－発表資料－』
- 野尻湖人類考古グループ 1980 「野尻湖周辺の人類遺跡」『地質学論集』第19号 野尻湖周辺の人類遺跡と古環境
- 野尻湖人類考古グループ 1984 「野尻湖立が鼻遺跡における旧石器文化（1981-1983）」『地研専報』27 野尻湖の発掘3
- 野尻湖人類考古グループ 1984 「野尻町遺跡と向新田遺跡の旧石器・縄文草創期文化」『地研専報』27 野尻湖の発掘3
- 野尻湖人類考古グループ 1993 「仲町遺跡 第6回陸上発掘の考古学的成果」『野尻湖博物館研究報告』第1号 野尻湖の発掘6
- 野尻湖人類考古グループ 1994 「野尻湖遺跡群における文化層と旧石器文化」『野尻湖博物館研究報告』第2号
- 野尻湖人類考古グループ 1995 「信濃町・神山北遺跡の分布と旧石器時代遺物」『野尻湖博物館研究報告』第3号
- 野尻湖人類考古グループ 1996 「仲町遺跡 第7回陸上発掘の成果」『野尻湖博物館研究報告』第4号 野尻湖の発掘7
- 野尻湖人類考古グループ 2000 「第8回陸上発掘の考古学的成果」『野尻湖ナウマンゾウ博物館研究報告』第8号 野尻湖の発掘8
- 野尻湖地質グループ 1980 「野尻湖発掘地とその周辺の地質（1976-1978）」『地質学論集』第19号 日本地質学会
- 麻斬一志 1986 「いわゆる立野ヶ原型ナイフ形石器の基礎的整理」『旧石器考古学』33
- 吉松雄一・小林学 1975 「野尻湖畔町裏遺跡の石器について」『長野県考古学会誌』22
- 渡辺哲也・野尻湖人類考古グループ 1995 「野尻町仲町遺跡 第7回野尻湖陸上発掘の成果」『第7回長野研究石器交流会－発表資料－』
- 渡辺哲也・野尻湖人類考古グループ 1999 「信濃町仲町遺跡 第8回野尻湖陸上発掘の成果」『第11回長野研究石器交流会－発表資料－』
- 渡辺哲也 1997 「野尻湖遺跡群のナイフ形石器文化」『野尻湖ナウマンゾウ博物館研究報告』第5号
- 渡辺哲也 2003a 「信濃町教育委員会および野尻湖発掘調査団との対比」『第15回長野研究石器文化研究交流会 シンポジウム「野尻湖遺跡群の旧石器時代編年」－発表資料－』
- 渡辺哲也 2003b 「仲町遺跡発掘調査の概要」『公開シンポジウム 3万年前の仲町丘陵を歩く～仲町遺跡発掘調査の成果の総合化～』

第2章 JS地点・BP第1～3地点の調査

第1節 JS地点の旧石器時代の遺構と遺物

1 調査の概要

除雪ステーション地点（以下JS地点とする）は、除雪ステーション諸施設と食品工場や宅地による、斜面の造成が行われており、旧地形は改変されていた。トレンチによる試掘調査を行い、石器群が分布する範囲を確認し調査範囲を設定した。JS地点の調査区は2箇所に分かれ、それぞれa地区、b地区とする。両地点の間の空白部分は、除雪ステーションの諸施設によりすでに包含層が削平されており、石器群は確認できなかった。しかし、トレンチ調査により、わずかに残された包含層より剥片が2点出土したことから、中間部にブロックが存在したことは確実である。なお、JS地点の南東側の斜面のトレンチ調査では、シルト層などの水成層が確認され、遺物は確認されなかった。

平成12年度～14年度の3回に分けて調査を行い、旧石器時代の遺物6509点が出土した。内訳は石器599点（内16点が接合）、剥片3468点、砕片1644点、礫801点である。調査時には、20箇所の石器集中区を確認し、それぞれSQの遺構記号を付して記録した。これらは複数時期の石器群が重複した結果であり、礫群が上下2層に区分できることから二時期以上の生活面が想定できる。また、国道18号を挟んでBP第1地点と接しており、同一層位から遺物が出土しており、JS地点と関連する石器群がBP第1地点にも含まれる可能性があるが、石材組成や石器群の内容が異なることから、概ねBP第1地点とは区別される石器群と理解した。

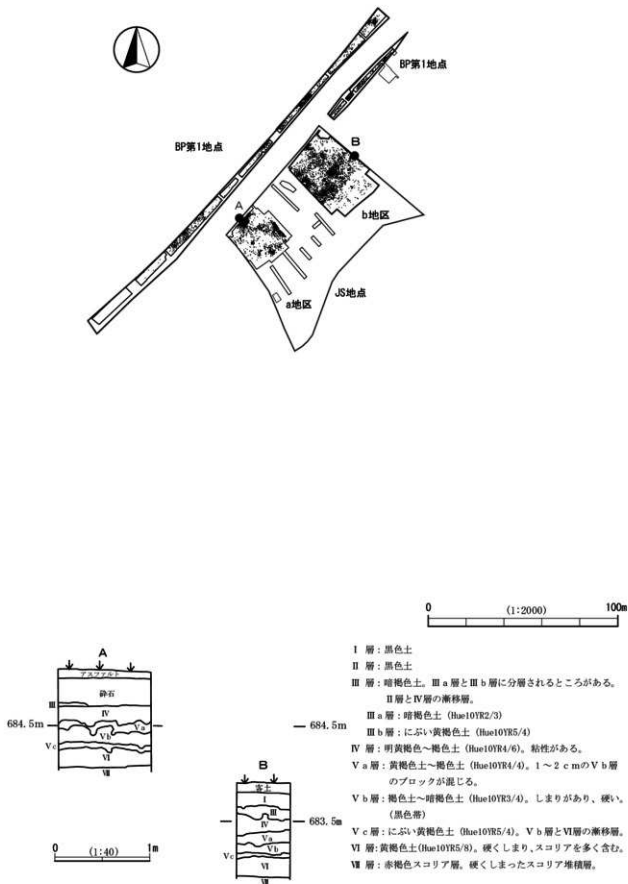
2 調査区周辺の地形と層序

(1) 調査区周辺の地形

第10図に調査区の位置と旧石器時代の遺物分布状況を示した。a地区とb地区はともに仲町丘陵の南東斜面に位置しており、丘陵中央部から小谷に面した緩斜面に遺物が分布する。小谷には小川が流れており、谷底部と遺物が分布する場所の高低差はおよそ30mである。小谷は断層により生じたもので、北東側に開いて野尻湖へとつながっており、JS地点は小谷の谷頭付近にあたる。後出する調査区内の等高線はVb層上面の地形を示しているが、現地形と大きく変わらない。小谷に向かってII層の黒色土の堆積が厚くなる。

(2) 調査区周辺の層序

JS地点の基本層序を第10図に示す。丘陵頂上部付近では表土の下がIII層になり、II層の柏原黒色火山灰層は欠落する。III層まで削られて、砕石が敷かれている範囲もある。旧石器時代の石器群はIII層からVb層に出土するが、III層には縄文時代の遺物もみられ、旧石器時代の本来の遺物包含層はIV層（明黄褐色土）、Va層（黄褐色土）、Vb層（褐色土）である。遺物包含層は国道18号側の方が安定しているが、斜面下方の小谷に面する部分では遺物包含層は薄くなり、IV層からVb層が混在した状況を示し、層序が安定していない。IV層からVb層が混在したものを「IV～V層」とした。地層が安定する国道18号側のある地点では、III層が5cm、IV層が22cm、Va層が12cm、Vb層が16cmであるが、斜面下方では



第10図 JS地点の調査範囲と基本土層

IV層以下の旧石器時代の包含層は10cm以下となる。

石器群はⅢ層からVb層まで連続的に出土しており、個々の遺物の出土層位で時期を区分することは不可能であるが、礫群の出土状況から少なくともIV層中部とVb層上面の二時期の生活面があることが確認できる。なお、遺跡全体の基本層位の詳細は第1章3節3項(2)を参照。

3 遺構と遺物の概要

(1) ブロックの認定

b地区で、礫群が層位差をもって検出されたことから、検出された石器群は二時期以上の文化層が重複していることが予想される。発掘調査では20箇所の旧石器時代の石器集中箇所(SQ201～211・213～221)を認識して調査を進めたが、発掘調査が進むにつれ、集中区の境界が不明瞭になったものなどがあり、整理段階で新たにブロックとして遺物集中部を捉えなおすことにした。学史的には、ブロックとは有意な石器群の分布のまとまりとして提起されたものであるが、仲町遺跡では、複数時期の石器群が平面的に重複する場合があります、層位的にこれらを分離することができない。したがって、ここで捉えたブロックは、必ずしも有意なまとまりにならない場合があります、報告上の便宜的な区分となるブロックもある。しかしながら、石器群に時期差が無く有意な単位と認定できるブロックもある。そこで、以下のようにブロックの資料的価値にランクをつけた。ランクA：同一時期の石器群と認められ、分布論的、石材組成論的分析に有効なブロック。ランクB：時期が異なる資料の多少の混入が想定されるが、分布論的分析に有効なブロック。ランクC：複数時期の石器群が混在する可能性があり、分析単位としてあまり有効ではないブロック、である。以下の報告では、ランクA・Bのブロックについて、その内容に触れることとした。

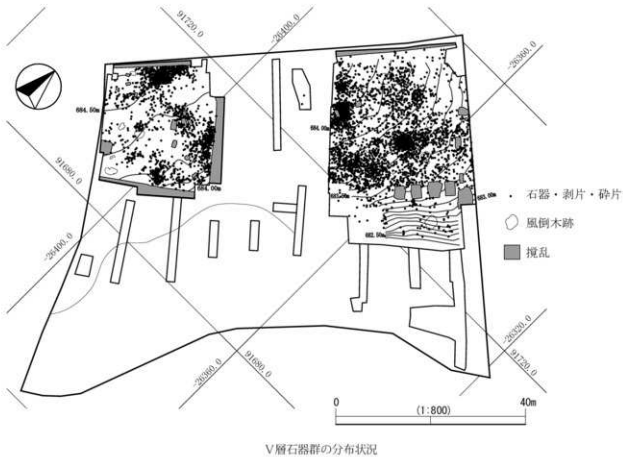
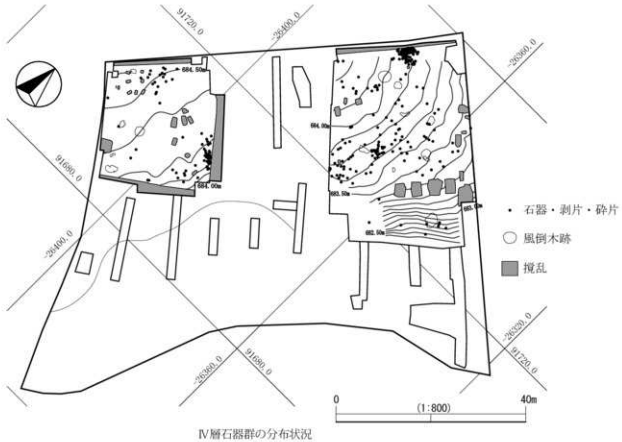
個別別資料と出土層位

ブロックを抽出するにあたり、個別別資料の出土層位頻度を比較することにより、時期差のある石器群を抽出できる場合がある。以下に、JS地点における個別別資料の層位別出土状況を示す。JS地点では272の個別別資料を認識した。この他に単独で遺跡内に持ち込まれたと判断した資料(個別番号が20000番代のもの)が97点存在する。これらの出土層位を検討すると、玉髓(Ag)、無斑晶質安山岩(An)、チャート(Ch)、珪質頁岩(SS)、凝灰質頁岩(TS)、凝灰岩(Tu)はIV層に出土頻度のピークを持つ個別別資料が認められる(第7表)。この他の個別別資料の多くはVa・Vb層に出土頻度のピークがあり^{*)}、JS地点で検出された石器群の多くは、Va層以下に生活面があると考えられる。また、IV層中に生活面を

石材	個別番号	地区	I・II層・攪乱	Ⅲ層	IV層	IV～V層	V層	Va層	Vb層	Vc層
Ag	121	b地区	0	2	0	1		1		
An	41	b地区	2	3	4			1	1	
An	47	b地区	2	5	14			3		
An	49	b地区	0	2	5			3	2	
An	119	b地区	0	1	7			1		
An	120	b地区	0	24	132		1	6	1	
An	242	a地区	0	1	7		7	6	3	1
Ch	21	b地区	1	1	3			2	1	
Ch	84	b地区	0		5			5	2	
Ch	91	b地区	0		4			2	1	
Ch	101	b地区	0		2			2		
Ch	211	a地区	0		7		3	6	1	
Ch	221	a地区	0		3				1	
SS	4	b地区	0	1	11			11	3	
SS	255	a地区	0		3			2		
TS	52	b地区	0	4	2			3		
Tu	248	a地区	0		6		1	3	1	

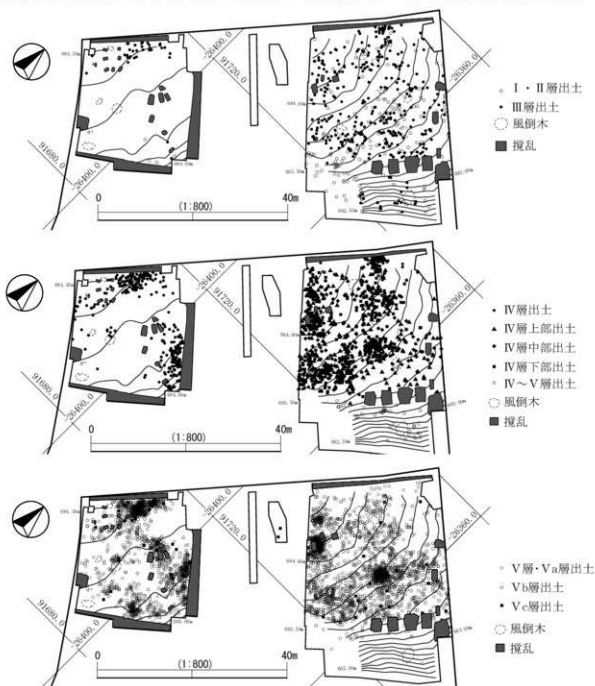
第7表 IV層に出土頻度のピークがある個別別資料一覧

註1 個別別資料の層位別出土点数は一覧表をCDに収録した。



第11図 JS地点の石器群の分布状況

もつと考えられる石器群は、a地区では点数も少なく、b地区に多くみられる傾向にある。このように、JS地点は、IV層に生活面が想定される石器群と、Va層以下に生活面が想定される石器群の二者に分けて遺跡の構造を理解することができる。前者をIV層石器群、後者をV層石器群と仮称する。第7表の個体資料とIV層から単独で出土した石器をIV層石器群、それ以外をV層石器群と仮定し、遺跡の構造を理解する手段とする。個体分類にはあいまいな部分もあり、それぞれの資料が二つの文化層に厳密に分離できるわけではない。個々の資料を検討する場合には、V層石器群としたものの中にIV層石器群と同時期の遺物が含まれていたり、その逆の可能性もあることを承知しておきたい。IV層石器群とV層石器群に分けるのは、あくまで遺跡の構造を理解するための手段であり、個々の石器の編年的な序列の検討を目的とするものではない。第11図に便宜的に二時期に分けた石器群の分布状況を示したが、第12図の層位別の分布とは若干異なった状況を示す。それぞれの平面的分布の集中部分をブロックと認定し、遺構番号を付す



第12図 JS地点層位別石器出土状況

(第13・14図)。

なお、ブロックの認定の資料操作については、「第1章4節2項(1)旧石器時代の整理方法」に詳述した。また、a地区とb地区は、それぞれ独立して個体分類および接合作業を行ったので、両地区間で共有する母岩がある可能性もあるが、時間的制約により、両地区間の個体別資料の十分な照合は行っていない。

(2) 遺構の概要

石器群の分布状況

IV層石器群で9箇所、V層石器群で30箇所のブロックを認識した。第8表と第12～15図に各ブロックの石材および出土層位の概要を示した。出土層位については、IV層では層厚が比較的厚いところでは上・中・下に分けて遺物を取上げ、それ以外ではIV層一括とした。また、V層の下にV層が確認できない場所では「V層」とした。また、斜面部で黄褐色ローム中に暗褐色ロームブロックが混在する層があり、IV層からV層が混在した二次堆積と判断し、取上げ層位は「IV～V層」とした。

なお、黒曜石の産地別の分布状況はBP第1地点と合わせて、第2章2節で触れる。

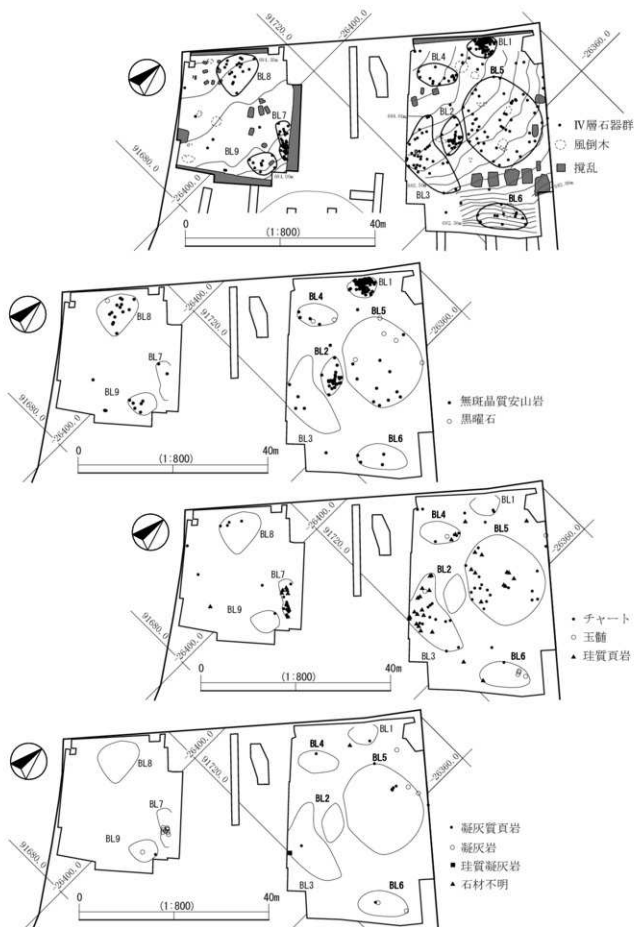
礫群の分布状況

礫は801点出土し、14箇所の礫群を認識した。第16図に重量別および層位別の礫の分布状況を示した。

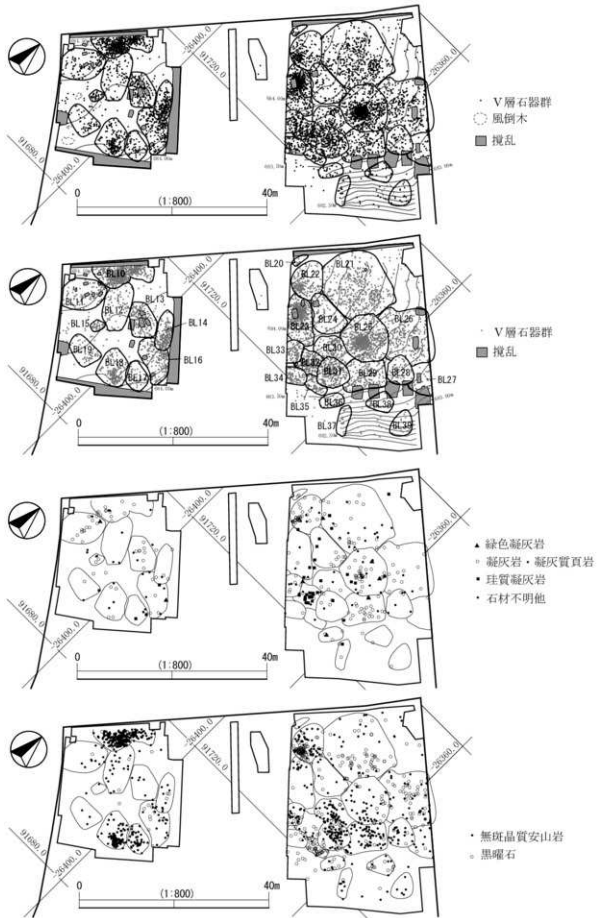
III層出土の礫には縄文時代のものが含まれていると考えられる。JS地点では土器出現期前後の石器群と

遺構名	遺構名													合計		
	黒曜石	無定形質安山岩	珪質流紋岩	珪質凝灰岩	珪質凝灰岩	珪質凝灰岩	珪質凝灰岩	珪質凝灰岩	珪質凝灰岩	珪質凝灰岩	珪質凝灰岩	珪質凝灰岩	珪質凝灰岩			
遺1	172															175
遺2	26															26
遺3	4	17	1	1												35
遺4	2	4	2	1	1											14
遺5	5	11	10		5	2										50
遺6	4	1	4	1	2											13
遺7	2	5			10											35
遺8	1	14														19
遺9	6				1	1										9
遺10	12	256			5	12										3 635
遺11	1	10				13	1	66							2	2 95
遺12	2	17	2					57	1							3 82
遺13	6	5	3	8				126	1						1	2 152
遺14	3	9	2	3	4			181	3						2	1 208
遺15	1							28								2 33
遺16	9	17	2	1	7	4		1 122	14						1	2 185
遺17	39	3	2					6		1						1 3 55
遺18	1	108	6		11	4		47	4	2					2	3 188
遺19	3	3						2								2 53
遺20	1							7	2							10
遺21	54	19	17	3	9	10	11	1	144	4	3		164	2	13	454
遺22	90	43	2	1	4	31	1		36	1						7 216
遺23	2	14	7	2	3	2	1		552	1	1		1	1		3 589
遺24	4	6	3	20	7	1			31				5	1		78
遺25	15	36	17	5	10	17	8	2	660	2	1	9	4	10	796	2 796
遺26	41	33	5		1	10			153	1				1	2 249	2 249
遺27	2	8							2							23
遺28	3	21							22	1			2	5	58	68
遺29	3	61	8	1	7	11	11	1	41				2	3	2 151	2 151
遺30	4	46	1	1	2	2	1		53	2						2 114
遺31	24	69	7	1	2	1	4		118	2	6		16	6	1	257
遺32	5	7	13	16	4				149	2			1	2	5 204	2 204
遺33	11	19	7		2	4	1	1	37	1			16	3	4 106	4 106
遺34	7	2	4						68	4			1	1	1 89	1 89
遺35	35	2							16	1			2	2	1 59	1 59
遺36	5	5	1						3	1	4	1				22
遺37	1	7	1	1					2							14
遺38	11	5	1						7							25
遺39	5								1							15
遺外	15	21	9	2	3	5	1		49	1	1		4	4	115	115

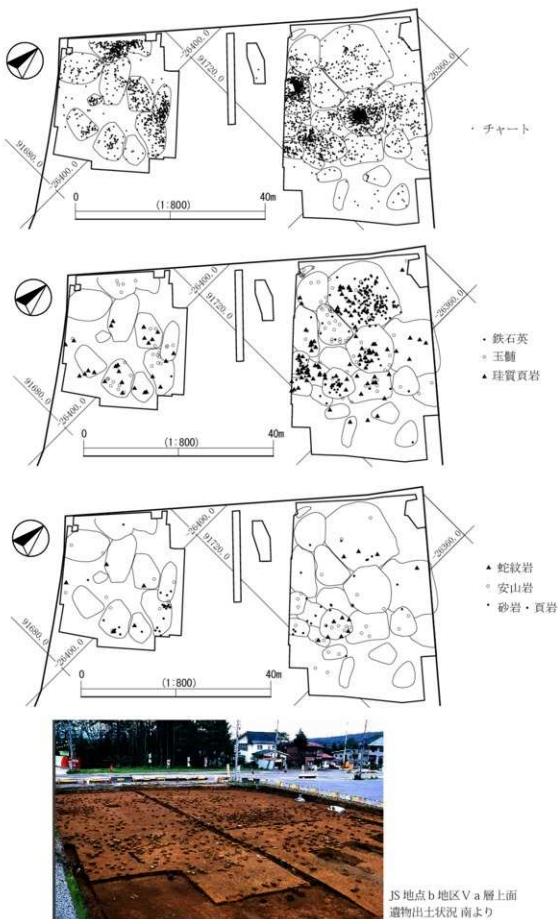
第8表 JS地点のブロック別石材組成と出土層位組成



第13図 JS地点のIV層石器群のブロック



第14図 JS地点のV層石器群のブロック1



第15図 JS地点のV層石器群のブロック2

縄文時代早期から前期の土器・石器が出土しており、これらに伴う礫が存在すると判断できる。なお、これらの土器と石器は第5節に記述する。

旧石器時代の礫群はIV層中に生活面が想定されるもの(SH205～209)と、V a層からV b層上面に生活面が想定されるもの(SH201～204・210～214)とに大別される。さらに後者を細分し3段階の生活面が想定される。詳細は後述するが、それぞれ異なった礫群のあり方を示す。また、V層出土の礫の中には、人頭大の大形の礫が含まれており、敲打痕を有する台石が確認される。

なお、SH209はすべてIII層より出土しているが、赤化した礫が集中しており、礫の大きさと状態が近接するSH206と類似する。出土地点が傾斜地のため層位が不安定であることを考慮すると、SH209はSH206とともに本来IV層にあった礫群と判断した。

炭化物の分布状況

基本土層III層からV b層より多数の炭化物が検出された。炭化物は一定の層厚で5 mm程度掘り下げたときの点数をカウントし、2×2 mの任意のグリッド別に出土点数を記録した。a地区ではV b層上面のみで密度の調査を実施したが、b地区ではIV層上面(III層下面)、V b層上面、V b層中部、V b層下部(V c層上面)で密度の調査を実施した。径5 mm以上の炭化物は、出土位置と層位を記録し、約2000点を採取した。中には1 cmを超える大形のものも含まれる。また、バリノサーヴェー株式会社に業務委託し、炭化物の樹種鑑定を行った。また、V a層出土の炭化物のAMS法による炭素14年代測定を実施(株式会社パレオ・ラボに業務委託)した。BP第2地点の資料とあわせて第9表に示す。なお、分析方法など詳細は添付CDに収録した。

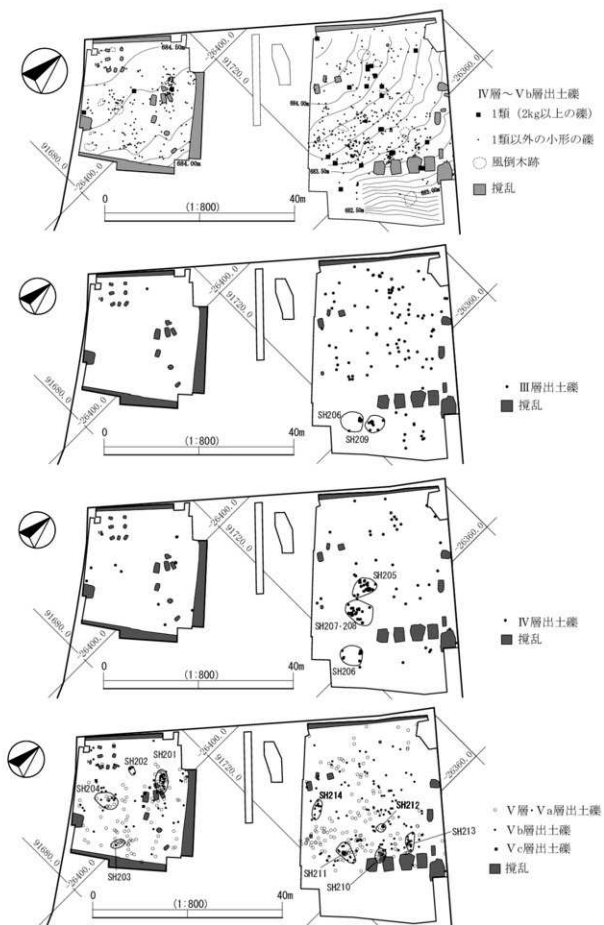
炭化物はb地区のV a・V b層に多く出土した。炭化物の集中部をSFの遺構記号を付して、調査を進めたが、掘り下げるに従い、集中部が変化し、有意な単位をとらえることは困難であった。V層で検出した集中部については、図中に実線で示した集中部は一平面でとらえた集中部を示し、破線で示したものは同一層位に含まれる5 mm以上の炭化物の集中部を示す。同じ炭化物集中部を重複して認識している場合もあるが、調査過程で付した遺構名をそのまま報告する。

なお、SF201はIII層中に焼土が確認されており、縄文時代草創期の遺構である可能性がある。

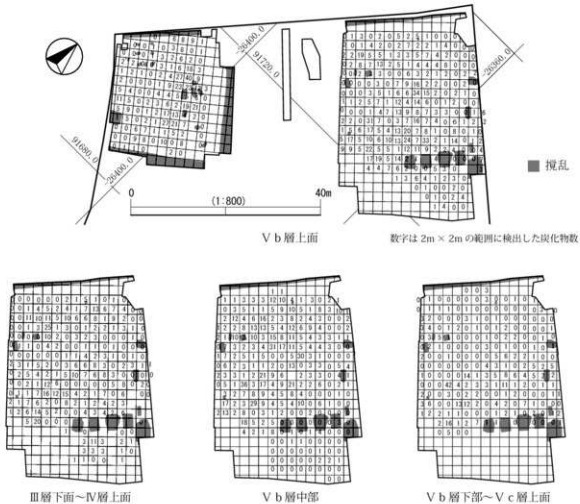
遺構名	SF201	SF233	SF230	SF232	SF306	SF221	SF222	SF223	SF224	SF225	SF226	SF228	SF229	SF234	SF235	SF236	SF239
層位	III・IV上	IV～Vc	Vb	Vb	Vb	Vb・Vc	Vb・Vc	Vb・Vc	Vb・Vc	Vb・Vc	Vb・Vc	Vb・Vc	Vb・Vc	Vb・Vc	Vb・Vc	Vb・Vc	V c
ハンパミ属											1						
コナツ節	32	22	12	11			7	5	26	33	26	32	14	16	15	14	9
クリ		1															1
ニレ属								1			1						
サクラ属		2		2	4			2		1	5	1	2	4			4
ナシ亜科									1			2					2
イヌエンジュ		4	1	1			2		1		2	3	1	1		3	2
キハダ						16											
カエデ属		4	3	2	10		1	2			2		3	2			
エゴノキ属											5						
トネリコ属		1	1			3	8	1	3		14	1	1	1		1	3
広葉樹	1	1	1	2		1		2	1		6	1	1	3			1
種類不明		3							1	1	1	2					1

測定番号 (測定法)	調査地点	試料データ	δ 13CPDB (‰)	14C年代 (yBP ± 1σ)	14C年代を暦年代に較正した年代	
					暦年代較正值	1σ暦年代範囲
PLD-1837 (AMS)	BP第2地点	炭化材(イヌエンジュ) V a層 No.6115	-24.9	29,400 ± 370	****	****
PLD-1838 (AMS)	BP第2地点	炭化材(マツ属種雑木系炭) V a層 No.6123	-25.7	110 ± 70	cal AD 1,700 cal AD 1,815 cal AD 1,880 cal AD 1,950	cal AD 1,720 cal AD 1,830 cal AD 1,915 cal AD 1,950
PLD-1846 (AMS)	JS地点	炭化材(サクラ属) V b層 SF234 No.54786	-25.2	27,820 ± 290	****	****
PLD-1847 (AMS)	JS地点	炭化材(カエデ属) V a層 SF234 No.51804	-25.5	27,360 ± 290	****	****

第9表 樹種同定結果とV a層出土炭化物年代測定結果



第16図 JS地点の磁の分布状況

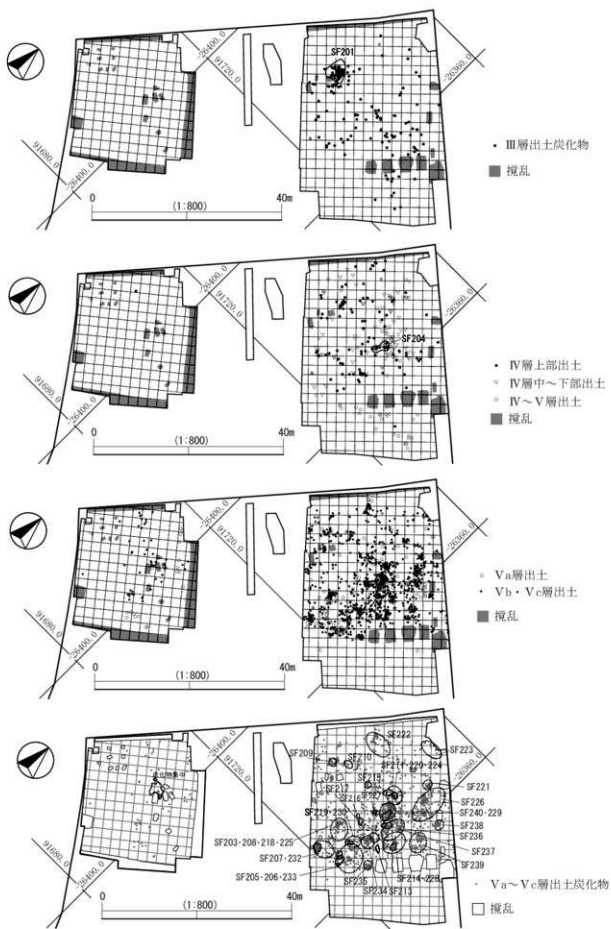


第17図 グリッド別の炭化物検出点数

層位	SF 201	SF 203	SF 204	SF 207	SF 209	SF 211	SF 221	SF 222	SF 223	SF 224	SF 225	SF 226	SF 227	SF 228	SF 229	SF 230	SF 231	SF 232	SF 233	SF 234	SF 235	SF 236	SF 237	SF 238	SF 239	SF 240	遺構外	
	Ⅲ	100	2																									
Ⅳ～Ⅴ																				2								24
Ⅳ																												11
Ⅳ上	20	7	8																									66
Ⅳ中	2																											54
Ⅳ下	1																											48
V a				2																	1							147
V b	2		4	9	8	24	27	14	60	40	76	13	53	29	22	3	20	44	30	15	44	10	8	40	8		608	
V c						2	5	2	6	18	9		6	1					5	2	1				4		65	
V																												5
Ⅵ																												2
Ⅶ																												1
X I																												8

点数は5mm以上の採取した炭化物数

第10表 JS地点層位別炭化物出土数



第18図 サンプリングした炭化物（径5mm以上）の分布

(3) 遺物の概要

器種組成

JS地点では、旧石器時代の包含層が地表下30cmほどで確認されるため、旧石器時代の遺物が縄文時代の包含層に浮き上がっていることが想定される。そこで、Ⅰ～Ⅲ層の遺物については、縄文時代(いわゆる「移行期」を含む)に特有な器種以外は旧石器時代の遺物と仮定して報告をした。Ⅰ～Ⅲ層から出土した剥片・破片や削器・楔形石器などのように、形態上縄文時代のものとの識別が困難な器種には縄文時代のもが含まれている可能性がある。第12表にブロック別器種組成と層別器種組成を示した。

JS地点では、V層石器群が主体を占めており、台形石器、ナイフ形石器、斧形石器などに加えて、楔形石器、台石、敲石など多数出土していることが特筆される。

石材組成

第11表に、JS地点の石材別出土点数を示した。石材組成ではチャート、無斑晶質安山岩が圧倒的に多い。剥片石器の石材別の重量を比較すると、チャート13.006kg、無斑晶質安山岩10.119kg、凝灰質頁岩1.441kg、凝灰岩0.916kg、鉄石英0.898kg、珪質頁岩0.859kg、黒曜石0.771kg、珪質凝灰岩0.601kg、玉髓0.418kg、緑色凝灰岩0.232kg、水晶1.01gの順になる。これらの剥片石器の大半はV層石器群のものであり、V層石器群の石材組成を示すものである。なお、ブロック別の石材組成は第8表に示した。

4 遺構

(1) ブロックおよびブロック間の接合関係(第19・20図、第8・12表)

前述のブロックの資料価値ランクでは、BL1・13・22・25がランクA、BL7・10・14・16～19・21・23がランクB、BL30～35は個々に分離することが困難であるが、総体としてランクB、他はランクCと評価した。

Ⅳ層石器群のBL1～BL9ではBL1・BL7がV層石器群とは明確に分離できるブロックであり、分析に有意な単位と認識した。一方、BL2・BL3・BL4・BL8・BL9はV層石器群の同種の石材と分布範囲が重

石材	塊状石頭器	ナイフ形石器	台形石器	削片	楔形石器	原産地不明石器	抉入石器	挿入石器	原産地不明石器	楔形石器	楔形石器(凝灰岩)	石刀	2次加工のある削片	剥片	砕片	石核	斧形石器	斧形石器(厚部破片)	斧形石器(薄部破片)	砥石	砥石破片	敲石	敲石破片	磨石	凹石	凹石(炭)	台石	台石?	台石	台石破片	台石(丸)	台石(丸)破片	合計	
燧石	1	13	9		2	1	1			8		10	18	191	110	4																	368	
無斑晶質安山岩	3	8	4	1	4		2	1	1	4		15	3	728	351	15																1139		
珪質頁岩		3	2	1	1				2		8		4	5	95	32	4														1	158		
珪質凝灰岩			1		1				1		4		1	2	24	4	2															40		
玉髓		2							2				2	1	72	26	3															108		
凝灰質頁岩		3	1						2		2	1	2	4	127	27	4															173		
凝灰岩				1	1									37	8	2							3	6	2							60		
緑色凝灰岩										1	1		1	3								1	1									8		
チャート		3	2	1	1	1	6	1	2	1	77		35	26	1980	987	116						1									3240		
砂岩														10	2																	44		
凝灰岩														2	2																	17		
水晶														1	1																	2		
鉄石英				7					2				1	158	48	4																220		
安山岩														7																		39		
頁岩														1																		5		
不明														31	47	1	2			1												85		
合計	4	32	26	4	3	8	7	4	11	1	1	104	1	69	61	3467	1645	155	12	1	3	1	1	28	15	14	1	5	1	6	5	8	1	5706

「破片」は全体の形状がわからない小破片、「接破」は欠損した石器に接合したものを示す

第11表 JS地点器種別石材組成

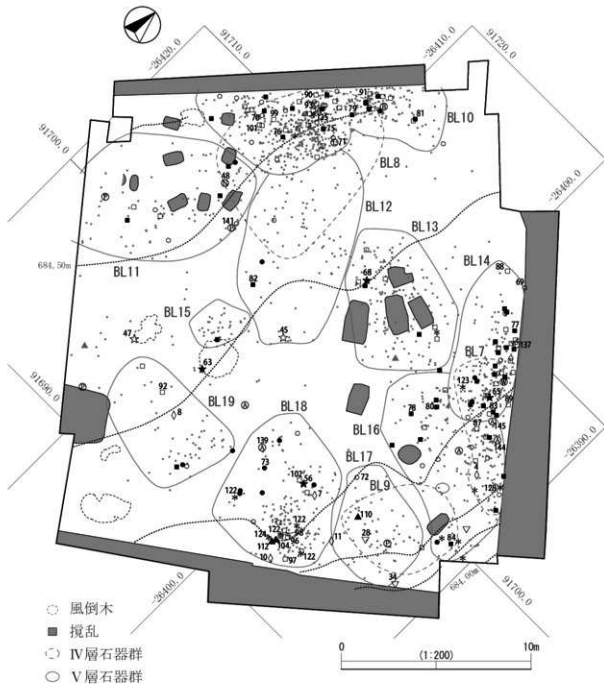
第2章 JS地点・BP第1～第3地点の調査

遺跡名	植生形石器	ナイフ形石器	鋸形石器	鋸片	鋸器状石器	削器	楔形石器	根面縁状削器	杖撞器	楔形石器	石刀	2次加工のある剥片	複数面縁のある剥片	剥片	砕片	石核	片形石器	片形石器刃部破片	風石破片	風石	鋸石	鋸石破片	鋸石接痕	凹石	凹石接痕	臼石	臼石接痕	臼石?	臼石破片	網石	合計				
																																合計			
BL1	2											1	91	80	1															175					
BL2											4	17	4	1																26					
BL3	2				1	1		3			1	25	2																	35					
BL4	5											8	1																	14					
BL5	1	1	1	1			1	3			2	3	30	5	2															50					
BL6												12	1																	13					
BL7	1								2		1	24	6	1																35					
BL8											2	6	10	1																19					
BL9									1			8																		9					
BL10		1							14	1	14	1	334	245	23						2									635					
BL11								1	3		3	1	74	9	2									1	1					95					
BL12						1			1	1	1	63	15																	82					
BL13					1				3			90	51	5			1			1										152					
BL14					1				14		6	1	134	36	12				1	1				1	1					208					
BL15											1	23	8	1																33					
BL16	1								8		5	1	117	43	3					1	1	3					1	1		185					
BL17		2									1	41	8	1	1															55					
BL18	3			1							2	6	120	40	8	2					2	3					1			188					
BL19	1								1		1	1	37	10	2															53					
BL20		1										9	1																		10				
BL21	3	10			1					4		5	299	110	10	1	1					4	4	1	1					455					
BL22	2	3					2					126	81	1					1											216					
BL23											3	1	315	262	7										1					589					
BL24							1		1		1	58	13	4																78					
BL25	3	1	1		3			1	15	1	5	4	386	345	21						4	2	1		1		2			796					
BL26	2	1						5			1	4	181	43	11	1														249					
BL27	2											18	3																	23					
BL28												39	13	1	1	1					1						2			58					
BL29	1							6			3	120	15	4						1							1			151					
BL30								2			5	5	66	31	3						1	1								114					
BL31	2	3	1		5	1	1	2	1	2	2	9	152	50	10	5					3	3				1	4			257					
BL32	1		1					7	4	3	135	44	4								2	1	2							204					
BL33				1				1	2		3	68	24	2							1	1						3		106					
BL34		3	2		6	2	1	3	4		3	2	62	11	3						2	1	2							89					
BL35	1	1			1						2	2	35	15	1	1														59					
BL36								1			2	12	1	1							2	2						1		22					
BL37												14																			14				
BL38	2							1				21		1																	25				
BL39		1										11	1	2																	15				
BL外	1	2	2			1	1	2		1		86	11	3											1		1	1	1	114					
合計	4	32	26	4	3	8	7	4	11	1	1	104	1	1	69	61	3467	1645	155	12	1	3	1	1	28	15	14	1	5	1	6	5	8	1	5706

層位	植生形石器	ナイフ形石器	鋸形石器	鋸片	鋸器状石器	削器	楔形石器	根面縁状削器	杖撞器	楔形石器	石刀	2次加工のある剥片	複数面縁のある剥片	剥片	砕片	石核	片形石器	片形石器刃部破片	風石破片	風石	鋸石	鋸石破片	鋸石接痕	凹石	凹石接痕	臼石	臼石接痕	臼石?	臼石破片	網石	合計				
																																合計			
Ⅰ	1											3	115	21	3																	147			
Ⅱ	1											1	9	1																			12		
Ⅲ												4																					4		
Ⅳ	2	3	3		1	1			5		6	7	273	61	7							1		1					1			371			
Ⅳ~Ⅴ	1							2			12		260	147	9							1	1	3							446				
Ⅳ上	3			1					1			28		4								1										39			
Ⅳ中	1	2	2	2	3			1			1	141	56	3								1	2	1					1			218			
Ⅳ下									9		3	2	192	120	5	1						1										333			
V	5	3	1					1	2		1	5	216	74	7		1					1										318			
Va	2	2		1				1	2	7	166	51	6									2	3	2	1							246			
Vb	4	8	1	2	2	1	4		33		25	29	1023	347	46	3					1	11	5	4	1			4	2	3		1559			
Vc	10	8	2		5	1	4	1	1	37	1	22	6	991	735	65	8	3	1			12	2	2	4	1	2	3	2			1930			
Vd												49	32																				83		
合計	4	32	26	4	3	8	7	4	11	1	1	104	1	1	69	61	3467	1645	155	12	1	3	1	1	28	15	14	1	5	1	6	5	8	1	5706

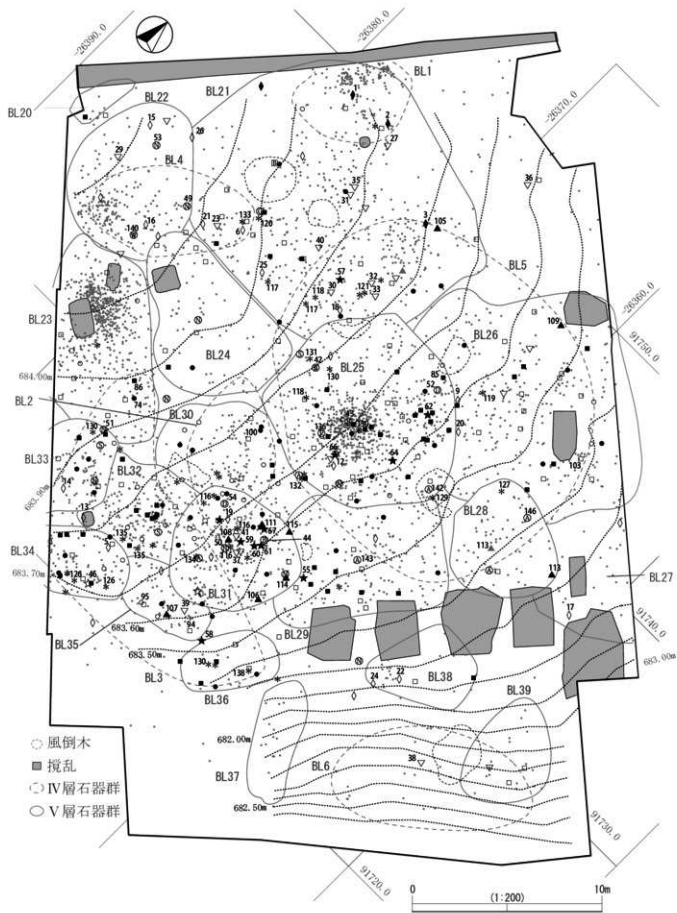
「破片」は全体の形状がわからない小破片、「接痕」は欠損した石器に接合したものを示す

第12表 JS地点の石器組成

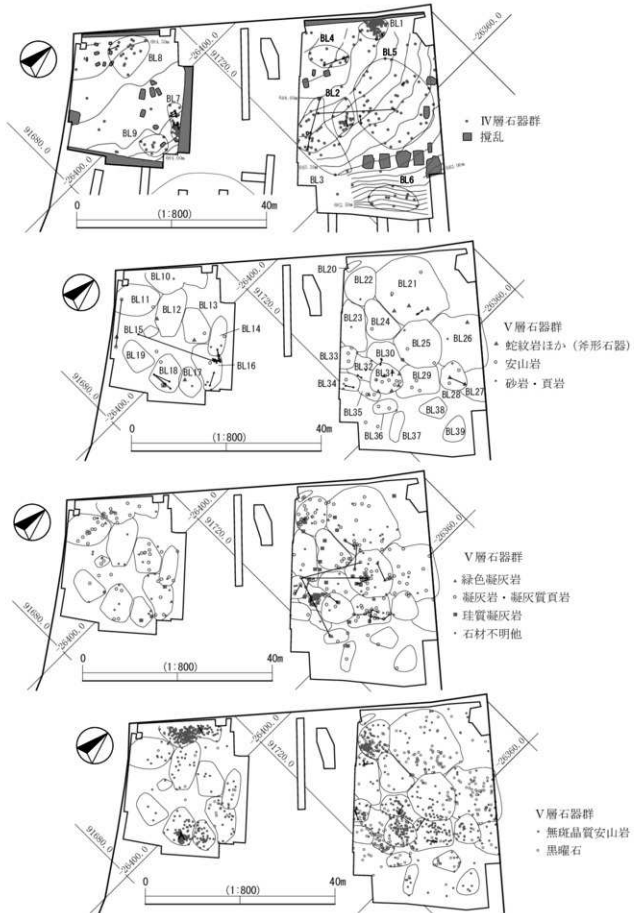


記号	略称	器種	記号	略称	器種	記号	略称	器種	記号	略称	器種
◇	Kn	ナイフ形石器	☆	Sc	削器	●	UF	微細剥離のある剥片	▲	Ax	斧形石器
▽	Tr	台形石器	■	Pe	楔形石器	□	Co	石核	◎	GS	磨石
◎	CF	折新剥片	○	Bl	石刃	×	F1	剥片	⊙	PS	凹石
★	ES ESS	掻器・掻器状石器	○	RF	2次加工のある剥片	•	Ch	砕片	⊗	原石	原石
⊙	KS	扶入削器	⊕	Itr	採掘器	•	SB	貝殻状対器	▲	Ax AE	斧形石器破片 斧形石器調整剥片
◆	礫		↓	Po	橋先形尖頭器	⊠	DS	縦歯状削器	▲	AS	厚片掻器
⊙	Gr	彫器	⊕	Sp	削片	⊕	An	台石	*	Ila	敲石
⊗	RC	細石核	⊗	NB	細石刃	⊠	PT	礫器	⊗	Wh	砥石

第19図 JS地点石a地区石器分布図



第20図 JS地点石b地区石器分布図



第21図 JS地点石器群の接合関係1

第2章 JS地点・BP第1地点の調査



遺構名	HL 10	HL 11	HL 12	HL 13	HL 14	HL 15	HL 16	HL 21	HL 23	HL 24	HL 25	HL 26	HL 27	HL 28	HL 29	HL 30	HL 31	HL 32	HL 34	HL 35	HL 38	接合紐点数	
接合資料番号									17				1										18
6A (チャート)																1	2						3
7A (チャート)																1		1					2
7C (チャート)																1	2	5					8
8A (チャート)																			1				3
18A (チャート)											2									1			7
53A (チャート)								1									1	2	3				2
54A (チャート)												1							1				9
55A (チャート)									1	8			1										2
57B (チャート)								1							1							1	2
57C (チャート)																							2
57D (チャート)												3	1										4
58A (チャート)														1	1								2
66A (チャート)											1						1						2
69A (チャート)											3	1											4
70A (チャート)											2						1						3
86A (チャート)											9					2	10						21
87A (チャート)													2					2					4
87B (チャート)								1					1										2
87C (チャート)													1				1						2
96B (チャート)													1								1		2
102B (チャート)														1	1								2
109A (チャート)																							2
146A (チャート)																							3
174A (チャート)																							2
182A (チャート)		7	2			1	1																9
202A (チャート)						2	1																3
226B (チャート)						1		1															2
10001A (チャート)										2									1				3

第22図 JS地点石器群の接合関係2

複しており、V層石器群と明確には分離できない。特に無斑晶質安山岩は個体識別が困難であり、IV層石器群の抽出に問題を残している。ただしBL2に隣接してIV層中から礫群(SH205・207・208)を検出しており、これらの礫群にかかわるブロックである可能性が高いことを付記しておく。BL6は地層が安定しない斜面にあり、IV層石器群のブロックと断定することはできない。IV層石器群の接合例は少なく、基本的にブロック内の接合である。BL3とBL5間の接合(接合資料4A)はいずれもV層出土のもので、V層石器群の可能性(第21図)。BL3内で比較的距離がある接合例(接合資料4B)もIV層下部出土であり、V層石器群の可能性がある。IV層石器群では明確なブロック間接合は認められない。

BL1は無斑晶質安山岩の槍先形尖頭器の製作にかかわるブロックで、槍先形尖頭器(1・2)と共にポイントブレイクや破片が集中して出土している。遺物の大半はIV層より出土しており、IV層中に生活面があったことは明確である。

BL2は無斑晶質安山岩で構成され、二次加工がある剥片、石核(100)などが出土した。

BL7はチャートと珪質頁岩の剥片・破片とナイフ形石器(4)、二次加工がある剥片、石核(87)、楔形石器(83)が出土した。ナイフ形石器と二次加工がある剥片は単独で持ち込まれた石材資料であり、他の剥片など関連する遺物である確証はない。

V層石器群ではBL10～BL39のブロックを認識した。BL10・13・14・16・18・22・23・25・31～35が特に遺物分布密度が高く、分析上の有意なまとまりを示す。BL15は小規模ではあるが、チャートが集中する。BL21は分布密度は低いが、鉄石英と珪質頁岩が集中している。いずれも分析上有意なまとまりを示す。BL36～39は遺物が疎らで、傾斜部の地層が不安定な場所であり良好な資料ではない。

BL10は安山岩とチャートが主体で構成され、特に分布密度が高い。楔形石器(75・76・79・81)、二次加工がある剥片、石核(90・91・93・101)、敲石(125)などがまとめて出土しており、石刃(71)、彫器なども出土する。石核が一平面より出土しており、これらの石核の出土面(Vb層上部)が生活面と認識した。

BL13は中心部が攪乱されており、多くの遺物が失われている。チャートを主体としており、凝灰質頁岩、珪質頁岩などがわずかに含まれる。搔器状石器(68)、楔形石器、斧形石器破片、石核、敲石が出土した。

BL14・16は明確には分離し得ないブロックである。チャートを主体とし、玉髄、無斑晶質安山岩、黒曜石、凝灰質頁岩などが含まれる。台形石器、搔器状石器(65)、楔形石器(77・78・80)、二次加工のある剥片(69)、石核(88・89)、敲石(123・128)、凹石(137)、台石(144・145)が出土した。BL16に砂岩がまとめて出土しているが、敲石の破片である。さらに、両ブロックからは楔形石器が多数出土しており、台石、凹石、石核も認められる。これらの出土状況から、BL14・16は楔形石器生成にかかわる作



BL14の凹石(137)と石核の出土状況



BL10石核出土状況(Vb層)

業が行われた場であると考えられる。

BL15 はチャートを主体としたブロックで、約2m×2.7mの範囲に遺物が集中する。微細剥離のある剥片、石核が出土したが、剥片類とは同一母岩ではない。

BL18 は無斑晶質安山岩を主体としチャート、玉髄、珪質頁岩などの石材で構成される。無斑晶質安山岩の分布から、BL17との関連が予想される。ナイフ形石器(7・10・11)、挿器(56)、2次加工のある剥片、微細剥離のある剥片(73)、石核(96～98)、斧形石器(104・112)、敲石(122・124)、台石(139)が出土した。

BL21 は鉄石英・チャートが主体となり、黒曜石・珪質頁岩などが多い。特に、鉄石英のまとまりによって認識したブロックである。ナイフ形石器(18・25)、台形石器(23・27・30～33・35・40)、挿器(57)、楔形石器、微細剥離のある剥片、斧形石器(105)、磨石、敲石(117・118・120・121・133)が出土した。

BL22 は黒曜石を主体とし、無斑晶質安山岩、凝灰質頁岩、チャートなどの石材で構成される。ナイフ形石器(15・26)、台形石器(29)、挟入削器(49・53)、砥石(140)、石核が出土した。砥石は、V層中に機能面を下にして出土した。

BL23 はチャートが主体となる。無斑晶質安山岩、珪質頁岩などが少数出土しているが、チャートの分布の中心とは重ならない。分布の中心部には破片も密集する。2次加工のある剥片、微細剥離のある剥片(74)、石核、敲石破片が出土した。

BL25 はチャートを主体とし、無斑晶質安山岩、珪質頁岩、凝灰質頁岩などの石材で構成される。分布の中心部では直径1.6mの範囲に破片が特に密集して分布する。ナイフ形石器(9・20)、台形石器、彫器(43)挿器状石器(62・64・66)、鎌鋸器(52)、楔形石器(85)、2次加工のある剥片、微細剥離のある剥片、石核、凹石・敲石(118・129・130～132・136)、台石(142)が出土した。

BL30～BL35 はチャート、無斑晶質安山岩、黒曜石などが主体をなすが、それぞれを明確に分離することは困難である。チャートは各ブロックをまたいで全体に分布するが、珪質凝灰岩はBL32、無斑晶質安山岩はBL30とBL31、黒曜石はBL35、鉄石英と珪質頁岩はBL31とBL33というようにそれぞれ分布の集中部がずれている。ナイフ形石器(13・19)、台形石器(37・39・41)、彫器(44)、削片、挿器(55・58～61)、挿器状石器(67)、削器、挟入削器(50)、鋸歯縁削器(54)、楔形石器、2次加工のある剥片、微細剥離のある剥片、斧形石器(106～108・111・114・115)、敲石(116・126・130・134・135)、砂岩の台石と台石の破片と思われる安山岩の破片が出土した。BL35・36で出土した斧形石器は比較的まとまった範囲に出土しており、いずれもV層上部で検出された。また、彫器、挿器の中で44・60・61はいずれもIV層上部より出土しており、個体番号43とした無斑晶質安山岩である。個体番号43はIII層・IV層にも出土遺物が多く、時期の異なる2個体を同一個体と誤認した可能性がある。いずれもIV層上部より出土していることから、IV層石器群に属するものである可能性が高い。なお、55の挿器はIII層より出土しているが、接合した剥片がV層より出土していることから、V層石器群と認識した。

V層石器群の接合関係では、凝灰岩・チャート・砂岩・珪質頁岩などでブロックを超えた接合関係が認められる。凝灰岩では敲石(130)、安山岩は凹石、砂岩では敲石の可能性のある剥片が10点接合している。チャートでは91例の接合資料が得られ、ブロック間の接合が26例確認された。第22図にブロック間接合資料のブロック別の出土点数を示した。チャートを主体とするBL25は



BL18 斧形石器出土状況 南東より

BL24・26・29・30・31・34・35との接合関係がみられ、特にBL29・30との間で接合した接合資料番号86Aはブロック間の同時性を示す良好な資料である。同じくチャートを主体とするBL23との接合関係が確認できないことも、ブロック間の同時性を検討するうえで重要な資料である。また、珪質頁岩の剥片がBP第1地点と接合することが確認された。なお、JS地点のa地区とb地区の間での接合関係がみられないのは、両地区間での接合作業が十分に行えなかったためであり、藪石などに類似した石材の破片がみられるなど、両地区間の何らかの関わりが十分予想される。BP第1地点を含めた接合関係の確認作業が今後に残された課題である。

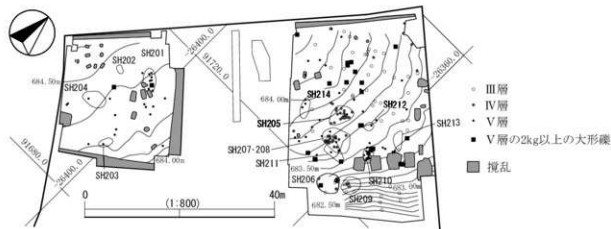
(2) 礫群および配石

礫には、黄褐色や赤褐色に変色したものが多くみられ、赤褐色の変化の度合いを3段階に分類した(台帳の赤化状況)。すなわち、「強」、「弱」、「無」の3段階で、「強」は焼けて変色したもので表面が赤褐色のもの、「弱」はわずかに赤褐色または黄褐色に変色したもので、焼けているか風化による変色が判断がつかないもの、「無」は変色が認められないものである。発掘調査では、3cm大以上のすべての礫をサンプリングしたが、遺物以外の礫が含まれることも確認されている。また、遺物包含層の下層には輝石安山岩の礫を含んでおり、これらが巻き上がることも想定される。第23図は、赤化状況が「強」およびタール状の黒色付着物がみられる礫の分布状況である。すなわち、明確な使用の痕跡が認められるものである。ただし、大形の礫については、必ずしも明確な使用の痕跡は認められないものも含む。

礫には破損したものも多い。a・b各調査区ごとに接合作業をおこない、29例の接合資料を確認したが、礫群間での接合はSH201とSH202との1点のみで、他は同じ礫群内での接合である。また、赤化した礫の破損面を観察したが、破損後の再利用を示すような欠損面の赤化が認められるものがわずかに存在する。個別の礫の属性については、添付CDの礫台帳を参照していただきたい。なお、欠損した礫の法量について、残存値を測定したものと、欠損部分は測定していない場合とがあり、測定方法に不統一が生じている。

JS地点の礫群は、IV層とV a・V b層との少なくとも二時期の礫群が存在する。さらに、後者はV a層中に出土する礫群と、V b層上部からV a層にかけて出土する礫群とに区分することが可能である。すなわち、以下のような遺跡形成の段階が設定できる。

- I 段階 出土層位はIV層。顕著に赤化した拳大の礫が密集して出土する。(SH205～SH208)
- II 段階 出土層位はV a層。I段階のものに比べ小形の礫で、黒色付着物が顕著である。(SH210)
- III 段階 出土層位はV a～V b層上部。赤化や付着物が見られるが、I・II段階ほど顕著ではない。大形の礫が点在する。(SH201～SH204・SH209・SH211～SH213・配石1)



第23図 JS地点 明確な使用痕跡がある礫の分布

SH201

V a層からV b層にかけて検出された。比較的分布密度が高い範囲は、1.3 m × 4.6 mの長楕円形内に
おさまる。礫の分布は、さらに広がっており、3m × 8mの楕円形の範囲に49点の礫が出土した。赤化
した礫は7点、タール状の黒色付着物が認められるのものが5点含まれているが、明確に被熱礫といえ
るものは少数である。礫は2 cm大から5 cm大のものであるが、1点だけ人頭大の赤化した大形の礫が含
まれる。石材は輝石安山岩または角閃石安山岩（以後両石材を総称して輝石安山岩系とする）である。

SH202

わずかに赤化した、輝石安山岩系の礫が5点まとまって出土した。いずれもV b層より出土しており、
SH201との接合例が確認された。

SH203

9点の礫が含まれる。V a層より出土したものが多いが、SH203 周辺はV b層が薄くほとんどみられ
ないことから、本来はV b層中に含まれていたと想定される。黒色付着物がある礫が多い。また、周辺
のV層中にも礫が散布しており、赤化したものも認められる。SQ202・203として取上げられた礫で、い
ずれもV層より出土しており、関連した遺物の可能性がある。いずれも輝石安山岩系の石材を用いている。

SH204

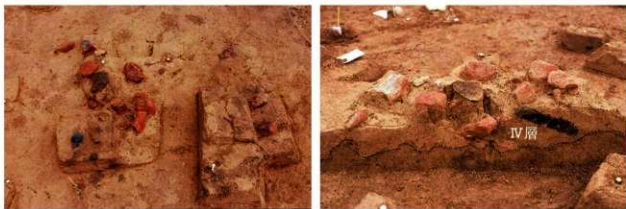
11点の礫が含まれる。V a層より出土したものが多い。表面の赤化は弱く明確ではないが、暗褐色も
しくは黒色の付着物がある。

SH205～SH209（第24図）

SH205には69点の礫が含まれる。輝石安山岩系の石材である。21点の接合資料があるので、本来の
個体数は40点前後である。IV層上部から中部にかけて出土し、50 cm × 70 cmほどの範囲に折り重なるよ
うに出土した。礫は拳大のものが多く、ほとんどが表面が赤化しており、タール状の黒色付着物が認めら
れるものがある。被熱により割れた礫も含まれ、中には欠損面が赤化したものがある。V a層より出土し
た礫が数点あるが、赤化状況がIV層のものより異なっており、時期が異なる可能性が高い。

SH206とSH209は、調査工程上それぞれ別の遺構と認識していたが、本来ひとつの遺構としてとらえ
られる。当初SH209は縄文時代の遺構としていたため、出土状況の記録がなく、SH206のみを図示して
いる。斜面部で地層が安定していないため、礫の高低差がSH205などに比べ大きい。30点の礫が含まれ、
ほとんどが赤化しており、タール状の黒色付着物がみられるものがある。III層およびIV～V層（IV層とV
層が二次堆積した層）より出土する。被熱により割れた礫も含まれ、中には欠損面が赤化したものが認め
られる。

SH207と208とは1.7mほどの距離を置いている。両者に接合関係はないが、中間部にわずかに礫が



SH207 検出状況と地層断面

分布しており、出土面も一致していることから、本来同一の遺構と考えられる。54点の礫が含まれ、Ⅲ層からⅤa層にかけて出土するが、Ⅳ層中部から下部のものが主体である。大半が赤化しており、被熱により割れた後に、さらに欠損面が赤化した例がある。タール状の黒色付着物もみられる。

SH205～209は、礫の大きさ、石材、赤化や付着物の状況が類似しており、出土層位からも同時期のものと判断できる。各遺構間の礫の接合は認められなかった。

SH210 (第25図)

23点の礫が含まれる。大半がⅤa層の一定した平坦面に検出された。すべて輝石安山岩系の石材で、径5cm前後、厚さ1～2cmの扁平な垂角礫が多く、小形の礫を選択したように感じられる。多くの礫は、表面は赤化し、タール状の黒色付着物が顕著に認められる。SH210の北西側に大形の礫が4点出土した。SH210の小形礫に比べ下位のⅤb層上面より出土したことから、時期の異なるものであると判断した。143は輝石安山岩の台石で、被熱による赤化と表面の剥落が認められる。同じような痕跡をもつ礫が、SH213の近くで出土している(遺物番号5253)。

SH211 (第25図)

29点の礫が含まれる。大半がⅤb層上面の一定の平坦面で検出された。集中部より出土した礫はやや高い位置に出土しており、すべて輝石安山岩系の石材で、SH205～209のように顕著に赤化したものはなく、赤化状況「弱」または「無」である。タール状の付着物が認められる礫がある。

SH212 (第26図)

8点の礫が含まれる。Ⅴa層～Ⅴb層上面に検出され、赤化状況「弱」または「無」で、付着物も認められない。すべて輝石安山岩系の石材である。

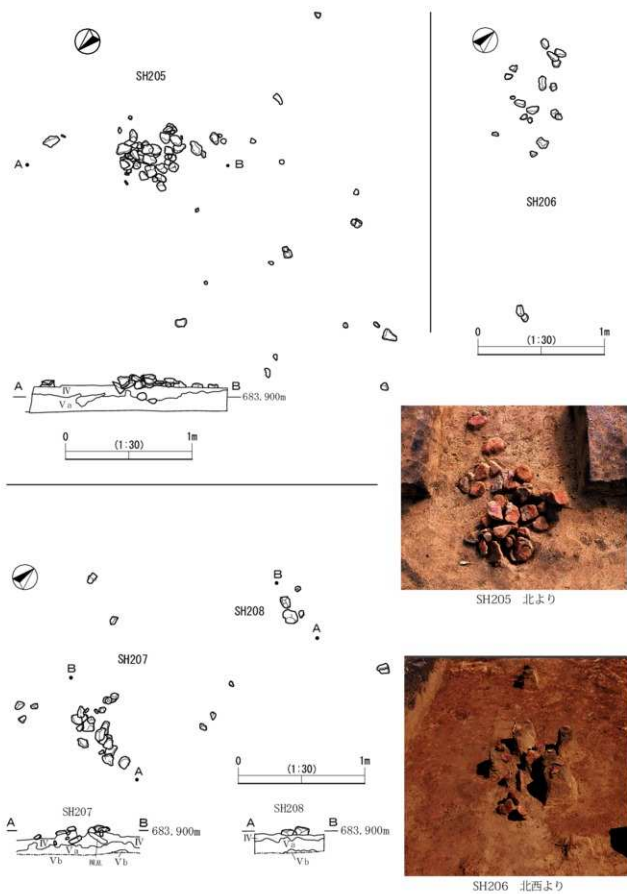
SH213 (第26図)

14点の礫が含まれる。すべてⅤb層の一定した平坦面で検出された。赤化状況「弱」または「無」で、付着物も認められない。すべて輝石安山岩系の石材である。SH213の北側と東側には大形の礫が分布し、出土層位から同一時期のものである可能性が高い。SH210の北西側にみられた大形の礫と同一層位で、これらも含めて同じ時期のものであると判断した。遺物番号52539は22×16.2×13cm、重さ6kgで被熱による赤化と表面の剥落が認められ、平坦面にはわずかな敲打痕がある。遺物番号51937は平坦面にわずかな敲打痕が認められ、河原礫の自然面を有しており、他の大形の礫とは異なる石材である。いずれも台石と分類した。

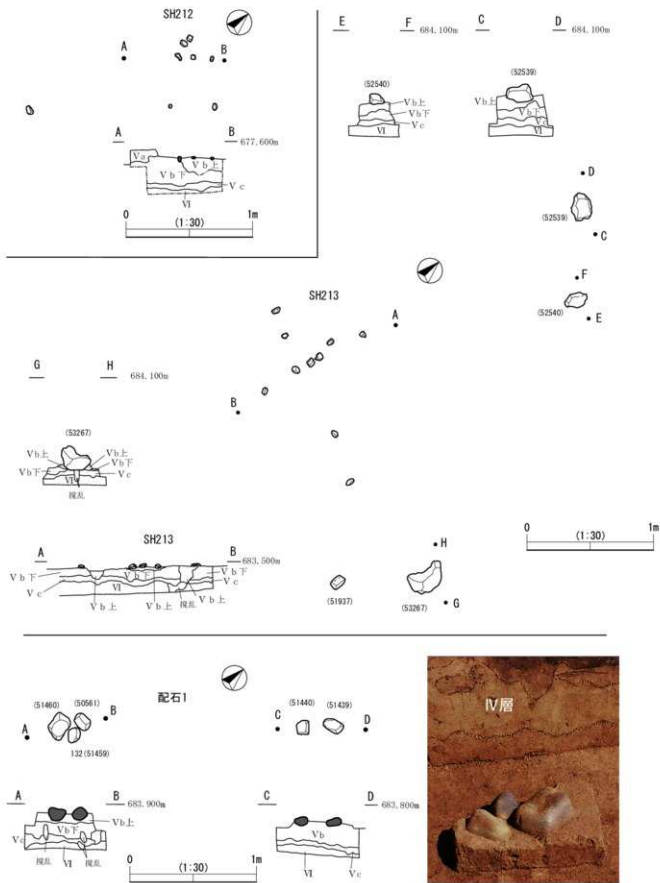
配石1 (第26図)

Ⅴb層上部に大形の礫がまとまって出土した。3点と2点がそれぞれまとまって、1.6mの間隔で検出され、前者は敲石(132と遺物番号50561)と台石(遺物番号51460)、後者は礫である。敲石は輝石安山岩と玄武岩質の安山岩、台石は砂岩である。いずれも河床で得られる円礫を用いており、同一層位で出土する大形の礫とは異なる素材を用いている。敲石は複数面に線状または痘痕状の敲打痕がみられ、台石はやや窪んだ面の表面が部分的に剥落しているが、敲打痕であるかどうか不明である。台石は19.6×15.6×9.8cm、敲石はそれぞれ13.0×10.9×9.9cm、11.3×9.6×7.7cmである。

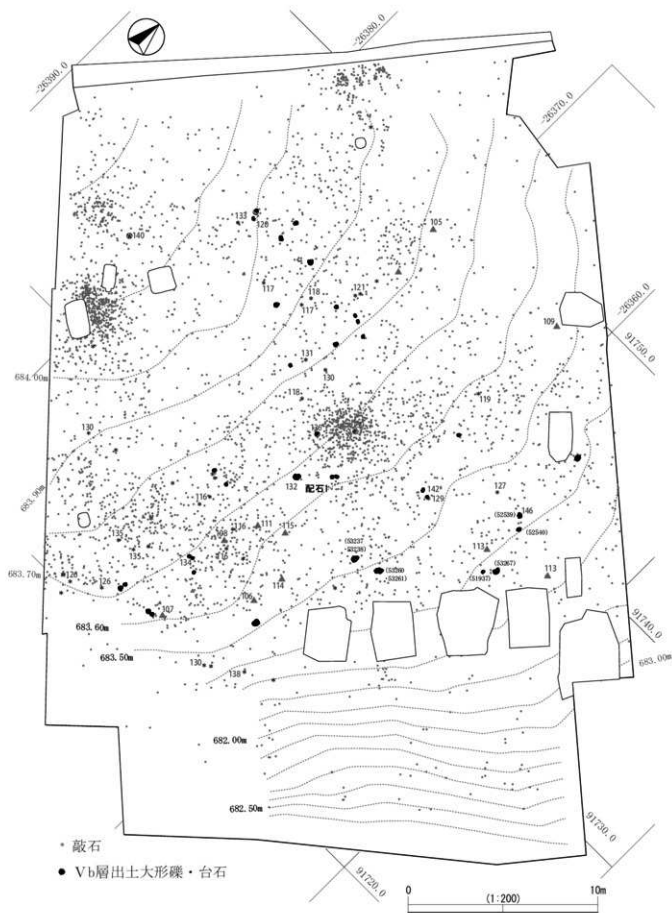
JS地点b地区ではⅤb層中部から上部にかけて大形の礫が多数検出され、その中には敲打痕を有する台石が含まれる。これらの出土層位は、大部分の斧形石器と一致しており、同一時期に残された遺物と判断できる出土状況を示す。第27図にⅤb層出土の大形礫と礫石器の分布状況を示す。



第24図 JS地点礫群1 (SH205～SH208)



第26図 JS地点群・配石 (SH212・213・配石1)



第27図 JS地点石器群と大形礫および台石の分布

5 出土遺物

(1) 石器 (第28～53図、PL2～8)

剥片石器、礫石器が594点出土した。器種組成と石材組成を第11・12表に示した。

1. 槍先形尖頭器 (1～3)

4点の槍先形尖頭器が出土した。無斑品質安山岩3点、黒曜石1点で、前者はBL1の近辺に分布する。

1は先端部が欠損し、槌状剥離がみられる。2は図の下端部が欠損しており、上部が基部であるかもしれない。もう1点の無斑品質安山岩製のもの、小破片で削器の可能性もある。3は表裏両面の稜上に、装着痕と思われる磨耗が認められる。

2. ナイフ形石器 (4～22・24～26)

32点が出土した。黒曜石が13点で、石器群全体の石材組成と比べると黒曜石の比率が高い。個別別資料の分析から、4～6・8・10・11・21は同一母岩資料がなく、単独で遺跡内に持ち込まれた石器と判断した。ただし、無斑品質安山岩については個体識別にあいまいな部分があり、単独で持ち込まれたものか否かの判断は難しい。

4・13・18・21・25はⅢ層およびⅣ層上部より出土しており、他はⅣ層下部からⅤb層に出土したものである。6～9は二側縁に明確なブランディングがあり、6と7、8と9とがそれぞれ類似した属性を示す。8・9は表裏両面より加工がある。このような対向調整は13・20・24にも認められるが、13・20は素材の用い方、加工部位などが異なる。ただし、24の加工部の状態は8・9と類似している。7・8は基部端部が欠損している。10は一側縁に鋸歯縁状の加工がある。11・15は横長の剥片を素材とし、わずかな加工がみられるのみである。12・14・16は縦長の剥片を用い、一側縁のみに加工がある。12・16には打面が残され、14は折れにより打面が失われている。18は打面を残した貝殻状の剥片を用い、一側縁に加工がみられる。20の左側縁にも同様な加工がある。打面部を対向調整している点は異なるが、素材の用い方、石材など18との共通要素がある。20の背面はボジ面または自然面である。19は一側縁がヒンジフレクターで折れ面のような形状を示している。加工部は平坦剥離で23と共通するため、台形石器と分類すべきかもしれない。21・22・25・26は一または二側縁に加工があり、打面を残す。

3. 台形石器 (23・27～41)

26点出土した。黒曜石と鉄石英が多い。鉄石英は台形石器と挟入削器のみに用いられており、JS地点の台形石器を特徴づける石材である。個別別資料分析から、23・28・34・37は同一母岩が確認されず、単独で遺跡に持ち込まれた石器と判断したが、無斑品質安山岩については個体識別にあいまいな部分があり、単独で持ち込まれたものか否かの判断は難しい。また、30～33・35・40は同一母岩と認識した資料である(個体番号2)。

台形石器にはブランディングによる加工と平坦剥離による加工がみられる。23・41は平坦剥離がみられ、他はいずれもブランディングによる加工である。基部に対して刃部が大きく広がる形態(27～37)と、基部と刃部の幅が変わらない形態(23・38・39)の二者がある。また、32・38は折れ面を側縁とする。41は剥片が1点接合した状態のものを図化した。なお、図化できなかったものも多く、それらは写真図版に掲載した。

4. 彫器 (42～44)

4点出土した。42は珪質頁岩で、個別別資料分析から、単独で遺跡に持ち込まれた石器と判断した。正面図の上部と右側縁の挟入部には微細な剥離が認められる。43は左側縁と下縁を彫り面としたが、下縁部のは主剥離面より古いかもしれない。この他に、削片が3点出土している。

5. 削器 (45～47)

4点出土した。45・47は個別別資料分析により、単独で遺跡に持ち込まれた石器と判断した。

45～47はいずれも打面を残しており、剥片素材の形状を保持している。47の加工は主剥離面との角度が大きく、ブランディングともいえるものであり、ナイフ形石器と分類すべきかもしれない。

6. 挟入削器 (48～51・53)

11点出土した。図示したものはいずれも遺跡内に同一母岩があると認識した。石材は多様であるが、黒曜石・無斑晶質安山岩は無い。V a層・V b層出土のものが多い。

48は正面図上部の挟入部には微細な剥離痕が見られる。49は左側面、50は右側面、51は下端、53は右側縁に挟入部があり、いずれも打面を残している。49・51などは他に比べ挟入部の幅が狭く、図示しなかった中にも同類のものが認められる。これらはいずれもV a層・V b層から出土している。51はIV層石器群とした個体番号4の資料であるが、個体番号4には2時期にわたる別個体のものを一括してしまった可能性がある。

7. 鋸歯縁状削器 (54)

1点出土。安山岩製である。

8. 掻器 (55～61)

8点出土。無斑晶質安山岩が多く、BL31に多く出土している。個別別資料分析により、57～59は単独で遺跡に持ち込まれたものと判断した。

55の正面図右側面は折れ面で、V b層から出土した剥片と折れ面で接合する。刃部は折れた後に作出していることがわかる。56・57は縦長の剥片の短辺に刃部加工があり、いずれも打面を残す。56は73の微細剥離のある剥片と接合する。

59～61は厚い剥片を素材とし、類似した刃部加工が施されている。60・61は同一個体（個体番号43）と判断したもので、いずれもIV層上部より出土している。これらの掻器はIV層石器群に含めておきたい。

9. 掻器状石器 (62～67)

7点出土。チャート6点、黒曜石1点である。いずれもV a層・V b層より出土しており、厚手の掻器の一群（59～61）とは、明らかに時期が異なる。

64は欠損しているが、他は完形であり、いずれも小形の剥片の一端にブランディング状の加工が認められる。

10. 石刃 (71)

1点出土。71は凝灰質頁岩製で表面の風化が著しく、調整加工や微細剥離などの観察は困難である。打面を残す。JS地点では石刃石核は確認されていない。

11. 2次加工のある剥片 (69・70・72)

69点出土。チャート、無斑晶質安山岩、黒曜石が多い。個別別資料分析により、単独で遺跡に持ち込まれたと認識した石器が12点ある。接合関係がある資料は6点である。

69・70は主剥離面に大きな平坦剥離を施しており、BP第1地点で挟入削器としたものに類似する資料がある。72は正面図左側縁にブランディング状の加工がわずかにある。裏面の上部部に自然面があり、ナイフ形石器（14）などと同類の石器である可能性もある。

13. 微細剥離のある剥片 (73・74)

61点出土。チャートと黒曜石が多い。接合資料が3例あり、73は掻器（56）と接合する。個別別資料分析により、単独で遺跡に持ち込まれたと認識した石器が15点ある。

14. 楔形石器 (75～86)

両極打法による、上下端部に稜上のつぶれが認められるものをすべて楔形石器とした。105点出土。チャートが77点と圧倒的に多く、ついで黒曜石・珪質頁岩などがみられる。個別別資料分析で、単独で遺跡に持ち込まれた石器と判断したものが9点ある(81・84)。他の器種に比べて単独搬入石器の割合が少なく、ブロック全体を調査していない状況を考えると、剥片剥離と両極打法による作業が一連のものとして遺跡内で行われた、と解釈するのが妥当であろう。また、ブロック別では、BL10・14・25・32で多く出土しており、これらのブロックでは敲石・凹石・台石が出土している。これ以外のブロックにおいても敲石と楔形石器の相関が強い。

83の左右側縁は折れ面で、いずれも両極打法により破損したものである。折れ面に接合する剥片がある(接合資料255A)。

15. 石核 (88～103)

155点出土した。チャートが116点と多く、ついで無斑晶質安山岩15点で他の石材は少ない。ブロック別の点数では、BL10・14・21・25・31などから多く出土しており、楔形石器が多いブロックに石核が多い傾向にはあるが、必ずしも一致しているわけではない。調査区内に同一母岩の剥片が認められない石核が28点確認された(87～89・91・100・103)。ただし、無斑晶質安山岩、チャートについては剥片資料数が膨大であるため、同一個体の剥片を見逃している可能性は否定できない。接合する剥片が確認された石核は、37例ある(90・98)。

88～93は鶏卵大の河原礫を用いている。87・91は剥離面を打面としながら打面転移をしている。ただし、他の石核に比べ小形で、抉入割器に類似する抉入部を有しており、石器であるかも知れない。88・89は自然面を打面とし、打面転移は行わない。90は3点が接合した状態であるが、剥片剥離ではなく、砕け散った状態を示している。92は平坦な剥離面を打面とし、貝殻状剥片を作出している。93は摺面で砕けており、良好な剥片素材は得られていない。94は打面転移を繰り返すサイコロ状の石核である。95は分割面を打面としており、自然面を残している。96・97は剥片素材でボジ面を有しており、裏面に自然面が残る。96は縦長の石刃状の剥片が作出され、97では貝殻状剥片が作出されている。98は打面調整剥片が接合するが、打面転移はない。99・101は板状の厚い剥片の表裏面より剥片剥離が行われる。100は扁平な板状の楕円礫の自然面を打面とし貝殻状剥片を作出している。102は剥片素材の石核である。103は23.1×18.0×8.4cm、重さ3.43kgと大形で、中央部に分割面が残っている。自然面を打面とし大形の剥片を作出している。剥離面を下にして出土した。

16. 斧形石器 (104～113)

小破片を合わせて16点が出土した。形状が判別できるものはすべて図示した。これらの他に刃部破片1点と剥片状の小破片が2点出土した。105・113以外はすべて蛇紋岩であるが、色調、風化の度合いなどそれぞれ異なる。蛇紋岩の剥片・破片が4点出土したが、いずれも小片で斧形石器の製作にかかわる資料とは言い難い。斧形石器用と考えられる砥石が1点出土しているが、調査区内では、斧形石器製作の剥片剥離工程に関わる資料は出土していない。製品では、105以外はV a層からV b層にかけて出土し、BL18とBL31およびその周辺にまとまっている。

104は片面に残された自然面に研磨痕がわずかにあるように観察されるが、研磨による線状痕は不明確である。裏面の一部に磨耗痕がみられる。105は片面に自然面を残し、表裏面に研磨痕があるが、研磨の方向は観察できない。106は片面自然面の表現をしているが、両面が剥離面であるようにも観察され、自然面の有無は判断できない。両面とも研磨痕は顕著で、研磨による線状痕も明瞭に観察され、研磨による稜が形成されている。全体に凸部の磨耗が認められる。107は表裏面に研磨による線状痕が明

瞭に観察され、全体に凸部の磨耗が認められる。108は両面に自然面があり、扁平な楕円礫を用いていることがわかる。明確な研磨痕は観察できない。基部端部に敲打痕がある。刃部の剥離痕にはわずかに磨耗痕が認められる。109は研磨による鋭い刃部を作出しているが、研磨による線状痕はわずかに観察される程度で明確でない。刃部付近の剥離面の凸部に磨耗痕がみられる。109は114と同質の石材である。110は研磨痕・磨耗痕は認められない。111は片面に自然面を残す。研磨痕は認められないが、両面の剥離面の凸部が全体に磨耗している。刃部の作出は明瞭ではなく、基部との区別が不明確である。112は蛇紋岩としているが、他とは異なった石質である。裏面のわずかな研磨面の存在から、刃部を欠損したものと判断した。片面に自然面があり、周辺部の調整加工などは縄文時代の打製石斧と区別できない。113は自然礫の形状をそのまま利用している。研磨により鋭い刃部が作出されているが、研磨による線状痕は明瞭でない。側縁部の調整加工は基部の欠損部には及んでいないが、調整加工を行っている時に欠損した可能性もある。基部端部の敲打痕は108と共通した使用形態を連想させる。基部と刃部はいずれもBL28より出土しているが、約3.5mの距離を置いて出土した。

17. 砥石 (140)

2点出土した。いずれも同質の砂岩であるが、1点は1gに満たない小破片である。140は14.3×9.5×5.7cmの楕円礫を用いている。研磨による溝部は幅2.2～2.3cmで、内部にわずかな稜が観察できる(スクリーン内の実線部)。Vb層上面で、溝面を下にして伏せた状態で出土した。

18. 敲石・凹石・磨石 (116～135・138・141)

敲石28点、凹石5点、磨石1点(接合破片、および小破片は除く)が出土した。敲石には棒状礫の端部に敲打痕を有するもの(116～127)と、石塊状の複数面に敲打の痕跡が認められるもの(128～135・138)に大別される。後者の敲打部には面的なものや線状に敲打痕が残されるものの二者がある。敲打痕がさらに顕著になり、明確に窪みができたものを凹石(136・137・141)とした。磨石とした遺物番号49170は輝石安山岩製で、明確な磨り痕が観察されたわけではない。わずかに敲打痕があることから敲石とした方がよいかもしい。大半がVa・Vb層より出土しており、V層石器群に含まれると考えられる。

116は端部両側縁に敲打痕および敲打による剥離が観察される。破損した3点はいずれもBL31内より出土した。117と118は同一個体と考えられ、本来は、長さ10cm程度の扁平な棒状の礫であったと想定される。BL21とBL25の境界付近に散布している。116と異なり、棒状礫の両末端部に敲打痕が認められる。119は端部両側縁に敲打が認められる。120は末端部に平坦面ができるほど顕著な敲打痕を残す。121は末端部と端部側縁に敲打痕があり、敲打により剥離した破片が2点接合した。いずれも敲石から1m以内の場所で出土したもので、敲石の出土地点付近で敲打作業を行った根拠となる。122は末端部にわずかな敲打痕がみられ、図示していないが、正面図下端部左側縁に敲打痕が認められる。敲打により4点の破片に砕けたものである。123は二箇所の敲打痕があり、下端部側縁では平坦面が形成される顕著な敲打痕がみられる。124は末端部と側縁部にわずかな敲打痕が認められる。125は末端部に敲打痕がある。126と127はいずれも末端部に敲打痕があり、石材および形状から同一個体と推定するが、出土地点がそれぞれBL28とBL34とに離れている。

128は部分的に線状の敲打痕が認められる。129は全面にアバタ状の敲打痕があり、顕著なところでは凹部もみられ、凹石と分類してもよいものである。130は線状の敲打痕がみられ、破片状の小片に分割されている。敲打痕が形成された後に分割されたもので、約13mの距離を置いて接合している。131から133・135は線状の敲打痕がみられる。135は敲打後に破片状に分割されたものと思われる。132玄武岩質の安山岩で配石1としたものを構成する遺物である。134・138は輝石安山岩でわずかに凹部を

形成しており、凹石としてもよい資料である。なおこれらについては、線状の敲打痕を有する敲石との石質の違いが、敲打痕の状態の違いとなっていることも考慮しなくてはならない。また、138の裏面には平坦面と周縁部の明瞭な稜が確認され、グラインドによる磨石として機能した可能性も考慮する必要がある。ただし、磨石に対応する石皿は確認されていない。

136・141は輝石安山岩で、礫群と同じ石材である。ともに礫群にみられる被熱による赤化が認められ、風化が激しく敲打痕は明瞭ではない。137は緑色を呈し、礫群とは区別される安山岩で、敲打による窪みが顕著で、線状の敲打痕も確認される。側縁にも敲打痕があり、敲打による剥離が生じている。台石の139と同じ石質である。

19. 台石 (139・142～146)

台石は6点出土した。台石の可能性のある大形の礫を含めると11点となる。明確な敲打痕を有する輝石安山岩の大形の礫と、砂岩などの明らかに遺跡に持ち込まれた平坦面を有する大形の礫を「台石」、輝石安山岩で明確な敲打痕は無いが、平坦面を有した大形の礫を「台石?」とした。いずれもV a層・V b層より出土しており、すべてV層石器群に伴う石器である。

142～146はいずれも輝石安山岩で、平坦面に敲打によるアバタ状の窪みが認められる。敲打部分が大きく窪むものはないが、自然面と色調が明瞭に異なる。これは、調査時の表面の剥落ではなく、敲打により古い風化面が除かれたために、現在色調が異なる結果となったものと思われる。使用時の欠損面や剥離面が、ももとの自然面と異なる色調を示していることから、色調の違いが使用の痕跡を示していると考えて間違いない。143・146は被熱によると思われる表面の赤色化が認められ、144・145もややくすんだ赤褐色化が認められる。詳細な出土状況は、写真記録では確認できないが、143などは傍らに大形の礫を並べたような状況で出土した(第25図)。ただし、本遺跡BP第3地点では敲打面を上面にした状態で出土したことが確認されており、本地点の台石の出土状況を考える上で参考にならう。

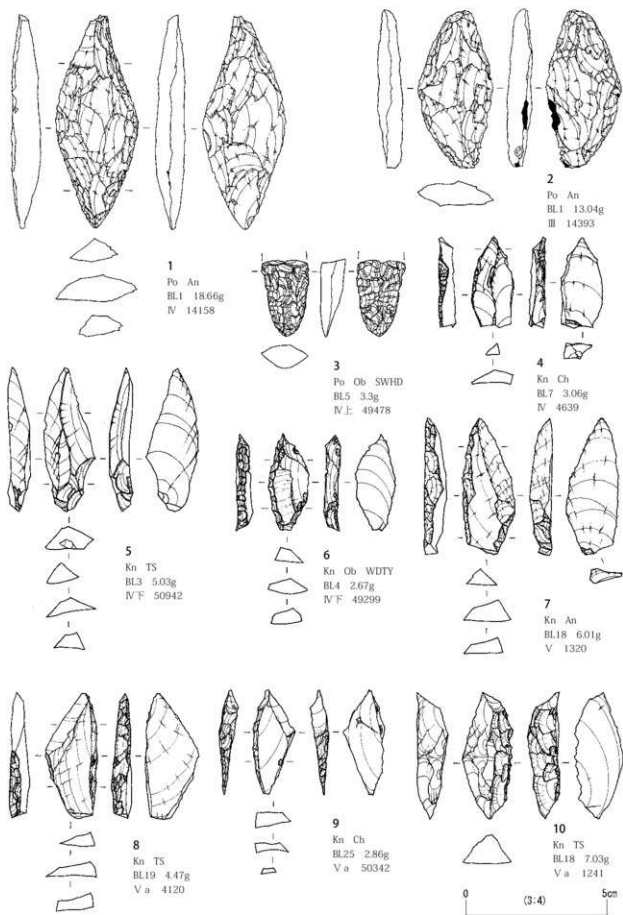
(2) 接合資料 (第52・53図)

剥片石器に関わる接合資料は143点ある。接合資料の分布状況については第21・22図に示した。接合資料に関する十分な資料提示ができないのは残念であるが、接合関係の詳細はCDに収録する遺物台帳を参考にしていきたい。剥片石器に関わる資料はすべてについて個体分類を行い、固有の個体番号を付した。その中で接合した資料についてはアルファベットをつけている。第52図147に示した接合資料は、個体番号8とした個別別資料の中で接合したもので、接合資料番号8Aとした。同じ個体番号の中で、それぞれは接合しない2種類以上の接合資料がある場合は、B・C・D・・・の別のアルファベットを付して区別している。第23表に剥片石器に関わる接合資料の一覧を示した。接合資料の器種別点数と、出土層位別点数である。

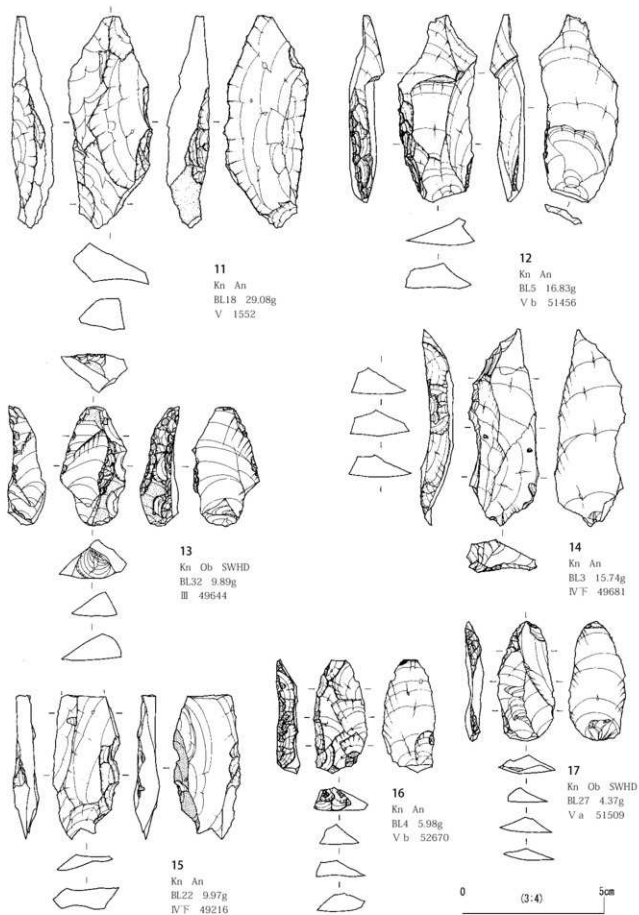
147～155はチャートの石核に剥片が接合した資料である。いずれも、鶏卵大から拳大の河原礫を用いている。147・153・154は平坦な自然面を打面とし、同一作業面で、連続して剥片剥離を行った後、打面の再生および打面転移を試みている。149は扁平な礫の側面部を打面として、数点の剥片が作出されている。150は一回の加撃で砕け散ったように複数の剥片が生じている。このような砕け散った剥片剥離による残核が多数みられる。151は剥離面を打面とした資料であるが、152は二つに分割し、それぞれを石核として剥片剥離を行っている。156は敲石などにみられる砂岩で、剥片石器ではあまり利用されない石材である。自然面が打面となる。

第2章 JS地点・BP第1～第3地点の調査

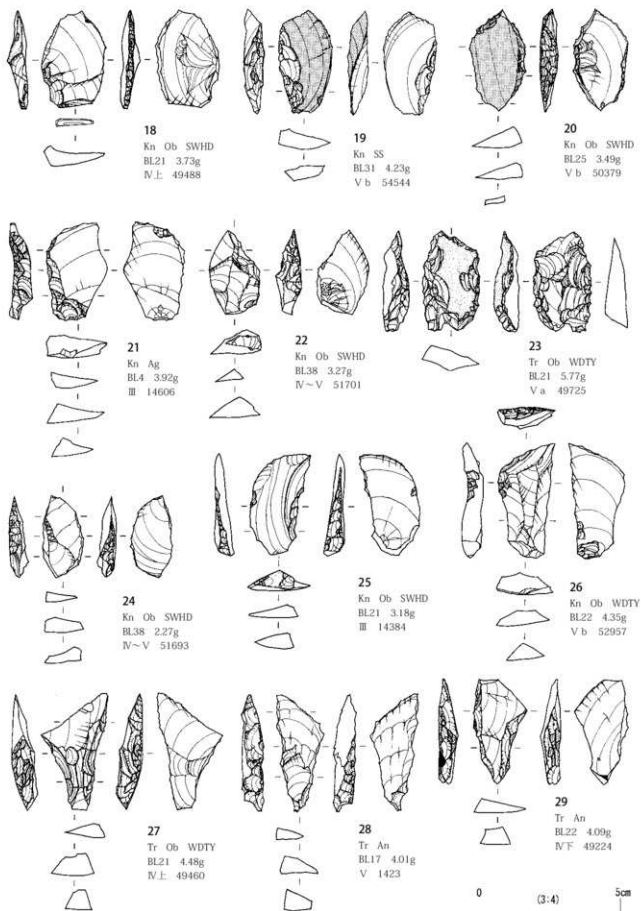
個体番号	接合資料番号	観行番号	石種	接合資料数合計	石目数	薄片	薄片	台形石器	楕圓石器	腰形石器	2次加工のある薄片	腰形石器	腰形石器	腰形石器	接合資料番号	規模	I 層	II 層	III 層	IV 層上	IV 層中	IV 層下	V 層	Va 層	Vb 層	Vc 層	
83	83A		チャート	2	2									83A		1							1				
84	84A		チャート	3	1	2								84A										2			
86	86A	154	チャート	21	3	16	2							86A					1	5				12	3		
86	86B		チャート	2	1					1				86B							1			1			
87	87A	155	チャート	4	2	2								87A	1	1					1			1			
87	87B		チャート	2	2									87B										2			
87	87C		チャート	2	2									87C										2			
89	89A		チャート	2	2									89A										2			
91	91A		チャート	2	2									91A										1	1		
93	93A		チャート	2	2									93A										2			
93	93B		チャート	2	2									93B		1									1		
94	94A		チャート	2	2									94A						1	1						
95	95A		チャート	3	2	1								95A								1		1	1		
96	96A		チャート	3	1	2								96A										1	2		
96	96B		チャート	2	2									96B	1										1		
97	97A		鉄石炭	4	1	3								97A		1											
99	99A		凝灰質頁岩	3	3									99A					1					2			
102	102A		チャート	2	1	1								102A										1	1		
102	102B		チャート	2	2									102B											1	1	
102	102C		チャート	2	1	1								102C		1									1		
103	103A		チャート	2	2									103A											2		
106	106A		凝灰質頁岩	2	2									106A							1			1			
108	108A		凝灰岩	2									2	108A						1					1		
108	108B		凝灰岩	2								1	1	108B							1			1			
109	109A		チャート	2	1	1								109A		1									1		
110	110A		チャート	2	2									110A											1	1	
112	112A		チャート	2	1	1								112A	1										1		
117	117A		鉄石炭	2	2									117A						1	1						
122	122A		鉄石炭	2	2									122A		1									1	2	
139	139A		緑色凝灰岩	2						1	1			139A											2		
146	146A		チャート	3	3									146A										1	1	1	
153	153A		チャート	2	2									153A										1	1		
155	155A		チャート	2	1						1			155A											2		
160	160A		チャート	2	2									160A										1	1	2	
164	164A		チャート	2	2									164A												2	
166	166A		チャート	2	2									166A										1	1		
167	167A		チャート	2	2									167A											1	1	
174	174A		チャート	2	2									174A											1	1	
175	175A		チャート	2	2									175A											2		
176	176A		チャート	2	2									176A											2		
181	181A		チャート	4	1	3								181A				3							1		
182	182A	153	チャート	9	1	8								182A		1								3	5		
182	182B		チャート	2	2									182B											2		
184	184A		チャート	2	2									184A				1							1		
187	187A		チャート	2	1	1								187A											2		
188	188A		チャート	2	2									188A											2		
190	190A		チャート	2	1							1		190A										1	1		
193	193A		チャート	3	2	1								193A					1						1	1	
202	202A		チャート	3	1	2								202A				1							1	1	
206	206A		チャート	2	2									206A											2		
207	207A		チャート	2	2									207A											2		
216	216A		チャート	2					1			1		216A											2		
221	221A		チャート	2	1	1								221A											2	1	
226	226A		チャート	3	3									226A				2							1	1	
226	226B		チャート	2	2									226B											1	1	
227	227A		チャート	2	2									227A											2		
235	235A		無炭素質頁岩	2										235A					1							1	
244	244A		無炭素質頁岩	3	1	2								244A											1	2	
244	244B		無炭素質頁岩	2	1	1								244B											1	1	
244	244C		無炭素質頁岩	3	3									244C											3		
247	247A	156	砂岩	10	10									247A					5						4	1	
248	248A		凝灰岩	2	1	1								248A											1		
248	248B		凝灰岩	4	4									248B											1		
248	248C		凝灰岩	2	2									248C											1		
252	252A		柱状頁岩	2	1						1			252A										1	1		
255	255A		柱状頁岩	4	3					1				255A					3						1		
263	263A		玉髓	2	1	1								263A											2		
354	354A		柱状頁岩	1	1									354A								1					



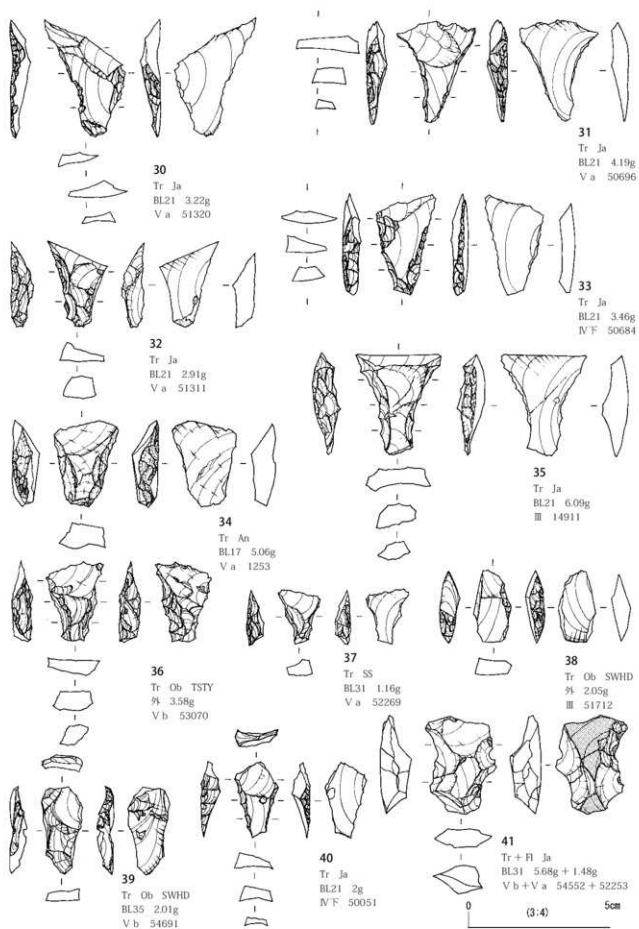
第28図 JS地点の石器（槍先形尖頭器・ナイフ形石器1）



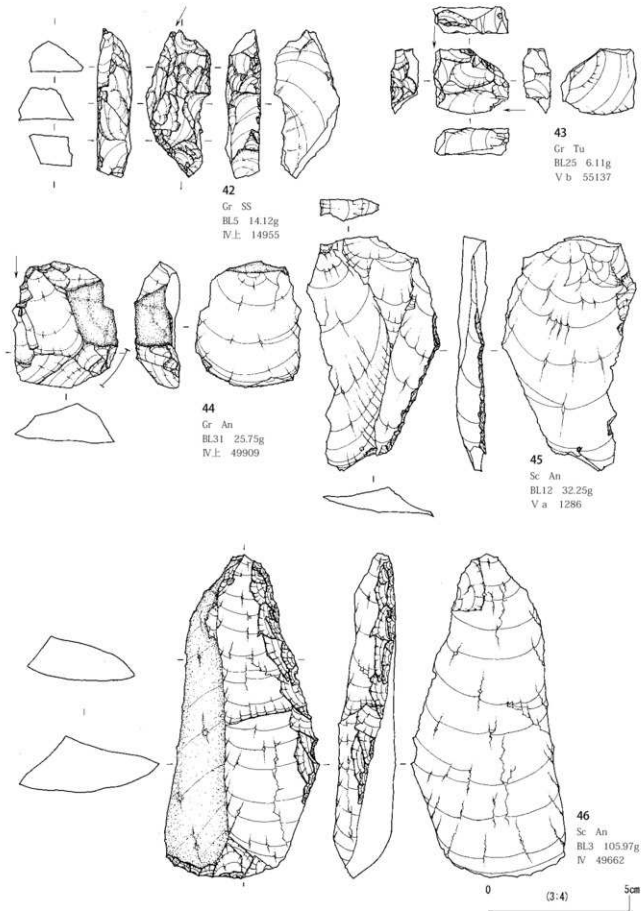
第29図 JS地点の石器（ナイフ形石器2）



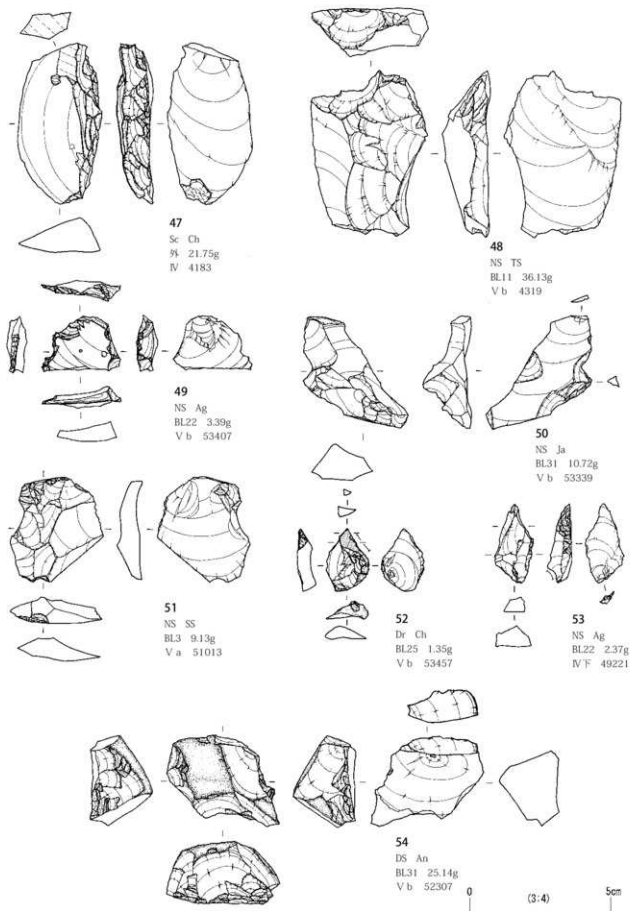
第30図 JS地点の石器(ナイフ形石器3・台形石器1)



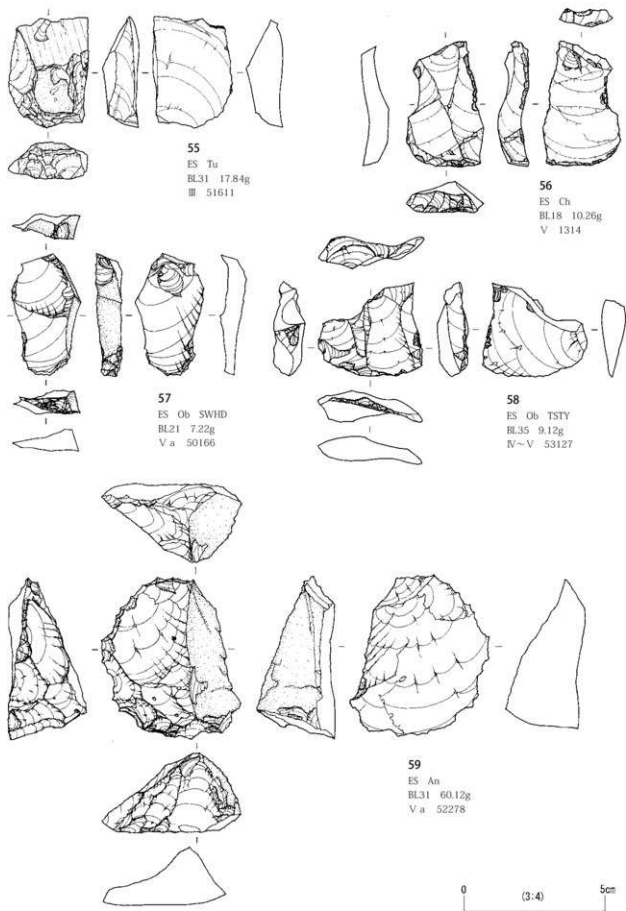
第31図 JS地点の石器(台形石器2)



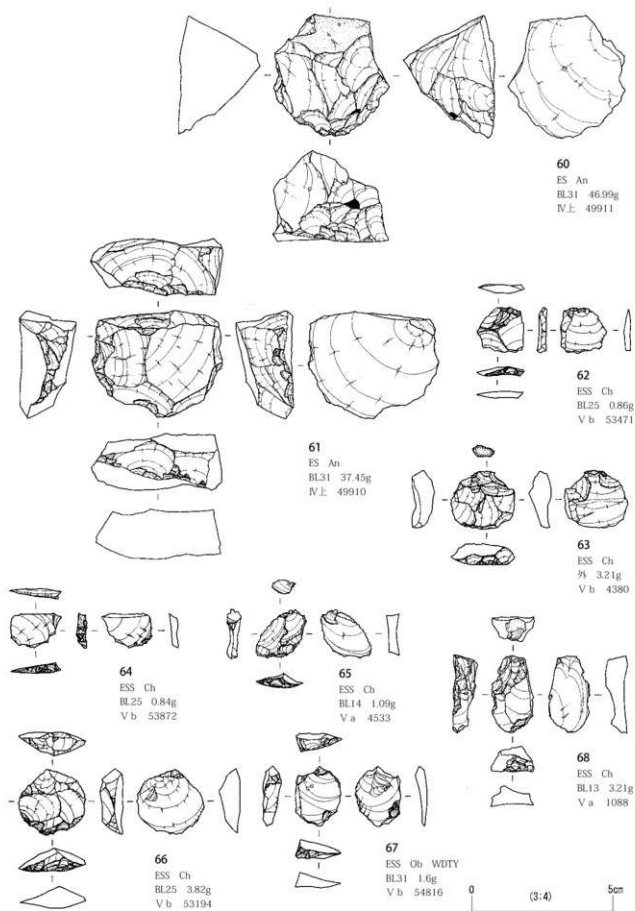
第32図 JS地点の石器(彫器・削器1)



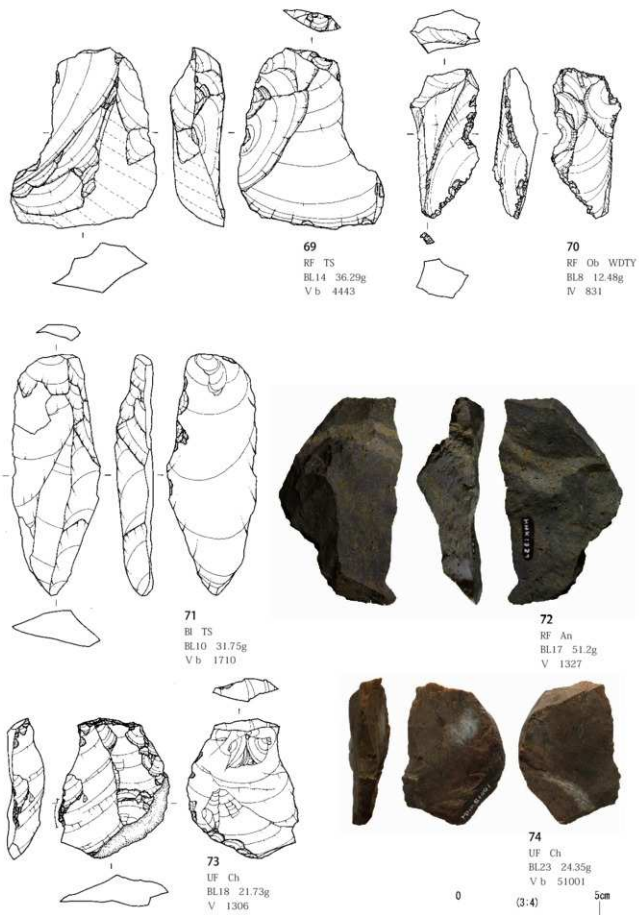
第33図 JS地点の石器(削器2・抉入削器・揉雑器)



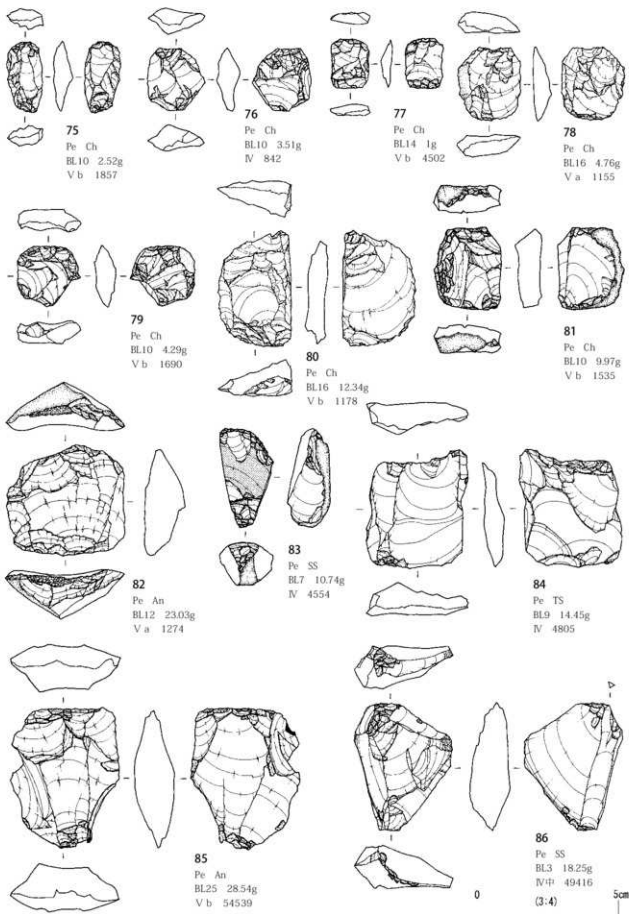
第34図 JS地点の石器(挿器1)



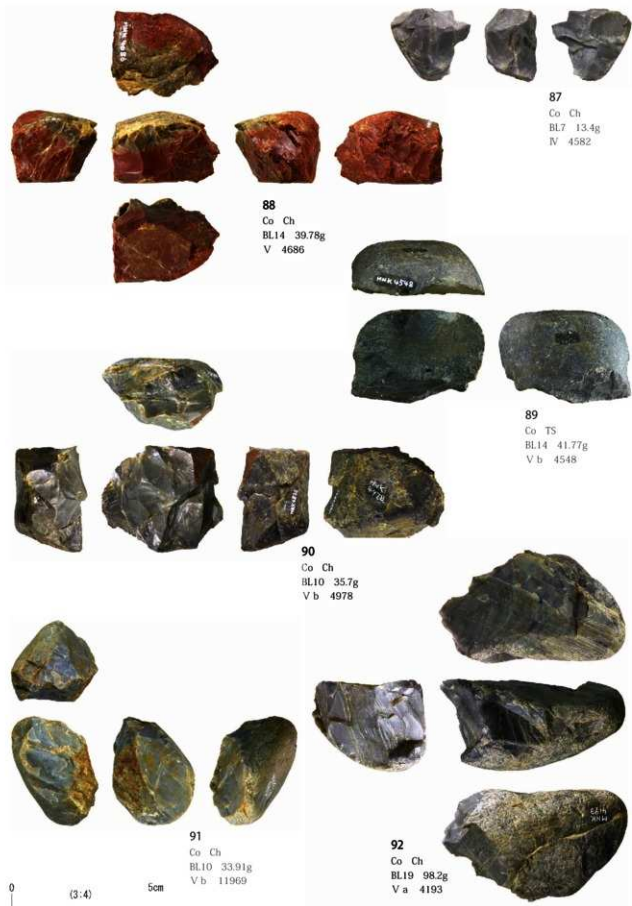
第35図 JS地点の石器（擲器2・擲器状石器）



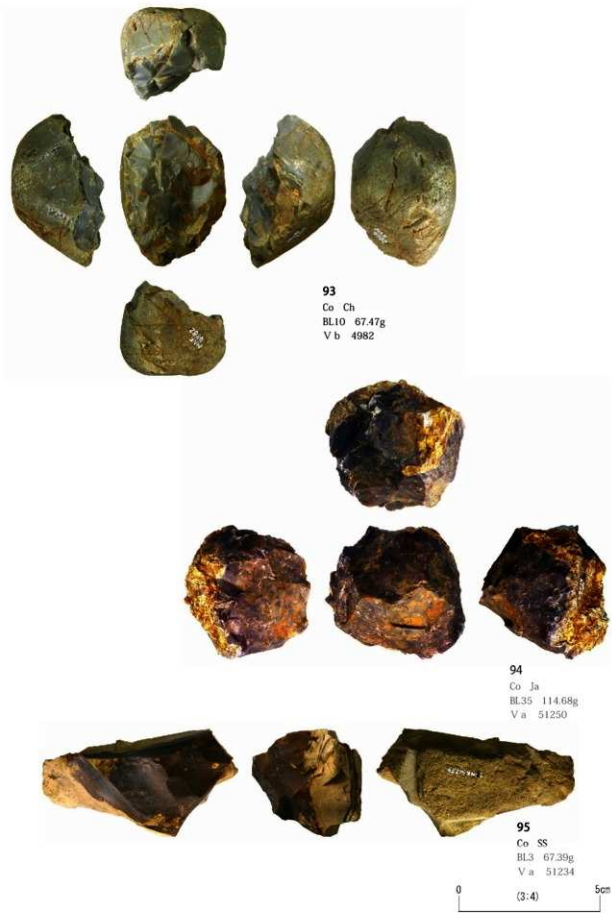
第36図 JS地点の石器（2次加工のある剥片・微細刻離のある剥片）



第37図 JS地点の石器（楔形石器）



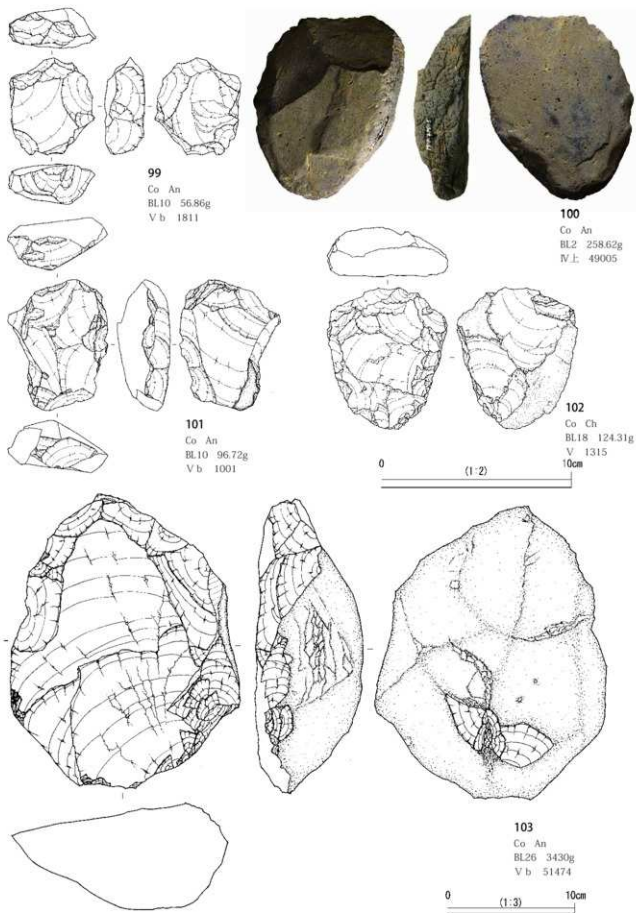
第38図 JS地点の石器(石核1)



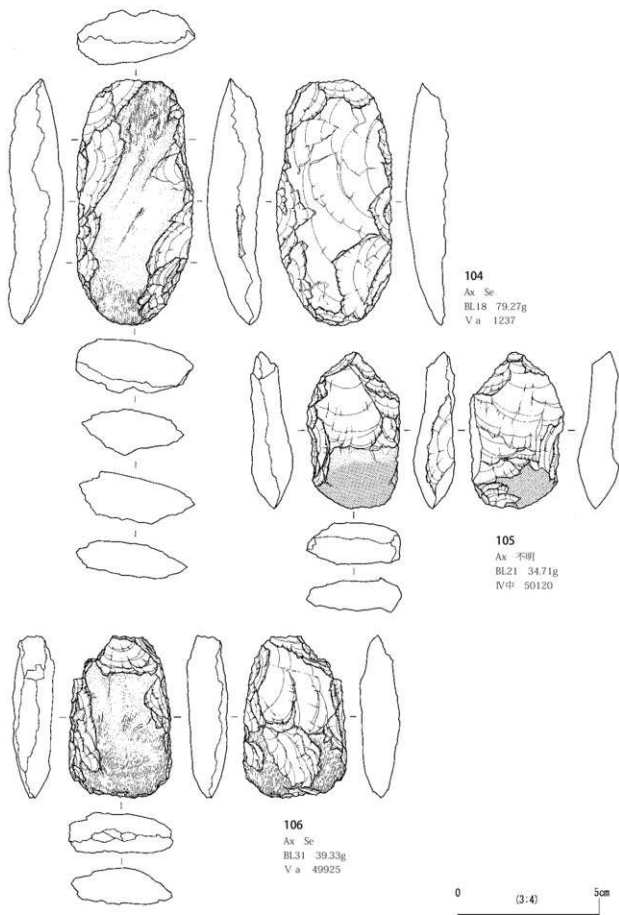
第39図 JS地点の石器(石核2)



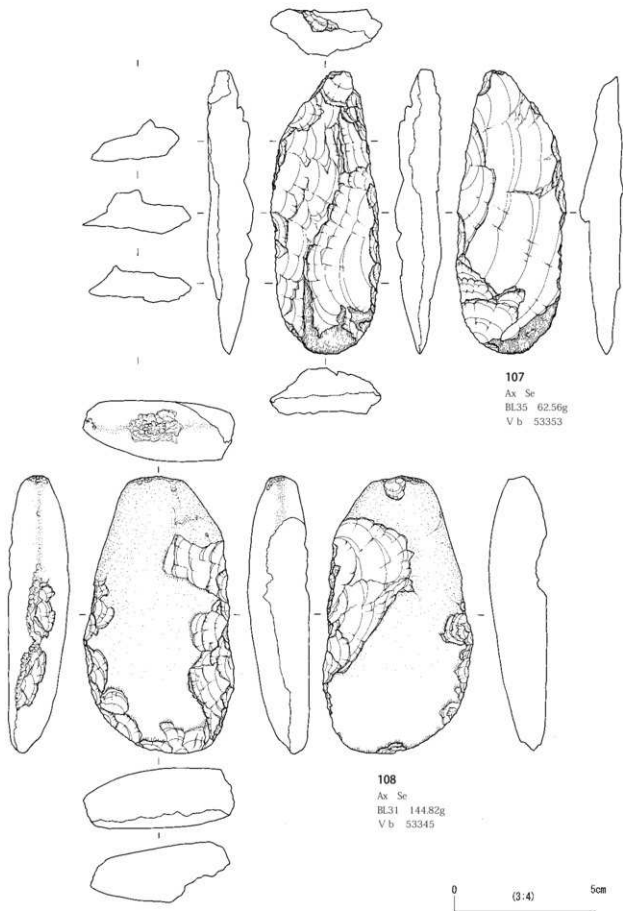
第40図 JS地点の石器(石核3)



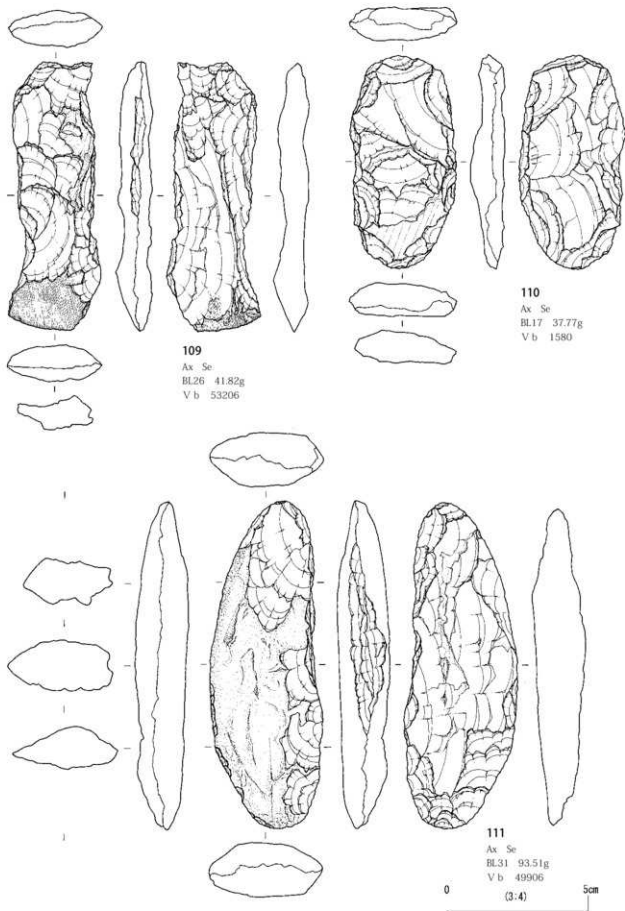
第41図 JS地点の石器(石核4)



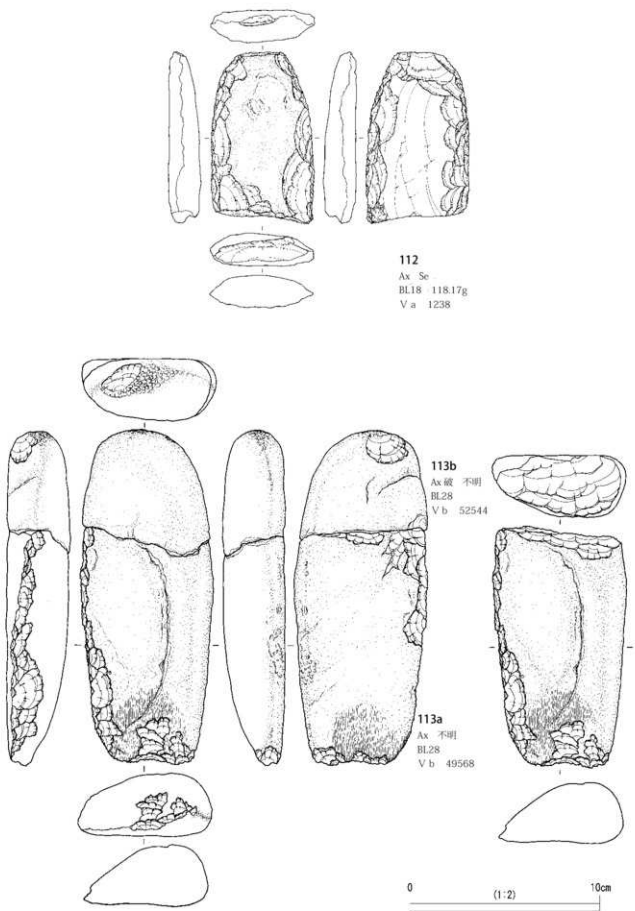
第42図 JS地点の石器(斧形石器1)



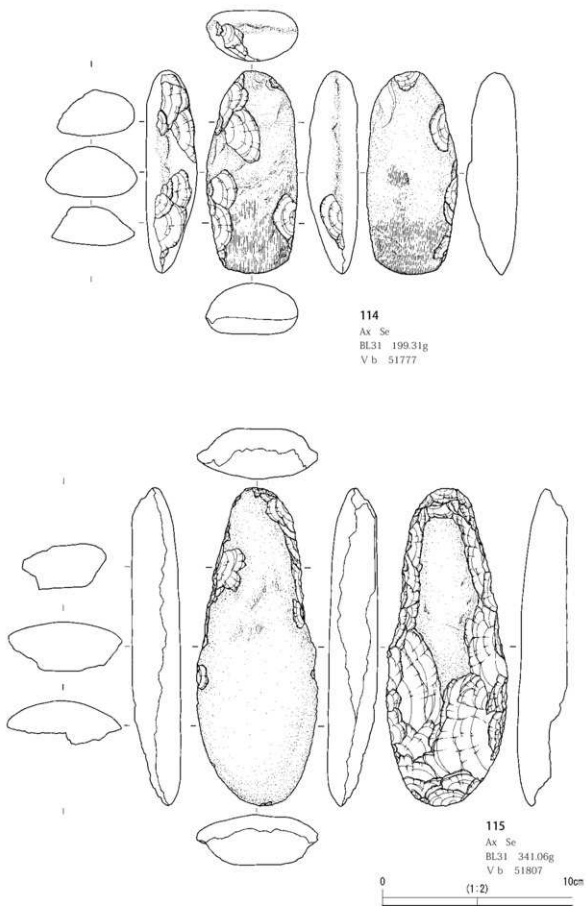
第43図 JS地点の石器(斧形石器2)



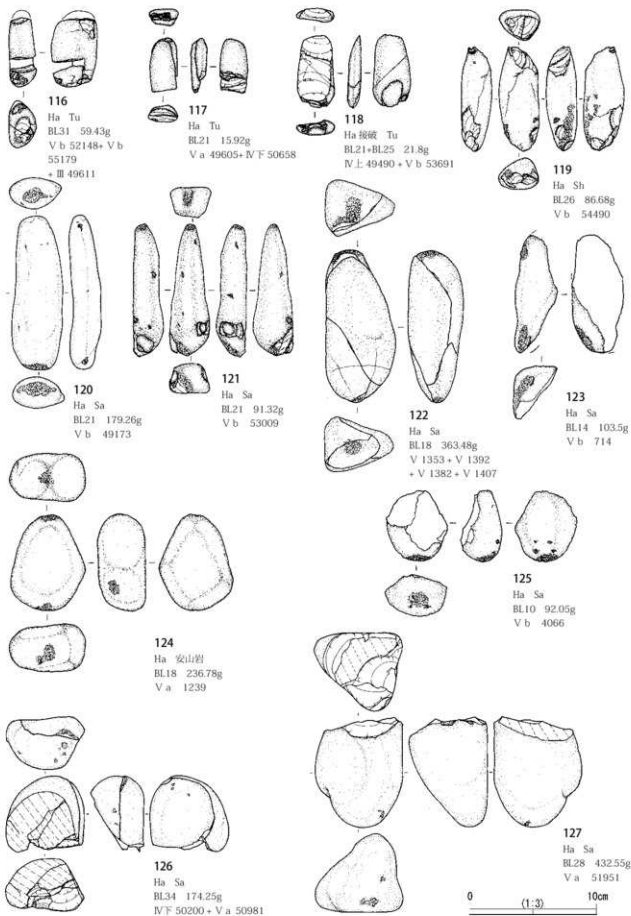
第44図 JS地点の石器(斧形石器3)



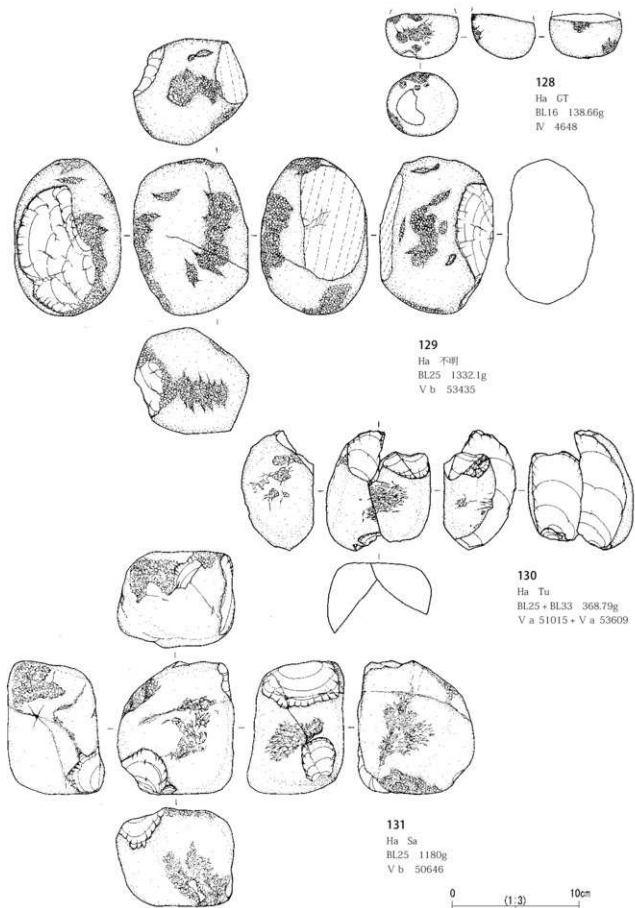
第45図 JS地点の石器(斧形石器4)



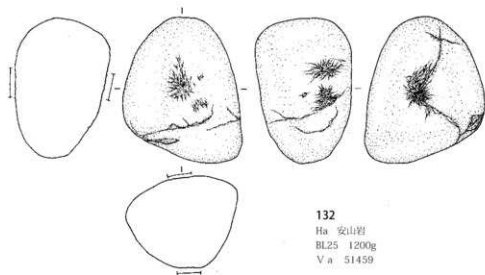
第46図 JS地点の石器(斧形石器5)



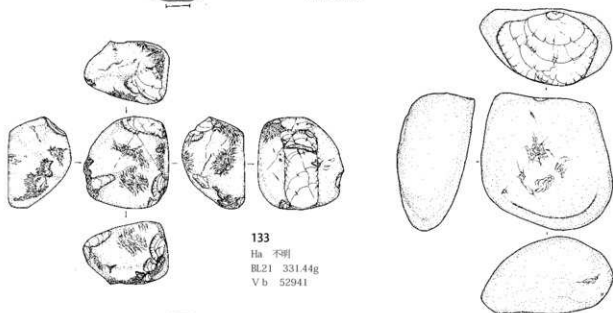
第47図 JS地点の石器(礫石1)



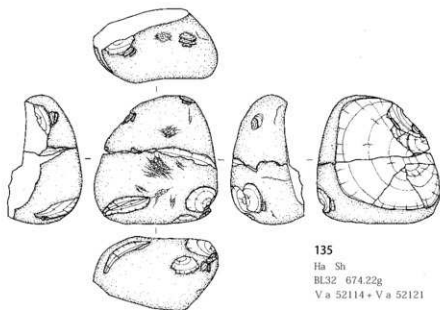
第48図 JS地点の石器(敲石2)



132
Ha 安山岩
BL25 1200g
Va 51459



133
Ha 不明
BL21 331.4g
Vb 52941



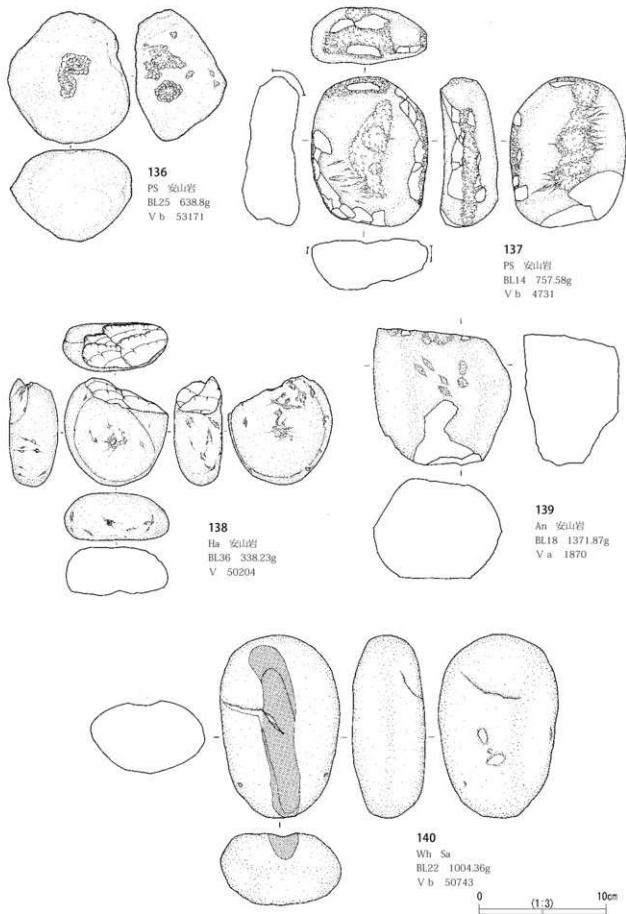
135
Ha Sh
BL32 674.22g
Va 52114・Va 52121



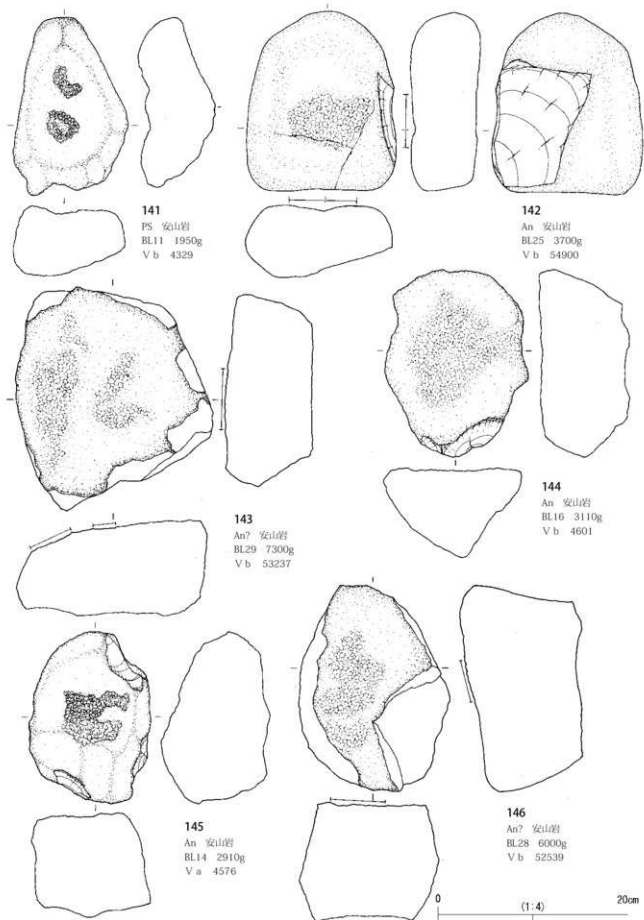
134
Ha 安山岩
BL31 898.85g
Va 52263

0 (1:3) 10cm

第49図 JS地点の石器(蔵石3)



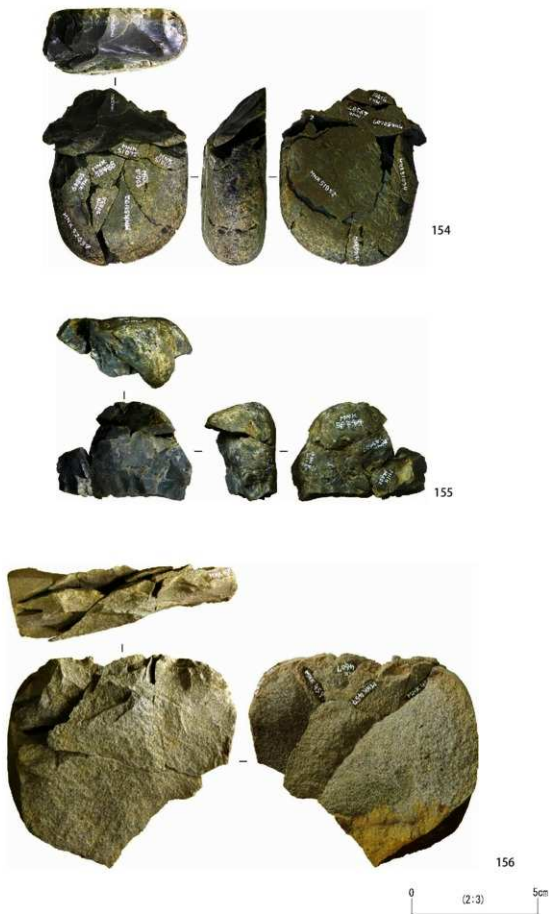
第50図 JS地点の石器（礫石4・凹石・台石1・砥石）



第51図 JS地点の石器(台石2)



第52図 JS地点接合資料1



第53図 JS地点接合資料2

第2節 BP第1地点の旧石器時代の遺構と遺物

1 調査の概要

国道バイパス第1地点（以下BP第1地点とする）は、平成11年度と12年度に発掘調査を行った。国道18号の両側に延びる拡幅部分、幅約2～5mの細長い調査区である。また、廃土処理の都合上、調査区を細かく分割した調査区となった。報告の便宜上a～fの6地区に細分する（第54図）。

a地区の北東端では旧石器時代の遺物包含層までおよぶ攪乱があり、f地区では水道管理設による攪乱などにより、調査区の幅は極めて狭いものとなった。その他の地区では、包含層は良好に残されていた。

旧石器時代の遺物2297点が出土した。内訳は、石器201点、石核55点、剥片・碎片1610点、礫431点である。調査時に認識した石器集中区と礫群は、それぞれSQ、SHの遺構記号を付して記録した。遺構記号SQとした石器集中区については、整理段階で、石材や出土層位などを考慮し、石器群のまとまりをブロックとしてとらえ直した。概ね、ブロックは調査時の認識に即しているが、必ずしもSQと一致するわけではない。遺構記号SHとした礫群については、調査で認識した単位をそのまま報告した。BP第1地点では、複数時期の石器群の重複が想定されるが、時期が異なる石器群を分離する作業は行えなかった。ただし、JS地点と比較して、同じ場所に時期が異なるブロックが重複することは少なく、認識したブロックの多くは、単一時期のものと思われる。

調査はⅥ層上面まで行い、それ以下の層の調査は行っていない。

BP第1地点の北東側はBP第2地点と隣接するが、BP第2地点側には分布密度が希薄な空間がみとめられ、地点を分ける境界線とした。調査区南西側にも遺物分布の空白分があり、BP第0地点との境界線とした。



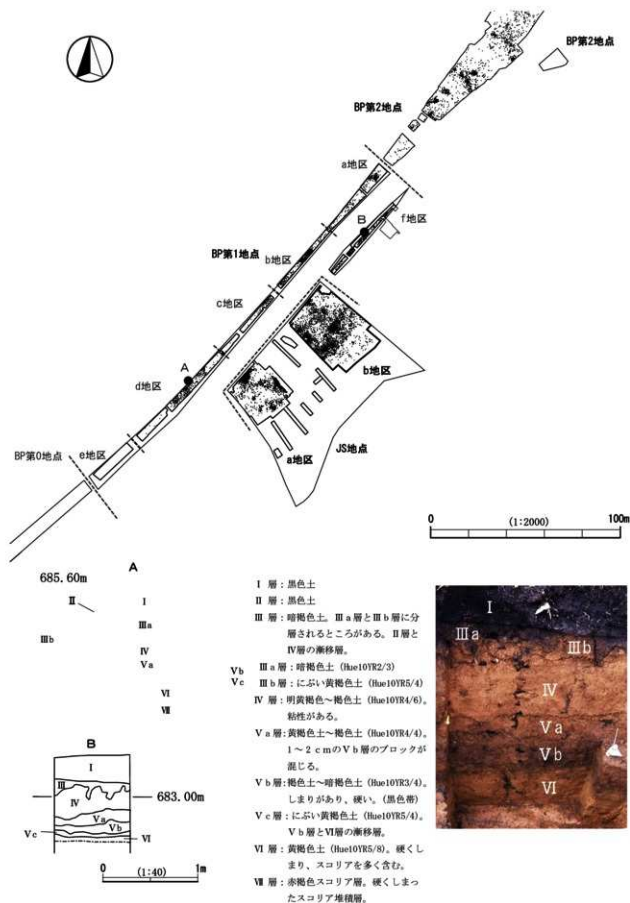
2 調査区周辺の地形と層序

(1) 調査区周辺の地形

国道18号に沿ったBP第1地点は、仲町丘陵の尾根上に位置する。丘陵は北東に向かって下っており、国道18号が丘陵の頂上部を通っている。丘陵の南東側には野尻湖につながる谷があり、北西側には現在水田として利用されている池尻川低地が広がる。旧石器時代には池尻川低地に湖が広がっていたことが確認されている。調査地点と池尻川低地との標高差は約30mであるが、旧石器時代以降も丘陵が隆起しているため、旧石器時代の標高差は現在より少なかったと考えられる。丘陵の幅は60～80m程度であるが、JS地点の調査成果も加味すると、丘陵上のいたるところに旧石器時代のブロックが広がっている状況が予想できる。

(2) 調査区周辺の層序（第54図）

BP第1地点の基本層序はJS地点と類似しており、土層の記載は第1節JS地点を参照していただきたい。BP第1地点では、表土の下がⅢ層となり、Ⅱ層の柏原黒色火山灰層はほとんど確認されない。地表から40～50cm程度で純粋な旧石器時代の包含層であるⅣ層に達する。調査区全体に層の厚さは一定しており、Ⅳ層～Ⅴb層の遺物包含層は50cm前後である。なお、調査区北東端部は、広範囲にわたってⅤb層まで



第54図 BP第1地点の調査範囲と基本土層

攪乱がおよんでいる。分布図中にその攪乱範囲を示した。

石器群はⅢ層からⅤc層まで連続的に出土しており、個々の遺物の出土層位で時期を区分することは不可能であるが、礫群および大形の礫石器の出土状況から、少なくともⅣ層中部とⅤb層上面の二時期の生活面があることが確認できる。

なお、遺跡全体の基本層位の詳細は第1章3節3項(2)を参照。

3 遺構と遺物の概要

(1) ブロックの認定

BP第1地点では、礫群および大形礫の出土状況により複数時期の石器群が重複していることが予想される。しかし、個々の石器の出土層位で時期を区分することは不可能である。しかも、調査範囲が細長く、石器集中区の全体を調査することができなかつたため、個別別資料分析による石器群の時期区分は困難となる。BP第1地点では、異なる時期の石器群が重複することを承知した上で、調査区内で認められた平面的な分布のまとまりをブロックとしてとらえ、個々のブロックの評価の中で異なる時期の石器群の存在について触れることとした。第55図に17箇所のブロック(BL101～BL117)の分布範囲を示す。

個別別資料と出土層位

個別別資料の分類作業は、BP第1地点内を二つに分けて実施した(第9図)。接合作業区分C(BL114～BL117)と接合作業区分D(BL101～BL113)の間に接合関係がみられないのは、整理作業方法によるためであり、必ずしも上記のブロック群が無関係であることを意味しない。

BP第1地点では、101の個別別資料を認識した。このほかに単独で遺跡内に持ち込まれたと判断した資料(個別番号20000番台のもの)が71点存在する。これらの出土層位を検討すると、無珉品質安山岩(An)、チャート(Ch)、珪質頁岩(SS)、凝灰質頁岩(TS)の個別別資料の中に、Ⅳ層に出土頻度のピークを示すものが認められる(第24表)。このほかの個別別資料の多くはⅤa層、Ⅴb層に出土頻度のピークがある。^{註1}Ⅳ層に出土頻度のピークがある個別別資料群をⅣ層石器群、Ⅴa・Ⅴb層に出土頻度ピーク

石材	個別番号	総点数	I・II層・攪乱	Ⅲ層	Ⅳ層	Ⅳ層上	Ⅳ層中	Ⅳ層下	Va層	Vb層	分布ブロック名
An	301	6				2	2	2			BL103・107・110・111
An	309	12		6	1	1			3	1	BL104・107・109・111・112・113
An	294	10		4			2	1	3		BL107・108・109・111・113
An	300	11		2	4		1	1	3		BL106・107・112・113
An	310	19		1	4	2	6	2	3	1	BL103～107・109・111・113
An	303	11		3	2	2		2	1	1	BL103・104・109・112・113
An	311	6		4	2						BL109・111
An	328	22		4	4	3	5	3	3		BL101・102・104～108・110～112
An	304	28	1	4	3	6	5	2	2	5	BL102～104・108～113
An	305	19	1	2	3	4	2	2	2	3	BL103・105～107・109・111～113
Ch	339	3	1	1	1						BL108・109・111
Ch	343	6		2		1	1		2		BL110・111
Ch	344	6			1		4		1		BL110・111
Ch	331	3		1	2						BL105
Ch	364	5		1	3					1	BL104・109
Ch	334	8			1	1	1	2	2	1	BL102・103・108・111・112
SS	348	12		5		3	4				BL110・111
SS	354	5		2	1		2				BL102・107・110
TS	357	6	1	1			3		1		BL101・108・109・113
TS	351	6	1	1	4						BL103・104・111・112
TS	480	6			1	4			1		BL103・112
TS	350	8		1	1	1	4		1		BL102・103・107・111
TS	349	3		1	1	1					BL111・112

第24表 BP第1地点のⅣ層に出土頻度のピークがある個別別資料一覧

註1 個別別資料の層位別出土点数は、添付CDに「BP第1地点旧石器個別別出土層位」(エクセルのファイル形式)を収録した。

クがある個別別資料群をV層石器群と仮称する。第56図には単独で遺跡内に持ち込まれたと判断した20000番台の個別別資料を除いた石器群の分布を示した。IV層石器群はBL109～BL113に特に集中している一方、V層石器群は調査区全域に認められる。

なお、IV層石器群とV層石器群の分離は、あくまで遺跡の構造を理解するための手段であり、個々の石器の編年的な序列の検討を目的とするものではない。ブロックの認定および個別別資料の扱いについては、第2章1節3を参照していただきたい。

(2) 遺構の概要

石器群の分布状況

17箇所のブロックを認識した。第26表と第57～59図に各ブロックの石材および出土層位の概要を示した。また、黒曜石については、JS地点と合わせて、産地推定の分析成果に基づいた産地別の分布状況を示した(第61・62図)。出土層位については、IV層は層厚が比較的厚いところで上・中・下に分けて遺物を取上げ、それ以外ではIV層一括とした。また、V a層の下にV b層が確認できない場所では「V層」とした。

第56図のIV層石器群とV層石器群の分布状況と、第57図の層位別石器出土状況とを比較すると、BL115～BL117にはIV層出土の遺物が多数あるものの、いずれもV層石器群が浮き上がってきたことが伺える。この他にも、BL101・105・106・108・112などもV b層に出土頻度のピークがあり、V層石器群の石器集中区が形成されていることが確認できる。また、これらのブロックは、黒曜石を主体とした石材組成を示しており、隣接するJS地点とは異なった様相を示している。

BL109～111・112ではIV層中部に出土頻度のピークがあり、IV層石器群の石器集中区が存在していることが確認される。ただし、これらのブロックにはさらに古い時期の遺物が混在している可能性があり、個々の石器の明確な時期区分は困難である。

黒曜石の産地別分布状況

黒曜石の産地別の分布をみると、BP第1地点では産地が推定された835点のうち96.7%が諏訪星ヶ台群でそれ以外の産地のものはわずかに27点であった。これらの資料には剥片・碎片以外の石器が多く含まれ、IV層・V a層のものが多い。諏訪星ヶ台群を主体としたブロックは、いずれもV b層に出土頻度ピークを示すV層石器群であり、他の産地を示す黒曜石の多くは和田星ヶ台群とは時期の異なる石器群である可能性が高い。

JS地点ではBL22・33・35などに諏訪星ヶ台群が集中しており、BP第1地点との関連を検討する必要があるが、JS地点には和田鷹山群、蓼科冷山群などが多く出土しており、BP第1地点と様相を異にしている。JS地点の和田鷹山群の出土層位をみると、諏訪星ヶ台群と同様にV b層に出土頻度のピークがあり、両者が時期差をもっているという状況はみられない。

JS・BP第1地点の黒曜石は諏訪星ヶ台群と和田鷹山群が大半を占めるが、前者は密集して分布するのに対して、和田

産地	遺構名	遺物番号	層位	器種	報告番号	重さg
黒曜石産地						
和田小深沢群	BL106	258	IV	Fl		10.07
和田小深沢群	BL117	5525	V a	Sc		14.02
和田鷹山群	BL102	11177	V a	Fl		2.08
和田鷹山群	BL104	11190	IV中	Fl		3.67
和田鷹山群	BL106	242	V a	Fl		2.19
和田鷹山群	BL107	15	III	Ch		0.13
和田鷹山群	BL107	11	IV	Ch		0.2
和田鷹山群	BL110	11355	V a	Fe		7.29
和田鷹山群	BL110	11341	IV下	Fe		6.56
和田鷹山群	BL110	11345	V a	B		1.26
和田鷹山群	BL111	11364	V a	DS	1063	8.3
和田鷹山群	BL112	11654	IV	Ch		0.11
和田鷹山群	BL112	11833	IV	Fl		0.38
和田鷹山群	BL117	5527	V b	Fl		1.2
和田鷹山群	遺構外	5001	V a	DS		13.1
和田土屋橋西群	BL104	687	V c	Sc	1050	3.94
和田土屋橋西群	BL111	11257	IV中	Fl		0.23
和田土屋橋西群	BL112	11664	IV	Gr	1037	6.24
和田土屋橋南群	BL110	11325	IV中	ES	1047	9.59
和田土屋橋南群	BL111	11245	IV中	Fl		0.21
和田土屋橋南群	BL116	5341	IV中	NS	1057	7.36
和田土屋橋北群	BL106	206	V b	Ch		0.45
和田土屋橋北群	BL111	11305	III	Fl		0.19
蓼科冷山群	BL104	5867	V b	Fl		0.69
蓼科冷山群	BL107	21	IV	Fl		0.48
蓼科冷山群	BL107	11418	IV下	UF		2.91
蓼科冷山群	BL117	5501	V a	UF		6.51

第25表 BP第1地点諏訪星ヶ台以外の資料

鹿山群は比較的分散している傾向を示す(第61・62図)。

礫の分布状況

Ⅲ層からV b層にかけて431点の礫が出土し、16箇所の礫の集中区を検出した(第63図)。第27表に各礫群の出土層位組成と赤化状況および付着物の状況を示した。Ⅲ層から出土した礫は縄文時代遺物の可能性もあるが、本節で示すこととする。これらの礫群は出土層位により、三時期に分けることができる。すなわち、Ⅲ層に生活面が想定されるSH251・252、Ⅳ層に生活面が想定されるSH254～260・262a・263a・264、V a層からV b層に生活面が想定されるSH253・261・262b・263b・265・266である。

第64図に旧石器時代の純粋な包含層であるⅣ層～V b層出土の礫と、2kgを超える大形の礫の分布を示した。大形の礫はSH253とSH259にあり、礫の底面はV a層またはV b層である。SH253の大形礫には明確な赤化がみられる。

炭化物の分布状況

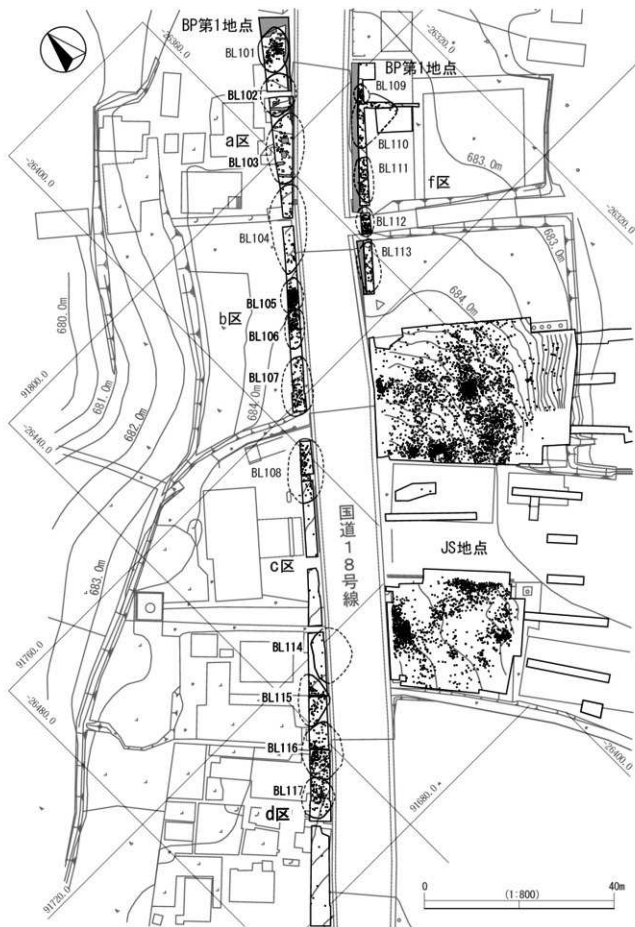
V b層で多くの炭化物が確認された。炭化物は5mmを超えるものをサンプリングし、出土地点を記録した(第60図)。サンプルした炭化物はⅢ層4点、Ⅳ層7点、V a層15点、V b層107点、V c層4点である。炭化物は石器群が分布する地区に検出され、石器群が希薄な地区では、ほとんど検出されない。

遺構名	鹿山群 鹿山	鹿山 高野山	鹿山 高野山	鹿山 高野山	鹿山 高野山	鹿山 高野山	鹿山 高野山	鹿山 高野山	鹿山 高野山	鹿山 高野山	不明	合計	遺構名	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	Ⅳ上	Ⅳ中	Ⅳ下	V a	V b	V c	合計		
																								Ⅰ	Ⅱ
Ⅱ.101	158	3										167	Ⅱ.101	10			2	1	2		2	20	129	1	167
Ⅱ.102	4	3	2									15	Ⅱ.102	2			2	3	2	3		2	1	15	
Ⅱ.103	2	19		3	2	7						54	Ⅱ.103	7	4	6	8	7	3		6	13	54		
Ⅱ.104	10	22	1			1						49	Ⅱ.104		7	10	13	2	1		8	7	1	49	
Ⅱ.105	318	11	1	16	3	1	2					359	Ⅱ.105			22	63				69	193	12	359	
Ⅱ.106	179	7		1								191	Ⅱ.106			23	31				36	98	3	191	
Ⅱ.107	27	39	2	16	2	3	2	8	13			114	Ⅱ.107			9	22		2	22	30	29	3	114	
Ⅱ.108	15			4	1	1		69				94	Ⅱ.108	1			2	9	3	1	25	47	6	94	
Ⅱ.109	38			3	1			4				46	Ⅱ.109			1	14	3	7	13	3	3	2	46	
Ⅱ.110	4	8	10	3				30		1		59	Ⅱ.110			1	10	2	3	21	3	16	3	59	
Ⅱ.111	12	44	8					27				99	Ⅱ.111	1		25	24	28	8		8	5	99		
Ⅱ.112	53	56				7	1				1	138	Ⅱ.112			2	73				30	32	1	138	
Ⅱ.113	8	28				1						41	Ⅱ.113	1	7		9	11	4		7	2	1	41	
Ⅱ.114	3	2						1				7	Ⅱ.114			1	1	1	1		2	1		7	
Ⅱ.115	58	9	2			11	4	2		1	1	93	Ⅱ.115	1	7	6	5	15	28	31	28	31	93		
Ⅱ.116	379	11	4	4		1		1			1	201	Ⅱ.116			4	15	15	20		62	81	4	201	
Ⅱ.117	88	3	14	1		1	1	1				113	Ⅱ.117			3	6	5	6	6	1	31	53	2	113
Ⅱ.外	4	9	1		2	2		6				25	Ⅱ.外	2		4	4	3	2	1	7	2		25	
出土地不明								1				1	出土地不明				1							1	1

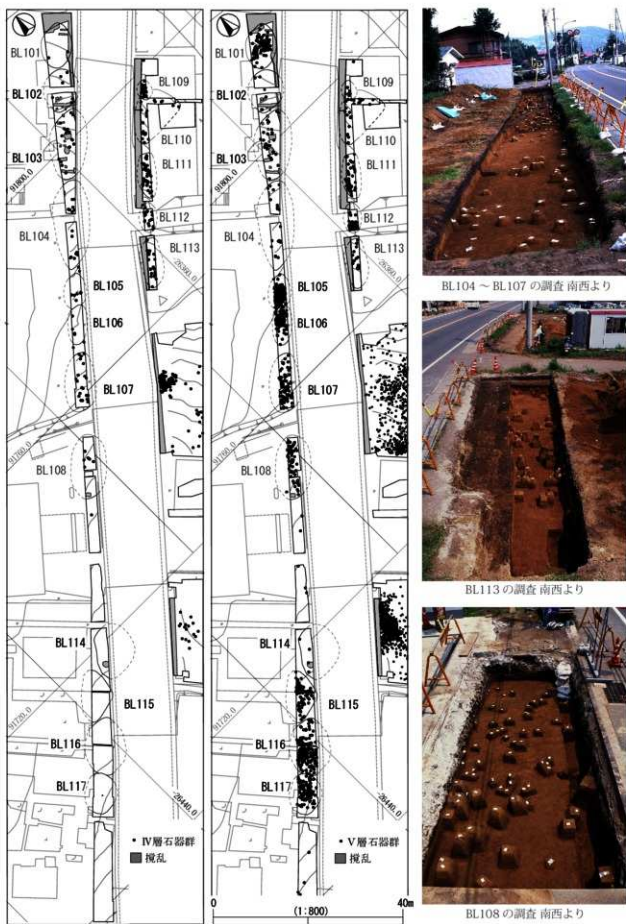
第26表 BP第1地点のブロック別石材組成と出土層位組成

遺構名	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	Ⅳ上	Ⅳ中	Ⅳ下	V a	V b	V c	合計	遺構名	赤化強	赤化弱	赤化無	合計	黒色付着物	遺構名	完形	欠損	破片	合計
SH251		9								9	SH251	8		1	9	1	SH251	4	5		9
SH252		6								6	SH252	3	1	2	6	2	SH252	4	2		6
SH253	2	1					1	17		21	SH253	8	6	7	21	10	SH253	14	7		21
SH254			3	1				2		6	SH254	5	1		6		SH254	1	5		6
SH255	2		8							10	SH255	9		1	10		SH255	3	7		10
SH256	2	1	11	5	2	1		22		49	SH256	21	1		22		SH256		22		22
SH257	1	2	10	5	13			31		62	SH257	27	2	2	31		SH257	4	27		31
SH258	2	13	2	4	28	4	4	1	62	188	SH258	45	14	3	62	3	SH258	20	42		62
SH259	1	1	2	3	17	4	3	31		62	SH259	26	3	2	31		SH259	6	25		31
SH260	1		1	4	10	2		18		31	SH260	18			18		SH260	2	16		18
SH261						3	24	27		51	SH261	21	3	3	27		SH261	7	20		27
SH262a		9	6	21	2	2	1	41		82	SH262	33	5	3	41		SH262	5	36		41
SH262b						4	8	12		24	SH262b		7	5	12		SH262b	10	2		12
SH263a		1		14		3		18		36	SH263	11	7		18		SH263	3	14		18
SH263b					5	2	4	11		22	SH263b	4	3	4	11	4	SH263b	7	4		11
SH264		6	37			6		49		92	SH264	33	14	2	49	3	SH264	19	10		29
SH265			1			2	4	1	8	16	SH265	1	3	4	8	2	SH265	3	3		6
SH266					1	1	6	10		18	SH266	2	2	6	10		SH266	7	3		10
遺構外	1	17	2		2	1	1	10	3	39	遺構外	12	12	14	39	2	遺構外	23	12		35

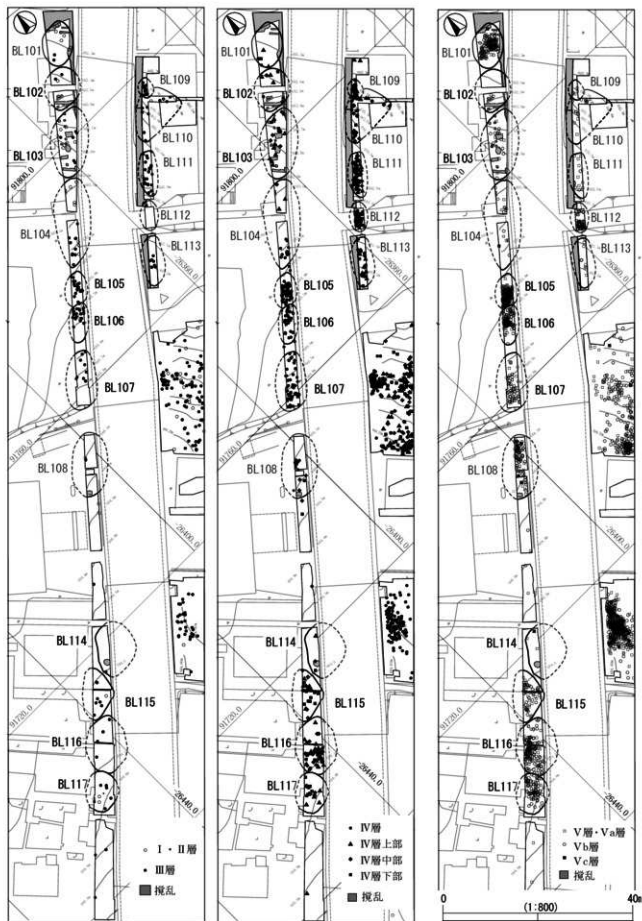
第27表 BP第1地点の礫群遺構別出土層位と赤化状況



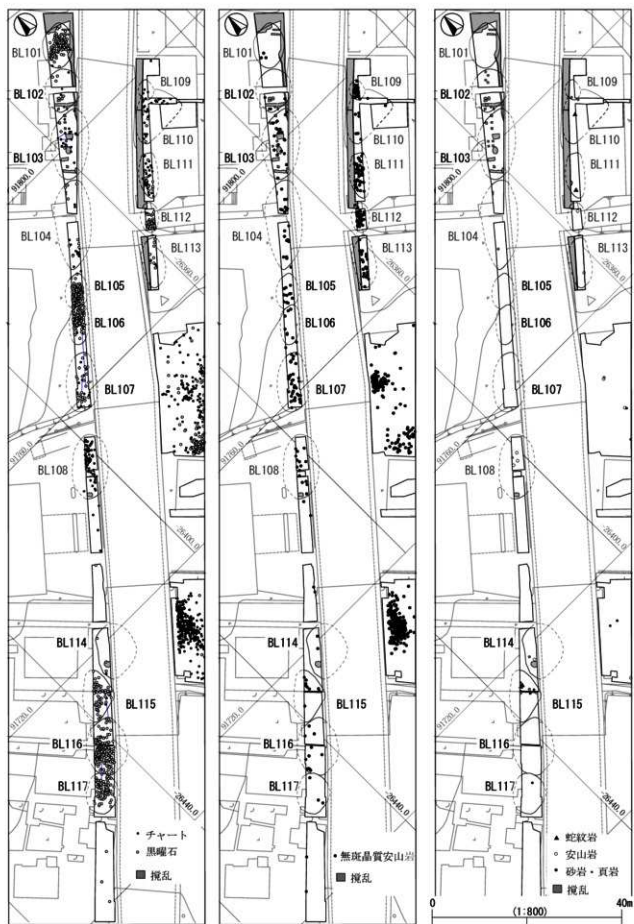
第55図 BP第1地点とJS地点のブロック配置図



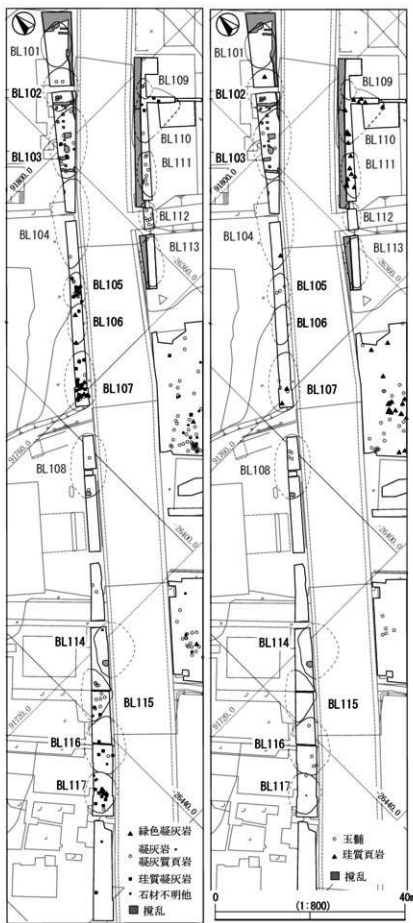
第56図 BP 第1地点のIV層石器群とV層石器群



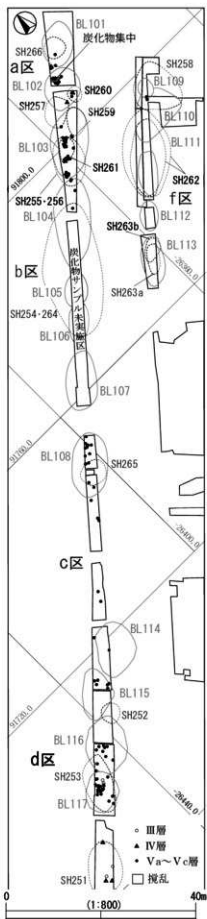
第57図 BP第1地点層位別石器出土状況1



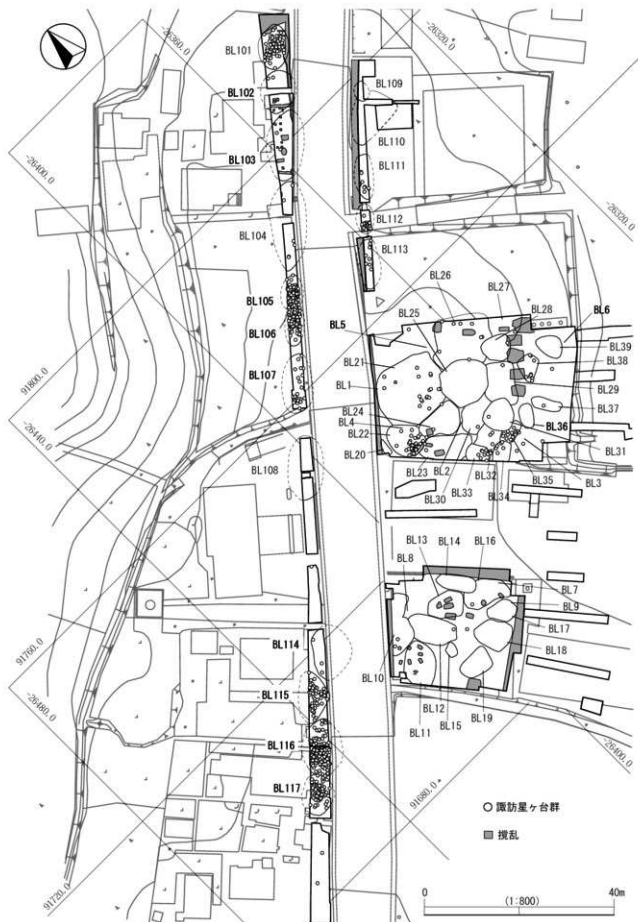
第58図 BP 第1地点石材別出土状況



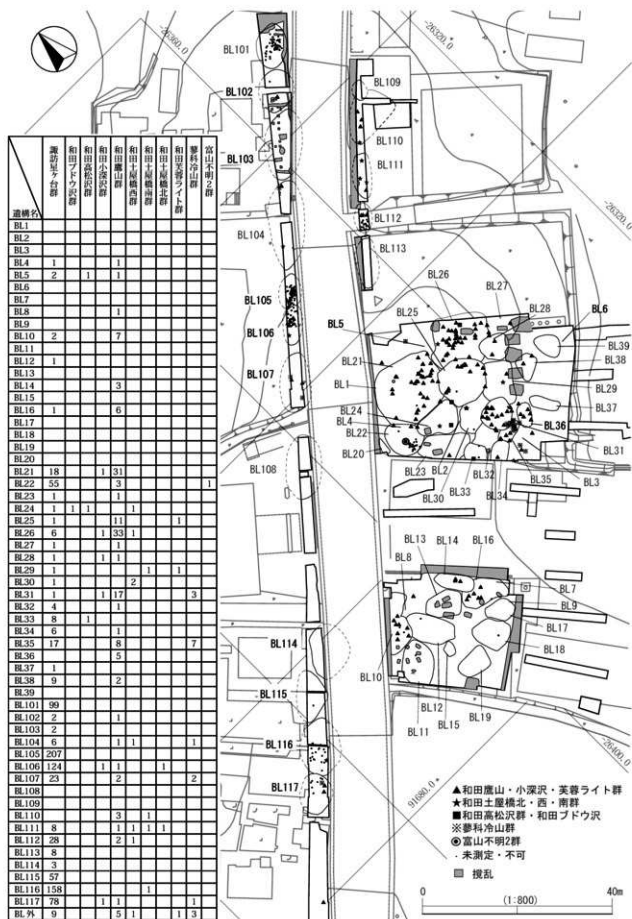
第59図 BP第1地点石材別出土状況 2



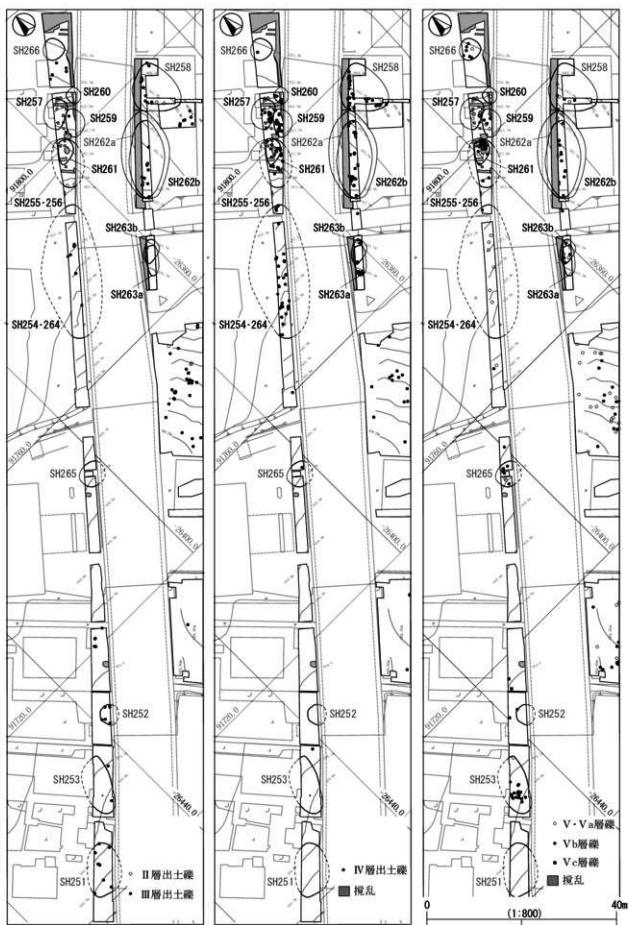
第60図 BP第1地点炭化物出土状況



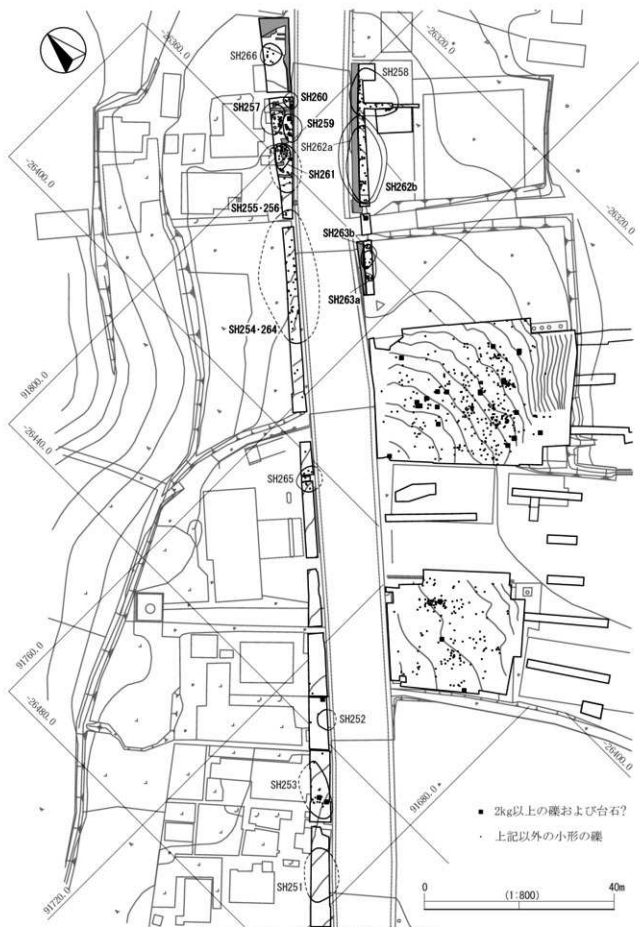
第61図 BP 第1地点とJS地点の黒曜石産地別分布図1



第62図 BP第1地点とJS地点の黒曜石産地別分布2



第63図 BP 第1地点の掘出土状況



第64図 BP第1地点旧石器時代の礫出土状況

4 遺構

(1) ブロックおよびブロック間の接合関係

各ブロックの器種組成、石材組成、層位別出土点数を第26・28表に示した。また、各ブロックの石器については第65・66図と遺物図版(第73～89図)を参照していただきたい。調査区が狭いことから、ブロックの全体を調査したものはない。唯一BL101がブロックの全体像をかるうじてつかめる程度である。

BL101 (第65図)

黒曜石を主体とした石材組成を示し、V b層に出土数のピークがある。V b層に生活面がある単一時期のブロックと認識した。SH266と分布が重なっており、ブロックと関連する礫群と思われる。

BL102～104 (第65図)

いずれも散漫な分布状況を示す。BL103を中心に旧石器時代の包含層に多くの攪乱が及んでいる。ブロックの分布に重なり、SH254・256～257・259～261・264の礫群が検出されている。これらの礫群の生活面はIV層とV b層とに分けられ、少なくとも二時期の石器群が混在していることが予想される。個別別資料による出土層位の検討でも、複数時期の石器群が混在していることが想定されるが、これらを時期別に分離することは困難である。

BL105・106 (第65図)

いずれも黒曜石を主体とした石材組成を示し、V b層に出土点数のピークがある。それぞれ多少の混在はあるものの、V b層に生活面がある単一時期のブロックと認識した。両者に接合関係は確認できなかったが、黒曜石産地が同じこと、層位別の出土頻度が類似することから、同時期の関連するブロックと判断した。BL105では石器と石核が多く出土し、BL106では石器が少なく、ブロック内の石器保有率が対照的である。また、BL105では白色の珪質凝灰岩の石核が多くみられる事が特徴的である。礫群(SH264)と分布が重なるが、想定される生活面が異なっており、時期が異なるものと判断した。BL105～107の中にIV層石器群と判断したものが含まれており、礫群はこれらのIV層石器群に伴うものと考えられる。

BL107 (第65図)

無斑晶質安山岩・黒曜石・珪質凝灰岩など多種類の石材により構成されている。V a層に出土点数のピークがあるが、IV層石器群としたものを含んでおり、時期が異なるものが混在すると予想される。主体となる石器群はV a～V b層に生活面が想定される。BL108との間はガスリンスタンドの施設のために調査ができなかったが、石材組成が異なっているため、別なブロックと判断した。

BL108 (第65図)

チャートを主体とした石材組成を示し、V b層に出土点数のピークがある。IV層石器群としたものを少数混じるが、Ⅲ・IV層より出土した遺物はチャートが多く、無斑晶質安山岩・玉髓・凝灰質頁岩はいずれもV a層以下から出土した。BL108に含まれる大半の遺物はV b層に生活面がある単一時期のブロックと認識した。

BL109～113 (第66図)

チャートを主体とするBL110を除いて無斑晶質安山岩の比率が高い。これらのブロックに重複して検出された礫群をみると、SH258・262a・263aはIV層中部に、SH262b・263bはV a～V b層に生活面が想定される。個別別資料による検討でもIV層石器群とV層石器群が混在する状況を示しており、BL109～113は複数時期の石器群の混在が予想される。ただし、BL112はV b層の遺物がまとまって出土しているほか、その範囲にはV b層を底面とした台石と思われる大形の礫(遺物番号11666)も出土しており、主体はV b層に生活面をもつブロックであると判断した。一方、他のブロックは出土点数のピークがIV層

中部にあることから、石器群の大半は、IV層に生活面が想定できる。

BL114 (第66図)

便宜的に付したブロック名で、分析上有意な単位ではない。

BL115～117 (第66図)

黒曜石を主体とした石材組成を示し、いずれも出土点数のピークがV b層にある。いずれもV層石器群のみで構成され、単体で持ち込まれた石器は別として、時期が異なる個別別資料は含まれていない。SH251～253の礫群と分布範囲が重なるが、SH251・252はIII層に生活面が想定され、ブロックとは時期が異なる。SH253はBL117と分布範囲が一致しており、礫群と同一平坦面より敲石や大形剥片が出土している。これらはV b層に生活面が想定され、同時に形成されたものである可能性が極めて高いと考える。また、3箇所のブロックの黒曜石はいずれも諏訪星ヶ台群を主体とし、層別別の遺物出土頻度も類似する。BL116とBL117(黒曜石)、BL116とBL115(黒曜石)、BL115とBL117(無斑品質安山岩)で相互に1例ずつの接合関係が確認されていることを考慮すると、3つのブロックは単一時期のブロックであると判断できる。これらのブロックには多くの石器が含まれるが、特に、BL117には微細剥離のある大形の剥片がまつまっており、ブロックを構成する諏訪星ヶ台群とは異なる和田小深沢群・和田鷹山群・蓼科冷山群の黒曜石が少量ながら含まれているのが特徴的である。

なお、第67図にBL113と115の



個体番号	接合資料番号	石材	接合資料数合計	石核	剥片	日遊石	巨形石	礫石	礫群	接合資料番号	掘及	III層	IV層上	IV層中	IV層下	V a層	V b層	ブロック間の接合
271	271A	無斑品質安山岩	3	3						271A						3		BL115とBL117
279	279A	輝石安山岩	2	1				1		279A						1	1	BL116とBL117
280	280A	黒曜石	2		2					280A				1	1			
285	285A	凝灰岩	2	2						285A					1	1		
288	288A	黒曜石	2	2						288A							2	BL116とBL117
289	289A	黒曜石	3	1		1	1			289A				1	1	2		BL115とBL116
292	292A	黒曜石	2	2						292A			1	1				
292	292B	黒曜石	2	2						292B				1	1			
294	294A	無斑品質安山岩	3	3						294A	2							
299	299A	無斑品質安山岩	2	2						299A			2					
301	301A	無斑品質安山岩	2	2						301A				1	1			
313	313A	黒曜石	2	2						313A							2	
315	315A	黒曜石	4	4						315A		2						2
318	318A	黒曜石	2	2						318A							2	
328	328A	無斑品質安山岩	2			1	1			328A					1	1		BL110とBL111
333	333A	チャート	2	2						333A	1							
335	335A	珪質凝灰岩	3	3						335A		1				1	1	
336	336A	チャート	2	2						336A				1	1			
341	341A	チャート	2	1	1					341A	1						1	
354	354A	珪質頁岩	1	1						354A		1						BL107とBL26(JS地点)
360	360A	珪質頁岩	2	2						360A			1				1	
363	363A	黒曜石	3	3						363A		1				1	1	
369	369A	チャート	2	2						369A								2
487	487A	珪質凝灰岩	2	2						487A						2		

第30表 BP第1地点剥片石器群接合資料一覧

一部の遺物の垂直分布を示した。前者はIV層に生活面を想定したブロックで、後者はVb層上面に生活面が想定されるブロックである。礫を除いた石器群の分布をみると、BL113ではV a層以下に遺物はほとんどみられず、BL115と出土状況が明確に異なることがわかる。両者の対比により、遺跡化²²による石器群の拡散が上層へ広がるものの、下層へは拡散しない状況を示していることが理解される。

接合資料

BP第1地点では24例の接合資料が得られた。ブロック間で接合した例は少なく、6例のみである(第30表、第68・69図)。なお、BL107とJS地点のBL26の間で珪質頁岩の接合が確認されたが(接合資料番号354A)、IV層石器群の接合であり、各ブロックの主体を占めるV層石器群の接合ではない。したがって、V層石器群が主体となるBL107とBL26の関連を示す資料とはならない。なお、接合作業はBP第1地点内を2地区に分けて実施し、他地点との接合作業はほとんど実施できなかった。特徴的な石材についてのみ、JS地点との接合を検討したが、それぞれの調査地点の主体を占める、黒曜石、無珸晶質安山岩、チャートについてはまったく接合関係の検討は行っていない。残された最大の課題である。

(2) 礫群(第63・64・70～72図)

礫群の観察基準等については「第2章1節4項(2)礫群および配石」に記した。

431点の礫が出土し、15箇所の礫群を認識した。いずれも輝石安山岩系の亜角礫を使用しており、礫群間による石材の違いはない。SH264～266は整理過程で遺構名を付したものである。礫群の多くは表面が赤化している。欠損したのも認められ、欠損面が赤化していないことから被熱による赤化と考えられる。各礫群の赤化状況および出土層位は第27表に示した。また、礫の接合作業を行ったが、SH264内で接合例があったのみで、遺構間の接合は認められない。個別の礫の属性については、添付CDの礫台帳を参照していただきたい。

SH251・SH252

いずれもⅢ層に生活面が想定され、縄文時代の遺構である可能性がある。赤化した礫が多く含まれる。SH252の下層に重複するBL115・116は礫群とは時期が異なるブロックである。SH251の周辺には他の遺物は少ないが、有形尖頭器、凹石と時期不明の土器小片が出土している。草創期の礫群の可能性もある。SH252は礫群の分布に重なって凹石3点、磨石1点、石鏃1点と土器小片少量が出土している。土器には前期のものが含まれるが、野尻湖遺跡群では、Ⅲ層は旧石器時代末から縄文時代早期の包含層と理解しており、混入の可能性はある。

SH253(第70図)

Vb層に生活面が想定される礫群である。2地区に分けた調査を行い、調査後に全体像が明らかとなった。BL117に分布が重なっており、BL115～117との関連が注意される礫群である。大形の礫が2個あり、赤化した礫が周辺部に分布する。大形の礫はいずれも赤化しており、特に遺物番号5770は赤化が顕著で、黒色付着物が認められる。同一平面より、敲石(1101)が出土した。また、礫群周辺には5mm以上の大形の炭化物が出土している(第60図)。

SH254・264

IV層に生活面が想定される礫群で、a区南端に確認されたものをSH254とし、b区のをSH264とした。IV層の礫のみをみると、b区北東部に分布の空白部があり、2つの礫群に分かれる可能性もある。拳大前後の礫で、赤化したものが多く含まれ、JS地点で確認されたIV層に生活面を想定した礫群(SH205～208)の礫に類似する。

BL104～106に重なって分布するが、BL105・106はVb層に生活面が想定される石器群(V層石器

註2 遺跡化とは、遺構・遺物が遺跡に残された後に、人為的または自然現象によりその状態が変化することを示す。

群)を主体としており、礫群とは時期が異なる。上記4ブロックの中にはIV層石器群も混在していると想定しており、礫群はこれらに伴うものと考えられる。

SH255～257・259・260・261 (第70・71図)

いずれも顕著に赤化した礫が多く含まれており、使用状況が類似する礫群である。これらの礫群が出土したa区は、III層下部まで攪乱が及んでおり、III層の状況は不明である。

SH255・256はIV層に生活面が想定される。IV層上部の礫が多くSH254と同時期の可能性が高い。拳大からやや大きな礫を用いており、欠損している個体が多い。欠損面は赤化が認められず、被熱による欠損と考えられる。



SH258 内IV層出土礫 南東より

SH257・259・260はIV層下部からV a層に遺物点数が多い。前述のSH255・256に比べやや下位に出土しているが、時期が異なるものなのか、遺跡化による出土層位の違いが生じたのか確認はできない。遺跡化による礫の移動の影響が均一であるとすると、これらはIV層下部からV a層に生活面が想定される。SH257は拳大よりやや大きめの、乳幼児頭大の輝石安山岩系の礫を用いている。SH259の遺物番号11020は20cm四方の方形の礫で、ほとんど赤化していない。その他は5cm大から拳大のものが多く、10cm前後の扁平な垂角礫も含まれる。

SH261はSH255・256の下部で確認された礫群で、V b層に生活面が想定される。垂角礫の多い礫群で、ほとんどが1～2cmの小破片礫である。17点が破損面まで赤化している。円礫が2点出土しているが、赤化していない。角礫中にチャートと凝灰岩の赤化した小礫が含まれている。また、礫群周辺のV層より5mm以上の大形の炭化物粒が出土している(第60図)。

a区で確認された6基の礫群は、二時期もしくは三時期に分離されるものである。これらの礫群はBL102・103と分布範囲が重なるが、いずれも複数時期のものが混在しており、礫群に伴う石器群を抽出することは困難である。

SH258

IV層中部に多くの礫が出土しており、IV層に生活面が想定される礫群である。拳大よりも大きめの垂角礫を用い、礫面が赤化しており、a区のIV層出土の礫に類似した属性を有する。欠損品の中には、欠損面が赤化しているものもある。BL109・110と分布が重なっており、関連が想定される。

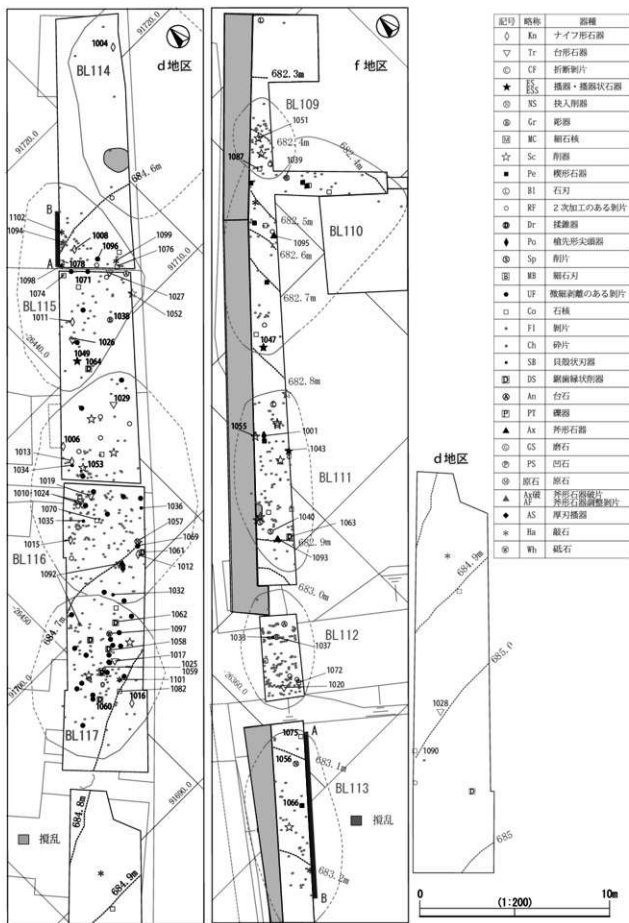
SH262

III層からV b層まで礫が出土しており、上部のものをSH262a、下部のものをSH262bとした。SH262aは拳大の垂角礫が主体となり、赤化礫が多い。SH262bは5cm大の小形の礫が多く、顕著な赤化は認められない。暗褐色や黒色の付着物があるが、付着物の分析を行っていないため、地層内の鉄分などが沈着した可能性もある。なお、V層より出土した付着物がある礫の状況は、JS地点のSH210によく似ている。

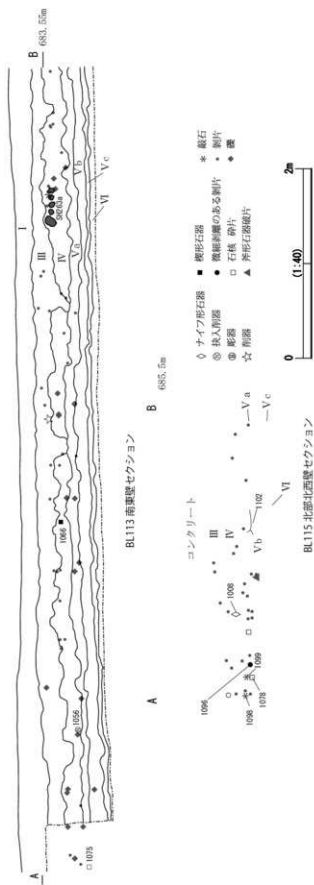
複数時期の石器群が混在するBL110・111と分布が重なる。SH262aはIV層に、SH262bはV b層に生活面が想定される礫群と認識した。SH262bについては近接するBL112のV b層より台石と思われる大形の礫が出土しており、後述のSH263bとともに関連した遺構である可能性を指摘したい。また、本遺構の南東側ではセブンイレブン建設に伴い信濃町教育委員会が発掘調査を実施しており、V b層から砥石、斧形石器を含んだ石器群が発見されている。



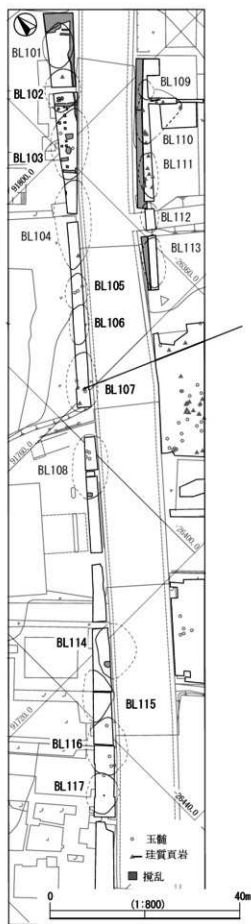
第65図 BP 第1地点 a～c 区石器分布図



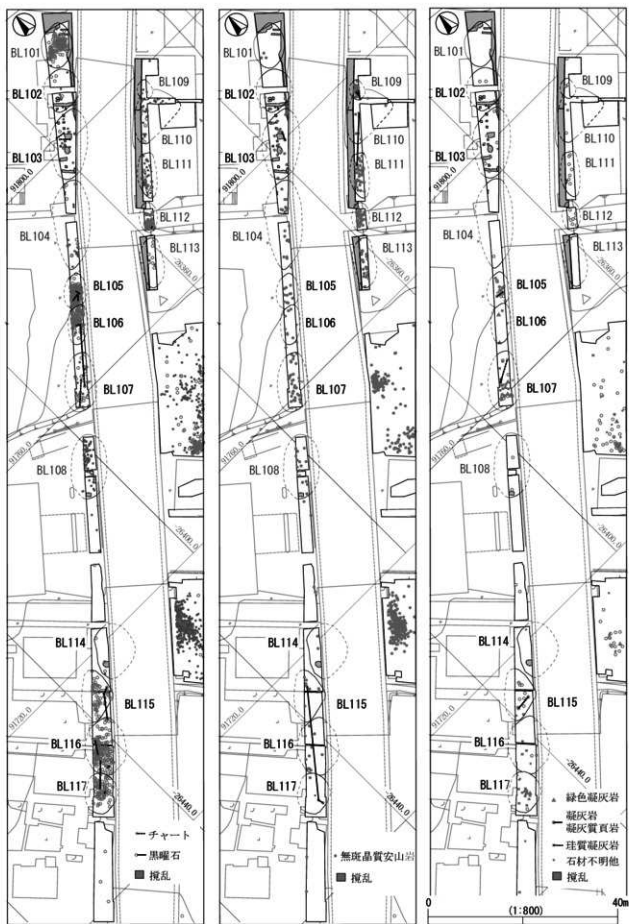
第66図 BP第1地点d～f区石器分布図



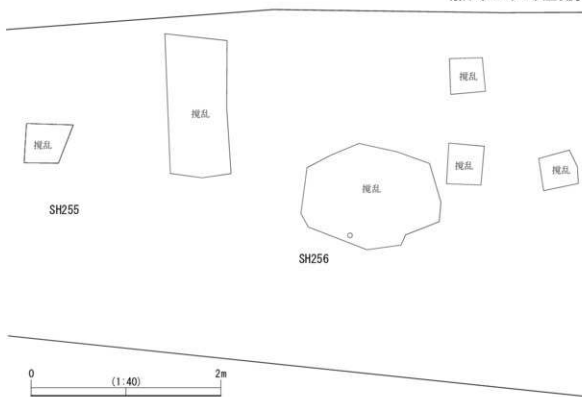
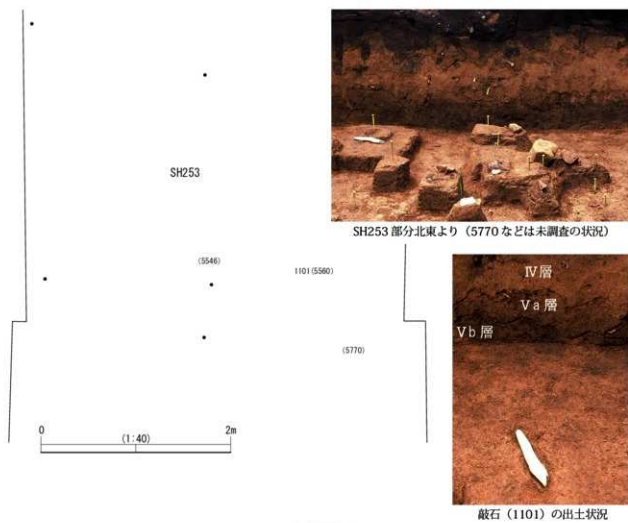
第67図 BP 第1地点 BL113・115 垂直分布図



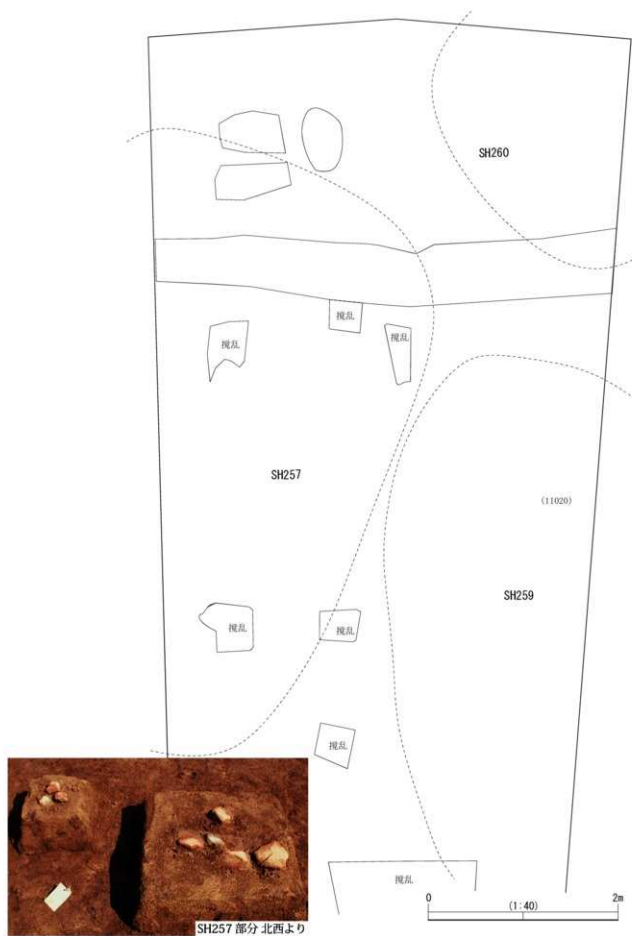
第68図 BP 第1地点接合関係図1



第69図 BP第1地点接合関係図2



第70図 BP 第1地点群1 (SH253・255・256)



第71図 BP第1地点礫群2 (SH257・259・260)

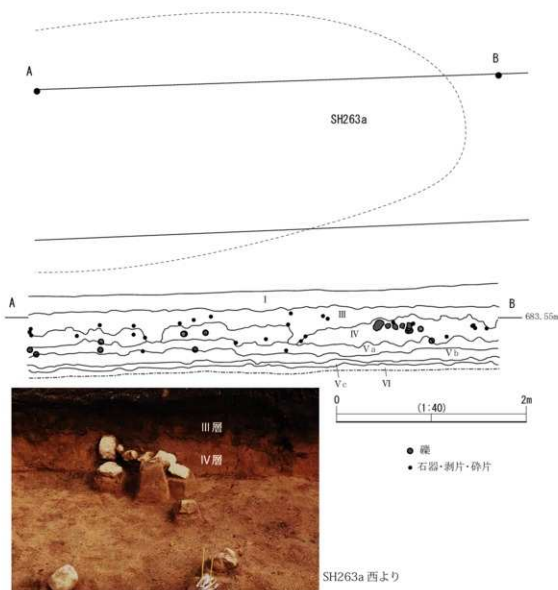
SH263 (第72図)

IV層中部からV b層間で礫が出土しており、上部のものをSH263 a、下部のものをSH263bとした。SH263aは拳大前後の礫を用い、赤化したものが多い。遺構範囲の南端部でIV層中部にまとまって出土していることから、IV層中部に生活面が想定される。SH263bの赤化「強」はすべてIV層下部であり、SH263aに関わる礫の可能性もある。V b層中より出土した礫には赤化がほとんどみられず、SH262bと同様な暗褐色や黒色の付着物がある。

IV層石器群を主体とするBL113の分布が重なっており、SH263aと同一生活面の石器群であることが想定される。

SH265

V b層に生活面が想定される礫群である。V a・V b層のものは赤化が明確ではなく、SH262bの礫に類似した暗褐色や黒色の付着物がみられる。礫の大きさも3~7 cm大でIV層から出土する顕著に赤化した礫よりも小形である。礫群周辺より、5 mm以上の大形の炭化物が出土している(第60図)。分布範囲が重なるBL108は同一生活面の石器群であることが想定される。



第72図 BP 第1地点礫群3 (SH263a)

SH266

V a・V b層から多くの礫が出土した。顕著に赤化した礫はIV層より出土しており、時期が異なる遺物であろう。V b層中のももの2 cm大の小礫も含まれており、礫群としては貧弱であるが、5mほど南西にV b層を中心とした炭化物集中が認められることから、礫群の一部である可能性を残しておきたい。また、分布範囲が重なるBL101は、同一生活面の石器群であることが想定される。

5 出土遺物

(1) 石器(第73～89図・PL9～13)

剥片石器、礫石器201点、石核55点、剥片・碎片1610点が出土した。ブロック別の器種組成、器種別の石材組成を第28・29表に示した。

1. 槍先形尖頭器(1001～1003)

3点の槍先形尖頭器が出土した。いずれも無斑品質安山岩で、欠損品である。1003は先端部が折れており打点がないため断定できないが、櫛状剥離が施された槍先形尖頭器と判断した。

2. ナイフ形石器(1004～1016)

14点のナイフ形石器が出土した。黒曜石と無斑品質安山岩が主体となる。1004・1005・1008は基部に腹面より調整加工が認められ、いずれも打面を残す。1005は先端が欠損しており、整理途中で出土地点が不明となってしまった資料であるが、BL105・106もしくはBP第2地点BL207のいずれかに含まれる。1006は基部を欠損しており、左側縁の先端部に背面からのブランディングが認められる。1007は打面を残した石刃状の縦長剥片の先端部を切るようにブランディングを施している。1009は欠損しており、一側縁に腹面からのブランディングが施されるが、背面からの加工はガジリのようにも観察される。1010と1015は先端部があり基部に調整加工が認められる。素材剥片の形状が異なり、1010は先端部からファシット状の剥離が認められ、1015は打面を残し、厚い打瘤に調整加工が及んでいる。1011は打面を残して、剥片の形状をほとんど変更することなく、先端部の左側縁にブランディングが認められる。1012は打面を残した石刃状の縦長剥片の基部の二側縁に調整加工が認められ、それぞれ背面と腹面から剥離が施される。1014は欠損品であるが、打面を残しており、明確なブランディングが認められる。

3. 台形石器(1017～1031)

16点出土した。黒曜石が主体となる。1017と1019は小形の剥片の基部に搔器状石器の加工部に類似した調整加工が施されており、いずれも打面を残している。1018・1020・1021・1023はブランディングによる二側縁加工の、小形の台形石器である。1020の右側縁は「折り」による形状の変更と判断し、台形石器とした。1022・1030・1031は厚い剥片を用いて、急角度の切り立ったブランディングがみられる。1024～1029は剥片素材も薄く、急角度のブランディングは認められず、搔器状石器の加工部に類似した小剥離の加工(1024)や平坦剥離(1025・1028)がみられるものがある。1024・1026・1029には打面が残されている。また、1027の刃部には微細な剥離が認められる。

4. 貝殻状刃器(1032～1036)

6点出土し、いずれも黒曜石である。縁辺に微細な剥離が確認される。1032・1035は打瘤を除去するかのよう腹面に大きな剥離がなされる。このような覆面の大きな剥離は、2次加工のある剥片、鋸歯縁状刃器などにもみられる。いずれもV層を中心に出土しており、特にJS地点とBP第1地点に多く見られる。1033は背面からのノッチ状の加工が見られ、抉入刃器にも分類しうる。

5. 彫器 (1037～1039)

彫器は破片を含めて4点出土した。いずれもIV層より出土した。1037は打面を残し、二側縁に調整加工が見られ、打面から槌状剥離がなされる。全体に磨耗しており、特に、主剥離面の磨耗が顕著である。折れ面のエッジにも微細な剥離が認められる。1038は打面部の折れた面に調整加工が施されており、完形品である。槌状剥離の打面部分には表裏両面から調整加工が施され、他の部分は腹面からの調整加工となる。1039も打面が折れており、折れ面を打面とした剥離痕が観察される。側縁に連続した調整加工を施した後、槌状剥離がなされる。槌状剥離の打面には、剥片の背面からの調整加工が認められる。

6. 削片 (1040)

BL111より2点の削片が出土した。1040は主剥離面が側縁部の調整加工を切っている。BP第1地点では少ないが、BP第4地点に同じ特徴を持つ削片が多数出土した。

7. 掻器 (1041～1048)

8点出土した。珪質頁岩、無斑品質安山岩、チャート、黒曜石のものがある。Ⅲ層とⅣ層から出土しており、BP第2地点に近いブロックのみに出土する。

1041・1045・1046～1048は縦長の剥片の長軸の端部に刃部を作出しており、1041・1045・1048には打面が残されている。1042・1043・1044は主剥離面の剥離方向の観察が十分でなく、図の表現とは異なる可能性もあり、縦長ではない剥片を素材としているものもある。1045の図には表現していないが、刃部のエッジには顕著な磨耗痕が観察される。1047には全面に線状痕がみられ、折れ面のエッジにも微細な剥離痕がある。

8. 掻器状石器 (1049)

2点が出土した。黒曜石と鉄石英である。いずれもVb層より出土した。

9. 削器 (1050～1055)

破片を含めて21点の削器が出土した。黒曜石・無斑品質安山岩・チャートが多い。Ⅲ層からチャートと無斑品質安山岩の削器が7点出土しており、縄文時代の遺物を含んでいる可能性がある。150・152・153は打面を残した黒曜石の剥片を用いてる。150は主剥離面に顕著に線状痕が認められ、産地が和田土屋橋西群と推定されており、BP第1地点出土の黒曜石では希少な産地である。

10. 挟入削器 (1056・1057)

破片を含めて8点が出土した。黒曜石が多く、主にVa～Vb層に出土した。1056は挟入部が複数箇所認められ、鋸歯縁状削器とも分類できる。また、1057は貝殻状削器と類似する特徴を有するが、挟入部に使用痕と思われる微細な剥離が認められることから、挟入削器とした。

11. 鋸歯縁状削器 (1058～1064)

10点出土し、いずれも黒曜石である。BL117に5点がまとまって出土した。BL106でのⅢ層出土の例を除くと、いずれもIV層下部～Vb層で出土した。図示したものでは、1063が和田麩山群で、他は諏訪星ヶ台群と産地推定された。1064は表表面の風化が著しく、線状痕が認められる。加工部分の剥離面は風化が認められず、いわゆる二重パティナであるが、ガジリとの区別が困難な部分もある。

12. 採錐器 (1065)

1点が出土した。BL107のVb層より出土したチャート製である。打面を残す貝殻状の剥片の表裏面より調整加工を施し錐部を作出している。

13. 楔形石器 (1066)

9点が出土した。石材はチャート、黒曜石、無斑品質安山岩である。BL110のIV層下部からVb層にかけてまとまって出土した。1066は対峙する二側縁に階段状剥離が見られ、両極打法による剥離と判断

した。他の楔形石器は図示していないが、チャート製のものは長さ1.5～2cmほどの小形の剥片を用いており、安山岩、黒曜石はそれに比べ大形の剥片を用いている。

14. 2次加工のある剥片

28点出土した。黒曜石、無斑晶質安山岩、チャートなどの石材がある。

15. 微細剥離のある剥片 (1067～1069)

46点が出土した。石材は、黒曜石が37点で主体となり、その他に珪質凝灰岩、チャートなどがある。BL116・117に多数認められる。黒曜石のものは比較的まとまった大きさの大形の剥片に使用痕と思われる、微細な剥離が観察される(PL11)。

16. 剥片・砕片

剥片1031点、砕片579点が出土した。剥片・砕片は個別別資料に分類したのみで、観察・分類・分析は十分に行えなかった。

17. 石核 (1070～1090)

55点が出土した。Ⅱ・Ⅲ層より出土したのも7点含まれ、縄文時代のもも含まれている可能性がある。チャート・黒曜石が多く、無斑晶質安山岩・珪質凝灰岩・凝灰岩・鉄石英などがある。黒曜石はいずれも諏訪星ヶ台群と産地推定された。明確な石刃石核はないが、1081のように石刃状の縦長の剥片を剥がしているものがある。

1070は剥片を素材としており、2次加工のある剥片に分類してもよい資料である。1071・1072は裏面が自然面で打面転移がみられない残核である。前者は自然面を打面としている。1073はわずかに自然面を残す板状の残核で、表面と裏面とでは90°の打面転移が行なわれている。1074は1枚の大きな剥離があるのみで、原石の形状が伺える。1075～1077はサイコロ状の残核で、打面転移が繰り返されている。1078は縦長の剥片を剥いだ後にその剥離面を打面とし、小形の貝殻状剥片が剥がされている。1079～1081は打面を作出し、単一の作業面で剥片剥離がなされ、作業面の裏面は自然面となる残核である。1082～1086は珪質凝灰岩の石核で、本遺跡では希少な石材で、使用時期が限定される石材であることが予想される。1082は板状であるが剥片素材であるかどうか判断できない。全周より剥片剥離がなされる。1083は剥片素材の石核である。1085・1086はサイコロ状を呈し、打面転移を行っている。1087は全面に自然面が残されており、原石の形状が伺えるが、階段状剥離が多く、良好な剥片は得られていない。1088～1090は大形の剥片を素材としたものである。1088は自然面を打面とする。1089は主剥離面からの小さな剥離が数回なされているのみで、利器である可能性もある。1090はBL117の南東側のブロック外に単独で出土したものであり、剥片剥離が行われていない。原石として持ち込まれたものと想定した。

これらの他に、自然面を多く残した、鶏卵大のチャートの石核が多数見られる。また、JS地点やBP第2地点では拳大の原石を用いた無斑晶質安山岩の石核(第41図100・第148図2201)があるが、本地点では1088～1090などの大形の原石から得られた石核のみであり、遺跡内に持ち込まれる原石・石核の在り方を考える上で興味深い。

18. 斧形石器 (1091～1095)

破片を含めて5点出土した。1091は本遺跡出土の斧形石器には見られない石材であり、刃部の作出は認められない。未製品の可能性を考慮して、斧形石器としたが、野尻湖遺跡群でみられる一般的な斧形石器とは異なる。1092は折れる前の調整剥片が接合した例で、刃部と基部の判断が難しい。図の上端部の稜がつつぶれているようにも観察され、上端部が刃部である可能性がある。石材も緑色色を帯びた、安山岩であり、斧形石器に一般的な蛇紋岩とは趣が異なる。1093の刃部の研磨面には顕著な線状痕が観察され、

研磨による稜が確認でき、表裏の剥離面の凸部が顕著に磨耗している。1094も刃部の研磨面には線状痕と研磨による稜が確認される。石材は蛇紋岩であるが、内部に空洞があり極めて脆い石質で、実用に耐えうるものなのか疑問である。

19. 研磨痕がある剥片 (1096)

剥片の背面に研磨痕が観察される。研磨痕は主剥離面より古いもので、斧形石器などの調整剥片と推定した。

20. 砥石 (1097)

1点出土した。砂岩製の小形の砥石である。表裏両面に研ぎ面が確認される。

21. 敲石 (1098～1102)

1099は側面および長軸の端部に敲打痕が認められ、敲打により生じた剥離がある。また、平坦面には線状の敲打痕が認められる。1100は平坦面に敲打痕が観察される。1101は長軸端部にわずかな敲打痕が認められ、反対側の端部は剥離が生じている。1102はBL115のVb層上面で出土したもので(第67図)、長さ26.5cmの大形の敲石である。先端部のやや側面よりに顕著な敲打痕が認められる。このような大形の敲石は仲間遺跡BP第3地点、貫ノ木遺跡H第5地点でまとまって出土している。

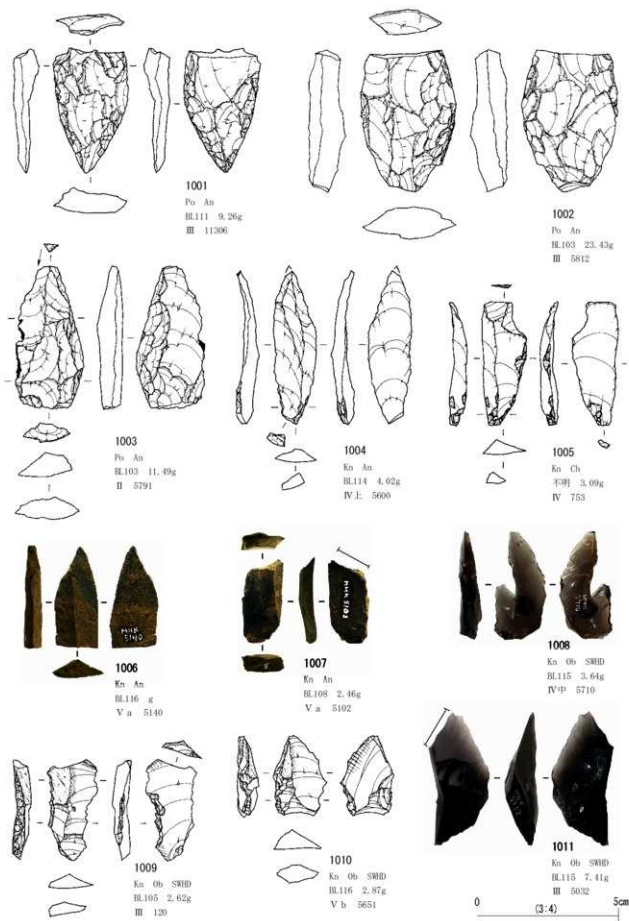
(2) 接合資料 (第30表)

接合資料は24例確認され、石核と剥片の接合例が2例、斧形石器と調整剥片の接合が1例(第87図1092)、他は剥片同士の接合である。調査区が狭く、ブロック全体を調査していないため、接合例が少ない。十分な資料提示ができないが、下図に接合資料315Aの展開写真を示した。石核は確認されなかったが、同一打面から連続して縦長の剥片を剥離している資料である。

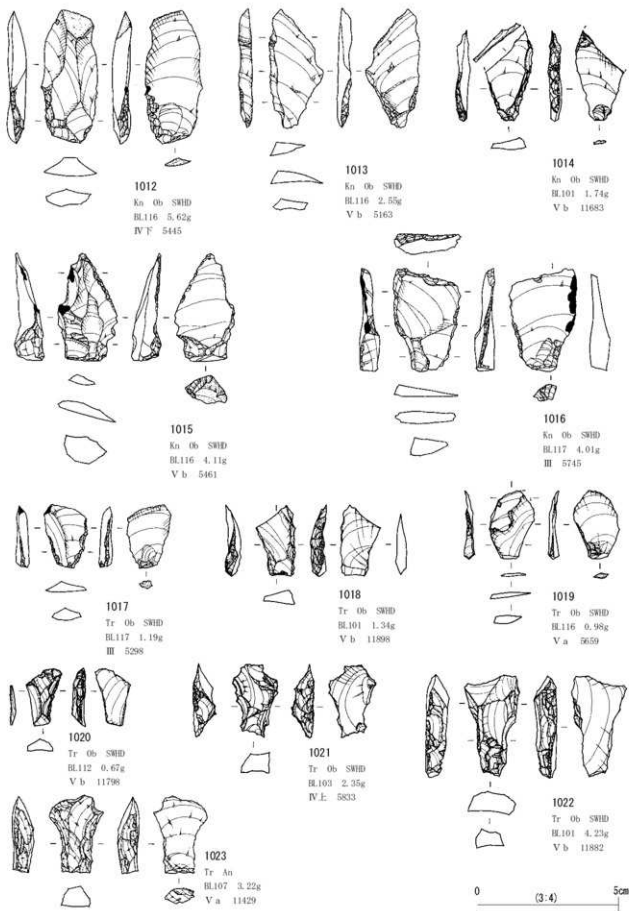
なお、接合資料番号は個別資料番号の末尾にアルファベットを付したものである。



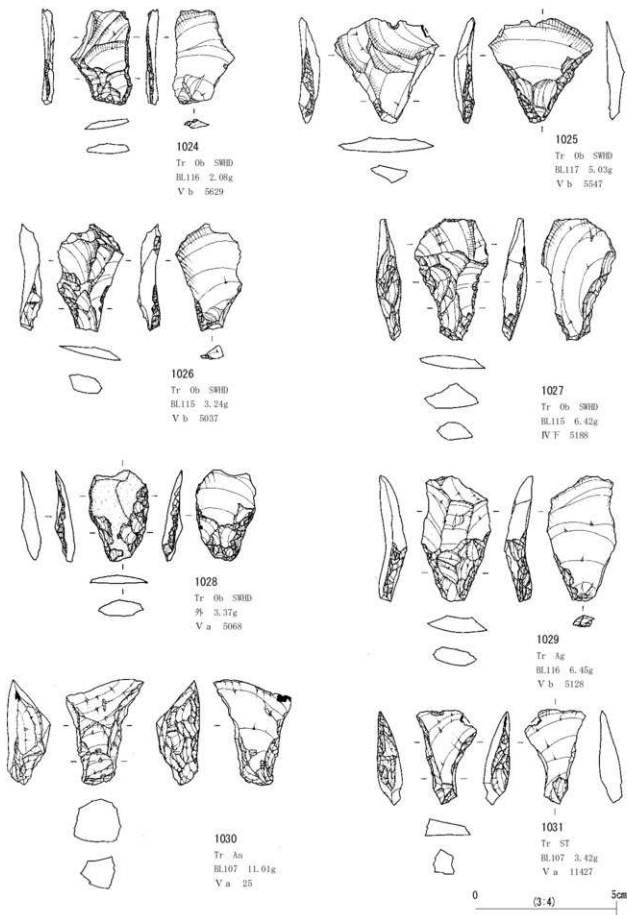
接合資料 315A



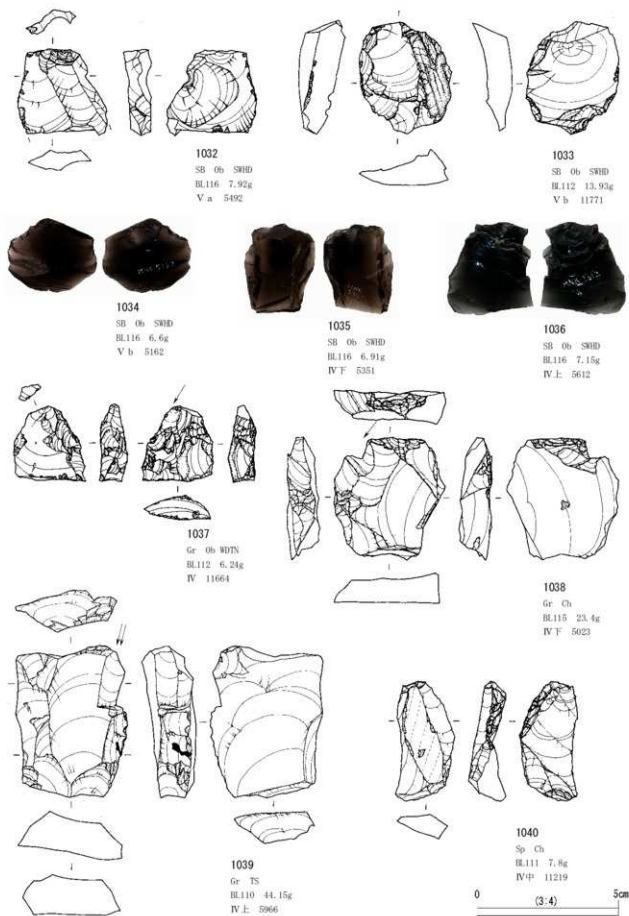
第73図 BP第1地点の石器（槍先形尖頭器・ナイフ形石器1）



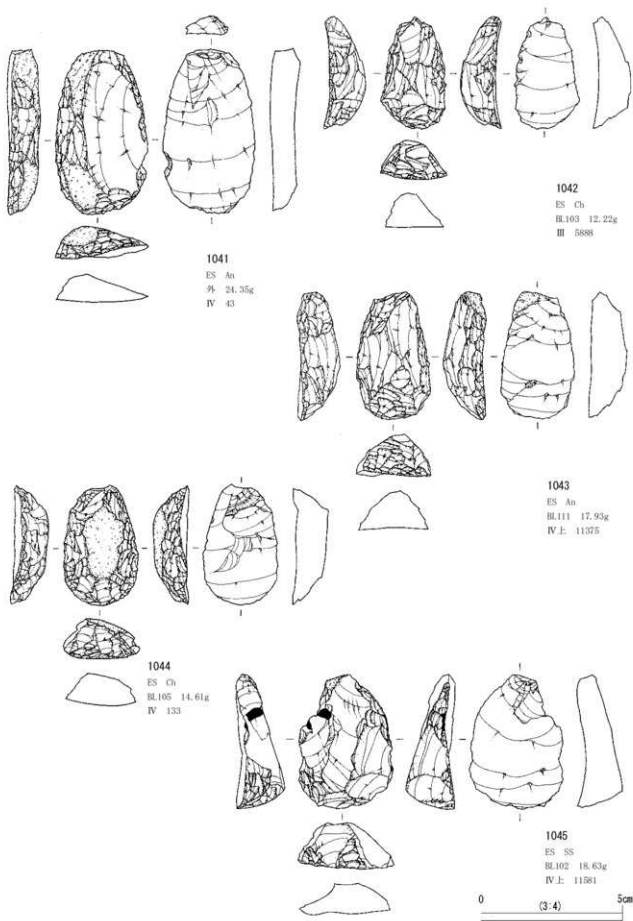
第74図 BP第1地点の石器(ナイフ形石器2・台形石器1)



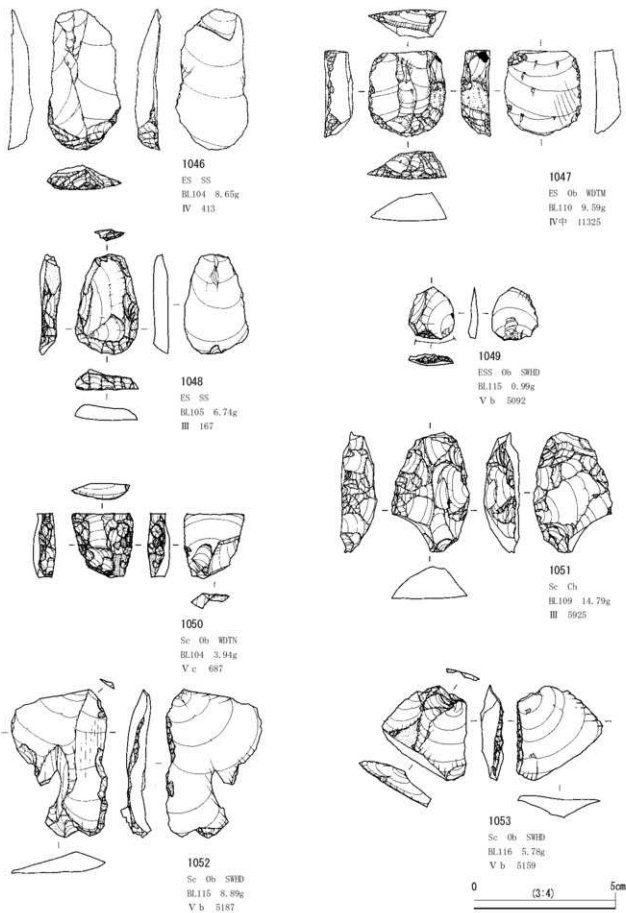
第75図 BP第1地点の石器(台形石器3)



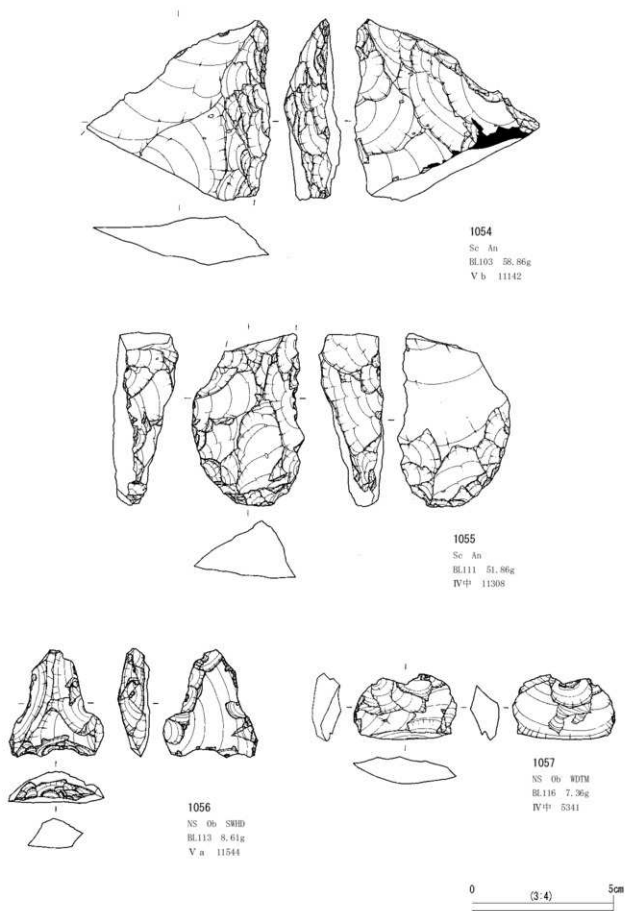
第76図 BP 第1地点の石器（貝殻状刃器・彫器・削片）



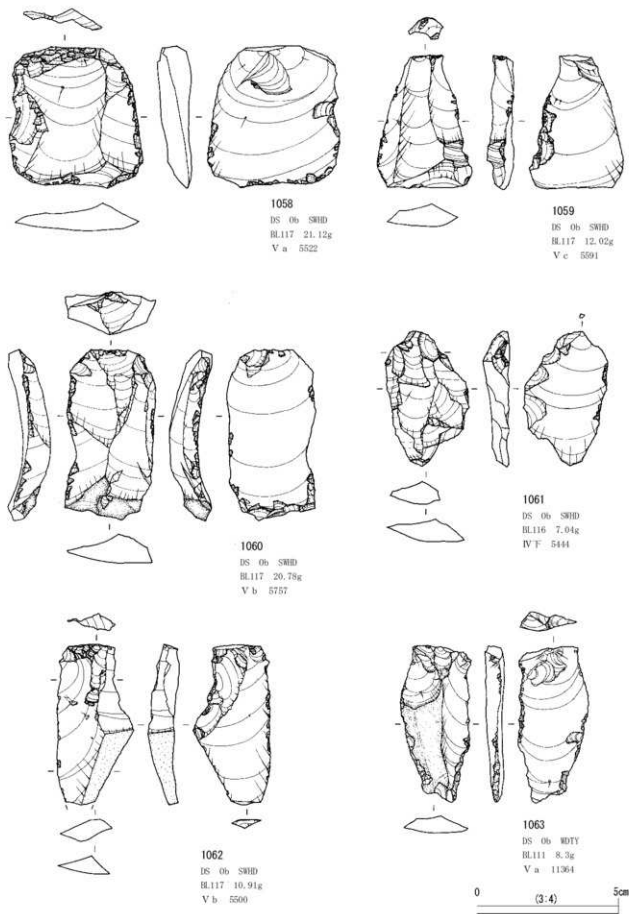
第77図 BP第1地点の石器(挿器1)



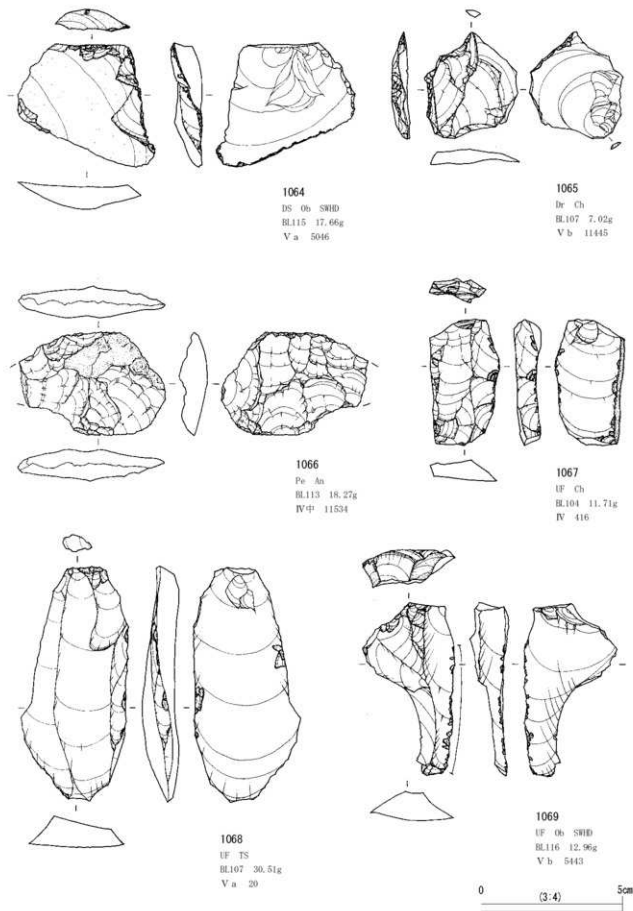
第78図 BP 第1地点の石器 (挿器2・挿器状石器・削器1)



第79図 BP第1地点の石器(削器2・抉入削器)



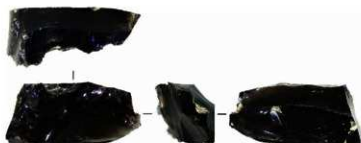
第80図 BP 第1地点の石器(鋸齒縁状刮器1)



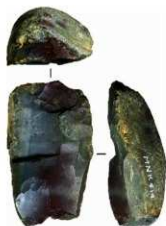
第81図 BP第1地点の石器（鉤歯縁状削器2・揉錐器・楔形石器・微細刻離のある剥片）



第82図 BP 第1地点の石器(石核1)



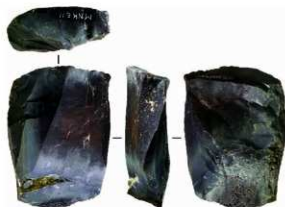
1078
Co Oh SWED
BL115 19.31g
V b 5714



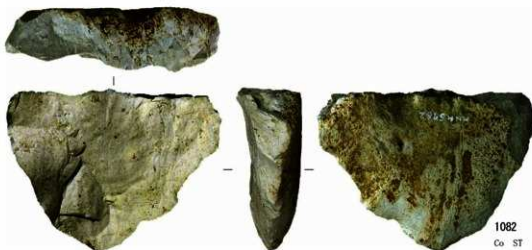
1079
Co Ch
BL104 40.31g
IV 414



1080
Co Ch
BL104 39.35g
IV 415



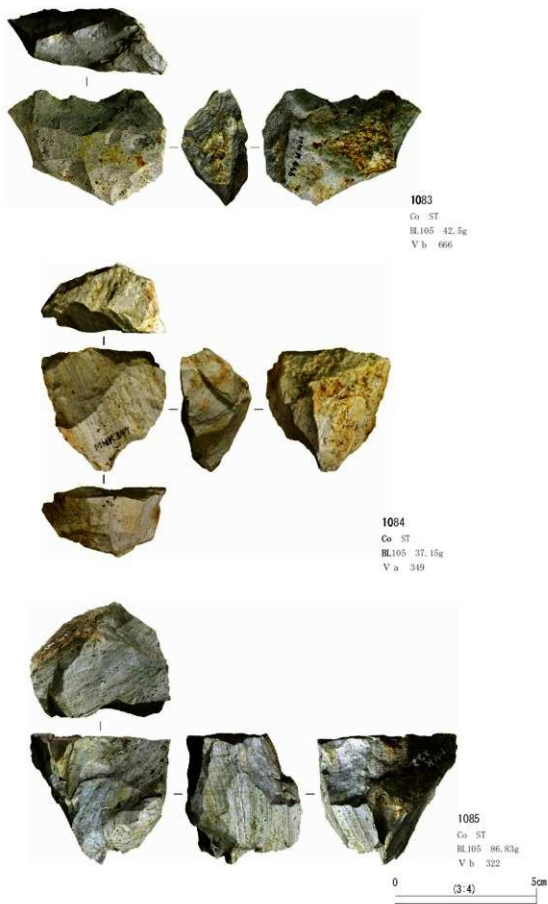
1081
Co Ch
BL104 38.92g
V b 611



1082
Co ST
BL117 83.56g
V b 5762

0 (3:4) 5cm

第83図 BP第1地点の石器(石核2)



第84図 BP 第1地点の石器（石核3）



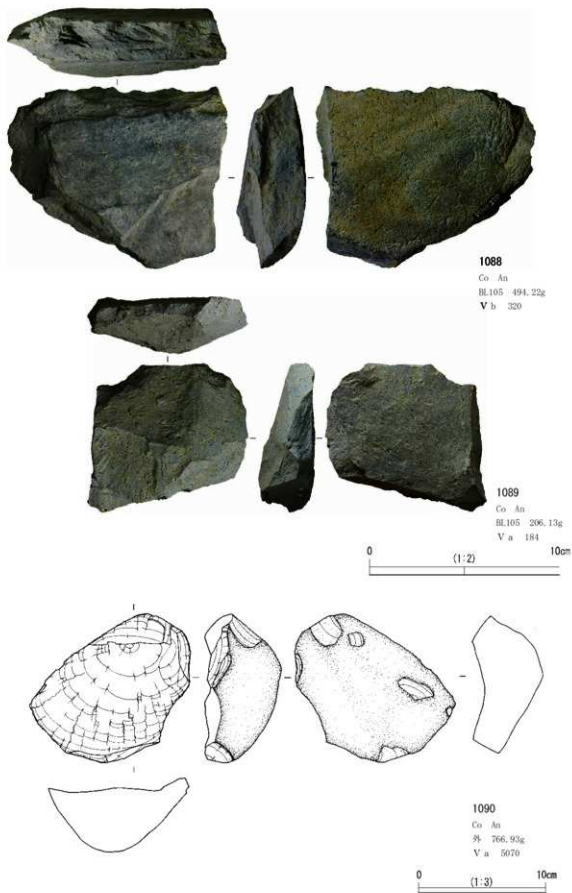
1086
Co ST
BL165 103.01g
V b 494



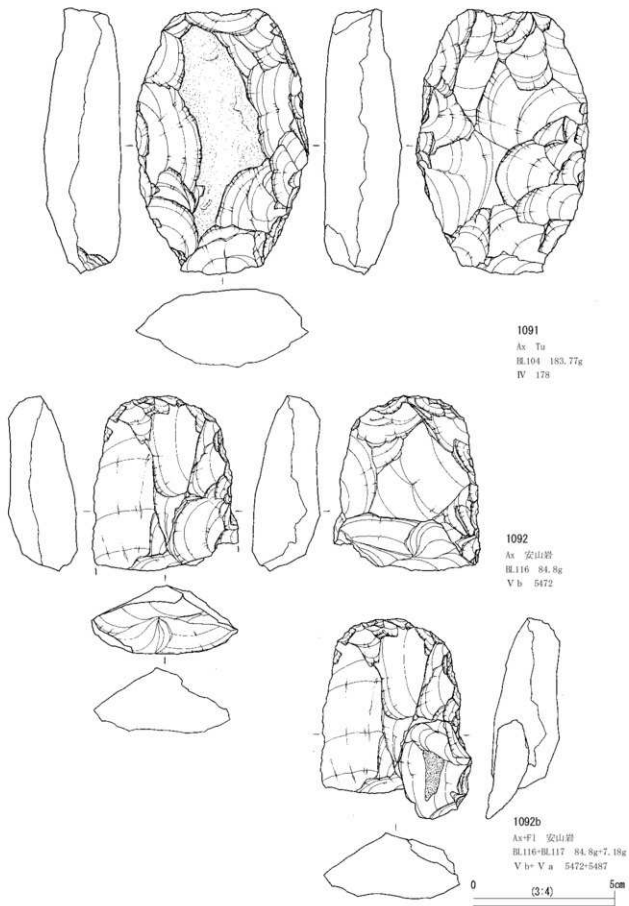
1087
Co Tu
BL109 143.47g
IV中 5946



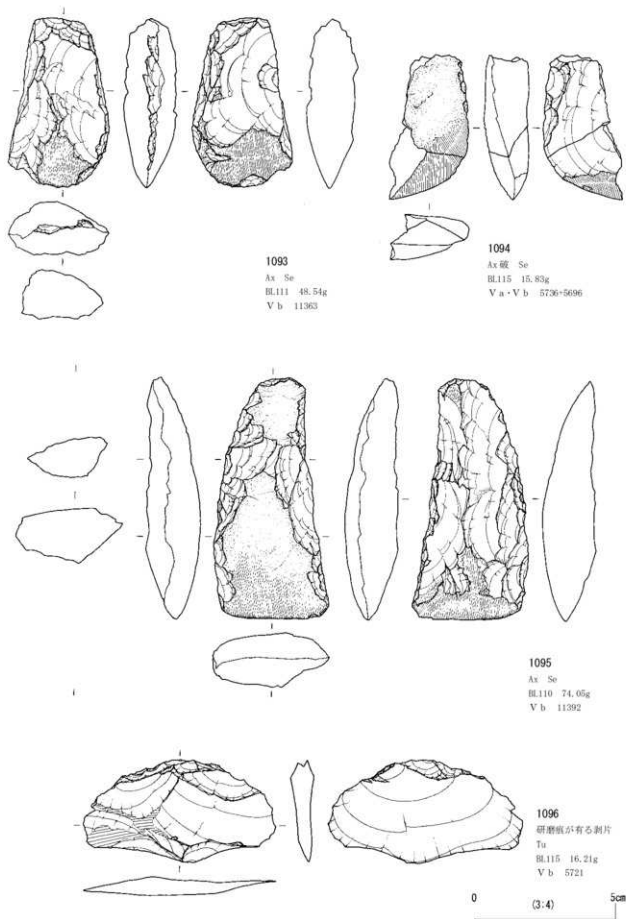
第85図 BP第1地点の石器(石核4)



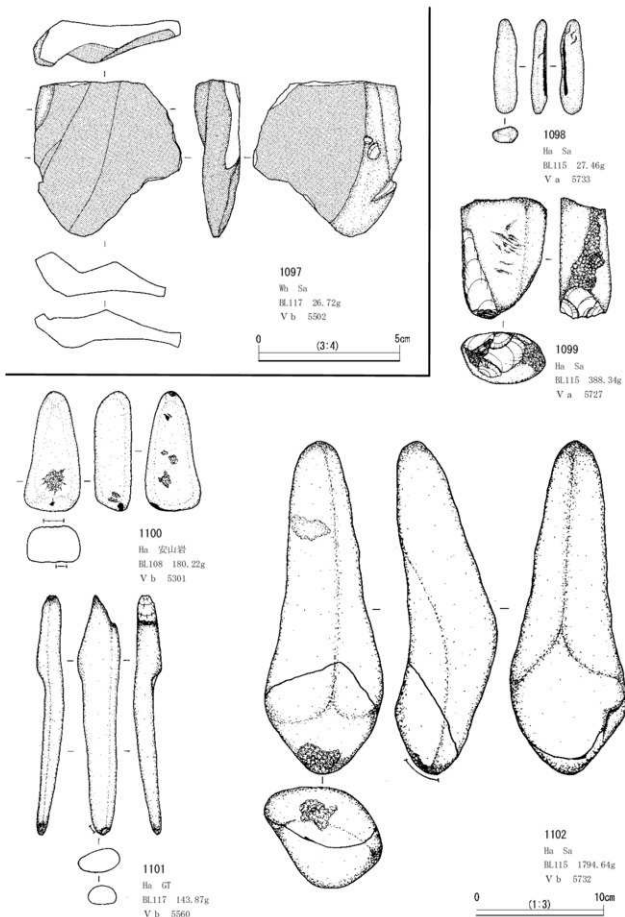
第86図 BP 第1地点の石器(石核5)



第87図 BP第1地点の石器(斧形石器1)



第88図 BP 第1地点の石器(斧形石器2)



第89図 BP第1地点の石器(砥石・敲石)

第3節 BP第2地点の旧石器時代の遺構と遺物

1 調査の概要

国道バイパス第2地点（以下BP第2地点とする）は、H11年度に試掘のためトレンチ調査を行い、平成12年度に本調査を実施した。調査範囲は幅8～21m、長さ350mの広範囲にわたり、調査面積は約5,500㎡になる。宅地部分のいたるところに大きな攪乱がみられた。また、森林部分は抜根により、原位置が不明確となってしまった遺物が少なからずある。実線で囲んだ調査区範囲内は表土を剥いで、Ⅲ層以下の調査を実施した。BP第2地点は、表土を除去したところ、Ⅴ層上面まで攪乱されており、旧石器時代の包含層はすべて失われていた。BP第2a地点や信濃町教育委員会が調査した周辺の状況を見ると、BP第2b地点にも旧石器時代のブロックが存在したと考えられる。

旧石器時代の遺物は8260点が出土した。内訳は、石器839点、石核148点、剥片・破片5390点、礫1883点である。

調査時に認識した石器集中区と礫群は、それぞれSQ、SHの遺構記号を付して記録したが、調査終了後の冬季整理で遺物集中区を認識し、SQ・SHの遺構番号を付したものもある。石器集中区は、その後の整理作業で、石材や出土層位を考慮しブロックとしてとらえ直した。調査時には37箇所の石器集中区を認識していたが、整理段階でブロック数は75箇所に増えた。礫群などの礫集中箇所は調査段階に認識したままとまりをそのまま報告する。ただ、SH318・SH319のように広範囲に広がる礫を一括して一つの遺構記号で取り扱ったものがあるが、これらはさらに小さなまとまりが認められる。また、Ⅴ層中で炭化物物集申が3箇所確認された。それ以外の炭化物の分布状況は不明である。

調査はⅤ層またはⅤ層を除去したところで終了した。ただし、BL267～273の範囲では、Ⅴa層まで掘り下げた段階で遺物が出土しなくなった場合、Ⅴb層の調査は、2m間隔のトレンチ調査を行い、遺物が確認された周辺を拡張する、という方法をとった。また、BL262付近で5×5mの範囲で、赤スコより下層の中部野尻ローム層の確認調査（深掘調査）を行ったが、遺物は出土しなかった。



BP第2地点深堀調査

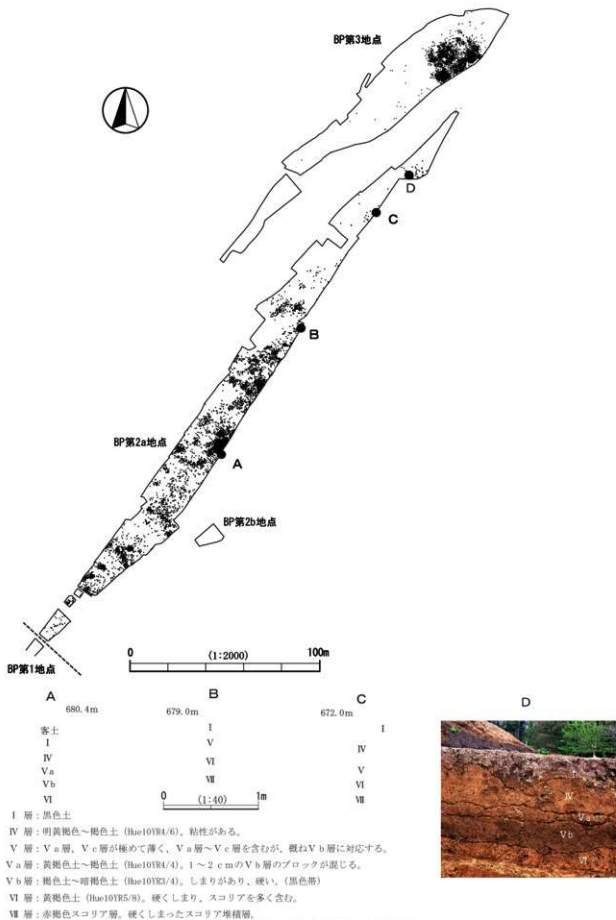
2 調査区周辺の地形と層序

(1) 調査区周辺の地形

調査範囲の大半は仲町丘陵の北西斜面に位置している。仲町丘陵の北西側には池尻川低地が広がっており、調査地点とは20～25mの標高差がある。BP第1地点との境界は便宜的なものであるが、BP第3地点との境界は、断層による急斜面が形成されており、その境界部には伝九朗用水が引かれている。BP第3地点のテラス状の平坦面とは、標高差が約6～8mあり、地形的に明確に分離される。

(2) 調査区周辺の層序 (第90図)

基本土層はJS地点・BP第1地点と同じである。BP第2地点の半分以上は斜面であり、調査区は平坦面と斜面とに区分できる。平坦面ではⅡ層からⅢ層が欠落し、表土の下がⅢ層またはⅣ層となる場所が多い。また、宅地であった場所は攪乱が多く、表土を剥ぐとⅣ層上部が現われるところもある。斜面ではⅡ



第90図 BP第2地点の調査範囲と基本土層

層の黒色土は比較的厚く堆積するが、旧石器時代の遺物包含層は薄いところが多く、断層による亀裂が多数見られ、Ⅶ層（赤スコ）の中に遺物が落ち込んでいる場所もある。斜面の地層は、安定しないところが多い。Ⅴb層が薄い所は、Ⅴa層とⅤb層の分層が困難で、Ⅴa層と思って掘り下げていると、いきなりⅥ層に達する。このような土層では、「Ⅴa層」として遺物を取り上げた場合がある。なお、包含層が薄くてⅤ層の黒色帯が明確ではなく、Ⅳ層中にブロック状に黒色帯の暗褐色土が混じっている場合は、取り上げ層位を「Ⅳ～Ⅴ層」とした。また、Ⅴa層～Ⅴc層が薄く、Ⅴa層とⅤb層、またはⅤb層とⅤc層との分層が困難な場合は、一括してⅤ層とした。

石器群はⅢ層からⅤc層まで連続的に出土しており、地層が安定している平坦面でも個々の石器を出土層位で時期区分することは不可能である。ただし、礫群はⅣ層とⅤb層上面に生活面が確認されることから、二時期以上の石器群の存在が想定される。



断層による段差



Ⅴ層上面の断層の様子

3 遺構と遺物の概要

(1) ブロックの認定

BP第2地点では、礫群の出土層位および石器群の型式学的特徴から複数時期の石器群が混在していることは明らかである。複数時期の石器群の平面分布が重なる場合、包含層が薄いため、それらを分離することは困難である。異なる時期の石器群が重複することを承知した上で、石器群の平面的な分布のまとまりをブロックとしてとらえ、可能な場合は個々のブロックの評価の中で異なる時期の石器群の存在について触れることとした。ブロックはBL201～BL275の75箇所を認定した(第91図)。

個別別資料と出土層位

BP第2地点の個別別資料分類と接合作業は、E～Gの3地区に分けて別個に行った(第9図)。接合作業はE～Gの各地区内で実施したのみで、地区間もしくは他の調査地点との接合作業は基本的には実施していない。接合関係が調査区全域に広がらないのは、接合作業の不備によるものなのか、遺跡そのものの性格によるものなのか、判断できない。接合作業の地区は、遺物分布が疎になるところを境界としているが、環状ブロック群などの空白部分であった場合、その関係を示す資料を提示できないこととなる。

BP第2地点では411の個別別資料を認識した。このうち7個体は出土層位から判断して縄文時代の可能性がある。この他に単独で遺跡内に持ち込まれたと判断した石器(個体番号20000番台のもの)が253点存在する。このうち73点はⅠ～Ⅲ層および攪乱より出土したもので、縄文時代の石器を含む可能性がある^{註1}。

これらの個別別資料の出土層位を検討したが、他地点に比べ包含層が薄く、Ⅴb層が明確でないブロックが多い。そこで、以下の基準で個別別資料を分別した。Ⅲ層またはⅣ層に出土頻度のピークがあるものをⅣ層石器群、Ⅴ層またはⅤa層に出土頻度のピークがあるものと4割以上がⅤ層より出土したものをⅤ層石器群と仮称する。なお、「Ⅳ～Ⅴ層」にピークがあるなど、どちらとも判断がつかない資料はⅣ～Ⅴ層石器群とした。これらの分類に基づき、第92・93図に、同一母岩が遺跡内に認められない20000番

註1 個別別資料の層位別出土点数と石器群の時期区分一覧をCDに収録した。ファイル名「BP第2地点個別別資料層位別出土点数」

期の石器群が混在するブロックと単一時期の石器群で構成されるブロックがあるが、包含層が薄いため、出土層位から、異なる時期の石器群を明確に区分することは困難である。

JS地点・BP第1地点とは異なる本地点の特徴の一つとして、石刃を多数出土するブロックが多くある。石刃はBL207～BL245の間に限定されており、調査区の南西側にはほとんど認められない(第102図)。また、これらの石刃が出土したブロックでは、台形石器や斧形石器が出土している。BP第3地点・第4地点でも石刃が出土しているが、台形石器や斧形石器は伴わない。これらの石器が同時期のものであるのかの検討を要するが、BP第2地点は層位が不安定であり明確な根拠を得ることができない。

また、接合関係からいくつかのブロックが同時期に存在したことを指摘できる。チャートの接合からBL221・BL226、BL234・BL235・BL236、珪質頁岩の接合からBL226・BL229・BL235・BL243・BL245、無斑晶質安山岩の接合からBL221・BL222・BL223、これらのブロックがそれぞれ同時期に存在したことが推定される。他にもブロック間の接合がみられるが、ブロックの同時性を示すには確実性に乏しい。(第97～101図・第31表)

黒曜石の産地別分布状況(第32表・第103図)

黒曜石の産地推定分析は国立沼津高等専門学校望月明彦教授に依頼し、内容の詳細は添付CDに収録した。

1044点の黒曜石のうち842点の産地が推定された。諏訪星ヶ台群が540点と最も多く、217点の和田鷹山群とで全体の約9割を占める。県外の産地のものは認められない。ブロック別では、諏訪星ヶ台群のみが卓越するBL220・234～237・262・265、和田鷹山群が卓越するBL250・255・257、両者が並存するBL246・251・253・256、以上3群の類型化ができていく。また、BL273には和田高松沢群がまとまっており、蓼科冷山群はBL213～223とBL261～274の範囲、すなわち調査区の北東側と南西側に限定される。

礫と炭化物の分布状況(第34表・第104・105図)

Ⅲ層からV層にかけて1867点の礫が出土し、26箇所の礫の集中区を検出した。第35表に各礫群の出土層位組成と赤化状況および付着物の有無を示した。I～Ⅲ層から出土した礫は縄文時代の遺物である可能性もあるが、出土点数は少なく、本調査地点では縄文時代の礫群は認められない。IV層に生活面が想定されるSH303・304・307・309・318・1002、Va・Vb層に生活面が想定される

ブロック名	諏訪星ヶ台群	和田鷹山群	和田鷹山群西群	和田鷹山群東群	和田鷹山群南群	和田鷹山群北群	和田鷹山群西群	和田鷹山群東群	和田鷹山群南群	和田鷹山群北群	調査不可能	合計
BL201	2		1									3
BL202	2											2
BL203	1		5					1				7
BL204		1	9						3			12
BL205	2	1	1			1						4
BL206	22		9	4	1	2			4			42
BL207	4					1	2					7
BL208	1		3									4
BL209	2		1									3
BL210	1											1
BL211	1		13								14	26
BL212	1		7									8
BL213	2		5						3	1		11
BL214	1		7									8
BL215	8	1							1	5	15	23
BL216	2								1	2		5
BL217	10		8						5	23		41
BL218			3									3
BL219	1								2	3		6
BL220	44		4						8	56		102
BL221	1								1	3		4
BL222	5		2						1	9		12
BL223	3		2					3	2	10		17
BL224	1									1		2
BL225	1		1						1	3		5
BL226	4		3							7		14
BL227	1		2							3		6
BL228			2							2		4
BL229	2		6	1						1		10
BL231			1							1		2
BL232	2		1	4						7		13
BL233	2		5					5		17		29
BL234	14				2	1				2		19
BL235	53					1				23		77
BL236	8	1								3		12
BL237	33		3							9		45
BL238	8		2							1		11
BL239	7		1							1		9
BL240	10									10		20
BL241	2	1	1							2		6
BL242	2									2		4
BL243										1		1
BL244			1							1		2
BL245	1			1						2		4
BL246	4		10					1		4		19
BL247	1									1		2
BL248										1		1
BL249	5		2							7		14
BL250	1		12							8		20
BL251	10		1	7						4		22
BL252	5	1	2			1	1			1		11
BL253	14		18							1		33
BL254	2		2							1		5
BL255	2		10					1		1		14
BL256	8		8							16		32
BL257	1		17					1		19		37
BL258			2			1				1		4
BL259	3		2							2		7
BL260	1									2		3
BL261	16		1			1			2	11		31
BL262	31		1							3		35
BL263	4									4		8
BL264	1									1		2
BL265	130									46		176
BL266	3							1		4		8
BL267	4									1		5
BL268	2		2			1				5		10
BL269	2	1								3		6
BL270						1				1		2
BL271	1									1		2
BL272	5	1	1	1				1	1	10		19
BL273	2	14	1							6		23
BL274	2		1						2	3		8
BL275	7		1							2		10
ブロック外	9		11			1				1		20
計	540	18	6	217	10	4	9	13	25	202		1044

第32表 BP第2地点黒曜石の産地推定

SH305・306・308・310～313・320・1004 などがある。このほかの礫群は、SH317・319 などのように異なる時期の礫群が混在していると想定されるものや、層位が安定せず生活面を特定できないものもある。

SH305・310・313は円礫を用いており、他の礫群が亜角礫を用いているのと区別される。また、円礫には被熱の痕跡が認められないことから、これらの円礫のまとまりを配石とし、他の礫群と区別した。

また、2kgを超える大形の礫が17点出土した。SH319とSH322の大形礫には、赤化したもの(遺物番号17969・19382)、黒色付着物がみられるもの(遺物番号19340)が確認された。いずれも底面がV層にあり、Va層～Vb層に生活面が想定される。これらの大形の礫はSH311・319・320・322などに集中する。大形の礫を用いた台石も大形礫と同様な分布傾向を示し、1点を除きいずれもV層に生活面が想定される。

炭化物は5mm以上を基準とし、210点の炭化物を採取した。内訳は、Ⅲ層5点、Ⅳ層10点、Ⅴ層一括80点、Va層35点、Vb層60点、Vc層20点であり、Ⅴ層の炭化物が多い。炭化物の分布は礫群の分布に概ね重なり、Ⅴ層中に炭化物の集中範囲を3箇所確認した(SF306～308)。Ⅳ層に比べⅤ層に炭化物が多いのは仲町遺跡全体に見られる傾向である。

これらの炭化物の樹種同定は実施していない。BL212とSH308に含まれるVa層出土の炭化物の年代測定を実施した結果、炭素14年代 $29,400 \pm 370$ yrBPと 110 ± 70 yrBPの値が得られた(第9表)。後者の年代は、根や小動物などの攪乱によりVb層に持ち込まれた炭化物であったため、新しいのであろう。分析結果の詳細な報告は添付したCDに収録する。

(3) 遺物の概要

器種組成

BP第2地点は旧石器時代の包含層が薄く、さらにⅡ・Ⅲ層が欠落する場所もあり、旧石器時代の遺物が表土まで浮き上がっていることが予想される。Ⅰ～Ⅲ層の遺物については縄文時代に特有な器種以外は旧石器時代の遺物と仮定して報告をした。第35・36表にブロック別器種組成と層位別器種組成を示した。

遺構名	掘戻	I	Ⅲ	Ⅳ	V	Va	Vb	Vc	合計	遺構名	赤化強	赤化弱	赤化無	合計	黒色付着物	遺構名	完形	欠損	破片	合計
SH301				9	4			1	15	SH301	10	3	1	14		SH301	5	6	3	14
SH302	1			9	18				28	SH302	23	4	1	28		SH302	8	18	2	28
SH303				9					9	SH303	4	4	1	9		SH303	2	7		9
SH304			2	25	3				30	SH304	9	18	3	30		SH304	4	22	4	30
SH305				1	60				61	SH305	9	13	39	61	1	SH305	44	15	2	61
SH306					16				16	SH306	4	10	2	16		SH306	8	8		16
SH307				5					5	SH307	5	5		5		SH307	4	1		5
SH308				6	41				47	SH308	10	35	2	47	3	SH308	20	24	3	47
SH309		3	21						24	SH309	8	13	3	24		SH309	4	19	1	24
SH310				7	77				84	SH310	29	17	38	84	1	SH310	47	33	4	84
SH311					12				12	SH311	2	2	8	12		SH311	5	6	1	12
SH312			1		25				26	SH312	16	6	4	26	2	SH312	8	16	2	26
SH313				1	16				17	SH313	2	9	6	17		SH313	9	8		17
SH314				62	40				102	SH314	46	53	3	102	14	SH314	49	49	4	102
SH315				2	33				35	SH315	3	15	17	35	1	SH315	30	4	1	35
SH316					12				12	SH316	8	1	3	12	1	SH316	7	5		12
SH317	9	1		269	6	23	20	2	330	SH317	228	84	18	330	5	SH317	77	221	32	330
SH318				67	4	3	2		76	SH318	49	22	5	76		SH318	25	40	11	76
SH319	1		1	43	362	1			458	SH319	239	165	54	458	36	SH319	328	81	49	458
SH320				18	323				341	SH320	206	107	28	341	36	SH320	256	51	34	341
SH321				42	14	7	1		64	SH321	44	19	1	64	12	SH321	25	31	8	64
SH322	1	1		6	2	8			18	SH322	6	7	5	18		SH322	4	13	1	18
SH1001				8	3	1			12	SH1001	4	8		12		SH1001	9	3		12
SH1002				9					9	SH1002	9			9		SH1002	1	7	1	9
SH1003				5	2	3			10	SH1003	7	2	1	10		SH1003	2	4	4	10
SH1004					9				9	SH1004	2	4	3	9		SH1004	6	3		9
遺構外		2	1	12	4	11	4		34	遺構外	17	12	5	34	7	遺構外	24	9	1	34

第34表 BP第2地点の礫群遺構別出土層位と赤化状況

石材組成

第36表に、BP第2地点の石材別の出土点数と重量を示した。出土点数では無斑晶質安山岩とチャートが多い。次いで黒曜石、珪質頁岩が多くみられる。下呂石が1点出土しており、注目される。重量では無斑晶質安山岩が24kgと圧倒的に多い。安山岩の重量が多いのは、台石などの礫石器に用いられているためである。また、剥片・破片に対する石器の割合（製品率）を見ると、珪質頁岩の製品率が高い。

器種別に石材を見ると、台形石器では黒曜石、搔器ではチャート、斧形石器では蛇紋岩が卓越している。

器名	黒曜石(黒曜石)	無斑晶質安山岩	珪質頁岩	頁岩	砂岩	下呂石	安山岩	頁岩	緑色燧石	チャート	不明	合計
II	1	12	6	4	2	3	1	5	2	1		28
III			3	1				2	1			6
IV	4	31	2	7	12	4	9	6	1	10	2	77
V		1	1									2
VI	1	8	2	1	1	1	1	3		10		28
VII	1	9	3	3	1	4		11	3	4	1	37
VIII	1	2	2	4				2	1			10
IX	5	3	5	1				5	1	2		22
X	6	17	4	25	28	8	17	8	1	38	3	110
合計	6	171	4	25	28	8	17	8	1	38	3	285

器名	黒曜石	無斑晶質安山岩	珪質頁岩	頁岩	砂岩	下呂石	安山岩	頁岩	緑色燧石	チャート	不明	合計
II	1	14	13	11	2	2	5	5	2	2		54
III	1	21	2	4		1		11	2	3		42
IV	1	15	1	2	1	2		4	2	2		27
V		5	1	1				2				7
VI	2	4	3					1	5	2		17
VII	3	1	1	1	1	1	2	10	4	2		25
VIII								1	1	9		11
IX								2		2		4
X	3	7	2	13	3	12	3	12	2	2	6	71
合計	1	21	2	4		1		11	2	3		42

「破片」は全体の形状がわからない小破片、「接痕」は欠損した石器に接合したものを示す

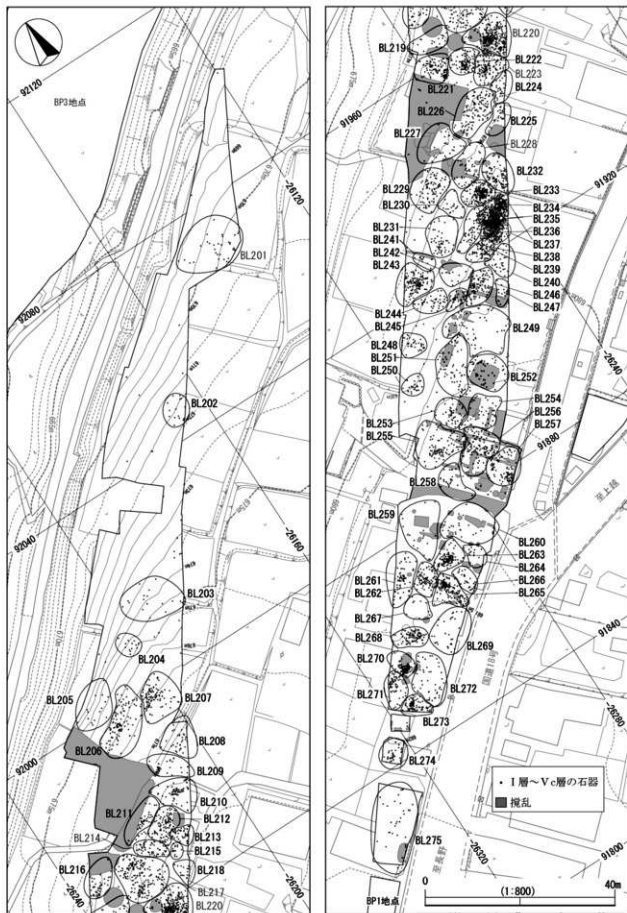
石材	II	III	IV	V	VI	VII	VIII	IX	X	合計		
黒曜石	107	75	7	101	400	2	68	235	45	4	1044	
無斑晶質安山岩	138	199	3	124	827	34	182	454	49	1	2011	
珪質頁岩	38	42	1	52	249		65	37	5		507	
頁岩	40	23		50	107		17	43	2		282	
砂岩	17	13	2	8	35		11	23	2		111	
下呂石	8	5	13	20	1	11	10				68	
安山岩	20	6	13	34	20	16	2	2	113		163	
頁岩	4	4	12	1	2	6	2	1	29		68	
緑色燧石	190	177	4	66	1154	11	38	309	52	3	2024	
チャート												
不明												

層別別出土点数

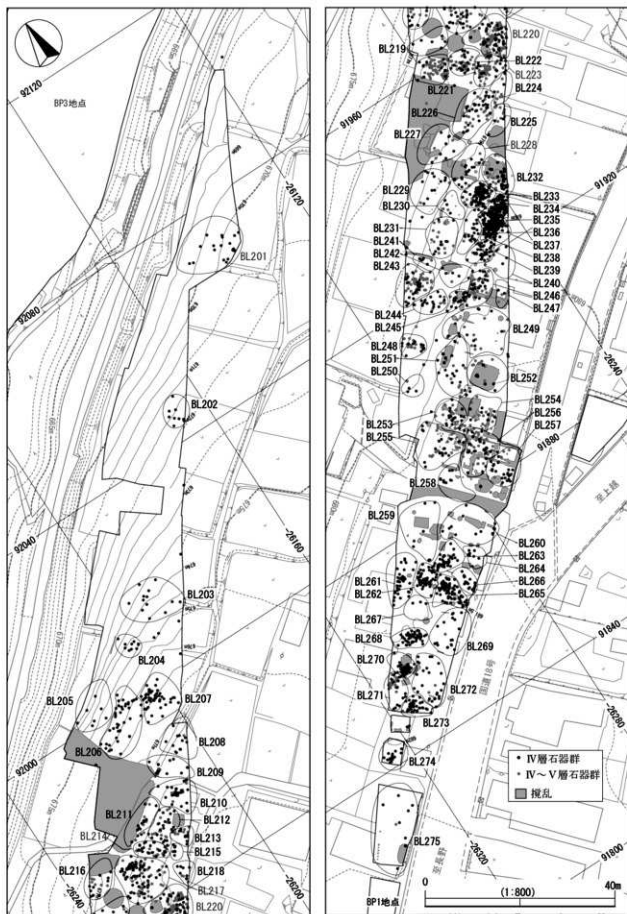
石材	II	III	IV	V	VI	VII	VIII	IX	X	合計
黒曜石	668.37	927.54	12.69	157.77	629.22	80.58	2476.17			
無斑晶質安山岩	5179.70	6296.97	321.59	2359.37	9182.09	697.20	24036.92			
珪質頁岩	653.98	563.37	327.87	236.63	49.33	1961.30				
頁岩	547.17	1082.84	888.02	187.24	13.14	1918.31				
砂岩	144.03	424.07	125.00	217.75	31.05	2897.90				
下呂石	85.72	259.75	0.84	108.85	177.51	632.67				
安山岩	379.21	160.25	294.95	199.89	33.84	1068.14				
頁岩	45.88	25.08	0.68	14.19	8.72	16.30	108.83			
緑色燧石	1869.60	4501.13	119.2	968.38	1498.73	644.40	9601.46			
チャート										
不明										

層別別出土重量 (g)

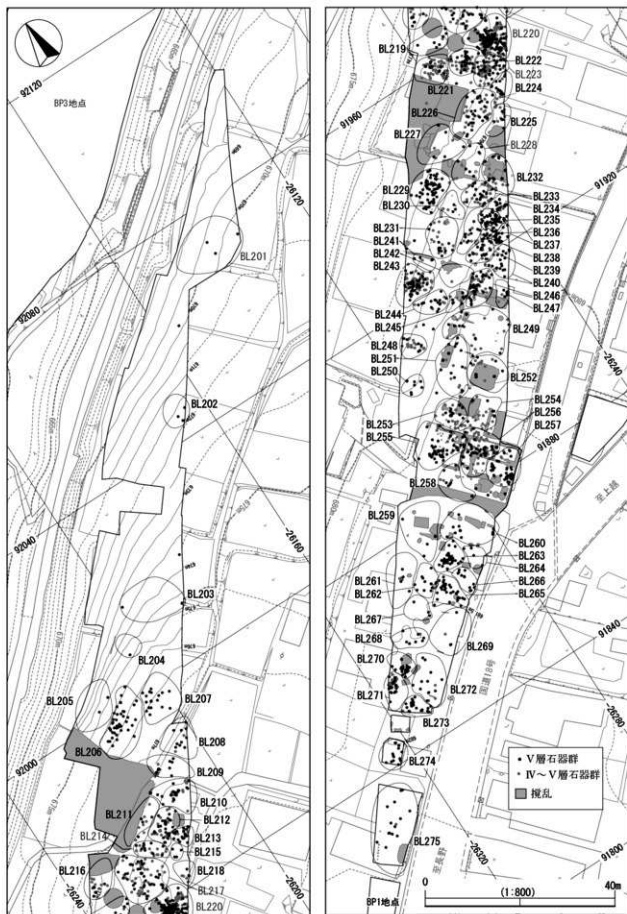
第36表 BP第2地点の器種組成と石材組成



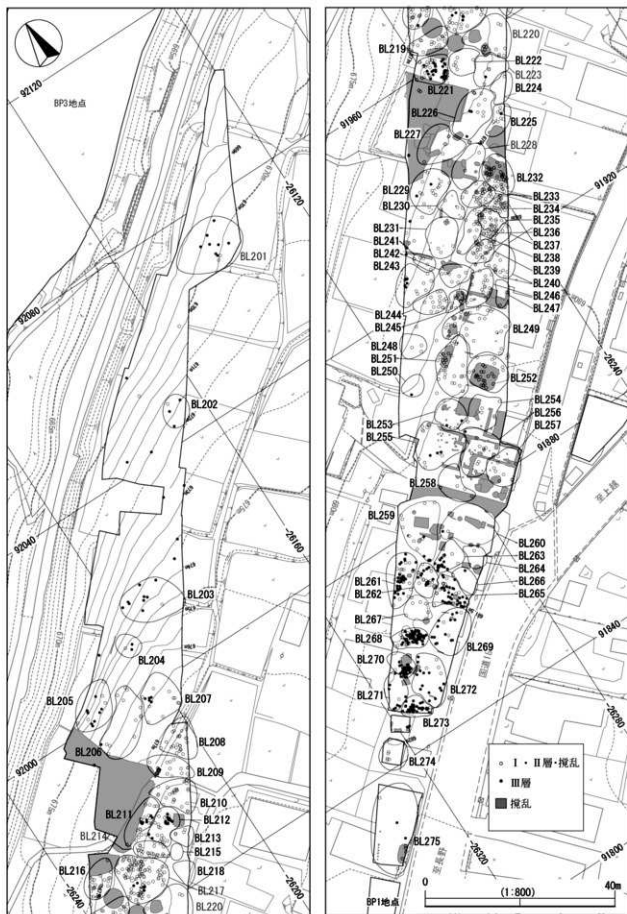
第91図 BP第2地点ブロック配置図



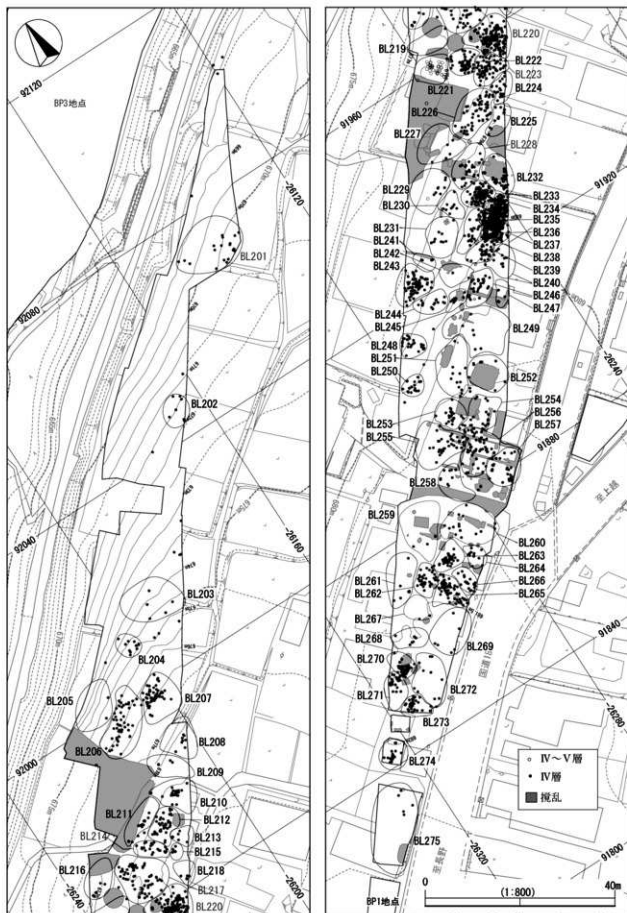
第92図 BP第2地点IV層石器群



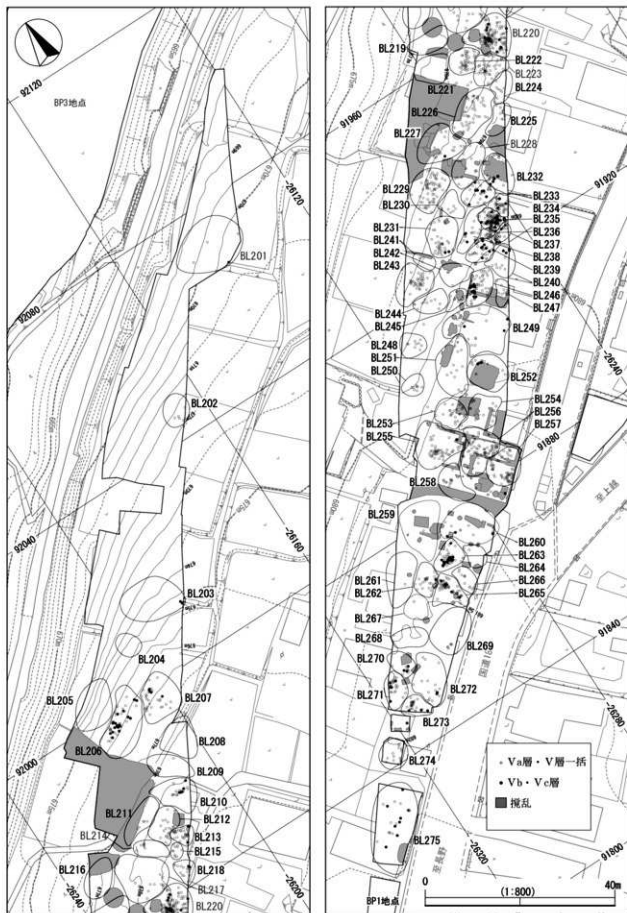
第93図 BP第2地点V層石器群



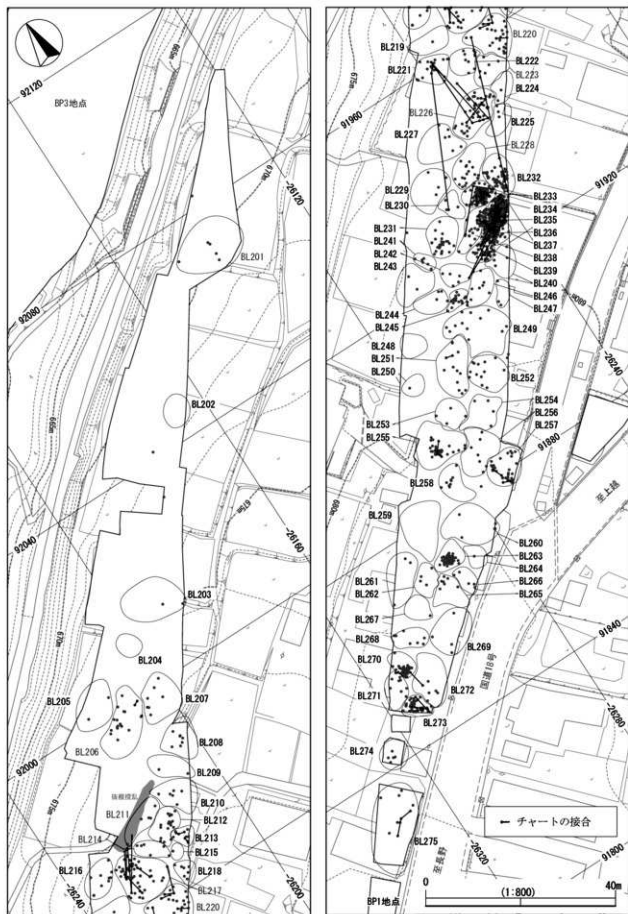
第94図 BP第2地点層別別石器出土状況1



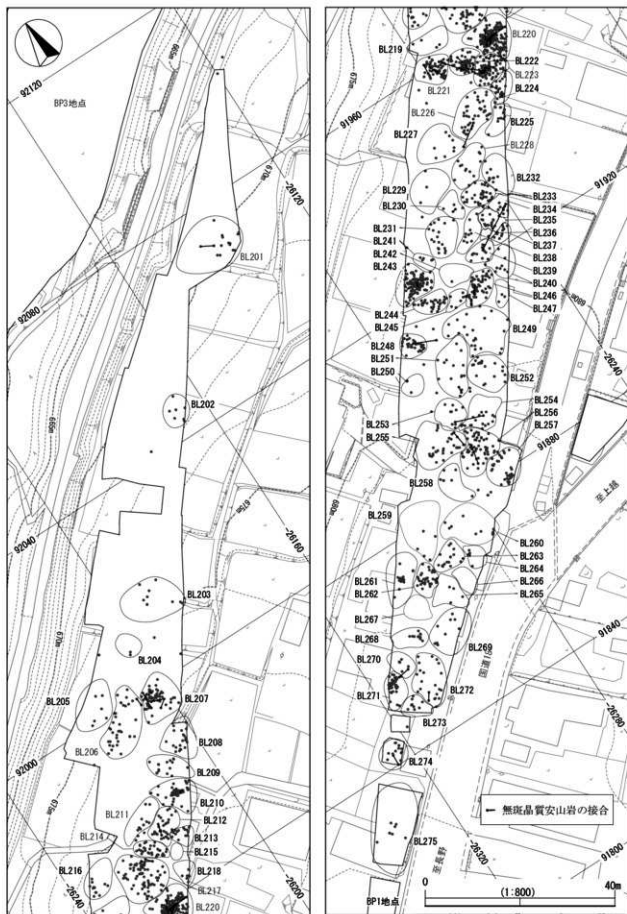
第95図 BP第2地点層位別石器出土状況2



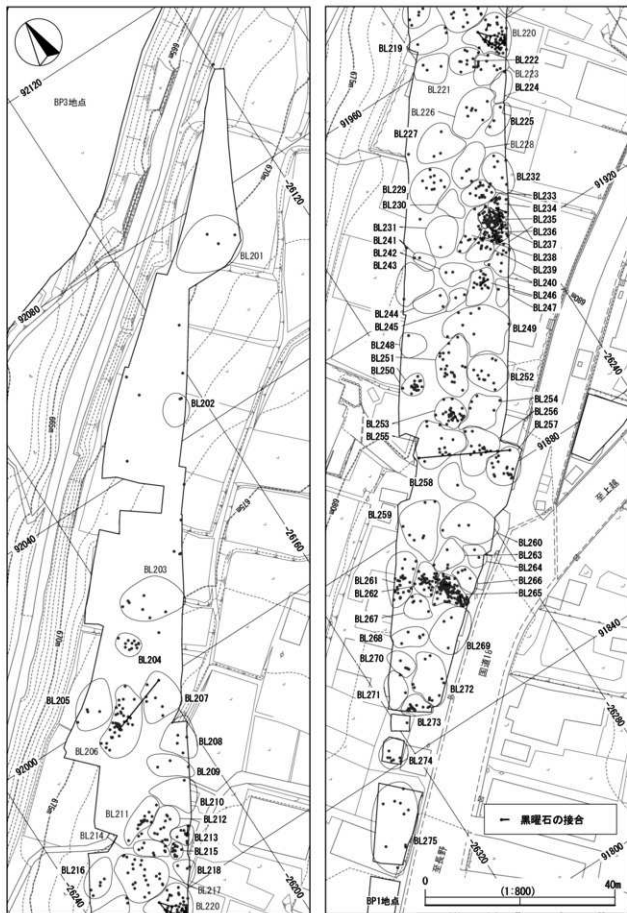
第96図 BP第2地点層別別石器出土状況3



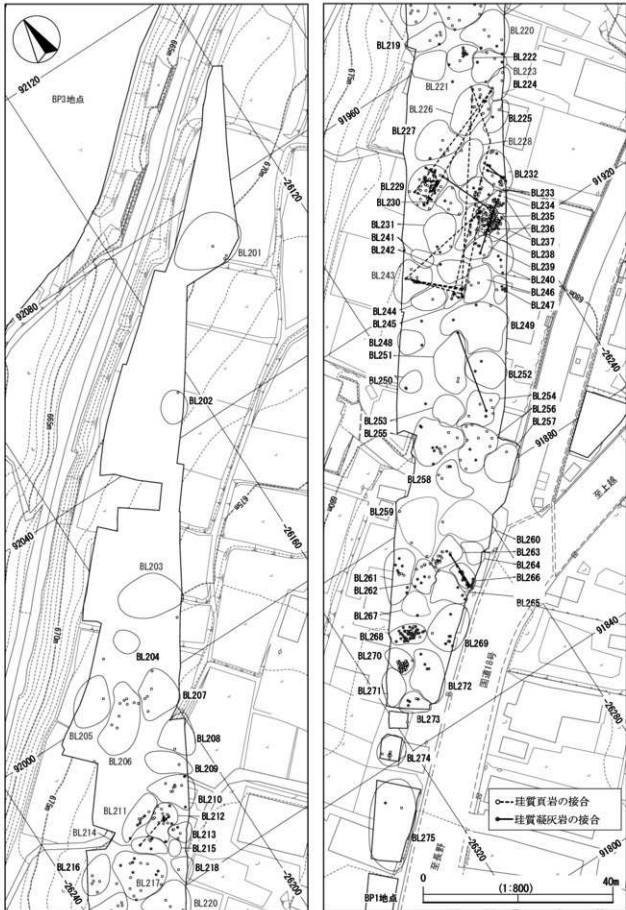
第97図 BP第2地点石材別出土状況1(チャート)



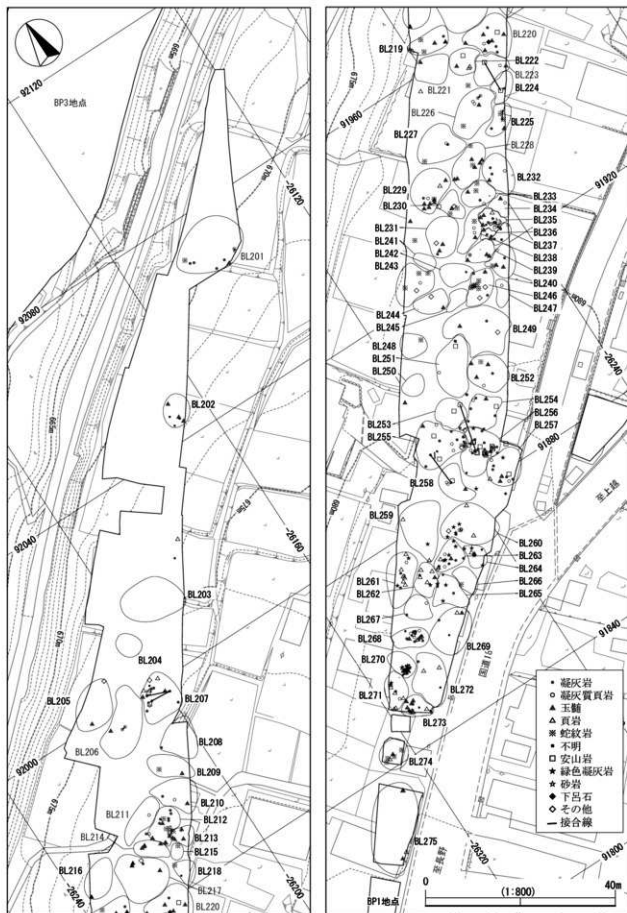
第98図 BP第2地点石材別出土状況(無斑晶質安山岩)



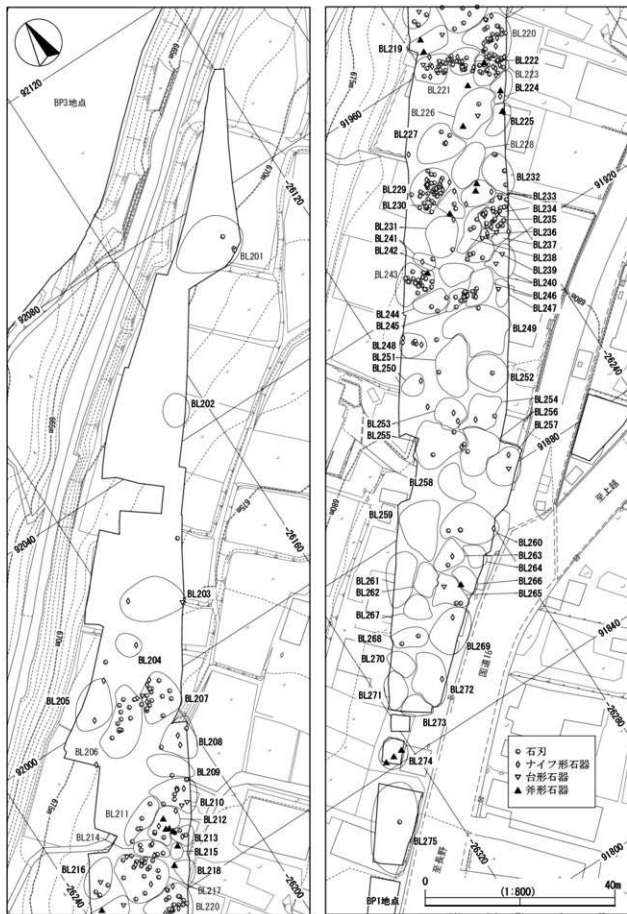
第99図 BP第2地点石材別出土状況(黒曜石)



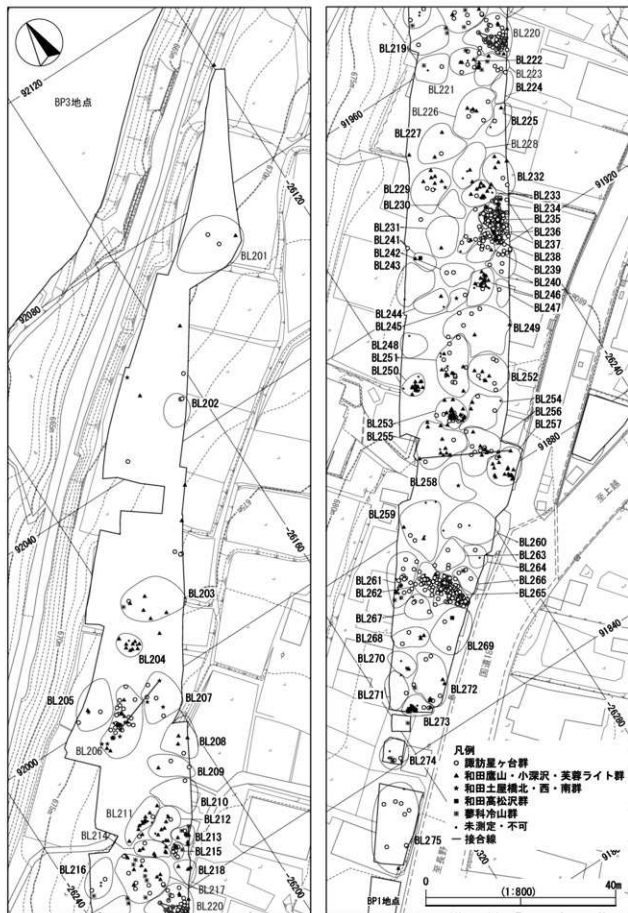
第100図 BP第2地点石材別出土状況4（珪質頁岩・珪質凝灰岩）



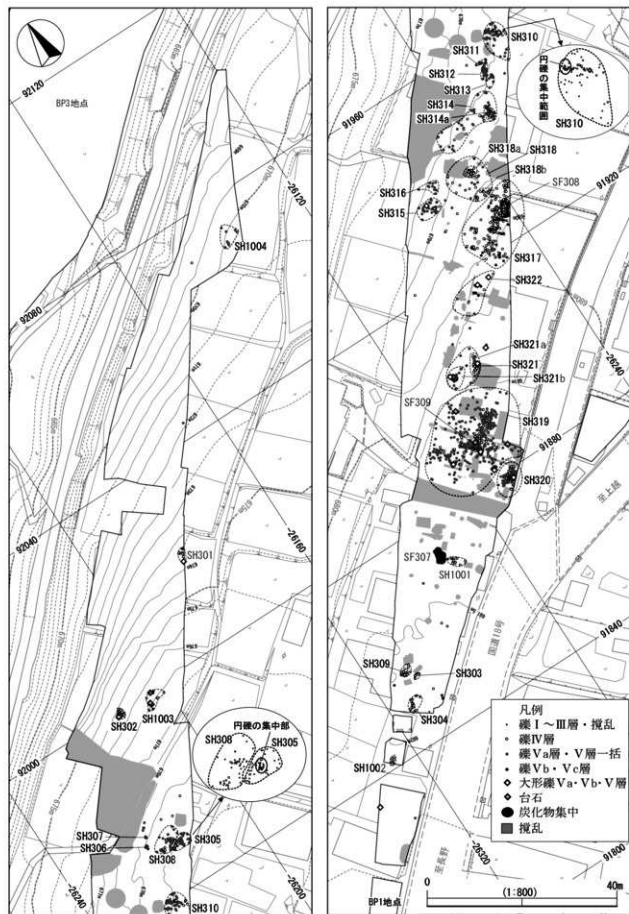
第101図 BP第2地点石材別出土状況5（その他の石材）



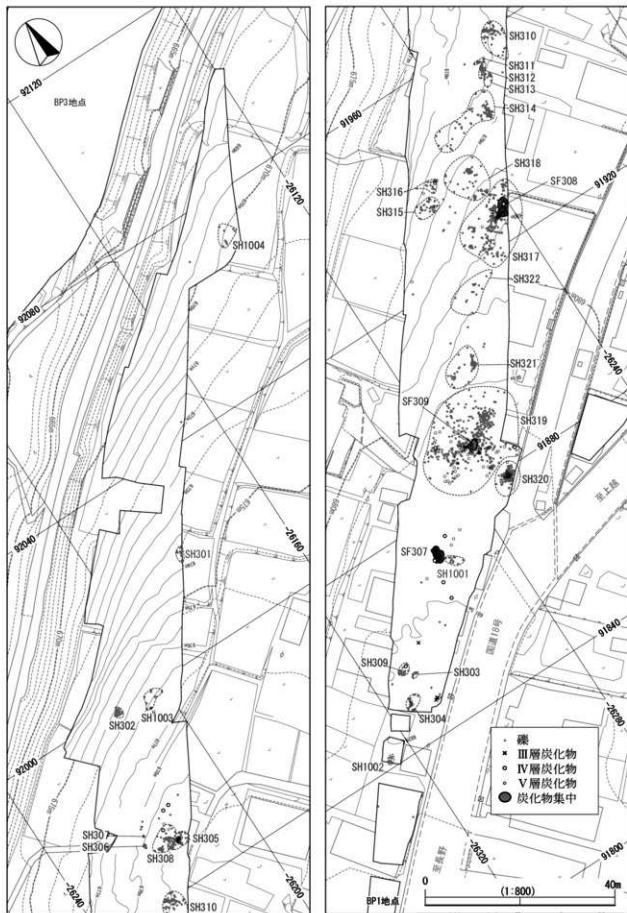
第102図 BP第2地点石刃など主要器種の分布状況



第103図 BP第2地点黒曜石産地別分布



第104図 BP第2地点層別礫出土状況



4 遺構

(1) ブロックおよびブロック間の接合関係

各ブロックの器種組成、石材組成、出土層位組成は第33・35表に示した。また、各ブロックの石器については第106図～113図と遺物図版(第117～157図)を参照していただきたい。

BL201

調査区北東端の斜面にある。分布状況から主体は調査区外にあると思われる。石刃(2180)、二次加工のある剥片、微細剥離のある剥片が出土した。石器はいずれもⅢ・Ⅳ層から出土した。礫群SH1004と重なる。石器群はⅢ・Ⅳ層に多く出土し、SH1004はⅤa層から出土しているが、石器群が浮き上がったと理解し、同時期のものと判断した。

BL202～204

調査区北東端の斜面にある。BL202では二次加工のある剥片、石核が出土した。BL203ではナイフ形石器(2036)、台形石器(2073)が出土した。BL204では、ナイフ形石器、搔器状石器、微細剥離のある剥片が出土した。いずれも、石器群の分布も散漫で、同時期の石器群と断定できない。

BL205～207

調査区北東側の斜面にある。BL206と207は出土層位と器種組成など類似しており、接合関係も認められることから、同時期の関連したブロックと判断した。また、BL205はⅠ層～Ⅲ層の遺物が多いが、土器は認められず、石材組成が類似することから、BL206・207から流れ落ちた石器が二次堆積したものと判断した。これらのブロックからは、ナイフ形石器(2018・2011)、台形石器(2065)、挟入削器(2130)、揉雑器(2143)、楔形石器、石刃(2166・2178・2179・2183)、2次加工のある剥片、微細剥離のある剥片、石核(2190・2197)、台石(2231・2232)が出土した。石刃が26点と多く、これらのブロックの器種組成の特徴を示す。石刃では黒曜石が多いが、諏訪星ヶ台群、和田鷹山群、和田土屋橋西群が混在し、諏訪星ヶ台群のみがⅤb層まで出土する。台石がⅤa層で2点とⅣ層で1点出土しており、生活面を示しているものと判断した。

BL206が礫群SH302と、BL207がSH1003とそれぞれ重複する。SH302はⅤa層に生活面が想定され、ブロックと同時期と判断した。

BL208・209

Ⅰ層およびⅣ層から出土しており、散漫な分布をしめす。ブロックの主体部が調査区外にある可能性が高く、有意なまとまりではない。ナイフ形石器(2032)、削器、楔形石器、石刃などが出土した。ブロック北側は断層による段差が生じている。

BL210

段丘縁辺部の緩斜面にある。安山岩を主体とした剥片が3×1.5mの範囲にまとまっている。ナイフ形石器(2006・2035)、台形石器(2061・2075)、石刃(2181)などが出土したがⅠ層から出土したものが多く、すべての石器が同時期であるといえる出土状況ではない。

BL211～215

丘陵縁辺部の緩斜面にある。BL211・214は他に比べ地形の傾斜がきつい。分布のみからこれらのブロックを明確に分離することができないので、まとめて報告する。Ⅳ層からⅤa層に出土点数のピークがあるが、BL211・214はⅣ層に出土点数がより多く、ブロックにより出土層位に若干の相違がある。また、全体にⅠ層の遺物が多く、BL211は抜根による攪乱で、多くの石器の層位と出土地点が不明となってしまった。ナイフ形石器(2024・2042・2043)、貝殻状刃器(2084・2085)、搔器(2099)、削器

(2121・2125)、挟入削器(2129)、楔形石器、石刃(2167・2174・2177)、石核(2199・2204)、斧形石器(2206・2207・2209・2212・2214)、敲石(2224・2225)などが出土した。敲石、斧形石器など大形の石器がV a層で出土しており、V a層に生活面がある石器群が存在することが確認できる。ただし、BL211・214はIV層に出土点数のピークがあること、IV層とV層の分布範囲の中心部が異なることなどから、二時期以上の石器群が混在している可能性がある。石材組成ではBL215のみに黒曜石が卓越しており、産地が他のブロックと異なっていることから、他のブロックと明確に分離できる。V層の出土状況を見ると、BL212と213の分離は困難となる。ブロック間の接合はBL212と214で1例確認された。BL211の接合例は抜根により出土地点が不明となってしまった遺物である。

礫群のSH305～308と重複する。SH307以外はV a層に生活面が想定される礫群であり、石器群と関連するものと判断した。SH307は5点のみであるがいずれもIV層より出土した。点数が少なく斜面であるため、生活面の想定は困難である。

BL216

斜面部にあり、攪乱やI層より出土したものが多く、斜面上方から流されて二次堆積した遺物である可能性が高く、有意なまとまりではない。台形石器(2078)、揉錐器、石刃などが出土した。

BL217

緩斜面にあり、IV層に出土点数のピークがある。散漫な分布を示すが、他のブロックと明確に区分できる。チャート・無斑晶質安山岩が主体を占める。ナイフ形石器(2054)、台形石器(2068)、搔器状石器、石刃(2185)、石核(2192)などが出土した。I層出土の石器も多く、すべてが同時期のものとは断定できない。

BL218

丘陵縁辺部の緩斜面にある。V a層に出土点数のピークがある。遺物数は少なく、ブロックの主体部は調査区外に想定される。貝殻状刃器、挟入削器(2132)、鋸歯縁状削器(2134)、斧形石器(2213)などが出土した。

BL219

分布は散漫で、ほとんどが攪乱およびI層より出土しており、有意なまとまりではない。台形石器(2062)、貝殻状刃器(2090)、斧形石器(2219・2220)などが出土した。斧形石器は縄文時代の遺物である可能性がある。

BL220～227

丘陵縁辺部の緩い斜面にある。攪乱が著しく、ブロックの全容がとらえられないものもある。BL220・222・223に集中部がみられるが、他は散漫な分布を示す。安山岩を主体とするブロックで、IV層からV a層に遺物数のピークが認められる。ただし、BL221はI層・III層に遺物が多く、他のブロックと様相が異なる。地層の残存状況の情報が無いため断定はできないが、時期が異なるブロックが重なっている可能性がある。BL211で土器は出土していないため、縄文時代の遺物の可能性は少ない。

BL220～223には石刃が多く、南側のBL224～227ではあまりみられない。石刃がまとまるブロック群のひとつである。槍先形尖頭器(2001)、ナイフ形石器(2014～2017・2019・2021・2025・2026・2030・2031・2038・2044・2046・2052・2055・2056)、台形石器(2063・2069・2079・2083)、貝殻状刃器(2086)、彫器(2094)、搔器状石器(2110)、削器(2116～2119)鋸歯縁状削器(2139)、楔形石器、石刃(2152・2157・2161～2163・2168・2176)、石核(2205・2189・2193)、斧形石器(2208・2210・2216)、敲石(2223)、台石(2233)などが出土した。台石、敲石、斧形石器などの大形の石器がいずれもV a層より出土しており、V a層に生活面がある石器群と判断した。

また、BL221～224・226・227のブロックではそれぞれ接合関係が見られることから、これらのブロッ

ク群の石器群の大部分は同時期のものであると判断した。ただし、個々の石器については、十分な検討は行っていない。

BL220は礫群SH310と、BL223は礫群SH311～313と、BL226・227は礫群SH314とそれぞれ重複する。いずれもV a層に生活面が想定される礫群で、ブロックとの関連が認められる。ただし、SH314はIV層に生活面が想定されるまどまりがあり（SH314a）、礫群は少なくとも二時期のものが確認される。

礫群が二時期あることから、BL226を中心として二時期の石器群が混在している可能性が高いが、IV層に生活面が想定される石器群を抽出することは困難である。

BL228

丘陵上の緩斜面にある。攪乱により、ブロックの中心部が破壊されたものと思われる。残存部は、散漫な分布を示し、IV層に出土遺物点数のピークがある。無斑晶質安山岩とチャートが主体を占める。彫器（2097・2098）、削器（2120・2122）、楔形石器、石核（2196・2201）などが出土した。石核などの大形の石器がIV層でまどまりており、IV層に生活面が想定される石器群が含まれていると判断した。

礫群SH318と重複する。SH318はIV層に生活面が想定される礫群で、IV層の礫が集中する周辺には彫器・削器などが出土しており、ブロックとの関連が認められる。

BL229

丘陵縁辺部の緩斜面にある。IV層下部からV層上面にかけて石器群が出土した。V層に出土遺物数のピークがある。本ブロックではV b層が明確に認められず、V a層とV b層の分層が困難であったため、「V層」とした。また、III層がほとんど欠落しており、III層の遺物は少ない。珪質頁岩を主体とし、周辺のブロックから明瞭に区分できる。ナイフ形石器（2007・2012・2020・2022）、台形石器（2081）、貝殻状刃器、石刃（2153・2158～2160・2187）、石核（2194）などが出土した。石刃は珪質頁岩が主体を占め、黒曜石、玉髄、珪質凝灰岩などが少数みられる。斜面部で土層が薄く、断定はできないが、IV層下部からV a層に生活面が想定できようか。また、BL226・235との接合関係が認められる。

礫群SH315・316と重複する。いずれもV層中に生活面が想定される礫群であり、本ブロックとの関連が認められる。

BL230

緩斜面にあり、散漫な分布を示し、有意なまどまりではない。ナイフ形石器（2008）、石刃などが出土した。

BL231

緩斜面にあり、チャートと無斑晶質安山岩が石材の主体を占める。比較的散漫な分布を示し、複数時期の石器群の混在も想定されるが、チャートの剥片がまどまりて分布し、V層に出土点数のピークがあることから、V a層からV b層にかけて生活面が想定される石器群が含まれる。ナイフ形石器（2029）、削器（2123・2124）、楔形石器（2146）、石刃、石核（2200）などが出土した。



BL229 南より



BL231 南より

BL232

丘陵縁辺部の緩斜面にあり、SK322により一部破壊されている。隣接するブロックとの区分は明確で、チャートが主体となり、珪質頁岩・無斑晶質安山岩・黒曜石などが含まれる。IV層に出土点数のピークがあるが、I層と攪乱から多数出土した。搔器(2103・2105)、削器(2127)、石刃などが出土した。大形の石器がなく、生活面の想定は困難であるが、ブロック全体の出土層位頻度から、IV層に生活面がある石器群が主体となると判断した。BL220との接合関係がある。

BL233

丘陵縁辺部の緩斜面にある。チャートを主体とし、無斑晶質安山岩・黒曜石などが含まれる。IV層に出土点数のピークがある。ナイフ形石器(2034・2050)、貝殻状刃器(2087)、彫器(2092)、搔器(2106)、搔器状石器(2111・2112)、鋸歯縁状削器(2141)、楔形石器、石核、斧形石器(2218)などが出土した。斧形石器は攪乱より出土し、製作技術などから縄文時代の石器である可能性があり、本ブロックには伴わない石器と判断した。石核9点はいずれもチャートで、7点はIV層より出土している。これらの状況から、IV層に生活面がある石器群を主体とするブロックであると判断した。BL238内の石核と本ブロックの剥片が接合した。

礫群SH318の一部(SH318b)と重複する。礫はいずれもIV層より出土しており、IV層に生活面が想定される石器群である。本ブロックとの関連が認められる。

BL234～240

丘陵の平坦部にある。これらのブロックは石材の分布状況で分離することができるが、総体としては明確に区分することは困難であり、まとめて報告する。BL234～236に特に遺物が集中する。全体にチャートが卓越する石材組成を示すが、黒曜石はBL235～237に、珪質頁岩はBL235を中心に集中する。槍先形尖頭器(2002・2004・2005)、ナイフ形石器(2009・2010・2028・2048・2060)、台形石器(2066・2070～2072・2076・2080・2082)、貝殻状刃器(2088)、彫器(2091・2093・2095)、搔器(2100～2104・2107～2109)、削器(2114・2128)、採掘器(2144)、楔形石器、石刃(2155・2156・2172・2195)、石核(2195)、敲石(2222・2226)などが出土した。IV層に出土点数のピークがあり、敲石などの大形石器がIV層とVa層に出土することから、IV層からVa層のいずれかに生活面が想定される石器群が主体を占めると判断した。ただし、出土状況のみをみる限り、石器群がすべて同一時期であるか否かは検証できない。

7つのブロック間内ですべてのブロックとの接合関係が認められ、特にBL234～236の間の接合関係が強い。さらに、BL226・229・233・242・243・245との接合関係が認められる。

礫群SH317と炭化物集中SF308と重複する。SH317は広範囲に広がっており、複数の礫群がまとまったものと認識した。IV層に出土する礫がもっとも多く、IV層に生活面がある一群が確認される。さらに、Vb層中に炭化物集中(SF308)が確認され、その周辺部にVa・Vb層より出土する石器が40点以上確認される。礫が浮きあがり、炭化物が沈むことは考え難く、Va層～Vb層に生活面が想定される礫群の存在が確認できる。少なくとも二時期の礫群が重複していると判断した。

礫群の出土状況から、石器群も複数時期の石器が混在していることが想定され、時期が異なる石器群の分



BL234～237・239 南西から

布範囲がほぼ重なっていると考えられる。石器群・礫群の出土層位から全体ではIV層に生活面が想定される石器群が主体を占めると考えられるが、BL240ではこれより古い石器群が主体的に存在しているように考えられる。

BL241・242

緩斜面にあり、剥片類は攪乱およびI層より出土し散漫な分布を示す。有意なまとまりではない。ナイフ形石器(2047)、貝殻状刃器、石刃、石核などが出土した。BL242の剥片がBL234・235の石刃と石核に接合した。

BL243

緩斜面にある。無斑晶質安山岩を主体とし、珪質頁岩などがみられる。IV層に出土遺物点数のピークがある。石刃(2173・2175)、石核(2191)、斧形石器(2217)が出土したが、器種組成では石刃が圧倒的に多い。斧形石器はI層から出土しており、縄文時代の可能性が指摘される。斧形石器を除いて単一時期の石器群で構成されると判断した。V層より出土したものの多くは碎片であり、IV層に生活面が想定されるブロックである。



BL243 東より

本ブロックの珪質頁岩の石刃がBL226・235・

245の石刃および剥片と接合しており、これらのブロックとの同時期性が指摘できる。また直接の接合関係は認められないが、BL226と互いに接合関係があることなどから、BL229とも同時期であることが想定される。

BL244

緩斜面にあり、散漫な分布を示す。無斑晶質安山岩を主体とする。IV層に出土遺物のピークが見られるが、I層・攪乱の遺物が多い。楔形石器、石刃(2154)、砥石(2221)などが出土した。

BL245・246

緩斜面にある。石材組成が異なるが、器種組成が類似しており、総体として分布も明確に区分されないことから、まとめて報告する。BL245はV層まで攪乱が及んでおり、遺物が失われている。BL245はチャートを主体とし、珪質頁岩、無斑晶質安山岩などがみられ、IV層に遺物数のピークがある。BL246は無斑晶質安山岩を主体とし、黒曜石、チャート、蛇紋岩などがみられ、IV層およびV a層に遺物点数のピークがある。槍先形尖頭器(2003)、ナイフ形石器(2013・2057)、貝殻状刃器、搔器、削器、鋸歯縁状削器(2140)、楔形石器、石刃(2164・2165・2169～2171)、無斑晶質安山岩原石、敲石などが出土した。BL246では、斧形石器の調整剥片と思われる蛇紋岩がV b層より出土した。これらの剥片に隣接したV b層より、無斑晶質安山岩の原石、敲石などが出土しており、V b層に生活面がある石器群の存在が確認される。ただし、BL246には槍先形尖頭器など、IV層に生活面が想定される石器も含まれる。また、BL245はV b層の遺物が少ないことからIV層に生活面がある石器群を含んでいると想定した。すなわち、BL245はIV層に、BL246はV b層に生活面がある石器群が主体となるものの、それぞれ異なった時期の石器群を含んでいることが想定される。

礫群SH322と重複する。SH322はIV層とV b層とに生活面が想定され、特にV b層に2点の大形の礫がBL246に重なって出土しており、1点は赤化している。ブロックで想定した二面の生活面と一致しており、それぞれブロックとの関連が認められる。

BL247

平坦面にあり、散漫な分布を示す。南側がV層まで攪乱されており、全容は不明である。台形石器(2067)と剥片が出土したが、剥片と石器は石材が異なり、有意なまとまりと認識できない。

BL248

緩斜面にあり、密集はしないが、他のブロックと明確に区別されるまとまりを示す。ほとんどが無斑品質安山岩で占められる。IV層に遺物点数のピークが認められる。ナイフ形石器、石刃(2186)などが出土した。個別別資料分析ではIV層石器群とV層石器群に分離されているが、他のブロックから明確に分離されており、石材が無斑品質安山岩に限られることから、同時期の石器群と判断し、IV層に生活面を想定した。

BL249・251・252

丘陵上の平坦面にあり、全体に散漫な分布を示し、ブロック間の区別が明確でないため、まとめて報告する。攪乱が多く、特にBL252は平安時代の住居(SB304)により攪乱されており、全容が不明である。攪乱とI層の遺物が多く、IV層からV層にかけて散漫に分布する。抉入削器(2133)、揉錐器(2145)、石刃(2182)などが出土した。複数時期の石器群が混在する可能性があり、大形の遺物がみられず、生活面は想定できない。

礫群SH321と重複する。SH321はIV層を主体とする部分と、V層を主体とする部分に別れ、二時期の生活面が想定される。IV層に生活面がある礫群はBL251に含まれ、V層に生活面がある礫群はBL252に含まれる。これらのブロックに含まれる石器群に関する礫群と思われるが、石器群は複数時期のものが混在しており、明確な対応関係はつかめない。これらのブロックは分析する上で有効な単位とはならない。

BL250

緩斜面にあり、散漫な分布を示すが、他のブロックと明確に区別されるまとまりを示す。黒曜石を主体とし、産地はすべて和田鷹山群と推定された。ナイフ形石器(2045)、削器、鋸歯縁状削器(2136)などが出土した。剥片が16点と全体の半数を占めており、剥片および石器の数はわずかである。同時期の石器群と推定され、IV層に遺物点数のピークがあることから、IV層に生活面があるブロックと判断した。



BL250 西より

BL253～258

丘陵上の平坦面にあり、石材別にはまとまりを示すものもあるが、個々のブロックの区別は明確ではなく、6ブロックをまとめて報告する。総体としては他のブロック群と区別できる。BL255・258に比較的遺物が密集する部分がある。現代の住宅の基礎や平安時代の竪穴住居(SB302)による、IV層またはV層に及ぶ攪乱がある。BL253は黒曜石が、BL255は無斑品質安山岩が、その他のブロックでは無斑品質安山岩とチャートが主体となる。ナイフ形石器(2027・2053)、台形石器(2077)、彫器



BL254・255 東より

(2096)、搔器状石器(2113)、削器(2115・2126)、楔形石器(2147～2151)、石核(2202・2203)、凹石(2227～2230)、台石(2234)などが出土した。BP第2地点では、楔形石器が少ない中、これらのブロックには多くの楔形石器が出土しており、台石・凹石(敲石)などの存在と合わせて、本ブロック群の特徴といえる。

いずれのブロックもIV層～V層に遺物が集中しており、V層に出土点数のピークがある。ただし、丘陵上の平坦面の地層は安定しており、これらのブロックでV層として取り上げた層位は、地層断面図にはVb層と記録された層位に対応している。残された記録類より推察し、BL253～258に限って「V層」は「Vb層」と読み換えてよい。また、IV層まで攪乱が及んでいる範囲が多く、III層の遺物が少ない。台石・敲石といった大形の礫石器がすべてV層より出土しており、他の石器群のピークもV層にあることから、Vb層に生活面がある石器群の存在が確認できると判断した。

ブロック間接合は少ないが、6ブロック間全体に接合が及んでおり、すべてV層出土の遺物が関わる接合資料であることから、これらのブロックが相互に関係するものと推定した。また、隣接するBL251との接合関係が確認された。なお、BL259以南のブロックとの有機的関連も想定されるが、時間的制約から、それらのブロックとの接合作業は行っていないため、接合関係の有無は論じられない。

礫群SH319・320と重複する。SH320はVb層上部に生活面が想定される。SH319は広範囲に分布する礫を一括したため、すべて同時期かどうか判断できないがVa層からVb層に生活面がある礫群の存在が確認できる。出土層位、分布範囲が一致しており、上記のブロック群との関連が認められる。

BL259・260

丘陵上の平坦面にあり、散漫な分布を示す。特に、BL259は攪乱の遺物が多く、有意なまとまりではない。BL260は無斑晶質安山岩が主体で、IV層からVa層に遺物が多いが、有意なまとまりとは思えない。BL260からナイフ形石器(2039)、鋸歯縁状削器(2137・2138)、楔形石器、石刃、石核などが出土した。

BL261

丘陵上の平坦面にある。散漫な分布を示し、攪乱およびIII層の遺物が主体を占める。BL259・261周辺に土器がまぎれ込んでおり、縄文時代の石器群が多く含まれる可能性が高い。搔器状石器、削器などが出土した。搔器状石器はIV層より出土したもので、旧石器時代の石器である。旧石器時代のブロックとしては、有意なまとまりではない。

BL262

丘陵上の平坦面にある。黒曜石と無斑晶質安山岩を主体とする。黒曜石の産地は、微細剥離のある剥片1点を除きすべて諏訪星ヶ台群である。III層からVa層に石器群が出土し、IV層に出土点数のピークがある。削器、微細剥離のある剥片楔形石器、石核などが出土した。層位の出土状況から、IV層からVa層に生活面があるブロックと判断した。

BL263

丘陵上の平坦面にあり、1.7×3.3mほどの範囲に特に遺物が集中する。チャートを主体とし、無斑晶質安山岩・珪質頁岩など多数の石材で構成される。ただし、珪質頁岩の剥片はいずれもIII層より出土したもので、ブロックの主体を占めるチャートとは分布範囲がわずかにずれ、BL262内の珪質頁岩とのまとまりが認められる。周辺より草創期の土器群が出土していることから、BL263およびその周辺の



BL263南より

珪質頁岩は縄文時代草創期の石器群であると考えられる。Ⅲ層～Ⅴb層に石器群が出土し、Ⅴa層に出土点数のピークがある。隣接するBL262・265などに比べ、出土層位頻度のピーナス曲線が下位にある。ナイフ形石器(2051)、貝殻状刃器(2089)、楔形石器、石刃(2184)などが出土した。これらの石器はチャート以外の石材が多く、本ブロックを構成する剥片・碎片との関連が確認できない。特に、楔形石器はすべてⅢ層より出土しており、本ブロックとは時期が異なる可能性が高い。なお、微細剥離のある剥片、二次加工のある剥片がⅤa層より出土しており、これらが本ブロックとの関連が想定される石器である。剥片の出土層位から、Ⅴa層～Ⅴb層にかけて生活面があるチャートの剥片を主体としたブロックと判断した。

BL266と珪質凝灰岩剥片の接合関係があるが、Ⅳ層を主体とした個別別資料の接合であり、両ブロック間の同時性を示す資料にはならない。

礫群SH1001と、炭化物集中SF307と重複する。SH1001はⅣ層～Ⅴbに礫が分散しており、二時期の礫群の混在の可能性も残されているが、SF307と関連し、Ⅴb層上面に生活面がある礫群の存在は確認され、本ブロックとの関連が認められる。

BL264

丘陵上の平坦面にあり、散漫な分布を示す。無斑晶質安山岩、緑色凝灰岩、黒曜石などがみられる。Ⅳ層に出土点数のピークがあり、Ⅴa層まで遺物が出土する。二次加工のある剥片、石核が出土した。有意なまとまりではない。

BL265

丘陵上の平坦面にあり、ブロック範囲の北側に遺物分布の密集区が認められる。約9割が黒曜石で占められている。台形石器(2064)、鋸歯縁状刃器(2135)、石刃などが出土したが、剥片・碎片が多く、石器が少ない。黒曜石の産地はすべて諏訪星ヶ台群と推定された。Ⅲ層からⅤc層まで遺物が出土し、Ⅳ層に出土点数のピークがある。Ⅴa・Ⅴb層の遺物は碎片が多く、層位別遺物出土頻度の比較から、本ブロックの生活面は、隣接するBL263よりも上層であると思われ、Ⅳ層に生活面があるブロックと判断した。

BL266

丘陵上の平坦面にある。南側が調査区外であり、ブロックの全体像は不明であるが、調査区に遺物が集中しており、調査区外に本ブロックの主体があると思われる。珪質凝灰岩が主体を占め、チャート・黒曜石などがわずかにみられる。二次加工がある剥片、微細剥離のある剥片、斧形石器(2211)などが出土した。Ⅲ層からⅤa層にかけて遺物が出土し、Ⅳ層に出土点数のピークがある。Ⅳ層に生活面があるブロックであると判断した。

本ブロックは珪質凝灰岩を主体としており、仲町遺跡では石材組成上まな例である。同石材はBL262・263・265などにも分布しており、本ブロックの関連がある資料と考えられる。

なお、BL263との接合関係は両ブロックの関連を示す資料とはならない。

BL267・BL269

散漫な分布を示し、有意なまとまりではない。BL269ではナイフ形石器などが出土したが、攪乱・Ⅲ層の遺物が多く、確実に旧石器時代である遺物は少ない。

BL268

丘陵上の平坦面にある。珪質凝灰岩を主体とし、無斑晶質安山岩、凝灰質頁岩などがみられる。Ⅲ層からⅤa層に遺物が出土するが、Ⅲ層に出土点数のピークがみられ、Ⅴa層は1点のみである。攪乱よりナイフ形石器などが出土しているが、ブロック周辺のⅢ層には石器が出土しており、本ブロックは縄文時代の石器群が主体となる可能性が高い。

BL270

丘陵上の平坦面にある。周縁に攪乱があるが、ブロックの全体像はほぼ確認できたものと思われる。チャートと珩質頁岩を主体とし、珩質凝灰岩・無斑晶質安山岩など多数の石材が含まれる。Ⅲ層～Ⅴb層まで遺物が出土するが、出土点数のピークはⅣ層で、Ⅴa層以下は遺物が激減する。石器は楔形石器、磨石（遺物番号6633）が各1点のみである。Ⅴa・Ⅴb層の遺物はすべてチャートの破片であり、大形礫石器の磨石がⅣ層より出土したことから、Ⅳ層に生活面がある単一時期のブロックであると判断した。



BL270 北西より

礫群 SH309 と重複し、SH303 と近接する。いずれもⅣ層に生活面がある礫群であり、本ブロックとの関連が認められる。

BL271

丘陵上の平坦面にある。無斑晶質安山岩を主体とし、チャートなどの石材が含まれる。Ⅲ層からⅤc層に遺物が出土し、Ⅳ層とⅤa層に出土点数のピークがあり、Ⅴb層以下では激減する。削器、微細剥離のある剥片、敲石の破片、石核などが出土した。Ⅳ層からⅤa層に生活面が想定されるブロックであるが、他時期の石器群がわずかに混在している可能性がある。隣接するBL270と層別別遺物数のピーナス曲線を比較すると、本ブロックの生活面がBL270よりも下位に想定される。

BL272

丘陵上の平坦面にあり、散漫な分布を示す。無斑晶質安山岩、黒曜石などが主体となる。Ⅲ層からⅤb層まで出土するが、Ⅴb層は少ない。Ⅲ層に土器がまとまっており、縄文時代の石器群が含まれる可能性が高い。ナイフ形石器（2033）、削器、抉入削器（2131）、2次加工のある剥片などが出土したが、ブロックとしては有意なまとまりではない。

BL273

丘陵上の平坦面にあり、ブロック範囲の北東側の1×1.3mの範囲に集中部がみられる。チャートを主体とし、黒曜石・無斑晶質安山岩・玉髄・珩質頁岩などで構成される。Ⅲ層からⅤb層まで出土するが、Ⅳ層に出土点数のピークがあり、Ⅴb層は極めて少量である。敲石と石核がⅣ層から出土した。Ⅳ層からⅤa層の間に生活面があるブロックと判断した。黒曜石は和田高松沢群と産地推定されており、仲町遺跡ではまれな例である。ただし、黒曜石の分布が他の石材とずれており、層別別の出土頻度が他の石材に比べⅢ層に偏ることから、ブロックの主体部分が同時期であると断定できない。

礫群 SH304 と重複する。SH304 はⅣ層に生活面が想定され、BL273 との関連が認められる。

BL274

丘陵上の平坦面にあり、調査範囲が狭く限定されており、ブロックの全体像は不明である。無斑晶質安山岩を主体とし、黒曜石・珩質頁岩・チャート・蛇紋岩などが出土した。搔器状石器、削器、斧形石器の破片（剥片?）、石核が出土した。Ⅳ層上部まで攪乱されており、遺物はⅣ層・Ⅴa層に出土し、Ⅴb層の遺物は認められなかった。Ⅳ層またはⅤa層に生活面がある石器群の存在が確認され、複数時期の石器群の混在の可能性もある。

礫群 SH1002 と重複する。SH1002 はⅣ層に生活面があり、本ブロックの石器群と関連が認められる。

BL275

丘陵の平坦面にあり、散漫な分布を示す。チャート、黒曜石、無珉質安山岩などが出土した。Ⅲ層からⅤb層まで遺物が出土し、Ⅴa層に出土点数のピークが認められる。削器、石刃、石核などが出土した。Ⅴa層からⅤb層上面に生活面がある石器群の存在が想定される。無珉質安山岩は比較的まとまった分布を示すが、他の石材は散漫に分布しており、ブロックとして有意なまとまりではない。

接合資料

第97～101図に石材別に接合関係を示した。165例の接合資料があり、その内ブロック間の接合関係が41例確認された(第31表)。接合資料の器種・出土層位は第37表の接合資料一覧を参照していただきたい。

なお、BP第2地点の接合作業は、第9図に示した3地区に分けて行っており(BL201～207とBL208～258とBL259～275の3地区)、相互の接合作業は基本的には実施していない。

(2) 礫群・配石

SH301以外はすべてブロックと重複しており、各ブロックとの関連が認められる。ブロックとの関連については、各ブロックの記述に示した。第104図に層位別の分布図と大形礫の出土地点を、第34表に出土層位、赤化状況、欠損状況の集計を示した。各礫の属性は添付CDの礫台帳を参照していただきたい。

SH301

斜面にあり、調査区外に分布が広がる。1.2×3mの範囲に15点の礫が散漫に出土し、Ⅳ層とⅤa層に集中する。顕著に赤化したものが多く、径5cmを超える拳大の垂角礫が多い。Ⅳ層に生活面がある礫群に類似した状況であることから、Ⅳ層に生活面がある礫群と想定した。

SH302

斜面にあり、断層により地層が乱れる。2×2mの範囲に28点の礫が散漫に出土し、Ⅳ層とⅤa層に集中する。顕著に赤化しているものが多く、径5cm以下の小形の垂角礫と一辺12～15cmの大形の礫2点で構成される。Ⅴa層に生活面がある礫群と想定した。

SH303

丘陵上の平坦面にある。Ⅳ層中の1.3×0.7mの範囲に9点の礫が出土した。顕著に赤化した拳大の礫と大形礫の破片がみられる。表土直下がⅣ層であり、Ⅳ層の厚さが確認できないが、Ⅳ層中部以上に生活面が想定される。

SH304

丘陵上の平坦面にあり、中心部分には10点の礫が密集する。Ⅳ層に集中する。Ⅴa層の礫は離れており、別時期のもの判断した。Ⅳ層の礫は2.4×1.7mの範囲に帯状に分布する。顕著に赤化したものが少なく、半分以下に割れた垂角礫が多い。Ⅳ層に生活面があると判断した。

SH305 (第114図)

丘陵縁辺部の緩斜面にある。ほとんどがⅤa層より出土した。中心部の80×60cmの範囲では20点の礫が密集し、標高差3cmほどの平坦面に出土した。集中部の礫は円礫が多く、被熱した痕跡はみられない。円礫は6×8cm、厚さ3～4cmと大きさが揃っており、円礫集中部を他の礫群とは区別して配石としてとらえた。配石はSH310・313の配石と類似する。礫群・配石のいずれもⅤa層に生活面が想定される。

Ⅴ層中に5mmを超える大粒の炭化物がまとまって出土した。

SH306

丘陵縁辺部の緩斜面にある。40cm×30cmの範囲に密集しており、Ⅴa層より出土した。拳大の垂角

礫を用いているが、顕著に赤化した礫は少ない。V a層に生活面がある礫群と判断した。

SH307

丘陵緑辺の緩斜面にある。IV層中の30cmほどの範囲に5点の礫が出土した。拳大の亜角礫を用いている。

SH308

丘陵緑辺の緩斜面にある。散漫な分布を示し、IV層とV a層に47点の礫が出土した。完形の礫は5cm前後の亜角礫が用いられており、顕著に赤化したもの含まれる。大形礫の破片とみられるものもある。V a層に生活面があると判断した。

SH309 (第114図)

丘陵上の平坦面にある。散漫な分布を示し、III層からIV層に24点の礫が出土した。拳大の亜角礫が用いられており、顕著に赤化した礫が含まれる。大半がIV層から出土しており、IV層に生活面がある礫群と判断した。

SH310 (第114図)

丘陵緑辺の緩斜面にある。84点がIV層からV a層に出土した。特に、北側のV a層下面で、18点の円礫が0.9×0.6mの範囲にまとまって出土し(円礫集中部)、周辺部の亜角礫とは区別される。円礫は、8×6×3cm前後の楕円形で、顕著な赤化はみられない。亜角礫は顕著に赤化したものが多く、散漫に分布する。円礫集中部は礫群と区別し配石とした。いずれもV a層に生活面がある礫群および配石と判断した。特に配石はV a層下面(V b層上面)に生活面が限定できる。

SH311～313 (第114図)

丘陵緑辺部の緩斜面にある。いずれもV a層下面の同一平坦面で検出された。それぞれに集中部があり3ヶ所の礫群と認識した。SH311は12点がV a層から出土し、0.7×0.4mの範囲に集中する。円礫と亜角礫が含まれ、赤化した礫を含む。SH312は1.4×0.9mの範囲に分布する礫が中心となる。亜角礫を用い、顕著に赤化した礫を含む。SH313は0.5×0.35mの集中部があり、円礫と亜角礫を用い、顕著な赤化はほとんど見られない。

いずれもV a層下面に生活面が想定され、相互に関連した遺構と判断した。SH313は円礫が用いられていること、生活面がV a層下面であることから、SH305・310の配石と類似しており、関連する遺構ととらえたい。

SH314 (第114図)

IV層の礫が集中する部分をSH314 aとし、その周辺部のV a層を主体とするものと区別する。いずれも拳大の亜角礫を用いており、両者の礫の選択に違いは見出せない。

SH314aは2.1×1.3mの範囲にまとまり、中央部が擾乱により失われている。拳大の顕著に赤化した亜角礫が多くみられる。IV層に集中しており、IV層に生活面があると判断した。

周辺部のV a層に見られる礫は、散漫な分布を示す。顕著に赤化していないものが多いが、黒色付着物が認められるものがある。

SH315・316

緩斜面にある。SH315は4×5mの範囲に35点の礫が散漫に分布する。拳大の礫が多くみられるが、顕著に赤化した礫は少ない。IV層下部からV層中部に出土する。



SH306 西より



SH311 西より

SH316は2.3×4mの範囲に12点の礫が散漫に分布する、5cm以下の小形の礫が多く、顕著に赤化したものが多い。すべてV層より出土した。

いずれもV層に生活面がある礫群と判断した。

SH317 (第115図)

丘陵上の平坦面から緩斜面にかけて広範囲に広がる礫を一括した。礫は18×10mほどの範囲に広がっており、いくつかのまとまりが指摘できる。礫はIV層からVc層に出土し、IV層のものが多数を占め、IV層に生活面がある礫群の存在が確認できる。また、Vb層にも一定量出土しており、複数時期の礫群が重複している可能性が高い。北東側に重複する炭化物集中SF308はIV層の礫を除去した後に確認され、Vb層中部に出土点数のピークがあり、確認した炭化物粒は1118点になる。炭化物集中が人為的なものであることの検証を経っていないが、Vb層の生活面がある礫群との関係を想起させる。SH317にはIV層の生活面と、Vb層の生活面の二時期の礫群が混在しているものと判断した。

29例の接合資料が確認された。これらはいずれもIV層出土の礫に関わるものである。この内6例が50cm以上離れた接合であり、特に遺物番号16752と16933は12mの距離をおいて接合している(第115図)。接合関係は帯状に広がるIV層の礫群全体に及んでおり、広範囲に広がる礫群が相互に関連したものであることが予想される。

SH318 (第115図)

緩斜面にある。広範囲に分布する礫を一括したが、まとまりを捕らえられるものがあり、説明の便宜上、北側のものをSH318a、南側のものをSH318bとする。礫はIV層からVb層まで出土するが、大半はIV層より出土した。拳大の垂角礫を用いており、多くの礫は顕著に赤化している。IV層に生活面がある礫群と判断した。

SH319

丘陵上の平坦面にある。20×15mの範囲に分布する礫を一括した。IV層からV層にかけて出土し、V層出土の礫が主体を占める。垂角礫または角礫をもちいており、顕著に赤化したものが多く含まれ、黒色付着物がみられるものがある。顕著に赤化した礫は分布範囲全体に及んでおり、赤化状況による分布の偏りは認められない。3例の接合関係が確認されたが、いずれも近接した礫が接合したもので、SH317でみられたような広範囲での接合関係は確認できなかった。



SH319 西より

SH319の下部よりSH320に類似した小形の礫が出土した、との所見があることから、多くの礫はV層上部より出土したと思われる。VaとVb層を区分できるところでは、Vb層上面で出土した大形の礫を確認している。2kgを超える大形の礫は、顕著に赤化したものもあり(遺物番号19382)、他の礫の分布とも一致することから、一連の遺構と判断した。また、IV層の礫はV層の礫の分布と一致することから、V層に出土した礫と同時期のものと判断した。以上のことから、SH319はVa層またはVb層上面に生活面がある礫群と判断した。なお、V層下部に確認された小形の礫は、SH320との関連が予想され、時期が異なる可能性がある。

本礫群の中心に、V層に出土数のピークがある炭化物集中(SF309)が確認された。礫群との関連が想

定される。

SH320 (第115図)

丘陵の平坦面にある。IV層下部からV b層中部にかけて、 2×1.7 mの範囲にまとまって出土した。特に直径1.3 mの範囲に密集し、341点の礫を採取した。1～2 cm以下の礫が出土していたが、これらは採取しなかったため、礫の点数はさらに多い。礫は垂角礫または角礫を用いており、大半は5 cm以下の小形礫で、顕著に赤化したものも多く、黒色付着物がみられるものがある。20 cmを超える大形の礫が同一層より1点出土した。SH320の中心部に5 mm以上の大粒の炭化物が数点出土した。

集中部の礫は10 cmほどの高低差をもって出土しており、V b層上部にピークがある。V層上部に生活面がある礫群と判断した。

SH321 (第115図)

丘陵上の平坦面にある。東側のSH321aと西側のSH321bに分離できる。SH321aはIV層、SH321bはV層より出土したものが主体となる。IV層のものは顕著な赤化を示すのに対して、V層のものは赤化が顕著ではなく、それぞれ時期が異なる礫群と判断した。それぞれに2 kgを超える大形の礫が含まれており、SH321bでは大形の礫がまとまって出土した。大形の礫はいずれもV層より出土しており、顕著な赤化は認められない。SH321aはIV層、SH321bはV層（調査時の所見ではV b層上面）に生活面がある礫群と判断した。

SH322

緩斜面にある。散漫な分布を示し、IV層とV b層に出土点数のピークがある。顕著に赤化した礫はIV層に多くみられ、V b層にはほとんどない。また、2 kgを超える大形の礫が、V b層より出土しており、V b層に生活面がある礫群の存在が確認される。また、IV層出土の礫は散漫であり礫群とは言いがたいが、V b層の礫群とは時期が異なるものと判断した。

SH1001

丘陵上の平坦面にある。12点の礫が 3.2×1.5 mの範囲より出土した。IV層の礫とV b層の礫では約30 cm近くの高低差がある。IV層と、V a・V b層の礫がそれぞれ分布範囲を分けてまとまっており、二時期の礫群が重複する可能性がある。顕著に赤化した礫はIV層に限られ、10 cmを超える一番大形の礫がV b層より出土した。隣接してV b層に出土点数のピークがある炭化物集中 (SF307) が確認されることから、V b層上部に生活面がある活動の痕跡が想定できる。加えて、IV層に生活面がある礫群の存在の可能性も指摘しておきたい。

SH1002

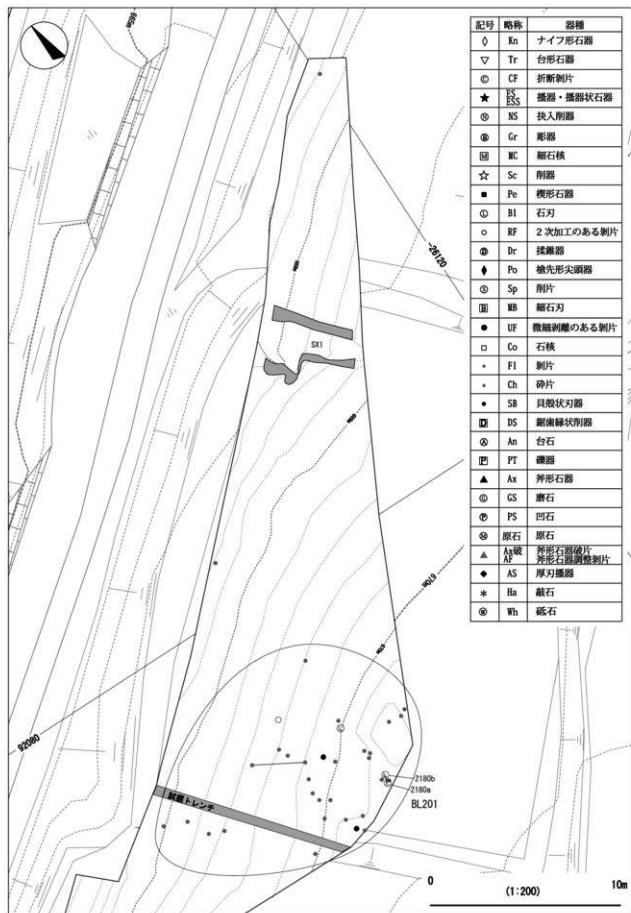
丘陵上の平坦面にあり、調査区外に広がる。顕著に赤化した9点の礫がIV層よりまとまって出土した。IV層に生活面が想定される礫群である。

SH1003

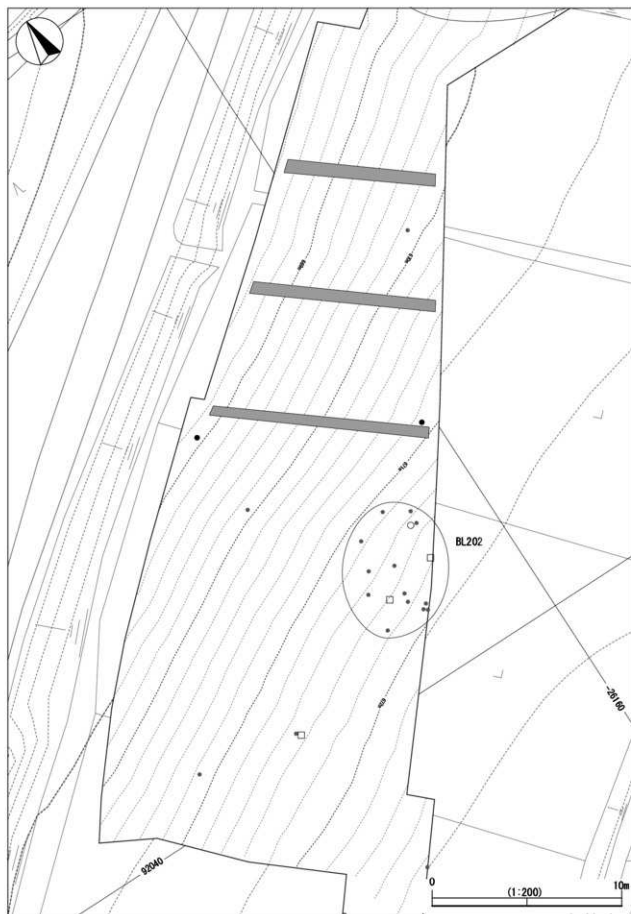
緩斜面部にある。 4.8×2.3 mの範囲に10点の礫が散漫に分布する。顕著に赤化した垂角礫が多く、IV層を主体とし、V b層まで出土している。これらの礫が同一時期のものであるかどうか判断できない。礫の出土範囲から台石 (2231・2232) が3点出土した。

SH1004

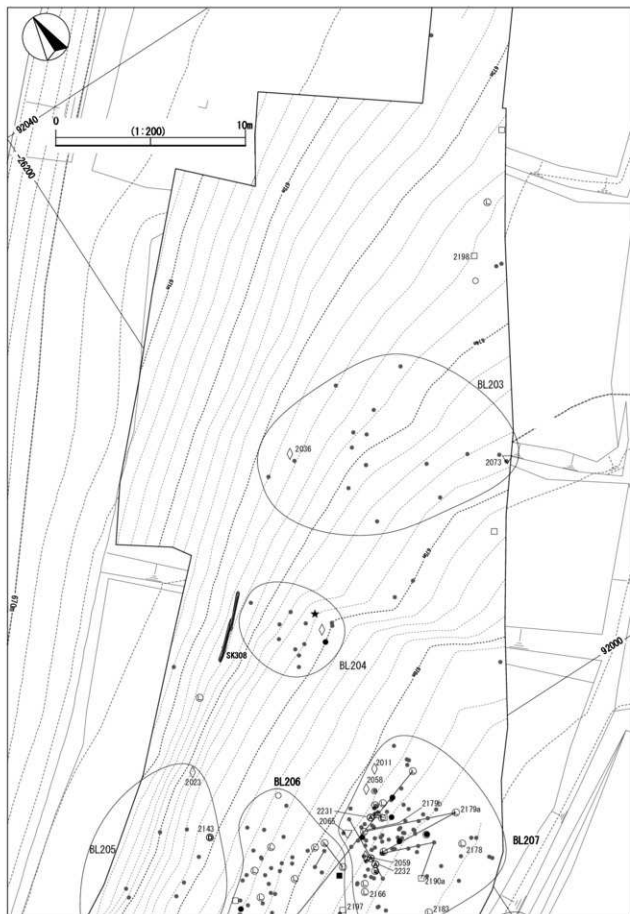
調査区北東端の斜面にある。 4×3 mの範囲から9点の礫が散漫に分布する。拳大の垂角礫を用い、顕著に赤化した礫を含む。すべてV a層より出土し、同層中に生活面を想定した。



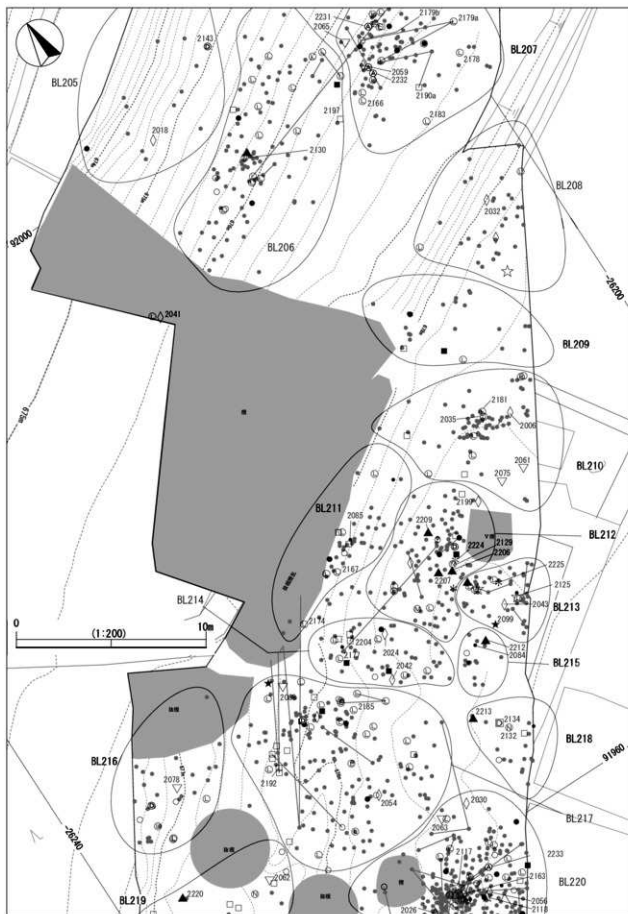
第106図 BP第2地点石器分布図1



第107図 BP第2地点石器分布図2



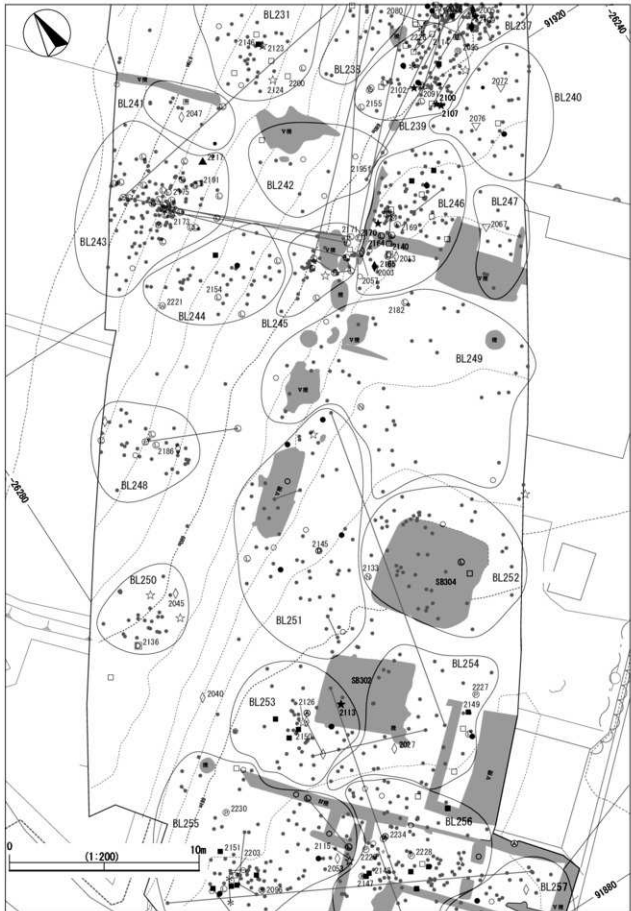
第108図 BP第2地点石器分布図3



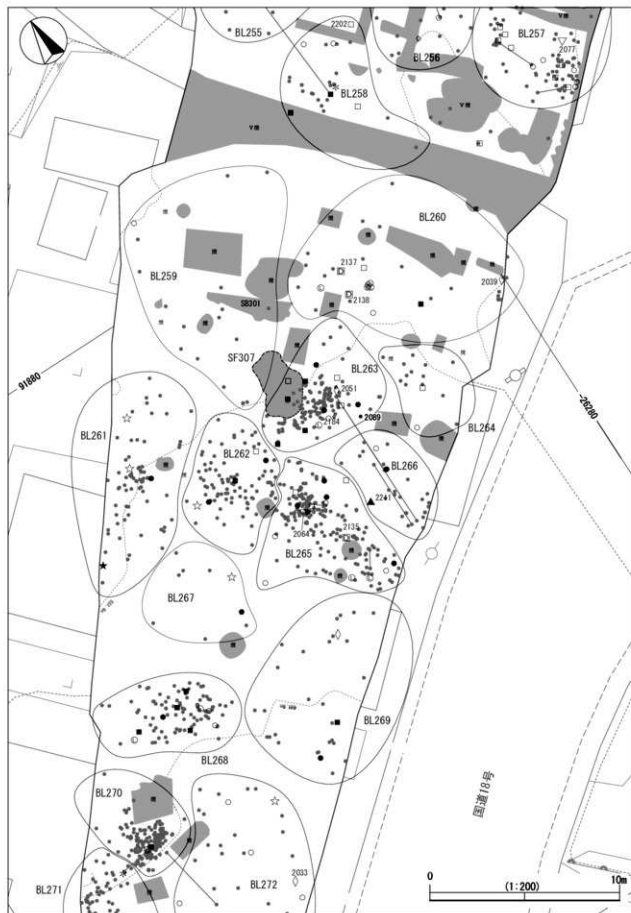
第109図 BP第2地点石器分布図4



第110図 BP第2地点石器分布図5



第111図 BP第2地点石器分布図6

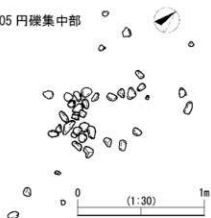


第112図 BP第2地点石器分布図7



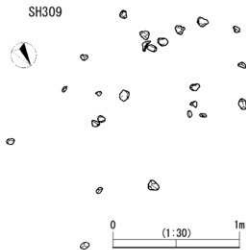
第113図 BP第2地点石器分布図8

SH305 円礫集中部

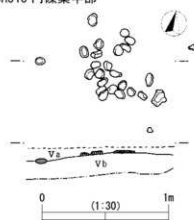


SH305 東より

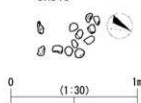
SH309



SH310 円礫集中部



SH313

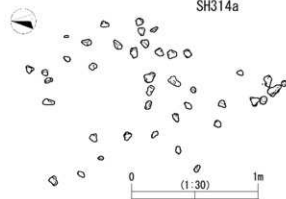


SH313 南より



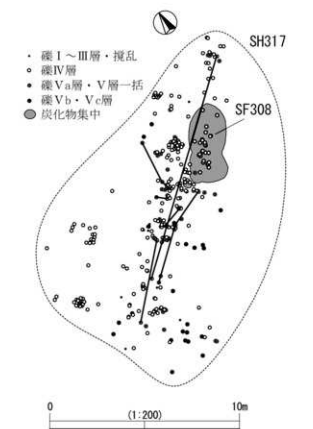
SH310 南より

SH314a



SH314a 東より

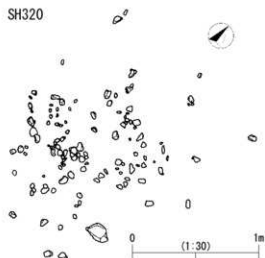
第114図 BP第2地点礫群1



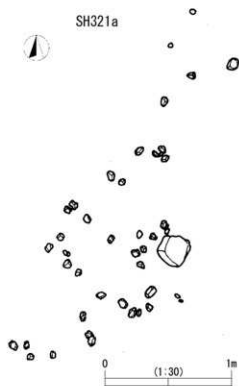
SH317 部分 南より



SH318 東より



SH320 東より



第115図 BP第2地点礫群2

5 出土遺物

(1) 石器 (第117～157図、第35・36表、PL14～25)

剥片石器、礫石器 847点、石核 140点、剥片・碎片 5390点が出土した。ブロック別の器種組成、器種別の石材組成を第35・36表に示した。

1. 槍先形尖頭器 (2001～2005)

6点の槍先形尖頭器が出土した。片側の側縁の肩が張る左右非対称形を呈し、大きさは6cmから3cmとやや小さい。2001～2004は肩が張る側の側縁に槌状剥離が施されている。2002の槌状剥離面は切り立っていることから、彫器と分類することもできる。平坦な剥離による両面、半両面、片面加工がみられるが、いずれも腹面が平坦で、背面が山形となることから、断面は「D」字状や山形になる。

2. ナイフ形石器 (2006～2060)

71点 (別に接合のない破片1) が出土した。

2006～2014は、ほぼ左右対称形で鋭利な先端をもつナイフ形石器である。石刃を素材としており、基部を中心に加工が施されるが、打面は残るものが多い。多くに先端を尖らすためのブランディングが施されており、先端と基部の加工が連なるものがみられる。珪質頁岩や玉髄など北方に産地がある石材が目立つ。

2015～2021は、ほぼ左右対称形で先端をもたないナイフ形石器である。石刃を素材としており、基部を中心に加工が施されるが、打面は残る。しっかりとしたブランディングが施される2015・2016と、加工が少ない2017～2021がある。

2022は側縁全体に加工が施される周縁加工の槍先形尖頭器のようなナイフ形石器である。正方向のブランディングが主体となるが、反方向のブランディングもみられる。基部に素材打面が残されている。

2023～2030は、ほぼ左右対称形で、欠損部位をもつナイフ形石器である。2023は基部、2024～2029は先端、2030は基部と先端が欠損している。

2031～2039は左右非対称形で鋭い先端をもつナイフ形石器である。石刃を素材とし、素材打面を基部に置くものが主体となるが、基部加工のナイフ形石器よりも加工による変形が大きいため、素材打面が先端側にあるものもある。正方向のブランディングにより、先端と反対側側縁の基部を斜めに折断する。先端に加工が施される側の側縁基部への加工は弱い。

2040～2042は左右非対称形で鋭い先端をもち、素材の変形が大きいナイフ形石器である。正方向もしくは正反方向のブランディングにより素材を折断し、菱形や平行四辺形の平面形を作出している。

2043～2048はゆがんだ縦長剥片を素材とする左右非対称のナイフ形石器である。2043～2045は2側縁に、2046～2048は基部に加工が施されている。

2049～2053は横長剥片を素材とするナイフ形石器である。素材打面は側縁にあり、平面形は縦長を呈する。2側縁に加工が施される。

2056～2058は左右非対称形で、先端が欠損しているナイフ形石器である。2側縁に加工が施されている。

2057～2059は石刃の一端を斜めに折断したナイフ形石器で、2058には基部が丸く作出されている。

2060はナイフ形石器の先端と思われるが、欠損部が大きく全体像がつかめない。

3. 台形石器 (2061～2083)

25点の台形石器が出土した。

2061～2064は平坦剥離による加工が施されるものである。貝殻状剥片を横に用いて、左右側縁に平

坦剥離やブランディングが施されている。平面形は台形を呈する。

2065～2075はブランディングによる加工が施されるものである。貝殻状剥片を横に用いて、左右側縁をブランディングにより折断している。加工方向は正方向が主体となるが、2065・2071の片側側縁は反方向である。2067～2072・2074は左右側縁がノッチ状を呈する。刃部は石器軸に斜交するものが多い。

2076～2083は左右側縁と主軸に直交・斜交する刃部から台形石器としたものだが、他との共通性の低い個性的なものである。

4. 貝殻状刃器 (2084～2090)

28点の貝殻状刃器が出土した。

2084～2089は貝殻状剥片を横に用いている。多くが打面を側縁として利用しており、端部に加工が施される。2086の背面にはボジ面がある。

2090は貝殻状剥片を縦に用いている。右側縁腹面に平坦な剥離が施されている。

5. 彫器 (2091～2098)

8点の彫器が出土している。

2091・2092は主軸に対して斜めの彫刀面をもつ彫器である。2091は正方向のブランディングにより、楕状剥離を施すための打面を作出している。2092は反方向の平坦な剥離を施し打面とし、左側縁に彫刀面を作出し、さらにその彫刀面を打面として右側縁に楕状剥離を施している。

2093は正方向の平坦剥離を施し、弧状の楕状剥離のための打面を作出している。この加工は掻器の刃部加工に類似する。彫刀面は左側縁上半部縁辺にあるが、内側にも彫刀面に平行する楕状剥離がみられる。

2094～2096は主軸に平行する彫刀面をもつ。2094・2095は素材の打面を、2096は素材末端の切り立った面を楕状剥離の打面としている。

2097・2098の石材は黒曜石としたが、パーライトの可能性が高い。彫刀面を打面として、左右交互に楕状剥離が繰り返し施され、素材を大きく変形させている。

6. 掻器・掻器状石器 (2099～2113)

17点の掻器(別に接合しない破片1点あり)と8点の掻器状石器が出土した。チャートを石材とするものが多い。

2099～2101は縦長剥片を素材としている。2099・2101は側縁、2100は末端に刃部が作出されている。

2102～2107はチャートの貝殻状剥片を素材としている。背面に礫面を有するものが多く、素材末端に円形の刃部が作出されている。

2108・2109は黒曜石を石材としている。2108は貝殻状剥片の全周に加工が施され、寸詰まりの拇指状を呈する。2109は縦長剥片を素材として、末端に円形の刃部が作出され、拇指状を呈する。

7. 削器 (2114～2128)

38点の削器が出土した(別に接合しない破片2点あり)。石材は、大形品は無斑晶質安山岩、小形品はチャートが多い。加工は刃部のみで、素材も多様なため形態の斉性が低い。

2114～2116は縦長剥片を素材として、側縁に刃部が作出されている。

2117と2118は無斑晶質安山岩製の大型縦長剥片を素材としている。部分的に加工が施され刃部が作出されている。両者には楕状剥離がみられるが、素材が大型のため石核が転用された可能性も考えられることから、彫器ではなく削器とした。

2119は石刃石核を削器に転用したと思われる。背面には石刃を剥離した稜がみられる。刃部は打面と作業面の稜に作出されている。

2120～2124は無斑晶質安山岩を石材としている。そのためか大形である。部分的に加工を施して刃部が作出されている。刃部以外への加工はない。

2125・2126は黒曜石を石材としている。2125は大形剥片から剥離された削片状の剥片を素材としている。2126は大形剥片の末端脇の両側に弱い鋸歯縁状の刃部が作出されている。

2127・2128はチャートを石材としている。刃部加工には平坦剥離がみられる。

8. 挿入削器 (2129～2133)

8点の挿入削器が出土している。素材に規格性がなく、加工が刃部のみとなることから個々が異なる形状を呈す。

9. 鋸歯縁状削器 (2134～2141)

10点の鋸歯縁状削器が出土している(破片1点がこの中の1点に接合している)。

素材に規格性がなく、加工が刃部のみとなることから個々が異なる形状を呈する。隣り合う複数の挿入部が作出されており、挿入削器や揉錐器との共通性が認められる。

10. 揉錐器 (2142～2145)

8点の揉錐器が出土した。

挿入削器、鋸歯縁状削器と同じように、素材に規格性がなく、機能部以外に加工が施されないため、個々が異なる形状を呈す。片側から急角度の加工を施して、尖頭部を作出している。

11. 楔形石器 (2146～2151)

54点の楔形石器が出土している(破片1点がこの中の1点と接合している)。

報告する楔形石器は6点と少ないが、写真図版には報告しない楔形石器も含まれている(PL19)。

剥片を素材として、両端からの打撃による剥離が施されている。やや縦長で、長さが2～3cmと小形が主体となっている。チャート製には礫面が多くみられる。

12. 石刃 (2152～2188)

285点の石刃が出土した(別に接合のない破片3点)。頭部調整、打面調整、稜上調整がみられるが、特に頭部調整が顕著である。石材は無斑晶質安山岩が主体である。石核と接合する石刃(接合資料番号546A・675A)^{註1}や、石刃同士の接合資料の存在から、遺跡内での石刃剥離作業が確認される。しかし、石刃石核は少なく、単独で遺跡に持ち込まれたと判断した資料も多数みられることから、石刃の形で遺跡内に持ち込まれたものもあることが確認できる。2170～2173は石核との接合は確認されなかったが、12点の石刃が接合した個体である。

2152～2156は打面調整が施されている石刃である。石材にはチャートが目立つ。打面調整がみられる石刃の数量は少ない。

2157～2160は打面調整と稜上調整の両者がみられる石刃である。

2161～2175は頭部調整がみられる石刃である。無斑晶質安山岩および珪質頁岩の大形品が目立ち数量的に多い。

2176～2179は頭部調整と稜上調整がみられる石刃である。

2180～2183は打面調整、頭部調整、稜上調整がみられない石刃である。

2185～2188は打面等の折れにより、調整の有無が確認できない石刃である。

13. 石核 (2189～2205)

140点の石核が出土した。目的剥片には石刃、縦長剥片、貝殻状剥片がある。石刃石核は報告の割合は高いが、数量的には10点前後と少ない。数量的に多いのは鶏卵大のチャート円礫を原石とする、貝

註1 接合資料546Aは第147図2195、接合資料675Aは第116図に示した。

殻状剥片を目的とする石核である。これには、90°単位の打面転移を繰り返すサイコロ状のもの、同一の打面と作業面から2～3回の剥離を行うもの、両極打撃で剥離され楔状のものがみられる。また、無斑晶質安山岩には剥片素材の石核がみられる。

2189～2193は無斑晶質安山岩の石刃石核である。180°の打面転移、打面再生、打面調整、頭部調整がみられる。

2194は珪質頁岩の石刃石核である。石刃3点、剥片2点が接合している(第116図接合資料675A)。頭部調整がみられ、接合している石刃には稜上調整もみられる。

2195・2196はチャートの石刃石核である。打面調整、稜上調整がみられる。

2197・2198はチャートと黒曜石の縦長剥片が剥離された石核である。2197には打面調整が施されている。

2199～2201は打面と作業面を交互に入れ替えるチョッピングツール状の石核である。貝殻状剥片が剥離されている。石核調整はみられない。

2202は作業面が固定される板状の石核である。

2203は線状の打面をもつ楔状の石核である。

2204は非常に大きな玉髓の石核である。作業面が固定され、求心状の剥離が行われている。

2205は無斑晶質安山岩の円礫から数回剥離をしただけの石核である。



玉髓石核(2004)出土状況

14. 斧形石器(2206～2220)

15点の斧形石器が出土した(別に接合のない破片6点)。石材は蛇紋岩が主体となるが、多孔質の安山岩等もみられる。

2206～2207・2209はBL212から出土している。いずれも背面に礫面を有する蛇紋岩の剥片を素材としている。周縁には完成品と同程度の加工が施されているが、研磨は認められない。

2208・2210の石材は多孔質で、2208は安山岩、2210は不明だが安山岩に近いと思われる。細身でやや厚い。研磨は確認できない。

2211～2216はいずれかの部位が欠損している。2212や2215には欠損後の再加工の痕跡がみられる。

2217～2220は蛇紋岩製の小形の斧形石器である。平面形の最大幅が刃部付近にあり、幅広で寸詰まりである。研磨に単位があるようで、研磨面内に稜線がみられる。このような研磨はAT降灰以前の斧形石器にはほとんど例がない。出土層位も攪乱および1層のため、縄文時代に属する可能性がある。

15. 砥石(2221)

1点の砥石が出土している(別に破片1点)。砂岩製で欠損しているが、残されている部位の形状から、大きいても現存の2倍程度の大きさと思われる。このような小形の砥石はめずらしい。

16. 敲石(2222～2226)

10点の敲石が出土している(別に接合のない破片3点あり)。棒状、板状、石塊状の形状があり、砂岩製が多い。

17. 凹石 (2227～2230)

5点の凹石が出土している。縄文時代の凹石と異なり、凹部は線状の傷の集合となっている。楔形石器との関連が予想される。

18. 台石 (2231～2234)

7点の台石が出土した。2231と2232の表面は滑らかで、磨り面の可能性がある。

2233と2234は他の部位が赤化しているのに対し、敲打痕で示した面は赤化部が剥がれ落ちている。

(2) 接合資料 (第116図・第37表)

165例の接合資料を確認した。1例が敲石で他は剥片石器群の接合資料である。石材別の接合資料の分布状況を第97～101図に示した。各接合資料の器種および出土層位を第37表接合資料一覧に示し、実測図(または写真展開図)を掲載した石器は、報告番号欄に報告番号を記載した。

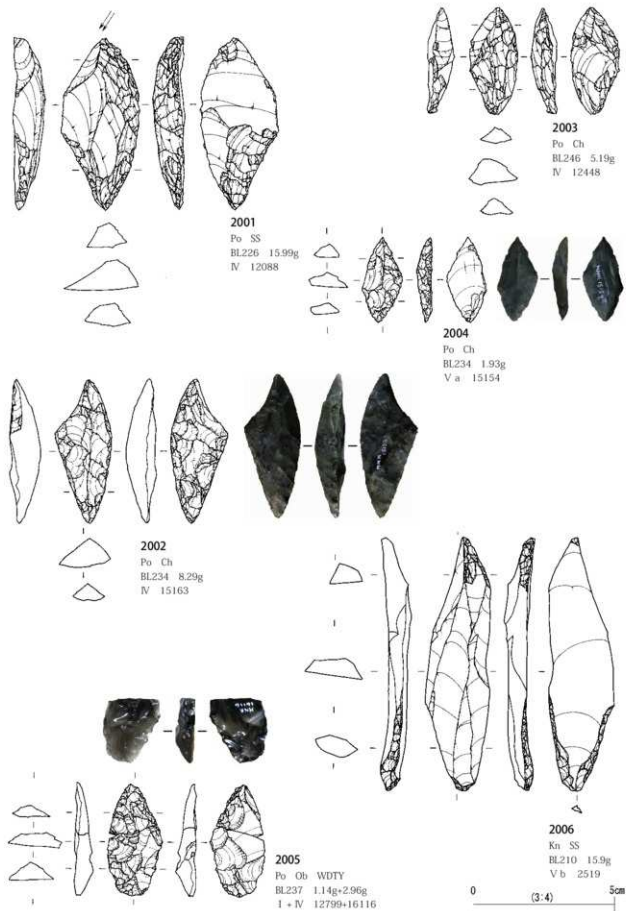
時間的な制約で、接合資料は十分に図示することができなかったが、接合資料番号615Aと675Aの展開写真を示した。

615Aは、写真撮影後に接合したものを含め、石刃12点と剥片2点が接合した資料である。報告番号2170～2173の石刃を含み、BL226・235・243・245のブロック間で接合した。なお、同一個体と思われる石核は出土していない。

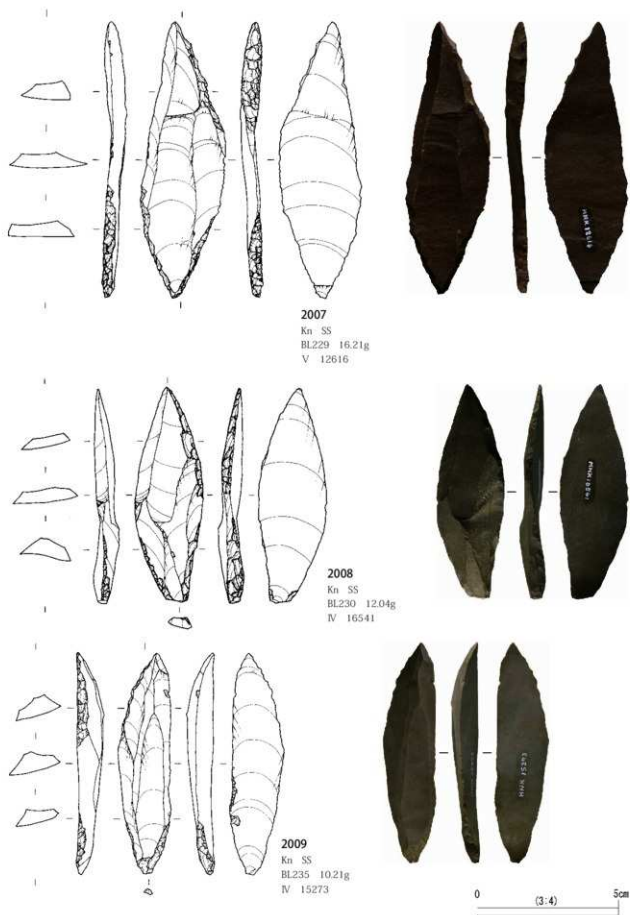
675Aは石核(2194)と石刃の接合資料である。



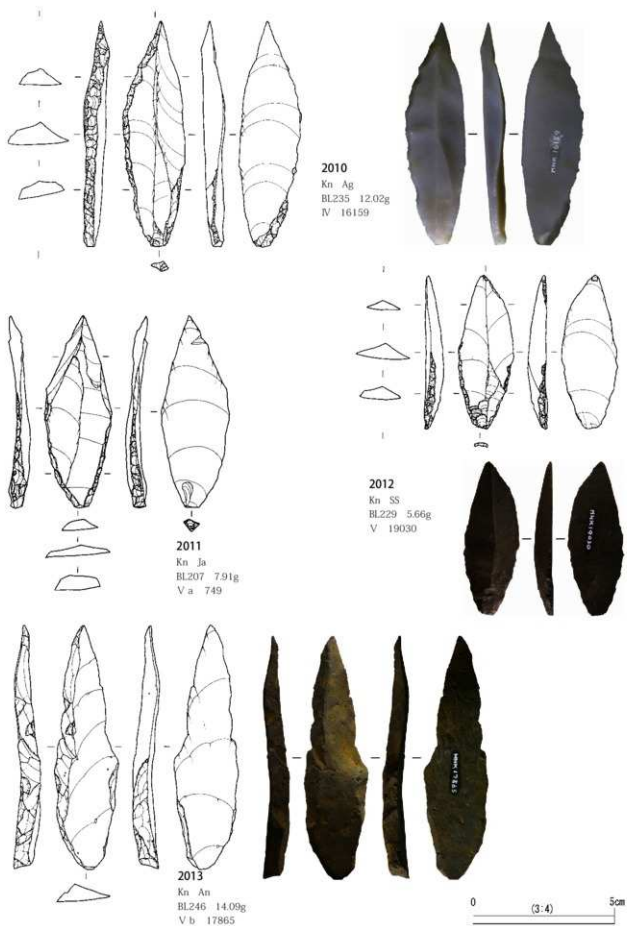
第116図 BP第2地点接合資料



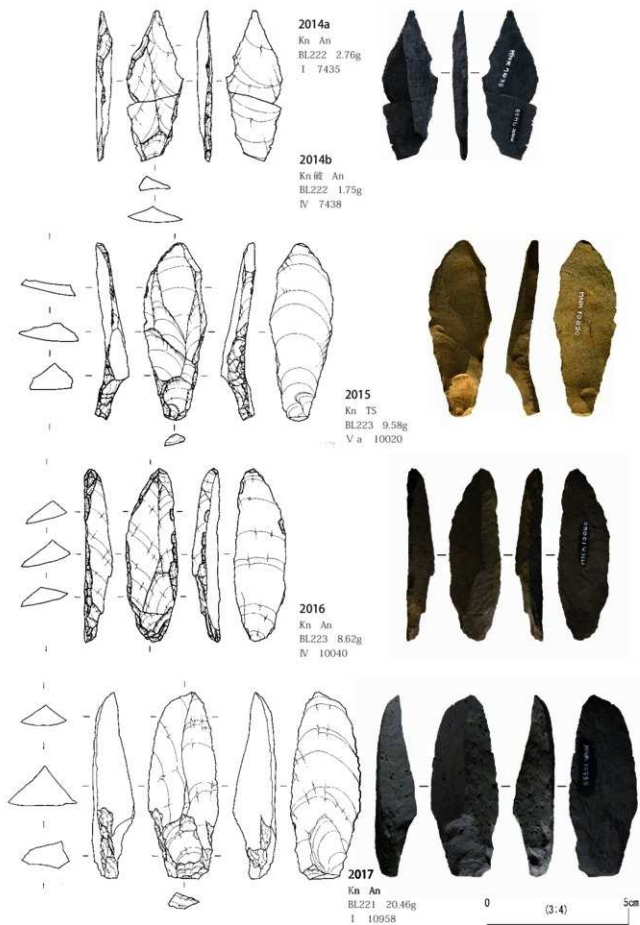
第117図 BP 第2地点の石器（槍先形尖頭器・ナイフ形石器1）



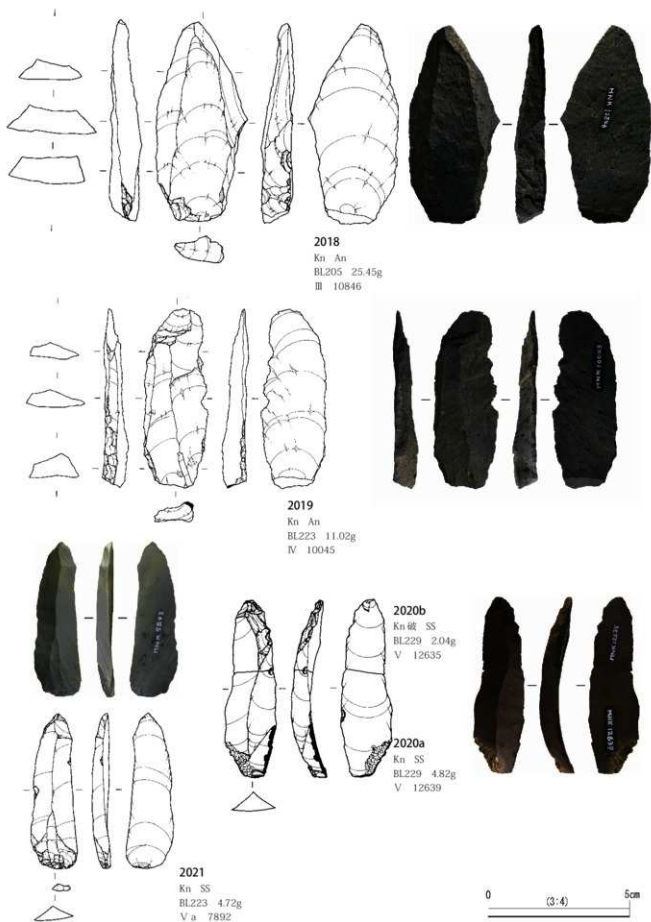
第118図 BP第2地点の石器（ナイフ形石器2）



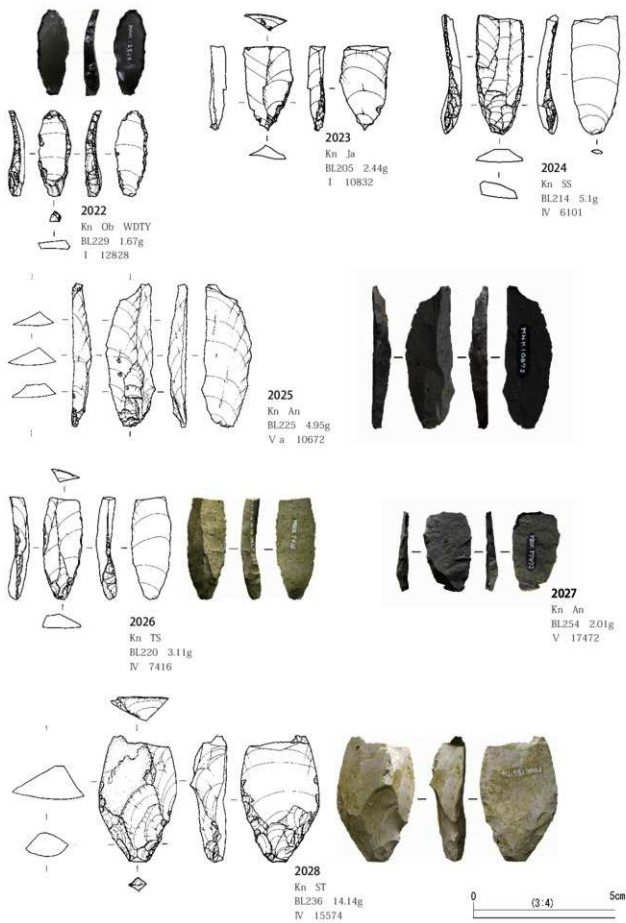
第119図 BP 第2地点の石器（ナイフ形石器3）



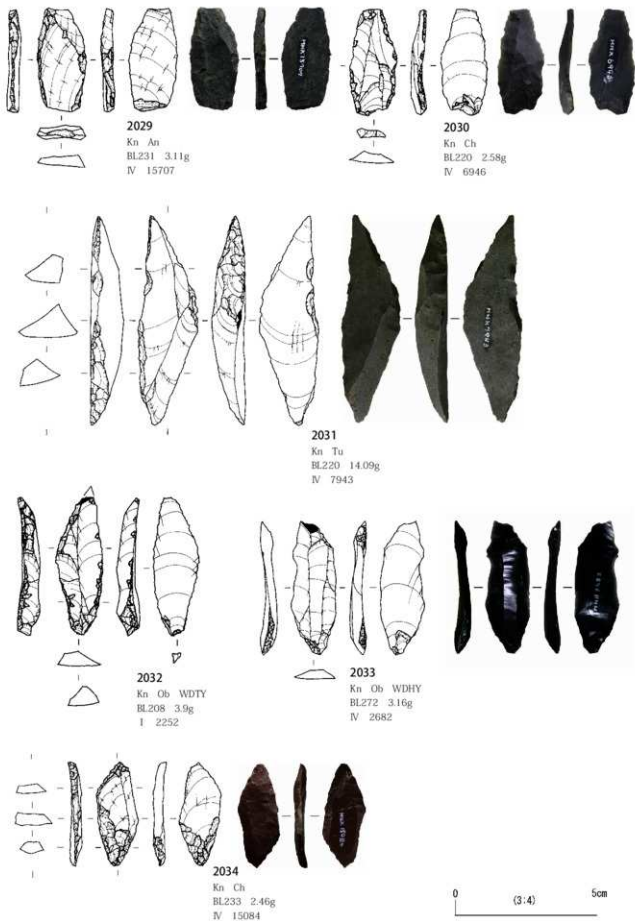
第120図 BP第2地点の石器(ナイフ形石器3)



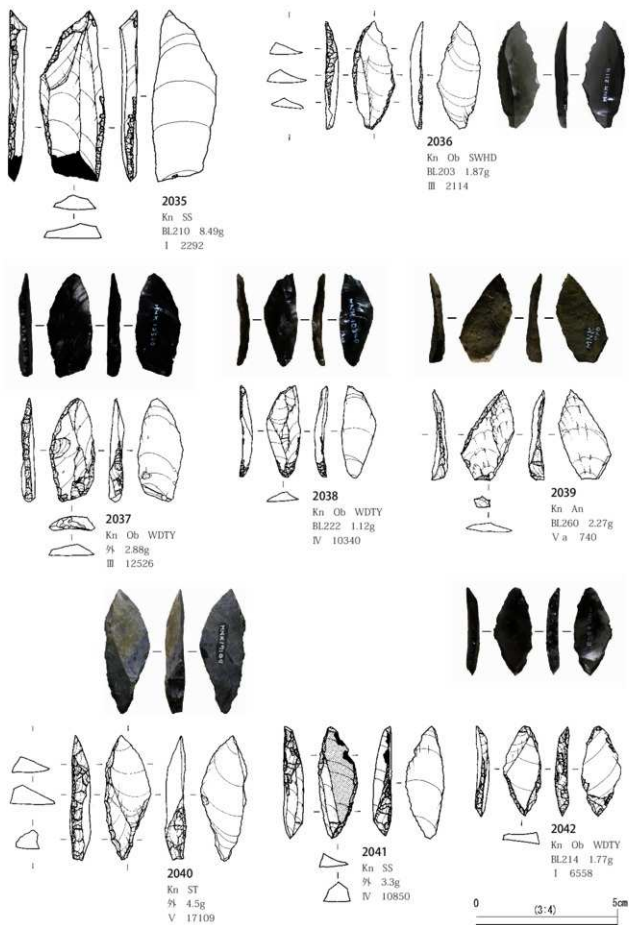
第121図 BP 第2地点の石器(ナイフ形石器4)



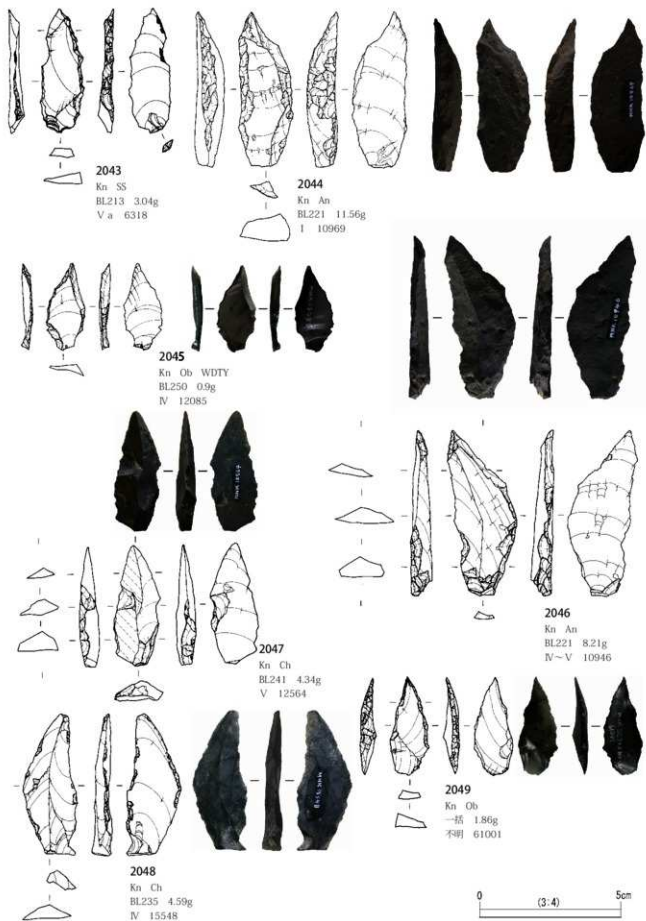
第122図 BP第2地点の石器(ナイフ形石器5)



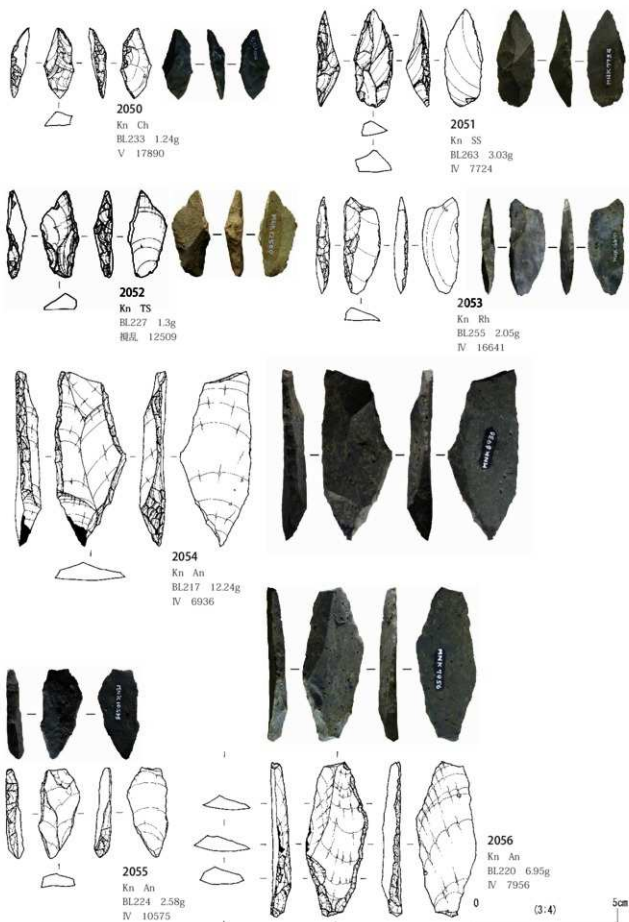
第123図 BP第2地点の石器(ナイフ形石器6)



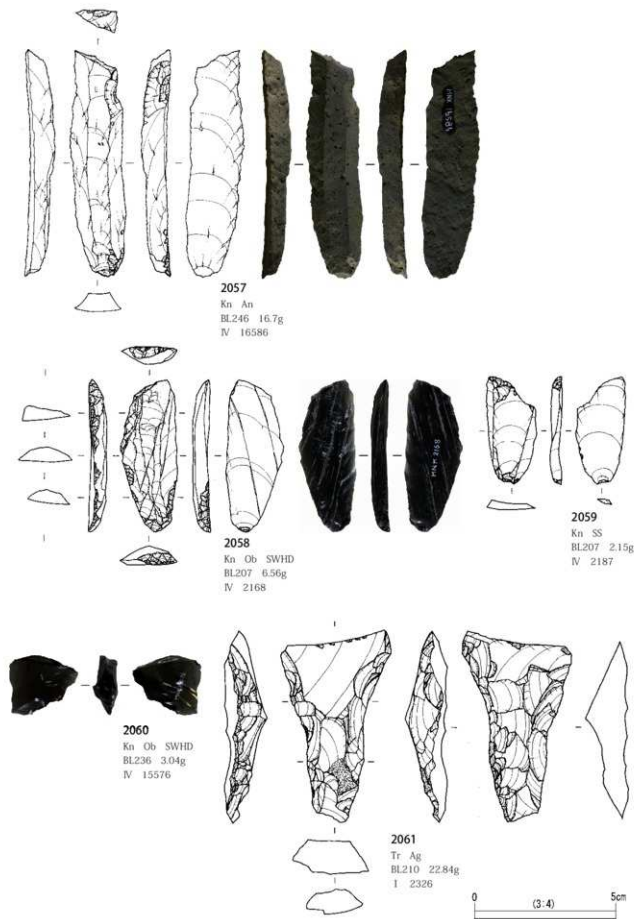
第124図 BP第2地点の石器(ナイフ形石器7)



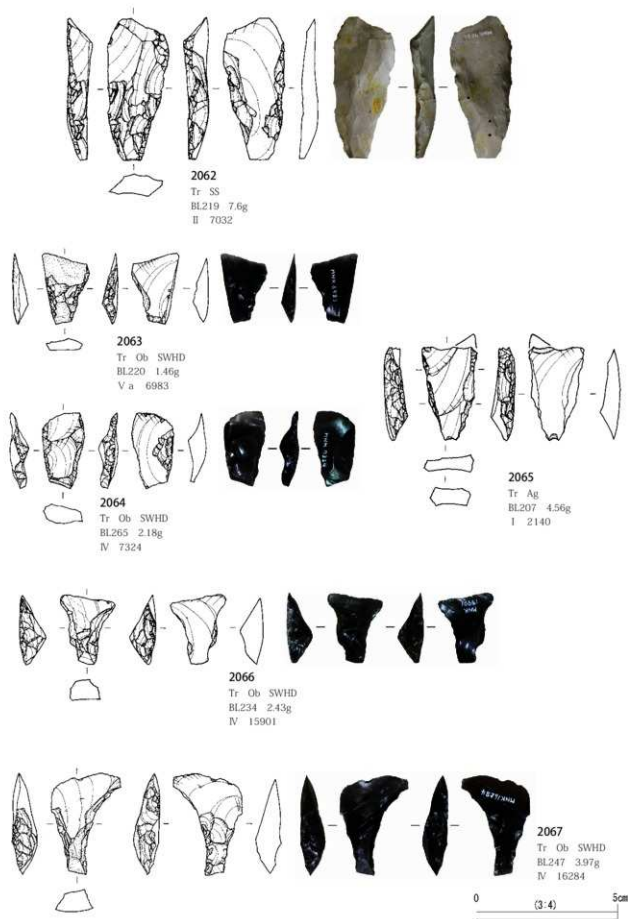
第125図 BP第2地点の石器(ナイフ形石器8)



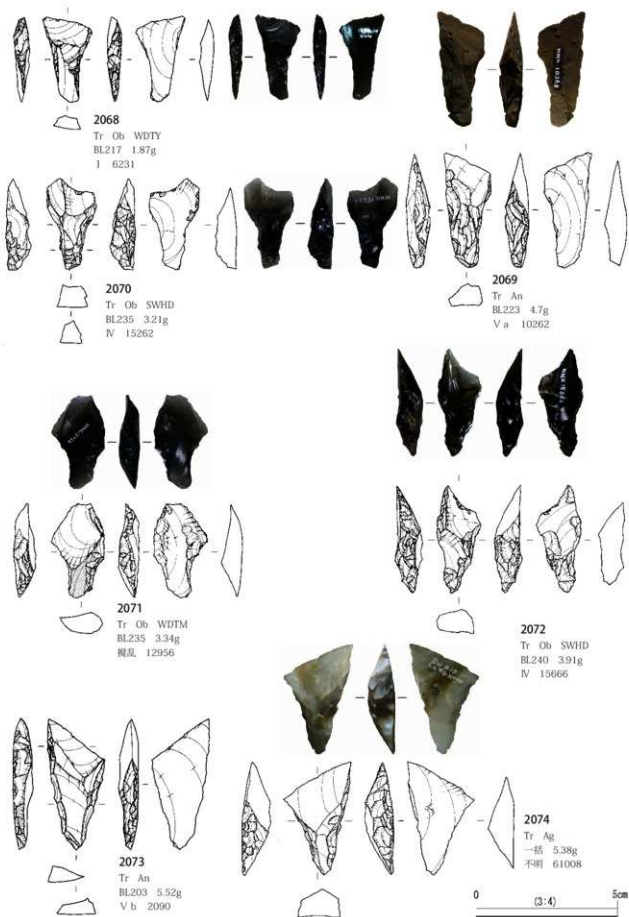
第126図 BP第2地点の石器(ナイフ形石器9)



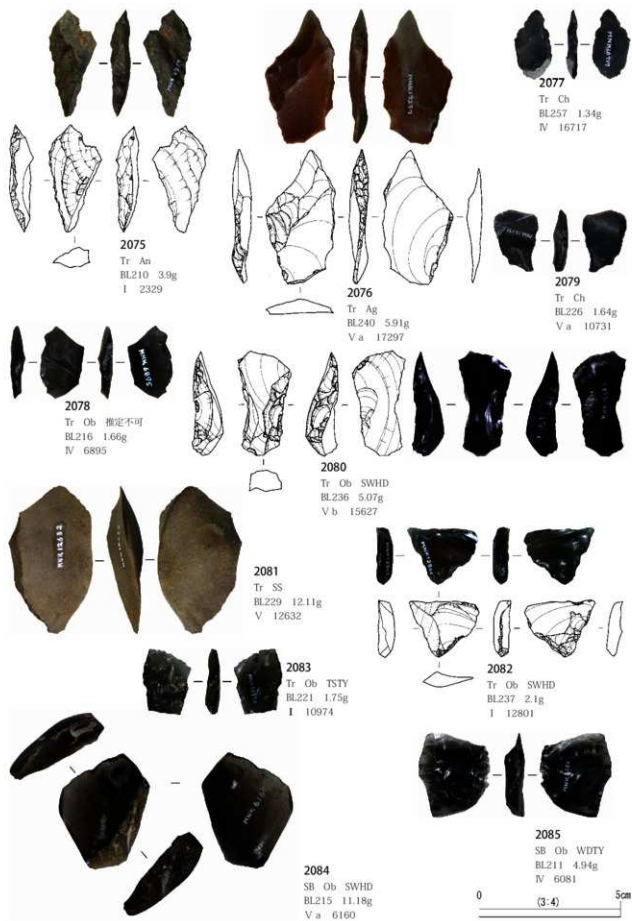
第127図 BP 第2地点の石器（ナイフ形石器10・台形石器1）



第128図 BP第2地点の石器（台形石器2）



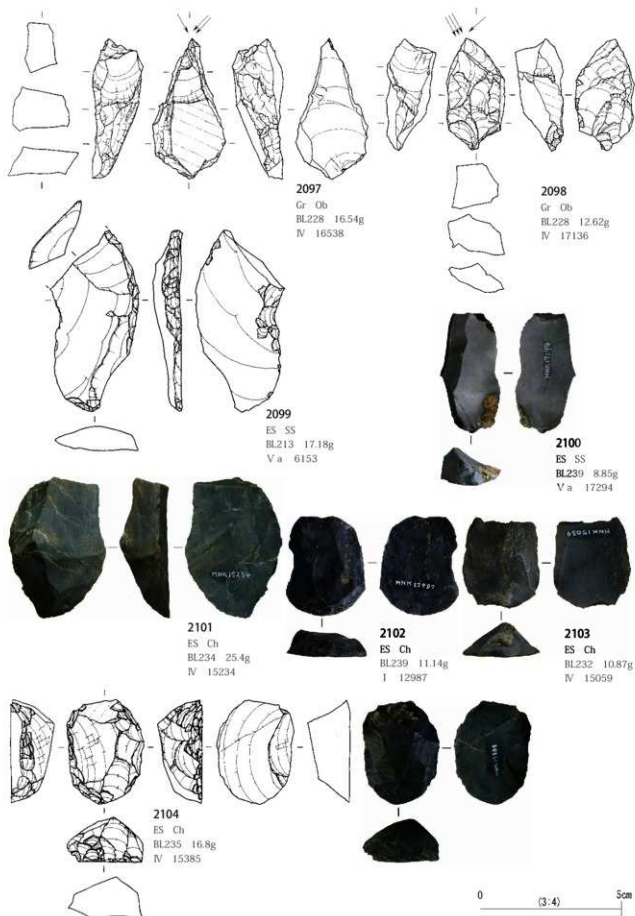
第129図 BP第2地点の石器（台形石器3）



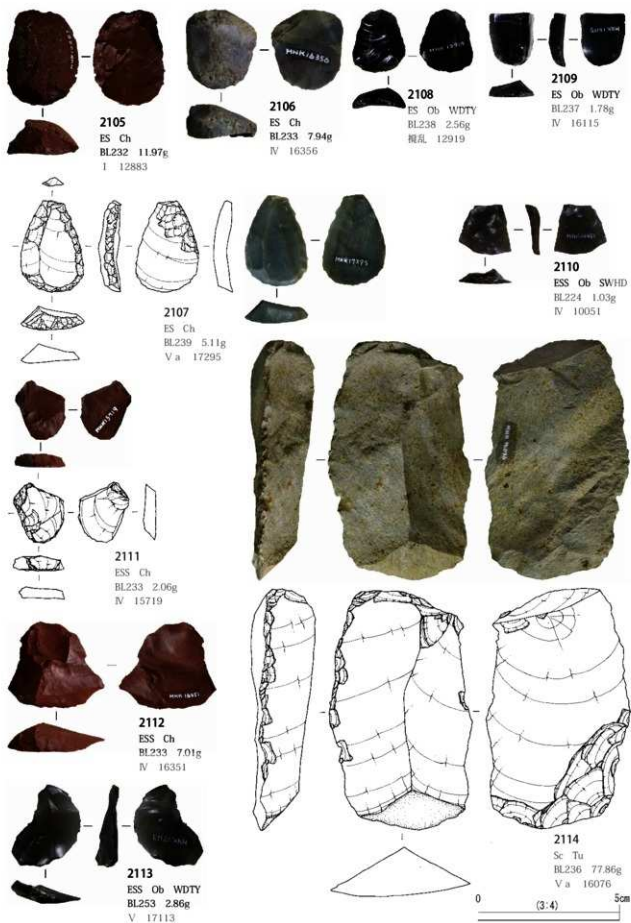
第130図 BP第2地点の石器(台形石器4・貝殻状刃器)



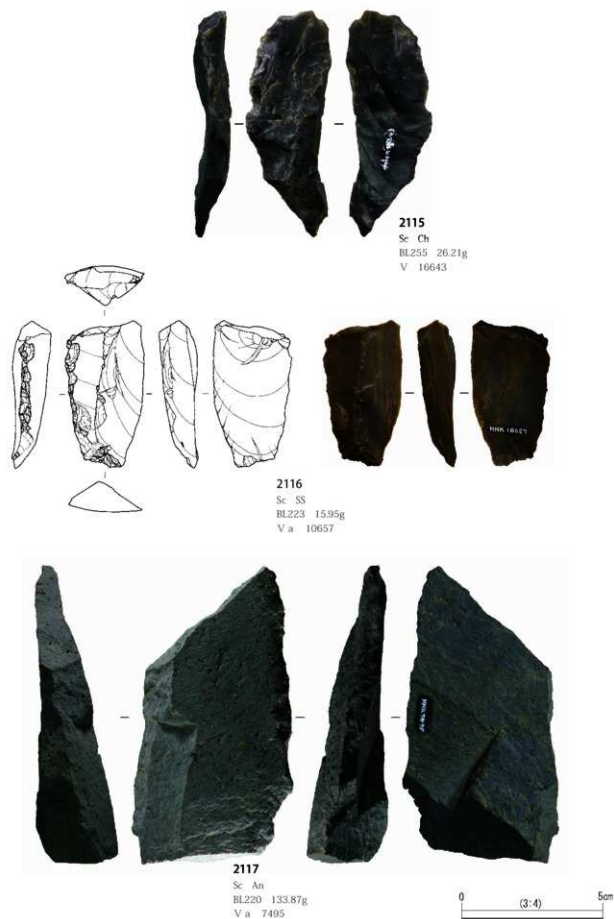
第131図 BP第2地点の石器(貝殻状刃器2・彫器1)



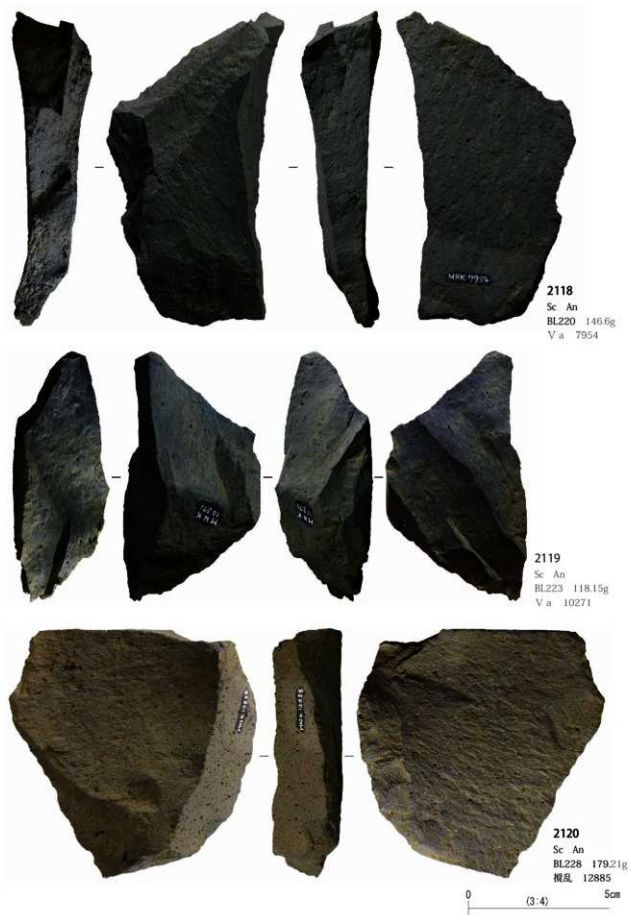
第132図 BP第2地点の石器(彫器2・掻器1)



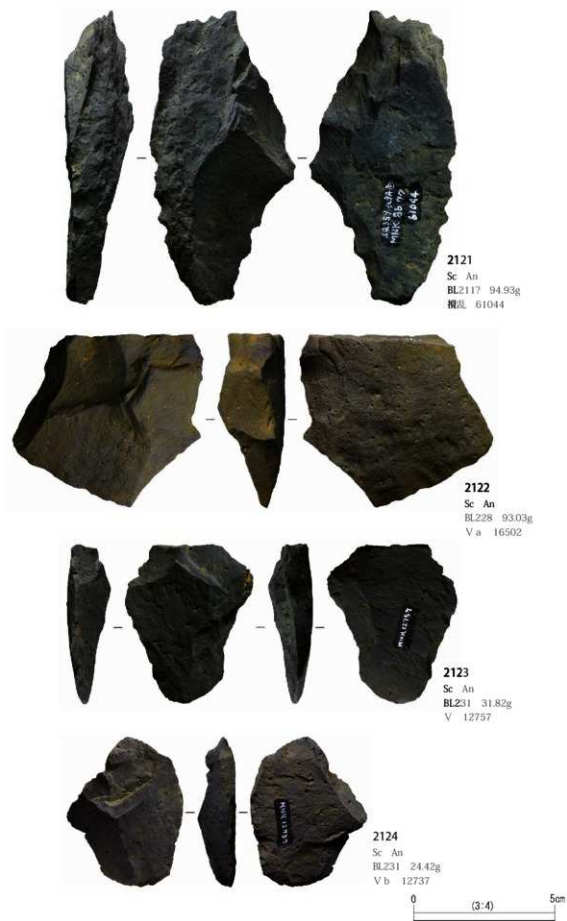
第133図 BP第2地点の石器(挿器2・挿器状石器・削器1)



第134図 BP第2地点の石器(削器2)



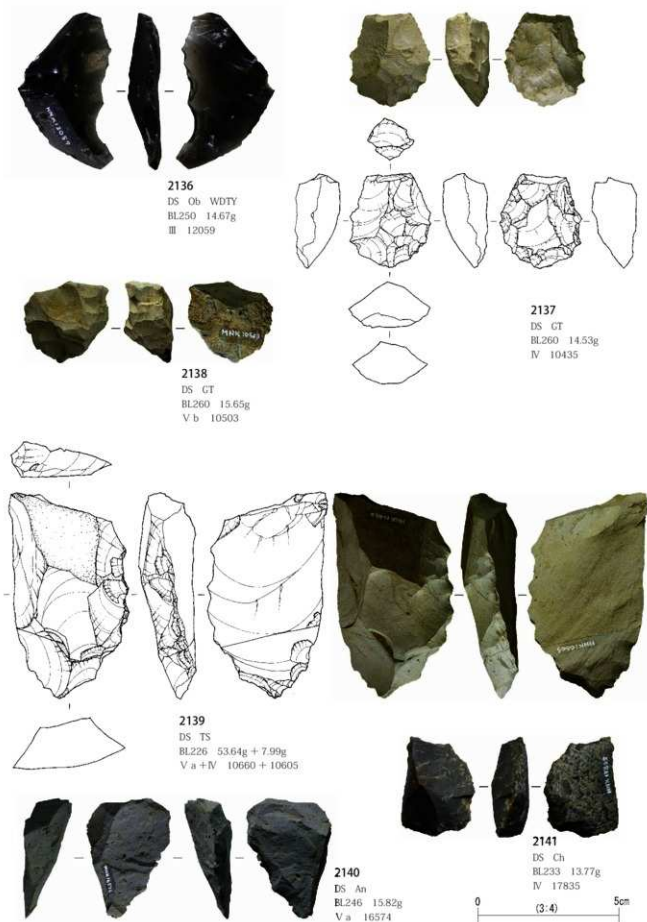
第135図 BP第2地点の石器(削器3)



第136図 BP第2地点の石器(削器4)



第137図 BP第2地点の石器(削器5・抉入削器・鋸歯縁状削器1)



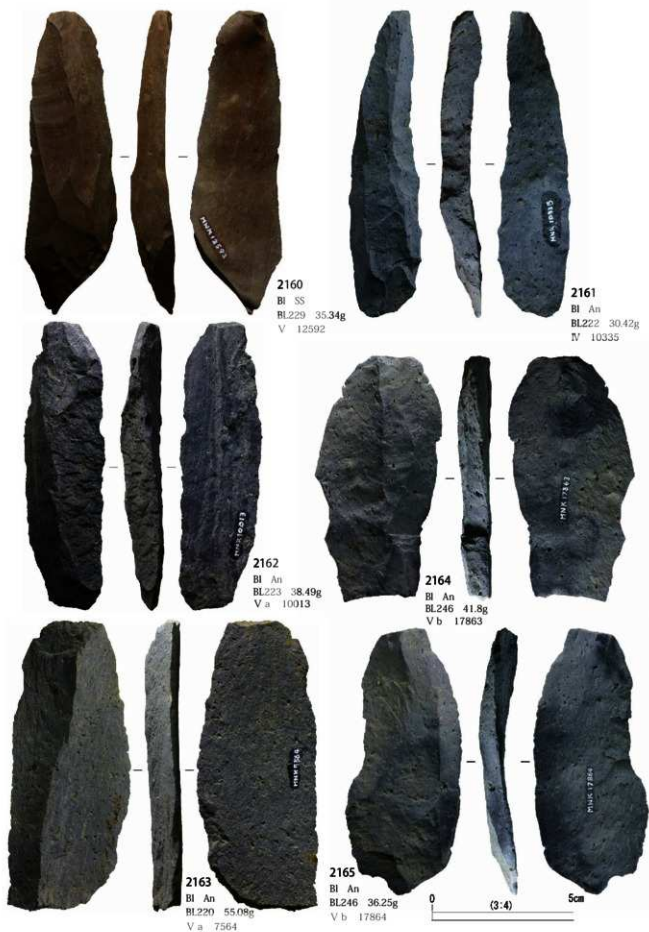
第138図 BP第2地点の石器（巖鹼緑状閃器2）



第139図 BP第2地点の石器（掻鎌器・楔形石器・石対1）



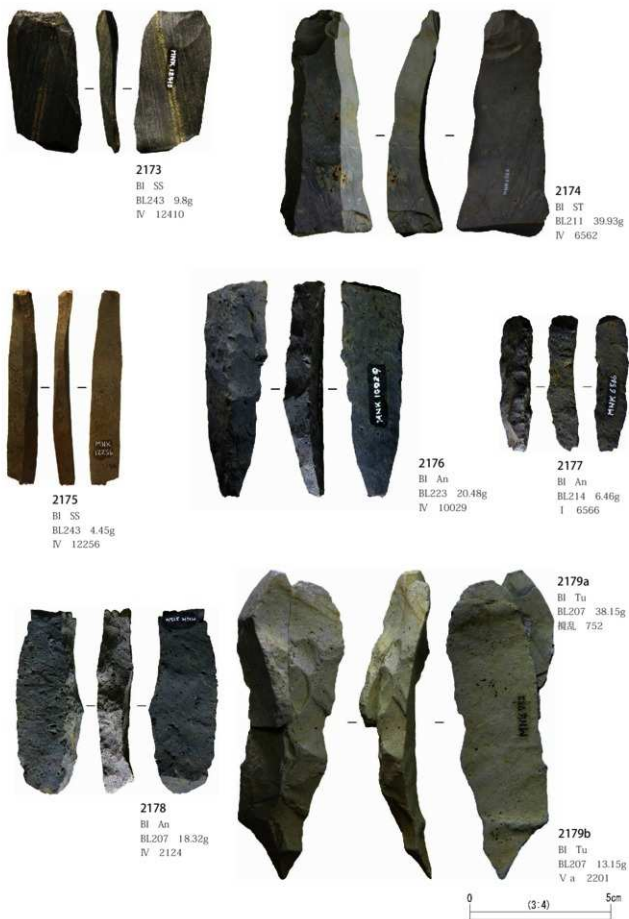
第140図 BP第2地点の石器(石刃2)



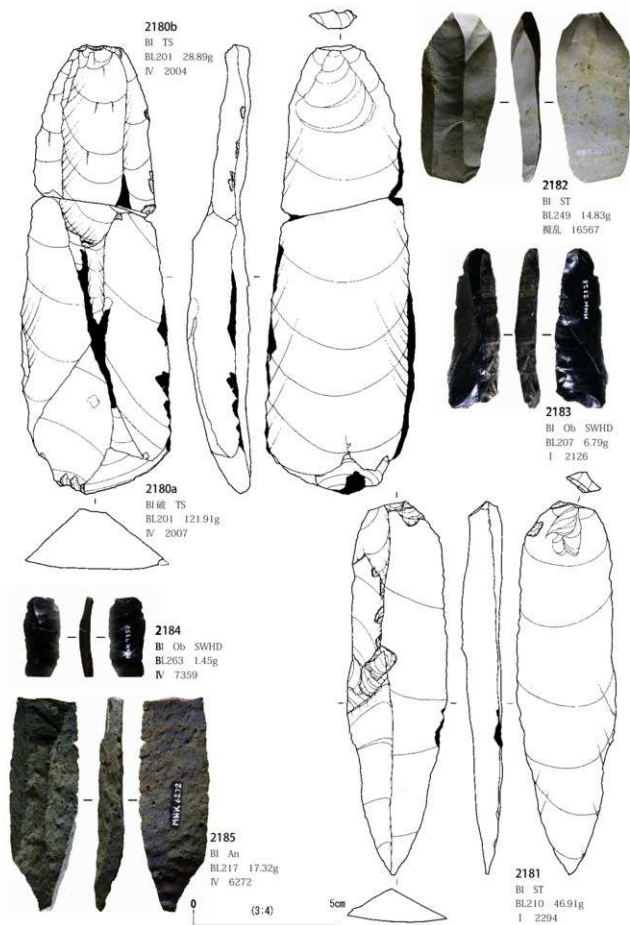
第141図 BP第2地点の石器(石刃3)



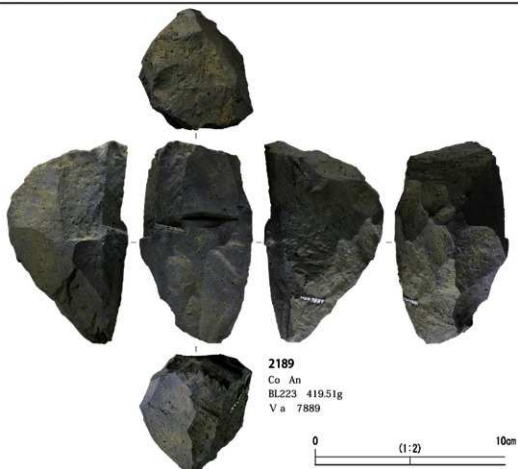
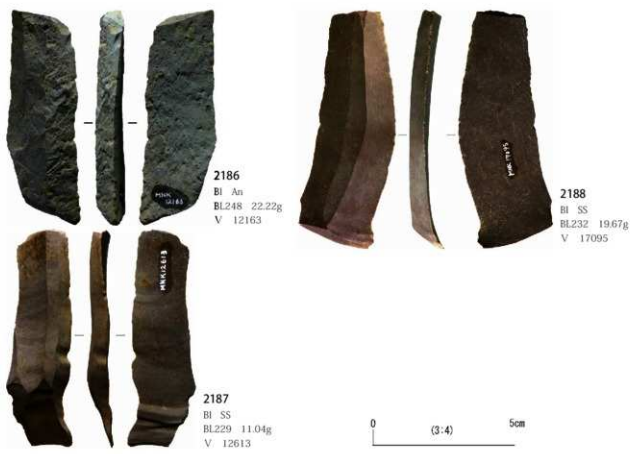
第142図 BP第2地点の石器(石対4)



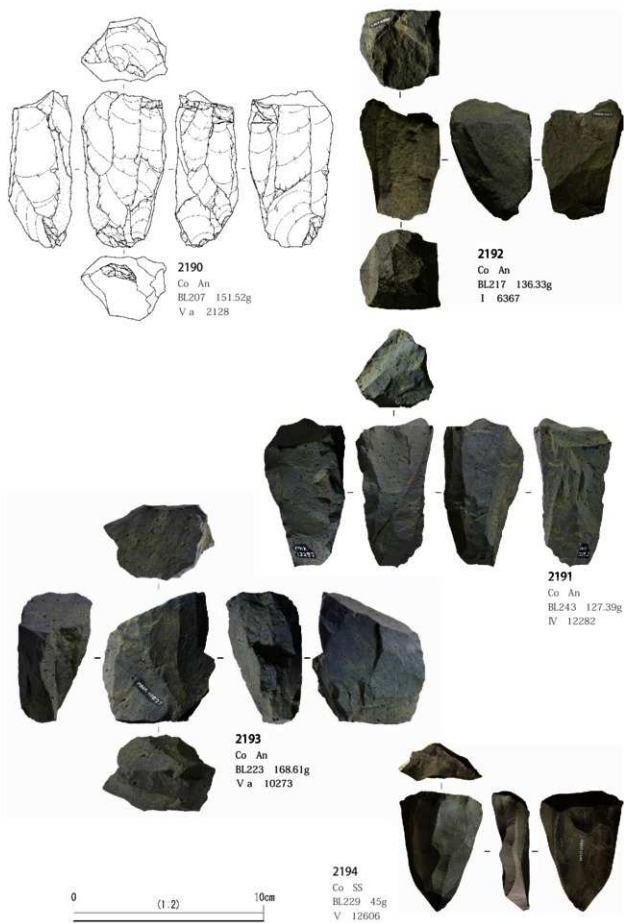
第143図 BP第2地点の石器(石対5)



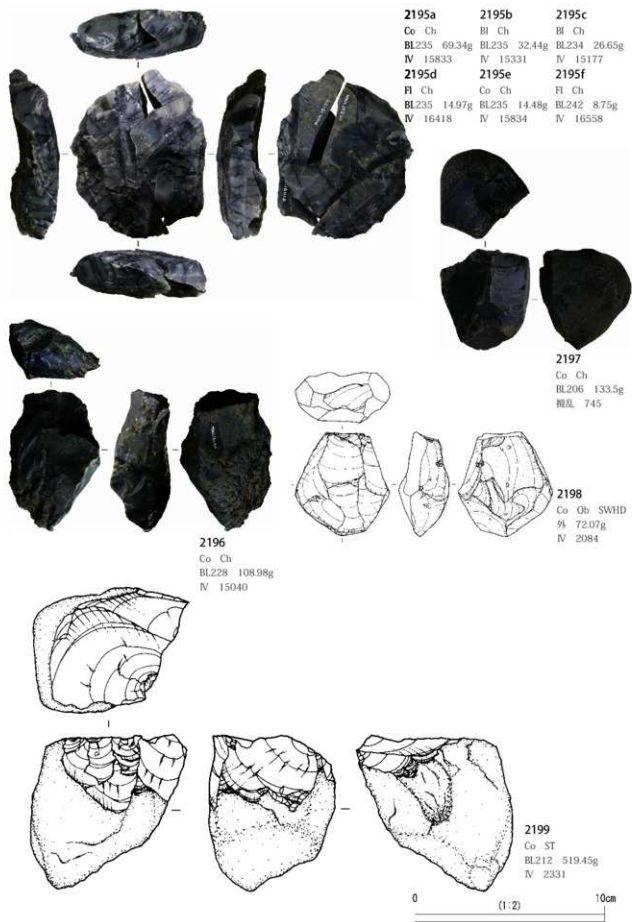
第144図 BP第2地点の石器(石刃6)



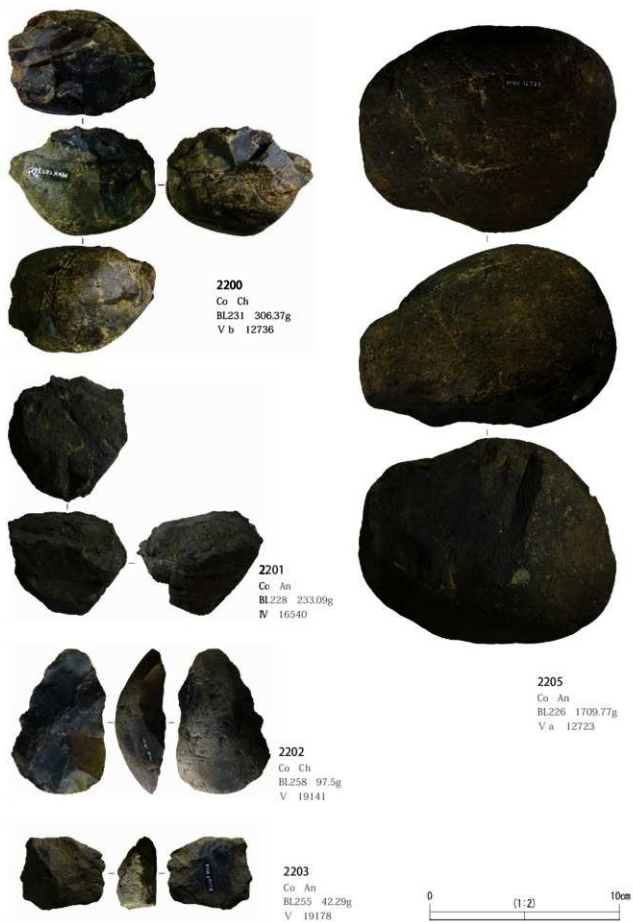
第145図 BP第2地点の石器(石刃7・石核1)



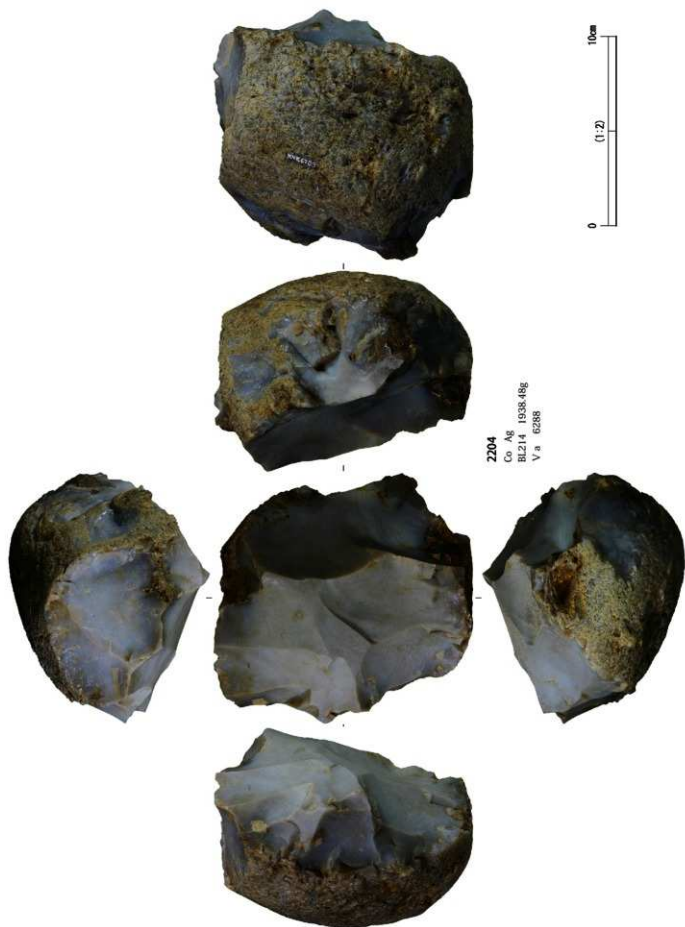
第146図 BP第2地点の石器(石核2)



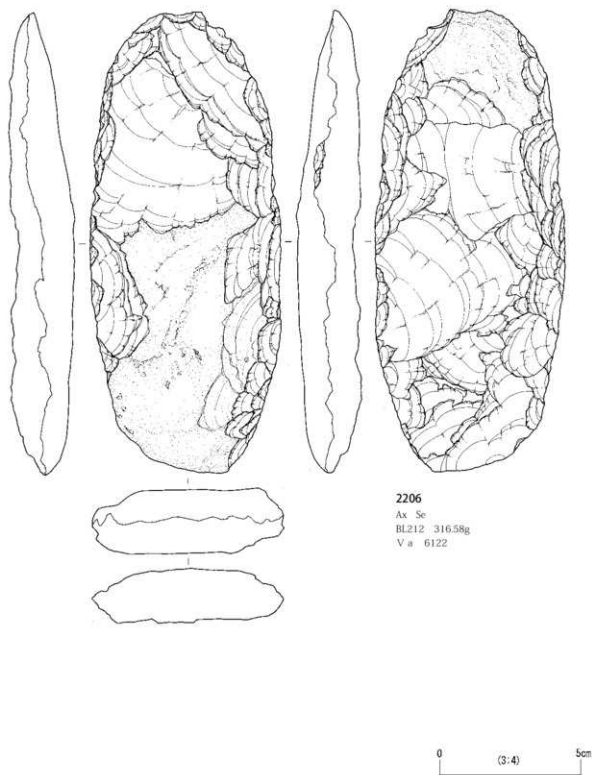
第147図 BP第2地点の石器(石核3)



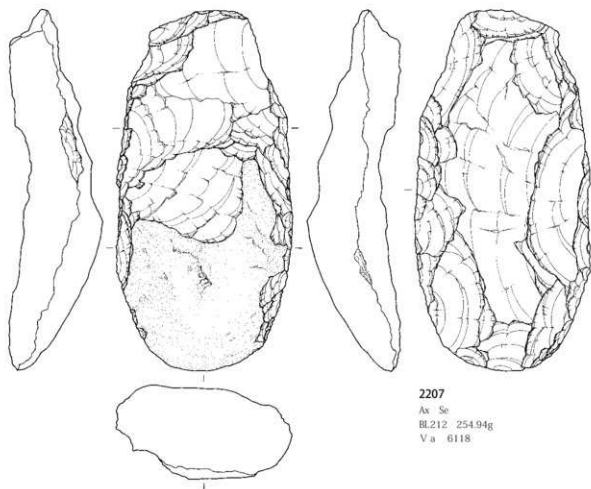
第148図 BP第2地点の石器(石核4)



第149図 BP第2地点の石器(石核5)

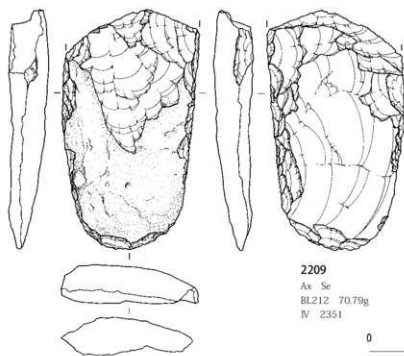


第150図 BP第2地点の石器（斧形石器1）



2207

Ax Se
BL212 254.94g
Va 6118

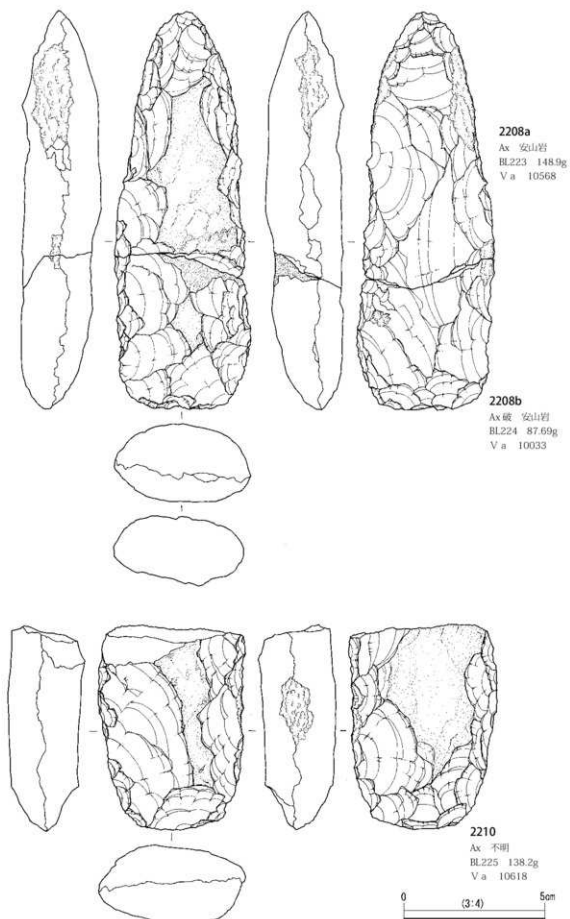


2209

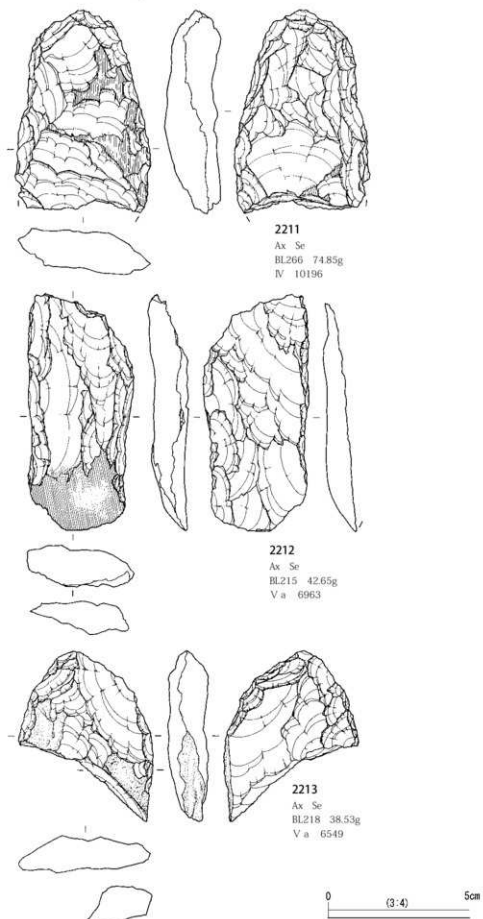
Ax Se
BL212 70.79g
IV 2351



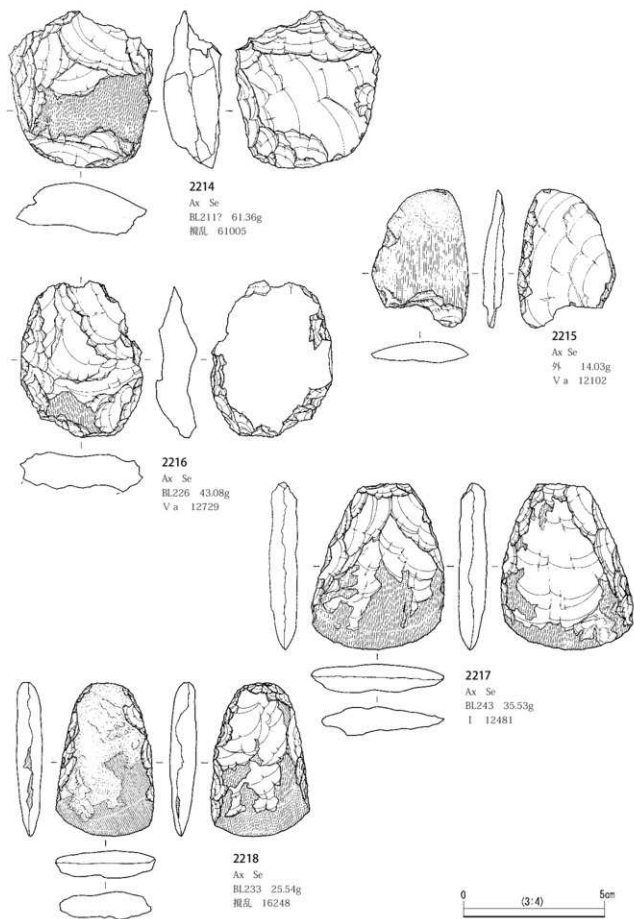
第151図 BP第2地点の石器（斧形石器2）



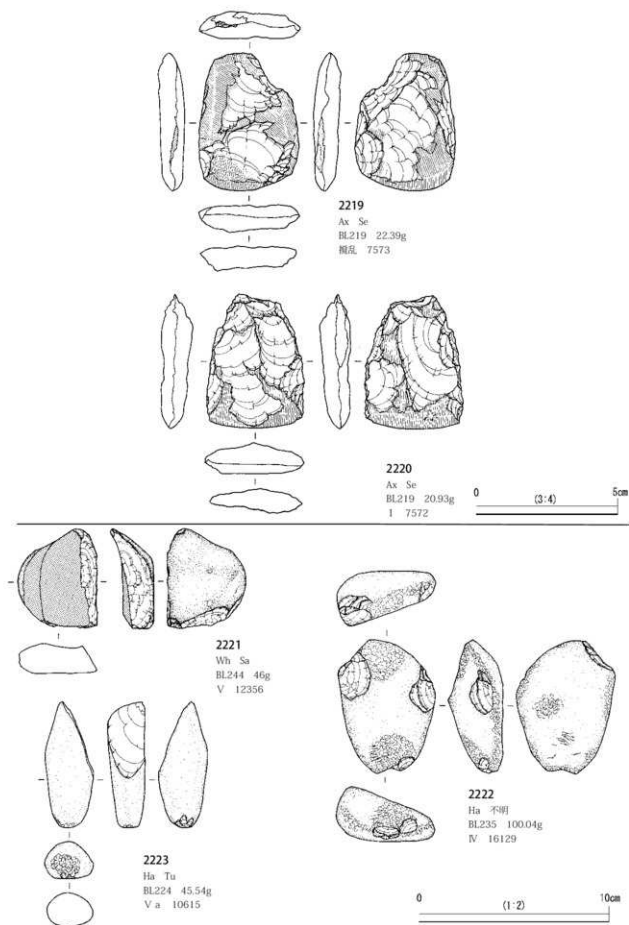
第152図 BP第2地点の石器(斧形石器3)



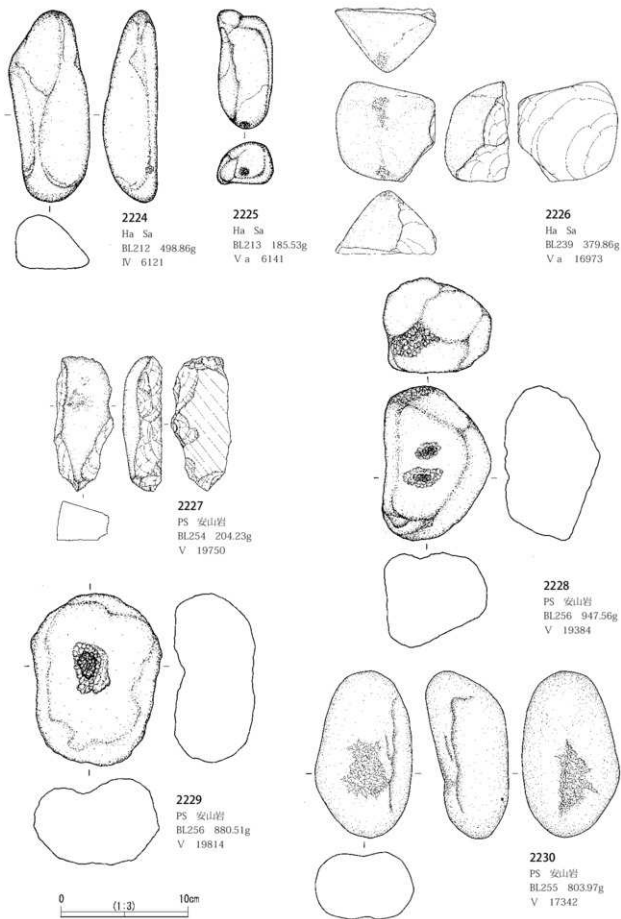
第153図 BP第2地点の石器（斧形石器4）



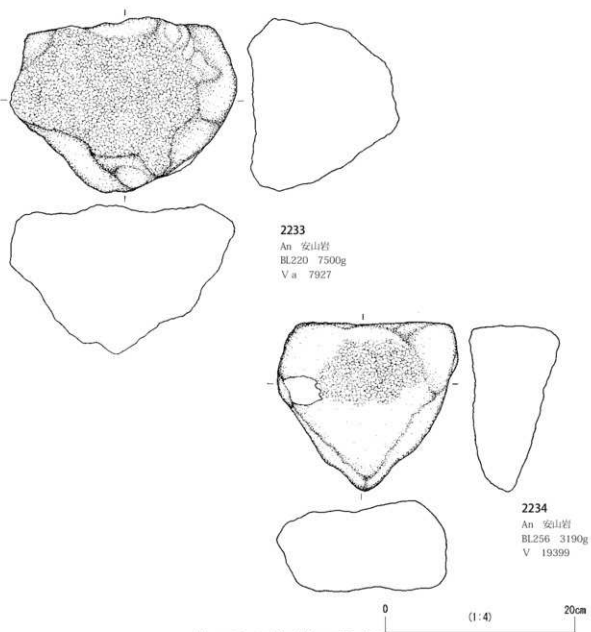
第154図 BP第2地点の石器(斧形石器5)



第155図 BP第2地点の石器(斧形石器6・砥石・敲石1)



第156図 BP第2地点の石器(敲石2・凹石)



第157図 BP第2地点の石器(台石)

第4節 BP第3地点の旧石器時代の遺構と遺物

1 調査の概要

国道バイパス第3地点（以下BP第3地点とする）はH13年度に発掘調査を行った。まず、縄文時代以降の遺構・遺物確認のため重機によるトレンチ調査を実施した。縄文時代以降の遺物が希薄であることを確認し、重機でⅡ層を除去した後、旧石器時代の調査に着手した。遺物の分布範囲を確認するために、2×2mの試掘坑を調査区全域に設定し、遺物が確認された区域をV層まで掘り下げた（第160図）。調査は、調査区全体にキの字状にセクションベルトを残し、層位を確認しながら掘り下げた。VI層以下の遺物の有無を確認するために、部分的に深掘りを行ったが、遺物は確認されなかった。

発掘調査では、旧石器時代の遺物群が多数出土し、石器群の集中区にSQ、礫群にSHの遺構記号をつけて写真、図面等の記録を行った。整理段階で、石器群の集中区（遺構記号SQ）は出土層位、石材等を考慮し、ブロック（遺構記号BL）として捉えなおした。概ね、ブロック範囲は調査時の認識に即しているが、必ずしもSQと一致するわけではない。礫群は調査時に認識したまとまりをそのまま報告した。ただし、SH1005～1007は整理段階で認識した礫群である。

調査区北東側のテラス状の平坦面で旧石器時代の遺物4862点（石器220点、石核71点、剥片・碎片4276点、礫268点）が出土し、ブロック20箇所、礫群6箇所を確認した。礫群および大形の礫が層位差をもって出土していることから、複数時期の石器群が含まれていると判断した。また、接合関係から環状ブロック群を含んでいることが確認された。なお、ブロック群の南東側の急斜面の下は、安全上の理由から調査をしていないが、ブロック群のほぼ全域を調査したと考えられる。



野尻湖とBP第3地点調査区

2 調査区周辺の地形と層序

BP第3地点は、丘陵斜面部の一段下がったテラス状の平坦面（緩斜面）にある。平坦面は断層により生じたもので、丘陵頂上部と標高差約7mの切り立った崖で隔てられており、頂上部にあるBP第2地点とは地形上明確に区分できる。また、北西側に広がる池尻川低地とは約4mの標高差がある。池尻川低地は現在は水田となっているが、旧石器時代には古野尻湖が広がっていたとされており、湖に面したテラス状の緩斜面に形成されたブロック群であったことが推測される。

また、第160図にⅢ層上面、第161図の旧石器時代の調査範囲にVb層上面の地形を示した。Vb層上面の地形をみると、ブロック群の北東側に等高線に直交した浅い谷状の窪みが認められる。地形図は窪み部を完掘していない状態のものであり、実際の窪みの深さを示していない。窪みは斜面下方ほど深く、1mを超える深さとなる。窪みの下層部にはVb層に由来すると考えられる粘性の強い層が認められ、ブロック形成時期にはすでに窪みが生じていたことが確認できる。

基本土層は、BP第1・第2地点と同じであるが、他の地区に比べⅡ層が厚く堆積している。旧石器時代の包含層であるⅣ・Ⅴ層は南東側に厚く堆積しており、池尻川低地に近づくにつれて薄くなる。南東側ではⅣ層が厚くなり、パミスまたはスコリアの混入量により、3層に細分できる。



PB第3地点から黒姫山を望む

3 遺構と遺物の概要

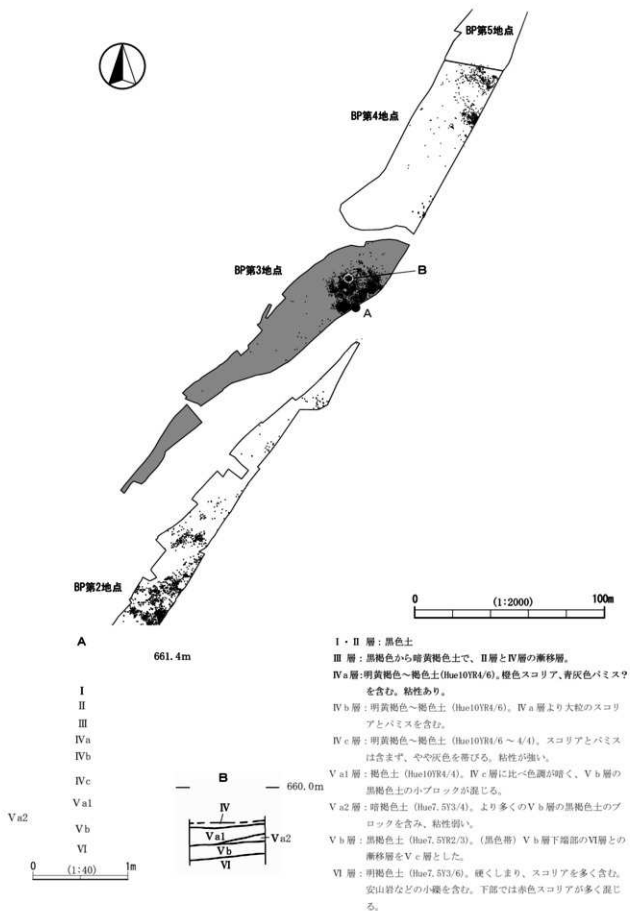
(1) ブロックの認定

BP第3地点では、礫群および大形礫が層位差をもって出土しており、複数時期の石器群が重複していることが予想される。時期別に石器群を分けてブロックを認定することが望ましいが、包含層が薄いため、出土状況から個々の石器の時期を認定することは困難である。異なった時期の石器群が混在する可能性は承知した上で、平面的な分布のまとまりをブロックとしてとらえ、個々のブロックの評価の中で、異なる時期の石器群の存在について触れることとした。ブロック範囲の認定は、石材別の分布状況を考慮し行った。第161図に20箇所のブロック（BL301～320）の分布範囲を示す。

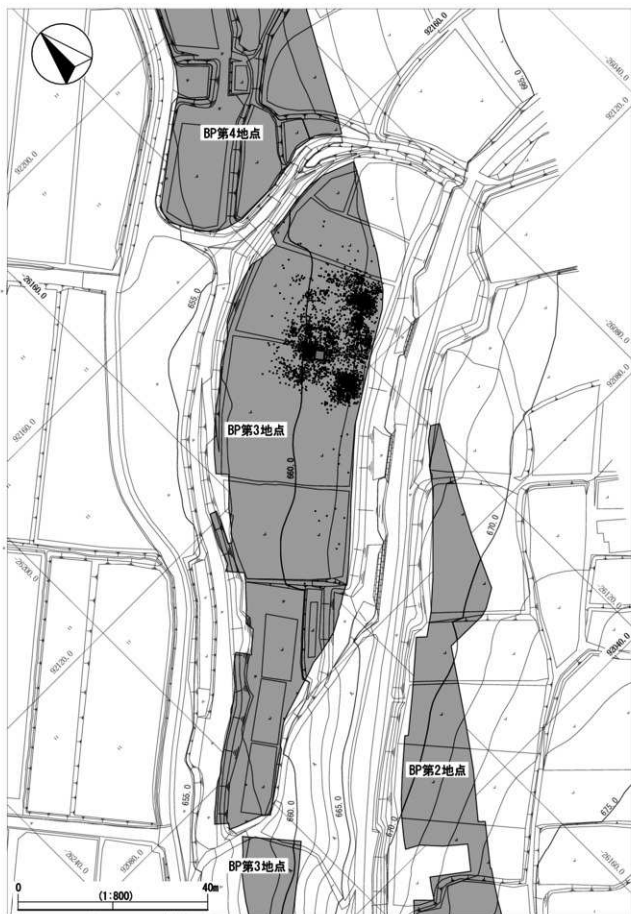
個別別資料と出土層位

個別別資料分類はBP第3地点内で完結しており、他の調査地点との対比は実施していない。BP第3地点では145個体の個別別資料を認識した。この他に、単独で遺跡内に持ち込まれたと判断した資料（個体番号20000番台のもの）が32点存在する。なお、破片など個体分類が不能であるものは石材別に10000番台の個体番号を付して区別した。

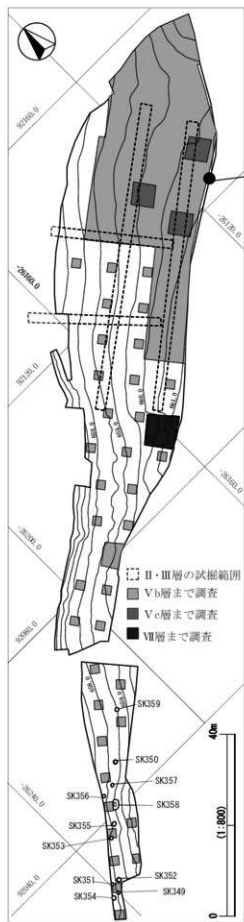
これらの個別別資料の層位別出土頻度を検討することにより、時期が異なる石器群の分別を試みた。Ⅳ層にピークがある個別別資料をⅣ層石器群、Va層またはVb層にピークがある個体をV層石器群とした。また、単独で遺跡内に持ち込まれたと判断した石器は、便宜的にⅢ・Ⅳ層のものをⅣ層石器群、Va・Vb層のものをV層石器群とした。第162図に、Ⅳ層石器群とV層石器群の分布状況を示した。なお、破片など個体分類ができなかった資料や出土頻度のピークが認められない個別別資料は、Ⅳ～Ⅴ層石器群として分布図に示した。



第158図 BP第3地点の調査範囲と基本土層



第159図 BP第3地点調査範囲と調査前の地形



第160図 BP第3地点調査範囲とIII層上面の地形

第38表にIV層石器群の個別別資料を示した、V層石器群の個別別資料出土層位頻度は添付CDの「BP第3地点旧石器個別別出土層位」(エクセルのファイル形式)に収録した。

なお、上記の時期区分は遺跡構造の概要を理解するための手段であり、個々の石器を時期区分するため方法として用いることはできない。同一個体の認識に厳密さを欠く部分があり、個々の資料の時期を判定する方法としては問題がある。個体分類した後に行った黒曜石産地推定と対比すると、同一個体資料と認識したものの中に複数の産地が混在する例が多くみられる(第44表)。石材により、個体識別の精度に差が生じており、無斑品質安山岩などは個体分類にかなりの誤謬を生じている可能性がある。



V b層出土石器の分布状況

(2) 遺構の概要

石器群の分布状況

BL301～320の20箇所のブロックを認識した。第39表と第163・164図に各ブロックの石材および出土層位の概要を示した。遺物の取り上げ層位は、IV層が厚い場所では便宜的に上中下に分けて、薄い場所ではIV層一括で取上げた。IV層上～下は、基本土層のIV a～cに必ずしも対応しない。

先述のとおり、個別別資料の出土層位の検討により、少なくとも二時期の石器群の存在が確認され、便宜的にそれぞれをIV層石器群、V層石器群と仮称した。IV層石器群はBL301～306・308・309などに分布しており、BL308を中心とした遺構間接合が確認できる。これらの分布に重なって、IV層に生活面が想定されるSH325・1007が検出された。また、IV層石器群の分布域は、後述のV層石器群と完全に重複する。

V層石器群はBL301～318のすべてのブロックに分布しており、接合関係からBL304～310とBL311～318との二群に区別できる(第162図・第40表)。前者をAブロック群、後者をBブロック

石材	個別番号	総点数	Ⅳ層上	Ⅳ層中	Ⅳ層下	Ⅳ層上	Ⅳ層中	Ⅳ層下	Ⅳ層上	Ⅳ層中	Ⅳ層下	V層	V a層	V b層	V c層
凝灰岩	2001	86				44	1	20	2	1	17	1			
珪質凝灰岩	2002	149		4	49	2	43	9	4	2	36				
珪質頁岩	2004	26		1	10		6	2	1		3	3			
珪質凝灰岩	2005	11			4	2	3	1	1		1				
珪質頁岩	2006	27			12	1	6	3	1		4				
珪質凝灰岩	2007	5			1		2				2				
珪質凝灰岩	2010	6			2	1	2	1							
凝灰質頁岩	2012	4			3		1								
珪質頁岩	2025	13	1	4	2	2		1			2	1			
珪質頁岩	2027	8			3	1				3			1		
珪質頁岩	2028	21			5	5				2		4	5		
珪質頁岩	2031	59		1	32		13	4			8			1	
珪質頁岩	2035	4			2						2				
黒曜石	2132	5			2	1		2							
黒曜石	2133	14			4	3		1	1			4	1		
黒曜石	2134	4			2			1				1			
黒曜石	2138	10			5	1			2			2			
黒曜石	2143	4		1	1							2			
黒曜石	2144	2					1					1			
黒曜石	2145	3			2	1									
珪質凝灰岩	2146	3			2	1									
珪質凝灰岩	2147	6			1			4				1			

第38表 BP第3地点のIV層に出土頻度のピークがある個別別資料一覧

第4節 BP第3地点の旧石器時代の遺構と遺物

接合資料 番号	石材	接合地点数	Ⅷ	Ⅷ	Ⅷ	Ⅷ	Ⅷ	Ⅷ	Ⅷ	Ⅷ	Ⅷ	Ⅷ	Ⅷ	Ⅷ	Ⅷ	Ⅷ	Ⅷ	遺構外	時期区分
			301	302	303	304	305	306	307	308	309	310	311	312	313	314	315		
2001A	凝灰岩	11			1														Ⅷ期石器層
2001B	凝灰岩	2			1														Ⅷ期石器層
2001C	凝灰岩	4						1		3									Ⅷ期石器層
2001D	凝灰岩	2						1		1									Ⅷ期石器層
2001E	凝灰岩	3							1	2									Ⅷ期石器層
2002A	珪質凝灰岩	4				2			2										Ⅷ期石器層
2002B	凝灰質頁岩	2							1	1									V期石器層
2002C	凝灰質頁岩	3							1	1									V期石器層
2006A	珪質頁岩	5	1							4									Ⅷ期石器層
2015A	緑石	44				2		41		1									V期石器層
2019C	土懸	12						3		1	8								V期石器層
2019D	土懸	2								1	1								V期石器層
2019F	土懸	3								1	2								V期石器層
2022A	珪質頁岩	3				2				1									V期石器層
2022B	珪質頁岩	3					1		1	1									V期石器層
2022D	珪質頁岩	9				1				7		1							V期石器層
2023A	珪質頁岩	3				1				2									V期石器層
2026A	珪質頁岩	2				1	1												V期石器層
2029A	珪質頁岩	2				1	1												V期石器層
2030B	緑色凝灰岩	2					1		1										V期石器層
2038A	凝灰岩	6					2			4									V期石器層
2043A	燧石製品	12											5		4	2		1	V期石器層
2043C	燧石製品	14							1							3			V期石器層
2043D	燧石製品	2								1	1								V期石器層
2043E	燧石製品	5									3		1	1					V期石器層
2043F	燧石製品	5														2	2	1	V期石器層
2043G	燧石製品	2															1	1	V期石器層
2043J	燧石製品	4									1					3			V期石器層
2043K	燧石製品	3														2	1		V期石器層
2043P	燧石製品	2								1						1			V期石器層
2043R	燧石製品	2								1						1	1		V期石器層
2043S	燧石製品	2								1						1			V期石器層
2044A	燧石製品	4					2			2									V期石器層
2044D	燧石製品	2						1	1		2								V期石器層
2044F	燧石製品	2				1	1												V期石器層
2044G	燧石製品	6				1	1			1	4								V期石器層
2045C	燧石製品	5							1	4									V期石器層
2045F	燧石製品	3							1	1	1	1							V期石器層
2045J	燧石製品	2								1	1	1							V期石器層
2045L	燧石製品	2								1	1	1	1						V期石器層
2045P	燧石製品	2									1	1				1			V期石器層
2045Q	燧石製品	2								1	1								V期石器層
2046A	燧石製品	2								1	1								V期石器層
2047A	燧石製品	13					1					3	7	3					V期石器層
2047C	燧石製品	2															1		V期石器層
2048A	燧石製品	8							7	1									V期石器層
2048C	燧石製品	5					2			3									V期石器層
2048E	燧石製品	3					1	1	1										V期石器層
2050A	燧石製品	2					1	1											Ⅷ-V期石器層
2051B	燧石製品	2										1	1						V期石器層
2058B	燧石製品	2					1			1									V期石器層
2059B	燧石製品	3						2		1									V期石器層
2068A	チャート	2						1		1									V期石器層
2070A	チャート	3													1	1			V期石器層
2071A	チャート	22					1	21											V期石器層
2073A	チャート	5								1	1		1				2		V期石器層
2074A	チャート	8												7	1				V期石器層
2077A	チャート	2									1						1		V期石器層
2078A	チャート	7							1	3		3							V期石器層
2080A	チャート	2										1	1						V期石器層
2083A	チャート	6																	V期石器層
2086A	チャート	3					3	3							2	1			V期石器層
2087A	チャート	2													1	1			V期石器層
2088A	チャート	3																1	V期石器層
2096A	チャート	3					1	2											V期石器層
2117A	チャート	4													1			3	V期石器層
2120B	チャート	3															1	2	V期石器層
2122B	チャート	6									1							5	V期石器層
2125A	チャート	3																2	V期石器層
2124B	チャート	3												1				2	V期石器層
2127A	チャート	3													1			1	V期石器層
2127B	チャート	2													1	1			V期石器層
2129A	チャート	2						1	1										V期石器層
2130A	チャート	7																6	V期石器層
2130B	チャート	2							1		1								V期石器層
2132A	黒曜石	2								1	1								Ⅷ期石器層
2147B	珪質凝灰岩	2								1	1								Ⅷ期石器層
22037A	珪質頁岩	2	1		1														Ⅷ期石器層

第40表 BP第3地点ブロック間接合資料一覧

- ③ IV層からV a層まで出土する和田高松沢群、土屋橋西・南・北群。
 ④ IV層からV b層まで出土する和田鷹山群。

諏訪星ヶ台群以外は点数が少なく、類型化に問題はあるものの、産地別の出土層位を比較すると、複数時期の石器群が含まれていると想定できる。以下のような仮説を提示しておきたい。「BP第3地点出土の黒曜石は、IV層中部からIII層に生活面を想定できる石器群（類型①・②）と、IV層下部からV bに生活面を想定できる石器群（類型②・③・④）とに分けることができる。さらに後者はV b層に遺物が出土する②・④類型とV a層で遺物が途絶える③類型に分けることができる。」

礫と炭化物の分布状況

II層～VI層にかけて268点の礫が出土し、7箇所の礫群を認識した。この内、SH323は縄文時代の遺構であり、旧石器時代の礫群は6箇所である（第168図）。また、V c層とVI層の礫には使用痕跡が認められず、遺物ではない可能性が高い。

第41表に礫群別の出土層位、赤化状況、欠損状態の集計を示した。III層に生活面が想定されるSH324、IV層に生活面が想定されるSH325・1007、V a層に生活面が想定されるSH326などの存在から複数時期の生活跡が重層していることが確認される。また、V b層では石器群の分布範囲に重なって礫が散漫に分布する。明確な礫群は認められないが、大形礫や台石が出土しており、V b層にも生活面が想定される。

炭化物は5mm角以上を対象にサンプリングを行い、130点を採取した。それ以下の炭化物も含めて、特に集中した範囲を6箇所確認した（SF301～306）。いずれもV b層中に確認された炭化物である。第168図に炭化物の分布状況を示した。採取した炭化物はIV層13点、V a層3点、V b層107点、V c層7点で、V b層から出土したものが大半を占める。炭化物の分布は、概ね石器群の分布と重なっているが、礫群との対応関係は確認できない。また、SF306は、石器群が認められないところで確認され、未調査部分にも炭化物の集中部が存在する可能性がある。残念ながら、石器群を伴わない炭化物集中箇所の確認調査は実施できなかった。採取した炭化物のうち101点について樹種同定を行い、50点がサクラ属と同定された。その結果と分布状況を第168図に示す。なお、樹種同定の報告の詳細は添付CDに収録した。

(3) 遺物の概要

器種組成

BP第3地点ではIII層～V c層に石器群が出土した。旧石器時代の純粋な包含層はIV層～V c層である。III層は縄文時代と旧石器時代の遺物が混在する包含層であるが、III層出土の土器は少なく、無文土器1点がブロックと重複して出土したのみである。したがって、BP第3地点III層の石器群はほとんどすべてが旧石器時代の遺物であると判断した。

第42表にブロック別器種組成と層位別器種組成を示した。

ブロック別の器種組成をみると、石核・剥片・砕片を除いた利器の分布が特定のブロックに集中する傾

遺構名	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ上	Ⅳ中	Ⅳ下	V a	V b	V c	VI	合計
SH323	20									20
SH324		41								41
SH325		4	34	1		1	1			41
SH326			2				17			19
SH1005		2	1	2		14				19
SH1006	2	2	1		1	7	19			32
SH1007			1	26			2			29
遺構外		2	8	1	6		4	40	3	67

遺構名	赤化無	赤化弱	赤化強	合計	黒色付着物
SH323	2	18		20	
SH324	2	37	2	41	
SH325	19	16	6	41	
SH326	18	1		19	
SH1005	15	4		19	
SH1006	17	11	4	32	1
SH1007	14	11	4	29	2
遺構外	24	29	14	67	12

遺構名	完形	欠損	破片	合計
SH323	6	3	11	20
SH324	13	27	1	41
SH325	3	28	10	41
SH326	4	15		19
SH1005	7	11	1	19
SH1006	20	11	1	32
SH1007	12	14	3	29
遺構外	22	41	4	67

第41表 BP第3地点の礫群遺構別出土層位と赤化状況

向がある。BL306・310には特に利器が集中する。この他、BL302～304・307・308・311などに偏在する様子が伺われる(第169図)

層別別の器種組成表をみると、器種により出土層別の傾向が異なる。大別すると、IV層に多く出土しVb層に出土例がない器種(槍先形尖頭器・彫器・削片・揉錐器・石刃)と、大半がVa・Vb層に出土する器種(台形石器・貝殻状刃器・厚刃揉器・搔器状石器・抉入削器・楔形石器・斧形石器・低石・敲石・台石)に分けることができる。これらは時期差によるものと理解できる。

石材組成

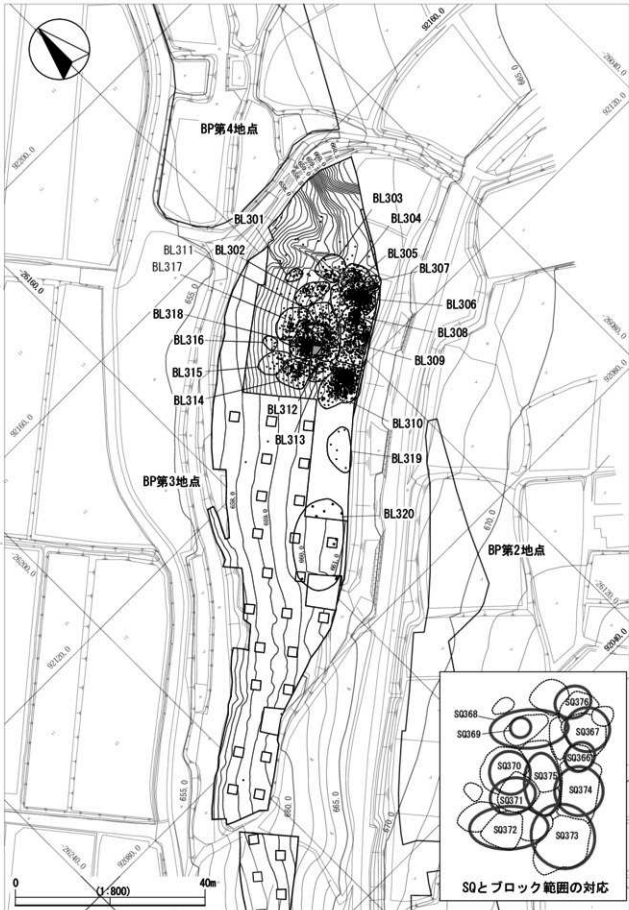
第43表に、器種および層別別の石材組成を示した。総体では、無斑晶質安山岩とチャートが主体を占める。黒曜石、珪質頁岩、珪質凝灰岩、凝灰岩が他の石材に比べ、IV層以上より出土する割合が高い。特に、珪質凝灰岩と凝灰岩はIV層の出土点数がV層群の出土点数を上回る。これらの石材は、IV層に生活面がある石器群に含まれるものと判断され、安山岩とチャートを主体としたV層に生活面がある石器群とは

遺構名	槍先形尖頭器	ナイフ形石片接破	ナイフ形石片	台形石器	貝殻状刃器	彫器	厚刃揉器	揉器状石器	削器接破	削器破片	抉入削器接破	抉入削器	揉錐器	揉錐器接破	揉錐器	楔形石器	斧形石器	石刃接破	石刃	石核	石片	削片	雑類	合計													
BL301	1																				9	1	1	14													
BL302	1				2		1	1	1						1	1					62	27	1	99													
BL303				3	4	1	1	1	1						2	4	1				47	3	1	68													
BL304	1	1	1		1		2	2	1	1	1									118	9	2	130														
BL305							1								1						26	1	1	30													
BL306	1	5	3	1	2		2	4	1	4	2	2		1	1	6	3	1	4	602	132	15	849														
BL307	1	1					1		1	1	1				1	1	1	1	1	50	6	4	69														
BL308	1				5					1								1	12	2	302	75	1	401													
BL309	1	1	1	1	1	1	1									1	1	1	1	336	64	3	404														
BL310	1	6	2				1	2	1			1						2	3	614	412	7	1033														
BL311	1	1													3	1		1	3	192	20	9	214														
BL312							1			1										86	13	3	102														
BL313								1											2	84	15	3	102														
BL314								1											1	141	21	5	167														
BL315																			1	31	2	2	35														
BL316																				6	1	1	8														
BL317		1					1	2											2	158	11	4	173														
BL318							1	1								3	1		1	1	408	145	7	560													
BL319																				6			6														
BL320		2																	1	7	1	1	10														
BL外																				1	32	1	34														
合計	2	10	1	14	7	4	14	2	4	10	13	5	2	6	2	6	1	1	1	20	2	21	4	17	13	3317	959	71	2	1	10	4	1	11	1	8	4567

層名	槍先形尖頭器	ナイフ形石片接破	ナイフ形石片	台形石器	貝殻状刃器	彫器	厚刃揉器	揉器状石器	削器接破	削器破片	抉入削器接破	抉入削器	揉錐器	揉錐器接破	揉錐器	楔形石器	斧形石器	石刃接破	石刃	石核	石片	削片	雑類	合計													
Ⅱ									1	1											18	6		24													
Ⅲ		4			1	4	2														6			8													
Ⅳ	1		1	4	1	1	1						1	1	8	3	2			53			67														
Ⅳ上	1						1								1	15	1	1		275	69	4	373														
Ⅳ中	1	1	1	3		4									7	1				116	16		150														
Ⅳ下	1		2							1					1	1				80	26		112														
Ⅳ-V		1	1				2	1	1	1			2	1	1	1				75	3	1	91														
V	1	1	6	4	3	1	6	3	1	1	1		1	1	21	3	1			21	3	1	28														
Va	1	1	6	4	3	1	6	3	1	1	1		8	1	6	5	1056	371	15		3	3	1497														
Vb	1	1	6	2	1	1	2	2	3	1	4	2	4	10	1	6	8	1562	456	49	2	6	1	2148													
Vc																				39	8		47														
Ⅴ																							1														
合計	2	10	1	14	7	4	14	2	4	10	13	5	2	6	2	6	1	1	1	20	2	21	4	17	13	3317	959	71	2	1	10	4	1	11	1	8	4567

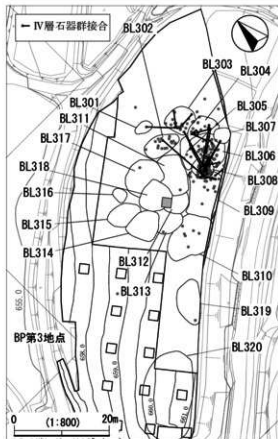
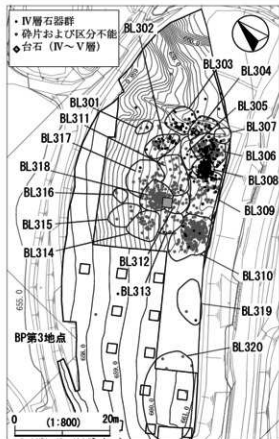
「破片」は全体の形状がわからない破片、「接破」は欠損した石器に接合したものを示す。

第42表 BP第3地点のブロック別(上)・層別別(下)器種組成

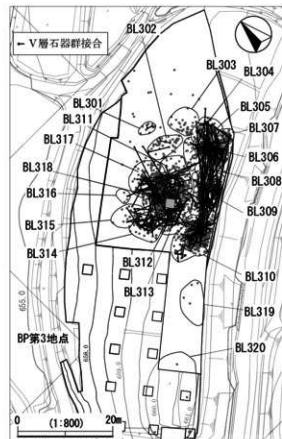
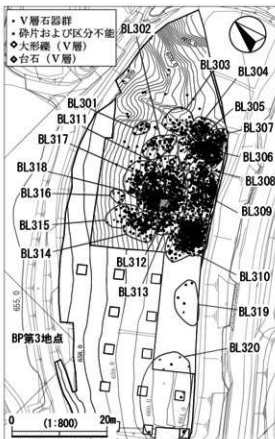


第161図 第3地点の石器群分布状況1

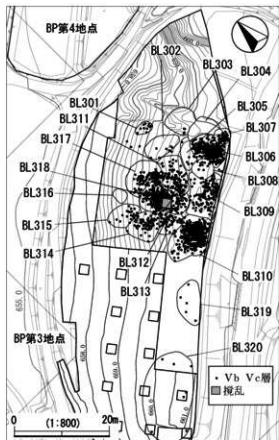
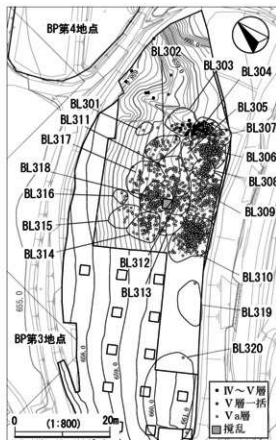
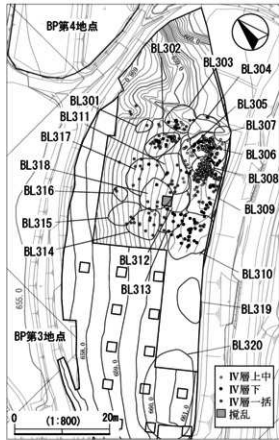
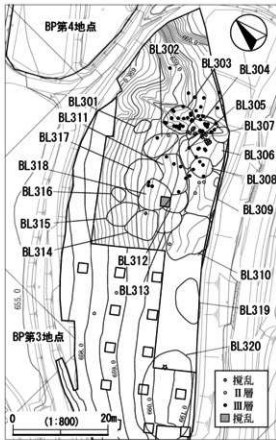
IV層石器群



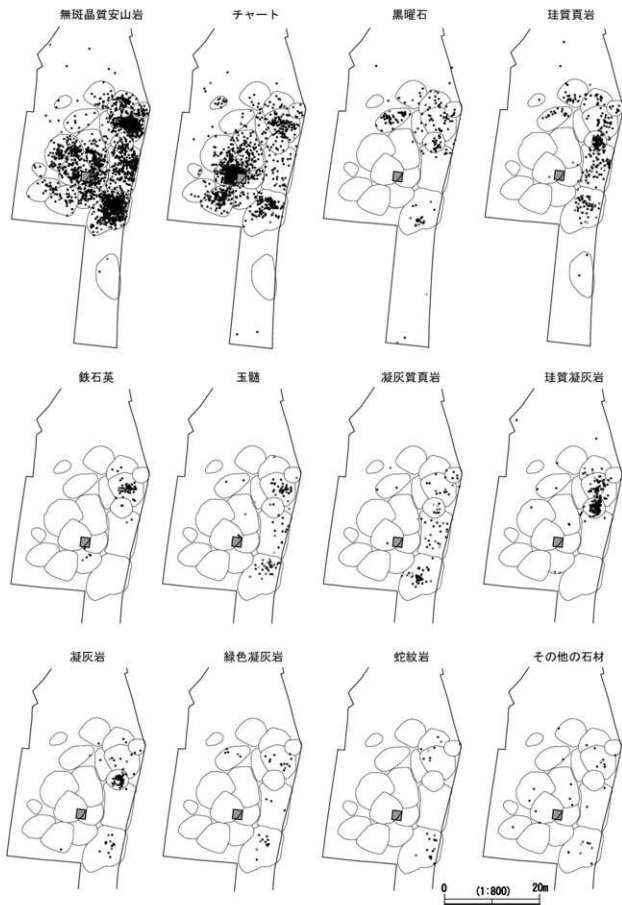
V層石器群



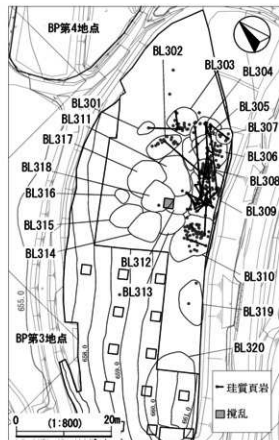
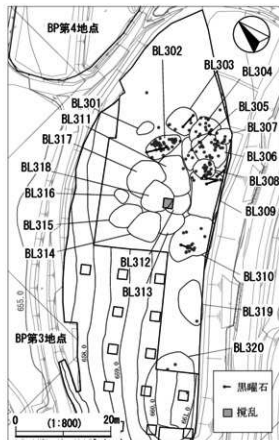
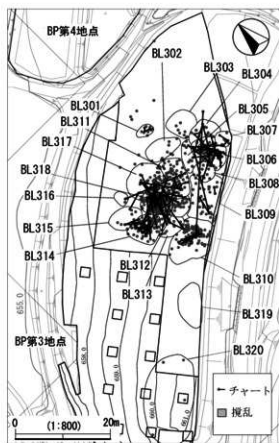
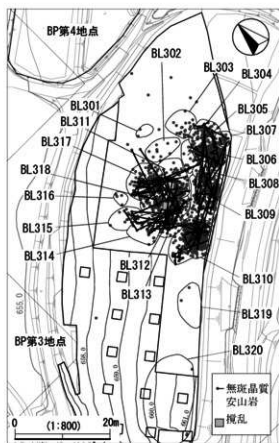
第162図 BP第3地点の石器群分布状況2



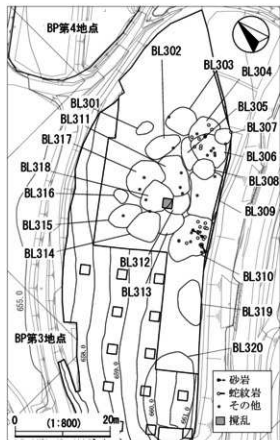
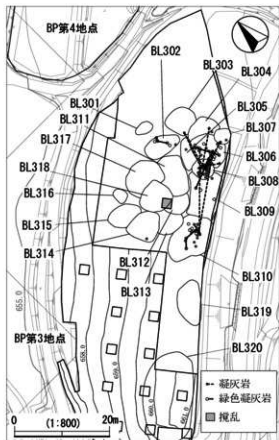
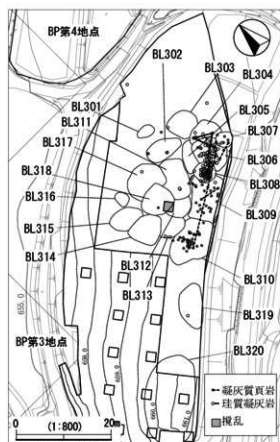
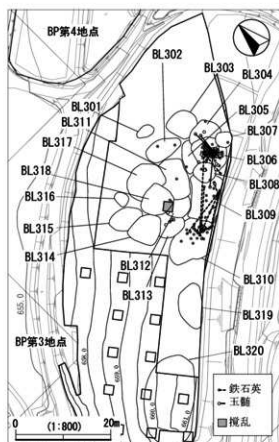
第163図 BP第3地点層別位別石器出土状況



第164図 BP第3地点石材別石器出土状況

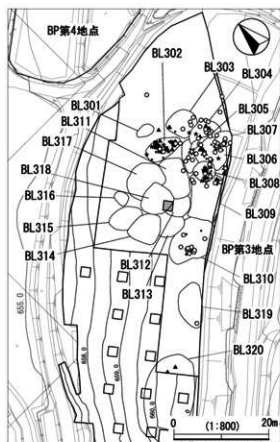


第165図 BP第3地点石材別接合関係1



第166図 BP第3地点石材別接合関係1

第4節 BP第3地点の旧石器時代の遺構と遺物



- 凡例
- 諏訪ヶ台群
 - 和田露山・小深沢・芙蓉ライト群
 - ▲ 和田土屋橋北・西・南群
 - 和田高松沢群 ♪ 和田牧ヶ沢
 - ・ 未測定・不可
 - 接合線

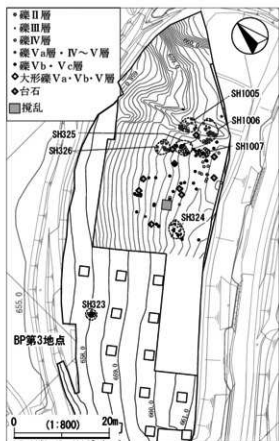
第167図 BP第3地点黒曜石産地別遺物分布図

産地名	諏訪ヶ台群	和田高松沢群	和田小深沢群	和田露山群	和田土屋橋西群	和田土屋橋南群	和田土屋橋北群	和田芙蓉ライト群	和田牧ヶ沢群	推定不可他	合計
層名											
層底	1			1	1					1	4
Ⅲ	1							2			13
Ⅳ	10	1		6	5	2	1	1	1	13	42
Ⅴ上	1		2								4
Ⅴ中	4			1	4		1	2		1	13
Ⅴ下	1			1	2	3	1				14
Ⅵ-V	2			2							4
V				1	1						3
V a	25	2		5	3	7	1				56
V b	15			3							24
合計	70	4	4	20	17	12	4	1	5	41	178

遺構名	諏訪ヶ台群	和田高松沢群	和田小深沢群	和田露山群	和田土屋橋西群	和田土屋橋南群	和田土屋橋北群	和田芙蓉ライト群	和田牧ヶ沢群	推定不可他	合計
BL302	4	4	3	5	3	7	2	1		20	49
BL303	4		1	1						1	8
BL304	11			3	1						15
BL305	3							1			4
BL306	11			2	4				1	8	26
BL307	8										8
BL308	5		3	8	5	2		1	4	28	
BL309	7			1				1			9
BL310	12									7	19
BL311	1										1
BL319	1										1
BL320				2						1	3
遺構外	3			3					1		7
合計	70	4	4	20	17	12	4	1	5	40	178

個体番号	諏訪ヶ台群	和田高松沢群	和田小深沢群	和田露山群	和田土屋橋西群	和田土屋橋南群	和田土屋橋北群	和田芙蓉ライト群	和田牧ヶ沢群	推定不可他	合計
2034	2		1	2	1	1					7
2107			3	1		1	2			2	9
2132								5			5
2133	13	1									14
2134				4							4
2135	7	2		4	5						11
2136	7			1	1						9
2137	8			3	1						12
2138					6	3			1		10
2139	4										4
2140	9										10
2141	5			1	1	1					7
2142	5			1				1			7
2143	2			2							4
2144	2										2
2145	3										3
12009	8	1		3	2		1			38	53
22018				1							1
22019					1						1
22020				1							1
22021	2										2
22022					1						1
22023											1
合計	70	4	4	20	17	12	4	1	5	41	178

第44表 BP第3地点黒曜石産地集計



礫の分布



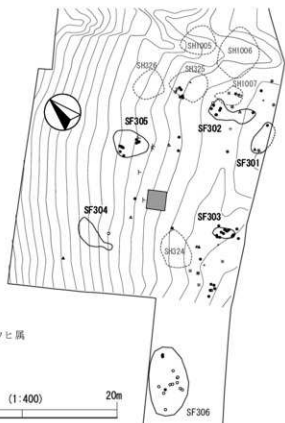
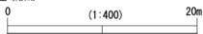
炭化物の分布

出土層位	IV一括	IV上	IV中	Vb	合計											
イヌシロカキ				3	3											
カエデ	2			15	17											
イヌシロカキ				1	1											
イヌシロカキ				1	1											
イヌシロカキ				3	3											
イヌシロカキ				1	1											
イヌシロカキ				5	5											
イヌシロカキ				3	3											
イヌシロカキ				6	6											
イヌシロカキ				2	2											
イヌシロカキ				1	1											
イヌシロカキ				88	88											
合計	3	1	15	2	1	5	50	5	3	7	4	2	1	1	1	101

炭化物樹種同定結果

- ・サクラ属
- ・カエデ属
- ・ニレ属
- ・コナラ属
- ・バタ科
- ・イヌエンジュ
- ・モミ属
- ・カラマツ・トウヒ属
- ・トネリコ属
- ・その他

■ 攪乱



第168図 BP第3地点礫と炭化物の分布状況

4 遺構

(1) ブロックおよびブロック間の接合関係

各ブロックの器種組成、石材組成、出土層組成を第39・42表に示した。また、各ブロックの石器については第169・170図と遺物図版(第175～208図)を参照していただきたい。

BL301

散漫な分布を示し、チャートを主体とする。ナイフ形石器(3009)、石刃(3080)、石核などが出土した。V b層の遺物が主体であり、V b層に生活面が想定される石器群が主体であることが確認できる。ただし、石刃はBL303の石刃と接合しており、IV層に生活面がある石器群に含まれる。

BL302

黒曜石と珪質頁岩を主体とし、散漫な分布を示す。黒曜石は複数の産地が混在した状況を示す(第44表)。ナイフ形石器(3007)、削片(3035)、搔器状石器、削器、楔形石器(3064)、石刃、石核(3085)、台石(3129)が出土した。IV層からV a層に出土点数のピークがあり、V b層の遺物は少ない。V b層からは台石、楔形石器が出土しており、V b層に生活面がある石器群を含むことが想定される。しかし、石器群全体がV b層に生活面をもつ場合、V b層の出土遺物をもっと多くなることが通例である。したがって、さらに上層に生活面がある石器群が混在していることが想定される。複数時期の石器群が混在したブロックで、その主体は、V a層より上層に生活面を有する石器群であると判断した。

SH326と重なる。関連する礫群と判断した。

BL303

溝状の窪みの谷頭に位置する。溝状の窪みはV層上面では顕著であるが、IV層上面ではそれほど明確ではない。無斑晶質安山岩と珪質頁岩が主体を占める。彫器(3031・3033)、削片(3036)、搔器(3044)、削器(3053)、鋸歯縁状削器(3059)、楔形石器、石刃(3080・3082)、石核(3089)などが出土した。III層に出土点数のピークがある。そして、BL303・304とその周辺に分布するIII層の遺物が、IV層の遺物分布と重ならないことから、III層に生活面がある石器群が存在することが確認できる。また、V b層にも遺物が出土していることから、さらに古い石器群が存在することは確実である。複数時期の石器群が混在したブロックである。なお、谷頭部ではV b層が明確ではなく、「IV～V層」には本来V b層に包含されるべき遺物が含まれていると考えられる。窪み内の遺物は、周辺から流れ込んだ可能性も考慮する必要があり、ブロックとして有意なまとまりではない。

SH1005と分布が重なる。

BL304

溝状の窪みの谷頭に位置する。無斑晶質安山岩が主体となり、BL303と石材組成が類似する。ナイフ形石器(3011)、台形石器(3024)、貝殻状刃器、厚刃搔器(3046)、搔器状石器、削器(3050・3053)、鋸歯縁状削器(3054)、抉入削器(3055)、石核(3093)、斧形石器(3106・3107)、台石(3125)などが出土した。

BL303との関わりでIII層に生活面がある石器群が確認される。「IV～V層」に出土点数のピークがあり、石器群の大半はさらに古い時期のものである。谷頭部ではV b層が明確ではなく、「IV～V層」には本来V b層に包含されるべき遺物が含まれていると考えられる。そのことは、BL306・309などのV b層出土遺物との接合関係が証明している。「IV～V層」は溝状の窪み内の覆土であり、二次堆積により地層が不安定となっているため、生活面は想定できない。なお、V a層とした遺物は、IV～V層とした遺物の上部に出土したもので、BL303・304では「V a層」=「IV～V層」と考えてよい。

SH1006と重複する。

BL305

散漫な分布を示し、チャートと無斑晶質安山岩が主体を占める。V a層に出土点数のピークがある。BL306などの周縁部にあたり、他のブロックと明確な区分はできず、有意なまとまりではない。挿器状石器(3041)、楔形石器(3063)などが出土した。

IV層に生活面が想定される礫群SH325と重複するが、BL305の石器群との関わりを強固に示す状況ではない。

BL306

密集した分布を示す。ブロック範囲は7.9×5.3mであるが、特に、5.8×4.1mの範囲に遺物密度が高い。無斑晶質安山岩が約5割を占め、珪質凝灰岩、チャート、鉄石英、玉髓、珪質頁岩なども多くみられる。

ナイフ形石器(3010)、台形石器(3014・3018・3020・3025・3026)、貝殻状刃器(3028・3030)、彫器(3032)、削片、挿器状石器(3042・3043)、削器(3048・3049)、挿入削器(3056)、鋸歯縁状削器(3057・3058)、揉錐器(3060)、楔形石器(3061・3066・3068)、石刃(3077・3079)、石核(3087・3091・3092・3101・3102)、斧形石器(3109・3112)、敲石(3114・3118・3122)、台石(3124)などが出土した。

V b層に出土点数のピークがあり、台石・敲石などの大形礫石器がV b層に出土していることから、V b層に生活面がある石器群が確認できる。また、個別別資料の分析で抽出したIV層石器群がブロック範囲に重なり、彫器・石刃などIV層以上に限定される器種が存在することから、IV層に生活面がある石器群が混在していることが想定される。

IV層に生活面が想定される礫群SH1007と重複する。本ブロックではIV層とV b層に生活面がある二時期の石器群が混在していると想定され、SH1007は前者との関わりが認められる。V b層の礫群は確認できないが、ブロック範囲と重なるように礫と大粒の炭化物が散漫に分布する。礫の出土状況からも、生活面が異なる二時期の石器群が混在していることが傍証できる。

BL307

溝状の窪みの谷頭にある。散漫な分布を示すが、隣接するブロックとは明確に分離できる。無斑晶質安山岩が主体となる。槍先形尖頭器(3001)、台形石器(3017)、削器(3052)、鋸歯縁状削器(3054)、楔形石器、石核(3095)、斧形石器(3108)、敲石(3120)などが出土した。大半がV層群より出土しており、V b層に出土点数のピークがある。敲石や斧形石器の大形礫石器がV b層から出土しており、V b層に生活面がある石器群が確認できる。なお、BL307の調査区壁際に土層の乱れが確認され、そこから出土した遺物をV層とした。これらは本来IVに含まれていた遺物を含むと考えられる。

BL308

小範囲に密集した分布を示す。ブロック範囲は4.6×4.2mであるが、特に3.7×2.3mの範囲で遺物密度が高い。珪質凝灰岩、珪質頁岩、凝灰岩を主体とし、無斑晶質安山岩、黒曜石などがまとめて出土している。ナイフ形石器(3005)、削片(3034)、挿入削器、楔形石器(3065)、石刃(3069～3072・3074・3075・3078・3081)などが出土した。IV層に出土点数のピークがある。楔形石器を除きほとんどの石器がIV層より出土していることを考慮すると、IV層に生活面がある石器群が想定される。なお、V b層にも遺物が確認され、その出土地点はブロックの周辺部にまとまっている。本ブロックの主体となるIV層に生活面がある石器群より古い石器群がわずかに混在していると考えられる。分布が重なる礫群は認められないが、IV層に礫が散見される。

IV層石器群の接合関係から、BL302～304・306・307との関連が想定できる(第171図)。特に、

BL302とBL308は和土土屋橋群を多く含み、類似した産地組成を示すことが注意される。これらのブロックはIV層に生活面がある礫群を取り巻くように配置されており、同時期のブロック群であると判断した。

BL309

隣接するBL308・310に比べ散漫な分布を示すが、石材別に分布を見ると他のブロックと明確に区分できる。調査区外にブロック範囲が伸びるが、南東側には崖が迫っており、ブロックの9割以上は調査していると考えられる。

無斑晶質安山岩を主体とし、珪質頁岩、チャートが多くみられる。槍先形尖頭器(3002)、ナイフ形石器(3008)、台形石器(3019)、削片、搔器状石器、搔器(3039)、石刃(3076・3078)、石核、台石(3130)などが出土した。

V a層とV b層に出土点数のピークがあり、V b層に出土した台石の存在を考え合わせると、V b層に生活面がある石器群の存在が想定される。しかし、上記の石器の多くはBL308側に集中しており、石核と台形石器以外はIV層より出土している。これらの石器がすべてV層に生活面がある石器群とは考え難い。IV層出土遺物の分布を見ると、本来BL308の石器群と関連するものが、本ブロックに含まれていることが想定される。少なくとも二時期の石器群が混在しており、V層に生活面を有する石器群が主体となるブロックと判断した。

BL310

密集した分布を示す。ブロック範囲は11.3×7.5mで、特に3.2×2.9mの範囲で遺物密度が高い。無斑晶質安山岩を主体とし、チャート、珪質頁岩、凝灰質頁岩が多くみられる。このほか少数ではあるが、玉髄、黒曜石、凝灰岩、緑色凝灰岩などがまとまった分布を示す。また、蛇紋岩の剥片もしくは斧形石器の破片がまとまって出土しているのが他のブロックにみられない特徴である。ナイフ形石器(3003)、台形石器(3013・3015・3016・3021～3023)、貝殻状刃器(3027・3029)、搔器状石器(3040)、削器(3047)、鋸歯縁状削器、石核(3084・3090・3103)、斧形石器(3105・3110・3111)、砥石(3113)、敲石(3115・3117・3121)などが出土した。

V b層に出土点数のピークがある。総点数1066点に対し、IV層中部より上層で出土した遺物は11点のみであり、遺物の上下の拡散があまり激しくない様子が認められる。ほとんどの大形礫石器がV b層より出土していることから、V b層に生活面がある石器群と判断した。また、IV層下部～V b層の遺物分布範囲がまったく一致しており、単一時期の石器群と考えられ、他時期の混在が少ない極めて良好なブロックである。

III層に生活面が想定される礫群SH324と一部重なるが、本ブロックとは時期が異なる。

BL311～BL318

Bブロック群とした一群である。中心の集中部をBL318とし、その周辺をめぐる石器群を便宜的に7つのブロックに区分した。BL318とBL312とにまたがった2×2mの攪乱は、重機による試掘調査で遺物を認識できずに破壊してしまったものである。Bブロック群は東西18.2m、南北15.0mの範囲にほとんどの石器群が含まれる。中心部のBL318はブロック範囲が6.4×5.8mで、特に2.5×2.3mほどの範囲で遺物分布密度が高い。いずれのブロックも無斑晶質安山岩あるいはチャートが主体となり、他の石材はほとんどみられない。BL308・314でチャートが主体を占め、他のブロックでは無斑晶質安山岩が多くなる。

ナイフ形石器(3112)、貝殻状刃器、搔器(3037)、搔器状石器(3038)、厚刃搔器(3045)、削器(3051)、鋸歯縁状削器、楔形石器(3062・3067)、石核(3086・3094・3097～3100・3104)、敲石(3116・3119)、台石(3123・3126～3128)などが出土した。すべてのブロックに石核が存在しているが、ナ

イフ形石器、削器、搔器などの利器はBL311・312・317などのブロック群の東側に偏って出土する。また、BL318の集中部には石核と楔形石器のみがみられ、ブロック群の中心部に利器となる石器が少ない。剥片・砕片以外の石器群はナイフ形石器を除き、すべてV a・V b層出土である。ナイフ形石器もIV層下部より出土しており他の石器と近い層位である。

いずれのブロックもV b層に出土点数のピークがあり、IV層の遺物は極めて少ない。台石の底面の出土層位はいずれもV b層であり、V b層に生活面がある石器群であると想定した。また、Bブロック群内のすべてのブロックがいずれかのブロックと接合関係をもっており、相互の関連があることが伺われ、すべて同時期のブロック群であると判断した。また、BL318を中心として、その周りにドーナツ状の分布状況が認められることから、環状ブロック群の一類型であると判断した（小菅2000・長野県埋蔵文化財センター他2000a～c）。

礫群SH324と一部重なるが、本ブロック群とは時期が異なる。また、台石および大形の礫が外周部のブロックに出土し、BL315に大粒の炭化物がまとまって出土した。

接合資料

78例の遺構間接合資料を得た。BP第3地点では二時期以上の石器群が重複しており、便宜的にIV層石器群、V層石器群とに区分した。この区分にしたがって、時期別の接合関係を第40表と第162・171・172図に示した。IV層石器群では、BL308を中核にBL302～304・306・307間の接合関係が確認できる。これらのブロック群は礫群SH325・1007を囲むように配置しており、これらの礫群との関わりが伺われる。V層石器群では、ニグループの接合関係が確認される。すなわち、BL304～BL310のブロック間接合とBL311～BL318のブロック間接合である。前者はAブロック群、後者はBブロック群としたものであるが、Aブロック群のBL308はIV層石器群を主体としたブロックであり、V層石器群の遺跡構造を考察する場合、除外しなければならない。第172図の接合線を見ると、AブロックとBブロック群は概ね排他的であるが、両ブロック群間の接合関係が5例認められる。接合資料番号2022D・2043C・2045F・2045L・2073Aが該当する資料であるが、2022Dは珪質頁岩でBブロック群ではほとんどない石材であり両ブロック群の有意な関係を示す資料にはならない。2043C・2045F・2045Lは無斑晶質安山岩、2073Aはチャートであり、Bブロック群の主体となる石材である。しかし、ブロック周辺部との接合であり、両ブロック群の関連を示す資料とは言い難い。唯一資料番号2045FがBブロック群とBL310の関連を示す可能性をもった資料といえる。

(2) 礫群・炭化物集中（第168・173・174図、第41表）

SH324（第174図）

Ⅲ層で検出された礫群で、Ⅲ層に生活面が想定される。Ⅲ層は旧石器時代から縄文時代早期の遺物包含層に対比されており、縄文時代の遺構である可能性がある。拳大の亜角礫を用い、顕著に赤化したものは少ない。平面的に重なるBL310・313とは時期が異なっており、周辺に関連する遺物は出土せず、礫群のみが単独で検出された。

SH325（第174図）

Ⅲ層～IV層上部に検出された礫群である。IV層に出土点数のピークがあり、IV層に生活面が想定される。ただし、Ⅲ層より出土した大形の礫2点はIV層の礫群とは時期が異なるものと思われる。IV層の礫群は、拳大の亜角礫を用い、顕著に赤化したものを多く含む。BL305と重なる。

なお、SH325とSH326は整理作業で遺構範囲を変更しており、調査当初の遺構名称と一部一致しない。

SH326（第174図）

SH325の北西側に散漫に分布する礫をSH326とした。顕著に赤化し、欠損した亜角礫が多い。V a層

に多く出土しており、V a層に生活面が想定されるが、SH325とのレベル差はほとんどなく、同一時期のものである可能性も残されている。

BL302と重なる。BL302はV a層より上層に生活面が想定される石器群であり、礫群との関連が伺われる。

SH1005・1006

溝状の窪み内に出土した礫で、発掘調査後に認識したため、詳細な出土状況は不明である。顕著に赤化した、拳大の垂角礫が多い。V a層もしくはIV～V層に多く出土した。溝状の窪み部の谷頭部では、取り上げ層位の「V a層」は「IV～V層」と同じ層位と考えられ、両者が同時期のものであることが想定される。窪み内より出土したものであり、原位置を保っているかどうか判断できない。

BL303・304と重なる。

SH1007

発掘調査終了後に認識したため、詳細な出土状況は不明である。拳前後の垂角礫を用い、顕著に赤化したものを多く含む。IV層中部に検出された礫が主体を占め、IV層中部に生活面が想定される。V b層に出土した2点の礫は時期が異なるものと考えられる。

BL306と重なる。BL306と隣接するBL308にはIV層に生活面がある石器群の存在が想定されており、これらのブロックとの関わりが伺われる。

SF301～SF306 (第168図・第45表)

いずれもV bで確認した炭化物集中である。5 mm角以上の炭化物は出土地点を記録してサンプリングしたが、それ以下の炭化物は、密集部の範囲を記録した。第45表に各集中部の概要を示した。SF306を除き、V層に生活面があるブロックの分布に重なる。なお、サンプリングした炭化物はサクラ属とカエデ属が主体を占める(第168図)。

遺構名	集中範囲の規模	炭化物確認数	出土層位
SF301	3.5 × 1.4 m	49点	V b層
SF302	4.8 × 1.7 m	64点	V b層
SF303	2.6 × 1.1 m	55点	V b層
SF304	4.8 × 1.9 m	37点	V b層
SF305	4.0 × 3.0 m	107点	V b層中部～下部
SF306	2.5 × 2.1 m	64点	V b層中部～下部

第45表 BP第3地点の炭化物集中



SF301 (竹串が炭化物出土地点を示す)



SF302 (竹串が炭化物出土地点を示す)



SF303 (竹串が炭化物出土地点を示す)



SF305 (竹串が炭化物出土地点を示す)



大形の礫の分布状況（Vc層上面まで掘下げた状態）



BL306 西より



BL308 南東より



BL309 北より



BL310 北西より



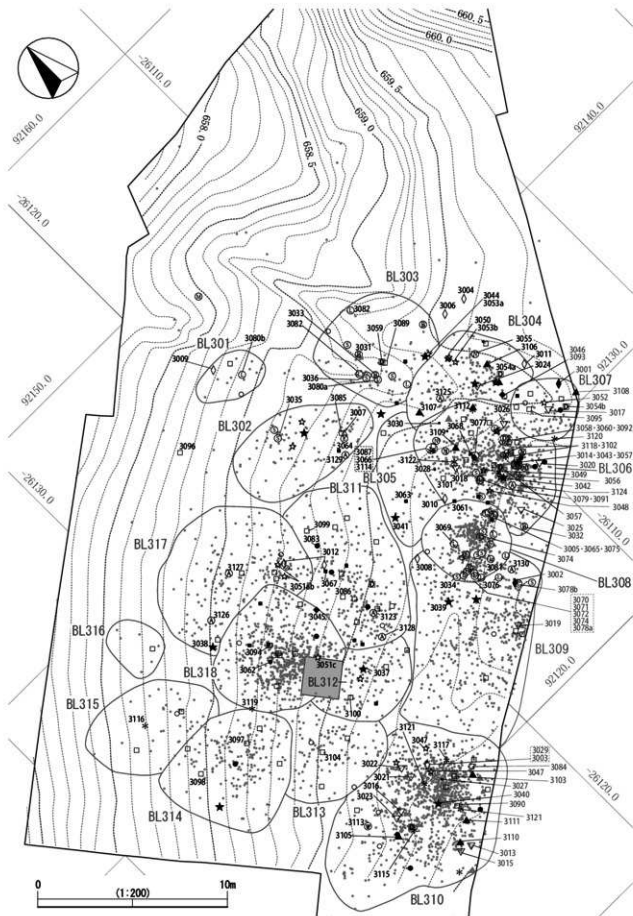
BL310 北西より



BL314とVb層出土礫 東より

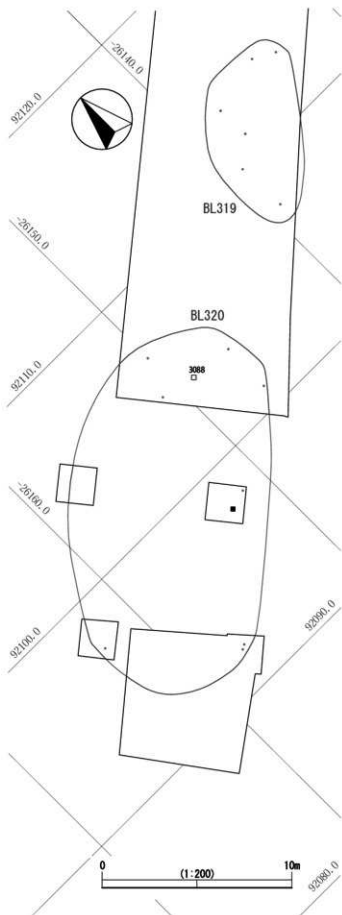


BL318 南東より

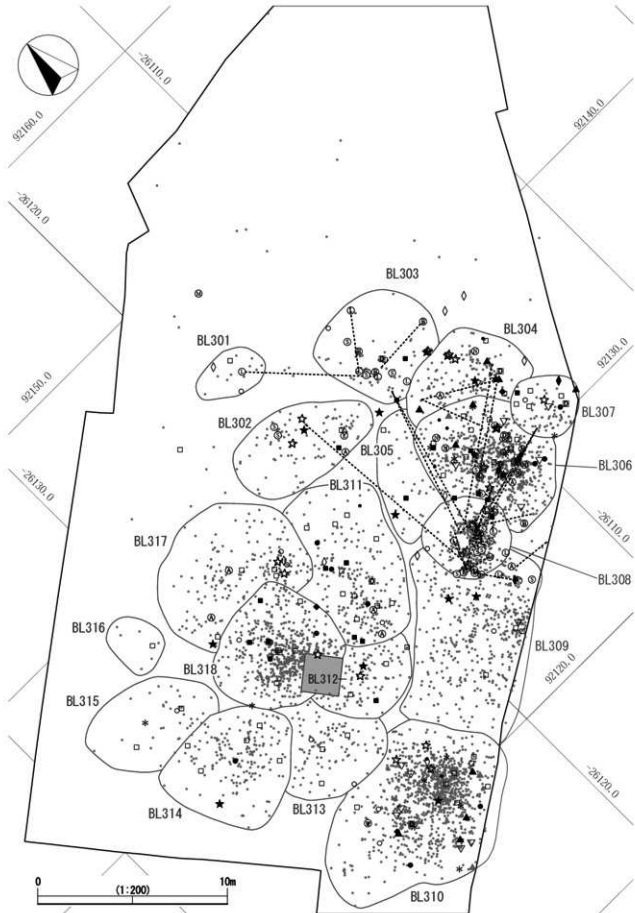


第169図 BP第3地点石器分布図1

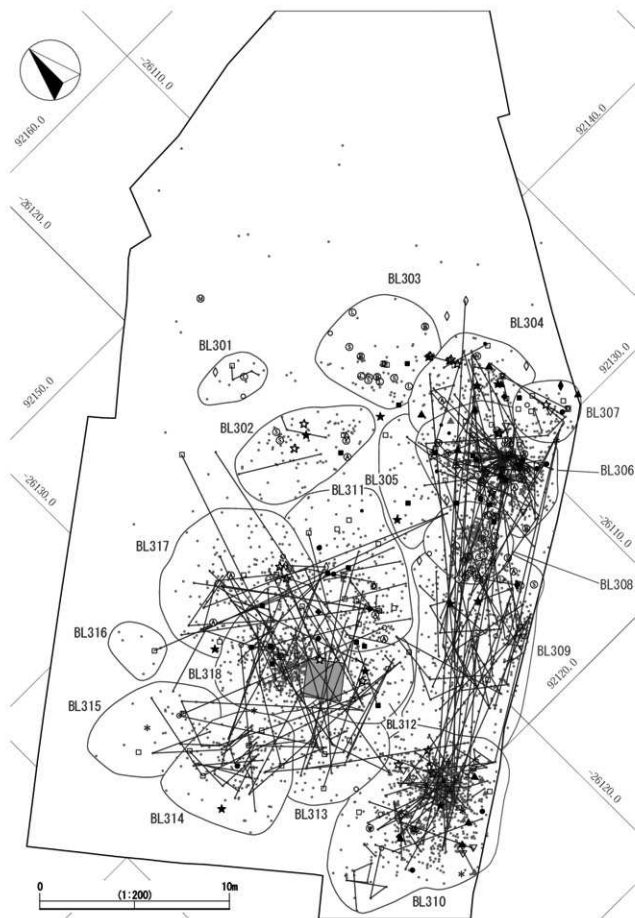
記号	略称	器種
◇	Kn	ナイフ形石器
▽	Tr	台形石器
◎	CF	折断削片
★	ES	播器・播器状石器
⊙	NS	挟入削器
⊕	Gr	彫器
⊖	MC	細石核
☆	Sc	削器
■	Pe	楔形石器
⊙	B1	石刃
○	RF	2次加工のある削片
⊕	Dr	挟器
◆	Po	槍先形尖頭器
⊕	Sp	削片
⊖	MB	細石刃
●	UF	微細剥離のある削片
□	Co	石核
•	F1	削片
•	Ch	砕片
•	SB	貝殻状刃器
⊖	DS	鋸歯縁状削器
⊕	An	台石
⊖	PT	礫器
▲	Ax	斧形石器
◎	GS	磨石
⊕	PS	凹石
◎	原石	原石
▲	AS	斧形石器破片 斧形石器調整削片
◆	AS	厚刃播器
*	Ha	燧石
◎	Wh	砥石



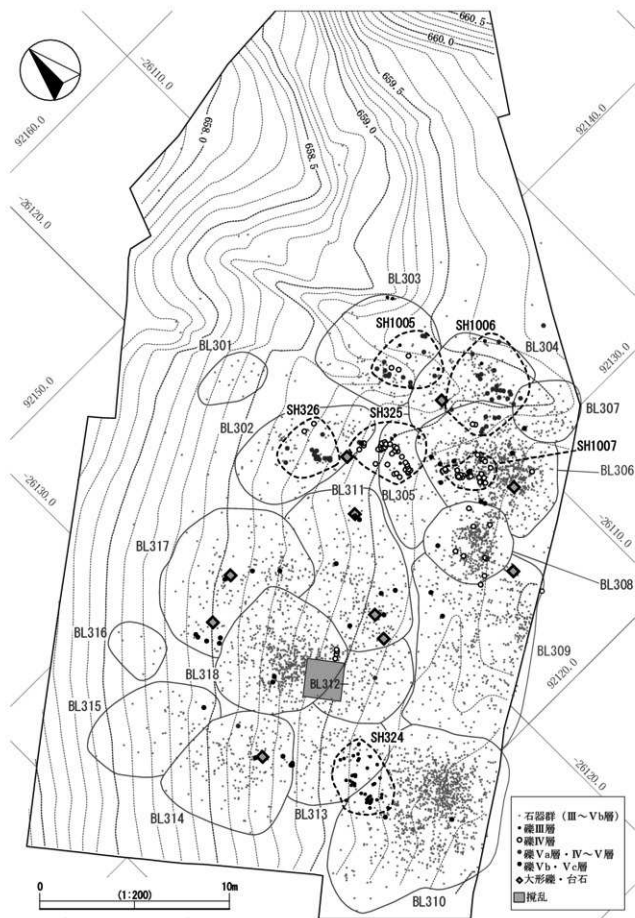
第170図 BP第3地点石器分布図2



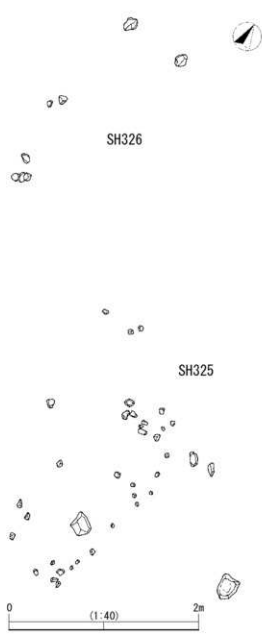
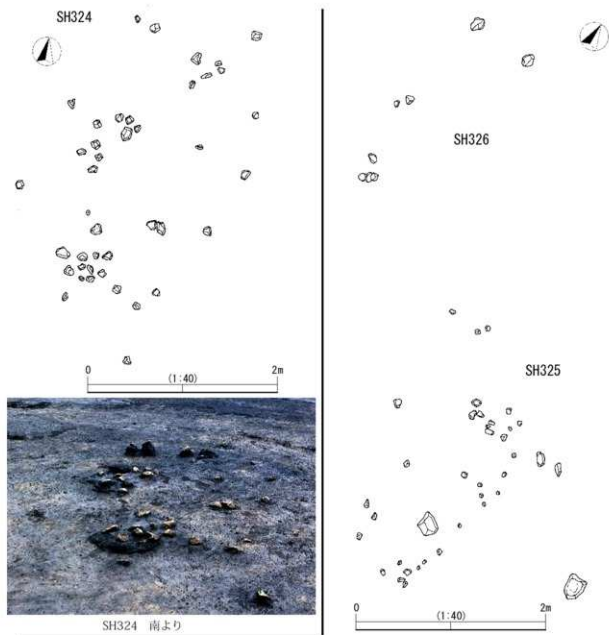
第171図 BP第3地点IV層石器群の接合関係



第172図 BP第3地点V層石器群の接合関係



第173図 BP第3地点の石器群と燧石群



第174図 BP第3地点礫群

5 出土遺物

(1) 石器 (第175～208図・PL26～32)

剥片石器と礫石器220点、石核71点、剥片・碎片4276点が出土した。ブロック別の器種組成、器種別の石材組成を第42・43表に示した。

1. 槍先形尖頭器 (3001・3002)

2点出土した。3001は基部をわずかに欠損している。取り上げ層位「V層」は、V層が明確でなくIV層からV層が混在する土層の乱れを示している。3001は本来IV層に含まれていた可能性があり、BL307の他の石器群とは別な時期のものであると考えられる。3002は槌状剥離が施されており、先端部の側縁には彫刀面からの微細な剥離が認められる。いずれも、遺跡内で製作の痕跡は認められない。

2. ナイフ形石器 (3003～3012)

10点出土した。3003は打面を残した縦長の剥片の側縁にブランティングが認められる。3004は貝殻状の剥片を素材とし、二側縁に表面よりブランティングが施される。Ⅲ層から出土しているが、BL310のV層出土の剥片と接合する。3005は打面を残した縦長の剥片を素材とし、正面図右側縁部が折れており、残存部に調整加工がわずかに認められる。左側縁には折れ面に先行する槌状剥離のような剥離面が認められる。3006～3008は二側縁加工で、3007は基部が捩理面より欠損しており、3008は裏面に平坦剥離が認められる。3009は二側縁に調整加工が認められる、右側縁は折れ面に調整加工が施されたものと思われる。3010は打面を残した縦長剥片の端部に表面より調整加工が施されている。このような調整加工は、BP第4地点で彫器ブランクとしたものに類似する。3011は横長の剥片を素材とし、一側縁にブランティングが施される。表面からの調整加工は、素材剥片の剥片剥離との前後関係が不明なものもあるが、基部にみられる表面からの調整加工は明らかに素材剥片を剥離した後の二次加工である。3012は打点は失われているが、裏面図下端の剥離面が打面である。基部および右側縁中央に調整加工が認められる。

3. 台形石器 (3013～3026)

14点が出土した。3026以外はV層またはV層より出土した。3013～3019・3021・3022は二側縁がほぼ並行した形状を示し、他は基部が刃部に比べ細くなる。前者には、三ないし四段階の大きさの違いがみられる。

3013は表裏両面より調整加工が施され、特に裏面の剥離は、主剥離面中央まで及ぶ平坦剥離である。上縁の刃部には両面に微細剥離痕が認められる。なお、3013と3023は接合する(第202図接合資料2022H)。3014は側縁部の調整加工が表裏両面より施され、基部がわずかに欠損する。石材は異なるが、素材剥片の形状、調整加工、石器の形態が3013と類似する。3015は裏面から調整加工が施される。右側縁は折れ面から剥離がなされ、右側縁は上端部にわずかに調整加工が認められるのみである。3016は打面を残した縦長の剥片の裏面からブランティングが施される。3003のナイフ形石器と同一母岩資料と思われる。3017は左側縁が裏面から、右側縁部が表面からのブランティングが施される。3018は基部がわずかに欠損しているが、二側縁に裏面からのブランティングが施される。刃部に微細な剥離痕が認められる。3019・3021は小形で幅がほぼ一致する。いずれも裏面からのブランティングが施されているが、3019右側縁には表面からの調整加工が認められる。3020は基部がわずかに欠損しており、逆三角形に近い形状であろう。3022は上下両端部に鋭い縁辺が残されている。3023～3025はいずれも裏面よりブランティングが施され、いずれも刃部に微細な剥離痕が認められる。3026は左側縁は節理での折れ面で、右側縁基部にわずかに調整加工が認められるのみである。刃部に微細な剥離痕がある。

4. 貝殻状刃器 (3027～3030)

7点出土した。いずれも縁辺に微細な剥離痕が確認されたものである。3027は抉り部が作出されており、挟入削器に分類可能である。折れ面を打面とし、数回の剥離がなされており、この部分の剥片が接合している。3028は大形の剥片を素材とした石核から剥がされた剥片で、表面にボジ面を残す。また打面には円錐状裂痕が3箇所残されている。

5. 彫器 (3031～3033)

4点出土した。3031の素材剥片の主剥離面はほとんど残されていない。上面の平坦面を打面とし槌状剥離がなされている。右側縁の二次加工との前後関係は不明である。3032・3033は裏面からの調整加工面を打面とし、槌状剥離が施され、いずれも欠損している。

6. 削片 (3034～3036)

14点出土し、ボジ面を有するもの(3034・3035)が10点ある。3034はボジ面を残す側縁に顕著な調整加工が認められる。すべての削片に同一母岩資料が確認され、遺跡内で作出されたことが確認できる。

7. 掻器・掻器状石器 (3037～3044)

掻器4点、掻器状石器10点が出土した。刃部の加工部が厚いものを掻器としたが、掻器と掻器状石器の区分は明確ではなく、小形の掻器は掻器状石器と区別し難い。掻器状石器の多くは出面を残し、素材剥片の形状を変更せず刃部を作出する。3040は挟入削器またはナイフ形石器または彫器ブランクなどに分類可能な石器で、他の掻器状石器とは刃部形態が異なる。3044は大形の縦長の剥片の長軸の端部に刃部を作り出しており、他の掻器とは区別される。同類のものがBL303の南西側のⅢ層に出土しており、他の掻器・掻器状石器と出土層位を比べると時期が異なると判断できる。

8. 厚刃掻器 (3045・3046)

2点出土した。いずれも安山岩である。

9. 削器 (3047～3053)

破片2点を含めて、15点出土した。

3047は左側縁の二次加工を削器の刃部と判断したが、右側縁部には表裏両面からブランディング状の調整加工が認められ、台形石器に分類することもできる。3050・3053は稜付剥片を素材とし、一側縁に刃部を作出している。3050の左側面に見られる調整加工は、主剥離面より古いものである。3051は正面図(左図)が主剥離面で、表面からの打撃により刃部を作り出している。表面は磨耗しており、自然面であろうか。3052は左側縁の鋭利な縁辺に微細な剥離痕が認められる。

10. 挟入削器 (3055・3056)

6点出土した。3055は打面からの微細な剥離により、表面に2箇所のノッチが作り出されている。3055の実測図は注記番号45735と45733が接合したものであるが、両者は共通の主剥離面を有しており、剥片2分割したものである。縁辺部には使用痕跡と思われる微細な剥離が認められる。BL309の剥片と接合する。3056は打面を残した縦長の剥片の端部にノッチが作り出されている。

11. 鋸歯縁状削器 (3054・3057～3059)

6点出土した。3054は主剥離面側に粗い剥離がみられる。すべて無斑晶質安山岩で、いずれも主剥離面側からの二次加工を行い、鋸歯縁を作り出している。

12. 採錐器 (3060)

表面からの調整加工により錐部を作出した石器である。右側縁の錐部以外の調整加工は素材剥片剥離以前の打面調整である可能性が高い。細かな調整加工は主剥離面との前後関係が不明であるが、第205図3146(接合資料2002E)にみられる打面調整加工に類似し、同じ剥片剥離技術であると考えられること

から、錐部以外の調整加工は打面調整と判断した。主剥離面の錐部尖端に衝撃剥離のような微細な剥離がみられる。

13. 楔形石器 (3061～3068)

20点出土した。対峙する二辺または二点に両極打法による剥離が認められるものを楔形石器とした。V a・V b層に出土するものが多く、形態上は縄文時代のもとの区別できない。3067は両極打法により剥片を薄くしたものであることが、第202図3134(接合資料2043R)の接合例から伺われる。3134は3067とBL318の剥片が接合したもので剥片が二分割され、さらに薄い剥片となっている。

14. 石刃(3069～3082)

21点が出土した。この内7点は稜付剥片である。石刃には接合資料がみられ、稜付剥片が存在することから、本遺跡内で石刃の生産が行われたことが確認される。

3073は3069～3072と剥片1点が接合した状態である。3070・3071・3075・3076・3078・3079では打面調整が認められるが、必ずしもすべてに認められるわけではない。3071を除いてすべてIV層より上層で出土しており、V b層に生活面が想定される石器群には含まれない器種であることが確認できる。3080～3082は稜付剥片で、3082は石刃と稜付剥片が接合した状態である。3080・3082の形状から、分厚い剥片を石核として石刃を作出したことが推定される。

15. 2次加工がある剥片

上記の器種に分類できないものを一括した。17点出土した。

16. 微細剥離がある剥片(3083)

13点出土した。3083は打面を残した貝殻状の剥片で、下端部の縁辺が磨耗している。他に、磨耗痕を有するものはみあたらない。

17. 石核(3084～3104・3136～3141・3149)

73点出土した。石刃が多数出土しているが、明確な石刃石核は認められない。円礫を素材とするもの(3102・3136～3140)と、板状の剥片を素材とするもの(3084・3091・3096・3098・3100・3103・3104)が存在する。前者はチャートと無斑晶質安山岩が多く、鶏卵から拳大のものである。後者は無斑晶質安山岩が多く、大形の分厚い剥片を分割し石核とした例がみられる。残核の形状では、90°単位の打面転移を行うサイコロ状のもの(3088・3090・3092・3093・3095・3102)、180°の打面転移を行う角柱状のもの(3089)、同一の打面と作業面から数回の剥離を行うもの(3138～3140)などが確認できる。この他に両極打法によるいわゆる両極石核(3086・3087)が4点確認された。

3084は剥片を素材とし、1～2cm大の剥片を剥がしている。3042の掻器状石器と接合し、接合状態を第202図3131に示した。3085は上面を打面とした剥片剥離を行っており、裏面の調整加工は作業面の剥離よりも古い。下部は欠損しており、石刃石核の可能性がある。3086は両極打法により剥離した剥片が1点接合した状態である。3091は板状の剥片を素材とし、裏面を打面とし、求心的な剥離がなされる。3094は打面と作業面を入れ替えるチョッピングツール状の石核である。3096・3098・3100・3104は板状の剥片を素材とし、剥片の表面を打面とする石核で、3096と3098は剥片を折り、その後石核としている。いずれも接合資料があり、素材剥片の形状が復元でき、3098と3100は接合する(第207図3150・3152)。3097はチャートの円礫を素材としているが、自然面を打面とし剥片剥離を行っているが、良好な剥片は得られず、破碎したような状況である。チャートの円礫にはこのように破碎したような剥離面をもつ石核がみられる。3099・3101は拳大の円礫を素材とし、打面を作出した後、剥片剥離を行なう。打面転移はみられない。3102はやや大形の拳大の円礫を素材とし、打面転移を繰り返した石核である。3102には43点の剥片が接合し、ほぼ母岩の状態に復元できたが(第206図3149)、二次加工また

は使用痕跡が認められるものは確認できなかった。わずかに接合資料がない空間がみられるが、石器の素材剥片となるような形状のものは認められない。接合資料はBL306を中心に小範囲にまとまる。

18. 斧形石器 (3105～3112)

10点出土した。完形品は4点で他は欠損品である。この他に斧形石器の小破片が4点出土し、その内3点は同一個体である。破片は、斧形石器の調整加工に伴う剥片・砕片9点とともにBL306・BL310に出土した。斧形石器に関わる剥片は前述の9点のみで、基本的には遺跡内での製作は行われていなかったと判断した。

3105は刃部のみ研磨されており、刃部裏面には研磨後の剥離が認められる。線状痕は明瞭ではない。3016は自然面を残している。研磨痕は認められないが、全面が磨耗している。3107は大形の斧形石器の破片を用いて、小形の斧形石器を作ったものである。刃部の両面に顕著な研磨痕が認められる。表面の基部にみられる研磨は大形の斧形石器の時の研磨痕である。表面の自然面の表現をしている範囲は、剥離面が顕著に磨耗したようにも観察され、基部の研磨面とともに、大形の斧形石器の器面であったと考えられる。3108の研磨面の線状痕は明確ではなく、礫面を残している可能性もあるが、研磨面と礫面の区別ができない。3109は自然面を残しているが、研磨面は確認できない。3110は片面に顕著な線状痕がみえる研磨面が認められ、剥離全体に磨耗しているように感じられる。3111・3112は破片で、研磨痕は認められない。すべて蛇紋岩としているが、3107・3110は硬質で、他は風化面が脆く軟質な印象を受ける。

19. 砥石 (3113)

1点出土した。図のスクリーントーン部が溝状にわずかに窪み、他の自然面よりも平滑な面をなす。側面三面が欠損しており、本来の形状は不明であるが、裏面の剥離面は摩滅しており、板状の砥石であったことが推測できる。

20. 敲石 (3114～3122)

11点出土した。いずれもV aまたはV b層より出土した。図示しなかった2点は敲打痕がある破片である。

3114は蛇紋岩の楕円礫で長軸の先端部に敲打痕が認められる。3115～3117は敲打痕があまり顕著ではない。3118は輝石安山岩の円礫で、長軸の両端面に顕著な敲打痕が認められる。3119は側縁のほぼ全周に敲打痕が認められ、表裏面には自然面が剥離したような線状の敲打痕が認めらる。欠損しているが、3120のような棒状礫を用いていると思われる。3120～3122は石材はそれぞれ異なるが、棒状礫の側面および長軸の両端部に顕著な敲打痕が認められる。3122は敲打によって剥離した剥片・砕片が11点確認され(個体番号2038)、5点の剥片が敲石に接合した。これらの剥片はBL306とBL310に出土しており、剥離順の検討によりBL310で敲打作業を行った後に、BL306で敲打作業を行ったことが確認された。

21. 台石 (3123～3130)

大形の礫の平坦面に敲打痕が確認されたものを台石とした。3125以外はいずれもV b層より出土した。この他に、敲打痕は確認されないが平坦面がある大形の礫が4点出土しており、2点はⅢ層、2点はV b層より出土しており、台石の可能性がある。3123・3124・3127・3128は特に顕著な敲打痕が認められ、窪みを生じているものもある。

(2) 接合資料(第202～208図・PL30)

BP第3地点では、195例の接合資料が得られた。第



台石 (3123) 出土状況

46表の接合資料一覧に接合資料の器種と出土層位を示した。また、ブロック間接合は第40表と第171・172図を参照していただきたい。

接合資料番号は個別資料の末尾にアルファベットを付したものである。同一個体で互いに接合しない複数の接合資料が生じた場合、異なるアルファベットを付して区別した。同一個体で異なるアルファベットの接合資料は、本来同一個体で剥離過程の中間資料が欠けている場合と、別個の個体を同一個体と認識している場合とがある。また、接合する資料がそれぞれに二次加工がなされている場合などは、A1・A2・A3・・・と数字を枝番号として付した。例えば、接合資料2019C1と2019C2は互いに接合するが、分割された後に二次加工が施されている資料であることを示している。BP第3地点では分割後の二次加工の剥片が接合する例が多く見られ、添付CD収録の遺物台帳には上記の原則で接合資料番号を記入している。

3131～3135は利器の接合例で、3136～3155は石核と剥片、または剥片同士の接合例であり、概ね、石材別に提示した。

3131は12点が接合した資料で、C1とC2に分割される。挿器状石器(3042)、石核(3084)を含み、BL306・309・310に分布する。

3132は挿器状石器(3043)と剥片が接合した資料である。個体番号2019は本地点では他に例をみない石材であり、同一個体の信頼度はきわめて高い。台形石器(3020)、貝殻状刃器(3027)、挿器状石器(3041～3043)、石核(3084)が含まれ、いずれも同一母岩より作られたものと判断してよい。

3133は2点の台形石器(3013・3023)が接合したものである。いずれもBL310より出土した。この他に、同一個体と認識した接合資料2022Aに挟入削器(3055)がみられ、BL304とBL309との接合関係を示している。

3134は楔形石器(3067)の接合例で、両極打法により剥片剥離された資料である。個体番号2043には16例の接合資料があるが、無斑品質安山岩は個体分類が非常に困難であるため、複数の母岩が含まれている可能性がある。

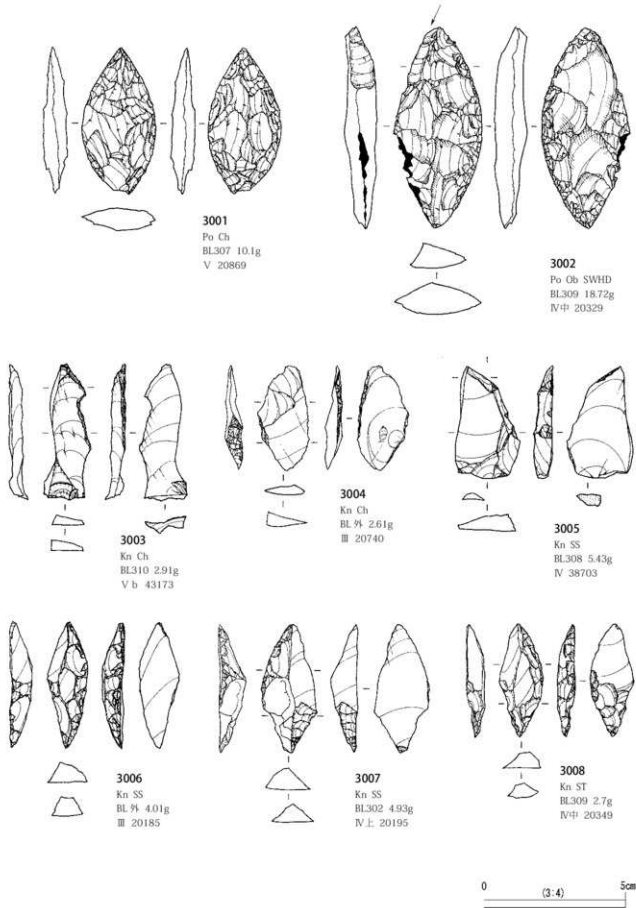
3135(接合資料2040A)は挿器(3039)と剥片の接合で、いずれもBL309で出土した。

3136～3141は石核と剥片が接合したものである。3136と3137は両極打法により破碎したような剥離が認められる。3136は母岩の形状がほぼ復元でき、7cm×6.5cm×3.5cmの楕円礫である。3137はBL314と315とに出土した。3139・3140は分割面を打面とし数枚の剥片を剥離している。3140は石核と6点の剥片が接合したもので、剥離順の検討によりBL309からBL307に石核が移動したことが確認できる。

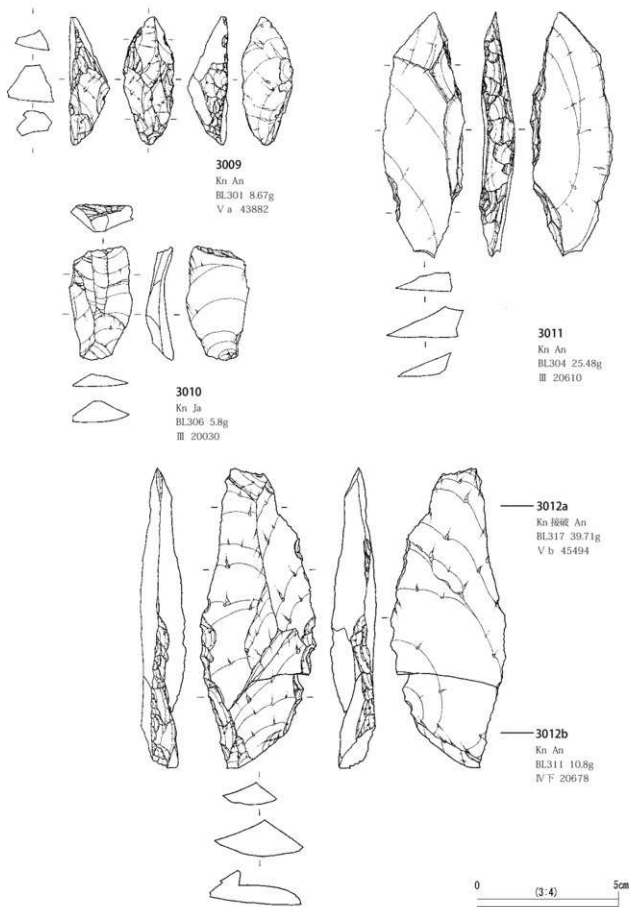
3141・3142は板状の分厚い剥片を分割し、剥片剥離を行っている資料である。3141は石核1点、剥片13点の接合があり、BL308・311・317・318に分布する。3142は2次加工のある剥片を含み、5点が接合し、BL311・313・315に分布する。

3145～3148は剥片のみが接合した資料で、いずれもIV層石器群としたものである。3145は縦長の石刃状の剥片を含む接合資料で、剥片のみ4点が接合し、BL304とBL306に分布する。打面再生による異なる二つの打面が確認できる。剥片の打面には打面調整が認められる。3146は5点(折れたものを含めて7点)の剥片が接合した資料である。丁寧な打面調整の後、連続的な剥片剥離により縦長の剥片を剥離している。3点を剥離した後、90°の打面転移が行われている。3145・3146は同一個体と認識した資料であるが、石核は出土していない。3147は4点の剥片が接合し、三回の打面再生が確認される。BL306とBL308に分布する。

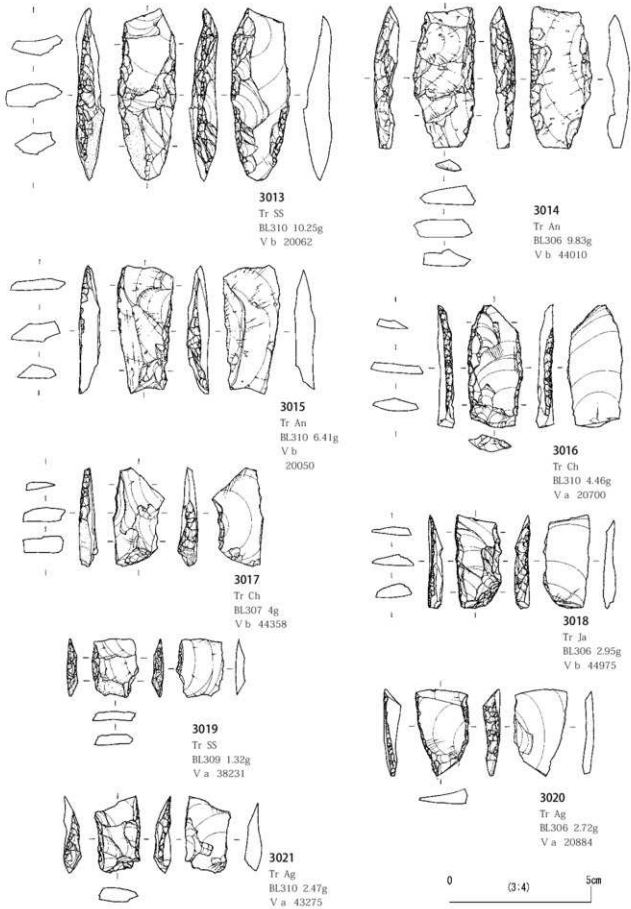
3149～3155は第189図～194図に提示した石核が接合した資料である。



第175図 BP第3地点の石器(槍先形尖頭器・ナイフ形石器1)

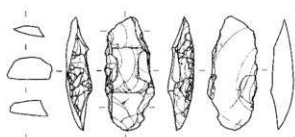


第176図 BP第3地点の石器（ナイフ形石器2）

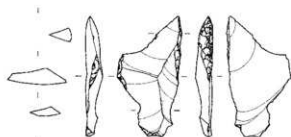


第177図 BP第3地点の石器(台形石器1)

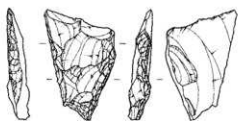
第2章 JS地点・BP第1～第3地点の調査



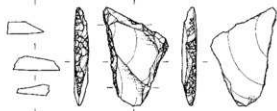
3022
Tr SS
BL310 5.52g
V a 20452



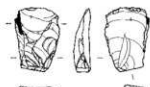
3023
Tr SS
BL310 3.23g
V a 38803



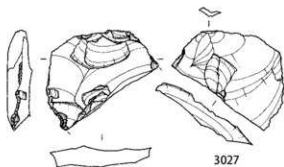
3024
Tr SS
BL304 5.4g
IV-V 45702



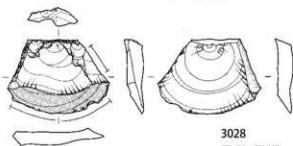
3025
Tr Ja
BL306 3.36g
V b 45281



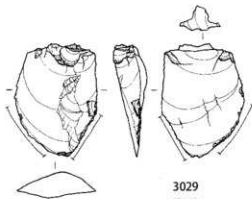
3026
Tr Ch
BL306 1.8g
IV中 20624



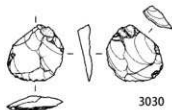
3027
SB Ag
BL310 9.15g
V a 43183



3028
SB Ob SWHD
BL306 5.07g
V a 38917



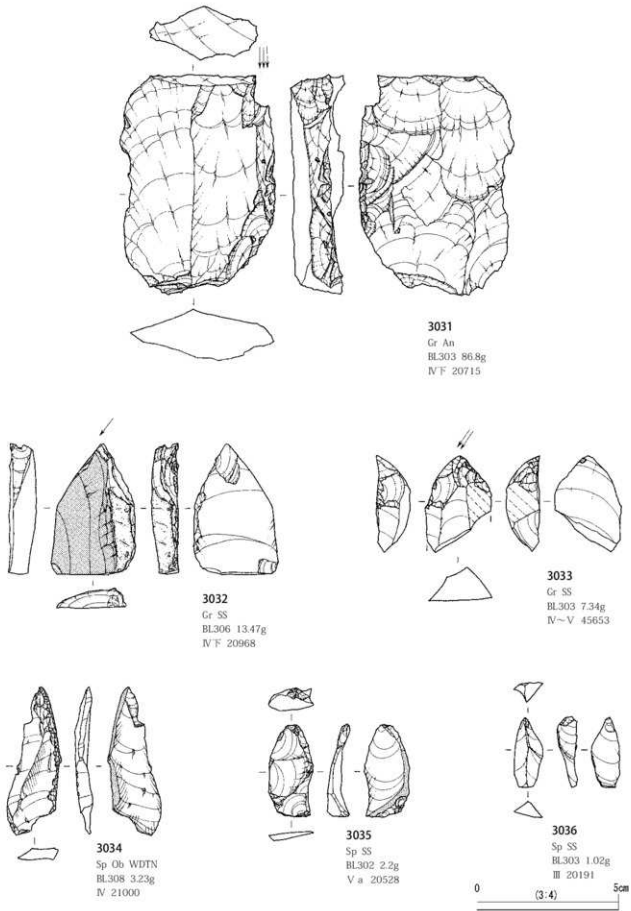
3029
SB Ch
BL310 9.96g
V a 43175



3030
SB Ch
BL306 1.7g
V b 44852

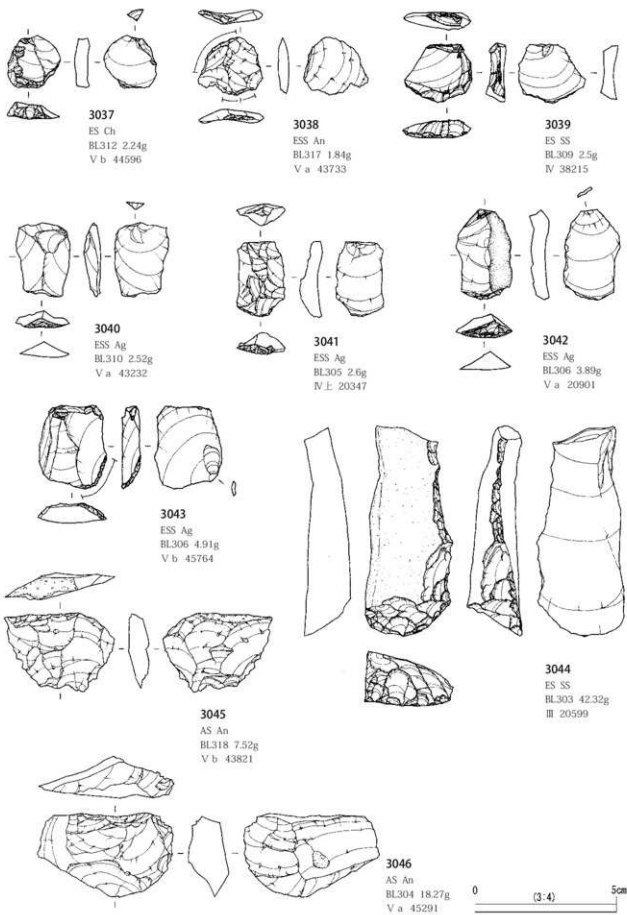


第178図 BP第3地点の石器(台形石器2・貝殻状刃器)

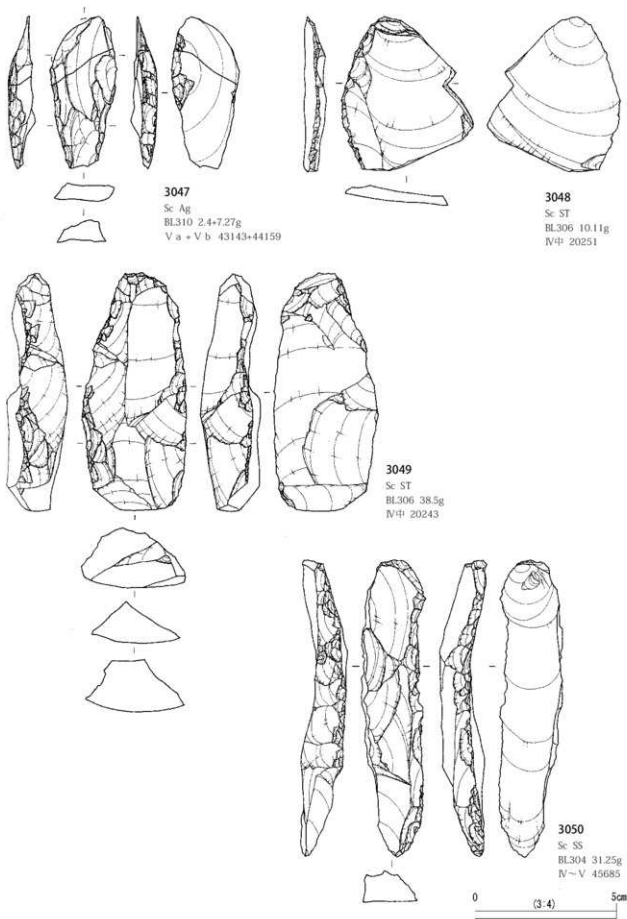


第179図 BP第3地点の石器(彫器・削片)

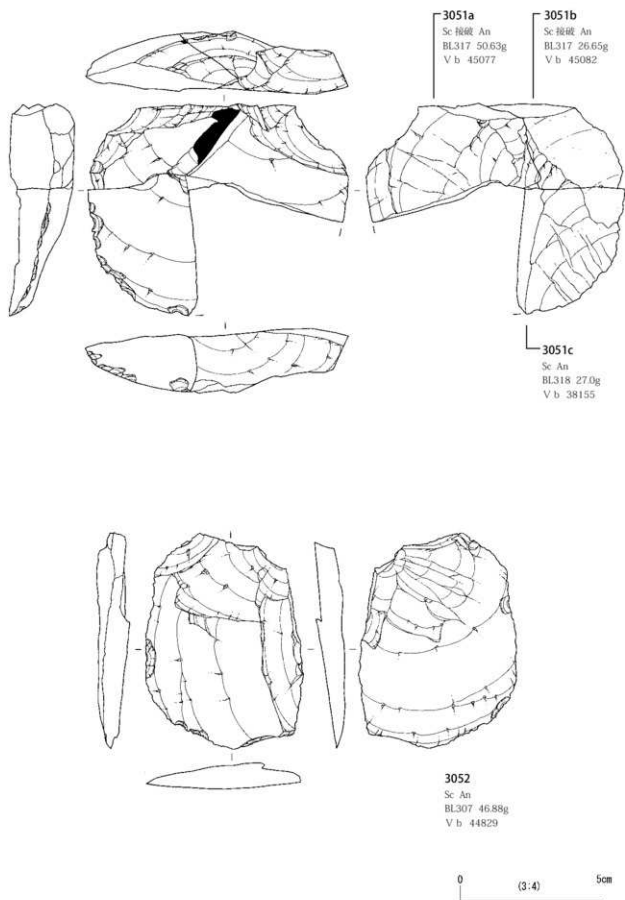
第2章 JS地点・BP第1～第3地点の調査



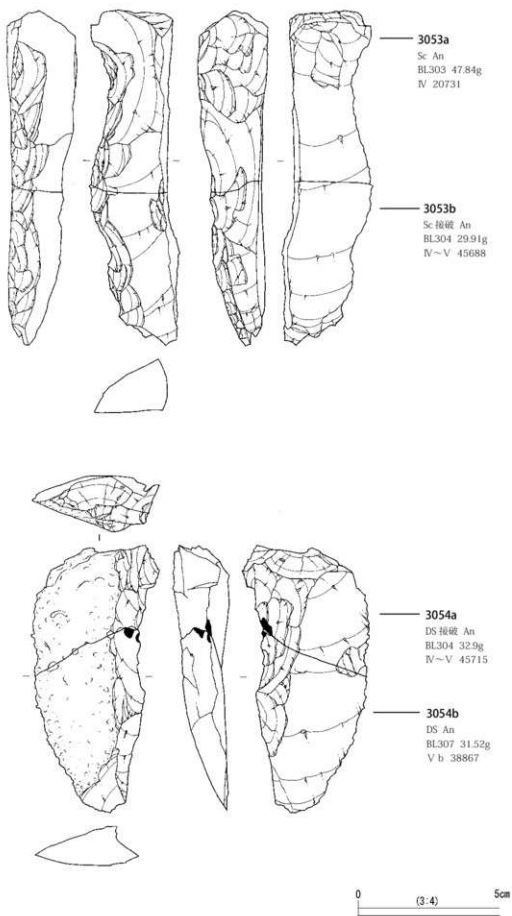
第180図 BP第3地点の石器(槌器・槌器状石器・厚刃状槌器)



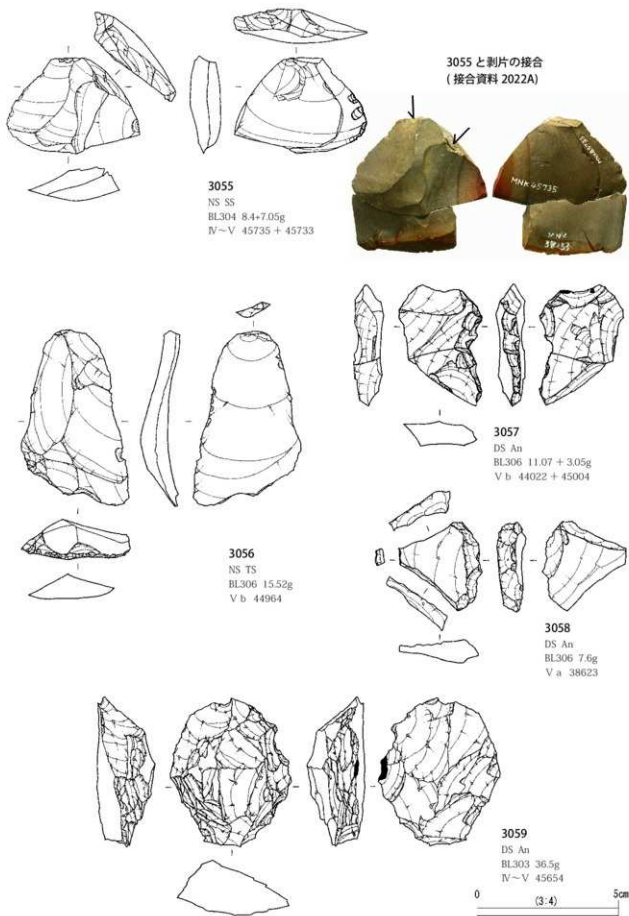
第181図 BP第3地点の石器(削器1)



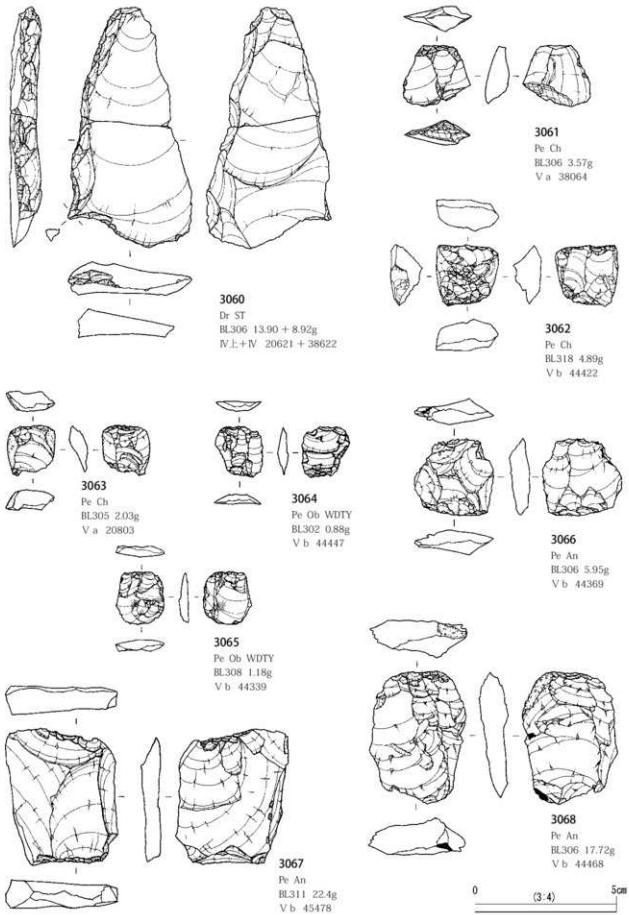
第182図 BP第3地点の石器(削器2)



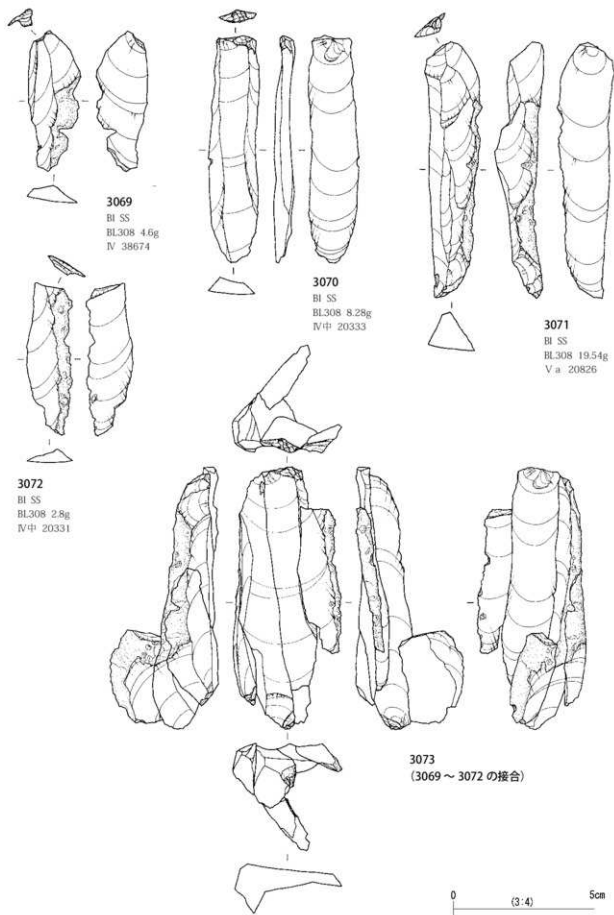
第183図 BP第3地点の石器(削器・鋸歯縁状削器1)



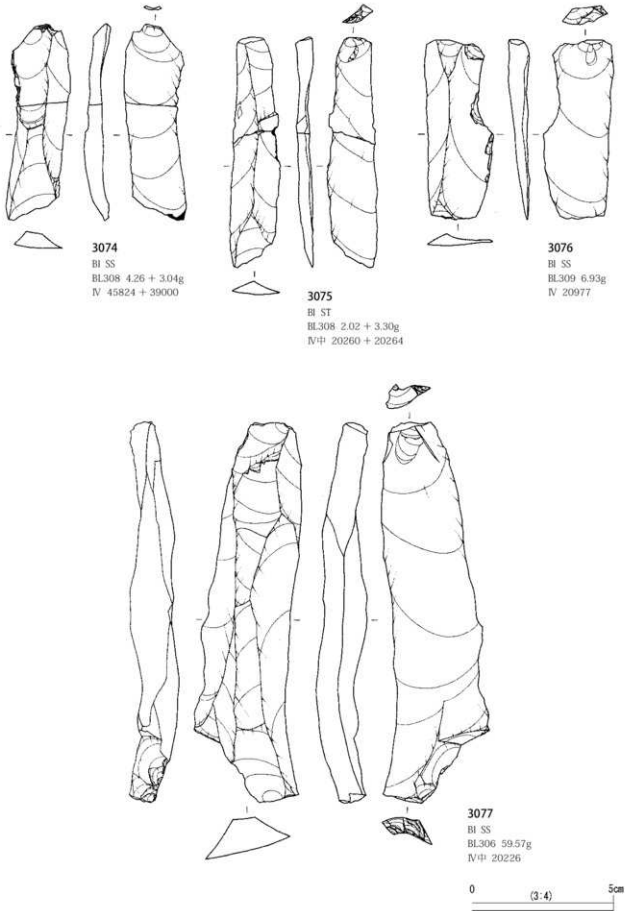
第184図 BP第3地点の石器(抉入削器・鋸歯縁状削器2)



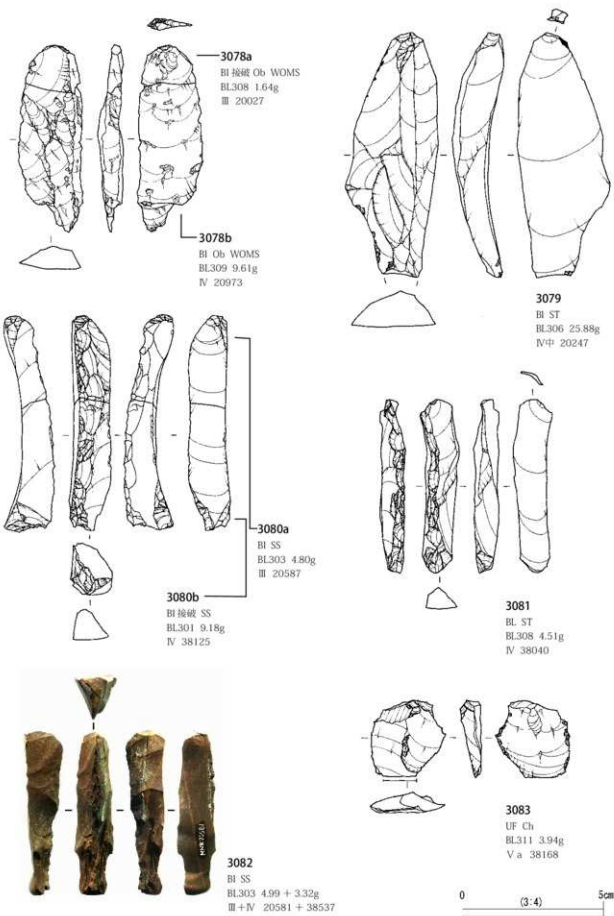
第185図 BP第3地点の石器(挿錐器・楔形石器)



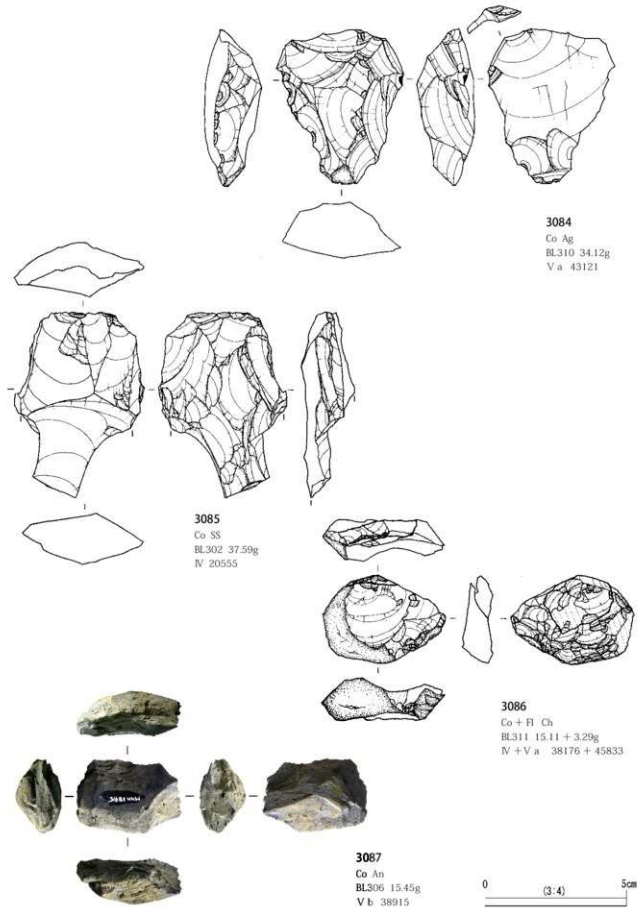
第186図 BP第3地点の石器(石刃1)



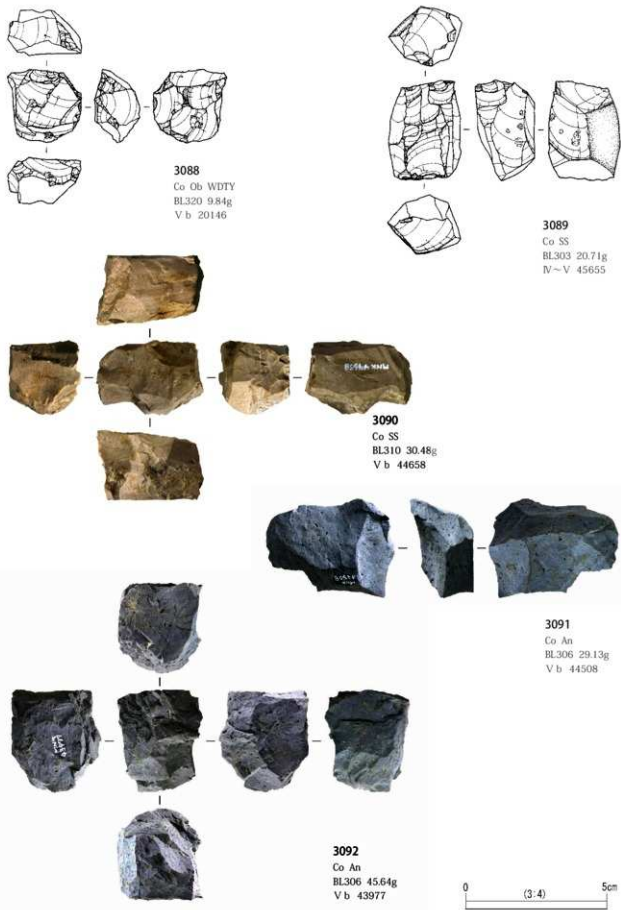
第187図 BP第3地点の石器(石刃2)



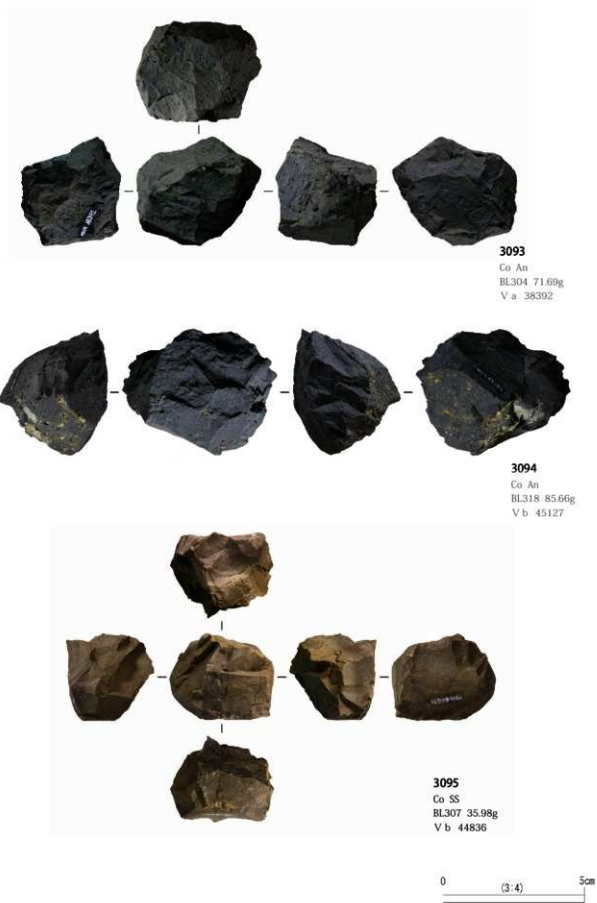
第188図 BP第3地点の石器(石刃3・微細刻離のある剥片)



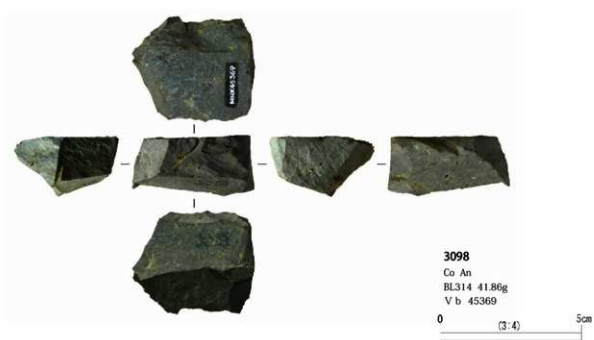
第189図 BP第3地点の石器(石核1)



第190図 BP第3地点の石器(石核2)



第191図 BP第3地点の石器(石核3)



第192図 BP第3地点の石器(石核4)



3099
Co An
BL311 336.55g
V b 44376



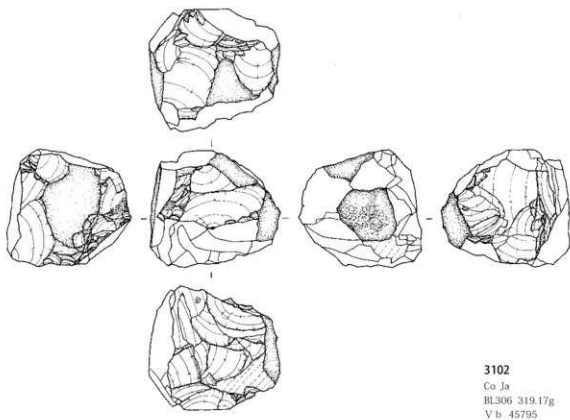
3100
Co An
BL312 240.63g
V a 20465



3101
Co An
BL306 272.93g
V b 44459



第193図 BP第3地点の石器(石核5)



3102
Co Ja
BL306 319.17g
V b 45795



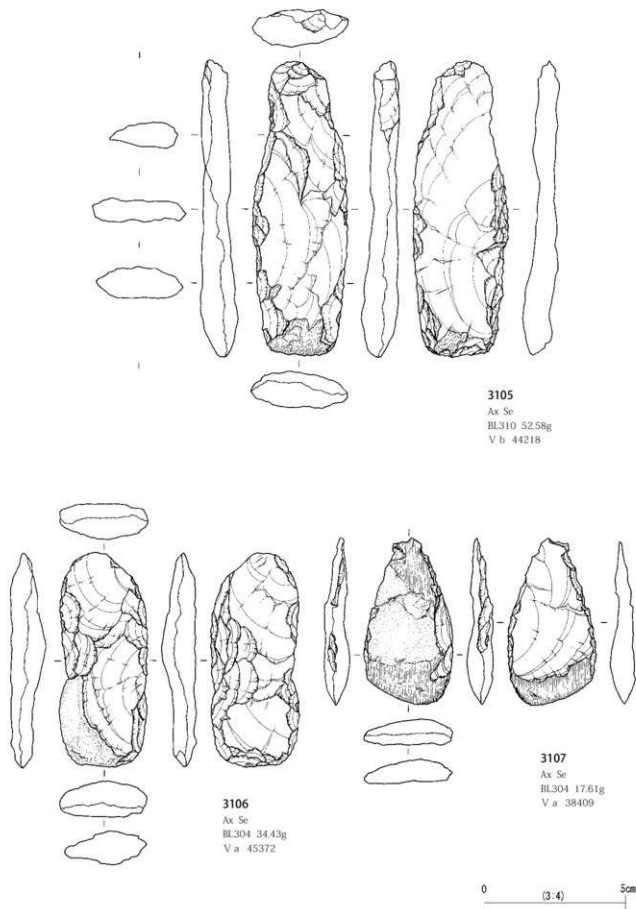
3103
Co An
BL310 125.85g
V b 44773



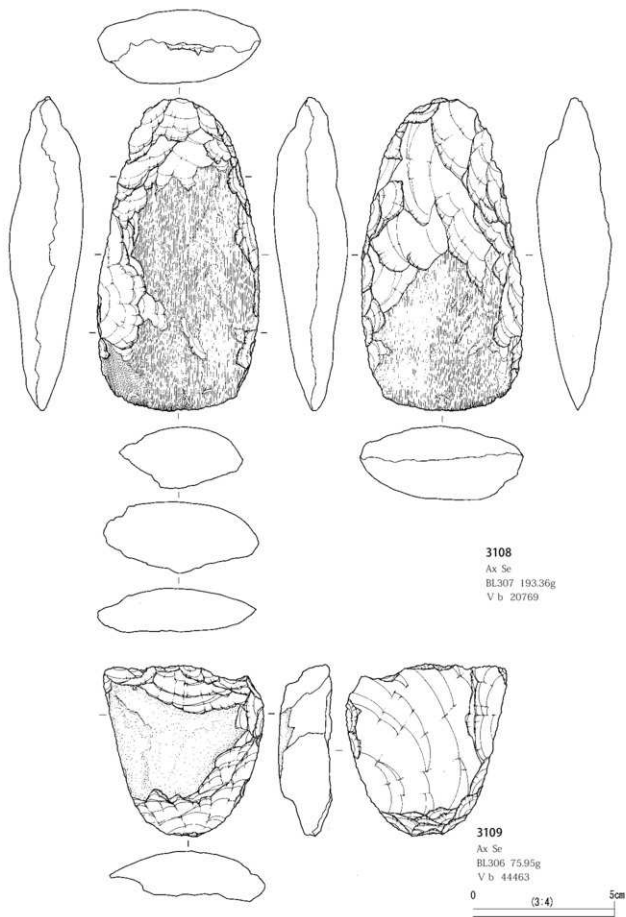
3104
Co An
BL313 136.36g
V b 38501



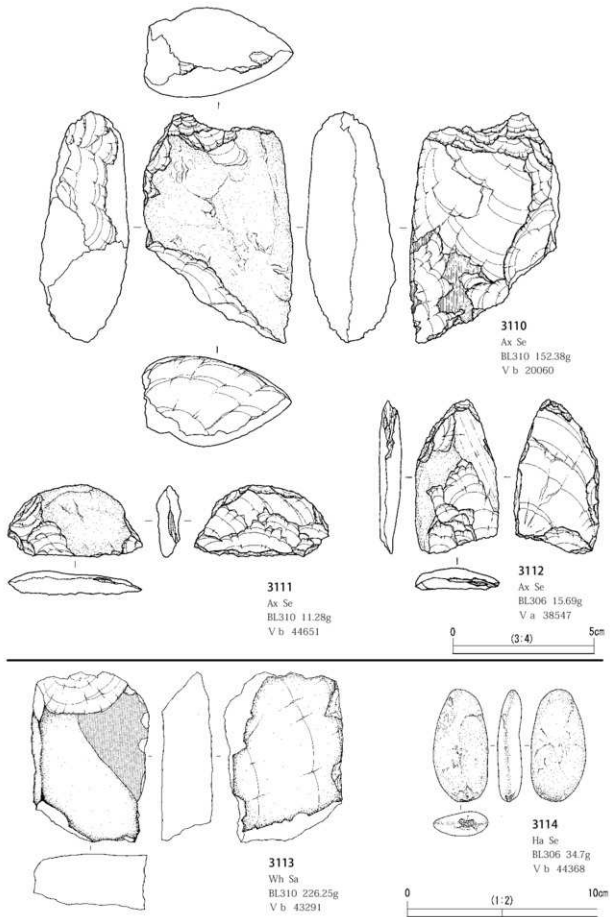
第194図 BP第3地点の石器(石核6)



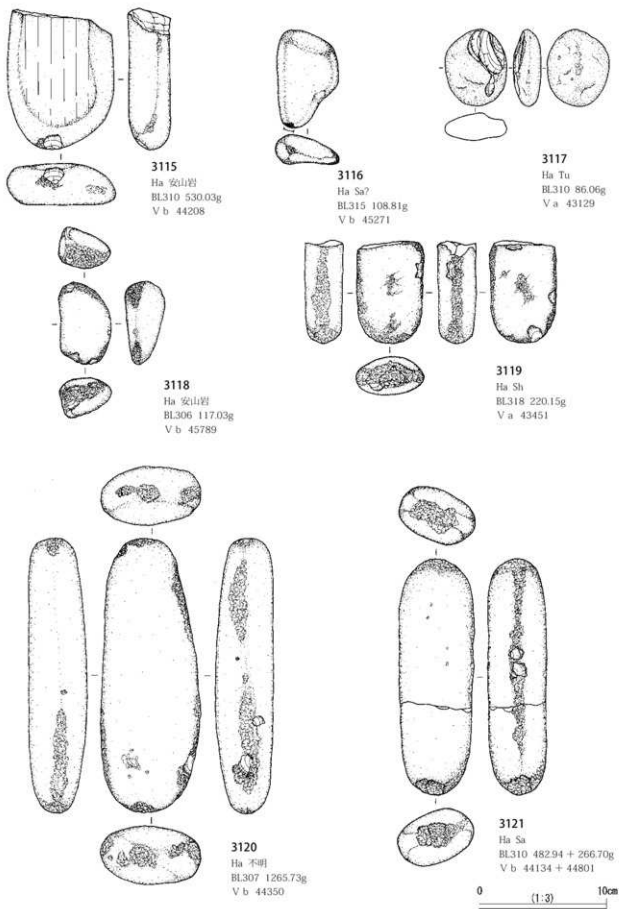
第195図 BP第3地点の石器（斧形石器1）



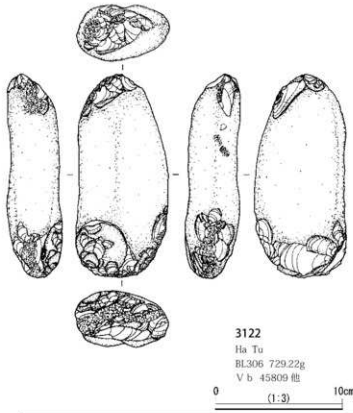
第196図 BP第3地点の石器(斧形石器2)



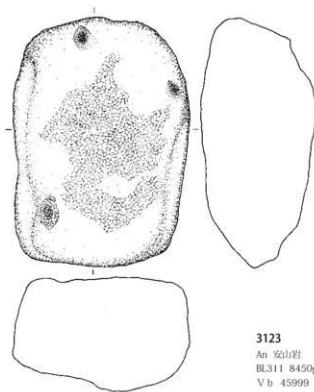
第197図 BP第3地点の石器(斧形石器3・砥石・敲石1)



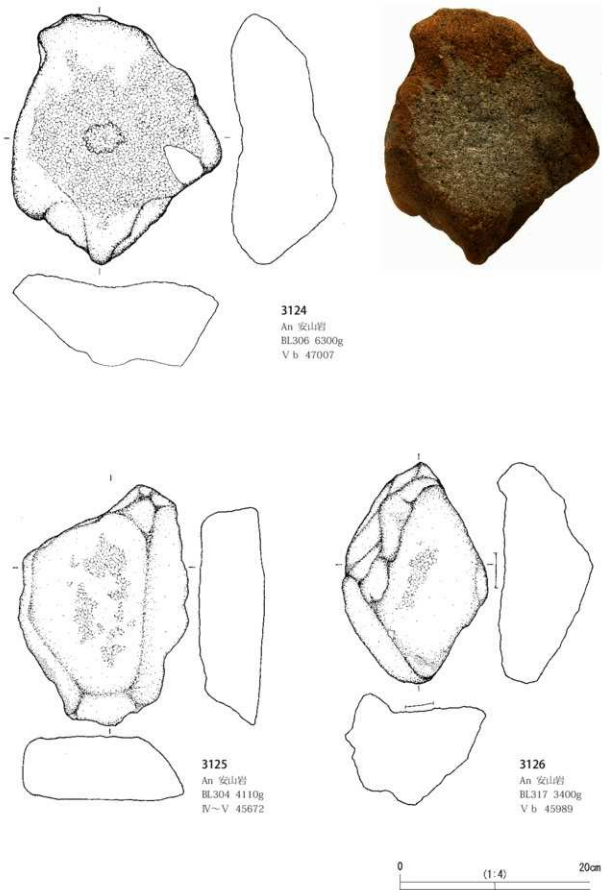
第198図 BP第3地点の石器(燧石2)



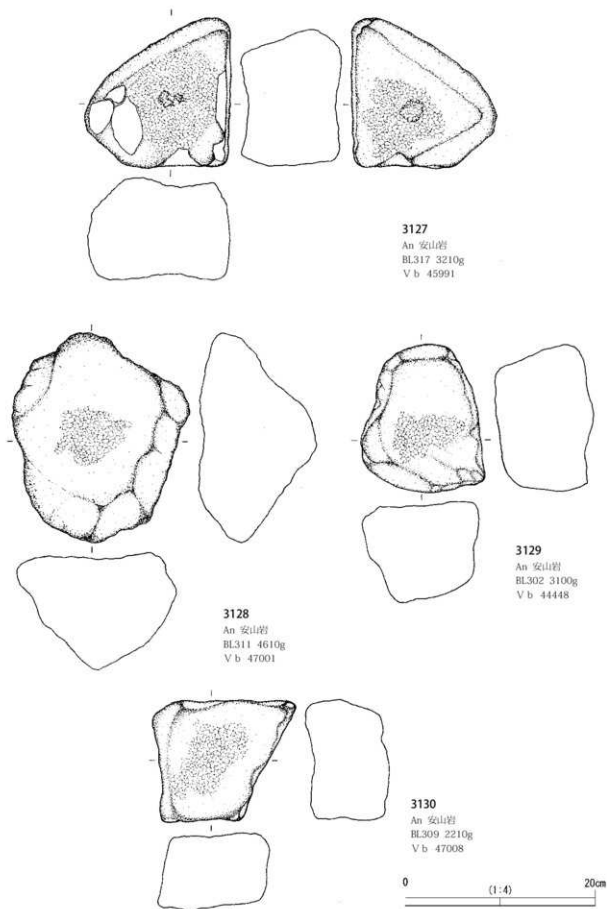
器具名	図番	図名	図種	出土層	出土位置	出土層	出土量	重量
3122	45809	Ha	BL306	2018	2018A	3	113.73	V b
3122	46013	H	BL306	2018	2018A	4	1.4	V b
3122	45407	H	BL310	2018	2018A	2	12.52	V b
3122	44902	G	BL310	2018	2018A	2	0.27	V b
3122	44130	H	BL310	2018	2018A	7	0.47	V b
3122	47138	H	BL310	2018	2018A	1 ~ 4	0.85	V a
43886	G	BL307	2018				0.11	V b
43901	H	BL308	2018				0.6	V b
20643	H	BL306	2018				0.4	D 7
43329	H	BL310	2018				0.59	V a
43272	H	BL310	2018				0.95	V a
38207	H	BL310	2018				0.45	V a



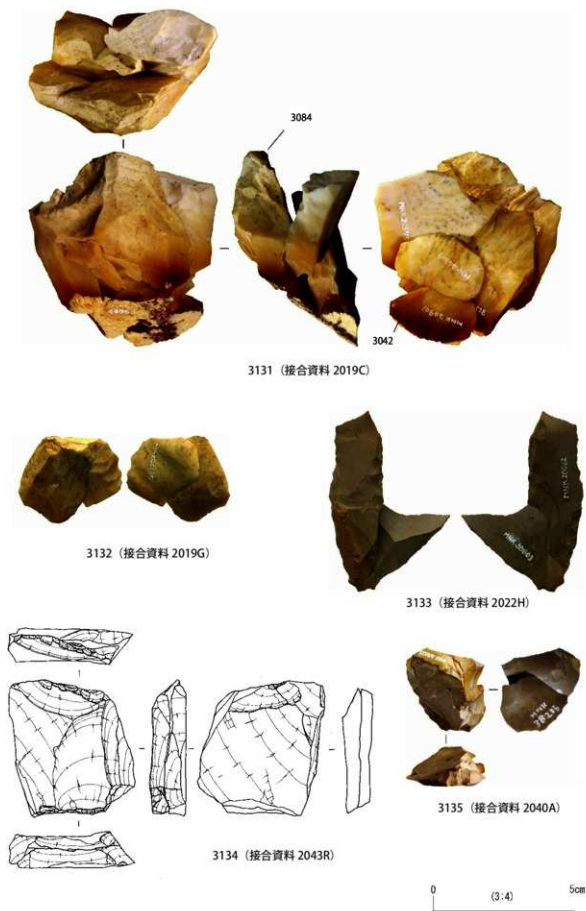
第199図 BP第3地点の石器（敲石3・台石1）



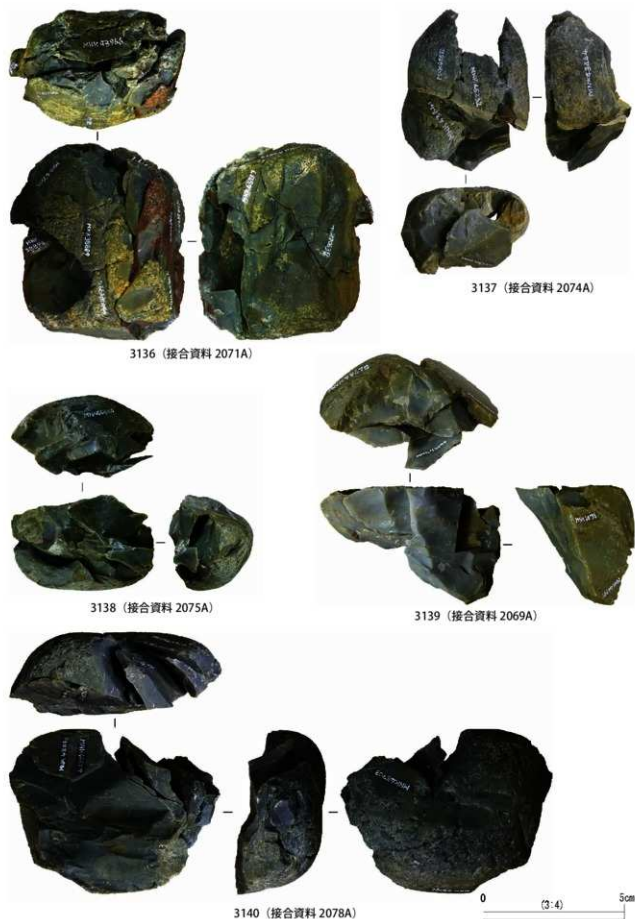
第200図 BP第3地点の石器(台石2)



第201図 BP第3地点の石器(台石3)



第202図 BP第3地点の接合資料1



第203図 BP第3地点の接合資料2



3141 (接合資料 2043C)



3142 (接合資料 2043E)



3143 (接合資料 2048A)



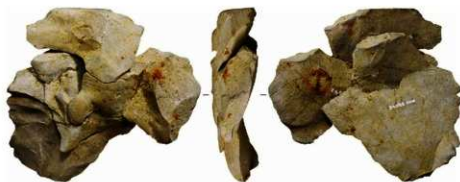
第204図 BP第3地点の接合資料3



3145 (接合資料 2002A)



3146 (接合資料 2002E)



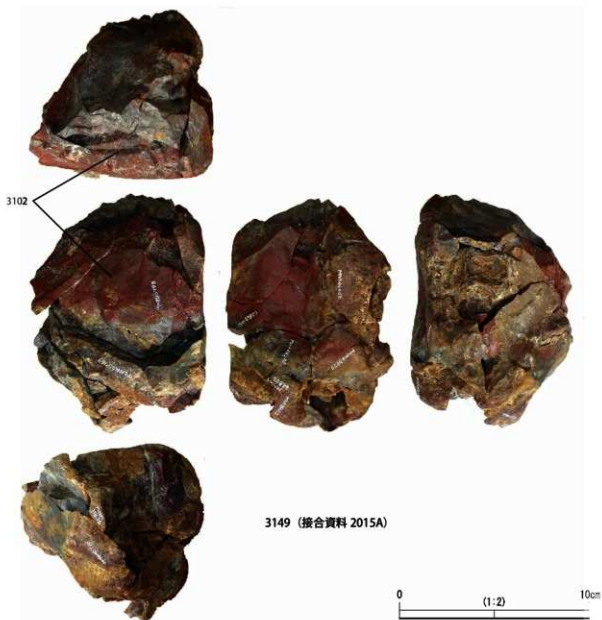
3147 (接合資料 2001C)



第205図 BP第3地点の接合資料4



3148 (接合資料 2001A)

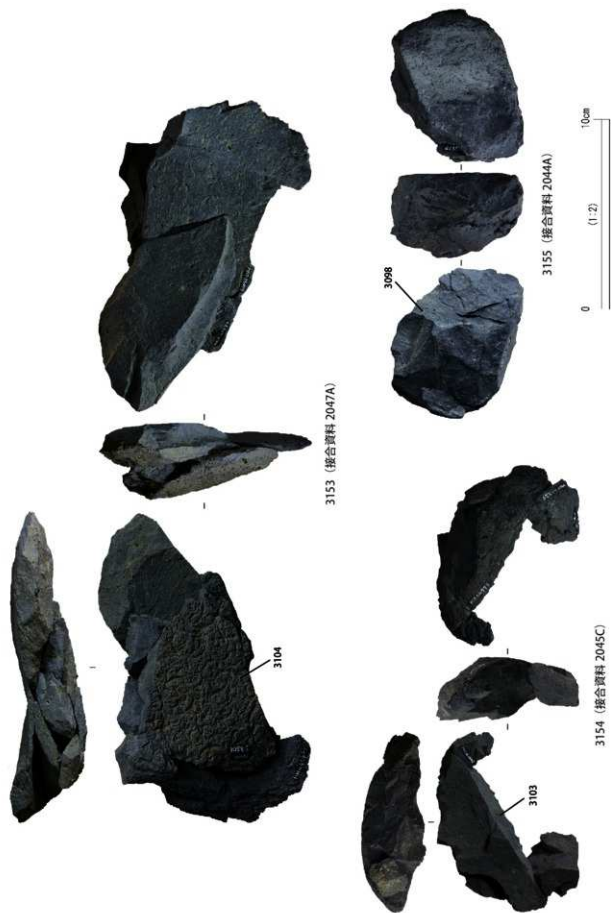


3149 (接合資料 2015A)

第206図 BP第3地点の接合資料5



第207図 BP第3地点の接合資料6



第208図 BP第3地点の接合資料7

第5節 縄文時代の遺構と遺物

1 調査成果の概要

本書では旧石器時代末から縄文時代草創期のいわゆる移行期（谷口2003）を便宜的に縄文時代として報告する。従って、本節に報告する中に土器出現以前の石器が含まれる場合がある。

JS地点・BP第1～第3地点では、縄文時代の遺物は少量で、遺構は礫集中2基と、陥し穴と思われる土坑が28基検出されたのみである。なお、2基の土坑は早期の陥し穴であることが判明した。

発掘調査はⅢ層上面まで重機で掘下げ、1層・Ⅱ層の遺物は各調査区で層位ごとにまとめて取り上げ、Ⅲ層の遺物は出土地点を記録して取り上げた。調査区全体に、Ⅱ層（柏原黒色火山灰層）が薄く、遺物の多くはⅢ層から出土した。

早期・前期の遺物が調査区全域で確認され、草創期の遺物群はJS地点とBP第2地点、後期の遺物はBP第3地点に限られる。中期と晩期の土器は出土しなかった。なお、BP第5地点の水成層で草創期～晩期の遺物群が多量に出土した。詳細は第2分冊に報告する。

2 縄文時代の遺構

土坑28基、炭化物集中1箇所、礫群2箇所を検出した（第209・210図）。JS地点のSK201～204は試掘トレンチ内で確認したが、地中より出水があり、盛土が厚く堆積していたため、プランを確認したのみで調査を断念したものである。また、遺物集中区はSQの遺構記号をつけて記録を行った。BP第1地点では早期後半条痕系土器がまとまり（SQ254）、BP第2地点では草創期爪形文土器（SQ311）がまとまって出土した。

(1) 土坑（第211・212図・第48表）

縄文時代と思われる土坑が28基検出された。時期不明なものも多く、弥生時代以降のものを含んでいる可能性がある。第48表に土坑の属性を示した。土坑は陥し穴と推定され、平面形状と底面の小ピットの有無により、以下の4つのタイプに分類できる。

Aタイプ：長さ1.4～1.9m、幅0.1～0.2mの細長いもの。2112基検出。

Bタイプ：隅丸長方形で、底部に小ピットがあるもの。1基検出。

Cタイプ：円形で、底部に小ピットがあるもの。2基検出。

Dタイプ：円形で、底部に小ピットがないもの。12基検出。



SK338 (Dタイプ)



SK215 (Bタイプ)



SK301 (Aタイプ)

註1 信濃町教育委員会渡辺哲也氏に、同類の土坑が信濃町東裏遺跡・吹野原遺跡（未報告）で検出されていると御教示頂いた。

Aタイプの土坑は、JS地点・BP第1地点・BP第2地点で確認された。BP第2地点では8基の土坑(SK301～304・307・311・314・320)が約73mにわたり直列に配置されている。BP第1地点のSK258はこの延長上に位置しており、関連する土坑であろう。また、JS地点のSK214・216はこれらに並行するように配置されている。いずれも丘陵上の平坦面にある。これらの土坑は出土遺物がなく、時期が断定できない。縄文時代以降のものである可能性もあるが、SK314が平安時代の堅穴住居跡(SB302)の床面に覆われているのが確認されており、平安時代よりは古い遺構であることは確認できた。SK308はこれらの土坑とは性格を異にしている。斜面部にあり、長軸が等高線と並行しており、他のAタイプの土坑に比べ大きい。出土遺物がなく、時期不明である。

Bタイプの土坑はJS地点のSK213・215である。平坦な底面の中央部に直径15cmほどの小ピットが一箇所確認された。いずれも出土遺物がなく、時期は不明である。SK213の覆土中より礫が2点出土した。

Cタイプの土坑はJS地点のSK204のみである。平坦な底面の中央に14×27cmの楕円形のピットがあり、さらにその底面に直径3cmほどの小ピットが2箇所認められた。なお、土坑の周囲は除雪ステーションの施設により破壊されているため、面的な調査は実施しなかった。

Dタイプの土坑は、BP第2地点(SK321・338)とBP第3地点(SK349～357・359)で検出した。SK321とSK338は覆土中に焼土のような赤褐色の層が二枚確認された。この赤褐色の土層はⅡ層の下部に認められる火山灰層と考えられ、縄文時代早期から前期に堆積したことが、貫ノ木遺跡の発掘調査で明らかとなっている(長野県埋蔵文化財センターほか1998)。両土坑の底部より出土した炭化物の炭素14年代測定を実施したところ、第47表の結果を得た。これらの結果からSK321・SK338は縄文時代早期の土坑と判断した。SK321は分割して調査しており、異なる検出面の平面図を合わせたため不整形であるが、本来は円形である。なお、年代測定は株式会社パレオ・ラボを通し核燃料サイクル機構で測定したもので、詳細は添付CDに収録した。

BP第3地点の土坑群はBP第2地点のDタイプに比べ、推定される生活面からの深さが浅い。壁面がオーバーハンクしているものも認められ、形態上も区別されるものがある。SK350ではBP第2地点のDタイプに見られた赤褐色の火山灰層が覆土に確認され、縄文時代早期の可能性がある。他は、縄文早期の土坑と覆土が異なり、出土遺物がなく、時期不明である。

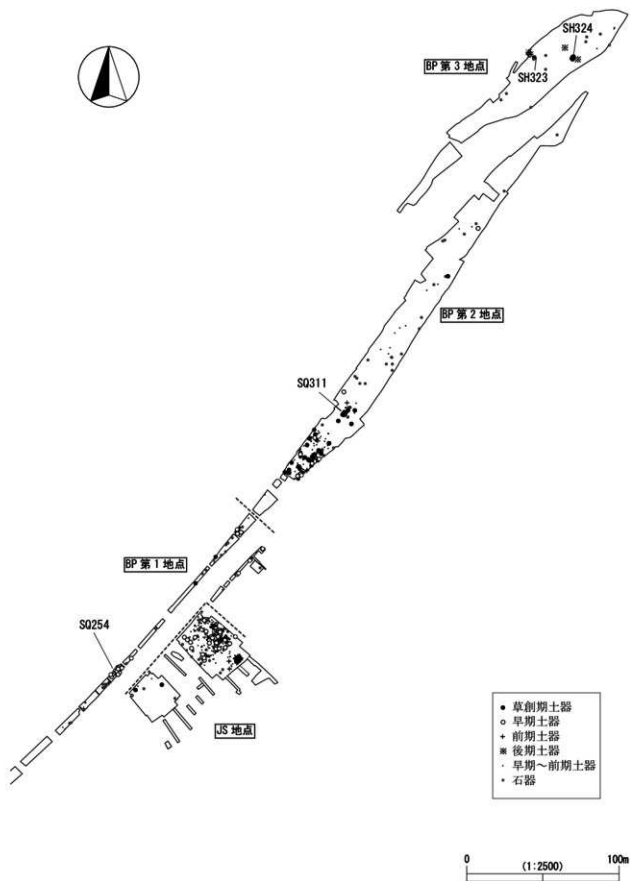
(2) 炭化物集中

JS地点のⅢ層に炭化物粒が集中する範囲(SF201)を確認した。SF201はⅢ層からⅣ層上面にかけて5×4mの範囲に炭化物粒が集中し、特に2.8×1.8mの範囲で密集していた。5mm角以上を基準に120点の炭化物を採取した(第2章第2節第10表参照)。この内33点の樹種同定を行い、32点がコナラ節、1点が広葉樹という結果を得た。樹種同定はバリノ・サーヴェイ株式会社に委託し、分析結果の詳細は添付CDに収録した。

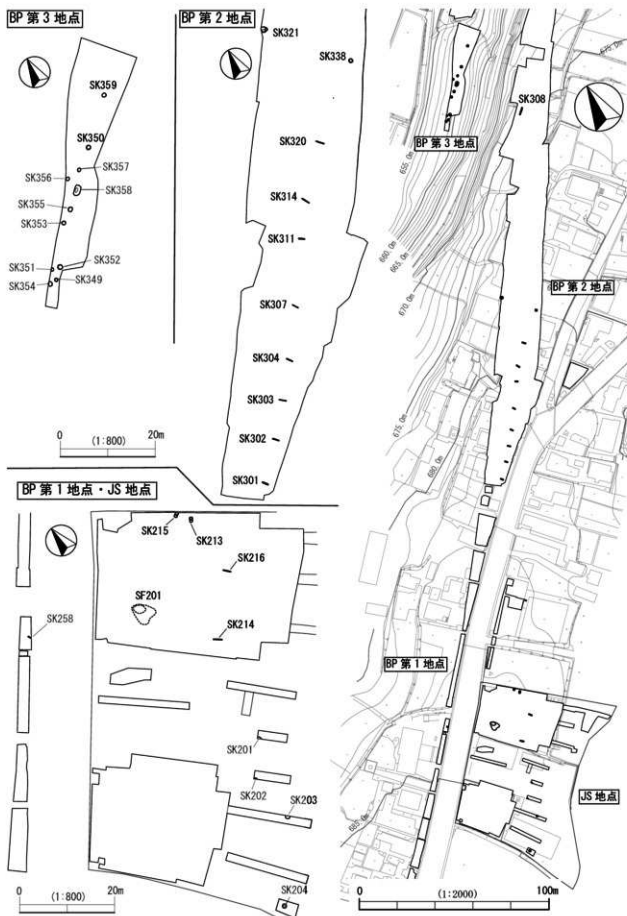
周辺からは、草創期の石器群が出土しており、炭化物の出土層位がⅢ層下部のいわゆる黄モヤ(Ⅲb層)からⅣ層上部であることを考え合わせると、草創期の遺構(炭化物集中)である可能性が高い。

測定番号 (測定法)	試料データ	$\delta^{13}\text{C}_{\text{org}}$ (‰)	^{14}C 年代 ($\text{yrBP} \pm 1\sigma$)	^{14}C 年代を暦年代に較正した年代	
				暦年代較正値	1 σ 暦年代範囲
PLD-1835 (AMS)	炭化材 SK321	-20.9	7,340 \pm 100	cal BC 6,220	cal BC 6,255 - 6,065 (91.8%)
	最下層(3層)			cal BC 6,165	
PLD-1836 (AMS)	炭化材(カエデ属) SK338	-26.3	7,340 \pm 100	cal BC 6,215	cal BC 6,255 - 6,065 (90.3%)
	5層 No.16329			cal BC 6,165	

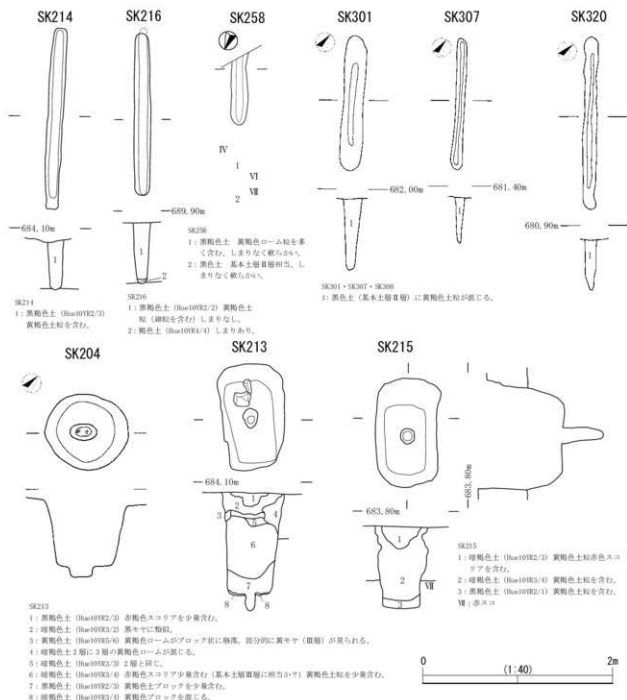
第47表 SK321・338出土炭化物の年代測定



第209図 縄文時代の遺物分布

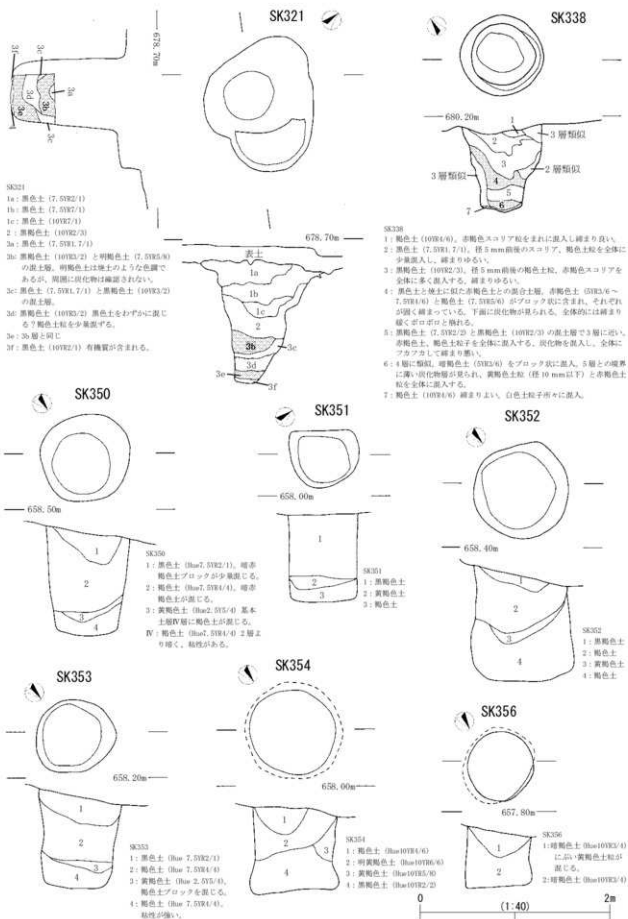


第210図 縄文時代の遺構配置図



第211図 縄文時代の土坑 (A～Cタイプ)

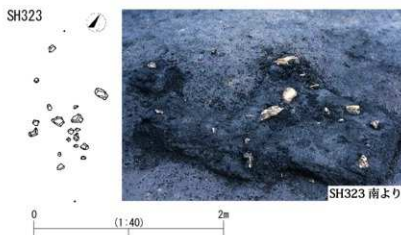
第2章 JS地点・BP第1～第3地点の調査



第212図 縄文時代の土坑 (Dタイプ)

(3) 礫群

BP第3地点で、縄文時代の礫群を2基検出した(第209図)。SH323はⅡ層で検出され、顕著に赤化した礫は2点、わずかに赤化が認められる礫18点が出土した(第213図)。周辺に、後期の土器が数点出土した。SH324はⅢ層で検出され、41点の礫が出土した。Ⅲ層は早期以前の包含層で、周辺に関連する遺物はなく、旧石器時代の礫群の可能性がある。顕著な赤化は認められない。礫群の内容は第2章4節に報告した。



第213図 縄文時代の礫群

遺構名	形状	分類	調査区名	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	立地	出土遺物	時期	備考(覆土地)
SK201	円形	Bタイプ	J5地点	88	80	72	緩斜面	不明	不明	不明
SK202	不明		J5地点	不明	不明	不明	緩斜面	不明	不明	不明
SK203	不明		J5地点	不明	不明	不明	緩斜面	不明	不明	不明
SK204	不明		J5地点	不明	不明	不明	平坦部	なし	縄文時代?	不明
SK213	楕円形	Cタイプ	J5地点	111	66	107	平坦部	礫	縄文時代	提示
SK214	長楕円形	Aタイプ	J5地点	191	16	50	平坦部	なし	縄文時代?	提示
SK215	楕円形	Cタイプ	J5地点	113	62	86	平坦部	なし	縄文時代	提示
SK216	長楕円形	Aタイプ	J5地点	170	17	63	平坦部	なし	縄文時代?	提示
SK258	長楕円形	Aタイプ	BP第1地点	不明	17	72	平坦部	なし	縄文時代?	提示
SK301	長楕円形	Aタイプ	BP第2地点	142	20	76	平坦部	なし	縄文時代?	提示
SK302	長楕円形	Aタイプ	BP第2地点	143	16	62	平坦部	なし	縄文時代?	黒色土(基本土層目録)に黄褐色土粒が混じる単層。
SK303	長楕円形	Aタイプ	BP第2地点	160	10	55	平坦部	なし	縄文時代?	黒色土(基本土層目録)に黄褐色土粒が混じる単層。跡り悪い。
SK304	長楕円形	Aタイプ	BP第2地点	150	13	72	平坦部	なし	縄文時代?	黒色土(基本土層目録)に黄褐色土粒が混じる単層。跡り悪い。
SK307	長楕円形	Aタイプ	BP第2地点	142	10	48	平坦部	なし	縄文時代?	提示
SK308	長楕円形	Aタイプ	BP第2地点	380	20	45	斜面部	なし	縄文時代?	黒色土(基本土層目録)の単層
SK311	長楕円形	Aタイプ	BP第2地点	173	17		平坦部	なし	縄文時代?	
SK314	長楕円形	Aタイプ	BP第2地点	181	16		平坦部	なし	縄文時代?	
SK320	長楕円形	Aタイプ	BP第2地点	182	15	52	平坦部	なし	縄文時代?	提示
SK321	円形	Dタイプ	BP第2地点	84	84	124	平坦部	なし	縄文時代早期	提示。大きさはIV層上面での寸法。
SK338	円形	Dタイプ	BP第2地点	85	85	90	平坦部	炭化物	縄文時代早期	提示。5層上面から直径1.5cmの棒状の炭化物が出土。
SK349	円形	Dタイプ	BP第3地点	75	70	50	緩斜面	なし	縄文時代?	提示
SK350	円形	Dタイプ	BP第3地点	95	95	108	緩斜面	なし	縄文時代?	提示
SK351	円形	Dタイプ	BP第3地点	75	75	80	緩斜面	なし	縄文時代?	提示
SK352	円形	Dタイプ	BP第3地点	100	100	110	緩斜面	なし	縄文時代?	提示
SK353	円形	Dタイプ	BP第3地点	85	78	95	緩斜面	なし	縄文時代?	提示
SK354	円形	Dタイプ	BP第3地点	85	85	85	緩斜面	なし	縄文時代?	提示
SK355	円形	Dタイプ	BP第3地点	90	85	53	緩斜面	なし	縄文時代?	2層に分層。SK356 覆土に類似
SK356	円形	Dタイプ	BP第3地点	80	66	57	緩斜面	なし	縄文時代?	提示
SK357	円形		BP第3地点	80	64	15	緩斜面	獣骨	近世以降	2層に分層
SK358	楕円		BP第3地点	224	126	40	緩斜面	なし	近世以降	2層に分層緩斜面
SK359	円形	Dタイプ	BP第3地点	84	84	68	緩斜面	なし	縄文時代?	不明

第48表 土坑の属性

3 出土遺物

(1) 土器 (第214～217図・第51表)

約900点の土器片が出土した。BP第3地点で出土した数点の後期土器以外は、草創期から前期の土器である。第2分冊で報告するBP第4・第5地点を含めて以下のように土器片を分類した。分類の詳細は第2分冊を参照して頂きたい。

- 第1群土器 隆線文土器
 第2群土器 円孔文・円形押圧文系土器
 第3群土器 無文土器(草創期)
 第4群土器 格子目沈線文土器
 第5群土器 爪形文土器
 第6群土器 多縄文系土器(押圧施文・回転施文)
 第7群土器 表裏縄文土器
 第8群土器 押型文土器
 第9群土器 回転縄文・燃糸文(草創期および早期押型文土器・条痕文系土器に伴うものを含む)
 第10群土器 無文土器(早期～前期)
 第11群土器 沈線文系土器
 第12群土器 条痕文系土器
 第13群土器 繊維を含む縄文施文土器(早期後半～前期)
 第14群土器 8群～13群以外の早期～前期前葉の土器群(網目状燃糸文・刺突文・波状沈線文ほか)
 第15群土器 半截竹管文系土器
 第16群土器 中期の土器群
 第17群土器 後期初頭から前葉の土器群

1～19は草創期の土器群である。1～15は爪形文土器で、1は表裏面に爪形文が施文されている。2・8・12・13・15は胎土と施文原体が類似しており、同一個体と思われる。上部に大きい爪形文が横位に並び、

器種細分	繊維の混入	時期	JS 地点	BP第1 地点	BP第2 地点	BP第3 地点	合計
第3群無文薄手		草創期	1	2	11		14
第5群爪形文		草創期	2	1	31		34
第6群多縄文		草創期			4		4
第9群縄文・面状圧痕		早期～前期	15	1	6		22
第9群燃糸文		早期			3		3
第9群燃糸文		早期		1	2		3
第10群無文	有り	早期～前期	64	6	1		71
第10群無文		～前期	11	9	50	5	75
第11群沈線文系	有り	早期	11	5			16
第12群条痕文系	有り	早期	31	65	2	8	106
第13群扇形縄文	有り	前期	46				46
第13群縄文羽状縄文	有り	前期			5		5
第13群縄文	有り	早期～前期	210	6			216
第13群縄文		早期～前期			28		28
第14群刺突文		早期		2	3		5
第14群波状沈線		前期		2			2
第15群半截竹管文	有り	前期			3		3
第17群後期前葉		(堀ノ内1式)				6	6
小計のため分類不能		不明	174	12	54		240

器種	JS 地点	BP第1 地点	BP第2 地点	BP第3 地点	合計
大須器・有葉大須器	1	1	1	2	5
石鏝	11	5	20	2	38
石鏝未製品	1	1	2		4
石鏝			1		1
半月形石器			2		2
削器	5	1			6
槌形器	1				1
へら状石器	1		1	1	3
へら状石器未製品	2				2
不定加工品			1		1
二次加工のある剥片	1			1	2
石鏝	1			1	2
打製石斧	1		1		2
胎土磨製石斧未製品				1	1
原石			2		2
石棒石			1		1
原石			1		1
磨石	3	4	3	1	11
原石	7	3			10
凹石	15	9	2		26
特殊磨石		1	1		2
打石?	1				1
石核	1			1	2
削片		4			4

第49表 縄文時代土器・石器出土点数

下方は小形の浅い爪形文が縦位もしくはやや斜めに配列する。同様な文様構成は9・10にも認められる。16～19は押圧縄文で、17の口唇部には円形棒状工具の側面による刻みがみられる。

20～57は早期の土器群である。25～27は同一個体で27の矢羽状の沈線の上部にわずかに刺突列が認められる。28～32はいずれも刺突文がみられ、それぞれ工具が異なるが、口唇部の刻みが共通する。32～50は早期後半の土器群で、BP第1地点とJS地点で出土した。特にSQ254とした遺物集中部は直径3mほどの範囲に土器が集中しており、共時性が高いものと判断した(出土地点は第51表参照)。39と40は同一個体と思われ、くびれ部上部は条痕地文に円形棒状工具による刺突列、下部の刺突列の下には浅い縄文が認められ、縄文の上を波状の沈線が走る。縄文地文に沈線は41～43にも認められる。51～57はBP第3地点で出土した絡条帯圧痕文土器で同一個体の可能性が高く、波状を呈する口縁と推定される。

58～76は早期～前期前半の縄文施文の土器群である。58・59・61～64は同一個体で、口縁端部に外そぎ面があり、胴部上半に屈曲する段部を有する器形を示す。65～67は内面に条痕が認められる。

78～86は前期の土器群である。82～86はJS地点で出土した同一個体で、突起状の波状口縁で、口唇部には爪による刺突がみられる。

87・88は後期堀ノ内1式に並行する土器である。

(2) 石器 (第218～220図・第52表)

石核・剥片を除き、122点の石器が出土した。石核・剥片は旧石器時代と区別が困難で、下層に旧石器時代のブロックがある場合はⅡ層・Ⅲ層のものは便宜的に旧石器時代のもので報告している。しかし、土器が出土するⅡ・Ⅲ層に剥片や石核がまとまって出土する例はほとんどなく、縄文時代の石器製作痕跡は顕著ではない。ただし、BP第2地点のBL261・268は剥片の出土点数のピークがⅢ層にあり、縄文時代草創期の石器製作痕跡である可能性がある(第2章3節参照)。これらのブロックの周辺からは草創期の土器群が出土している。また、JS地点で削器・搔削器・ヘラ状石器などが比較的多くまとまって出土しているが、有意な単位を示す出土状況ではない。

石鏃・有茎尖頭器など黒曜石製石器の産地推定分析の結果を第50表に示す。分析は沼津高等専門学校の望月明彦氏に委託し、実施した。分析結果の詳細は添付CDに収録した。実測図を図示できなかった分析資料の一部を写真図版PL33に掲載した。括弧なしの数字が報告番号、括弧付の数字が遺物番号である。

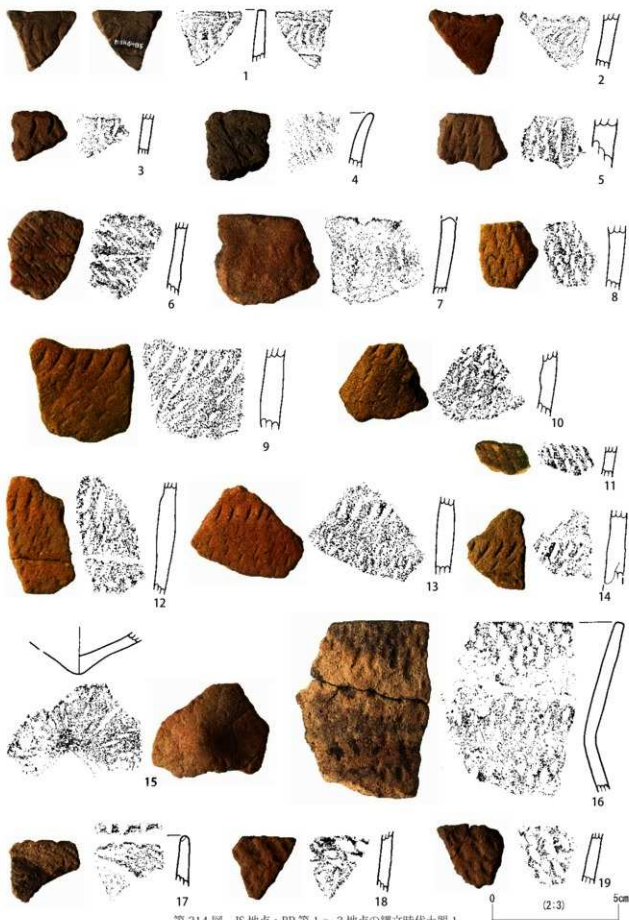
図示できなかった石器の属性は添付CDの遺物観察表を参照していただきたい。

報告番号	地点名	層位	器種	石材	産地推定	遺物番号
	JS地点	Ⅲ	石鏃	Ob	和田礪山群	49548
	JS地点	Ⅲ	石鏃	Ob	諏訪星ヶ台群	14848
90	JS地点	Ⅲ	有茎尖頭器	Ob	諏訪星ヶ台群	14392
	JS地点	Ⅲ	石鏃	Ob	諏訪星ヶ台群	14084
92	JS地点	Ⅲ	石鏃	Ob	諏訪星ヶ台群	51527
95	JS地点	IV上	石鏃	Ob	諏訪星ヶ台群	50039
91	JS地点	Ⅲ	石鏃	Ob	諏訪星ヶ台群	51519
	BP第1地点	Ⅲ	石鏃	Ob	和田土屋磯西群	5048
	BP第1地点	Ⅲ	石鏃	Ob	和田土屋磯西群	5598
	BP第2地点	I	石鏃未製品	Ob	和田土屋磯南群	10835
	BP第2地点	Ⅱ-一括	石鏃?	Ob	和田土屋磯西群	17494
	BP第2地点	I	原石	Ob	和田礪山群	12159
	BP第2地点	Ⅱ	石鏃	Ob	和田礪山群	6753
	BP第2地点	Ⅱ	石鏃	Ob	和田礪山群	2099
	BP第2地点	Ⅱ	石鏃	Ob	和田礪山群	7066
	BP第2地点	Ⅲ	石鏃	Ob	和田礪山群	12049
	BP第2地点	Ⅱ-一括	石鏃	Ob	和田礪山群	12161
	BP第2地点	I	石鏃	Ob	和田礪山群	12795
	BP第2地点	Ⅱ	石鏃	Ob	諏訪星ヶ台群	7200
	BP第2地点	I	不定形石器	Ob	諏訪星ヶ台群	12994
	BP第2地点	Ⅱ	石鏃	Ob	諏訪星ヶ台群	10616
	BP第2地点	Ⅱ	石鏃	Ob	諏訪星ヶ台群	12962
	BP第2地点	I	原石	Ob	諏訪星ヶ台群	12032
	BP第2地点	Ⅲ	石鏃	Ob	諏訪星ヶ台群	6725
	BP第3地点	Ⅱ	石鏃	Ob	諏訪星ヶ台群	20020

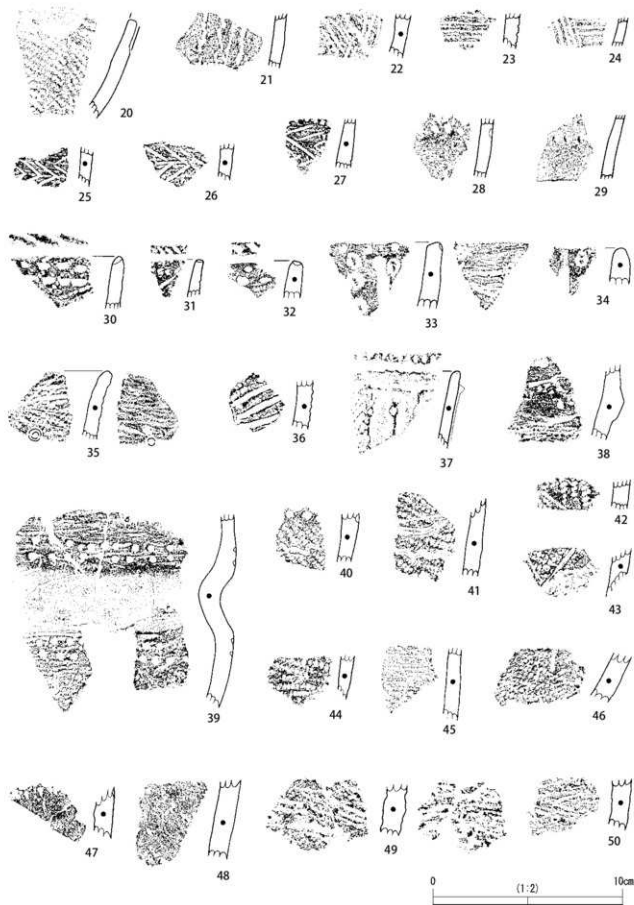
第50表 縄文時代黒曜石石器の産地推定結果

参考文献

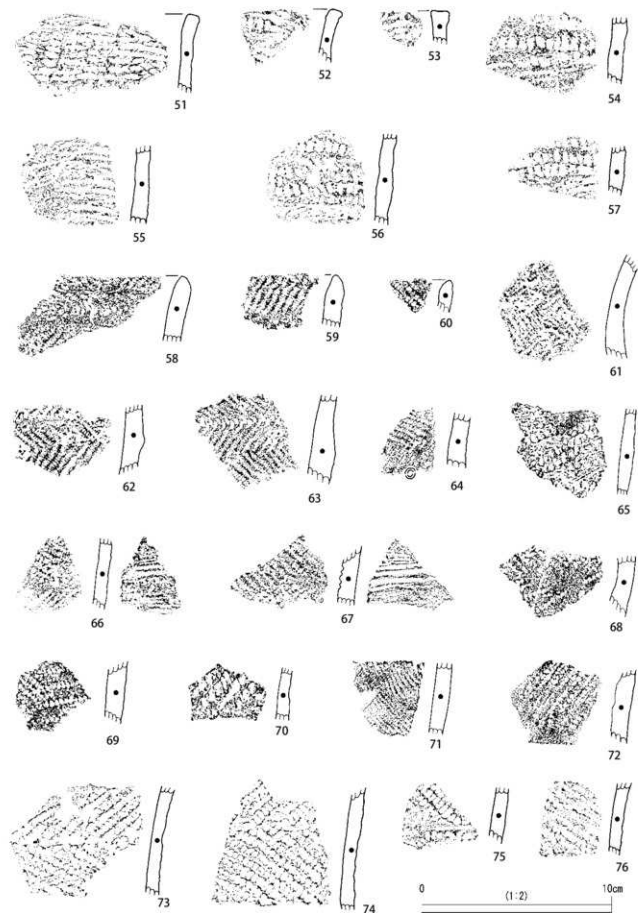
- 谷口康浩 2003 「長者久保・神子柴石器群と細石刃石器群の関係一段階編年論を脱却した移行期研究の現在」『シンポジウム日本の細石刃文化』Ⅱ 八ヶ岳旧石器研究グループ
- 野原埋蔵文化財センターほか 1998 『一般国道18号(野尻バイパス)埋蔵文化財発掘調査報告書 貫ノ木遺跡・西園A遺跡』



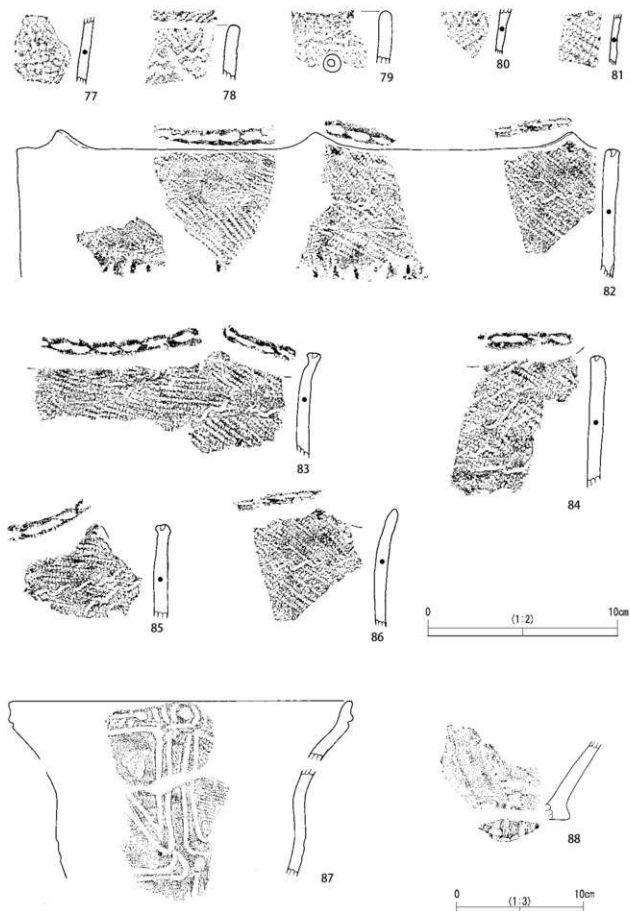
第214図 JS地点・BP第1～3地点の縄文時代土器1



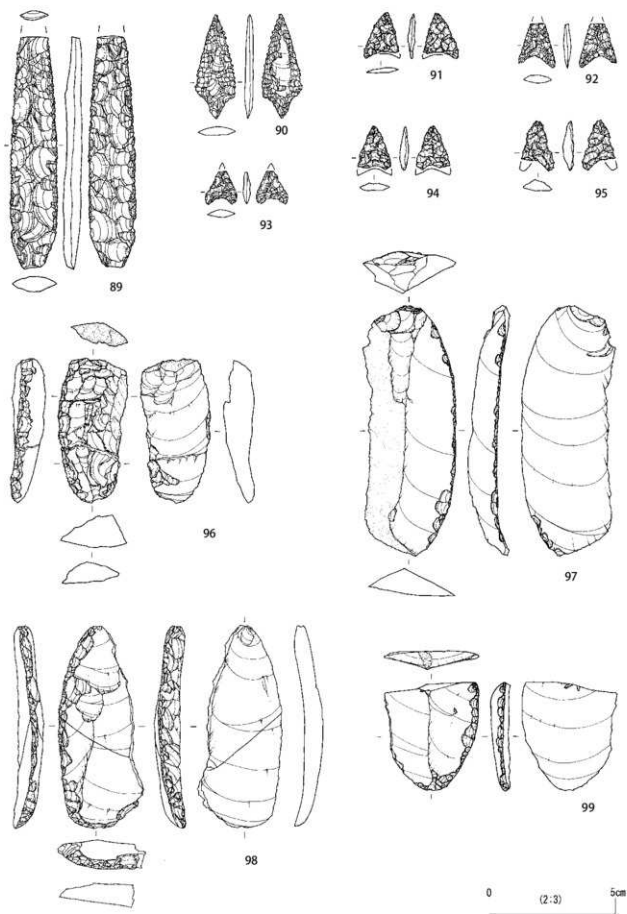
第215図 JS地点・BP第1～3地点の縄文時代土器2



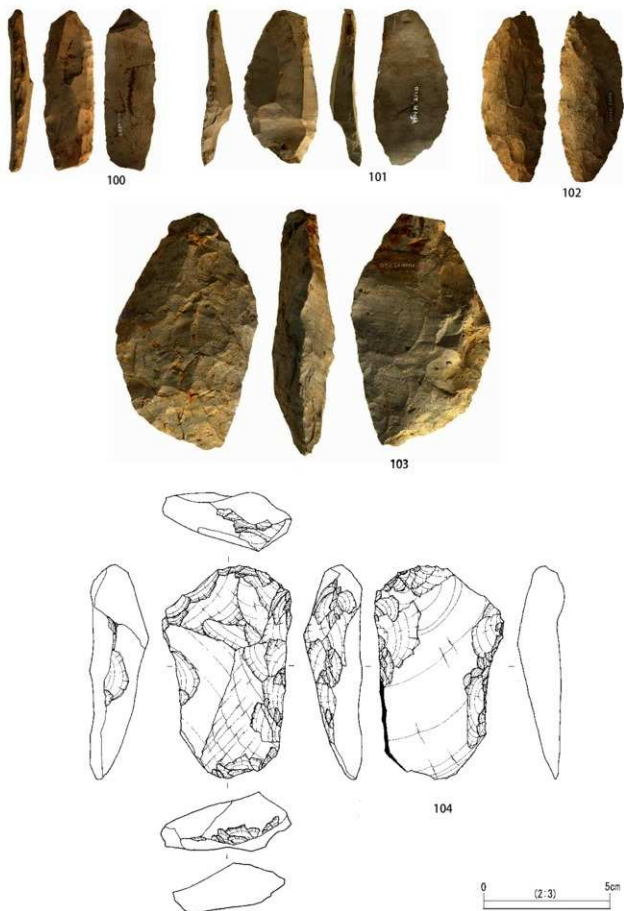
第216図 JS地点・BP第1～3地点の縄文時代土器3



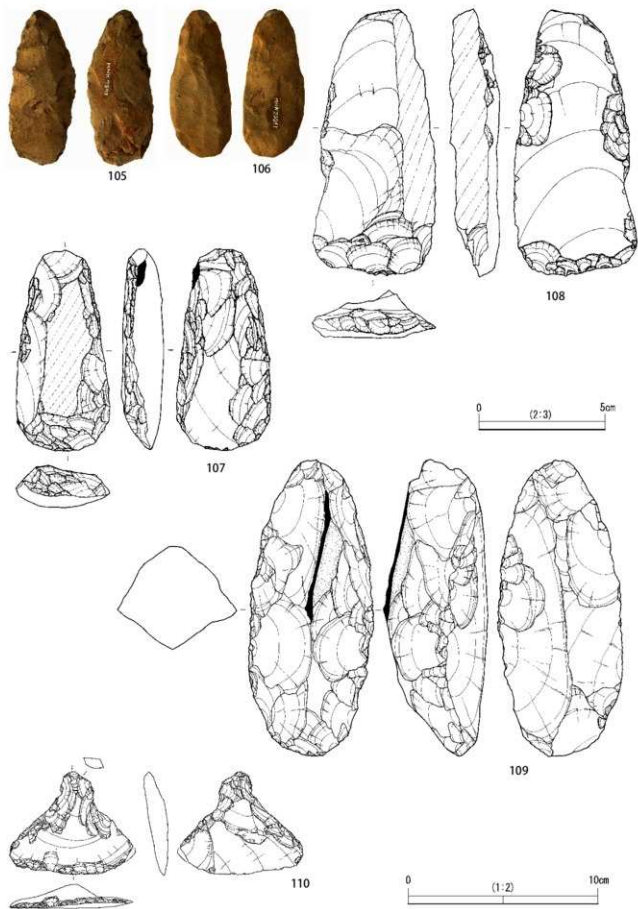
第217図 JS地点・BP第1～3地点の縄文時代土器4



第218図 JS地点・BP第1～3地点の縄文時代石器1



第219図 JS地点・BP第1～3地点の縄文時代石器2



第220図 JS地点・BP第1～3地点の縄文時代石器3

第51表 JS地点・BP第1～第3地点の縄文土器属性表

報告番号	地点名	遺構名	層位	分類	胎文・表面調整・強度	時期	遺物番号
1	BP第2地点		Ⅱ	第5群爪形文		縄文早期	6485
2	BP第2地点		Ⅱ	第5群爪形文		縄文早期	2935
3	BP第2地点		Ⅱ	第5群爪形文		縄文早期	7085
4	BP第2地点		Ⅱ	第5群爪形文		縄文早期	2698
5	BP第2地点		Ⅱ	表土 第5群爪形文		縄文早期	
6	BP第2地点		Ⅱ	縄乱 第5群爪形文		縄文早期	7090
7	BP第1地点		Ⅱ	第5群爪形文?		縄文早期	5800
8	BP第2地点	SQ311	Ⅱ	第5群爪形文		縄文早期	12043
9	BP第2地点	SQ311	Ⅱ	第5群爪形文		縄文早期	16489
10	BP第2地点	SQ311	Ⅱ	第5群爪形文		縄文早期	12048
11	BP第2地点	SQ311	Ⅱ	第5群爪形文		縄文早期	16495
12	BP第2地点	SQ311	Ⅱ	第5群爪形文		縄文早期	12045
13	BP第2地点	SQ311	Ⅱ	第5群爪形文		縄文早期	16631
14	BP第2地点	SQ311	Ⅱ	第5群爪形文		縄文早期	12046
15	BP第2地点		Ⅱ	第5群爪形文		縄文早期	2727
16	BP第2地点		Ⅱ	第6群(押印縄文)		縄文早期	6772
17	BP第2地点		Ⅱ	第6群(押印縄文)		縄文早期	7215
18	BP第2地点		Ⅱ	第6群(押印縄文)		縄文早期	6653
19	BP第2地点		Ⅱ	縄乱 第6群(押印縄文)		縄文早期	7370
20	BP第2地点		Ⅱ	第9群(縄文)		縄文早期～早期	2688
21	BP第2地点		Ⅱ	第9群(標赤文)		縄文早期	7241
22	BP第2地点		Ⅱ	第9群(標赤文)	縄跡を含む	縄文早期	2675
23	BP第1地点		Ⅱ	第11群(縄文)	凹部刻線文	縄文早期前半	5864
24	BP第2地点		Ⅱ	第14群	平嵌竹筒による沈線	縄文早期?	10214
25	JS地点		Ⅱ	第11群(沈線)	縄跡を含む	縄文早期	14840
26	JS地点		Ⅱ	第11群(沈線)	縄跡を含む	縄文早期	14845
27	JS地点		Ⅱ	第11群(沈線)	縄跡を含む	縄文早期	14839
28	BP第2地点		Ⅱ	第14群(刺突文)	縄跡を含む?、縄跡取付の工具による削突	縄文早期	10212
29	BP第2地点		Ⅱ	第14群(刺突文)	縄跡取付の工具による削突	縄文早期	2724
30	JS地点		Ⅱ	第11群(縄文+刺突文)	縄跡を含む?、凹部刻の棒状工具による削突、地文縄文	縄文早期	14821
31	JS地点		Ⅱ	第11群(沈線+刺突文)	凹部刻の棒状工具による削突	縄文早期	14256
32	BP第1地点	SQ254	Ⅱ	第12群(条痕+刺突)	縄跡を含む、凹部棒状工具による削突	縄文早期	5384
33	BP第1地点	SQ254	Ⅱ	第12群条痕文	縄跡を多く含む、骨状工具による凹部削突と凹部条痕	縄文早期	5376
34	BP第1地点	SQ254	Ⅱ	第12群条痕文	縄跡を多く含む、骨状工具による凹部削突と凹部条痕	縄文早期	5375
35	JS地点		Ⅱ	第12群(凹部条痕の縄文)	縄跡を含む、地文縄文+沈線、凹部条痕	縄文早期	14884
36	JS地点		Ⅱ	第12群(縄文+沈線)	縄跡を含む、地文縄文+沈線	縄文早期	14295
37	BP第2地点		Ⅱ	第12群(縄文+沈線)	縄跡を含む	縄文早期後半	12058
38	JS地点		Ⅱ	第12群(縄文+沈線)	縄跡を含む	縄文早期	14346
39	BP第1地点	SQ254	Ⅱ	第12群(縄文+沈線)	縄跡を含む、条痕文+縄文+刺突凹+沈線	縄文早期	5371・5415・5417
40	BP第1地点	SQ254	Ⅱ	第12群(縄文+沈線)	縄跡を含む	縄文早期	5420
41	BP第1地点	SQ254	Ⅱ	第12群(縄文+沈線)	縄跡を含む、地文縄文+沈線	縄文早期	5418
42	JS地点		Ⅱ	第12群(縄文+沈線)	縄跡を含む、地文縄文+沈線	縄文早期～前期	14540
43	JS地点		Ⅱ	第12群(縄文+沈線)	縄跡を含む、地文縄文+沈線	縄文早期	14280
44	BP第1地点	SQ254	Ⅱ	第12群(縄文+沈線)	縄跡を含む、縄文	縄文早期	5574
45	BP第1地点	SQ254	Ⅱ	第12群(縄文+沈線)	縄跡を含む、表面に条痕と縄文短文	縄文早期	5635
46	BP第1地点	SQ254	Ⅱ	第12群(縄文+沈線)	縄跡を含む、縄文	縄文早期	5385
47	BP第1地点	SQ254	Ⅱ	第12群(刺突文)	縄跡を多く含む、凹部端部に刺突凹	縄文早期	5360
48	BP第1地点	SQ254	Ⅱ	第12群(刺突文)	縄跡を多く含む、47と同一個体	縄文早期	5373
49	BP第1地点	SQ254	Ⅱ	第12群条痕文	縄跡を多く含む	縄文早期	5358
50	BP第1地点	SQ254	Ⅱ	第12群条痕文	縄跡を多く含む	縄文早期	5390
51	BP第3地点		Ⅱ	第12群(輪条体(凹文))	縄跡を多く含む	縄文早期	
52	BP第3地点		Ⅱ	第12群(輪条体(凹文))	縄跡を多く含む	縄文早期	
53	BP第3地点		Ⅱ	第12群(輪条体(凹文))	縄跡を多く含む	縄文早期	
54	BP第3地点		Ⅱ	第12群(輪条体(凹文))	縄跡を多く含む	縄文早期	
55	BP第3地点		Ⅱ	第12群(輪条体(凹文))	縄跡を多く含む	縄文早期	
56	BP第3地点		Ⅱ	第12群(輪条体(凹文))	縄跡を多く含む	縄文早期	
57	BP第3地点		Ⅱ	第12群(輪条体(凹文))	縄跡を多く含む	縄文早期	

第2章 JS地点・BP第1～第3地点の調査

報告番号	地点名	遺構名	層位	分類	論文・器量調査・出土	時期	遺物番号
58	JS地点	Ⅲ・Ⅳ	Ⅲ	第13群縄文を含む縄文	縄文を含む。羽状縄文。長石・石英などの白色片石	縄文早期～前期	14320・14323
59	JS地点	Ⅲ	Ⅲ	第13群縄文を含む縄文	が多く含まれる。	縄文早期～前期	14813
60	JS地点	Ⅲ	Ⅲ	第13群縄文を含む縄文	縄文を含む。	縄文早期～前期	51528
61	JS地点	Ⅲ	Ⅲ	第13群縄文を含む縄文	縄文を含む。羽状縄文。長石・石英などの白色片石	縄文早期～前期	14400
62	JS地点	Ⅲ	Ⅲ	第13群縄文を含む縄文	縄文を含む。羽状縄文。長石・石英などの白色片石	縄文早期～前期	14322
63	JS地点	Ⅲ	Ⅲ	第13群縄文を含む縄文	が多く含まれる。	縄文早期～前期	14862
64	JS地点	Ⅲ	Ⅲ	第13群縄文を含む縄文	縄文を含む。焼成残の種籾孔。	縄文早期～前期	14534
65	JS地点	Ⅲ	Ⅲ	第12群内面塗布の縄文	縄文を含む。内面塗布。	縄文早期	51595
66	JS地点	Ⅲ	Ⅲ	第12群内面塗布の縄文	縄文を含む。内面塗布。	縄文早期	51530
67	JS地点	Ⅲ	Ⅲ	第12群内面塗布の縄文	縄文を含む。内面塗布。	縄文早期	51589
68	JS地点	Ⅲ	Ⅲ	第13群縄文を含む縄文	縄文を含む。	縄文早期～前期	51542
69	JS地点	Ⅲ	Ⅲ	第13群縄文を含む縄文	縄文を含む。	縄文早期～前期	49189
70	JS地点	Ⅲ	Ⅲ	第13群縄文を含む縄文	縄文を含む。	縄文早期～前期	51664
71	JS地点	Ⅲ	Ⅲ	第13群縄文を含む縄文	縄文を含む。	縄文早期～前期	49201
72	JS地点	Ⅲ	Ⅲ	第13群縄文を含む縄文	縄文を含む。	縄文早期～前期	49150
73	BP第2地点	Ⅲ	Ⅲ	第13群縄文（羽状縄文）	縄文を含む。	縄文前期	2665
74	BP第2地点	Ⅲ	Ⅲ	第13群縄文（羽状縄文）	縄文を含む。	縄文前期	2666
75	BP第2地点	Ⅲ	Ⅲ	第13群縄文（羽状縄文）	縄文を含む。	縄文前期	2663
76	BP第2地点	Ⅲ	Ⅲ	第13群縄文	縄文を含む。	縄文早期後半～前期	7798
77	BP第2地点	Ⅲ	Ⅲ	第13群縄文	縄文を含む。	縄文早期後半～前期	7107
78	BP第1地点	Ⅲ	Ⅲ	第14群波状沈砂	縄文を含む？。口唇部に縄文。波状沈砂	縄文前期	5740
79	BP第1地点	Ⅲ	Ⅲ	第14群波状沈砂	縄文を含む？。内面塗布。口唇に刺突列と波状沈砂	縄文前期	5180
80	BP第2地点	Ⅲ	Ⅲ	第15群コンパス文	縄文を含む。縄文+コンパス文。	縄文前期	2709
81	BP第2地点	Ⅲ	Ⅲ	第15群コンパス文	縄文を含む。縄文+コンパス文。	縄文前期	2708
82	JS地点	Ⅲ	Ⅲ	第13群縄文	縄文を多く含む。	縄文前期	51657・51659・53312
83	JS地点	Ⅲ	Ⅲ	第13群縄文	縄文を多く含む。	縄文前期	51678・52399・52900
84	JS地点	Ⅲ	Ⅲ	第13群縄文	縄文を多く含む。	縄文前期	55275
85	JS地点	Ⅲ	Ⅲ	第13群縄文	縄文を多く含む。	縄文前期	51674
86	JS地点	Ⅲ	Ⅲ	第13群縄文	縄文を多く含む。	縄文前期	51658
87	BP第3地点	Ⅲ	Ⅲ	第17群（堀之内1式）		縄文後期	
88	BP第3地点	Ⅲ	Ⅲ	第17群無文		縄文後期	38350

第52表 JS地点・BP第1～第3地点の縄文時代石器属性表

報告番号	地点名	層位	器種	石材	厚さ(mm)	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)	遺物番号
89	BP第3地点	Ⅲ上	玉環器	TS	—	18.2	6.9	12.46	20003	
90	JS地点	Ⅲa層	有茎大玉環器	Ob	諏訪屋ヶ台群	40.7	15.9	4	2	14392
91	JS地点	Ⅲa層	石鏃	Ob	諏訪屋ヶ台群	—	—	2.8	0.47	51519
92	JS地点	Ⅲa層	石鏃	Ob	諏訪屋ヶ台群	—	14.1	3.6	0.6	51527
93	JS地点	Ⅲb層	石鏃	ST	—	12.1	2.9	0.25	14910	
94	JS地点	Ⅲb層	石鏃	不明	—	—	3.2	0.66	49496	
95	JS地点	Ⅲ層上	石鏃	Ob	諏訪屋ヶ台群	—	—	4.8	0.77	50030
96	JS地点	Ⅲa層	削器	Ch	57.4	26.7	14.1	23.19	14405	
97	JS地点	Ⅲb層下部	削器	SS	98.9	34.5	10.4	38.9	14583	
98	JS地点	Ⅲb層-Ⅲ層上	種削器	SS	80.2	31.5	8.7	26.15	49630	
99	JS地点	Ⅲa層	削器	SS	99.6	37.4	9.6	11.64	14604	
100	JS地点	Ⅲ	削器	SS	64	20.3	8.8	12.09	49815	
101	BP第2地点	Ⅲ層	削器	SS	61.2	29.4	10	16.54	2110	
102	BP第2地点	Ⅲ層	半月形石部	Tu?	67.1	25.8	13.5	22.95	2966	
103	BP第2地点	Ⅲ層	半月形石部	ST	92.9	53.7	22.2	101.75	15220	
104	JS地点	Ⅲ	へう状石部未製品?	Tu	83.5	51	17.9	79.38	51588	
105	BP第2地点	Ⅲ	へう状石部	Tu?	61.5	25.1	13.5	18.92	7377	
106	BP第3地点	Ⅲ層	へう状石部	TS	58.4	24.5	10.1	16.11	20041	
107	JS地点	Ⅲ層	へう状石部	Tu	78.5	37	16.7	51.47	14764	
108	JS地点	Ⅲa層	へう状石部未製品?	Tu	105.2	46	17.9	93.47	14660	
109	BP第3地点	Ⅲ層	短部磨製石部未製品?	An	150.4	57	51.1	512.05	20849	
110	JS地点	Ⅲb層	石鏃	SS	54.3	64.2	9.4	24.12	49447	

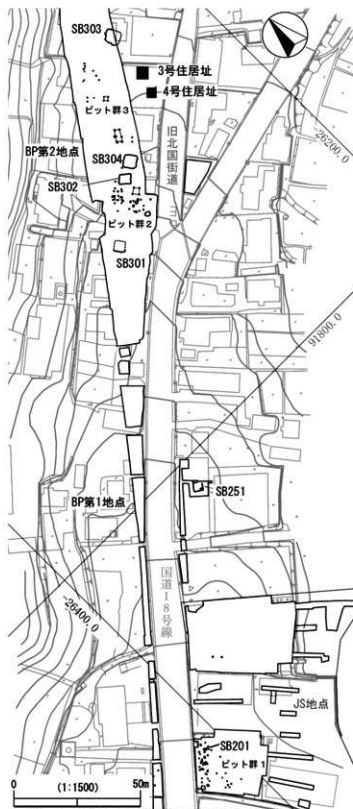
第6節 奈良・平安時代の遺構と遺物

1 調査成果の概要

JS地点、BP第1～第3地点では竪穴住居跡6棟、掘立柱建物跡を含むピット群が3箇所検出された(第221～223図)。これらのピット群の時期は明確ではなく、中世以降の遺構も含まれる可能性があるが、竪穴住居跡に隣接して検出されたことから、本節で取り上げる。ただし、一部のピット群については、第7節でも重複して報告している。

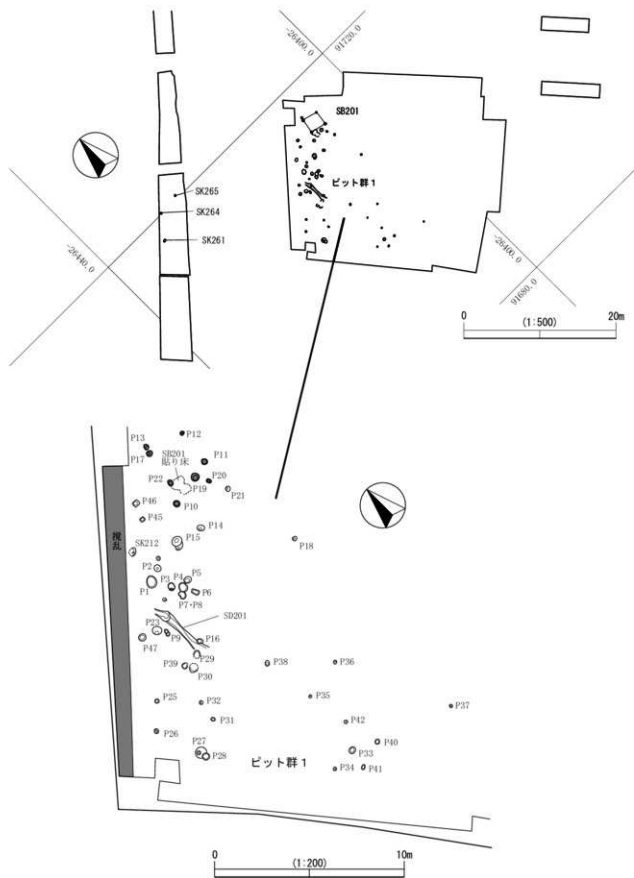
JS地点で確認されたSB201は焼土と柱穴が確認されたのみで、遺構に伴う遺物は出土していないため、時期が明確でない。その他の竪穴住居跡は2時期に分けられる。SB251・SB301・SB302・SB304は遺物の器種組成が類似しており、ほぼ同時期のものと想定される。また、SB303では複数の灰軸陶器と緑軸陶器の小破片が出土しており、前者より後出の遺構である。BP第2地点のST303・ST304など掘立柱建物跡は、主軸方向をみると、竪穴住居跡との関連は薄いと考えられる。これに対しSB302の南西側のピット群1は、竪穴住居跡と関連した同時期の掘立柱建物などの構造物が想定される。

今回確認された竪穴住居跡は、善光寺平の現在の年代観では9世紀から10世紀前半の年代が与えられる^(註1)。なお、BP第2地点に隣接したところで、信濃町教育委員会による発掘調査が行われており、平安時代の竪穴住居跡が2棟発見されている^(註2)。3号住居址、4号住居址とされるものであり、今回発見された竪穴住居跡との関係が注意される。また、第2分冊で報告するBP

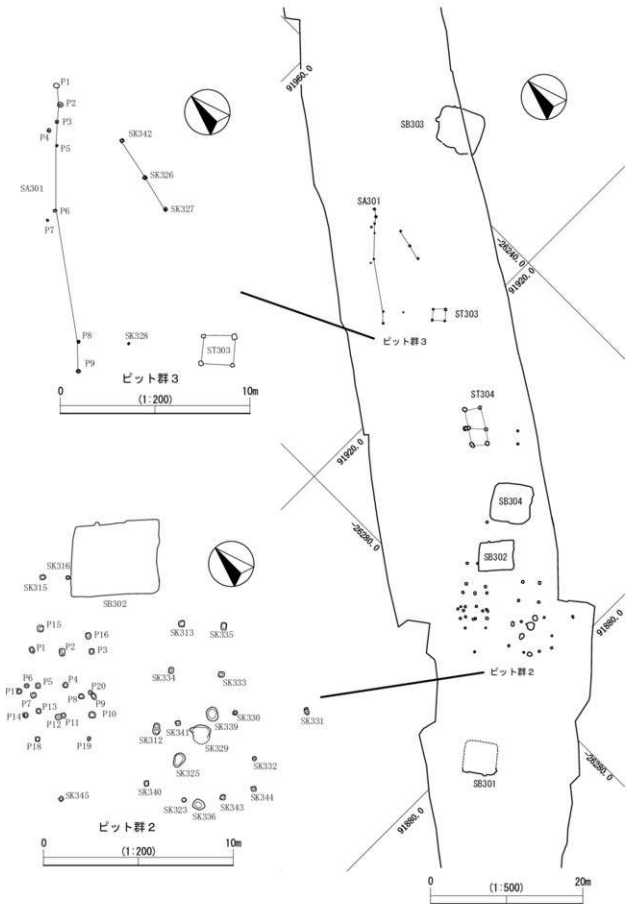


第221図 古代の遺構配置図(1:1500)

註1 長野県埋蔵文化財センター 2000『上位越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書 28 更埴桑里遺跡・屋代遺跡群 一総論編一』
長野県埋蔵文化財センター 2000『上位越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書 6 松原遺跡 古代・中世』
註2 中村由克 2000『信濃町仲町遺跡(塚本氏住宅地点)の調査』第12回長野県研究石器文化研究交流会 一発表資料一



第222図 JS地点・BP第1地点古代の遺構配置図



第223図 BP第2地点古代の遺構配置図

第5d地点より、7世紀から8世紀代の須恵器や木製品が出土しており、少なくとも奈良時代前半には野尻湖畔に集落があった可能性が非常に高い。仲町遺跡は隣接する川久保遺跡とあわせて、信濃町内では希少な奈良時代の遺跡となる。今後奈良時代の住居跡が確認されることが期待される。

なお、仲町遺跡周辺は延喜式に記載されている沼辺駅の推定地とされている。竪穴住居跡群の多くは9世紀代のもと考えられることから、東山道支道に設置された沼辺駅と何らかの関わりがある可能性が指摘できるが、今回の発掘調査では、東山道または駅関連の遺構は確認することができなかった。

2 遺構と遺物

出土遺物の大半は遺構内より出土しており、遺構外の遺物はわずかである。以下に報告する器種分類およびその名称は更埴条里遺跡・屋代遺跡群の報告^(註3)に従った。また、図示していない竪穴住居跡出土遺物については、第54表に口縁部破片数とその重量を示した。

(1) 竪穴住居跡

SB201 (JS地点)

Ⅲ層で検出された遺構であるが、表土下がすぐ検出面で、貼り床と柱穴のみが確認された。貼り床と思われる硬い平坦面と人頭大の礫1点と拳大の礫3点が検出され、その周辺に柱穴と思われるピットがみられたため、竪穴住居跡と判断した。SB201の南西側にはピット群1が近接しており、これらのピットとSB201のピットが明確に分離できたわけではないが、貼り床周辺ピットをSB201の関連施設としてここで報告する。従って、竪穴住居跡の主軸は想定したものと異なる可能性がある。さらに、カマドの焼土が確認されていないことから、竪穴住居の柱穴としたものは南西側に広がるピット群1にかかわる遺構であり、貼り床と認識したものは道路状遺構^(註4)の硬化面である可能性も否定できない。

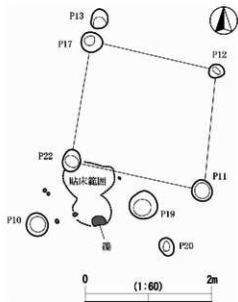
遺構の構造：掘り込みは確認されず、配置関係からP11、P12、P17、P22を柱穴と想定した。これらに隣接するピットも関連する施設の可能性がある、合わせて報告する。ピットは円形または楕円形をしており、P11は28×30cm、深さ38cm。P12は22×22cm、深さ18cm。P17は28×32cm、深さ32cm。P22は28×34cm、深さ32cm。P19は40×40cm、深さ8cm。P10は30×32cm、深さ22cm。P20は22×28cm、深さ12cm。P13は26×30cm、深さ30cmである。覆土はP19が黒褐色土、その他は黒色土で、いずれも黄褐色土のブロックを含む。

出土遺物：礫の近くより鉄滓の小片が出土した。その他に、遺構に伴う遺物はない。

遺構の時期：時期不明。

SB251 (BP第1地点)

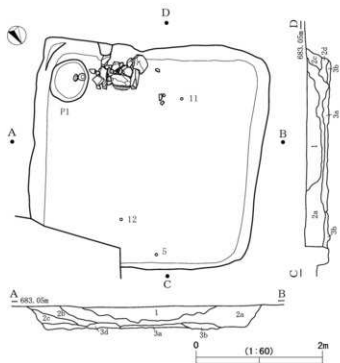
Ⅲ層中で検出した。住居跡は信濃町教育委員会によるセブンイレブン建築に伴う発掘調査範囲(セブンイレブン地点)であったが、下層の旧石器時代のブロックが両調査区にわたっているため、住居跡部分の



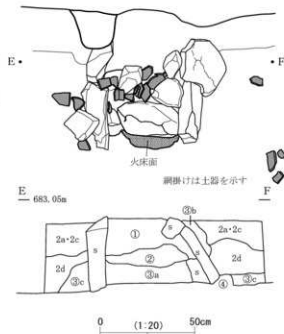
第224図 SB201遺構図

註3 長野県埋蔵文化財センター 2000「上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書 28 更埴条里遺跡・屋代遺跡群一総論編一」長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 54

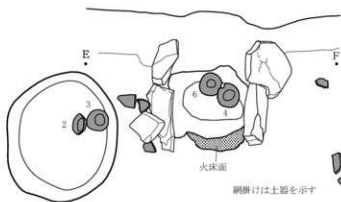
註4 国道18号に平行して複数の道路状遺構が確認された。これらの遺構は、中世以降のものであり、詳細は第2章7節に記述した。



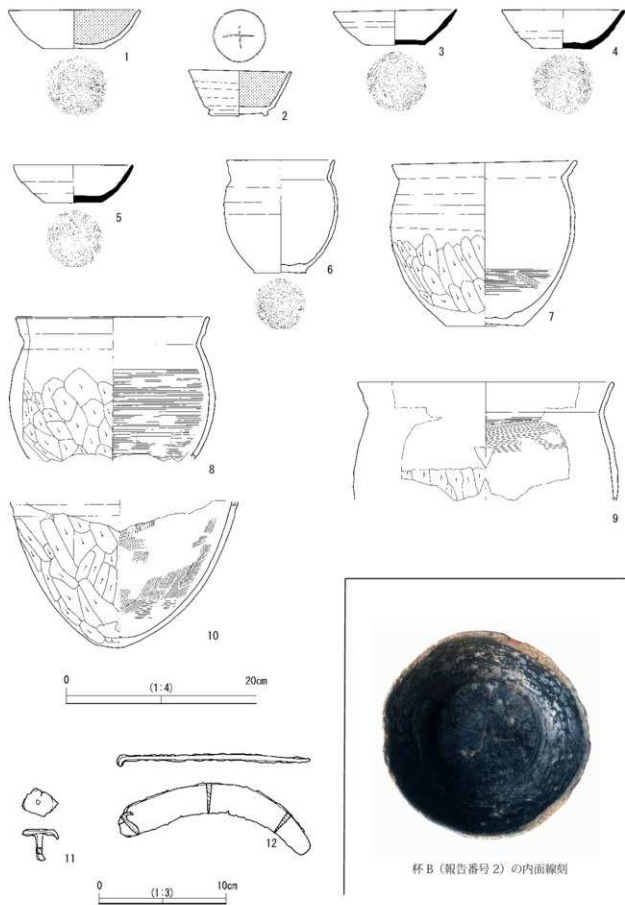
- 1層: (SYR1.7/1) 黒色土、赤色・黄色土粒をわずかに含む。
 2a層: (10YR3/2) 黒褐色土、黄褐色土粒を多く含む。
 2b層: (10YR3/3) 暗褐色土、黄褐色土粒を2a層より多く含む。
 2c層: (10YR3/2) 黒褐色土、黄褐色土がブロック状に混じる。
 2d層: (10YR3/2) 黒褐色土、黄褐色土粒が含まれ、2a層より明るい。
 3a層: (10YR4/4) 褐色土、しまり良く、黄褐色土が混じる。
 3b層: (10YR4/3) に近い黄褐色土、2d層に黄褐色土ブロックが混じる。



- ①層: 黒褐色土、2a層に比べ黄褐色土粒を多く含む。
 ②層: 黒褐色土、黄褐色土粒、焼土粒を多く含む。
 ③a層: 黄褐色土、焼土ブロック、黄褐色土ブロックを多く含む。
 ③b層: 暗褐色土、黄褐色土粒を含む。
 ③c層: 黄褐色土と暗褐色土の混土层。
 ④層: 黄褐色土、基本土層IV層に暗褐色土がわずかに混じる。



第225図 SB251遺構図



第226図 SB251 出土遺物

調査区を当センターで担当することとした。トレンチ部分で遺構の一部が確認されたため、調査区を拡張し、本住居跡を調査した。なお、本住居跡床面（基本土層IV層）より旧石器時代の礫群が検出されたが、拡張部分は住居跡の調査終了後に埋め戻し、IV層以下の旧石器時代の調査は行っていない。

遺構の構造：主軸方向はS 40° Wで、3.66 × 3.52 mの方形を呈する。北東隅が試掘トレンチにより削られている。検出面から床面までの深さは最大で35 cmである。石組みのカマドが南西壁の中央よりやや南角に寄った所に検出された。袖石に架けられていたと考えられる大形の石などが土師器と共にカマド内に落ち込んでいる。側面の心材はやや傾いているものの、概ね当時の状況を残している。カマド内に落ち込んだ石を取り除くと、杯と小甕が伏せて置かれ、燃焼部には深さ10 cmほどの浅いピットが掘られており、硬化した火床面の大部分は失われていた。ピット内の覆土の状況は残念ながら観察できなかった。カマドの左隣に深さ5～10 cmほどの楕円形（60 × 68 cm）のピット（P1）が検出され、ピットに落ち込むように2個体の杯が出土した。床は顕著な硬化面は確認されず、柱穴などのピットは確認できなかった。

覆土は大きく1～3層に分層される。壁際ではいわゆる三角堆積（2b・2c層）がみられ、黄褐色土の混入状態により分層した。3層群は貼床のようにも見えるが、3層中から大形の土師器片が出土しており、3層群下面が床面である可能性がある。

遺物出土状況：カマド内とカマド周辺に遺物が集中する。カマド内には、落ち込んだ礫と共に、甕・杯（1・7・8・9）の破片が出土し、その下に完形の杯（4）と口縁を欠いた小甕（6）が伏せて出土しており、それぞれの内部には焼土が詰まっていた。7・9はカマド周辺部にも破片がみられる。ピット（P1）より出土した杯（2）には、「十」の記号が刻まれている。10は床面より出土している。また、床面よりやや浮いて、2点の鉄製品（11・12）が出土した。覆土の遺物は、1層では少なく、2層以下に出土する。北西壁際の2層堆積中に廃棄されたような状況で土師器片がまとまって出土していた。

出土遺物：1・2は黒色土師器杯、3～5は須恵器杯、5～10は土師器甕、11・12は鉄製品である。

1は口径14.0 cm、底径6.5 cm、器高4.1 cm、底部回転糸切りである。2は口径10.7 cm、底径7.5 cm、器高4.8 cmで、底部内面に焼成後の線刻がみられる。底部は回転ヘラ削りがみられる。3～5はいずれも底部回転糸切りで、口径が13.0～13.1 cm、底径が6.2～6.5 cm、器高が3.6～4.0 cmと均質な法量を示す。色調は灰白色から褐色をしておりやや軟質な感じを受ける。6は底部回転糸切りで、胴部の厚さ3 mm程度で非常に薄い。7は底部から胴部下半にかけてヘラ削り、内面にはハケ調整がみられ、内外面に黒色の付着物が部分的に認められる。これに対し、8～10の甕には黒色付着物はない。9は胴部上半のロク口整形痕がわずかに確認され、下半部は外面ヘラ削り、内面ハケ調整で、3～4 cm程度の底面が作り出されている。11は紡錘車の欠損品が変形したものと考えられる。12は鉄鎌で全長15.3 cm、刃部の幅2.4 cmである。

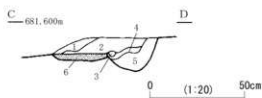
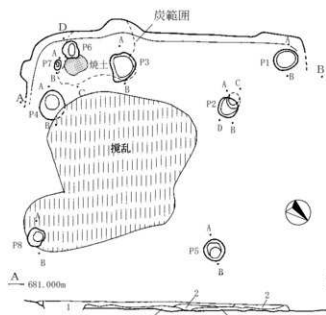
遺構の時期：出土遺物より、屋代遺跡群古代7期^(註3)前後の9世紀代（平安時代前半期）の時期が想定される。

SB301（BP第2地点）

表土を剥ぎ褐色土面を検出中、炭化物を混入する黒褐色シルトの広がりや土器片の点在がみられたため、住居跡を想定し精査した。遺構周辺は地殻変動の影響で表土層直下に中部層（アカスコ層）が露出している部分もあり、さらに耕作や上部構造物による攪乱が多い。本址は大半が削平されており、覆土は最大でも16 cm前後と浅く、全体の1/4程度が残存している。

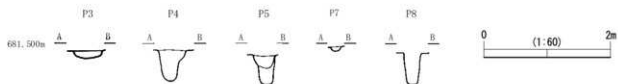
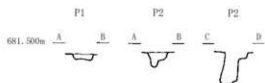
遺構の構造：検出面での規模は1辺が約4.5 mで隅丸方形～隅丸長方形と推定され、主軸はN52° E

註3 長野県埋蔵文化財センター 2000「上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書28 更埴系里道跡・屋代遺跡群—総論編—」

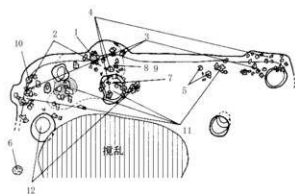


- 1: (5YR4/4) にふい赤褐色シルト 多量の焼土粒と炭 (1~10mm) が少量混入
 2: (10YR4/8) 赤褐色シルト φ1mm位の焼土粒子、炭、灰色粒子が混入
 3: (7.5Y4/3) 褐色シルト 赤褐色シルトが少量混入
 4: P6 覆土。(7.5Y3/3) 暗褐色シルト・(5YR4/8) 赤褐色シルト・灰色粒子がブロック状に混入し、炭・灰を多量に含む
 5: P6 覆土。(7.5Y2/2) 黒褐色シルト 赤褐色土、炭が多量に混入し、焼土がブロック状に混入
 6: 火床(焼土)。(5YR5/8) 明赤褐色土 締り良好

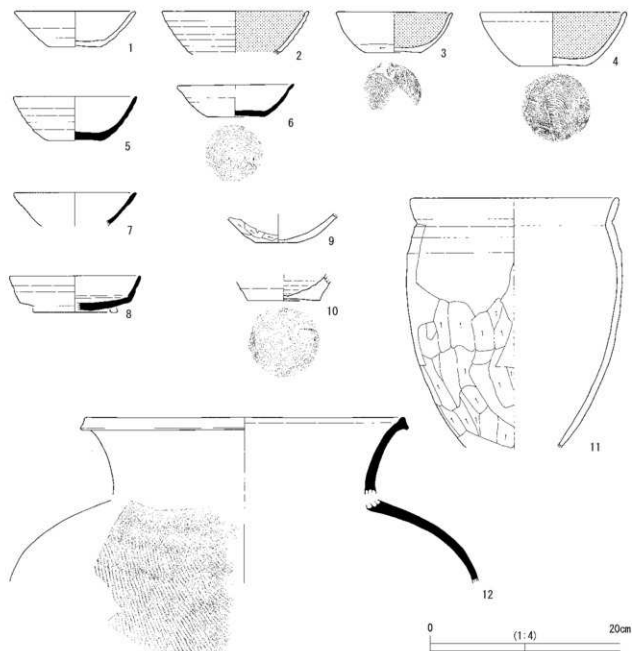
- 1: 攪乱土
 2: 黄褐色ロームと黒色火山灰がブロック状に混入する
 3: (10YR2/2) 黒褐色シルト 黄褐色ローム粒 (φ2~10mm) と少量の炭を含む



- P1: (10YR3/2) 黒褐色シルト 炭、焼土、明褐色土(7.5YR5/6) が全体に混入 粘性あり
 P2: (10YR3/2) 黒褐色シルト P1より混入物少なく、下位に赤色スコリア粒を含む
 P3: (7.5YR3/2) 黒褐色シルト 焼土、炭、黄褐色粒子を多量に含む
 P4: (10YR3/2) 黒褐色シルト 下位は締りが悪い
 P5: 1 (10YR3/2) 黒褐色シルト 炭、黄褐色粒子を多く含む
 2 (7.5YR3/4) 暗褐色シルト 黄褐色土、炭、スコリアを少量含む
 P7: (5YR4/4) にふい赤褐色シルト 焼土粒多く炭が混入する
 P8: P2と同じ



第227図 SB301 遺構図



第228図 SB301 出土遺物

である。主柱穴はP2、P4、P5、P8で径30～40cm、深さ約50cmの円形を呈する。南側コーナー付近に焼土と炭化物が分布し、カマドと思われる火床が検出された。石組みカマドと考えられるが、覆土の大半が削平されているためカマド石は残存しない。ただし攪乱部分には玉石に混じって輝石安山岩の角礫が多く混入しており、カマドに使われた角礫であった可能性も考えられる。P6は不整形で火床を切っておりカマド石の抜き取り痕の可能性が考えられる。カマドの右側と、西側のコーナーには、焼土と炭化物を混入する深さ12cmほどのP1、P3が検出された。覆土1層は攪乱土で、P4はその下位から検出された。貼り床は確認されなかった。

遺物出土状況：カマド周辺とコーナー付近に集中するが、大半は床面よりやや浮いた位置に細片で出土している。完形の須恵器の坏(6)が壁際から出土しているが、黒色土器の坏(2・3・4)、甕(11・12)は同一個体の破片が広範囲に広がっており、廃棄された状況がみられる。

出土遺物：土師器坏・甕、黒色土器坏、須恵器坏・甕が出土している。

1は口径13cm、器高3.8cmの底部回転系切りの後ヘラ削りが施された土師器環Aで、赤褐色粒子を多く混入し橙色を呈する。2～4は黒色土器環Aで、法量の小さな3と大きな2・4がみられた。3は底部回転系切りのち体部下半部にヘラ削りを施している。2は口縁端部内面にナデによる稜がみられ、4は底部回転系切りの後ヘラ削りが施されている。5・6・7は須恵器環A、8は環Bで高台部分が剥離している。5・6は底部回転系切りで、灰黄褐色を呈し、やや焼成の弱いものと考えられる。11は胴部外面にヘラ削りが施されている武蔵型甕で9と同一個体の可能性が考えられる。10は底部回転系切りで胴部立ち上がり部分にはケズリが施されている。12は口縁部が外反する須恵器の甕Aである。

遺構の時期:出土遺物より、屋代遺跡群古代7期前後の9世紀代(平安時代前半期)の時期が想定される。

SB302 (BP第2地点)

IV層上面で検出した。II層・III層は流失しており、表土直下がIV層となる。住居跡内を斜めに走る断層が確認され、カマド部では最大10cmの段差があり、水平方向にもわずかにずれが生じている。

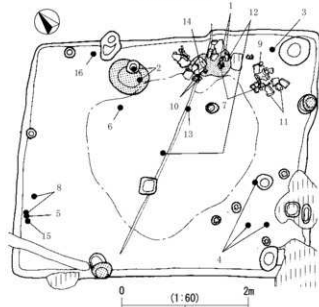
遺構の構造:主軸方向はN46°Eで、3.74×4.52mの方形を呈する。検出面から床面まで最大22cmである。住居跡中央部には硬化面が確認された。17箇所のピットを検出したが、壁際に検出されたP2、P3、P4が比較的深く柱穴と想定した。また、住居跡南側の攪乱内にもピット状の落ち込みが認められ、柱穴の残存の可能性がある。なお、P5などは方形で本遺構埋没後に掘り込まれたものである可能性があるが、他のピットと覆土の違いは認められない。P10～P15は貼り床を剥いだ後に確認したものである。P2・P4はそれぞれ2つのピットが切り合っている。遺構図では、住居廃絶時にすでに埋まっていたピットをスクリーントーンで示した。カマドは北東壁の中央部よりやや東側に位置し、心材の石が部分的に残されている。また、火床面には支脚と思われる赤褐色に焼けた方形の石が直立して埋設されている(S6)。火床面は47cm×43cm程度の広がり確認され、深さ約10cmが赤褐色に変色している。覆土は4層に分層される。壁際の三角堆積が認められ、自然埋没の様子が伺われる。

SK314と切り合い関係があり、本住居跡の貼床がSK314の覆土を覆っており、本住居跡の方が新しいことが確認された。

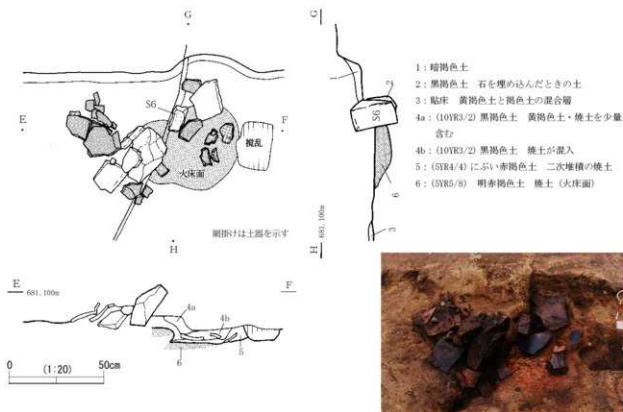
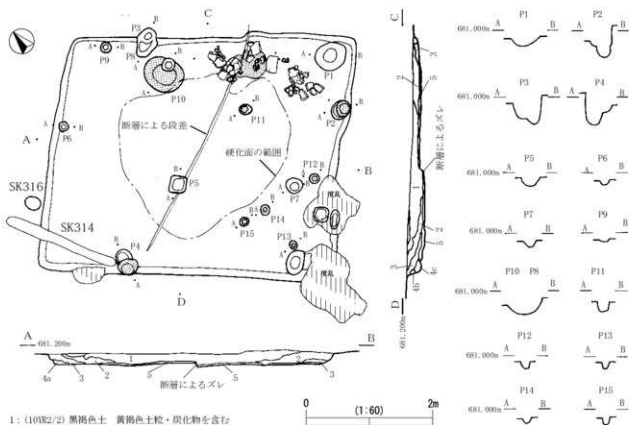
遺物出土状況:遺物は住居跡東側のカマド周辺に特に集中して出土した。カマドでは、心材の石と共に甕の大形破片が出土したが、器形復元ができるものは少ない。カマド内には環(1・7)、鉢(12・14)、甕(10)が出土した。また、カマド南脇の床面に甕(9)と鉢(11)



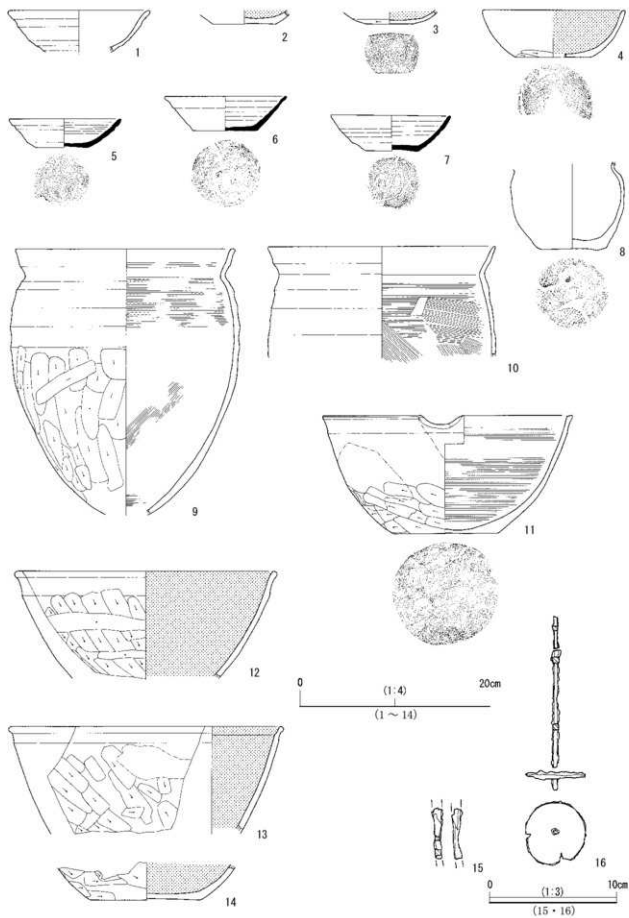
SB302 完掘状況



第229図 SB302 遺物出土状況



第230図 SB302 遺構図



第231図 SB302出土遺物

が潰れた状況で出土した。鉄製品も含め、図示した遺物はすべて床面より出土した遺物である。この他に縄文時代前期の土器片、定角式磨製石斧などが出土した。覆土中より墨書土器が出土したが、整理段階で紛失してしまった。住居跡の南西側の床面付近より大形の礫が数点出土し、P7の西側のものは1辺30cmを超える大形の礫で、床面よりわずかに浮いていた。床面から炭化材が1点出土した。

出土遺物：土師器の坏・甕・小甕、黒色土器の坏・鉢、須恵器の坏・甕、鉄製紡錘車などが出土した。須恵器坏には底部回転条切りと回転ヘラ切りが混在する。1は土師器坏、2～4は黒色土器坏で、2は底面静止ヘラ削り、3は底面回転ヘラ削り、4は回転条切りであるが、いずれも底部外周にヘラ削りがみられる。5～7は須恵器坏で、いずれも欠損品である。5は焼成が良好な青灰色の硬質須恵器、6・7は褐灰色から灰色のいわゆる軟質須恵器である。8は底面に回転条切り痕を残す土師器の小甕で、外表面が剥離しており二次焼成を受けたためと考えられる。9・10は土師器甕で、いずれも胴下半部にヘラ削りがみられる。11は土師器の片口をもつ鉢である。口径26.3cm、底径11.0cm、器高12.5cmで、内外面にロクロ整形によるハケ目状の浅い条線がみられる。外面下半部から底面には静止ヘラ削りがみられる。外面口縁部を中心に黒色付着（実測図の一点破線の範囲）がある。12～14は黒色土器の鉢で同一個体の可能性があり、胴下半部と底面にヘラ削りがみられる。12の内面は黒色ではないが、13・14と同様に内面が丁寧に磨かれ、二次的な変色と判断し黒色土器とした。13の外面の一部に黒色付着物が認められる。15は断面が方形であり、鉄鏝の茎部である可能性がある。16は鉄製紡錘車である。

遺構の時期：出土遺物より、屋代遺跡群古代7期前後の9世紀代（平安時代前半期）の時期が想定される。

SB303（BP第2地点）

表土を剥ぎIV層面検出中、暗褐色土の広がりを確認し住居跡として調査した。

遺構の構造：検出面における規模は1辺約5m前後の隅丸方形～隅丸長方形と考えられるが、本址の約1/2は調査区外にあり、ほぼ中心部付近をSC302によって切られるため内容は明らかではない。主軸はN28°Wである。径30～40cmの円形のピットが10基、壁面を取り囲むように位置する（P1・P2・P11・P12・P13・P15・P18・P19・P20・P21）。床面には長径1mを超える浅いピットが5基（P3・P4・P14・P16・P17）検出された。P6～9は焼土を多く混入する浅いピットである。カマドは調査区内では検出されず、南東側の調査区外に位置するものと思われる。

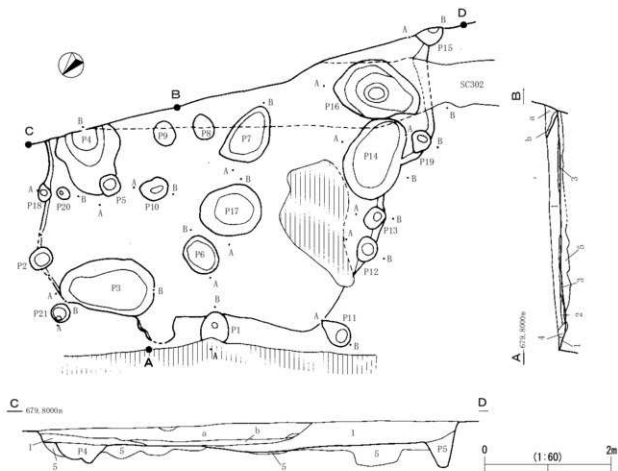
床面は明黄褐色シルトの貼り床が認められ掘り方が観察されたが、床下ピットは検出されなかった。

遺物出土状況：遺物は南半分に集中する傾向がみられ、大半は床面より浮いた位置で出土している。壁際から内黒の墨書土器（4）と刻書土器（6）が出土し、ヘラ描き土器（42）はP10より出土した。住居跡北側からは灰軸陶器の皿や瓶、鉄製の紡錘車などが出土した。また、土鍾が多数出土しているが、住居跡全体に分布しており、一箇所にまとまる状況はみられない。

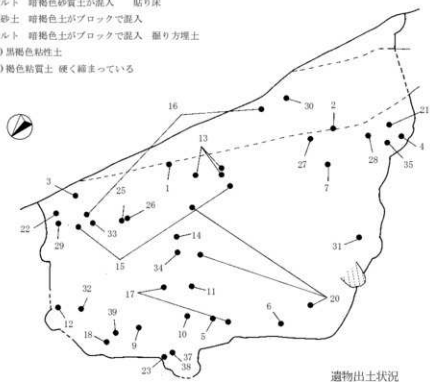
出土遺物：土師器の坏・甕・小甕、黒色土器の坏・鉢・盤または皿、須恵器の坏・杯蓋・甕・壺、灰軸陶器、緑軸陶器破片、土鍾、紡錘車などの鉄製品が出土した。周辺には本住居より古い竪穴住居が複数確認されており、本住居覆土への遺物の混入が想定される。須恵器の坏では、灰白色のいわゆる軟質須恵器が主体を占める。墨書・刻書・ヘラ描き土器、赤彩土器、緑軸陶器などが特に注目される。1～8は黒色土器



SB303 完掘状況 東より

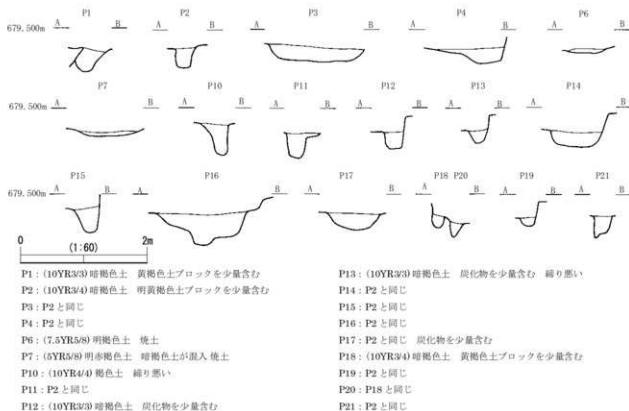


- 1: (10YR3/3) 暗褐色細粒砂土 (10YR5/8) 黄褐色細粒砂質土がブロックで2%程度混入
 2: (10YR2/3) 黒褐色細粒砂土 下部に硬土殻わずかに混入
 3: (10YR6/9) 明黄褐色シルト 暗褐色砂質土が混入 貼り床
 4: (10YR5/9) 黄褐色細粒砂土 暗褐色土がブロックで混入
 5: (10YR6/9) 明黄褐色シルト 暗褐色土がブロックで混入 張り方土
 SC302 覆土 a: (10YR3/2) 黒褐色粘性土
 b: (10YR4/4) 褐色粘性土 硬く締まっている



遺物出土状況

第232図 SB303遺構図1

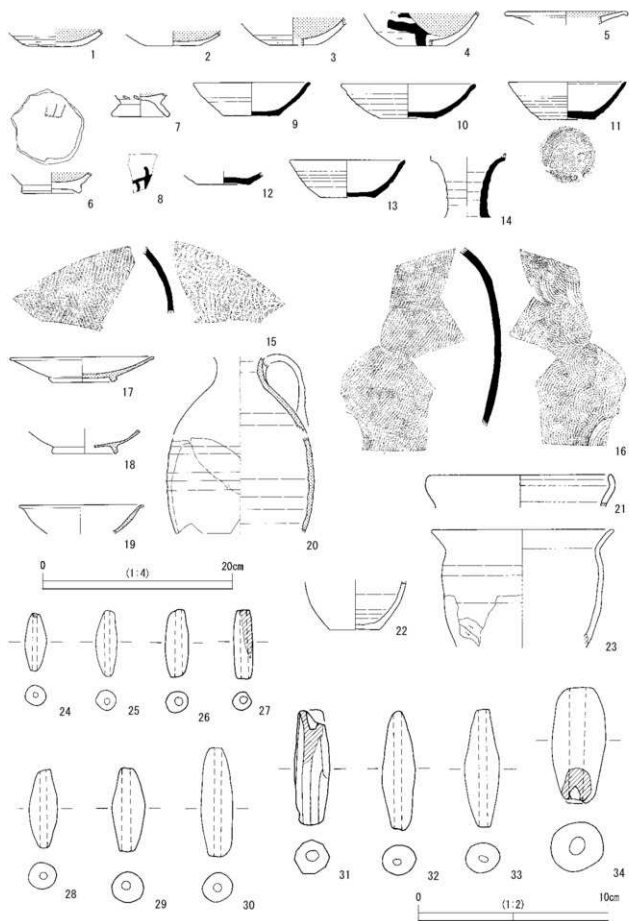


第 233 図 SB303 遺構図 2

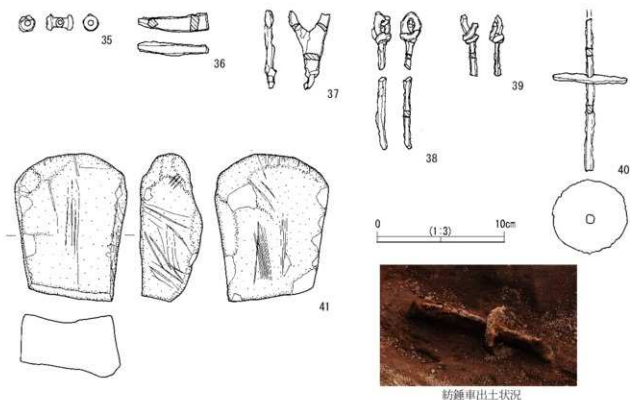
報告番号	遺物番号	出土層位	長さ (mm)	直径 (mm)	欠損状況
24	2		30	11	完形
25	1		34	11	完形
26	43		35	12	完形
27	204		37	10	完形
28	190		41	15	完形
29	213		44	17	完形
30	20		57	16	完形
31	154		60	19	完形
32	151		63	17	完形
33	42		62	18	完形
34	22		61	28	完形
	4		41	12	欠損
	4		(37)	11	欠損
	4		(28)	9	欠損
	4		(26)	10	欠損
	4		(17)	(10)	欠損
	6		33	12	欠損
	32		(30)	11	欠損
	38		(47)	14	欠損
	39		(15)	(14)	欠損
	47		43	15	欠損
	86		(46)	13	欠損
	126		(32)	13	欠損
	128		(32)	11	欠損
	134		(41)	13	欠損
	150		57	19	欠損
	182		(49)	20	欠損
	186		(30)	10	欠損
	205		(51)	(19)	欠損
	210		(31)	9	欠損
	211		43	19	欠損
	216		57	18	完形
	219		30	10	欠損
		P4 覆土	(22)	(11)	欠損
		P4 覆土	(28)	(12)	欠損
		P5 覆土	51	17	欠損
		覆土	(43)	17	欠損
		覆土	(37)	(15)	欠損
		覆土	(30)	10	欠損
		覆土	(25)	(9)	欠損
		覆土	(24)	(15)	欠損
		覆土	(25)	(13)	欠損
		覆土	(32)	10	欠損
		覆土	(29)	9	欠損
		覆土	(26)	9	欠損
		覆土	(39)	(12)	欠損
		床	(40)	(15)	欠損

() 内の数値は残存値

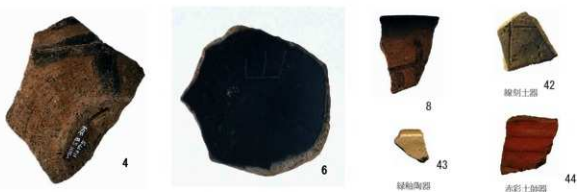
第 53 表 SB303 土層観察表



第234図 SB303出土遺物1



第235図 SB303出土遺物2



第236図 SB303の刻書・ヘラ描き・墨書土器、赤彩土器器・緑軸陶器(約1/2)

である。1～4は黒色土器の坏Aで1・4は底部回転ヘラ切り、2・3は回転糸切りのものへ削りによる調整がみられ、1・3・4は胴部下半にケズリがみられる。5は盤または皿の口縁部である。6・7は碗または皿の底部で6には「山」の刻書がみられる。4・8は墨書土器で、8は坏の口縁部であるが、小片のため器形は不明である。9～16は須恵器で9～13は底部回転糸切りの坏Aである。9・11・13は口径約12.4cm、底径5.8cm、10はやや法量が大きく口径14.5cmを測る。大半は灰黄色のやや焼成の弱いものであるが、11は茶褐色を呈し、口縁端部内面にはナデによる稜がみられる。14は長頸壺の頸部である。17～20は灰軸陶器で、17は皿、18・19は皿または碗、20は手付きの瓶である。21は小甕の口縁部で、口縁部が内湾し、端部を内側につまみ丸く収めている^(註6)。22は土器器の小甕の底部で回転糸切りが施されている。23は口縁部がやや開くが胴下半部にケズリがみられる。この他、緑軸陶器の小片(43)が1点出土したが、産地は不明である。赤彩した土器器(44)の小破片が1点、赤彩の疑いがある土器器破片

註6 口縁部が内湾する形態は、北陸地方に見られる形態であり、善光寺平では類例に乏しい。新潟県新保遺跡(『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第103集 新保遺跡』新潟県埋蔵文化財事業団2001)などで確認されている。

3点が出土した。小破片のため器種は特定できないが、甕または鉢の破片である。緑軸陶器と赤彩土師器は小破片であり、写真のみ掲載した。なお、緑軸陶器は床下、赤彩土師器は覆土より出土した。

土鍾(24～34)は47点出土し、大(34)、中(30～33)、小(24～29)の3種類の法量が確認できる。31は削りによる面取りがなされている。

金属製品は6点出土し、35は両端が肥大した管状の鉄製品、36は棒状または板状の鉄製品、37は鉄鏝としたが、38と近接して出土しており、軸部分の断面形が方形で寸法も類似することから同一個体の可能性もある。38・39は端部にねじりにより鎖状の環部を作り出している。環部はこの他に2点出土しており、合計4点となり、馬具の一部であろうか。40は鉄製の紡錘車である。

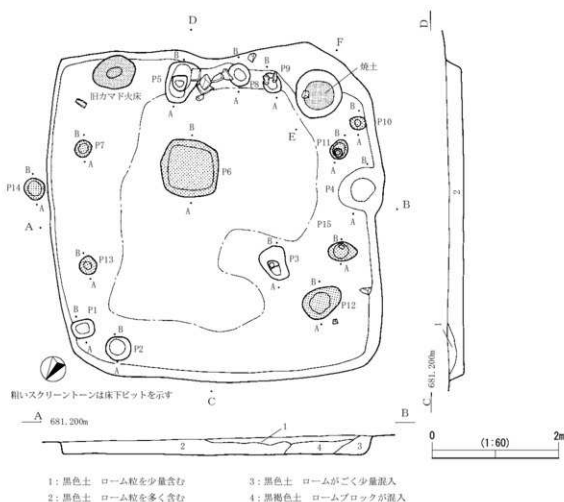
41は4面に線状痕がみられる砥石である。写真の42はP10より出土した环底部で「十」の記号が刻まれている。

遺構の時期：出土遺物より、屋代遺跡群古代8期前後、9世紀後半から10世紀初頭(平安時代前半期)の時期が想定される。

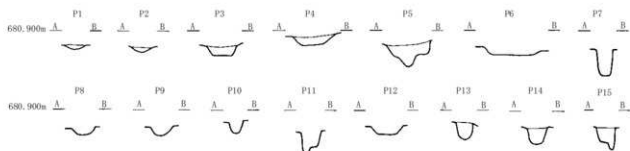
SB304 (BP第2地点)

表土を剥ぎIV層面検出中、黄褐色ローム混じりの黒色土の広がりから住居跡として調査。東側は木根や構造物などによる攪乱のためやや不明瞭である。

遺構の構造：主軸はN32°W。検出面での規模は1辺約5mの隅丸方形で、主柱穴はP7、P11、

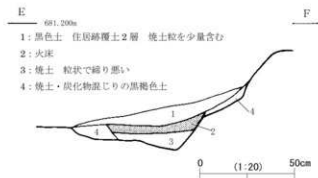


第237図 SB304遺構図1



- P1: 黒褐色土
 P2: P1と同じ
 P3: 黒褐色土 ローム粒を多く含む
 P4: 黒褐色土 ローム粒少ない
 P5: P3と同じ
 P6: 黒褐色土 ロームブロックが混入し、斑状
 P7: 黒褐色土 ロームが混入
 P8: 1 黒褐色土 多量の炭化物和焼土を含む
 2 褐色土 ロームが混入

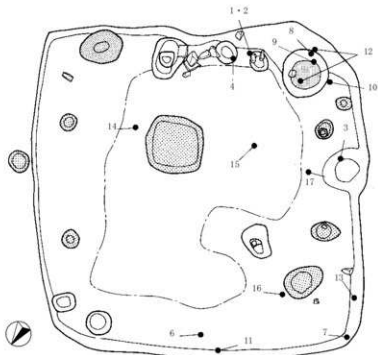
- P9: 黒褐色土 焼土を多量に含む
 P10: 黒褐色土 ロームが混入
 P11: P10と同じ
 P12: 黒褐色土 ローム粒を多く含む
 P13: 10YR2/3 黒褐色土 黄褐色ローム粒子、赤スロ粒、炭を全体に含み、細り悪い
 P14: P13と同じ
 P15: P13と同じ 基本土層VI層の黄褐色ロームが多く混入 細り悪い



- E 681.200m
 1: 黒色土 住居跡覆土2層 焼土粒を少量含む
 2: 火床
 3: 焼土 粒状で細り悪い
 4: 焼土・炭化物混じりの黒褐色土

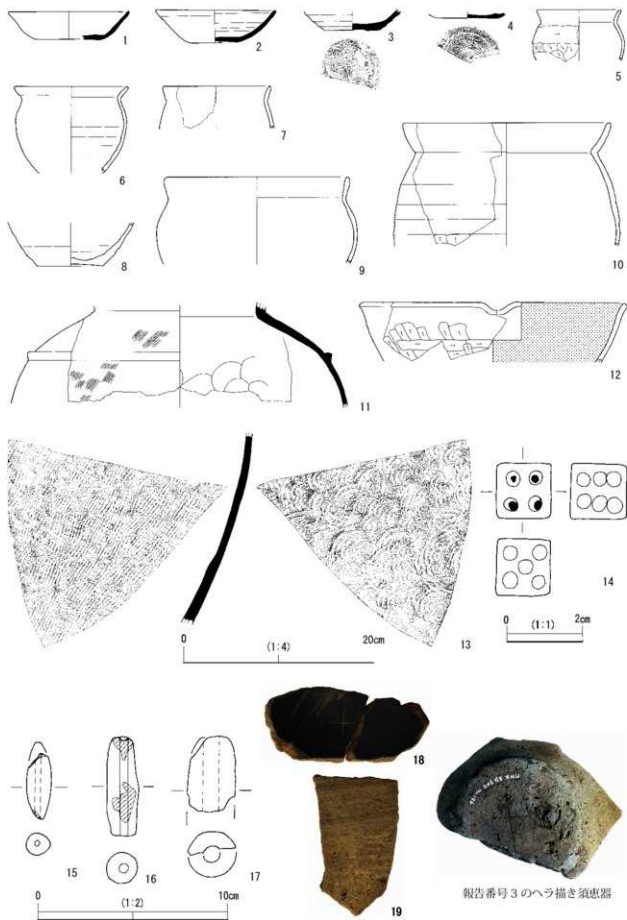


SB304 完掘状況



遺物出土状況

第238図 SB304 遺構図2



第239図 SB304 出土遺物

P13、P15 と考えられる。いずれも床下検出であるが、径約 30cm、深さ 25～40cm の円形を呈する。床下および床面検出のピットはいずれも浅い。P6 は深さ約 21cm の床下ピットであるが遺物は出土していない。また、P14 も遺構外ではあるが付近と同様の遺構は検出されていないため、本址に伴うものであろう。検出面から床面までは最大 36cm で、特に東側は攪乱されており 10cm ほどが残るのみである。

本址中央の床面は、黒色土を斑状に混入する黄褐色土でやや硬く締まっているが、貼り床状のものではなく、掘り方は不明瞭である。

カマドは上部が破壊されており、角礫が散在している南東壁中央付近と考えられ、石組みの可能性が高い。火床が検出されているが袖石などの抜き取り痕は確認されなかった。東コーナー付近に円形の焼土の集中部分と火床が認められ、カマドの作り替えがあったと考えられる。

遺物出土状況：遺物はカマド周辺に裏などが分布するが、大半は細片状の出土で完形に近いものはほとんどない。遺物は床面より浮いた位置にあり、P4 付近からは「+」の記号が刻まれた坏(3)が出土している。また、土錘(15～17)、サイコロ(14)が覆土中より出土した。サイコロは表土直下の遺構検出面より出土しており、後世のものが混入した可能性も否定できない。

出土遺物：1～4 は須恵器の坏 A で、灰黄～黄橙色のやや焼成の弱いものである。3 の底部には「十」の記号が刻まれている。1 と 4 は底径はほぼ 7cm を測り、底部回転ヘラ切りの同一個体の可能性が高い。2 は底部回転糸切りで歪みの大きい器形で、口縁外面には自然釉がみられる。5・6・7 は土師器の小型の裏で、5 は胴部のケズリが著しく、大変薄い。6 は被熱により表面が著しく磨耗し、7 の内面にはコゲが付着している。9・10 は胴上半部にロクロ目が残るが、下半部にはケズリが施されているものと考えられる。11 は肩部に凸帯をもつ須恵器の裏である。12 は片口の鉢で、外面はロクロ目をわずかに残すがケズリ調整が行われ、内面は暗褐色を呈しているが黒色処理されていたものと考えられる。14 は陶製と思

報告番号	遺物番号	出土層位	長さ (mm)	幅 (mm)	欠損状況
15	50		(34)	13	欠損
16	104		52	17	欠損
17	88		(42)	(23)	欠損
		覆土上面	(34)	(20)	欠損

() 内の数値は残存値

第 54 表 SB304 土錘観察表



SB303・SB304 出土の土錘とサイコロ

第2章 JS地点・BP第1～第3地点の調査

		SB251			SB301			SB302			SB303			SB304			
		国産掲載個体数	非掲載口縁部破片数	非掲載口縁部破片重量	国産掲載個体数	非掲載口縁部破片数	非掲載口縁部破片重量	国産掲載個体数	非掲載口縁部破片数	非掲載口縁部破片重量	国産掲載個体数	非掲載口縁部破片数	非掲載口縁部破片重量	国産掲載個体数	非掲載口縁部破片数	非掲載口縁部破片重量	
土器	坏 口縁部				1	2	7.3	1					38	148.5	14	40.4	
	坏 底部回転糸切り												9			4	
	坏 底部ヘラ削り				1												
	甕 口縁部	3	9	297.1	1	10	226.8	2	14	640.6			22	34.5	2	33	952.4
	小甕 口縁部	1			1	4.5			3	47.5	1	23	82.5	3	5	37.1	
小甕 底部	1			2	1		1			1			1				
黒色土器	坏 口縁部	2			3			1	9	37.1			85	457.9		26	188.8
	坏 底部回転糸切り	1			2	1		1			5	12		1	6		
	坏 底部ヘラ削り							2	1				5			5	
	鉢A 口縁部							3	2				1	9	1	1	
	鉢B 口縁部												2			1	
甕・甗 口縁部												1	3.2				
甕・甗 底部												2	1				
須恵器	坏 口縁部 (灰黒色)				2			1					6		1	8	268.5
	坏 口縁部 (灰白色)	3	4	7.7	2	6	44.2	2	9	72.8			3	75	1	29	
	坏 口縁部 (茶色)											1	13	60.1		2	6.6
	坏 口縁部 (灰白～茶色)												44	128			
	坏A 底部回転糸切り	3			3	1		3	1		1	32		2	13		
	坏A 底部回転ヘラ削り										2			2			
	坏A 底部ヘラ削り									1			1			2	
	坏B 底部				1								1			2	
	坏蓋	1											1				
	甕 口縁部				1			1	23.5				3				
甗 口縁部	1	2.4										1	1				
灰輪陶器	甕・甗 口縁部											2					
	甕 口縁部											1					
緑輪陶器	甕? 口縁部												1				

非掲載口縁部破片重量の単位はg

第55表 聚穴住居跡出土の口縁部・底部の器種組成

遺構名	報告番号	器種名	出土層位	取上番号	整理番号	備考
SB251	11	紡錘車?	3層 (床面)	36	D394	
SB251	12	鉄鎌	3層	37	D393	
SB302	15	鉄鎌基部?	床面	121	D396	
SB302	16	紡錘車	床面	116	D395	
SB303	35	管状鉄製品		114	D44	
SB303	36	棒状鉄製品		215	D46	
SB303	37	鉄鎌	1層 (耕作土直下)		D40	
SB303	38	棒状鉄製品	1層 (耕作土直下)		D40	馬具金具か
SB303	39	棒状鉄製品		7	D41	馬具金具か。整理番号43と同一個体の可能性あり
SB303	40	紡錘車		21	D42	
SB303		棒状鉄製品		108	D43	馬具金具か。整理番号41と同一個体の可能性あり
SB304		鉄洋		7	D63	

第56表 聚穴住居跡出土金属製品一覧

われるサイコロで、円形の凹部に墨を塗っている。また、18（写真のみ掲載）は内面に「十」に近い記号の刻まれた内黒の坏底部、19は外面に線刻のみられる小囊の胸部である。

遺構の時期:出土遺物より、屋代遺跡群古代7期前後の9世紀代（平安時代前半期）の時期が想定される。

(2) 掘立柱建物跡・櫛列

JS地点とBP第2地点において、ピット群が3箇所確認された。遺構内の遺物が無く、時期は不明であるが、竪穴住居跡と関連する配置を示すものもあり、本節で取り上げる。ピット群の中には、中世以降と考えられるものも存在している。

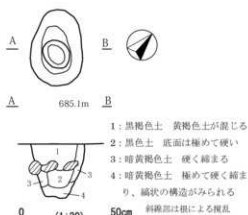
遺構名	形状	長さ (cm)	幅 (cm)	深さ (cm)	覆土	備考
P1	楕円形	64	52	8	A	幅は推定値
P2	円形	36	36	12	B	
P3	楕円形	38	36	6	A	
P4	楕円形	50	44	8	A	P8と切り合う
P5	楕円形	40	34	7	A	
P6	方形	42	26	10	B	
P7	円形	28	26	10	C	P8と切り合う
P8	楕円形	38	28	7	A	
P9	円形	20	20	6	A	
P10	円形	32	30	22	D	SB201の施設か?
P11	円形	30	28	38	D	SB201の施設か?
P12	円形	22	22	18	D	SB201の施設か?
P13	円形	30	26	30	D	SB201の施設か?
P14	楕円形	40	32	8	A	
P15	円形	50	50	26	E	
P16	楕円形	32	28	7	D	
P17	円形	32	28	32	D	SB201の施設か?
P18	円形	24	24	9	F	
P19	円形	40	40	8	A	SB201の施設か?
P20	円形	28	22	12	D	SB201の施設か?
P21	方形	26	25	12	C	
P22	円形	34	28	32	D	SB201の施設か?
P23	円形	42	40	10	D	幅は推定値
P25	円形	22	22	6	不明	
P26	円形	22	22	10	不明	
P27	楕円形	66	52	20	不明	P28と切り合う
P28	円形	34	34	4	不明	
P29	円形	36	36	15	不明	一部覆乱
P30	楕円形?			14	不明	半分覆乱
P31	円形	22	22	5	不明	
P32	円形	18	18	3	不明	
P33	円形	36	33	9	不明	
P34	円形	20	18	6	不明	
P35	円形	16	16	8	不明	
P36	円形	20	18	13	不明	
P37	円形	16	16	7	不明	
P38	円形	26	24	16	不明	
P39	円形	29	29	5	不明	一部覆乱
P40	円形	24	22		不明	
P41	楕円形	30	20		不明	
P42	円形	17	17		不明	
P45	方形	23	22	21	D	
P46	方形	28	28	33	D	
P47	円形	40	40	5		覆土は黒褐色、暗褐色、黄褐色土の混土层。

覆土A:黒褐色土に暗褐色土と黄褐色土をわずかに含む。染み状の覆土。 覆土B:黒褐色土に暗褐色土と黄褐色土がわずかに含む。
 覆土C:黒褐色土。上より濃い。覆土D:黒褐色土。黄褐色度をブロック状に含む。 覆土E:黒褐色土内に黄褐色土と暗褐色土が互層をなす。 覆土F:暗褐色土。

第57表 ピット群1の遺構の属性

ビット群1 (JS地点) (第222図)

調査区北西側で、大小41基のビットが検出された。表土下でⅢ層またはⅣ層となり、古代の遺物包含層は失われている。ビットは、P1 (58 × 48 cm)・P3～P5・P15・P33 など大形のもの、直径20 cm前後のものに大別される。ビットの覆土はいずれもⅡ層の黒色土で、遺構の時期を決定しうる出土遺物はない。ビット群周辺の表土より、須恵器・土師器の小破片がわずかに出土しており、奈良・平安時代の遺構である可能性を指摘するにとどめる。ビット群は国道18号線側に広がると思われるが、BP第1地点ではビットの密度が希薄になる。第56表に各ビットの属性を示す。



第240図 SK261 遺構図 (1:20)

SK261

BP第1地点のSK261は底部に硬化面があり、他のビットと性格を異にしている(第240図)。SK261は検出面では40 × 26 cmの楕円形を呈し、ビット下部では直径13 cmほどの範囲が硬化しており、特に2層下部から4層がきわめて硬い。隣接するSK264・265ではこのような構造はみられず、調査区内では単独で存在しており、遺構の性格は不明である。

ビット群2 (BP第2地点) (第223・241図)

SB302の南西側に広がるビット群である。ビット群1同様に遺構の時期を確定する遺物はなく、中世以降のものも含まれる可能性がある。遺構記号にP (Pit) としたものと、SKとしたものがあるが、調査時

遺構名	形状	長さcm	幅cm	深さcm	覆土	備考
P1	楕円形	36	28	30	A	下部は円形で柱痕が確認される。
P2	不整形	40	30	41	A	
P3	方形	30	24	30	A	
P4	円形	27	25	15	B	
P5	不整形	28	26	25	B	
P6	楕円形	24	20	6	B	
P7	方形	28	26	32	A	下部は暗褐色土で、底面が硬化している。
P8	方形	28	24	20	A	
P9	楕円形	36	28	14	A	
P10	方形	36	34	28	A	
P11	楕円形	22	26	20	B	P12と切り合い、P11の方が新しい。
P12	不整形	30	30	56	A	柱痕が確認される。
P13	方形	26	26	20	A	底面が硬化している。
P14	方形	27	25	21	A	
P15	方形	34	30	18	A	
P16	楕円形	34	28	11	B	
P17	方形	24	24	8	A	
P18	方形	24	24	10	A	
P19	円形	21	19	11	A	
P20	円形	22	18	11	A	P9と切り合うが、前後関係は不明。
SK312	楕円形	53	36	46	B	
SK313	方形	32	32	27	B	柱痕が確認される。
SK315	方形	32	26	18	A	
SK316	円形	22	20	8	A	
SK323	円形	24	24	57	B	
SK325	楕円形	80	58	22	A	覆土の下に確認された。

覆土A: 黒色土に黄褐色土がブロック状または粒子状に混じる。 覆土B: 黒褐色土に黄褐色土粒が混じる。

第58表 ビット群2の遺構の属性

期が異なったため遺構名のつけ方に混乱が生じた結果で、必ずしも遺構の性格の違いを示すものではない。

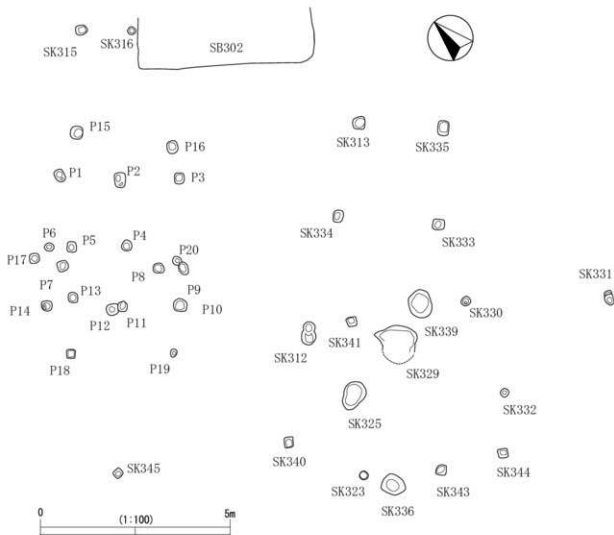
P1～P20は掘立柱建物跡を想定し、調査時にはST302の遺構名を付したが、同時期の穴を特定することはできなかった。42基の遺構から構成される。これらの中には掘立柱建物跡と考えられる柱穴も認められる。柱穴は円形・楕円形・方形のものがあり、異なる時期のものが混在していると考えられる。これらのほかに、焼土を含む土坑（SK329）なども認められ、建物跡以外の穴も存在する。以下に各遺構の詳細を記す。特記事項がない遺構については第57表に属性を示す。

SK329

攪乱層を除いたIV層面から焼土を検出。長軸北西75cm、短軸54cm、深さ5cmの楕円形で、浅い土坑の中央部に焼土の堆積があり、焼土内から土師器片が1片検出された。東側のSK339は一部焼土や炭化物の混入する浅い土坑で、関連する可能性がある。

SK330・SK331

IV層面で検出。SK330は径10cm、深さ20cmの円形。SK331は北側長軸30cm、短軸21cm、深さ40cmの方形で、北東側に添え木をした穴であろうか方形の10cmの浅い穴が切り合っている。SK330は黒褐色土に褐色土が混じる覆土である。SK331はSK333に類似する柱痕の残る覆土である。SK331、SK330、P10、P12、P14は北西方向に直線に並ぶが、関連性は不明である。



第241図 BP第2地点ピット群2

SK313・SK333～SK335

IV層面から黒褐色土の方形の遺構を検出。SK313は縦33cm、横30cm、深さ29cm、SK333は縦32cm、横27cm、深さ44cm、SK334は縦28cm、横24cm、深さ30cm、SK335は縦33cm、横38cm、深さ16cm。それぞれのピットの間隔が2.7mの北東方向の方形プランである。2.7mは1間半にあたり、同一の建物の柱跡と思われる。

SK313、SK333、SK334には柱痕が確認された。出土遺物はなく、時期は不明であるが、近世以降（1間半が2.7m）の倉庫のような方形の建物跡であった可能性を考慮したい。

SK336

長軸北側62cm、短軸50、深さ8cmの楕円形である。覆土は黒褐色土に褐色小ブロック混じりである。出土遺物はなく、近代以降の遺構の可能性もある。

SK339

長軸北側74cm、短軸60、深さ20cmの浅い円形。覆土は焼土と炭化物が含まれた黒褐色土。炭化物や焼土が検出されたが、遺物もなく時期は不明。近代以降の攪乱の可能性はある。

SK340・SK341・SK323

SK340は一辺29cm、深さ40cmの方形のピットであり、SK341は一辺26cm、深さ36cmの方形のピットである。柱穴と思われる。SK340とSK341の間隔は約3.6mで約2間幅である。SK340の南東側にSK323があり、柱穴のような黒色土の覆土であり、これらSKと同様に方形である。SK340との間隔が約2.25mで、約1間半にしては約45cm少なく、またSK341の南側が攪乱されており、柱の痕跡が確認できず、建物跡の柱穴として認定することができなかった。覆土は黒色土である。

SK342

一辺22cm、深さ40cm方形の柱穴状の底面平らな穴で、覆土は黒色土である。出土遺物なし。

SK343・SK344

SK343は一辺30cmと26cm深さ28cm、SK344は一辺28cm、深さ20cmの両者とも方形の浅い土坑である。北西から南東方向に並行の土坑で、間隔は約1.8mで1間幅である。いずれも覆土は炭化物と焼土粒を含む黒色土に褐色土のブロック状の土が混じる。1間の長さから近世以降の可能性を考慮したい。

SK332

縦23cm、横20cm、深さ10cmの方形の底面が平らである。柱穴状で覆土は黒色土である。覆土や形状から中世・近世以降の可能性を考慮したい。

ピット群3（BP第2地点）

遺構の多くは中世以降のものと思われ、SA301以外の詳細は第7節に譲る。

SA301

北東側から南西側にかけて等高線に沿って9基のピットが検出された。全長15.3mにわたる。ピットの大きさは直径約20cm、深さ25～20cmである。P1～P5まで3.2m、約80cm～1m間隔に続く。P4のみがやや北西側に外れる。P5～P6の間は約3.5m、P7～P8まで6.6m離れる。覆土はいずれも黒色土か黒褐色土に褐色土の小ブロックが混じる。出土遺物がなく時期も不明で、中世以降である可能性もある。

第7節 中世以降の遺構と遺物

1 調査の概要

JS地点およびBP第1地点からBP第2地点にかけて、硬化面をもつ道路状遺構19箇所(SC201・SC251～260・SC301～307・SA302)、溝9条(SD201～SD205・SD251・SD252・SD301・SD302)、炭焼窯1基(SY201)、建物跡3棟(ST301～303)および土坑32基を確認した。

道路状遺構は国道18号にほぼ並行している。仲町遺跡のなかには旧北国街道の野尻宿があるため、この遺構と北国街道との関連を想起させられるが、たび重なる国道の改修や建物の増・改築によってⅢ層からⅣ層辺りまで削平され、遺構の時期は確定できない。あるいは中世まで遡る可能性も捨てきれないが、おそらくは近世以降のものであろう。

その他の遺構も伴出する遺物が少なく、しかも小片で、構築時期を判断する根拠に乏しい。ちなみに、BP第2地点からは平安時代の竪穴住居跡を4棟検出しているが、住居跡の覆土とそれ以外の遺構の覆土を区別することは極めて難しい。したがって、第1章第6節で古代の遺構と報告したものの中には、中世まで下るものが含まれているかもしれない。

なお、BP第5d地点からは多数の中・近世の遺構と遺物が検出されている。おそらくこの場所が旧北国街道の野尻宿跡にあたると思われる、その詳細については第2分冊で報告する。

(1) 道路状遺構

帯状の硬化面をもつものを道路状以降とした。国道18号にほぼ並行して、幅0.4～0.7mの硬化面が断続的に南北約716mにわたって確認された。これらが、照月台遺跡で確認された道状遺構へ続くことすると、その長さは全長約970mにおよぶ。

道路状遺構は、横断面の形状と下部施設の有無によって、次の三形態に分類できる。

Aタイプ：平面的に帯状の硬化面が認められるもの。硬化面の中央部が窪むものがあり、Bタイプの底面のみが残存したものを含む。(SC251～255・SC258～260・SC304～307)

Bタイプ：溝の底面に硬化面が認められるもの。溝の覆土に硬化面を有するものがある。(SC256・SC257・SC302)

Cタイプ：帯状の硬化面の下に、方形あるいは楕円形のピットが列状に並ぶもの。ピットの底面も硬化している場合がある。(SC201・SC301・SA302)

なお、調査区が異なる場合、同一遺構に個別の遺構番号を付したのものがある。同一遺構と思われるものは、遺構番号を併記し、報告する。

SC201 (第245図)

SC201は、JS地点南西側のⅡ層中で検出した。北東側は削平されている。帯状の硬化面とピット列をSC201とした。時間差をもった遺構が重複していると考えられ、それぞれの硬化面をSC201a～SC201dとした。国道18号を挟んだBP第1地点で確認されたSC260にほぼ並行し、その間隔は約24～25mである。両者とも北東から南西へ向かうが、南西側で西に向けてややカーブする。

SC201aは幅約60cmの硬化面を有し、北東側でSC201bと合流している。北西側のSC201cは幅約40cmで、底面はSC201a・bより3～5cm高い位置にある。中央のSC201bも幅は約40cm程度だが、硬化面の下からピット列(P74～83)を検出した。このピット列はP86まで延びているとみるべきで、総

延長は7mになる。個々のピットの平面形は方形ないし楕円形で、深さは10～25cmくらいである。各ピットは、P84を唯一の例外として、底面のみならず壁面も硬化している。

SC201dには硬化面と深さ5cmに満たないピットが3列あり(P51～60・66・67、P61～65およびP68～70)、それぞれのピット列がほぼ平行している。ピット列の幅は、芯々間で約1.5m、各ピットの平面形はおおむね方形である。

硬化面にレベル差があることなどから、遺構の構築には時間差があると思われるが、各遺構の前後関係を検証する正確な所見は得られていない。

SC251～SC258 (第243・246図)

SC251～SC258はBP第1a地点で検出した、国道18号とほぼ平行するひとまとまりの道路状遺構である。この地点は、Ⅲ層の上面まで攪乱されており、この攪乱層を除去したところで検出した。攪乱や削平のため、幅広の硬化面を数面の狭い硬化面と認識してしまった可能性もあるが、複数の時間差がある硬化面が重複していると想定した。

SC251は、BP第1a地点の北西側に長さ約25mにわたって断続的に続く道路状遺構である。残存幅は70～80cmで、中央部が1～4cm窪む浅い溝状を呈する。底面の硬化層は黒褐色土である。

SC252とSC254とSC255は調査区壁際で硬化面の一部分を検出したのみである。

SC253は最大幅130cm、長さ約14.7mで、BP第2地点のSC301につながる可能性がある。SC258はSC253の一部であろうか。

このSC253に切られる形でSC256が東接している。現存する長さは約12m、残存する部分での最大幅は65cmである。

SC257は、SC256の東側に位置し、SC256に切られている。北東部分は攪乱で削られ確認できなかったが、南西側は国道18号と交わり、さらに南東方向に続くと思われる。現存する長さは約14mで、断面形は256と同様にBタイプながら、底面までの深さが約30cmあり他よりも深い。覆土は上部が黒色土、下部が黒色土にロームブロックが混在している。底面は黒色土に褐色小ブロックが混じった硬化層が約2～3cmの厚さをもっていた。

遺物は、SC253の底面から唐津焼の小片、SC257からは土師器と須恵器の破片が出土したのみである。

遺構の時期は、SC251が近代以降に構築されたSK279に攪乱されており、またSC257は近世以降のSK278に攪乱されている。いずれも近世になって造られたものであると思われるが、複数の道路状遺構が重複したものであり、古いものは中世まで遡る可能性も含んでいる。

SC259 (第243図)

SC259は国道18号線の東側、BP第1b地点の表土直下のⅢ層で検出したAタイプの道路状遺構である。SC251とは、国道18号線を挟んで約27mの間隔があり概ね平行するが、現状では両者の関連性を確認することができなかった。残存する長さは約5.2m、最大幅約80cmで、断面形は中央部がやや窪んでいる。中世の土器片が出土しているが、おそらく近世に属する道路状遺構であろう。

SC260 (第243図)

SC260はBP第1a地点、攪乱層直下のⅢ層中で検出した。位置的にSC254の延長ではないかと思われる。現存する長さは約23mで、幅は約40cmである。南端部で南西側に約12度カーブして調査区外に延びており、このカーブとJS地点で検出したSC201やその周辺のピット列が平行しているため、これらと関連するものと思われる。なお、SC260とSC201とは芯々間で約24m離れている。出土遺物はない。

SC301～SC303 (第242・248・249図)

SC301～303はBP第2a地点の攪乱層直下にあたるⅢ層中ないしⅣ層上面で検出した。SC301と

SC302は、本来一連の道路状遺構と考えられるが、遺構の構造が異なっており、個別に説明する。この遺構は、さらに南東側のBP第1a地点で検出したSC253又はSC257へ続く可能性がある。一方、SC303はSC302と並行するが、硬化面の一部がSC302の覆土を覆っている。

SC301は、最大幅は50cm、BおよびCタイプの道路状遺構である。検出面からの掘りこみは約10cmである。覆土上部はⅡ層に由来する黒色土が堆積し、下部は黒色土にⅣ層由来の黄褐色土がブロックで混在し、複数の硬化面がある。SC301南端部の硬化面下部からは、10.5mの間に約30cmから100cmの間



旧北国街道に平行するSC302

隔において、12基の浅いピットを確認した(第249図)。ピットの状態は、SC201の断面I-J間と似ており、ピットの底面も、浅い溝状の部分の底面も硬化している。攪乱されていた部分にも等間隔にピットがあったとすると、18以上の穴が並んでいた可能性がある。

SC302部分はBタイプの道路状遺構である。2条の溝が重複しており、それぞれに硬化面がある。硬化面は合わせて3面で、新しい溝では、溝の底面と覆土中とに硬化面が認められる(第249図の断面図)。なお、SC302中央部分の西側に黒褐色の硬化面の広がりが見られた。平坦部と斜面部の地形変換点に位置する。硬化面は不定形であるが、全体としては南西から北東方向に浅い溝状に伸び、SC302と隣接して並行する。この溝状遺構には、約5cm～10cmの礫が集中する部分もある。道路状遺構が後世の攪乱により破壊されたものと思われる。

道路状遺構の覆土には、平安時代の土師器・須恵器が近世の陶磁器片と混在しているため、遺物から構築時期を判断するのは難しい。遺構自体は、平安時代のSB303を切り、近世以降に構築されたと考えられるSK322やSD301に切られているため、この間のいずれかの時期に造られたと考えるほかない。

SA302 (第243・249図)

調査区東壁際の攪乱層直下のⅣ層中で検出した。平面は25～40cm程度の方形で深さ5～8cmのピット5基が、約3.1mの間に約0.3～0.4m間隔において直線状に並んでいる。覆土は黒色土、底面は平らで硬い。

このピット列は、調査時には柵列と認識していたが、SC301と約7.5mの間隔をあけて並行すること、Cタイプの道路状遺構は下部にピット列があること(SC201・301)から、本遺構も道路状遺構の下部構築と判断した。

出土遺物はないが、遺構の配置から判断して、SC301・302と同時期の可能性が高い。

SC304 (第242図)

BP第2a地点の、SC302より一段低いテラス状の平坦面で検出した。幅約45cmのAタイプの道路状遺構である。周辺住民によると、戦前まで道であった場所であり、ごく最近の道路跡と考えられる。

ST301との切り合い関係は不明であるが、出土遺物には近代のものが認められ、ST301は道跡より新しいと判断した。

SC305・SC306 (第242図)

平安時代の竪穴住居跡SB304の北西側壁面に沿って、攪乱層下IV層中で検出した。両者は北東側で一緒になってしまう。SC302・303とは、約4.3～5.2mの間隔を空けて南東側に平行している。現存する長さはSC305が約4.7mでSC306は約3.0m、幅は約25～35cmである。掘り込み面はほとんどない。

出土遺物はなく、時期は不明である。時間差をもって硬化した面が重複したものと考えられる。

SC307(第242図)

調査区の中央付近東壁際で旧国道18号に平行する道路状遺構を検出する。掘り込みがないAタイプの道路状遺構で、幅約55cmの黒褐色の硬化面をもつ。SC302・303や305・306と並行しており、SC302から約13.5m、SC305からは約8.5mの間隔がある。出土遺物はない。

(2) 土坑

SK278・SK279 (第246図)

BP第1a地点北西側のⅢ層からⅣ層で検出した。

SK278は一辺約2.3mのやや隅丸方形で、深さ18cm～26cmである。覆土は黒褐色で、底面から壁面にかけて2～3cmの灰色の砂質土が敷き詰められている。

SK279は一辺約2.2mの隅丸方形で、深さ約30cmである。覆土は黒褐色土に褐色ブロックが層をなして堆積している。

出土遺物は、SK278が手描き染付け磁器片数点、SK279は石筆である。SK278は道路状遺構SC256やSC257を切り込み、SK279は道路状遺構SC251を切り込んでいることなどから、二つの土坑はいずれも明治期以降のものと思われる。

SK317(第242・250図)

旧国道18号の南東側にあたるBP第2b地点で、コンクリート基礎の除去中に検出した。一辺約3mの隅丸方形で、深さは約12～20cmの断面皿形である。覆土は、1層が混合土層の埋め戻し土、2層は砂層で、砂層上面が正確に水平を保った床面である。3層は掘り方に埋めた土である。

明治期の陶磁器と古代の土師器が出土した。SK278と構造が類似し、同一の機能をもつ構造物であった可能性があり、明治期以降の土坑と判断した。

SK318・SK319 (第242・250図)

調査区の南西壁際で、コンクリート基礎の除去中に検出した。SK318とSK319を含めた長さは約2.2mである。SK318の底面は焼けており覆土中から礫が出土した。一方のSK319の底面には焼けた平石が敷かれている。調査段階でSK318とSK319は別個の遺構と考えていたが、精査の結果、SK318は燃焼部、SK319が掻き出し部あるいは炬口部と思われる同一の遺構であると判断した。

SK318から伊万里焼茶碗片が1点出土しているため、近世以降の遺構であろう。

SK322 (第242・250図)

調査区の北東端、Ⅳ層中で検出した。南西から北東に延びる道路状遺構(SC302)を切り込んでいる。一辺約2m方形の平面形を呈する。深さは約10～35cmである。床面には浅い凹凸が多数あって平坦ではない(第250図SK322写真参照)。北西壁沿いにいくつかの土坑が繋がったような溝状の穴が設けられている。また、南東側はテラス状の段があって調査区域外に続いている。東側にも、本遺構と同類と思われる落ち込みを検出した。おそらく竪穴状の遺構となると思われる。

覆土から近世陶磁器が出土しているが、覆土はSB303やSC302とは明らかに異なっている。近隣の開

註2 長野県埋蔵文化財センター他 2000 『土信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書16-信濃町その2-』

き取り調査では、野菜などを越冬するための室ではないかということであり、近年まで使用されていた可能性がある。

(3) 炭焼き窯

SY201 (第244・250図)

表土直下のⅢ層で、黒色の炭化物が多量に混じる炭焼き窯と思われる土坑を検出した。

長軸約3.3m、短軸約2.08m、深さ約35cmの隅丸長方形で、底面東側中央部に径約67cm、深さ約8cmの円形の浅い播鉢状の窪みを有する。この窪み部分が窯の焚き口と推察する。覆土は4層に分かれ、中央部と焚き口に木炭層が確認された。覆土上部に炭化物や焼土が混じったⅡ層由来の黒色土層があるが時期は不明である。なお、信濃町上ノ原遺跡においても、同じ構造の炭焼き窯が検出されている。⁽²¹⁾

(4) 溝

SD251 (第244・247図)

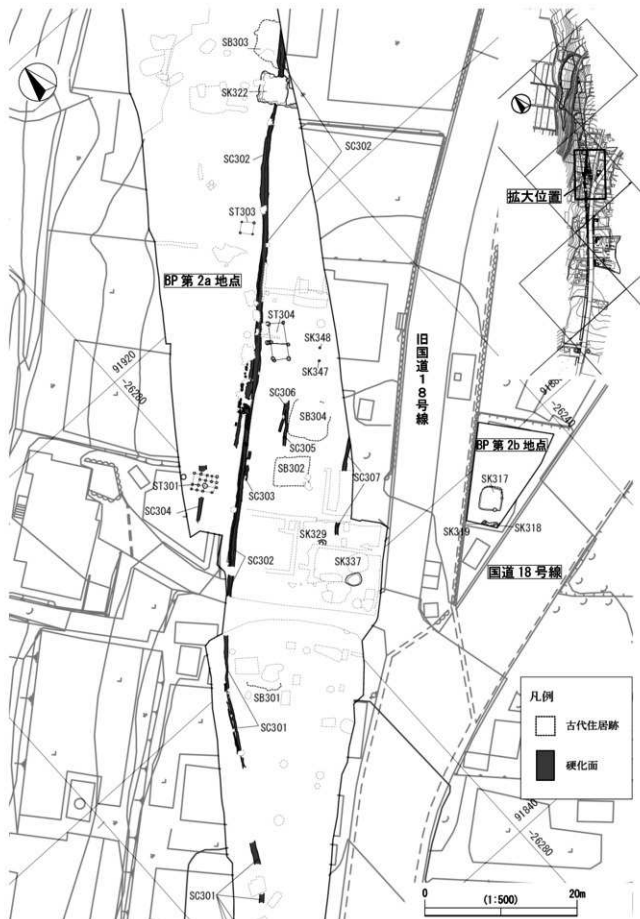
BP第1a地点の調査区南西端、Ⅱ層上部で検出した。調査区に直交するため全体の長さは不明であるが、幅は約0.5～1.3m、深さは約35cmである。覆土は、上層が黄褐色土粒を含んだ黒色土、下層は炭化物や黄褐色土のブロックを含む黒褐色土で、水が流れたような砂質層はない。底面は凸凹しており、不定形な小ピットが所々に観察された。小ピットの大きさは、30～15cmから15～10cmとさまざまで、深さは5cmほどである。ぬかるみを歩いた足跡のようでもあり、人頭大の礫を抜いた跡のようでもある。出土遺物はない。

SD252(BP第1b地点)(第図)

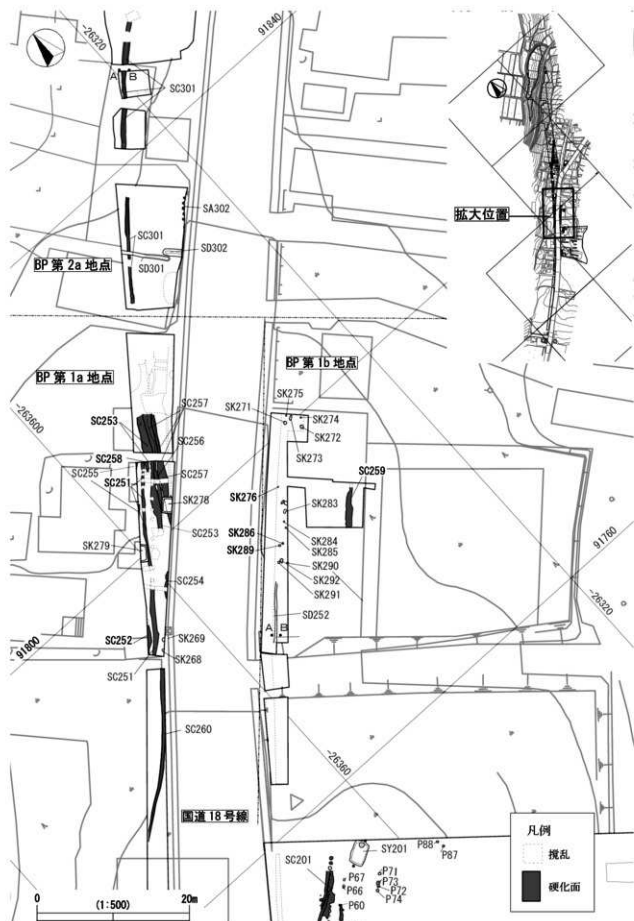
BP第1b地点の調査区の中央やや南西寄り、表土下のⅣ層で検出した。現存する長さは約8m、幅35～40cm、深さは10cmである。上水道の敷設などによって破壊されており、本来の形状構造はわからない。出土遺物はないが、SC251やSC254などと平行しているため、道路状遺構と関係があると思われる。



SD251 西から



第242図 中世以降遺構配置図1

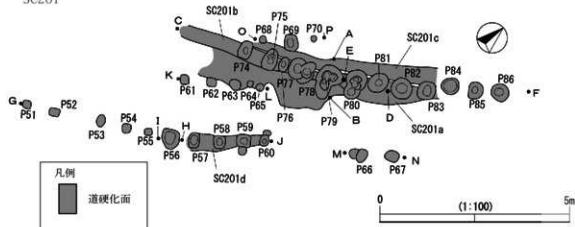


第243図 中世以降遺構配置図2



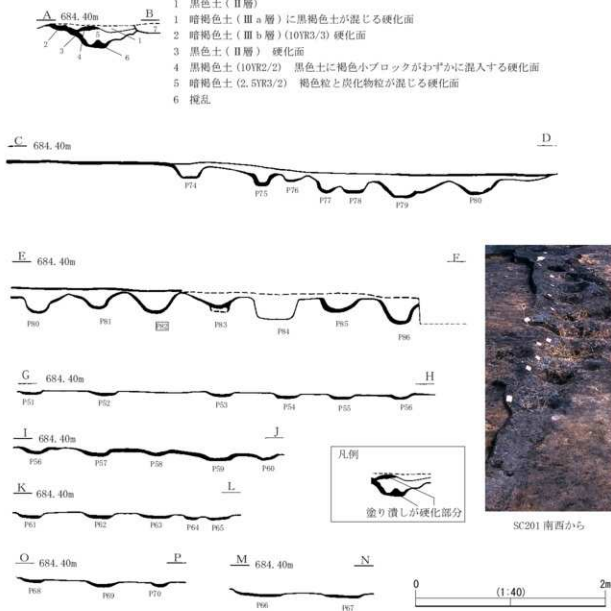
第244図 中世以降遺構配置図3

SC201

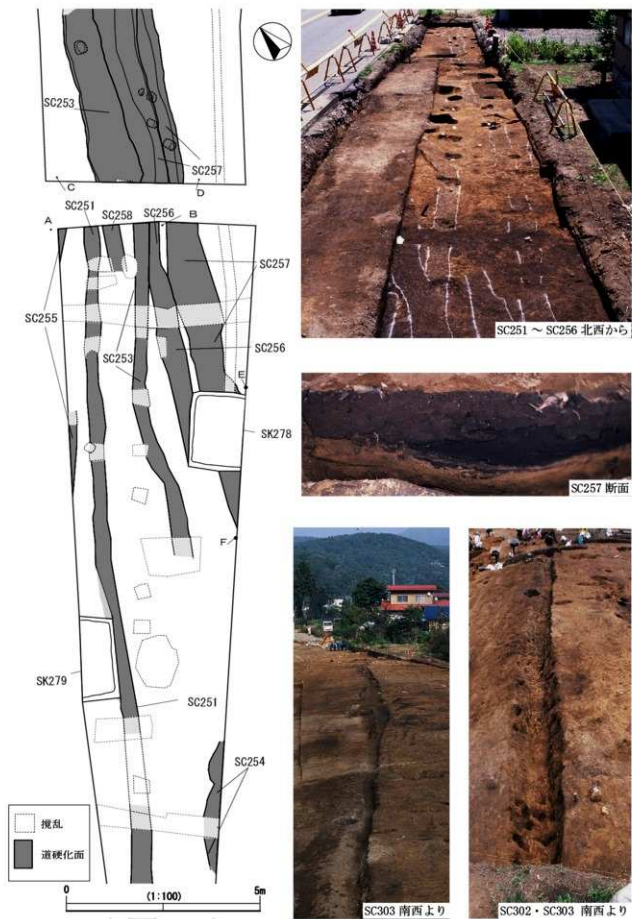


SC201

- 1 黒色土（Ⅱ層）
- 1 暗褐色土（Ⅲa層）に黒褐色土が混じる硬化面
- 2 暗褐色土（Ⅲb層）（10YR3/3）硬化面
- 3 黒色土（Ⅱ層） 硬化面
- 4 黒褐色土（10YR2/2） 黒色土に褐色小ブロックがわずかに混入する硬化面
- 5 暗褐色土（2.5YR3/2） 褐色粒と炭化物粒が混じる硬化面
- 6 雑乱



第245図 遺構図1 (SC201)



第246図 遺構図2 (SC251～SC258)

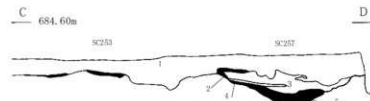
SC251・258・253・256



SC251・258・253・256 A-B

- 1 複乱層
- 2 黒色土 (10YR1.7/1) (II層)
- 3 黒色土の硬化した層 (硬化面) (SC251, SC253・255・258)
- 4 黒褐色土に褐色と黄褐色土粒を含む
- 5 暗褐色土硬化面 (SC256)

SC257



SC257 C-D

- 1 複乱層
- 2 黒色～黒褐色土硬化面 (SC251・253・257)
- 3 黒色土 (10YR2/1) II層粘性なし
- 4 黒褐色土 (10YR3/1) 黒色土に褐色土が粒状に含有 粘性なし
- 5 褐色土 (III a層) (10YR4/6) 褐色土が暗褐色土中に混入硬化面 (SC257)

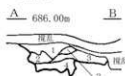
SC257・SK278



SC257・SK278 E-F

- 1 表土層
- 2 黒褐色土 (10YR3/2) SK278 覆土 近世以降の陶磁器を含む
- 3 黒色土 (10YR1.7/1) SC257 覆土
- 4 黄褐色土 (10YR5/8) IV層が硬化した層 (SC257の硬化面)

SD251



SD251

- 1 黒色土 10YR1.7/1) 粘性なし褐色粒を含む
- 2 黒褐色土 (10YR2/3) に褐色ブロックを含む
- 3 黒褐色土 (10YR3/2) 褐色細粒を含む 炭化物を含む
- 4 暗褐色土 (10YR2/6) に褐色ブロックを含む 粘性なし 炭化物細粒を含む

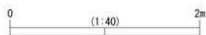
SD252

683.40m

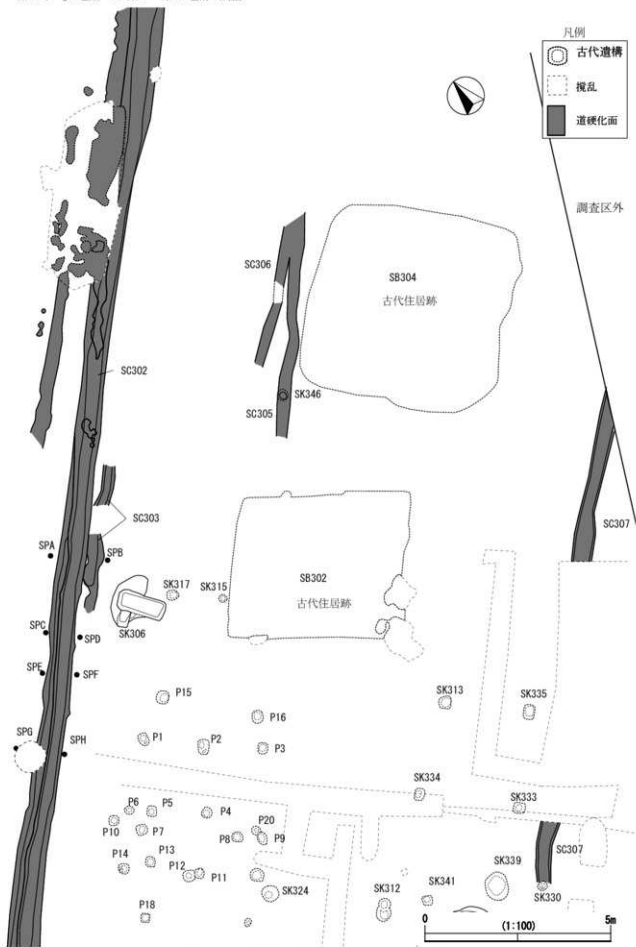


SD252

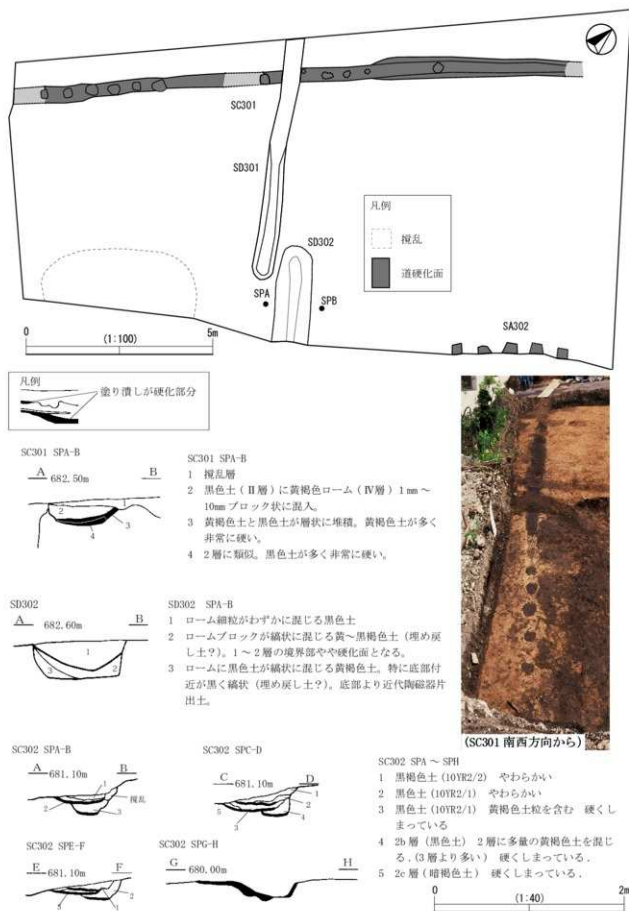
- 1 黒褐色土 (10YR2/3)
- 2 暗褐色土 (10YR3/3) に黄褐色土混じる



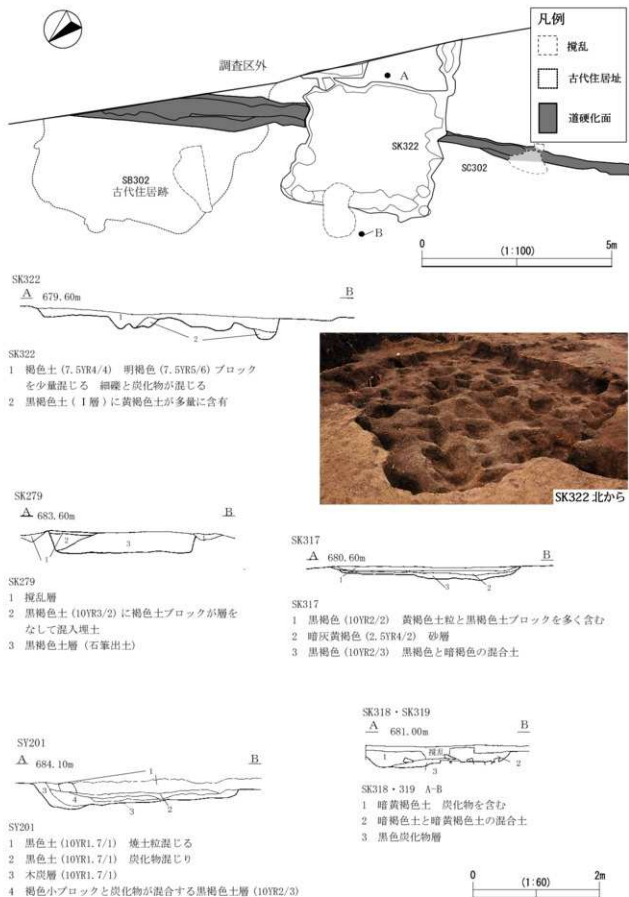
第247図 遺構図3 (SC251～258セクション)



第248図 道横図4 (SC302・303・305～307)



第249図 遺構図5 (SC301・302・SA302)



第250図 遺構図6 (SK278・317～319・322・SY201)



仲町遺跡と野尻湖



BP 第1地点の基本土層



BP 第2地点 SH310



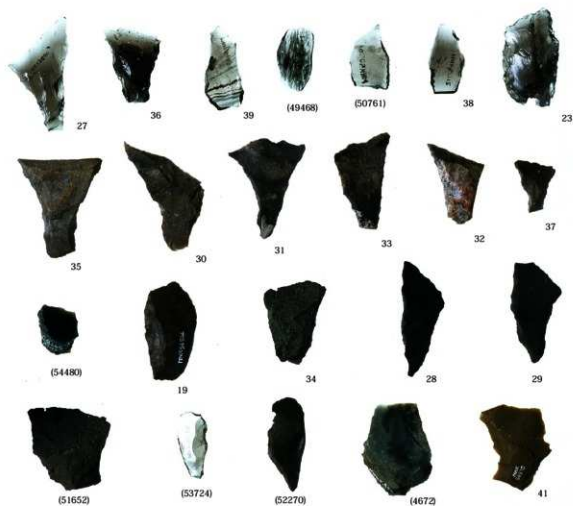
BP 第2地点 SH313



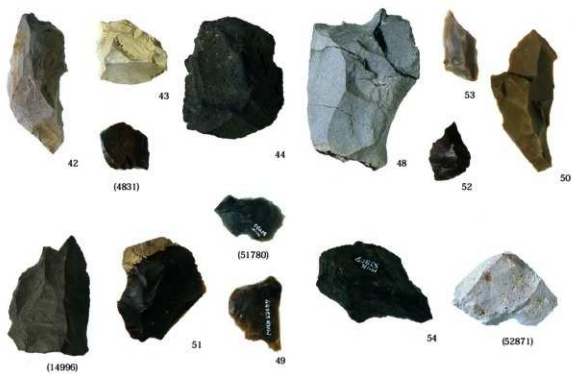
JS 地点 槍先形尖頭器 (約 3/4)



JS 地点 ナイフ形石器 (約 3/4)



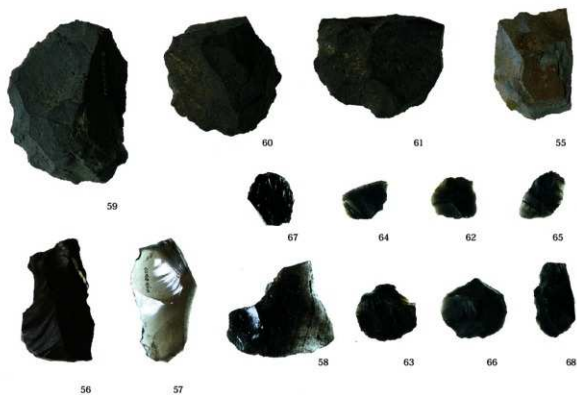
JS地点 台形石器他(約3/4)



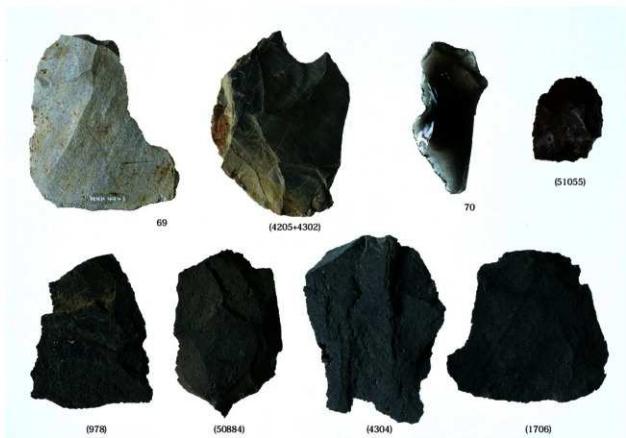
JS地点 彫器・削器・揉雜器・抉入削器(約3/4)



JS 地点 削器・石刃 (約 3/4)



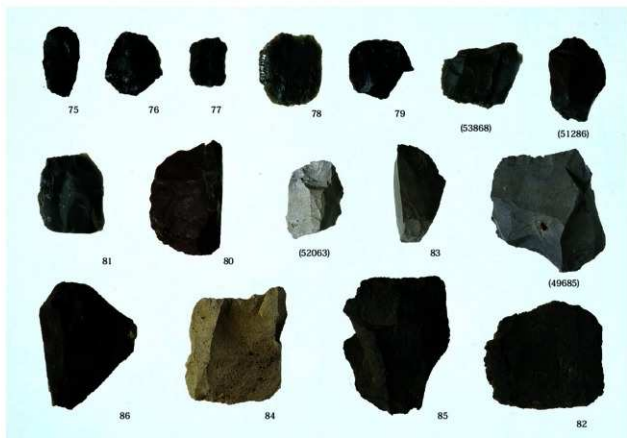
JS 地点 掻器・掻器状石器 (約 3/4)



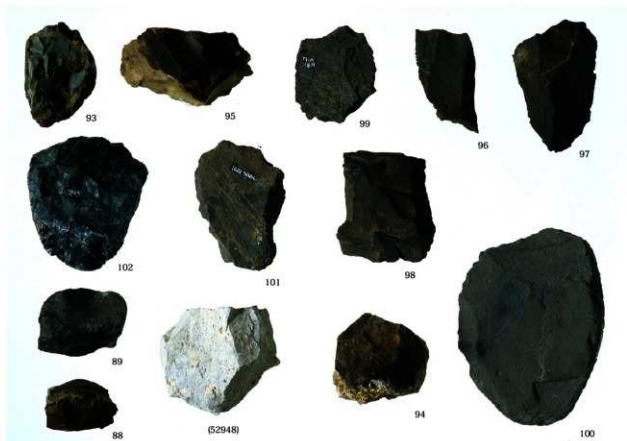
JS 地点 二次加工のある剥片 (約 3/4)



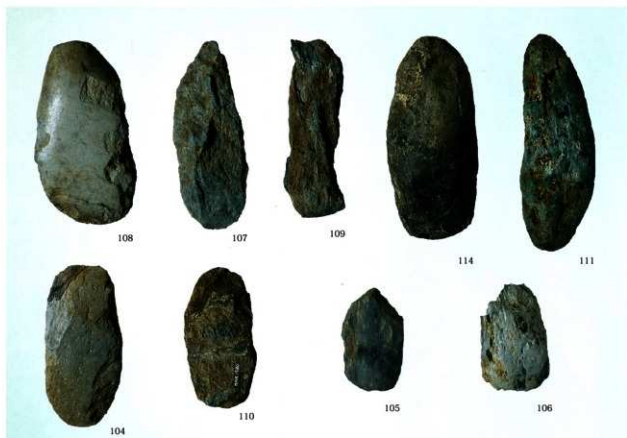
JS 地点 微細剥離のある剥片他 (約 3/4)



JS地点 楔形石器 (約 3/4)



JS地点 石核 (約 1/2)



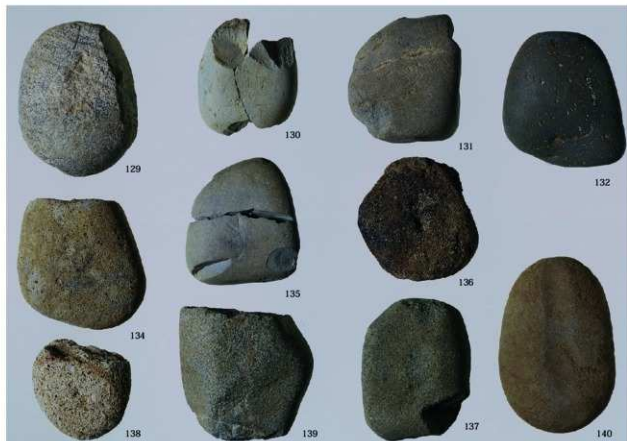
JS 地点 斧形石器 1(約 1/2)



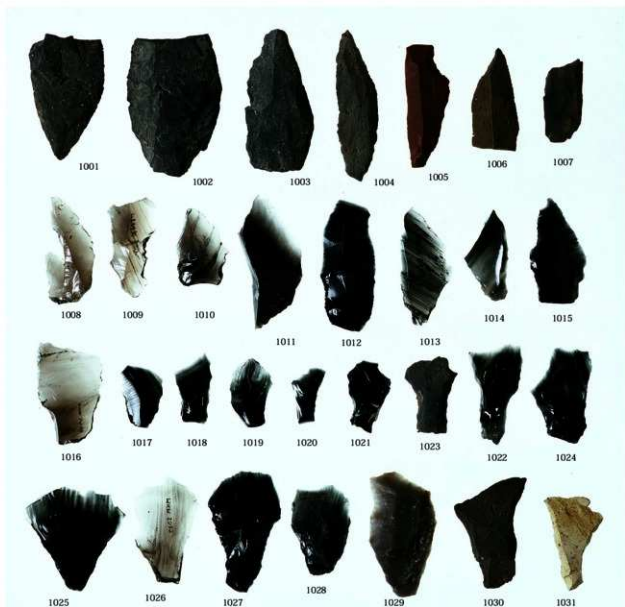
JS 地点 斧形石器 2(約 1/2)



JS地点 敲石(約1/2)



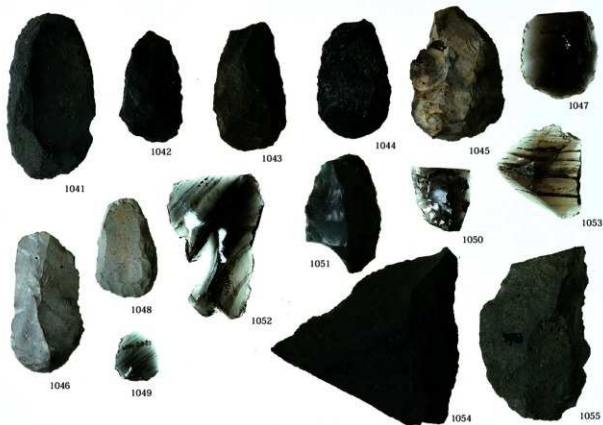
JS地点 砥石・凹石(約1/3)



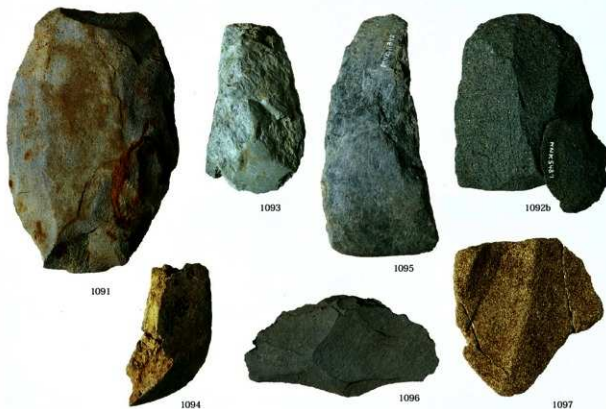
BP 第1地点 尖頭器・ナイフ形石器・台形石器 (約 3/4)



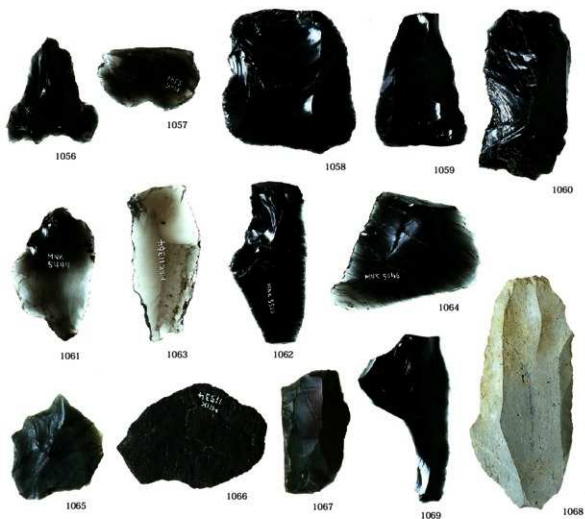
BP 第1地点 彫器・貝殻状刃器・削片 (約 3/4)



BP 第 1 地点 掻器・削器 (約 3/4)



BP 第 1 地点 斧形石器・砥石 (約 3/4)



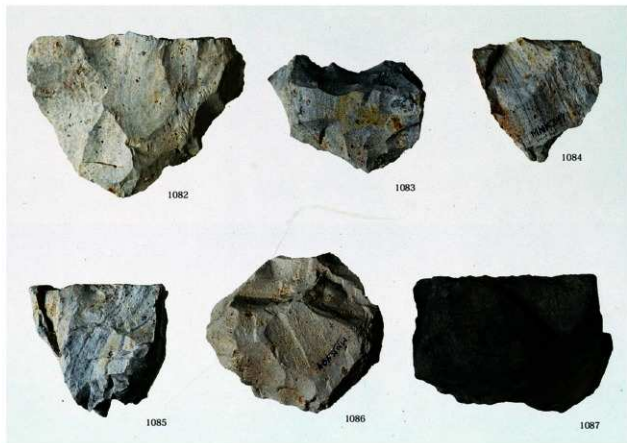
BP 第1地点 抉入削器・鋸歯縁状削器・二次加工のある剥片・採錐器他(約3/4)



BP 第1地点 微細剥離のある剥片(約3/4)



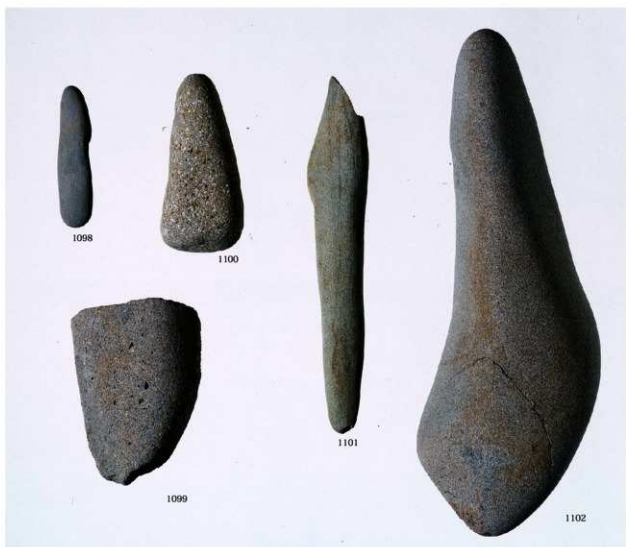
BP 第1地点 石核1 (約3/4)



BP 第1地点 石核2 (約3/4)



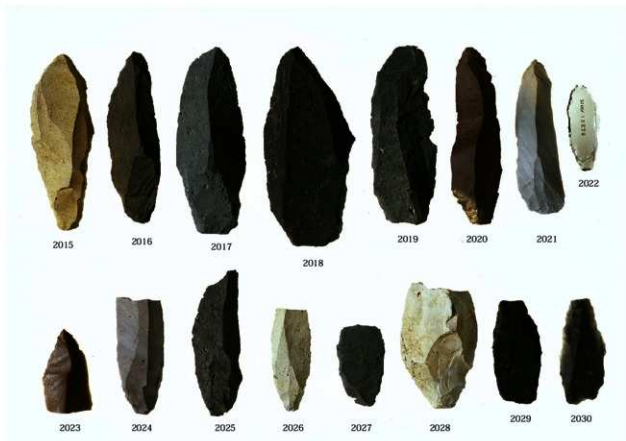
BP 第1地点 石核3(約 1/2)



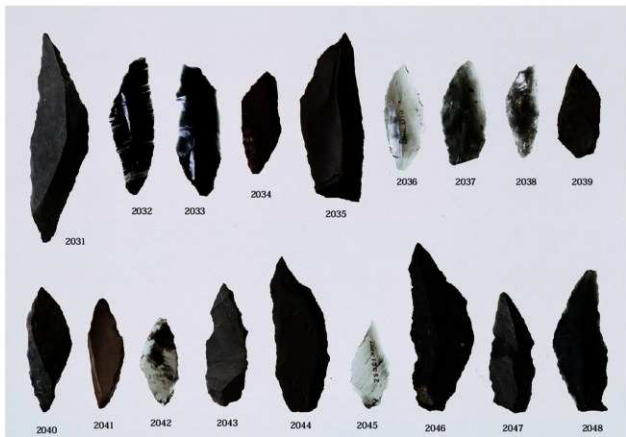
BP 第1地点 敲石(約 1/2)



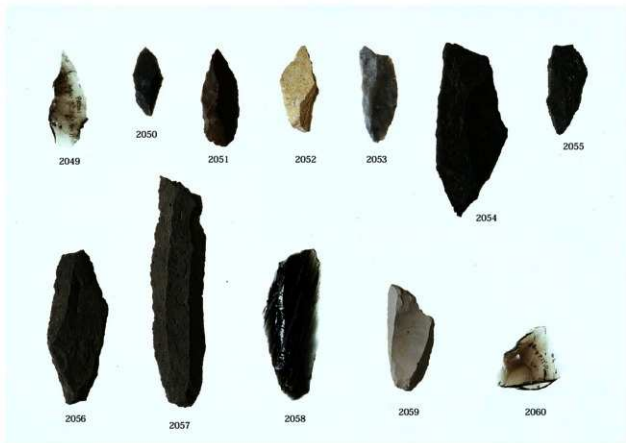
BP 第2地点 ナイフ形石器1 (約 3/4)



BP 第2地点 ナイフ形石器2 (約 3/4)



BP 第2地点 ナイフ形石器3 (約3/4)



BP 第2地点 ナイフ形石器4 (約3/4)



BP 第2地点 台形石器(約 3/4)



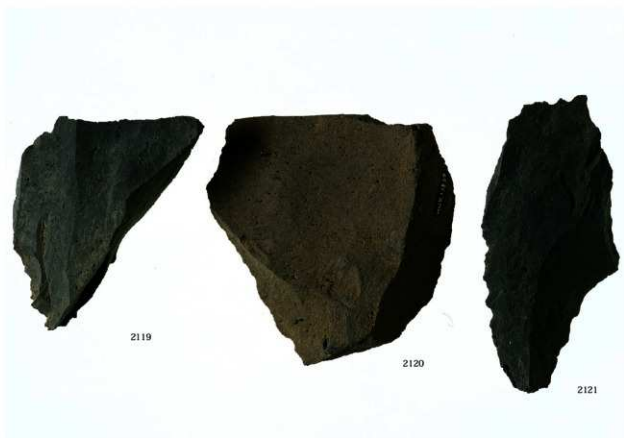
BP 第2地点 貝殻状刃器・彫器(約 3/4)



BP 第2地点 掻器・掻器状石器(約3/4)



BP 第2地点 削器1(約3/4)



BP 第2地点 削器2 (約 3/4)



BP 第2地点 削器4 (約 3/4)



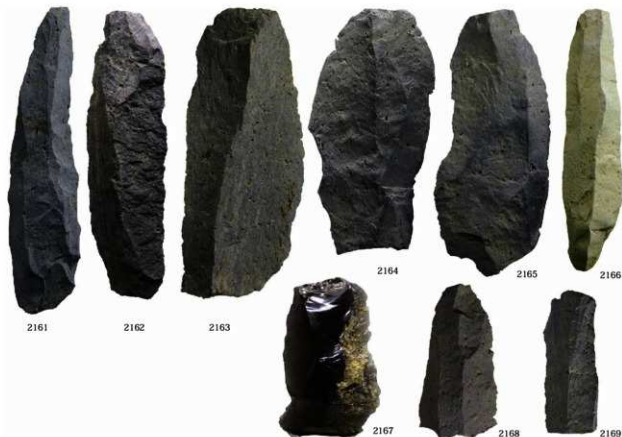
BP 第2地点 抉入削器・鋸歯縁削器・揉錐器 (約 3/4)



BP 第2地点 楔形石器 (約 3/4)



BP 第2地点 石刃1 (約3/4)



BP 第2地点 石刃2 (約3/4)



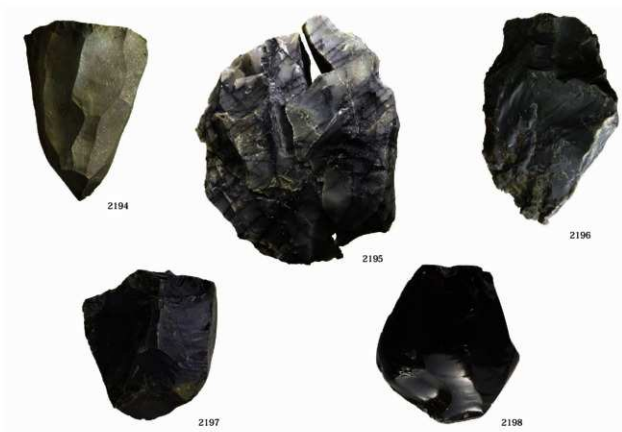
BP 第2地点 石刃3 (約3/4)



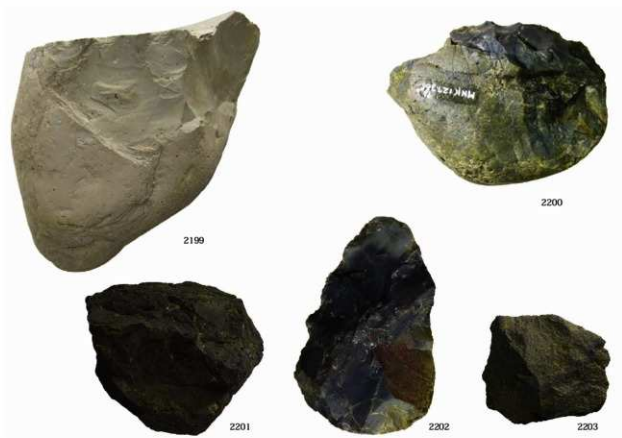
BP 第2地点 石刃4 (約3/4)



BP 第2地点 石核1 (約3/4)



BP 第2地点 石核2 (約3/4)



BP 第2地点 石核3 (約 3/4)



BP 第2地点 石核4 (約 1/2)



BP 第2地点 斧形石器1 (約 3/4)



BP 第2地点 斧形石器2 (約 3/4)



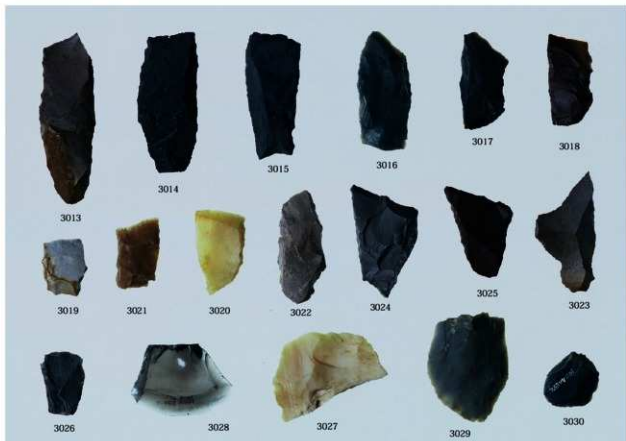
BP 第2地点 斧形石器・敲石(約3/4)



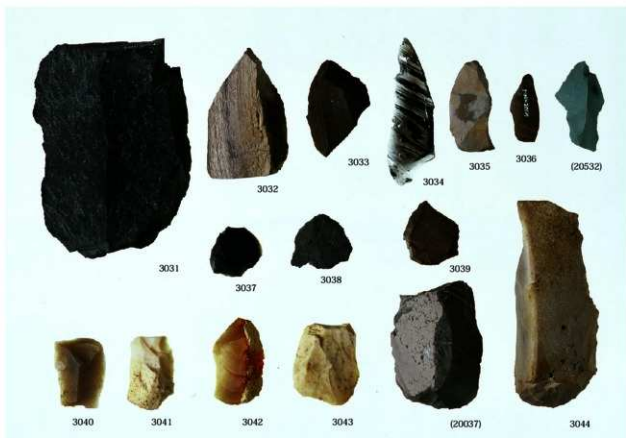
BP 第2地点 敲石・凹石・台石(約1/3)



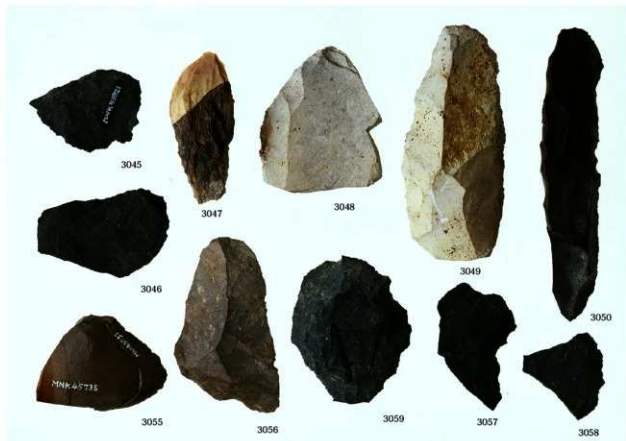
BP 第 3 地点 槍先形尖頭器・ナイフ形石器 (約 3/4)



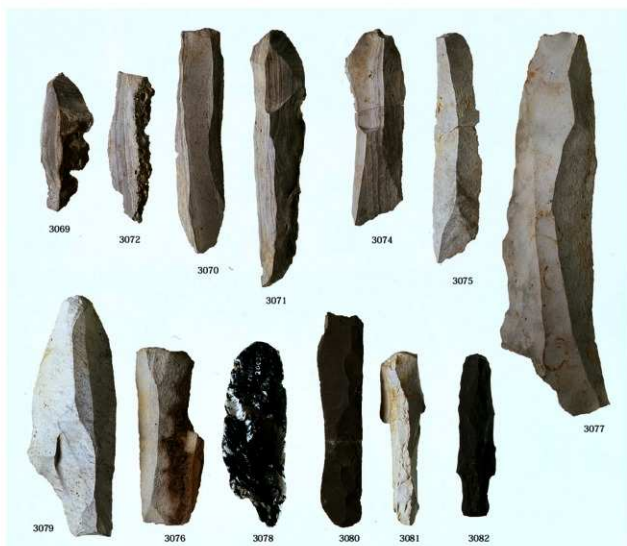
BP 第 3 地点 台形石器 (約 3/4)



BP 第3地点 彫器・削片・搔器状石器・搔器 (約3/4)



BP 第3地点 削器・抉入削器 (約3/4)



BP 第3地点 石刃 (約 3/4)



BP 第3地点 揉錘器・楔形石器 (約 3/4)



BP 第3地点 削器 (約 3/4)



BP 第3地点 石核 (約 3/4)



BP 第3地点 石核と接合資料 (約 1/2)



BP 第3地点 斧形石器 (約 3/4)



BP 第3地点 敲石 1 (約 1/2)



BP 第3地点 敲石 2 (約 1/2)



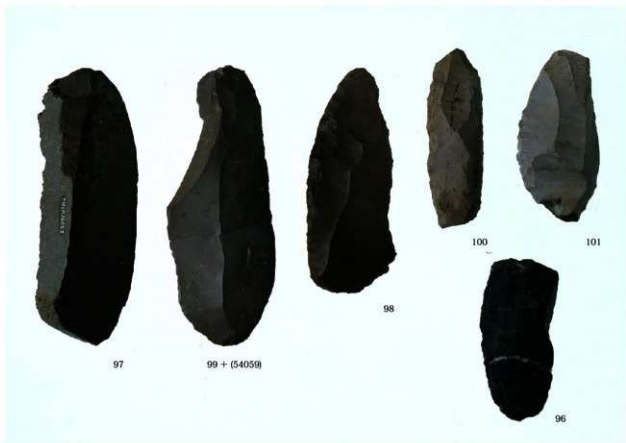
BP 第3地点 台石1 (約 1/4)



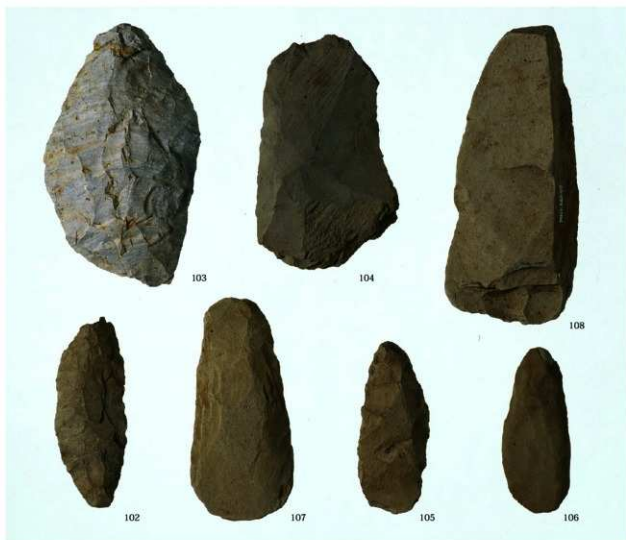
BP 第3地点 台石2 (約 1/4)



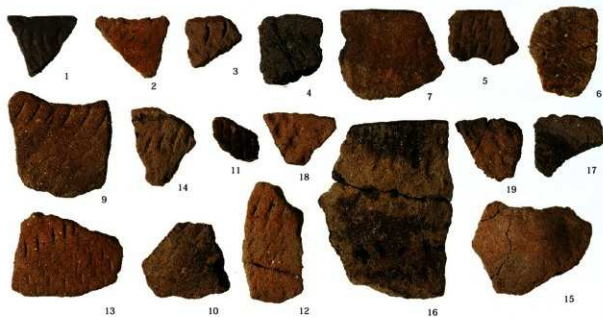
BP 第1～第3地点 有茎尖頭器・石鏃(約3/4)



BP 第1～第3地点 削器・挿削器(約3/4)



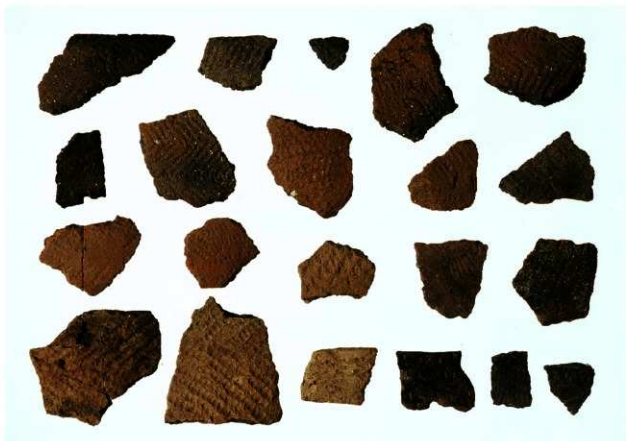
BP 第1～第3地点 半月形石器・甕形石器(約3/4)



BP 第1～第3地点 草創期の土器(約2/3)



BP 第1～第3地点 早期の土器 (約 1/2)



BP 第1～第3地点 前期の土器 (約 1/2)



灰釉陶器他 (SB303)



須恵器・土師器 杯



土師器 甕・片口鉢



JS 地点上空より仲町丘陵を望む

長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 63

一般国道 18 号 (野尻バイパス) 埋蔵文化財発掘調査報告書 3

信濃町内その 3

仲町遺跡 《第 1 分冊》

発行 平成 16 年 3 月 19 日 発行

発行者 国土交通省関東地方整備局

長野県埋蔵文化財センター

〒 388-8007 長野県長野市篠ノ井布施高田 963-4

TEL026-293-5926 FAX026-293-8157

印刷 柳澤印刷株式会社